

新 蔵 遺 跡

-地域・国際交流プラザ地点-

第I分冊 -本文1-

2015

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

序 文

徳島大学の三つのキャンパスは、すべて遺跡の上に立地しています。文化財保護法によって、周知の遺跡を掘削する場合、発掘調査を行うことが義務づけられています。こうした背景のもとで、1992年に埋蔵文化財調査室は設置され、それ以降、遺跡の破壊を伴う建設工事に先立って、発掘調査を実施してきました。これまでの発掘調査によって、事務局が所在する新蔵キャンパス、総合科学部・工学部が所在する常三島キャンパスでは江戸時代徳島藩の武家屋敷跡が、医学部・歯学部・薬学部・医療技術短期大学部・大学病院が所在する蔵本キャンパスでは弥生時代前期から江戸時代にいたるまでの複合遺跡が確認されています。今日、これらの遺跡はそれぞれ、新蔵遺跡、常三島遺跡、庄・蔵本遺跡と呼ばれています。

本書は、2004年に実施した新蔵遺跡（地域・国際交流プラザ地点）の発掘調査報告書です。新蔵キャンパスは、絵図や文字記録から徳島城下町を形成する六つの島（徳島・寺島・福島・住吉島・常三島・出来島）のうち、家老・中老邸宅が集中する地区、徳島に立地することがかねてより知られていました。発掘調査の結果もそれを裏づけるものであり、そればかりか絵図・文字記録からは知り得ない、当時の上級武士たちの豊かな暮らしを物語る様々な遺物の存在や、中・下級武家屋敷のあった常三島地区とは異なる屋敷境溝のあり方が明らかとなりました。また、徳島城下町遺跡では初めて、平安時代の土器が出土したことでも注目されます。出土した文化財の量が極めて膨大であったため、整理作業と報告書作成作業に長時間を費やしてしまいましたが、このたびようやく刊行する運びとなりました。調査室スタッフ一同、ほっと胸をなでおろしております。

最後とはなりましたが、発掘調査、整理作業、そして本書の刊行にあたって、ご協力・ご助言を賜った学内外の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。今後、本書と報告資料が、徳島城下町遺跡の調査研究、江戸時代の考古学・歴史学研究、さらには徳島という地域社会での文化財の保存・活用の一助となることを祈願します。

平成27年3月31日

徳島大学埋蔵文化財調査室長
端野晋平

例　　言

1. 本書は 2004（平成 16）年に徳島大学埋蔵文化財調査室が実施した、徳島大学新蔵団地地域・国際交流プラザ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 整理作業は、定森秀夫（現・滋賀県立大学）・中村豊（現・本学総合科学部）・中原計（現・鳥取大学）、端野晋平・上田敦子・加登哲子・岸本多美子・堺圭子・中原（旧姓・井本）尚子・林田（旧姓・溝渕）寿美礼・板東美幸・前田千夏・安山かおり・山本愛子が担当した。
3. 遺構写真の撮影は定森・中村・中原計が、動物遺存体以外の遺物写真の撮影は岸本・堺・板東・山本が担当した。金属製品のX線写真の撮影は、公益財団法人徳島県埋蔵文化財センターの植地岳彦氏にお願いした。
4. 本書の執筆は、第 1 章・第 2 章・第 3 章第 3 節（2）～（7）・第 4 章を中原計が、第 3 章第 1 節・第 3 節（8）を端野が、第 3 章第 2 節を中原計と端野が、第 3 章第 3 節（1）を中原計と安山が担当した。第 3 章第 4 節とそれに関わる図版は、丸山真史氏（京都市埋蔵文化財研究所）から原稿を賜わり、中原計が一部分担した。執筆分担は目次と本文中にも示した。
5. 本書の編集は、端野が行った。
6. 本書で使用した座標の値は、世界測地系に基づく国土座標系の値である。方位は座標北、レベルは海拔標高である。
7. 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。
8. 陶磁器・土器は、日下正剛 2002『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 36 集 南前川町 1 丁目遺跡-鳴門教育大学（附小）校舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書-』徳島県教育委員会・（財）徳島県埋蔵文化財センターの「遺物分類の基準」を参考に分類・記述した。
9. 本書に掲載した調査の記録および出土遺物はすべて徳島大学埋蔵文化財調査室で保管している。包含層出土の遺物については、数量が膨大であるため、すべてを報告することはできなかった。こうした未報告の遺物を含め、今後、研究・教育・展示に広く利用されることを期待する。
10. 発掘調査・整理作業にあたっては以下の方々にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
大橋康二、梶山博史、片山まび、勝浦康守、日下正剛、久保脇美朗、北野信彦、仁尾一人、
根津寿夫、福原健生、堀内秀樹、湯浅利彦（敬称略・五十音順）

目 次

(第Ⅰ分冊—本文1—)【本書】

第1章 調査の概要	中原 計	1
第1節 調査に至る経緯と目的		1
1. 調査経緯		1
2. 調査の目的と方法		1
第2節 調査の経過		2
第3節 調査体制		4
第2章 遺跡の立地と環境		5
第1節 地理的・歴史的環境		5
第2節 調査区の屋敷地変遷		5
第3章 調査成果		17
第1節 基本層序	端野晋平	17
第2節 遺構	中原 計・端野晋平	17
1. 第3遺構面		17
2. 第2遺構面		29
3. 第1遺構面		82
第3節 遺物		106
1. 陶磁器・土器・土製品	中原 計・安山かおり	106

(第Ⅱ分冊—本文2・図版—)

2. 金属製品	中原 計	343
3. ガラス製品		362
4. 瓦		363
5. 石製品		400
6. 木製品		420
7. 漆製品		512
8. 銭貨	端野晋平	535
第4節 動物遺存体・骨角製品	丸山真史・中原 計	538
1. 概要		538
2. 脊椎動物・骨角製品		538
3. 軟体動物—貝類—		551
4. 刺胞動物—サンゴ—		554

第4章 総 括	中原 計	555
第1節 調査区における屋敷境の変遷		555
1. 第3遺構面		555
2. 第2遺構面		555
3. 第1遺構面		555
第2節 他の調査区における屋敷境		556
1. 徳島地区		556
2. 常三島地区		556
第3節 新蔵遺跡における屋敷境とその意義		556
第4節 近世以前の遺物の出土		557

挿図目次

第1図 新蔵遺跡の位置	1	第42図 SK165	48
第2図 本調査区と周辺調査区の位置	2	第43図 SD166南	48
第3図 グリッド配置図	3	第44図 SK178	48
第4図 吉野川下流域の地形分類図	6	第45図 SK186・SK187	49
第5図 新蔵遺跡周辺の遺跡分布図	7	第46図 SK92	50
第6図 調査区周辺の屋敷地割の変遷図	8	第47図 SK98	51
第7図 3ライン南北ベルト土層断面	18	第48図 SK109	52
第8図 4ライン南北ベルト土層断面	19	第49図 SK110・SK111	52
第9図 5ライン南北ベルト土層断面	22	第50図 SK122・SK123	52
第10図 10ラインサブトレント土層断面	25	第51図 SK131	52
第11図 第3遺構面遺構配置図	26	第52図 SD182	53
第12図 池状遺構(第2・第3遺構面)	27	第53図 SK44	54
第13図 SD101	28	第54図 SK45	55
第14図 SD185竹列出土状況	28	第55図 SK46	56
第15図 第2遺構面遺構配置図	30	第56図 SK47	56
第16図 SD48・SD136	31	第57図 SK49・SK50・SK51	56
第17図 SD161	32	第58図 SP52・SK53	58
第18図 SD166北	33	第59図 SK54	58
第19図 SD120	34	第60図 SK63	58
第20図 SD158・SD159	34	第61図 SK64	58
第21図 SD24	35	第62図 SP65・SP66	58
第22図 SK26	36	第63図 SK67	58
第23図 SK39	37	第64図 SK68	60
第24図 SK40	37	第65図 SE69	60
第25図 SK41・SK42	38	第66図 SK70	61
第26図 SE43	39	第67図 SK71・SK72	61
第27図 SK55	39	第68図 SK74	62
第28図 SK56・SK57	40	第69図 SK75	62
第29図 SK58	40	第70図 SK77	62
第30図 SK59	40	第71図 SK78	63
第31図 SK62	40	第72図 SK79	64
第32図 SK76	40	第73図 SK80	64
第33図 SD91	41	第74図 SK81	65
第34図 SD106	41	第75図 SP82	66
第35図 SK132	43	第76図 SK83	66
第36図 SK148	43	第77図 SP84・SK85	66
第37図 SP152・SP153・SK154	43	第78図 SK88・SK89	66
第38図 SK156	44	第79図 SK90	66
第39図 SD157	46	第80図 SK93	66
第40図 SK162・SK163	47	第81図 SK94	68
第41図 SK164	47	第82図 SK95	68

第83図 SK96	68	第127図 第1遺構面下層石組み溝配置図	84
第84図 SK97	68	第128図 第1遺構面下層杭列配置図	85
第85図 SK99	68	第129図 池状遺構(第1遺構面)	86
第86図 SD100	69	第130図 中島石組み	87
第87図 SK102・SK103	69	第131図 造り出し	88
第88図 SK104	70	第132図 石組み溝1	89
第89図 SK105	70	第133図 石組み溝2	91
第90図 SK108	70	第134図 石組み溝3・4	92
第91図 SK112	70	第135図 石組み溝5・6平面図・石組み溝5立面図	93
第92図 SK113	70	第136図 石組み溝5断面図	94
第93図 SK114	70	第137図 石組み溝6立面図	94
第94図 SP115	71	第138図 石組み溝7・8・9	95
第95図 SP117・SK118	71	第139図 SX02	96
第96図 SK121	71	第140図 SK119	97
第97図 SK124	71	第141図 遺物溜り17木製品類出土状況	97
第98図 SK125	73	第142図 SD22	99
第99図 SK126・SK127	73	第143図 SE25	99
第100図 SK128	73	第144図 SK28	100
第101図 SK129	73	第145図 SK60	100
第102図 SK130	73	第146図 SK73	101
第103図 SK133	73	第147図 SP86・SK87	102
第104図 SK139	74	第148図 SK116	103
第105図 SK140・SK141・SK142	74	第149図 SK134	103
第106図 SK143	75	第150図 SK135	103
第107図 SK144	75	第151図 SK137	103
第108図 SK145	75	第152図 池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(1)	107
第109図 SK146	75	第153図 池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(2)	109
第110図 SK147	75	第154図 池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(3)	110
第111図 SK149	76	第155図 池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(4)	111
第112図 SP151	76	第156図 池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(5)	112
第113図 SP155	76	第157図 池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(6)	114
第114図 SK167	77	第158図 池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(7)	115
第115図 SK168	77	第159図 池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(8)	116
第116図 SK169	77	第160図 池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(9)	117
第117図 SK170	77		
第118図 SK172	78		
第119図 SK176	79		
第120図 SK177	80		
第121図 SK179	80		
第122図 SK180	80		
第123図 SK181	80		
第124図 SK183	81		
第125図 SK184	81		
第126図 第1遺構面上層・下層遺構配置図	83		

第161図	池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(10)	118
第162図	池状遺構(第2・第3遺構面) 出土陶磁器類(11)	119
第163図	SD101出土陶磁器類.....	120
第164図	SD185出土陶磁器類.....	120
第165図	屋敷境 SD48出土陶磁器類	121
第166図	屋敷境 SD136出土陶磁器類.....	122
第167図	屋敷境 SD161出土陶磁器類.....	123
第168図	屋敷境 SD166北出土陶磁器類.....	124
第169図	屋敷境 遺物溜り25出土陶磁器類(1)	126
第170図	屋敷境 遺物溜り25出土陶磁器類(2)	127
第171図	屋敷境 遺物溜り25出土陶磁器類(3)	128
第172図	屋敷境 SD120出土陶磁器類.....	129
第173図	屋敷境 SD159出土陶磁器類.....	129
第174図	片山家屋敷地内 SD24出土陶磁器類(1)	130
第175図	片山家屋敷地内 SD24出土陶磁器類(2)	131
第176図	片山家屋敷地内 SK26出土陶磁器類(1)	133
第177図	片山家屋敷地内 SK26出土陶磁器類(2)	134
第178図	片山家屋敷地内 SK26出土陶磁器類(3)	135
第179図	片山家屋敷地内 SK26出土陶磁器類(4)	137
第180図	片山家屋敷地内 SK26出土陶磁器類(5)	138
第181図	片山家屋敷地内 SK26出土陶磁器類(6)	139
第182図	片山家屋敷地内 SK26出土陶磁器類(7)	140
第183図	片山家屋敷地内 SK39出土陶磁器類	142
第184図	片山家屋敷地内 SK40出土陶磁器類	144
第185図	片山家屋敷地内 SK41出土陶磁器類	144
第186図	片山家屋敷地内 SK42出土陶磁器類	145
第187図	片山家屋敷地内 SE43出土陶磁器類	145
第188図	片山家屋敷地内 SK55出土陶磁器類	145
第189図	片山家屋敷地内 SD91出土陶磁器類	146
第190図	片山家屋敷地内 SD106出土陶磁器類(1)	147
第191図	片山家屋敷地内 SD106出土陶磁器類(2)	148
第192図	片山家屋敷地内 SK148出土陶磁器類.....	148
第193図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(1)	150
第194図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(2)	151
第195図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(3)	153
第196図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(4)	155
第197図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(5)	156
第198図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(6)	157
第199図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(7)	160
第200図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(8)	161
第201図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(9)	162
第202図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(10)	163
第203図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(11)	164
第204図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(12)	165
第205図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(13)	167
第206図	片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(14)	168
第207図	片山家屋敷地内 SD157出土陶磁器類	170
第208図	片山家屋敷地内 SK164出土陶磁器類	171
第209図	片山家屋敷地内 SD166・SD166南出土陶磁器類(1)	172
第210図	片山家屋敷地内 SD166・SD166南出土陶磁器類(2)	173
第211図	片山家屋敷地内 SK186出土陶磁器類(1)	174
第212図	片山家屋敷地内 SK186出土陶磁器類(2)	175
第213図	片山家屋敷地内 SK186出土陶磁器類(3)	176
第214図	片山家屋敷地内 SK187出土陶磁器類	177
第215図	安富家屋敷地内 SK98出土陶磁器類	178
第216図	安富家屋敷地内 SK109出土陶磁器類	179
第217図	安富家屋敷地内 SD182出土陶磁器類	179
第218図	太田家屋敷地内 SK44出土陶磁器類	180
第219図	太田家屋敷地内 SK45出土陶磁器類	182
第220図	太田家屋敷地内 SK47出土陶磁器類	183
第221図	太田家屋敷地内 SK51出土陶磁器類	183
第222図	太田家屋敷地内 SE69出土陶磁器類	183
第223図	太田家屋敷地内 SK71出土陶磁器類	183
第224図	太田家屋敷地内 SK78出土陶磁器類	184

第225図	太田家屋敷地内 SK79出土陶磁器類(1)	186	第252図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(13)	213
第226図	太田家屋敷地内 SK79出土陶磁器類(2)	187	第253図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(14)	214
第227図	太田家屋敷地内 SK80出土陶磁器類	188	第254図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(15)	216
第228図	太田家屋敷地内 SK81出土陶磁器類	188	第255図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(16)	222
第229図	太田家屋敷地内 SK83出土陶磁器類	188	第256図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(17)	223
第230図	太田家屋敷地内 SK89出土陶磁器類	188	第257図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(18)	224
第231図	太田家屋敷地内 SK96出土陶磁器類	188	第258図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(19)	225
第232図	太田家屋敷地内 SD100・SK143出土陶磁器類	189	第259図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(20)	226
第233図	太田家屋敷地内 SK112出土陶磁器類	189	第260図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(21)	227
第234図	太田家屋敷地内 SK121出土陶磁器類	190	第261図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(22)	228
第235図	太田家屋敷地内 SK167出土陶磁器類	190	第262図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(23)	229
第236図	太田家屋敷地内 SK172出土陶磁器類	190	第263図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(24)	230
第237図	太田家屋敷地内 SK181出土陶磁器類	191	第264図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(25)	231
第238図	太田家屋敷地内 SK184出土陶磁器類	191	第265図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(26)	232
第239図	池状遺構(第1遺構面) 埋土最上層 出土陶磁器類	192	第266図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(27)	233
第240図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(1)	193	第267図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(28)	234
第241図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(2)	195	第268図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(29)	237
第242図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(3)	197	第269図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(30)	238
第243図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(4)	198	第270図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(31)	240
第244図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(5)	200	第271図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(32)	242
第245図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(6)	201	第272図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(33)	243
第246図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(7)	202	第273図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(34)	244
第247図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(8)	205			
第248図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(9)	206			
第249図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(10)	208			
第250図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(11)	209			
第251図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(12)	212			

第274図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(35)	245	第302図	石組み溝3出土陶磁器類(8)	284
第275図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(36)	246	第303図	石組み溝3出土陶磁器類(9)	285
第276図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(37)	247	第304図	石組み溝5出土陶磁器類(1)	287
第277図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(38)	248	第305図	石組み溝5出土陶磁器類(2)	288
第278図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(39)	249	第306図	石組み溝5出土陶磁器類(3)	290
第279図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(40)	251	第307図	石組み溝5出土陶磁器類(4)	292
第280図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(41)	252	第308図	石組み溝5出土陶磁器類(5)	293
第281図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(42)	256	第309図	石組み溝5出土陶磁器類(6)	294
第282図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(43)	257	第310図	石組み溝6(遺物溜り6) 出土陶磁器類(1)	295
第283図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(44)	258	第311図	石組み溝6(遺物溜り6) 出土陶磁器類(2)	296
第284図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(45)	259	第312図	石組み溝7出土陶磁器類	297
第285図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(46)	260	第313図	石組み溝8出土陶磁器類	297
第286図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(47)	261	第314図	石組み溝8(SD23) 出土陶磁器類	298
第287図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(48)	262	第315図	石組み溝8(遺物溜り4) 出土陶磁器類	299
第288図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(49)	263	第316図	石組み溝8(遺物溜り10) 出土陶磁器類(1)	301
第289図	池状遺構(第1遺構面) 出土陶磁器類(50)	265	第317図	石組み溝8(遺物溜り10) 出土陶磁器類(2)	302
第290図	池状遺構 造り出し出土陶磁器類	267	第318図	石組み溝8(遺物溜り14) 出土陶磁器類	303
第291図	石組み溝1出土陶磁器類	268	第319図	石組み溝8(遺物溜り15) 出土陶磁器類	304
第292図	石組み溝2出土陶磁器類(1)	270	第320図	石組み溝9(遺物溜り3・9) 出土陶磁器類	305
第293図	石組み溝2出土陶磁器類(2)	272	第321図	遺物溜り11出土陶磁器類	306
第294図	石組み溝2出土陶磁器類(3)	273	第322図	蜂須賀家屋敷地内 SK13出土陶磁器類	306
第295図	石組み溝3出土陶磁器類(1)	274	第323図	蜂須賀家屋敷地内 SK15出土陶磁器類(1)	307
第296図	石組み溝3出土陶磁器類(2)	276	第324図	蜂須賀家屋敷地内 SK15出土陶磁器類(2)	308
第297図	石組み溝3出土陶磁器類(3)	278	第325図	蜂須賀家屋敷地内 SK16出土陶磁器類(1)	309
第298図	石組み溝3出土陶磁器類(4)	279	第326図	蜂須賀家屋敷地内 SK16出土陶磁器類(2)	310
第299図	石組み溝3出土陶磁器類(5)	281	第327図	蜂須賀家屋敷地内 SK17出土陶磁器類	311
第300図	石組み溝3出土陶磁器類(6)	282	第328図	蜂須賀家屋敷地内 SK18出土陶磁器類	311
第301図	石組み溝3出土陶磁器類(7)	283	第329図	蜂須賀家屋敷地内 SK19出土陶磁器類	312

- 第330図 蜂須賀家屋敷地内
遺物溜り17出土陶磁器類(1) 313
- 第331図 蜂須賀家屋敷地内
遺物溜り17出土陶磁器類(2) 315
- 第332図 蜂須賀家屋敷地内
遺物溜り17出土陶磁器類(3) 317
- 第333図 蜂須賀家屋敷地内
遺物溜り17出土陶磁器類(4) 318
- 第334図 蜂須賀家屋敷地内
遺物溜り17出土陶磁器類(5) 320
- 第335図 蜂須賀家屋敷地内
遺物溜り17出土陶磁器類(6) 321
- 第336図 蜂須賀家屋敷地内
遺物溜り18出土陶磁器類 321
- 第337図 蜂須賀家屋敷地内
遺物溜り19出土陶磁器類 322
- 第338図 片山家屋敷地内 SD22出土陶磁器類 323
- 第339図 片山家屋敷地内 SE25出土陶磁器類 323
- 第340図 片山家屋敷地内 SK28出土陶磁器類 324
- 第341図 片山家屋敷地内 SK29出土陶磁器類 326
- 第342図 片山家屋敷地内
SK73出土陶磁器類(1) 327
- 第343図 片山家屋敷地内
SK73出土陶磁器類(2) 329

- 第344図 片山家屋敷地内
SK73出土陶磁器類(3) 330
- 第345図 片山家屋敷地内 SK116出土陶磁器類 330
- 第346図 片山家屋敷地内 SK134出土陶磁器類 330
- 第347図 片山家屋敷地内
SK135出土陶磁器類(1) 332
- 第348図 片山家屋敷地内
SK135出土陶磁器類(2) 333
- 第349図 片山家屋敷地内
SK135出土陶磁器類(3) 335
- 第350図 片山家屋敷地内
SK135出土陶磁器類(4) 336
- 第351図 片山家屋敷地内
SK135出土陶磁器類(5) 337
- 第352図 黒部家屋敷地内
遺物溜り16出土陶磁器類(1) 338
- 第353図 黒部家屋敷地内
遺物溜り16出土陶磁器類(2) 339
- 第354図 SK05出土陶磁器類 340
- 第355図 SK07出土陶磁器類 340
- 第356図 遺物溜り1出土陶磁器類 341
- 第357図 遺物溜り2出土陶磁器類 341
- 第358図 遺物溜り23出土陶磁器類 341

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と目的

1. 調査経緯

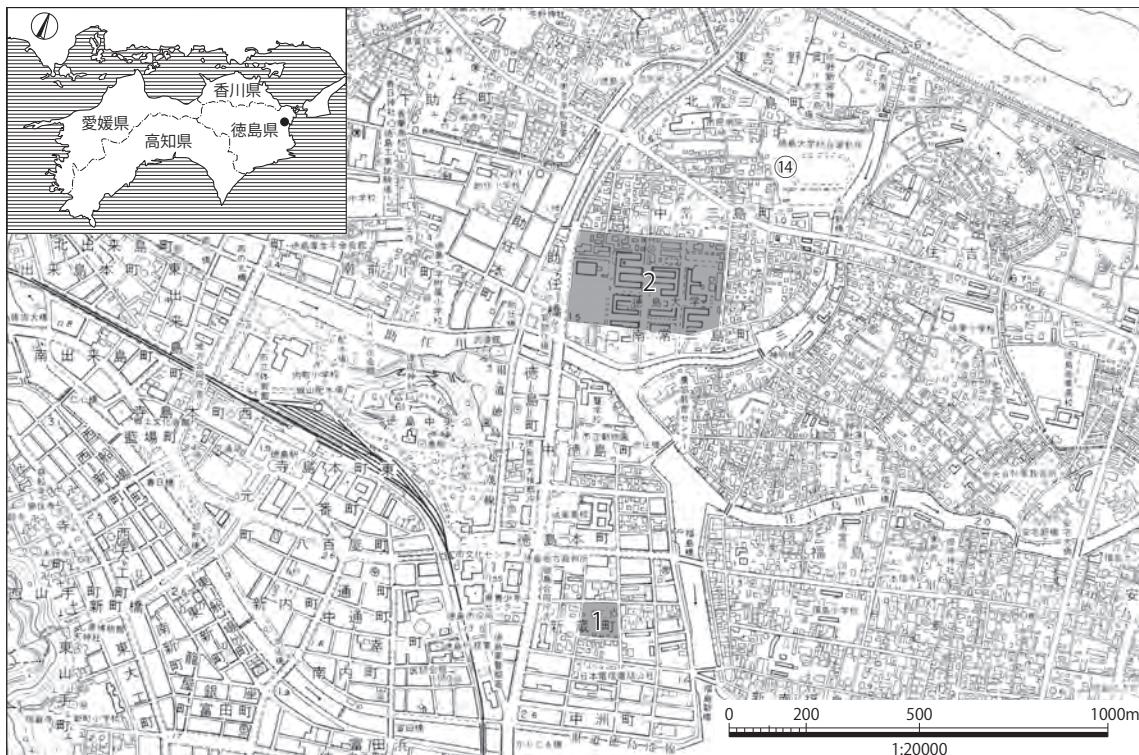
徳島大学新蔵キャンパスは、徳島市新蔵町2丁目に所在する。江戸時代には、徳島城下町の徳島地区に位置しており、現在の徳島地方裁判所のある場所に米蔵が建てられたことが地名の由来になっている（第1図）。

周辺では、過去に新蔵町1丁目遺跡企業局総合管理事務所・企業局総合管理センター・合同庁舎・県警新蔵宿舎の各地点、新蔵町3丁目遺跡徳島保健所地点の5地点の調査が行われている。いずれの調査でも、遺構の遺存状況は概ね良好であり、3面の遺構面が確認されている（第2図）。

2003（平成15）年、地域交流施設や留学生宿舎を兼ねた、地域・国際交流プラザの建設が決定され、それに伴い、埋蔵文化財発掘調査を行う必要性が生じた。調査は2004年4月21日から開始した。

2. 調査の目的と方法

埋蔵文化財発掘調査に先立ち、調査室では、常三島地区と同様に、「御山下島分絵図 徳島」（安政年間、個人蔵）、『阿波藩土屋敷録享保17子年改』（高田豊輝書写、1964年）、『徳島藩土譜 上～下巻』



第1図 新蔵遺跡の位置

1. 新蔵遺跡（新蔵キャンパス） 2. 常三島遺跡（常三島キャンパス） ⑭は常三島遺跡第14次調査地点 国際航業株式会社調製『徳島市全図2』をもとに作成。



第2図 本調査区と周辺調査区の位置

1. 新藏遺跡地域・国際交流プラザ地点（本調査区） 2. 新藏町1丁目遺跡企業局総合管理事務所地点 3. 新藏町1丁目遺跡企業局総合管理センター地点 4. 新藏1丁目遺跡合同庁舎地点 5. 新藏町1丁目遺跡県警新藏宿舎地点 6. 新藏町3丁目遺跡徳島保健所地点 グレーは『御山下島分絵図』（安政年間、個人蔵）をもとに作成した武家屋敷地の範囲と境界等を示す。

（宮本武史編、1972・1973年）をもとに武家屋敷配置の復元作業を行った。

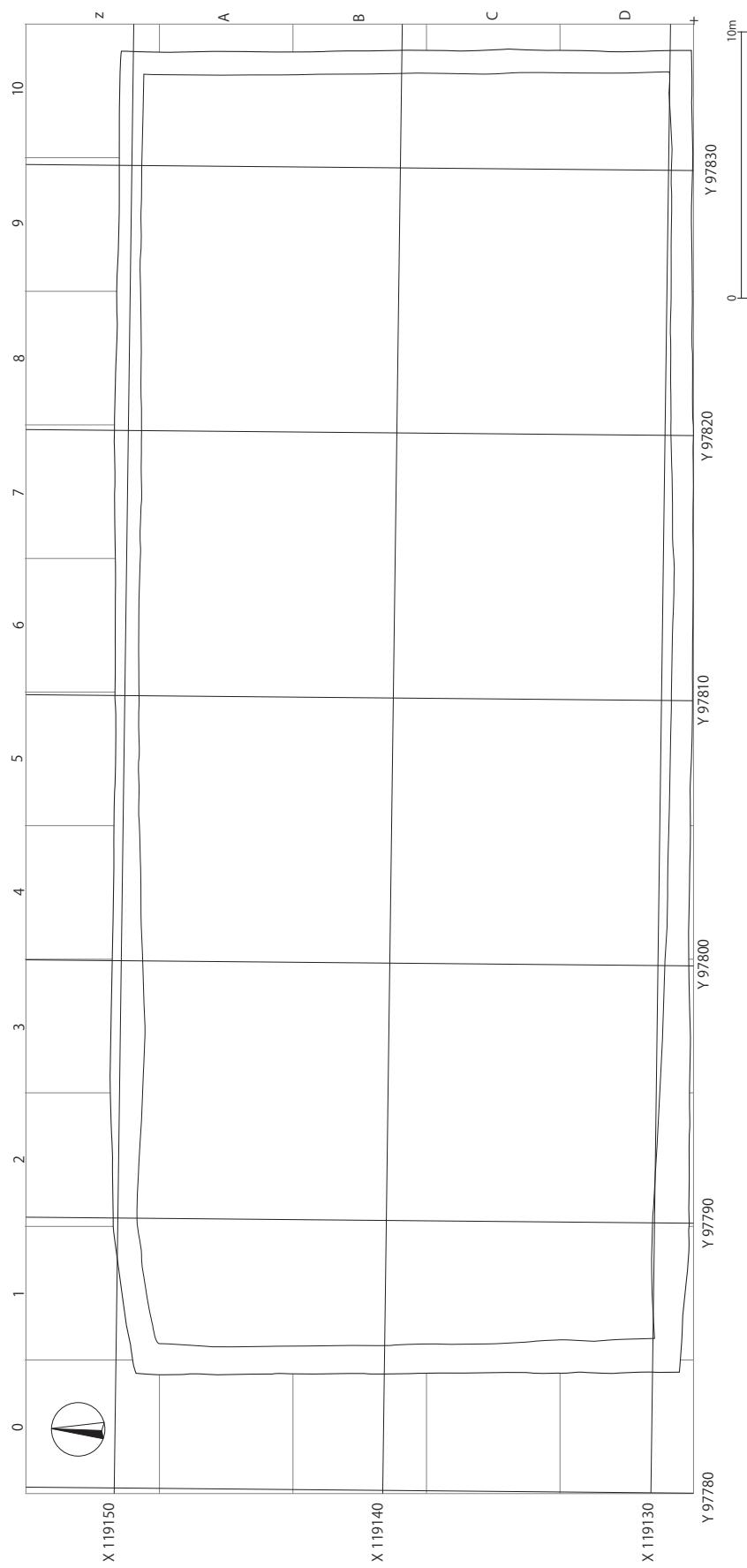
復元に基づけば、調査地は、18世紀末までは主に安富家、太田家と片山家の屋敷地にあたり、19世紀からは蜂須賀家と片山家の屋敷地となり、それぞれの屋敷地の境界部分が検出される可能性が高いと推定された。

埋蔵文化財発掘調査は、地域・国際交流プラザ（通称・日亜会館）建設予定地内において、南北約20m、東西約50mの調査区を設け、調査を実施した。調査面積は約1000m²である。調査にあたって、実測等の便宜を図るために、調査区内を5mメッシュによる小区画割を行った。調査区の北西隅より東に1・2・3・4…、南にA・B・C・Dと表示し、5m×5mを1グリッドとした（第3図）。

徳島城下町は、吉野川河口付近のデルタ上に形成されており、過去の調査と同様に地下からの湧水が懸念された。そのため、調査時にはウェルポイントポンプでの地下水の常時排水を行った。

第2節 調査の経過

4月21日から重機掘削を開始した。4月22日からは、重機掘削と並行して、重機掘削面を精査、遺構を検出する作業を開始した。4月26日に重機掘削が終了した後、調査区全体に5mごとのグリッドを設定し、本格的に遺構の調査や掘下げを開始した。この時点ですでに石組み溝の一部、池状遺



第3図 グリッド配置図（縮尺：1/250）

構の上面が検出されており、それらの部分については、その精査を行った。また、池状遺構については、南北に十字のアゼを残して掘削を行った。それ以外の部分には東西、南北合わせて3箇所に先行トレーニングを設定し、石組み溝の検出を行った。7月8日には、調査区全体で庭園遺構を検出した。7月16日に第1遺構面完掘写真の撮影を行った。7月31日、8月1日に現地説明会を行うため、7月20日からは、掘削については一時中断し、その準備作業および、図面作成、遺物洗浄を行った。しかし、現地説明会は台風接近のため中止とした。8月2日からは、図面作成が終了したところから順に第1遺構面を掘下げていった。9月1日にはほぼ第2遺構面を検出し、遺構精査を開始した。10月4日に第2遺構面完掘写真を撮影した。10月6日からは図面作成および、掘下げを行った。T.P. 0m～-0.1mまで調査区全面を掘下げたが、湧水のため、それ以上の掘削は困難であることから、第3遺構面はトレーニングによって部分的にT.P. -0.5m～-1mまで掘下げ、確認調査のみ行った。11月6日に発掘調査作業を終了し、11月8日に撤収作業を完了した。

第3節 調査体制

調査主体 国立大学法人徳島大学施設委員会

委員長 青野敏博 徳島大学学長

調査担当 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

室長 定森秀夫 総合科学部助教授

調査担当者 定森秀夫・中村豊（大学開放実践センター助手）・中原計（総合科学部助手）・中原（旧姓・井本）尚子・岸本多美子・堺圭子・安山かおり（以上、施設部技術補佐員）

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的・歴史的環境

新蔵遺跡国際交流プラザ地点をはじめ、徳島城下町遺跡は、「四国三郎」と称される吉野川によって形成された沖積平野である徳島平野の河口域デルタ地帯に位置している（第4図）。

吉野川河口域の歴史的環境の手がかりとしては、徳島城が築かれた城山の麓に、縄文時代の貝塚である城山貝塚がある（第5図）。城山貝塚からは、縄文時代後期の土器や埋葬人骨、海水産貝類などの動物遺体が出土している。このことは、縄文時代後期には城山付近に汀線があったことを示している。その後、海面の低下や吉野川により運ばれてきた土砂の堆積によりデルタが形成されていった。中世には富田荘と呼ばれる荘園であったが、洪水のたびに河成となる低湿地であった。このようなこともあるってか、後に城下町となる範囲では、城山貝塚以外の遺跡は見つかっておらず、近世以前の人間活動の様子はほぼ不明である。

徳島城下町は、蜂須賀氏の徳島入部に伴い整備が進められ、吉野川分流の新町川・寺島川・助任川・福島川・沖洲川などの網状河川を利用し、「島普請」とされた。徳島、出来島、寺島、福島、常三島、住吉島の6つの島と、それらの島を取り囲むように配置された新町地区、富田地区、佐古地区、前川・助任地区が建設された。徳島城のある城山に接する徳島地区の周囲には石垣が施され、城の三の丸的な役割も担っていた。徳島地区に加え、寺島地区には上級武家屋敷、それ以外の地区には中・下級武家屋敷が配置された。

第2節 調査区の屋敷地変遷

調査区は、徳島城下町の徳島地区の中でも南端のブロックに位置している。周辺には、南濱御殿や新御蔵（米倉）などの公の施設が存在した。絵地図、記録からみた調査区における屋敷地の変遷は以下のとおりである。

寛永4年（1627）讃岐伊予土佐阿波探索書添付阿波国徳島城図

「侍町」

寛永年間 御山下画図（忠英様御代御山下画図）

「侍屋敷」

正保3年（1646）阿波国徳島城之図

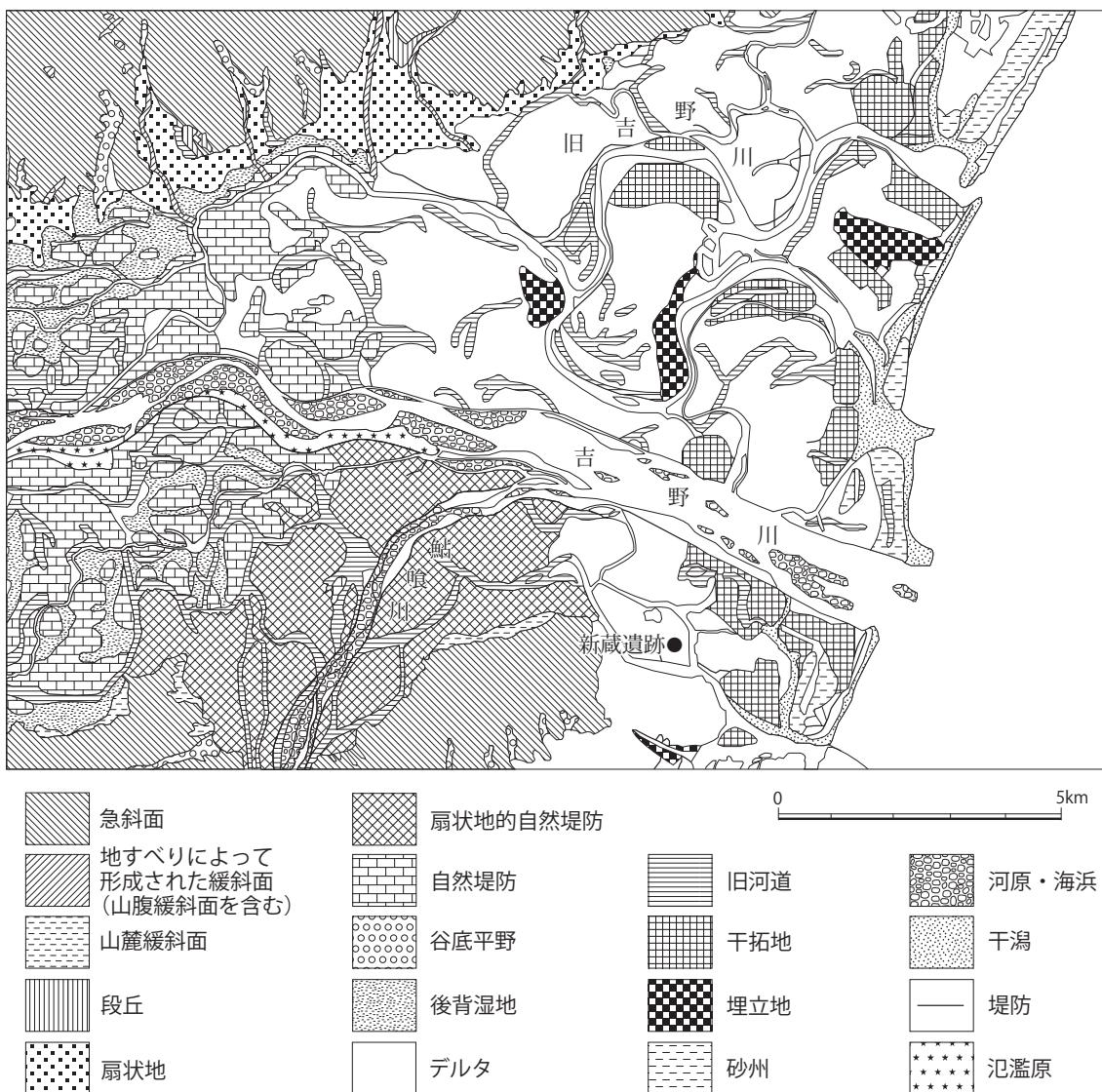
「侍屋敷」

承応～延宝年間（1652～81）（推定）城下水道普請御伺絵図

「侍屋敷」

寛文5年（1665）阿波国渭津城之図

「侍屋敷」



第4図 吉野川下流域の地形分類図

大矢（1993）よりトレイス・改変。

天和3年（1685）阿波国渭津城下之図

「侍屋敷」

元禄4年（1691）御山下画図（綱矩様御代御山下画図）

片山家 安富家 先山家 黒部家 太田家

元禄5年（1692）御山下屋敷略図

片山家 安富家 先山家 黒部家 太田家

元禄年間（推定）阿波城下図

片山家 安富家 先山家 黒部家 太田家

宝永3年（1706）阿波国徳島城下之図

片山家 安富家 先山家 黒部家 太田家

享保年間（推定）御城下絵図



- | | | | |
|---------------------------|-----------------------------|------------|----------------|
| 1. 新蔵遺跡（本調査区） | 10. 南前川1丁目遺跡 | 19. 田宮遺跡 | 29. 八人塚古墳 |
| 2. 新蔵町1丁目遺跡 | 11. 城ノ内遺跡徳島城跡 | 20. 三谷遺跡 | 30. 横口遺跡 |
| 3. 新蔵町3丁目遺跡 | 12. 城山貝塚 | 21. 庄・蔵本遺跡 | 31. 横口古墳 |
| 4. 徳島城下町遺跡
(中徳島町1丁目地点) | 13. 寺島本町東3丁目遺跡 | 22. 中島田遺跡 | 32. 星河内美田銅鐸出土地 |
| 5. 中徳島町2丁目遺跡 | 14. 寺島本町西2丁目遺跡 | 23. 南島田遺跡 | 33. 翼山古墳 |
| 6. 常三島遺跡 | 15. 徳島城下町遺跡
(出来島本町1丁目地点) | 24. 南庄遺跡 | 34. 向寺山遺跡・延生軒跡 |
| 7. 北常三島町1丁目遺跡 | 16. 弓町1丁目遺跡 | 25. 鮎喰遺跡 | 35. 向寺山古墳 |
| 8. 福島2丁目遺跡 | 17. 富田橋遺跡 | 26. 名東遺跡 | 36. 天神山古墳 |
| 9. 徳島城下町遺跡
(中前川町2丁目地点) | 18. 勢見山古墳群 | 27. 節句山古墳群 | 37. 惠解山古墳群 |
| | | 28. 穴不動古墳 | |

第5図 新蔵遺跡周辺の遺跡分布図

国土地理院発行5万分の1地形図『徳島』をもとに作成。



享保年間(1716-1735)



安政年間(1854-1890)

第6図 調査区周辺の屋敷地割の変遷図

享保年間は『御城下絵図』(徳島大学付属図書館所蔵)、安政年間は『御山下島分絵図』(個人所蔵)より推定。

各家の石高等の変遷を示しておく。

太田家

初代 太田彦兵衛 重處 福聚院様尾州召出
高五十石
朝鮮御陣兩度出陣 関原出陣

- 片山家 安富家 先山家 黒部家 太田家
天明年間(推定) 御山下画図
- 片山家 安富家 先山家 黒部家 太田家
天明3～5年(1783～85) 徳島絵図
- 片山家 安富家 先山家 黒部家 太田家
寛政8年(1796) 御山下画図
- 片山家 蜂須賀家 先山家 黒部家
文化・文政年間(1804～30)(推定) 徳島御山
下絵図
- 片山家 蜂須賀家 先山家 黒部家
安政年間(1854～59) 御山下島分絵図
- 片山家 蜂須賀家 先山家 黒部家
明治2～3年(1869～70) 徳島藩御城下絵図
- 片山家 蜂須賀家 先山家 黒部家

天和3年(1685)『阿波国渭津城下之図』までは、詳細な屋敷地割は不明であり、侍屋敷でひとくくりにされている。家ごとの屋敷地割が記されているのは、元禄4年(1691)『御山下画図(綱矩様御代御山下画図)』以降の絵図である。それらによると、天明3～5年(1783～85)『徳島絵図』までは、調査区に該当する区画には、片山家、安富家、先山家、黒部家、太田家が居住していたが、寛政8年(1796)『御山下画図』以降は、片山家、蜂須賀家、先山家、黒部家が居住するようになっている。蜂須賀家はそれまでの安富家、太田家の屋敷地をあわせる形になっている(第6図)。

『徳島藩士譜』(宮本武史編 1973)にもとづき、

寛永五辰年二月七日没

二代 片野源右衛門 興処 初名 遊助

寛永五辰年相続（養子）（実 池内治部右衛門某男）

高五十石 後百五十石加増

芝屋敷御留守居役 齡照院様附

承応二巳年八月五日没

三代 太田彦兵衛 秀処（実 太田忠助通昆五男）

初氏 片野 初名 小四郎

寛文元丑年召出

五人御扶持方御支配十国 後新知高百五十石

其後高五十石加増

江戸御留守居裏判役 郷鉄砲改役

正徳三巳年九月十九日没

四代 太田源右衛門 信処 幼名 源太郎

宝永七寅年相続

高二百石

御代官役 御膳番役 岡崎屋敷御番

元文四未年四月廿二日没

五代 太田彦兵衛 勝処 初名 源太郎

元文四未年七月三日相続

高二百石

新御蔵奉行 西の丸御番 塩方御代官

御作事奉行 御蔵奉行勘定方共

天明元丑年四月廿六日没

六代 太田源右衛門 成処 初名 弓藏

安永七戌年九月八日相続（養子）

（実 津田左次兵衛成久弟）

高二百石

西の丸御番 北御蔵奉行加役

寛政八辰年二月十九日没

七代 太田彦兵衛 時処 初名 鶴藏 隠居号 黙入

寛政八辰年五月八日相続（実 彦兵衛勝処妾腹男）

高二百石

西の丸御番 大谷屋敷御番

天保四巳年四月十八日隠居

同 七申年二月六日没

八代 太田源右衛門 古処（初 信処） 初名 元蔵 隠居号 喜楽
天保四巳年四月十八日相続（実 源右衛門成処妾腹男）
高二百石
西の丸御番
弘化二巳年二月三日隠居
同 四未年四月十六日没

九代 太田虎吉 好処（初 通処）
弘化二巳年二月三日相続（実 彦兵衛時処妾腹男）
高二百石
御広間加番 稲田雅楽組
不詳（文久元酉年九月）

片山家

初代 片山半兵衛 幸守 初名 左吉
天正十四戌年 召出
高四百石 中老
朝鮮御陣出陣 土佐材木御分一惣奉行 鉄砲組頭
寛永十五戌年 隠居 承応二年六月八日没

二代 片山弥次兵衛 幸範（幸勝） 幼名 弥四郎
元和八戌年三月六日 召出 寛永十五戌年 相続
高六百七十八石
鉄砲組頭 大阪城御手伝御用
明暦三酉年七月十九日没

三代 片山弥次兵衛 幸直 幼名 孫四郎
明暦三酉年 相続
高六百七十八石
鉄砲組頭
延宝三卯年七月十日没

四代 片山半兵衛 幸久 延宝三卯年 相続
高六百七十八石
鉄砲組頭
宝永二酉年八月十六日没

五代 片山丹下 幸年 幼名 左吉
南溟院様代 相続
高六百七十八石三斗
鉄砲組頭
宝暦三酉年二月十八日没

六代 片山造酒 幸陶 隠居号 永終
 宝暦三酉年 相続（養子）（実 中村衛守友政弟）
 高六百七十八石三斗
 鉄砲組頭 御目付役
 享和二戌年九月廿七日没

七代 片山半兵衛 幸潤 幼名 八百助 隠居号 寛斎
 寛政年間 相続
 高六百七十八石三斗
 本〆役 御目付役 鉄砲組頭 上野本坊普請御手伝御用
 文政八酉年二月廿四日没

八代 片山半兵衛 幸道 幼名 文人。半蔵
 文政年間相続
 高六百七十八石三斗
 増上寺御普請添奉行 鉄砲組頭
 天保五午年四月十二日没

九代 片山兵庫 幸儀 幼名 正之。祥蔵。半蔵
 天保五午年 相続（実 仁尾内膳永成弟）
 高六百七十八石三斗
 鉄砲組頭
 万延元申年二月廿七日没

十代 片山半悟 幸澄 後 兵衛
 万延元申年 相続
 高六百七十八石三斗
 鉄砲組頭
 明治二巳年 藩政改正 明治二十年五月廿八日没

黒部家

初代 黒部次郎左衛門 一重 初名 忠三郎。武兵衛
 瑞雲院様代 召出
 高百五十石 後百五十石加増
 朝鮮御陣御供出陣
 寛永四卯年八月廿七日没

二代 黒部次郎左衛門 元澄 初名 権左衛門
 寛永四卯年 相続
 高三百石 後高五十石加増
 諸国御使者 月江院様御用
 承応二午年正月十三日没

二男 黒部權右衛門 一明 南崇院様代 召出
 　　五人扶持方御支配十五石
 　　御兒小姓役
 　　(黒部所左衛門 先祖)

三代 黒部次郎左衛門 元辰 承応三午年 相続
 　　高三百五十石余
 　　御藏奉行
 　　貞享四卯年十二月二日没

四代 黒部太郎右衛門 景元 南溟院様代 相続(養子)(実 団市郎左衛門景国二男)
 　　高三百五十石余
 　　洲本御目付役
 　　正徳五未年四月十四日没

五代 黒部次郎左衛門 元昌 正徳五未年 相続
 　　高三百五十石余
 　　不詳
 　　享保二酉年六月十七日没

六代 黒部忠左衛門 元義 享保二酉年 兄次郎左衛門跡目相続
 　　高三百五十石余
 　　不詳
 　　延享五戌年三月十五日没

七代 黒部忠左衛門 元勝 初名 庄次郎
 　　寛延元辰年 相続(養子)(実 橋口泰八正富三男)
 　　高三百五十石
 　　不詳
 　　宝暦五亥年九月十八日没

八代 黒部富之丞 供近 宝暦五亥年十一月十三日相続(養子)
 　　(実 平尾小左衛門蕃須四男)
 　　高三百五十石余
 　　生駒丹後組与頭
 　　寛政四子年十二月廿六日没

九代 黒部太左衛門 安経 初名 要作 隠居号 圓水
 　　寛政五丑年二月十八日相続(養子)
 　　(実 市原三左衛門構浪人 市原留三郎一利二男)
 　　高三百五十石余
 　　奥御小姓役 御使番役 寿代姫様附人
 　　文政十一子年十二月廿六日隠居

天保八酉年五月廿七日没

- 十代 黒部鹿之介 友直 隠居号 駢叟
 文政十一子年十二月廿六日相続
 高三百五十石余
 長谷川頼母組
 安政三辰年正月十八日隠居
- 十一代 黒部亀之介 幸軒 安政三辰年正月十八日相続
 高三百五十石余
 御使番 江戸警衛御用
 不詳（文久元酉年九月）

先山家

- 初代 先山文左衛門 俊勝 瑞雲院様 尾州より被召寄
 高三百石 後高百石加増
 洲本住
 寛永十酉年十月十九日没
- 二代 先山奎左衛門 親俊 寛永十一戌年十一月六日相続
 高二百石
 不詳
 正保二酉年五月十日没
- 三代 先山太兵衛 尚親 正保二酉年六月六日相続（養子）
 （実 大口茂右衛門清房二男）
 高二百石 後五十石兩度又、高百石加増
 御兒小姓役 洲本御普請奉行 洲本横目役并町御奉行
 洲本下仕置 鉄砲組頭
 宝永二酉年三月二日没
- 四代 先山彦十郎 雅珍 隠居号 賀軒
 宝永二酉年四月廿八日相続（養子）
 （実 本多家浪人大橋図書賀次三男）
 高四百石
 御使番役 持筒組頭 御奏者役 鉄砲組頭
 明和三戌年九月十三日隠居
 同 五子年正月十九日没
- 五代 先山五郎三郎 通好（初孝治） 隠居号 快甫
 明和二戌年九月十三日相続
 高四百石
 御書院番 西尾兵馬組

天明二寅年十二月廿日隠居
同 七未年七月廿三日没

六代 先山太兵衛 富久 初名 春藏
天明二寅年十二月廿日相続
高四百石
定御使番役 御勤役 奥御小姓役 鉄砲組頭 御奏者役
文政三辰年六月十日没

七代 先山喜内 親義 初名 彦十郎 隠居号 閑遂
文政三辰年八月三日相続（養子）
(鶴殿權兵衛幸茂弟)
高四百石
御城山番 橋口内蔵助組
安政五午年六月十三日隠居

八代 先山太兵衛 義直 初名 固平
安政五午年六月十三日相続（養子）
(実 斎藤八兵衛利武三男)
高四百石
御作事奉行 奥御小姓役 神田帶刀組
不詳（文久元酉年）

蜂須賀山城 千三百石 重喜公十男

初代 蜂須賀出羽 喜端 初名 牧吾郎
寛政十午年三月十八日 中老被仰付
高千三百石
中老 士組頭
文政十一子年六月廿二日没

二代 蜂須賀山城 喜軌 初名 勇之助
文政十一子年相続
高千三百石
御年寄役 長久館総奉行
不詳

安富家

初代 安富吉右衛門 長良 南崇院様代 親 久右衛門隠居料相続
五人御扶持方御支配十石 後新知高二百五十石被下
御広間御番 徳音院様御附 横目役
没年不詳

二代 安富権八 長之 南源院様代相続

高二百五十石
不詳
元禄年間没
安富吉次兵衛 宝永年間分限帖に佐渡對馬組
二百五十石八人半 安富吉次兵衛
享保十一年分限帖に佐渡左兵衛組
二百五十石八人半 安富吉次兵衛あり
安富權左衛門 長孝 寛永三年家中知行高井御役高分限帖に蜂須賀一学組
二百五十石八人半 安富權左衛門あり

参考文献

- 大矢雅彦 1993 『河川地理学』 古今書院
 高田豊輝 1964 『阿波藩土屋敷録 享保 17 子年改』 高田豊輝書写製本
 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 1998 『新蔵町 1 丁目遺跡 合同庁舎地点（旧知事公舎）』
 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 1998 『新蔵町 1 丁目遺跡 企業局総合管理センター（旧副知事公舎）地点』
 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2000 『新蔵町 1 丁目遺跡 企業局総合管理事務所地点 II』
 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2000 『新蔵町 3 丁目遺跡 徳島保健所地点』
 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2004 『徳島城下町遺跡 中徳島町 1 丁目地点』
 鳥居龍蔵 1922 「徳島城山の岩窟」『考古学雑誌』12巻9号
 鳥居龍蔵 1923 「徳島城山の岩窟と貝塚」『教育画報』16巻5号
 平井松午 1995 「城下町起源の都市徳島」『徳島の地理』徳島地理学会
 宮本武史編 1964 『阿州徳島藩御家中録』
 宮本武史編 1973 『徳島藩士譜』上巻・中巻・下巻

(中原 計)

第3章 調査成果

第1節 基本層序

本調査地では、南北方向に4本のベルト、あるいはサブトレレンチを設定し、それぞれの土層断面を実測した（第7～10図、図版1～4）。本節ではこのうち、4ライン南北ベルトの土層断面（第8図、図版1・2）を基準として、以下、本調査地の基本層序を述べる。

本調査地の基本層序は、大きくみて上層・中層・下層の3層に分けられる。上層はにぶい黄褐色・暗灰黄色シルトからなる。上面標高は0.60m付近、厚さは6～28cmを測る。19世紀中頃の盛土と考えられる。上面では19世紀中頃以降の遺物溜りなどが検出された。中層は主として灰色・黄灰色シルトからなる。上面標高は0.45m付近、厚さは約1mを測る。18世紀前葉～中頃の盛土と考えられる。上面では19世紀初頭～中頃の庭園遺構が、土層中では18世紀中頃～末の井戸や溝、土坑などが検出された。下層は灰色細粒砂からなる。上面標高は-0.40～-0.60m付近を測る。湧水のため、土層の厚さは確定できなかったが、サブトレレンチによって、厚さは1m以上になることが判明し、平安時代の黒色土器や土師器などの近世より古い遺物も少量ではあるが出土した。ここでは17世紀後半～18世紀前葉の溝が検出された。

（端野晋平）

第2節 遺構

1. 第3遺構面（第11図）

第3遺構面(T.P.-0.7m)では、池状遺構と屋敷境溝が検出された。この面は無遺物層の下に存在し、その遺構密度は低いものと思われる。第3遺構面の下層には少量の遺物を含む砂層が1m以上堆積していた。

池状遺構（第12図、図版5）

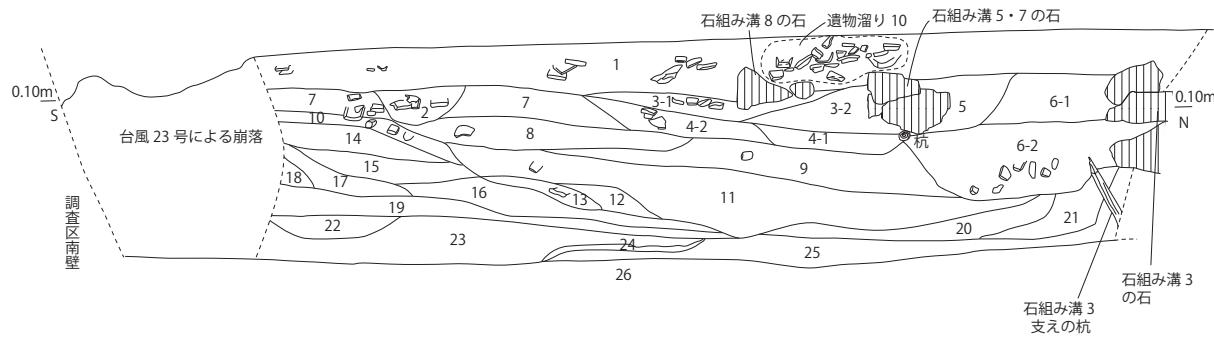
調査区北西部(A・B-3・4)で検出された片山家屋敷地内の池。18世紀の池により約半分が失われていた。残存部位で長さ11.8m、幅6.5m、深さ1.6mを測り、断面形は椀形を呈する。調査により確認された池状遺構のうち、最も西に位置している。池状遺構は造り直されるたびに徐々に東に移動していることがわかる。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、金属製品、石製品、動物遺体などが出土した。時期は17世紀後半～18世紀前半である。

SD101（第13図、図版6）

調査区東部で検出された東西方向に走る溝。大半は石組み溝1などによって搅乱を受け、失われていた。残存幅0.9mを測り、東西に2.5m分を検出した。断面形は底の不安定な椀形を呈する。

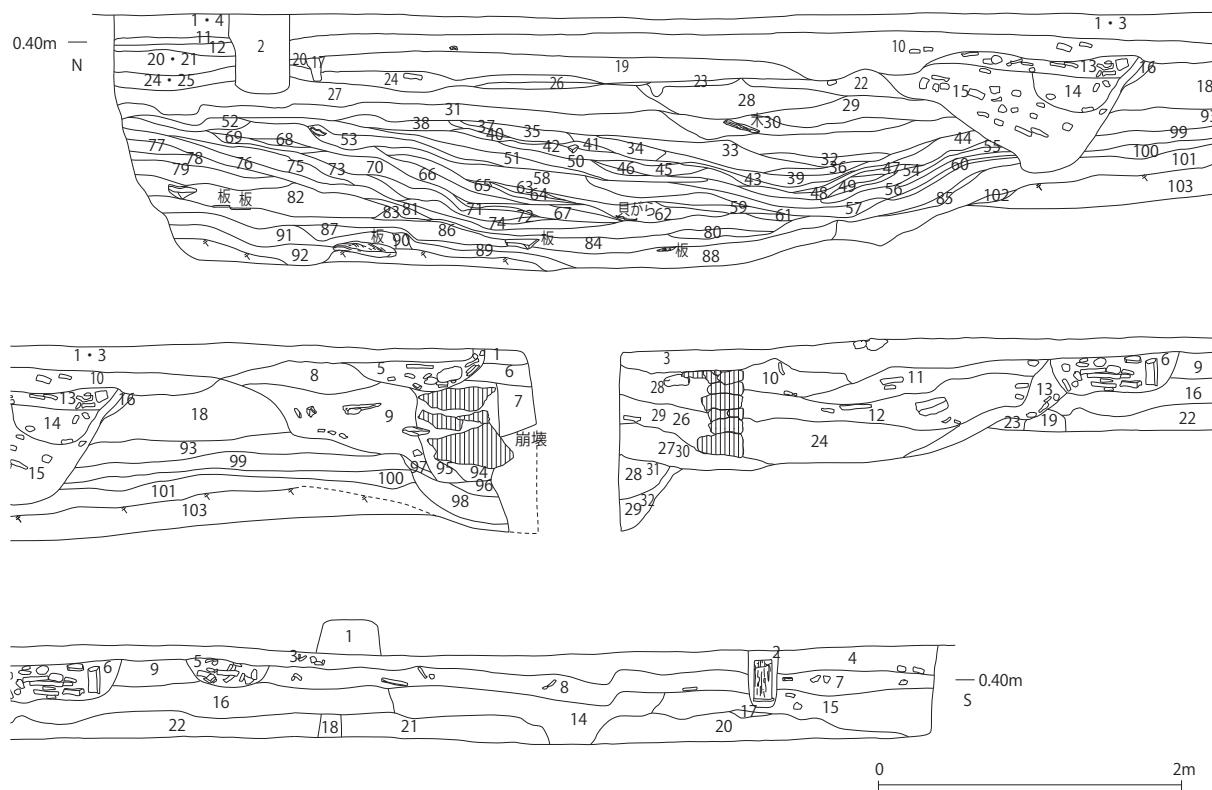
SD185（第14図、図版6）

調査区内を東西方向に横切る溝。池状遺構（第1遺構面）および石組み溝3などによる搅乱を受



第7図 3 ライン南北ベルト土層断面（縮尺：1/50）

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 炭化物を3%含む 人頭大以下大小の礫を多数含む
- 2 2.5Y4/2 黒褐色シルト 炭化物を5%含む 7.5YR5/8 明褐色シルトがブロック状に5%混入
- 3-1 5Y4/3 暗オリーブ色シルト 炭化物を3%含む (石組み溝8埋土)
- 3-2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 炭化物を3%含む こぶし大の礫を含む (石組み溝7・5埋土)
- 4-1 5Y3/2 オリーブ黒色シルト 炭化物を5%含む (石組み溝3埋土)
- 4-2 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト 炭化物を5%含む 瓦含む (石組み溝3埋土)
- 5 5Y2/2 オリーブ黒色シルト 炭化物を2%含む (石組み溝3埋土・石組み溝5裏込)
- 6-1 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト 炭化物を5%含む ø3cm前後の川原石を多数含む (石組み溝3埋土)
- 6-2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 炭化物を5%含む ø3~5cmの川原石を含む 瓦・遺物を多数含む (石組み溝3埋土)
- 7 5Y4/3 暗オリーブ褐色シルト 炭化物を5%含む 7.5Y5/8 明褐色シルトをブロック状に3%含む (SK186埋土)
- 8 7.5Y4/3 暗オリーブ色シルト 炭化物を5%含む (SK186埋土)
- 9 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土 炭化物を5%含む ø3cmの川原石を含む (SK186埋土)
- 10 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト 炭化物を5%含む 瓦を含む (SK186埋土)
- 11 5Y3/2 オリーブ黒色粘土 炭化物を微量に含む こぶし大の礫を含む (SK186埋土)
- 12 10YR3/1 黒褐色粘土 炭化物を5%含む 5mm程度の小礫を含む (SK186埋土)
- 13 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 炭化物を3%含む 5mm程度の小礫を多量に含む (SK186埋土)
- 14 10Y4/2 オリーブ灰色細砂
- 15 7.5Y3/1 オリーブ黒色微細砂 炭化物を2%含む (SK186の南岸土手盛土?)
- 16 5Y2/2 オリーブ黒色微細砂 炭化物を2%含む (SK186の南岸土手盛土?)
- 17 7.5Y3/2 オリーブ黒色微細砂 炭化物を2%含む (SK186の南岸土手盛土?)
- 18 10Y4/1 灰色細砂 炭化物を微量に含む (SK186の南岸土手盛土?)
- 19 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 5Y3/1 オリーブ黒色微細砂を微量に含む 炭化物・有機質の遺物を多量に含む (SK187)
- 20 10Y3/2 オリーブ黒色粘土 (SK187埋土)
- 21 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘土 貝類を多量に含む (SK187埋土)
- 22 2.5Y3/1 オリーブ黒褐色粘土 炭化物を2%含む (SK187)
- 23 10Y4/1 灰色粘土 植物遺体を微量に含む (SK187)
- 24 5Y4/1 灰色細砂 同色の粘土をブロック状に含む (SK187)
- 25 10Y4/1 灰粘土 植物遺体を微量に含む
- 26 N 3/ 暗灰中細 淵水層 無遺物



第8図 4ライン南北ベルト土層断面（縮尺：1/50）

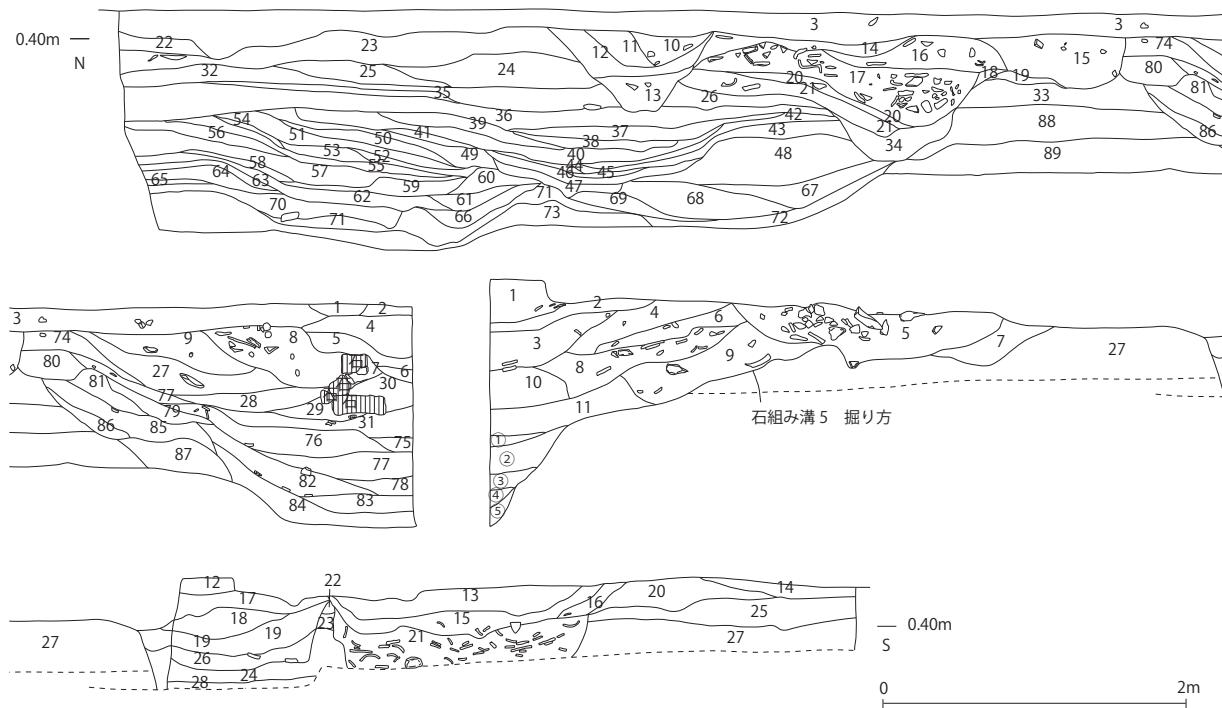
- (4ライン南北ベルト 東西トレチより北 断面2の土色)
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭化物・ $\phi 2$ mm程度の礫を5%含む
 - 2 10YR4/2 灰黃褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色シルト・10YR3/3 暗褐色シルトを斑状に7%含む
炭化物・焼け瓦片を3%含む（掘り込み埋土 遺構No.なし）
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭化物・ $\phi 2$ mm程度の小礫を5%含む(1と同一層)
 - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭化物・ $\phi 2$ mm程度の小礫を5%含む(1と同一層)
 - 5 10YR4/4 褐色シルト 瓦・陶磁器を多く含む
 - 6 2.5Y4/2 暗灰黄褐色シルト 炭化物を5%含む
 - 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 炭化物を3%含む
 - 8 10YR4/4 褐色シルト 炭化物を2% $\phi 1$ cmの礫を3%含む
 - 9 2.5YR4/3 オリーブ褐色シルト 炭化物を3%含む
 - 10 2.5YR4/4 オリーブ褐色シルト 炭化物を3%含む 10YR6/8 明黄褐色シルトを斑状に2%含む
 - 11 7.5YR3/4 暗褐色シルト $\phi 1$ mmの小礫を3%含む
 - 12 7.5YR3/3 暗褐色シルト 炭化物を5%含む 焼け瓦片を3%含む
 - 13 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト 7.5YR2/2 黒褐色シルトを25% 炭化物を15%含む 焼けた瓦を多く含む(SD24埋土)
 - 14 10YR4/1 褐灰色シルト 炭化物を15%含む 焼けた瓦を多く含む(SD24埋土)
 - 15 10YR4/2 灰黃褐色シルト 炭化物を20%含む 焼けた瓦を多く含む(SD24埋土)
 - 16 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 2.5Y5/6 黄褐色シルトを斑状に3%含む
 - 17 10YR4/1 褐灰色シルト 7.5YR3/3 暗褐色シルトを斑状に7% 炭化物を3%含む
 - 18 5Y5/1 灰色シルト 5Y5/3 灰オリーブ色シルトを斑状に30%含む
 - 19 10YR3/3 暗褐色シルト 10YR6/8 明黄褐色シルトを2% 炭化物・ $\phi 5$ mm程度の焼け瓦片を10%含む
 - 20 7.5YR3/2 黒褐色シルト $\phi 3$ mm程度の礫を3%含む 炭化物・焼け瓦片を7%含む
 - 21 7.5YR3/2 黑褐色シルト $\phi 3$ mm程度の礫を3%含む 炭化物・焼け瓦片を7%含む(20と同一層)
 - 22 7.5YR3/3 暗褐色シルト $\phi 1$ mm程度の小礫を5%含む 炭化物・焼け瓦片を10%含む(20と同一層)
 - 23 7.5Y5/1 灰色シルト 5Y5/3 灰オリーブ色シルトを斑状に20%含む
 - 24 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト 5Y5/1 灰色シルトを斑状に2% 炭化物・焼け瓦片を40%含む
 - 25 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト 5Y5/1 灰色シルトを斑状に2% 炭化物・焼け瓦片を40%含む(24と同一層)
 - 26 7.5YR3/3 暗褐色シルト 炭化物・焼け瓦片を10%含む
 - 27 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 5Y6/2 灰オリーブ色粘土を7% 5Y6/3 オリーブ黄色細粒砂を15%含む
 - 28 5Y6/3 オリーブ黄色シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを2%含む 5Y7/2 灰白色粘土を20%含む
 - 29 7.5Y5/1 灰色シルト 5Y6/1 灰色シルトを15%含む 炭化物を10%含む
 - 30 7.5Y7/2 灰白色シルト 5Y5/1 灰色シルトを10%含む
 - 31 5Y5/1 灰色シルト 5Y7/3 浅黄色シルトを1%含む $\phi 1$ cm程度の礫を10%含む 炭化物を15%含む

- 32 5Y3/1 オリーブ黒色有機物 5Y6/1 灰色シルトを 5%含む
 33 5Y4/1 灰色シルト 炭化物を 15%含む
 34 5Y3/1 オリーブ黒色有機物 5Y5/1 灰色シルトを 5%含む
 35 2.5Y5/1 黄灰色シルト 2.5Y3/1 黒褐色有機物を 20%含む
 36 5Y5/1 灰色シルト～細粒砂 腐食木片を含む
 37 10YR5/6 黄褐色シルト 5Y3/1 オリーブ黒色有機物を 5%含む 5Y5/1 灰色シルトを 2%含む
 38 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 5Y4/1 灰色シルトを 7%含む 7.5Y7/2 灰白色シルトを 3%含む
 5Y3/1 オリーブ黒色有機物を 2%含む 炭化物を 2%含む
 39 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 2.5GY7/1 明オリーブ灰色シルトを 5%含む 貝を含む
 40 5Y7/3 浅黄色シルト～細粒砂
 41 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト～細粒砂
 42 5Y5/1 灰色シルト 5Y7/3 浅黄色シルト～細粒砂を 2%含む 炭化物を 2%含む 貝を含む
 43 10YR4/1 灰色シルト～細粒砂 10YR4/2 灰黃褐色シルトを 3%含む
 44 2.5Y5/1 黄灰色シルト 5Y6/2 灰オリーブ色細粒砂を 5%含む 5Y3/1 オリーブ黒色有機物を 2%含む
 10YR3/3 暗褐色有機物を 5%含む 炭化物を 5%含む
 45 2.5Y7/1 灰白色シルト 2.5Y3/1 黑褐色有機物を 10% 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルトを 1%含む
 46 2.5Y3/1 黑褐色有機物
 47 5Y5/1 灰色シルト 5Y4/1 灰色有機物を 7%含む $\phi 5\text{ mm}$ ～1 cmの礫を 3%含む
 48 10YR3/3 暗褐色有機物
 49 5Y5/1 灰色シルト～細粒砂 $\phi 1\text{ cm}$ 程度の礫を 1%含む 木片・貝を含む
 50 2.5Y3/1 黑褐色有機物 2.5Y5/1 黄灰色シルトを 7%含む 炭化物を 5%含む
 51 7.5Y6/1 灰色シルト 7.5Y7/3 浅黄色シルトを 1%含む 炭化物を 3%含む
 52 5Y5/1 灰色シルト 5Y5/4 オリーブ色シルトを 5% 炭化物を 2%含む
 53 7.5Y5/1 灰色シルト 2.5Y3/2 黑褐色有機物を 1%含む $\phi 1\text{ cm}$ 程度の礫を 2%含む 炭化物を 3%含む
 54 5Y5/1 灰色シルト 10YR3/3 暗褐色有機物を 20% 2.5Y3/1 黑褐色有機物を 10%含む 腐食木片含む
 55 5Y6/1 灰色シルト 10YR3/3 暗褐色有機物を 10%含む 炭化物を 3%含む 貝を含む
 56 5Y6/1 灰色シルト 10YR3/1 黑褐色有機物を 20%含む
 57 10YR3/2 黑褐色有機物 炭化物を 5%含む 貝を含む
 58 5Y5/1 灰色シルト 炭化物を 7%含む 木片・貝を含む
 59 2.5Y3/1 黑褐色有機物
 60 10YR3/3 暗褐色有機物
 61 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト 木片を含む
 62 7.5YR3/2 黑褐色有機物 貝を含む
 63 5Y6/1 灰色シルト～細粒砂
 64 5Y3/1 オリーブ黒色有機物 貝・木片を含む
 65 7.5Y6/1 灰色シルト 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトを 10%含む 炭化物を 2%含む
 66 10YR3/2 黑褐色シルト 5Y6/2 灰オリーブ色細粒砂を 7%含む 2.5Y5/3 黄褐色シルトを 15%含む 貝を含む
 67 7.5YR 黑褐色有機物 貝を含む
 68 5Y6/3 オリーブ黄色シルト 5Y5/2 灰オリーブ色シルトを 10%含む 炭化物を 1%含む
 69 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 7.5Y7/2 灰白色シルトを 5%含む 炭化物を 2%含む
 70 2.5Y5/1 黄灰色シルト 2.5Y3/1 黑褐色有機物を 10%含む 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトを 20%含む
 71 10YR3/2 黑褐色有機物
 72 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
 73 5Y5/2 灰オリーブ色シルト～細粒砂 5Y6/1 灰色シルトを 20%含む 炭化物を 2%含む 腐食木片を含む
 74 2.5Y3/2 黑褐色有機物 木片を含む
 75 5Y5/2 灰オリーブ色シルト～細粒砂 $\phi 5\text{ mm}$ 程度の礫を 2%含む
 76 10YR4/3 にぶい黄褐色有機物 5Y6/1 灰色シルトを 15%含む 炭化物を 2%含む
 77 5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂 2.5Y6/6 明黄褐色細粒砂を 20%含む
 78 5Y5/1 灰色シルト 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトを 15%含む 炭化物を 1%含む
 79 2.5Y4/1 黄灰色シルト 5Y6/1 灰色シルトを 10%含む 2.5Y3/2 黑褐色有機物を 5%含む 炭化物を 1%含む
 80 7.5Y5/1 灰色シルト～細粒砂
 81 2.5Y4/1 黄灰色シルト 5Y6/1 灰色シルトを 5%含む 5Y5/2 灰オリーブ色シルトを 3%含む
 82 5Y4/1 灰色シルト 5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂を 5%含む 5Y6/1 灰色シルトを 15%含む
 83 7.5Y6/1 灰色細粒砂
 84 10YR3/2 黑褐色有機物 木片・貝を含む
 85 5Y5/1 灰色砂 2.5Y5/1 黄灰色シルトを 帯状に 10%含む
 86 2.5Y3/1 黑褐色シルト 5Y5/1 灰色シルトを 7%含む 木片を含む
 87 5Y5/1 灰色シルト 5Y3/1 オリーブ黒色有機物を 5%含む
 88 5Y4/1 灰色シルト 2.5Y4/2 暗灰黄色有機物を 25%含む
 89 5Y3/1 灰色シルト 木片を含む
 90 7.5Y5/1 灰色シルト 木片を含む
 91 5Y3/1 オリーブ黒色有機物 $\phi 1\text{ cm}$ 程度の礫を 5%含む 木片を含む
 92 7.5Y3/2 オリーブ黒色有機物 木片を含む

- 93 7.Y7/2 灰白色シルト 7.Y5/3 灰オリーブ色シルトを 7% 含む
 94 5Y5/1 灰色シルト 炭化物を 2% 含む
 95 5Y5/1 灰色シルト 5Y6/6 オリーブ色シルトを 10% 含む 炭化物を 3% 含む
 96 5Y6/1 灰色シルト 炭化物を 2% 含む
 97 5Y6/1 灰色シルト 5Y7/6 黄色シルトを 2% 含む
 98 5Y5/1 灰色シルト 炭化物を 3% 含む
 99 7.Y7/1 灰白色粘土 7.Y6/1 灰色細粒砂を 7% 含む
 100 2.5Y6/6 明黄褐色細粒砂 7.Y6/1 灰色細粒砂を 10% 含む 5Y7/1 灰白色粘土を 10% 含む
 101 5Y6/1 灰色粘土 7.Y6/1 灰色細粒砂を 10% 含む
 102 7.Y6/1 灰色シルト
 103 7.Y6/1 灰色細粒砂
 104 7.Y5/1 灰色粘土～シルト

(4 ライン南北ベルト 東西トレンチより南 断面2の土色)

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR2/3 黒褐色砂を 20% 含む ϕ 5 mm程度の礫を 15% 含む ϕ 1 cm程度の礫を 10% 含む
 2 7.Y4/1 灰色シルト(木の柱・瓦)
 3 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 2.5Y5/1 黄灰色シルトを 20% 含む ϕ 1 mm程度の小礫を 5% 含む 炭化物を 1% 含む
 4 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 2.5Y5/1 黄灰色シルトを 20% 含む ϕ 1 mm程度の小礫を 5% 含む 炭化物を 1% 含む(3 と同一層)
 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト ϕ 1 mm程度の小礫を 5% 含む 遺物を多く含む
 6 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 2.5Y5/1 黄灰色シルトを 15% 含む 遺物を多数含む
 7 2.5Y5/1 黄灰色シルト 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトを 30% 含む 炭化物を 2% 含む
 8 2.5Y5/1 黄灰色シルト 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトを 30% 含む 炭化物を 2% 含む(7 と同一層)
 9 2.5Y5/1 黄灰色シルト 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトを 30% 含む 炭化物を 2% 含む(7 と同一層)
 10 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト 炭化物を 7% 含む
 11 5Y3/2 オリーブ黒色シルト 炭化物を 10% 含む
 12 7.Y4/1 灰色シルト 炭化物を 7% 含む
 13 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 2.5Y2/1 黒色シルトを 10% 含む 2.5YR4/6 赤褐色シルトを 15% 含む
 14 5Y4/1 灰色シルト 10YR4/6 褐色シルトを 2% 含む 炭化物を 3% 含む
 15 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 2.5Y5/1 黄灰色シルトを 25% 含む
 16 5Y5/1 灰色シルト 炭化物を 2% 含む
 17 10YR5/6 黄褐色シルト 炭化物を 10% 含む 烧け瓦片を 5% 含む
 18 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト
 19 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト 炭化物を 3% 含む
 20 7.Y5/1 灰色シルト 2.5Y4/1 オリーブ褐色シルトを 15% 含む
 21 7.Y5/1 灰色シルト 2.5Y4/1 オリーブ褐色シルトを 15% 含む(20 と同一層)
 22 7.Y5/1 灰色シルト 2.5Y4/1 オリーブ褐色シルトを 15% 含む(20 と同一層)
 23 7.Y5/1 灰色シルト 2.5Y4/1 オリーブ褐色シルトを 15% 含む(20 と同一層)
 24 10Y4/1 灰色シルト 炭化物を 3% 含む
 25 2.5Y4/2 暗灰黄褐色シルト 炭化物を 5% 含む
 26 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 炭化物を 3% 含む
 27 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト ϕ 5 mm～1 cm程度の礫を 3% 含む
 28 5Y6/1 灰色シルト 炭化物を 2% 含む
 29 5Y5/1 灰色シルト 炭化物を 3% 含む

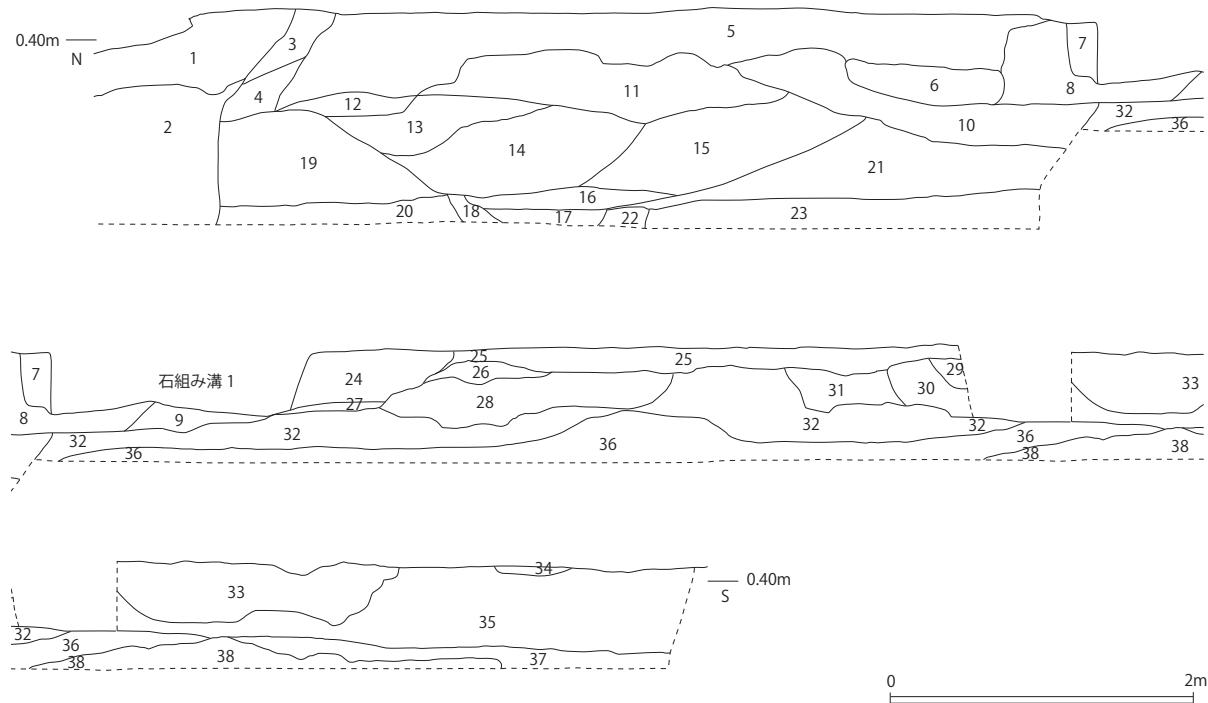


第9図 5ライン南北ベルト土層断面（縮尺：1/50）

- 1 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト 10YR6/8 明黄褐色シルトを 15% 含む
- 2 2.5Y6/3 黄色シルト $\phi 3$ mm程度の礫を 3% 含む
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト $\phi 3$ mm程度の礫を 7% 含む 炭化物を 3% 含む
- 4 2.5Y5/3 黄褐色粘土 10YR6/8 明黄褐色シルトを 10% 含む
- 5 5Y4/1 灰色シルト 10YR6/8 明黄褐色シルトを 7% 含む 炭化物を 3% 含む
- 6 10YR5/8 黄褐色シルト $\phi 2$ mm程度の礫を 7% 含む
- 7 2.5Y4/1 黄灰色シルト 2.5YR 明褐色シルトを 7% 含む
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト $\phi 5$ ~ 10 mm程度の礫を 3% 含む 遺物を多く含む
- 9 7.5YR4/4 褐色シルト $\phi 3$ mm程度の礫を 5% 含む 炭化物を 3% 含む
- 10 7.5YR3/3 暗褐色シルト 7.5YR5/8 明褐色シルトを 斑状に含む $\phi 5$ ~ 10 mmの礫・炭化物を 10% 含む (SD106 埋土)
- 11 10YR4/4 褐色シルト $\phi 5$ mmの礫を 3% 含む 炭化物を 5% 含む (SD106 埋土)
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 7.5YR5/6 明褐色シルトを 5% 含む 炭化物を 7% 含む $\phi 10$ ~ 30 mmの礫を 5% 含む (SD106 溝埋土)
- 13 2.5Y5/3 黄褐色シルト $\phi 1$ mm程度の礫を 10% 含む 炭化物を 3% 含む (SD106 埋土)
- 14 10YR4/3 暗オリーブ褐色シルト 2.5YR4/3 オリーブ褐色シルトを 斑状に 3% 含む 炭化物を 5% 含む (SD24 埋土)
- 15 2.5YR4/3 暗オリーブ褐色シルト $\phi 5$ mm程度の礫を 3% 含む 炭化物を 5% 含む
- 16 7.5YR3/2 黒褐色シルト $\phi 10$ mm程度の礫を 7% 含む 炭化物を 5% 含む 烧け瓦片を多量に含む (SD24 埋土)
- 17 10YR4/2 灰黄褐色シルト 炭化物を 20% 含む 烧け瓦片を多く含む (SD24 埋土)
- 18 2.5Y5/2 暗灰褐色シルト $\phi 5$ mm程度の礫を 3% 含む 炭化物を 5% 含む (SD24 埋土)
- 19 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 炭化物を 2% 含む
- 20 10YR6/8 明褐色シルト $\phi 10$ mm程度の礫を 10% 含む 炭化物を 7% 含む (SD24 埋土)
- 21 7YR3/3 暗褐色シルト $\phi 1$ mm程度の礫を 5% 含む 炭化物を 20% 含む 烧け瓦片を多く含む (SD24 埋土)
- 22 7.5YR4/3 褐色シルト 炭化物を 3% 含む 烧け瓦片を 5% 含む
- 23 7.5YR3/2 黒褐色シルト 炭化物を 5% 含む 烧け瓦片を 3% 含む
- 24 7.5YR3/2 黒褐色シルト 5Y5/1 灰色シルトを 斑状に 5% 含む 炭化物を 3% 含む 烧け瓦片を 20% 含む
- 25 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト 5Y5/1 灰色シルトを 斑状に 2% 含む 炭化物・焼け瓦片を 40% 含む
- 26 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 5Y6/2 灰オリーブ色シルトが 斑状に 20% 混入 烧土 (5YR4/8 シルト) が 1% 混入
- 27 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを 斑状に 10% 含む
- 28 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを 斑状に 15% 含む
- 29 2.5Y4/1 黄灰色シルト $\phi 1$ mm程度の小礫を 7% 含む
- 30 5Y4/1 灰色シルト 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルトを ブロック状に 5% 含む 炭化物を 7% 含む (石組み溝5 埋土)
- 31 7.5Y4/1 灰色シルト $\phi 3$ mm程度の礫を 10% 含む 炭化物を 7% 含む
- 32 5Y4/3 暗オリーブ色シルト 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトが 斑状に 7% 混入 炭化物を 5% 含む
- 33 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト 鉄分を 斑状に 20% 含む 炭化物を 1% 含む
- 34 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 5Y5/3 灰オリーブ色シルトが 斑状に 5% 混入 烧土 (10YR4/4 シルト)・炭化物を 1% 含む
- 35 5Y4/3 暗オリーブ色シルト 5Y5/4 黄灰色シルトが ブロック状に 30% 混入 炭化物・焼土を 3% 含む
- 36 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 7.5Y5/2 灰オリーブ色 7% が 斑状に 5% 混入 炭化物を 10% 含む 烧土を 1% 含む

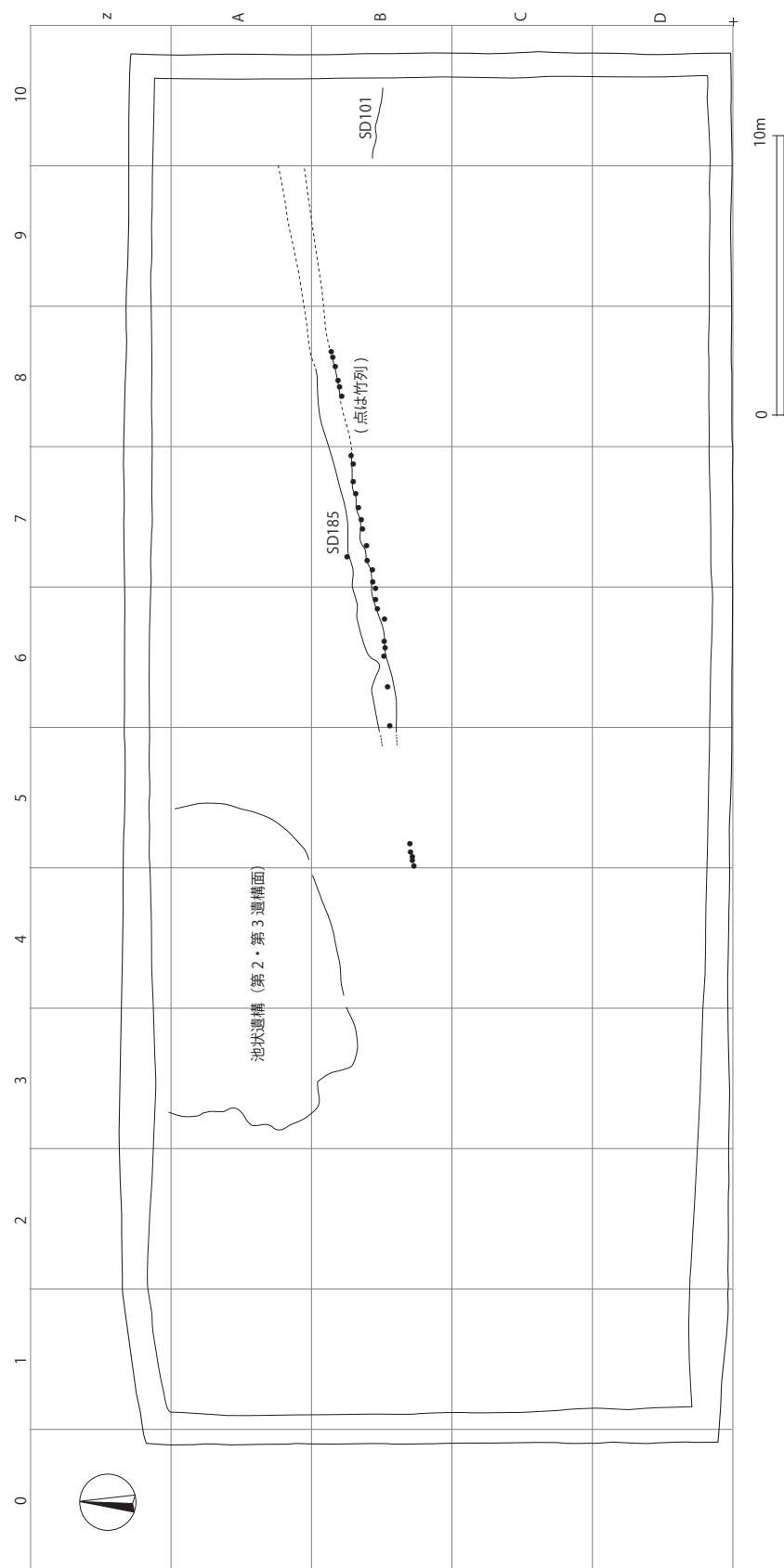
- 37 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 細砂混入 5Y6/3 オリーブ黄色粘土質シルトが斑状に5%混入 炭化物を3%含む 貝を2%含む
- 38 5Y5/2 オリーブ黒色シルト質粘土 5Y6/4 オリーブ黄色シルトが斑状に7%混入 炭化物を3%含む 焼土を10%含む
- 39 5Y5/3 灰オリーブ色シルト 5Y4/3 暗オリーブ40%混入 炭化物を5%含む 焼土を3%含む
- 40 5Y4/2 灰オリーブ色シルト質粘土 5Y5/4 オリーブシルトが斑状に10%混入 炭化物を5%含む 貝が30%底部部分に溜まる
- 41 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 7.5Y5/3 灰オリーブシルトが40%斑状に混入
- 42 2.5Y3/1 黒褐色シルト 5Y4/1 灰色シルトが20%斑状に混入 炭化物を15%含む 焼土を7%含む
- 43 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 5Y5/4 オリーブ色シルトが20%斑状に混入
- 44 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土
- 45 2.5Y3/1 黒褐色粘土 2.5Y2/1 黒色粘土が筋状に25%混入 有機物を含む
- 46 10YR2/2 黑褐色シルト質粘土 有機物を含む
- 47 10YR2/1 黒色シルト質粘土 有機物を含む
- 48 5Y4/2 灰オリーブ色細砂
- 49 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土 2.5Y2/1 黒色シルト・5Y5/1 灰色シルトが10%混入 炭化物を20%含む
- 50 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 5Y4/1 灰色シルト 15%混入 ø10~20 mm程度の白い小石を7%含む 炭化物を3%含む 51 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト
細砂が混入 10Y6/1 灰色粘土がブロック状に10%混入 炭化物を7%含む 焼土を3%含む 貝を1%含む
- 52 10YR3/1 黑褐色シルト質粘土 有機物を含む
- 53 5Y4/1 灰色シルト 炭化物3%含む ø2~30 mm程度の礫を10%含む 焼土を1%含む
- 54 2.5Y3/2 黑褐色シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルトが20%混入 炭化物を3%含む 焼土を2%含む
- 55 5Y3/1 オリーブ黒色シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを35%含む 10YR3/1 黑褐色シルトを10%含む 炭化物を7%含む 貝を30%含む
- 56 5Y4/1 灰色シルト 5Y6/3 オリーブ黄色シルト質粘土が35%混入
- 57 5Y3/1 オリーブ黒色 5Y5/4 オリーブ色が斑状に10%混入 10YR3/1 黑褐色シルト質粘土・有機物が40%混入
炭化物を5%含む 貝を2%含む
- 58 10YR5/1 褐灰色シルト質粘土 有機物を含む 貝を40%含む
- 59 2.5Y3/2 黑褐色シルト質粘土 有機物・木片を20%含む
- 60 5Y4/1 灰色細砂
- 61 10YR2/2 黑褐色シルト質粘土 有機物を含む
- 62 10YR3/1 黑褐色シルト質粘土 有機物・木片を10%含む
- 63 5Y4/1 灰色シルト
- 64 10YR3/1 黑褐色シルト質粘土 有機物・木片を5%含む 貝を10%含む
- 65 5Y5/1 灰色シルト質粘土 10YR3/2 黑褐色シルト質粘土(有機物)が筋状に7%混入
- 66 2.5Y3/1 黑褐色シルト質粘土 有機物を含む
- 67 5Y4/1 灰色細砂
- 68 10Y4/1 灰色細砂
- 69 5Y5/1 灰色極細砂 上層部分と底部分に筋状に有機物を7%含む
- 70 2.5Y2/1 黑色シルト質粘土 2.5Y4/1 灰色シルト質粘土が斑状に35%混入 有機物を7%含む
- 71 5Y3/1 オリーブ黒色砂 5Y6/1 灰色粘土がブロック状に10%混入
- 72 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂 10Y5/1 灰色シルトが30%混入
- 73 5Y6/1 灰色粘土
- 74 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトが30%混入 炭化物・焼土を5%含む
- 75 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 炭化物を5%含む 風化礫を3%含む
- 76 5Y4/3 暗オリーブ色シルト質粘土 ø3 mm程度の礫が30%混入 炭化物を10%含む
- 77 2.5Y3/2 黑褐色粘土 炭を15%含む 木片を5%含む
- 78 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 有機物を5%含む
- 79 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂 10Y5/1 灰色シルトが30%混入
- 80 5Y6/2 灰オリーブ色シルト 5Y4/2 灰オリーブ色シルトが35%混入 炭化物・焼土を3%含む
- 81 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト質粘土 鉄分を25%含む
- 82 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 5Y4/2 灰オリーブ色シルト質砂が20%混入 炭化物・有機物を15%含む 風化礫を10%含む
- 83 7.5Y4/1 灰色粘土 炭化物を2%含む 有機物を3%含む
- 84 10Y4/1 灰色粘土 炭化物を1%含む
- 85 7.5Y5/1 灰色シルト質粘土 炭化物を5%含む
- 86 10Y6/1 灰色シルト 鉄分を15%含む
- 87 5Y5/1 灰色シルト質粘土
- 88 10YR6/2 オリーブ灰色シルト 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂が筋状に30%混入 極小砂混入 鉄分を7%含む
- 89 10Y5/1 灰色シルト 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂が筋状に30%混入 極小砂混入 鉄分を5%含む

- 1 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト $\phi 3$ mm程度の礫を 3%含む
- 2 2.5Y6/2 灰黄色シルト $\phi 3$ mm程度の礫を 5%含む(石組み溝 5)
- 3 2.5Y5/3 黄褐色粘土 10YR6/8 明黄褐色シルトを 10%含む 10Y6/1 灰色シルトを 7%含む(石組み溝 5)
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト $\phi 5\sim 10$ cmの礫を 2%含む 炭化物を 3%含む(石組み溝 5)
- 5 5Y4/3 暗オリーブ色シルト 10YR4/6 褐色シルトを斑状に 20%含む(石組み溝 8・遺物溜り 4)
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 5Y4/2 灰オリーブシルトを斑状に 10%含む 炭化物を 5%含む(掘り方内)
- 7 10YR5/2 灰黄褐色シルト 炭化物を 3%含む
- 8 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 2.5Y5/6 黄褐色シルトを 10%含む 炭化物を 7%含む(埋土)
- 9 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 10YR5/8 黄褐色シルトを 7%含む 炭化物を 2%含む(埋土)
- 10 7.5Y4/1 灰色シルト 炭化物を 7%含む(埋土)
- 11 10Y4/1 灰色シルト(埋土)
- 12 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト $\phi 5$ mm程度の礫を 5%含む
- 13 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 10YR5/8 黄褐色シルトを 2%含む 10YR5/1 褐灰色シルトを 5%含む $\phi 2$ cm程度の礫を 7%含む
- 14 10YR3/4 暗褐色シルト $\phi 1$ cm程度の礫を 3%含む
- 15 2.5Y5/3 黄褐色シルト 10YR5/6 黄褐色シルトを 30%含む(SK29 埋土)
- 16 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト 5Y4/2 灰オリーブ色シルトを斑状に 3%含む 炭化物を 2%含む(SK29 埋土)
- 17 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR5/2 灰黄褐色シルトを 3%含む 炭化物を 2%含む(SK116 埋土)
- 18 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト 7.5YR4/6 褐色シルトを 2%含む 7.5YR2/1 黒色シルトを 2%含む 炭化物を 30%含む(SK116 埋土)
- 19 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 5Y4/2 灰オリーブ色シルトを 7%含む 炭化物を 2%含む(SK116 埋土)
- 20 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 5Y5/2 灰オリーブ色シルトを 7%含む 炭化物を 2%含む
- 21 10YR3/4 暗褐色シルト 炭化物を 15%含む 遺物(瓦等)を多量に含む(SK29 埋土)
- 22 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 5Y5/2 灰オリーブ色シルトを 7%含む 炭化物を 2%含む(20と同一層)
- 23 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトを 10%含む(25と同一層)
- 24 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトを 3%含む(27と同一層)
- 25 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトを 10%含む
- 26 10YR4/1 褐灰色シルト 10YR6/8 明褐色シルトを 2%含む $\phi 3$ mmの礫を 5%含む 炭化物を 2%含む(SK116 埋土)
- 27 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトを 3%含む
- 28 5Y5/2 灰オリーブ色シルト細粒砂 5Y5/1 灰色粘土を 3%斑状に含む
 - ① 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 炭化物を 5%、風化礫を 3%含む
 - ② 2.5Y3/2 黒褐色粘土 炭化物を 15% 木片を 5%含む
 - ③ 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 有機質を 5%含む
 - ④ 7.5Y4/1 灰色粘土 炭化物を 2% 有機物を 3%含む
 - ⑤ 10Y4/1 灰色粘土 炭化物を 1%含む

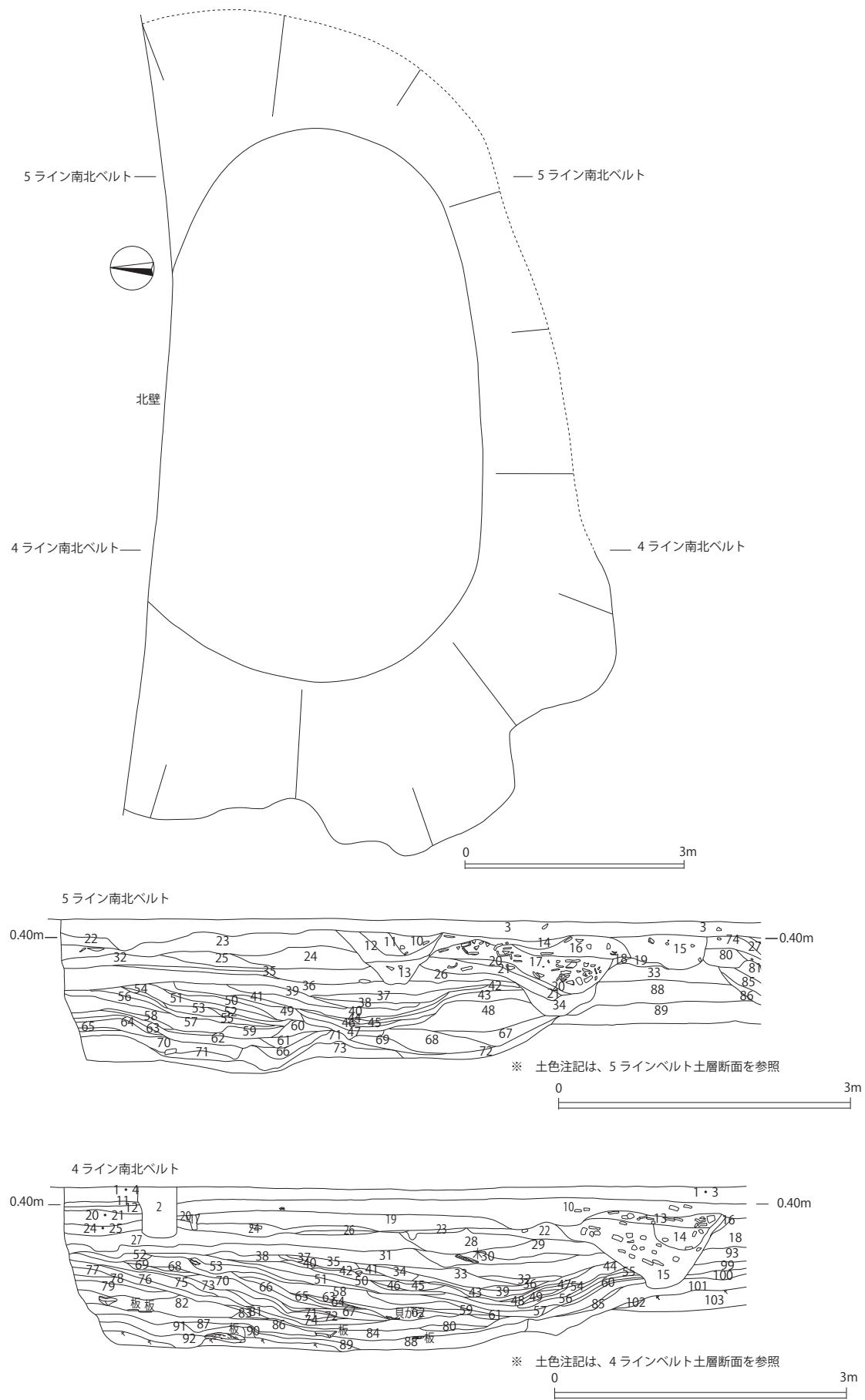


第10図 10ラインサブトレーンチ土層断面（縮尺：1/50）

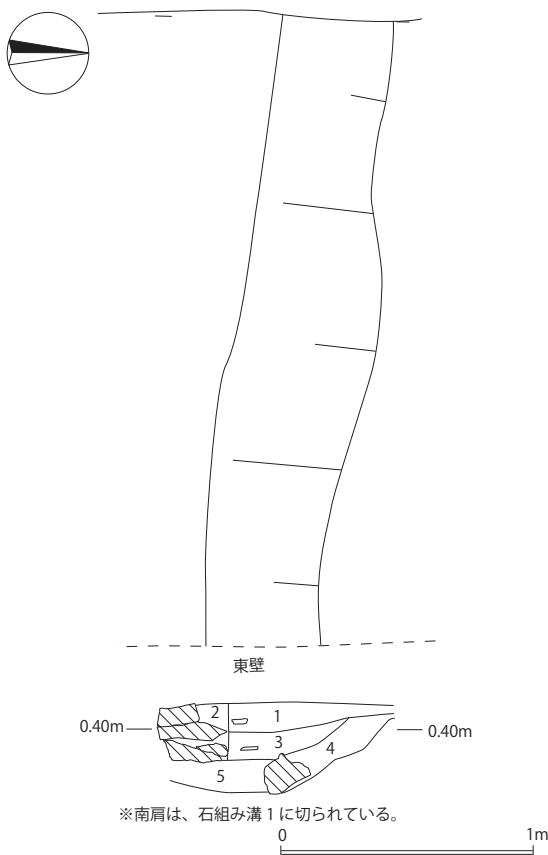
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 2.5Y7/3 浅黄色粘土を15%含む ϕ 5 mm程度の礫を7%含む 炭化物を2%含む (SK98 西)
- 2 5Y4/1 灰色シルト 7.5Y6/1 灰色粘土シルトを10%含む 鉄分を5%含む 炭化物を2%含む (SK98 西)
- 3 2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂 2.5Y7/2 灰黄色粘土を7%含む ϕ 1 cm程度の礫を5%含む 炭化物を2%含む
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 2.5Y6/1 黄灰色シルトを7%含む ϕ 1 cm程度の礫を2%含む 炭化物を3%含む (SK98?)
- 5 2.5Y5/4 黄褐色シルト 2.5Y6/2 灰黄色シルトを10%含む ϕ 5 mm程度の礫を2%含む 炭化物を5%含む
- 6 2.5Y5/1 黄灰色シルト 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを25%含む ϕ 5 mm程度の礫を5%含む 炭化物を2%含む
- 7 2.5Y5/4 黄褐色シルト 2.5Y5/1 黄灰色シルトを15%含む ϕ 5 mm程度の礫を3%含む 炭化物を3%含む
- 8 2.5Y6/6 明黄褐色シルト 5Y7/2 灰白色シルトを15%含む
- 9 2.5Y5/3 黄褐色シルト 2.5Y7/2 灰黄色シルトを5%含む 5Y7/1 灰白色粘土を7%含む
- 10 5Y6/2 灰オリーブ色シルト 鉄分を10%含む
- 11 5Y6/1 灰色シルト 2.5Y5/3 黄褐色シルトを20%含む 鉄分を10%含む
- 12 5Y5/1 灰色シルト ϕ 1 cm程度の礫を1%含む 炭化物を2%含む
- 13 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト 鉄分を7%含む
- 14 5Y6/1 灰色シルト 5Y7/1 灰色粘土を5%含む 2.5Y6/6 明黄褐色細粒砂を20%含む
- 15 7.5Y6/1 灰色細粒砂 2.5Y6/4 にぶい黄褐色細粒砂を7%含む 7.5Y7/1 灰色粘土を5%含む
- 16 5Y5/1 灰色シルト
- 17 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘土
- 18 10Y6/1 灰色シルト
- 19 5GY6/1 オリーブ灰色シルト 鉄分を15%含む
- 20 5Y6/1 灰色シルト 鉄分を10%含む
- 21 10Y7/1 灰白色シルト 鉄分を10%含む
- 22 7.5Y5/1 灰色シルト
- 23 7.5Y6/1 灰色シルト 鉄分を5%含む
- 24 2.5Y5/3 黄褐色シルト ϕ 1 cm以上の礫を3%含む 炭化物を10%含む (SK96 断面図参照)
- 25 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 5Y6/1 灰色シルトを3%含む 炭化物を5%含む
- 26 10YR6/6 明黄褐色シルト 2.5Y7/2 灰黄色シルトを10%含む
- 27 5Y5/1 灰色シルト 5Y6/2 灰オリーブ色シルトを3%含む
- 28 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 5Y7/1 灰白色シルトを20%含む 炭化物を1%含む
- 29 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト 5Y6/1 灰色シルトを5%含む 炭化物を7%含む
- 30 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト 2.5Y6/2 灰黄色シルトを10%含む 2.5Y7/1 灰白色粘土を3%含む ϕ 5 mm程度の礫を1%含む
- 31 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト 細粒砂を含む
- 32 5Y7/3 浅黄色シルト 5Y6/1 灰色細粒砂を20%含む
- 33 2.5Y5/3 黄褐色シルト 10YR5/6 黄褐色シルトを7%含む ϕ 1 cm程度の礫を1%含む 炭化物を3%含む
- 34 10YR6/8 明黄褐色シルト 2.5Y7/2 灰黄色シルトを5%含む
- 35 2.5Y5/3 黄褐色シルト 5Y6/1 灰色シルトを5%含む 5Y7/2 灰白色粘土を20%含む 5Y7/1 灰白色粘土を10%含む
- 36 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂 5Y7/2 灰白色シルトを5%含む
- 37 2.5Y7/1 灰色粘土 2.5Y6/2 灰黄色シルトを10%含む 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土を15%含む
- 38 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂 2.5Y5/6 黄褐色細粒砂を15%含む



第11図 第3造構面遺構配置図（縮尺：1/250）



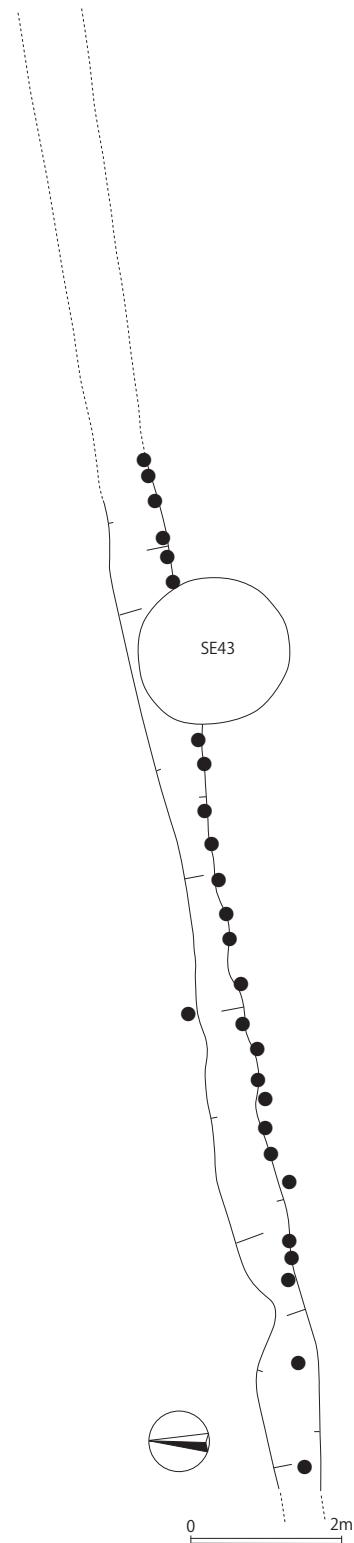
第12図 池状遺構（第2・第3遺構面）（平面図縮尺：1/80・断面図縮尺：1/60）



第13図 SD101（縮尺：1/30）

けており、それより西側は残存していなかった。幅 0.4 ~ 0.8 m を測り、東西に 13.3 m 分を検出した。南側の肩部に竹の杭列が打たれていた。片山家、安富家と太田家との屋敷境としての機能を有していたと考えられる。SD185 の一部を搅乱する SE43、SK156 から出土した 17 世紀代の遺物は、本来 SD185 に伴うものとみられる。

遺構に伴う遺物は、搅乱により多くが失われていたが、時期は 17 世紀代と考えられる。また、この溝は調査区最下層の砂層まで掘り込まれており、溝を完掘する際に、その砂層中から、黒色土器碗、産地不明陶器片、内外面が赤彩された土師器の皿が出土した。陶器片は産地時期とも不明ながら、黒色土器碗は 11 世紀後半、土師器の皿は 10 ~ 11 世紀に類例が求められるものである。10 ~ 11 世紀における新蔵遺跡周辺の状況は、遺構・遺物とともに不明であり、これらの遺物がどのような過程を経てこの場所にもたらされたのかについては、今後、類例の増加を待って評価する必要がある。



第14図 SD185 竹列出土状況（縮尺：1/100）

2. 第2遺構面（第15図、図版7）

第2遺構面（T.P. 0.45 m～0.35 m）では、井戸や溝、多数の土坑を検出した。その中には柱根や根石の残る柱穴が10箇所程度見つかっており、何棟かの建物があったと考えられる。第2遺構面の下層には、厚さ約1m（T.P. 0.3～-0.7 m）のシルトが堆積しており、この層には遺物や炭化物が全く含まれず、鉄分が多く含まれていた。この無遺物層は、新蔵町のほかの調査地点でも検出されており、この層までで調査が終了している。

屋敷境

SD48・SD136・SD161・SD166北・遺物溜り25（第16～18図、図版8～10）

調査区北東部（A-9）から南西部（D-3）にかけて検出された溝。調査時は異なる遺構と認識されたが、一連のものとして考えられる。幅0.5～1.3m、深さ0.3～0.8mを測り、長さにして約40m分を検出した。断面形はU字形を呈する。片山家、安富家、太田家、黒部家、先山家の屋敷境としての機能を有している。19世紀代の屋敷境とは異なり、素掘りの溝である。徳島城下町の他の地区では18世紀代の屋敷境は二条の溝とその間の土手で構成されることが多いが、本調査区の場合は一条のみである。南西部では後世の搅乱を受けているが、本来は調査区外まで延びていたと考えられる。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器、金属製品、石製品が出土した。19世紀代の遺物も少量混入していたが、時期は18世紀代である。

SD120（第19図、図版9）

調査区北東部（B-9・10）で検出された溝。SD161の東側に合流し、SD48となる。安富家、太田家の屋敷境としての機能を有していたと考えられる。幅1.0～1.8m、深さ0.3mで、東西に2.3m分を検出した。断面形は皿形を呈する。遺物は、肥前系磁器、土師質土器、鉄製品、石製品、土製品などが出でた。時期は18世紀代である。

SD158（第20図、図版9）

調査区南西部（D-4）で検出された溝。太田家と黒部家の屋敷境溝としての機能を有していたと考えられる。幅0.3～0.5m、深さ0.2mを測り、南北に2.3m分を検出した。断面形は不整なレンズ形を呈する。遺物は、陶器、磁器、土師質土器などが出土した。

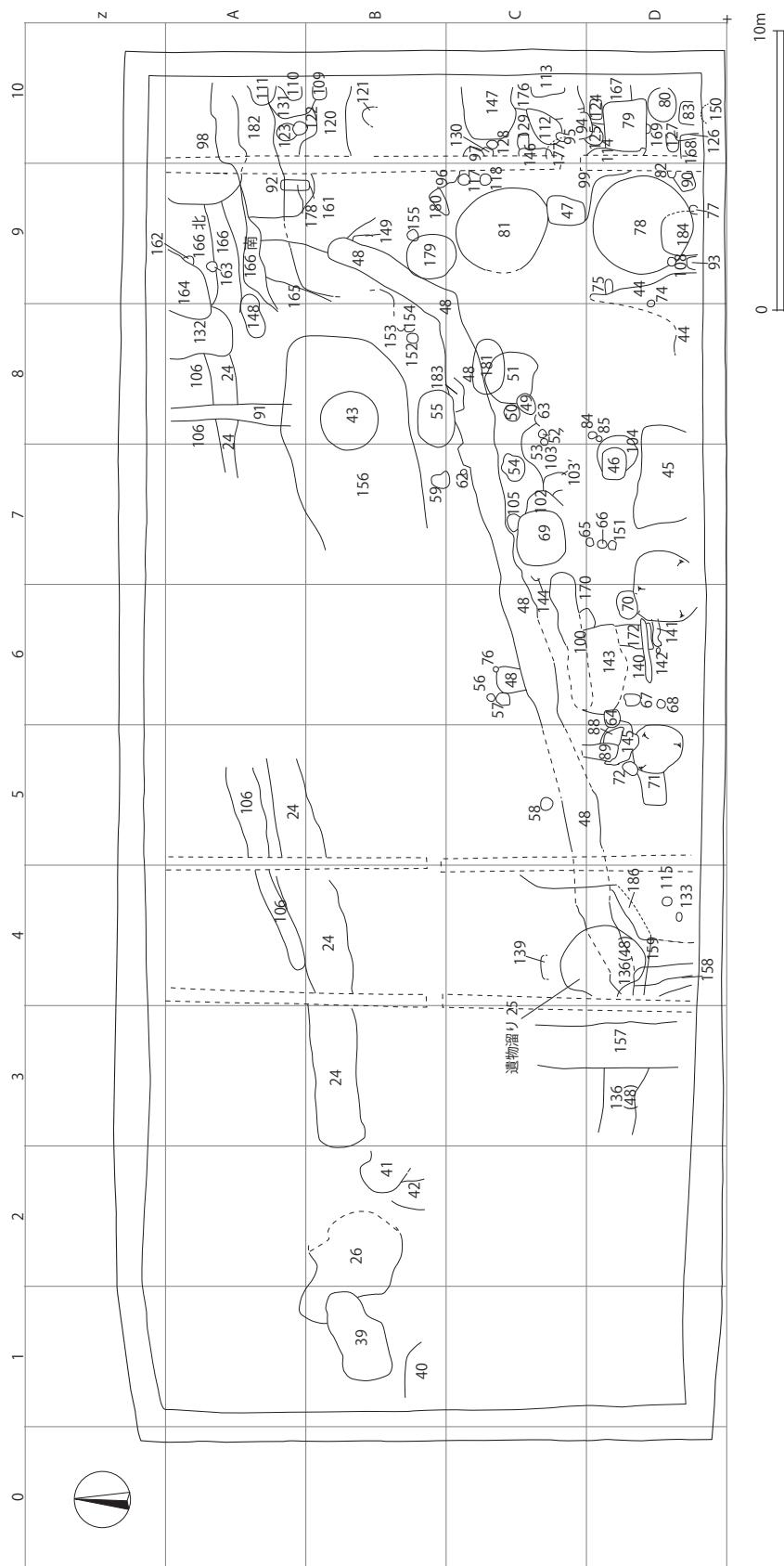
SD159（第20図、図版9）

調査区南西部（D-4）で検出された溝。太田家と黒部家の屋敷境溝としての機能を有していたと考えられる。SD158からSD159へと付け替えられている。幅0.8～1.0m、深さ0.4mを測り、南北に2.7m分を検出した。断面形は楕円形を呈する。遺物は、肥前系磁器、陶器、土師質土器、金属製品、石製品などが出土した。

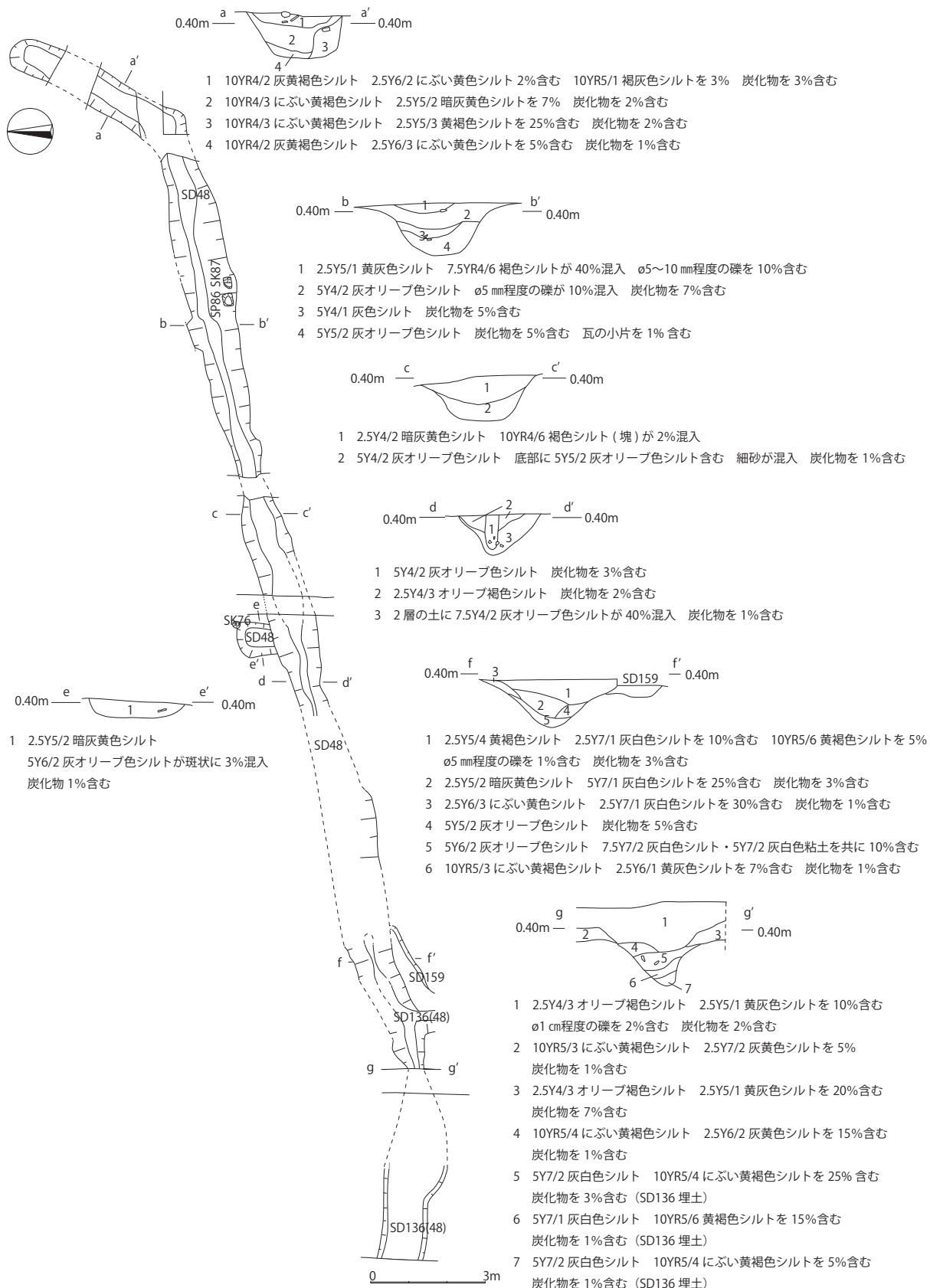
片山家屋敷地内

池状遺構（図版5）

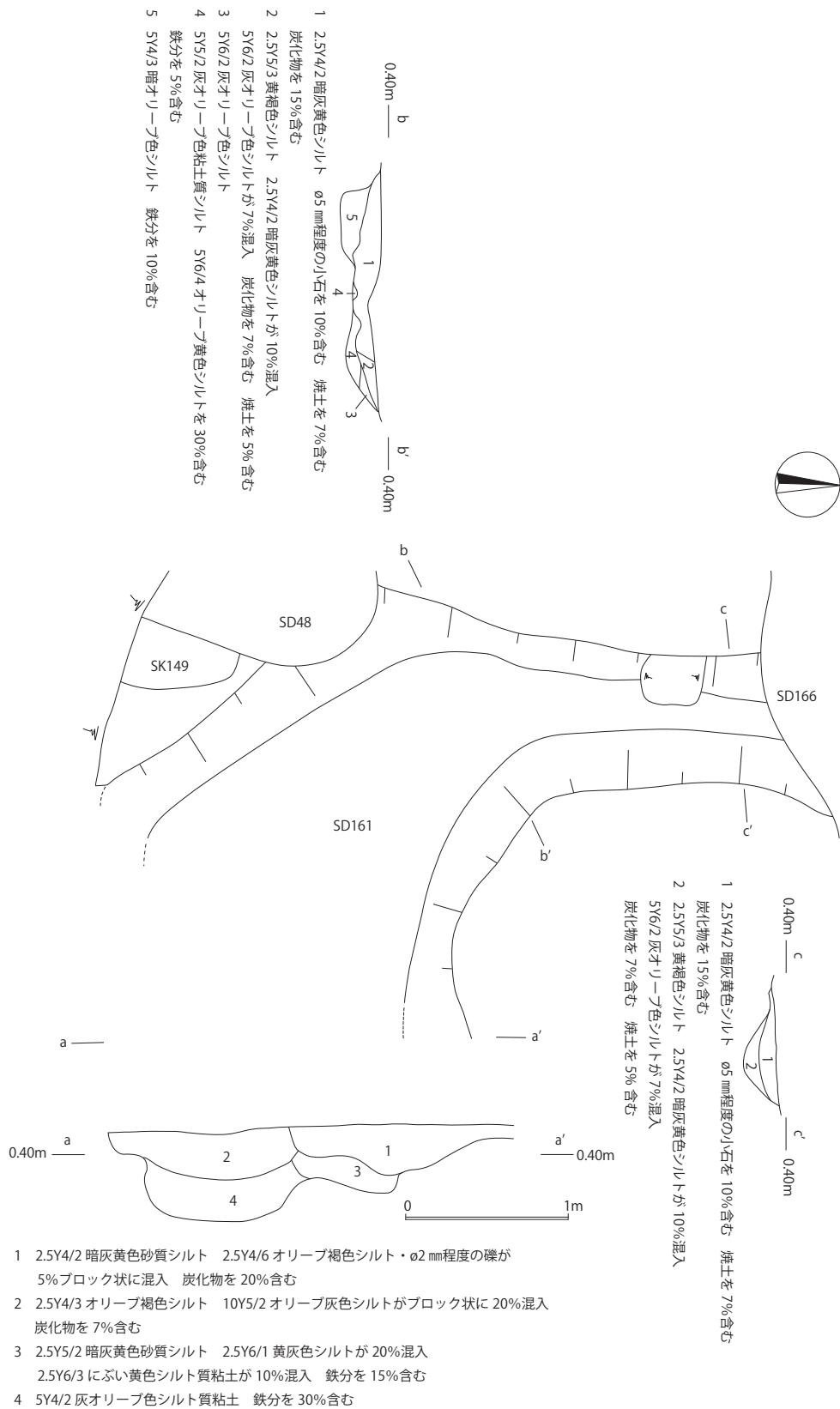
調査区北部中央よりやや西側（A・B-4・5）で検出された池状遺構。断面形は皿形を呈する。19世



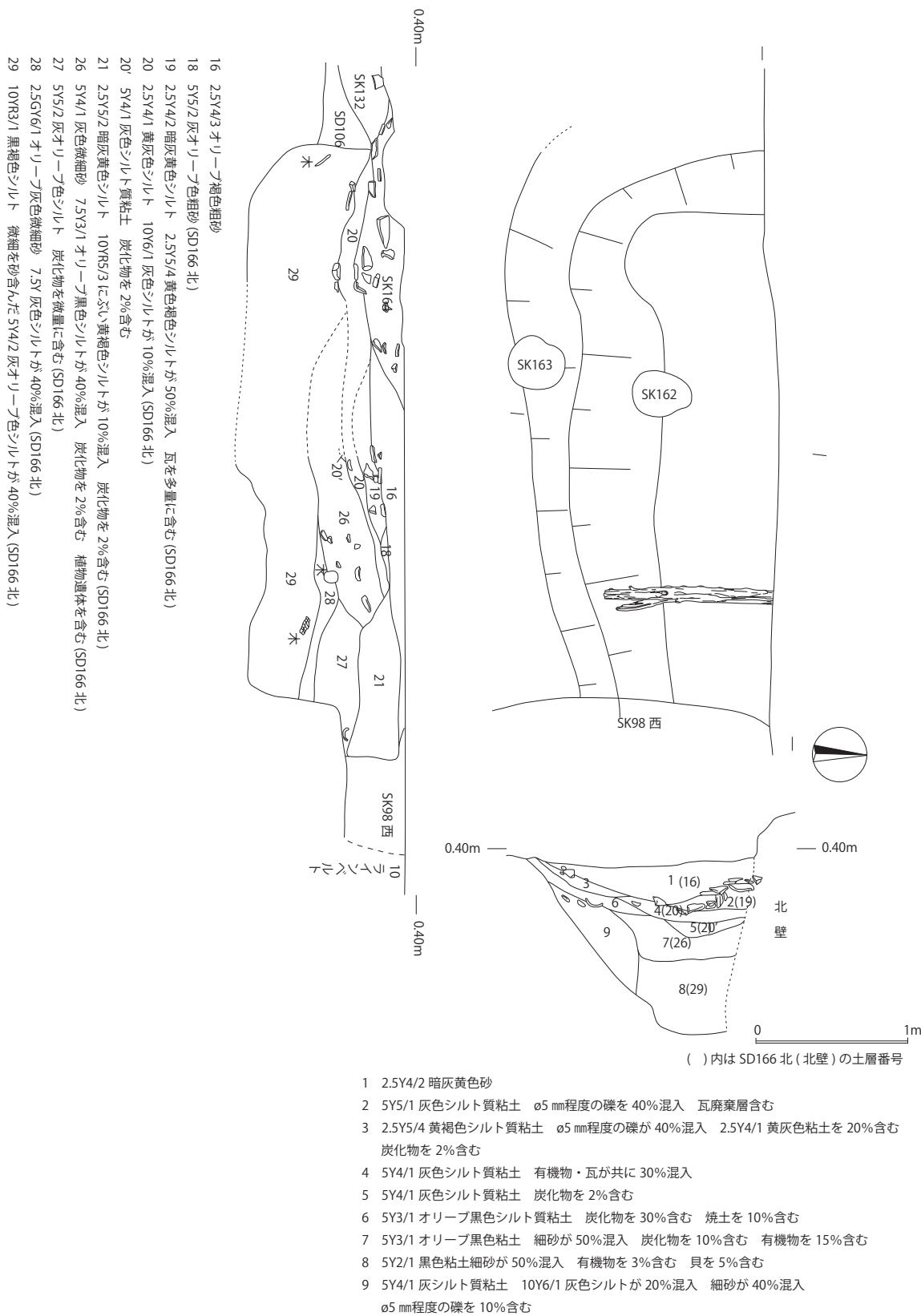
第 15 圖 第 2 遺構面遺構配置圖（縮尺：1/250）



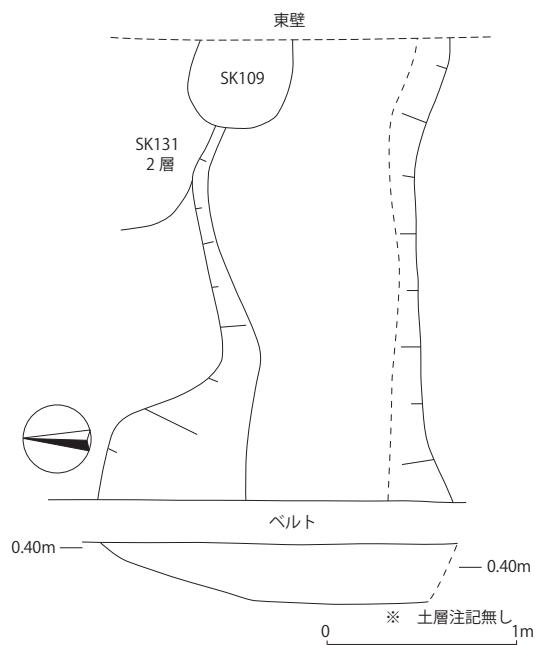
第16図 SD48・SD136 (平面図縮尺:1/150・断面図縮尺:1/50)



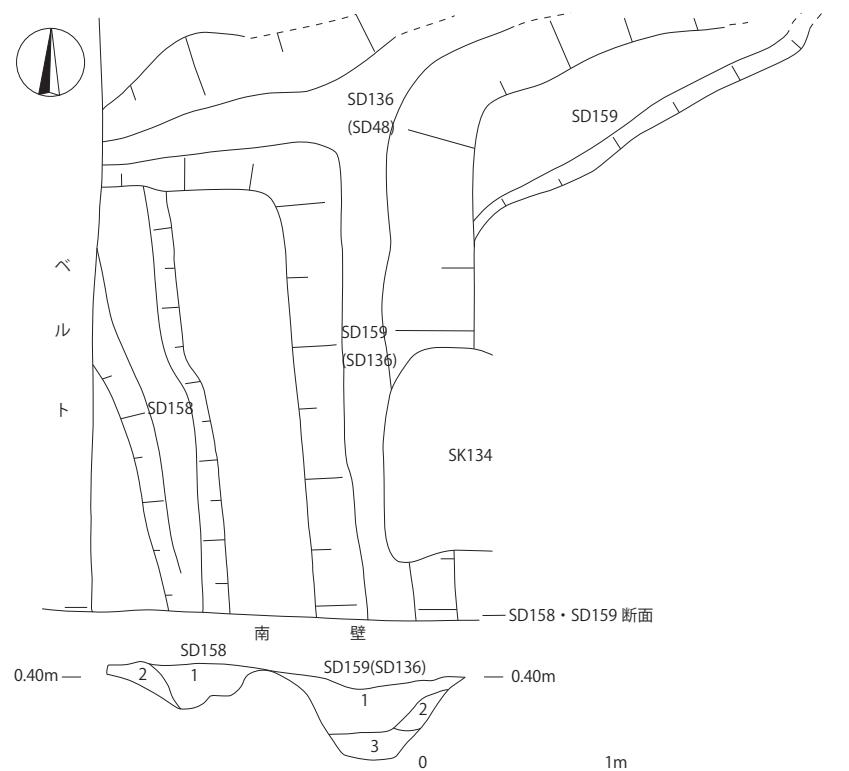
第17図 SD161 (縮尺: 1/40)



第18図 SD166北（縮尺：1/40）



第19図 SD120 (縮尺: 1/40)



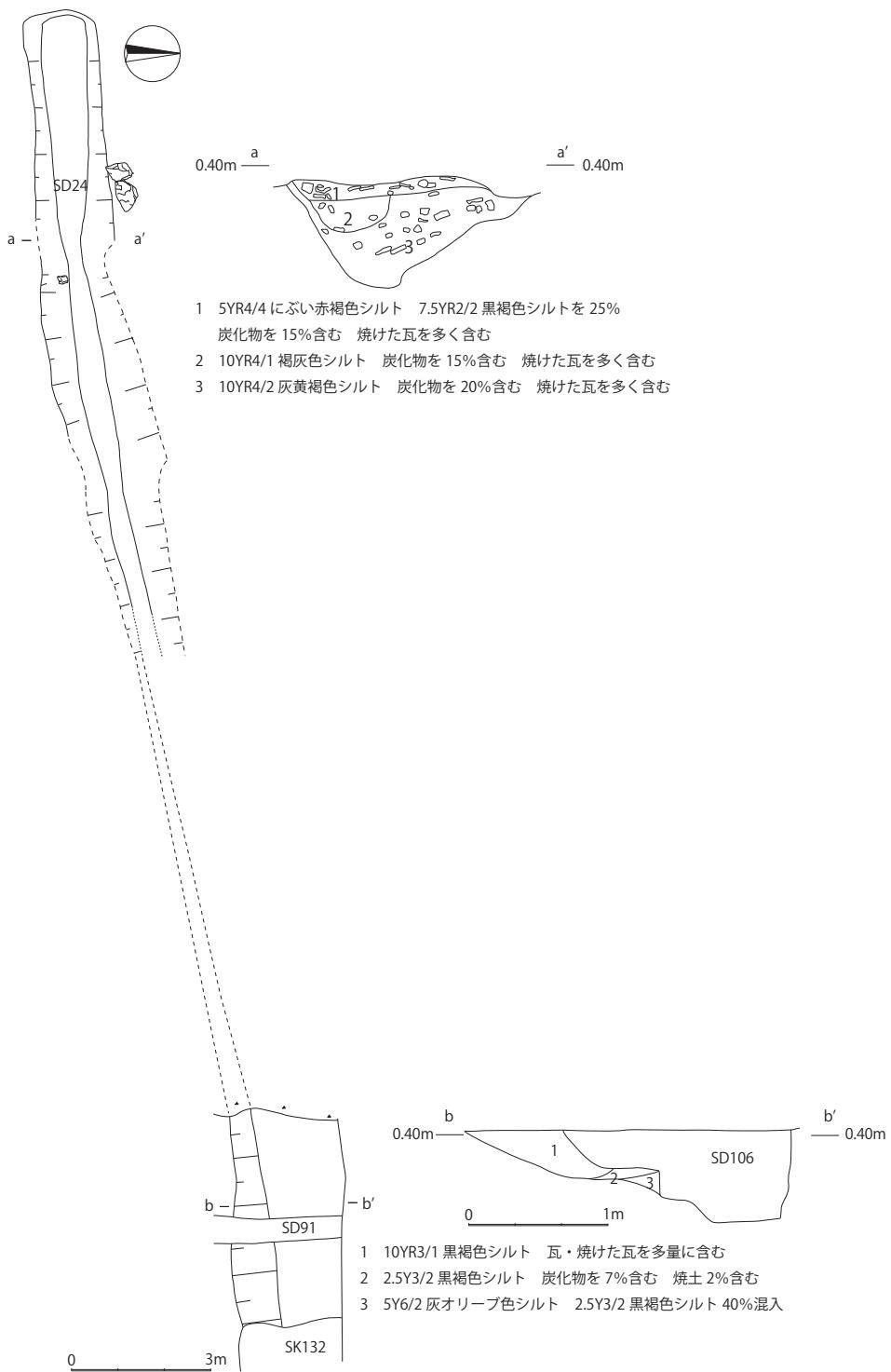
SD159(SD136)

1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 5Y7/1 灰白色シルトを 10% 含む ϕ 1 cm程度の礫を 1% 含む 炭化物を 1% 含む

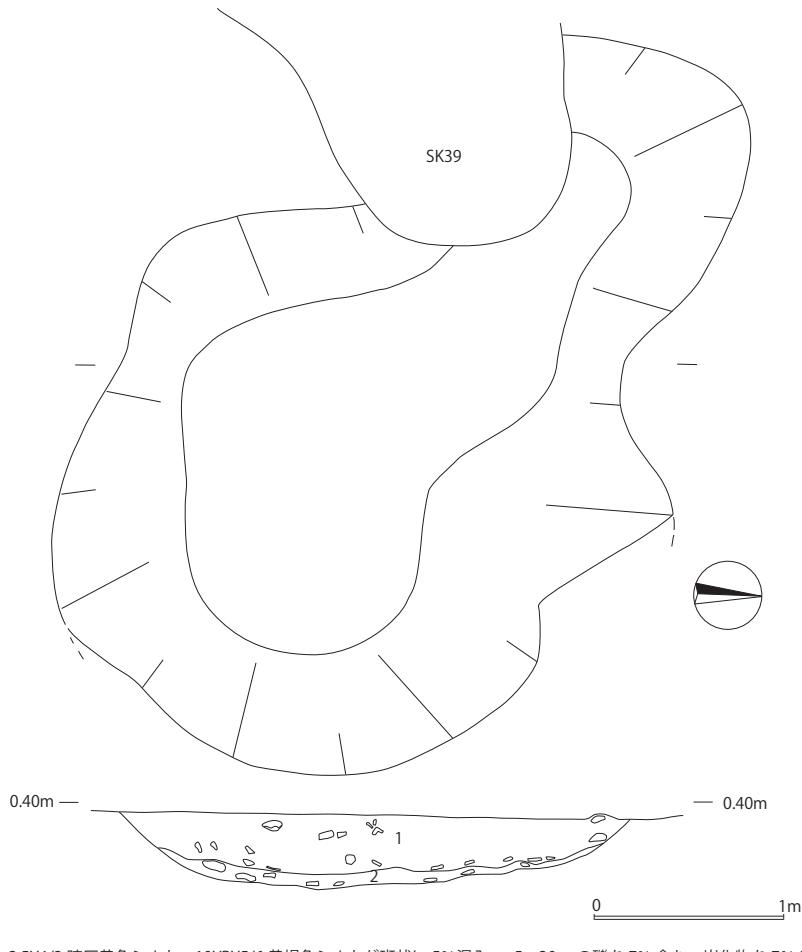
2 2.5Y5/3 黄褐色シルト 5Y6/2 灰オリーブ色シルトを 3% 炭化物を 1% 含む

3 5Y7/2 灰白色シルト 10YR6/8 明黄褐色シルトを 2% 含む 炭化物を 1% 含む

第20図 SD158・SD159 (縮尺: 1/40)



第21図 SD24 (平面図縮尺:1/150・断面図縮尺:1/50)



第22図 SK26（縮尺：1/40）

紀の池状遺構（第1遺構面）の西側に位置し、その構築時に東側部分を壊されている。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、土師質土器、瓦質土器、金属製品、木製品などが出でた。時期は18世紀代である。なお、この遺構の出土遺物に関しては調査時に下層の池状遺構（第3遺構面）のものと一括して取り上げてしまったため、まとめて報告する。

SD24（第21図、図版11）

調査区北部中央付近から東側（B-3～A-8）にかけて検出された溝。被熱により赤色化した瓦が大量に廃棄されていた。幅1.7m、深さ0.8mを測り、東西2箇所に分かれて、西側に13.1m分、東側に4.7m分を検出した。断面形は椀形を呈する。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、関西系磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器などが出土した。出土遺物、遺構の切り合い関係からみて、時期は18世紀末～19世紀初頭と考えられる。下層にある17世紀、18世紀の遺構を掘り込んでいる部分もあるため、17～18世紀の遺物も含まれている。

SK26（第22図、図版10・11）

調査区北西部（A-B-1・2）で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ4.5m、幅3.0m、深さ0.4mを測る。断面形は底のやや不安定な皿形を呈する。屋敷地内に設けられた廃棄土坑と考えられる。遺物は肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、

瓦二次加工品、金属製品、石製品、土製品、鹿角製品、動物遺体などが出土した。時期は18世紀代である。本遺構では、肥前系磁器の染付芙蓉手花鳥文大皿が出土したことが特筆される。芙蓉手花鳥文大皿は元々ヨーロッパ輸出用に製作されたものであり、製作時期は1650～1670年代である。遺構の時期は18世紀であるので、それまでは伝世していたと考えられる。

SK39（第23図、図版11）

調査区西部（B-1）で検出された土坑。平面形は不整な隅丸長方形で、長さ3.5m、幅1.7m、深さ0.5mを測る。断面形は不整な椀形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器、軟質施釉陶器などが出土した。時期は18世紀後半である。

SK40（第24図）

調査区西部（B-1）で検出された土坑。平面形は隅丸長方形と思われ、残存部位で長さ2.0m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、土師質土器、透明釉土器などが出土した。時期は18世紀後半～19世紀初頭である。

SK41（第25図、図版11）

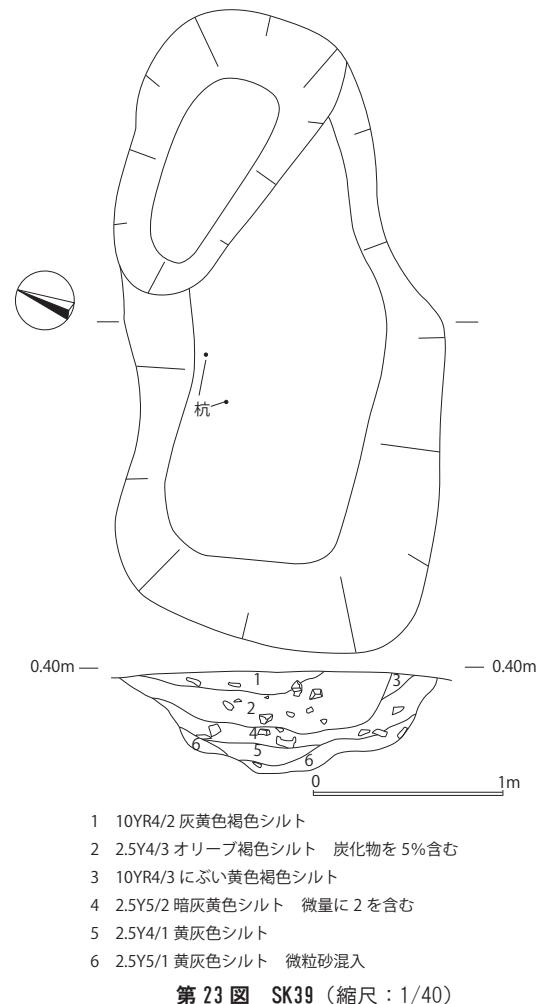
調査区西部（B-2）で検出された土坑。平面形は不整形で、南北1.7m以上、東西残存値1.5m、深さ0.3mを測る。断面形は椀形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、瓦質土器、金属製品、動物遺体などが出土した。時期は18世紀代である。

SK42（第25図、図版12）

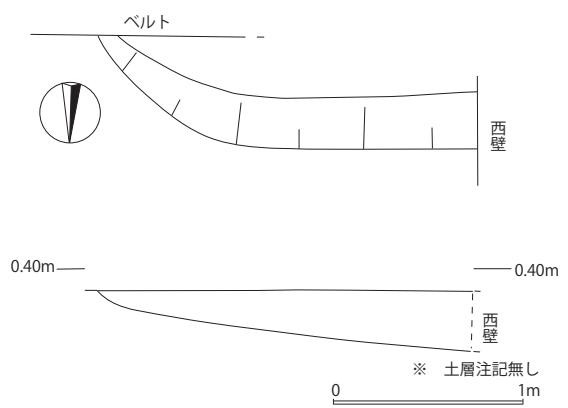
調査区西部（B-2）で検出された土坑。平面形は長楕円形と思われ、南北残存値1.1m、東西1.1m、深さ0.3mを測る。断面形はやや不整な椀形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、土師質土器、瓦質土器、鉄製品、動物遺体などが出土した。時期は18世紀代である。

SE43（第26図、図版11）

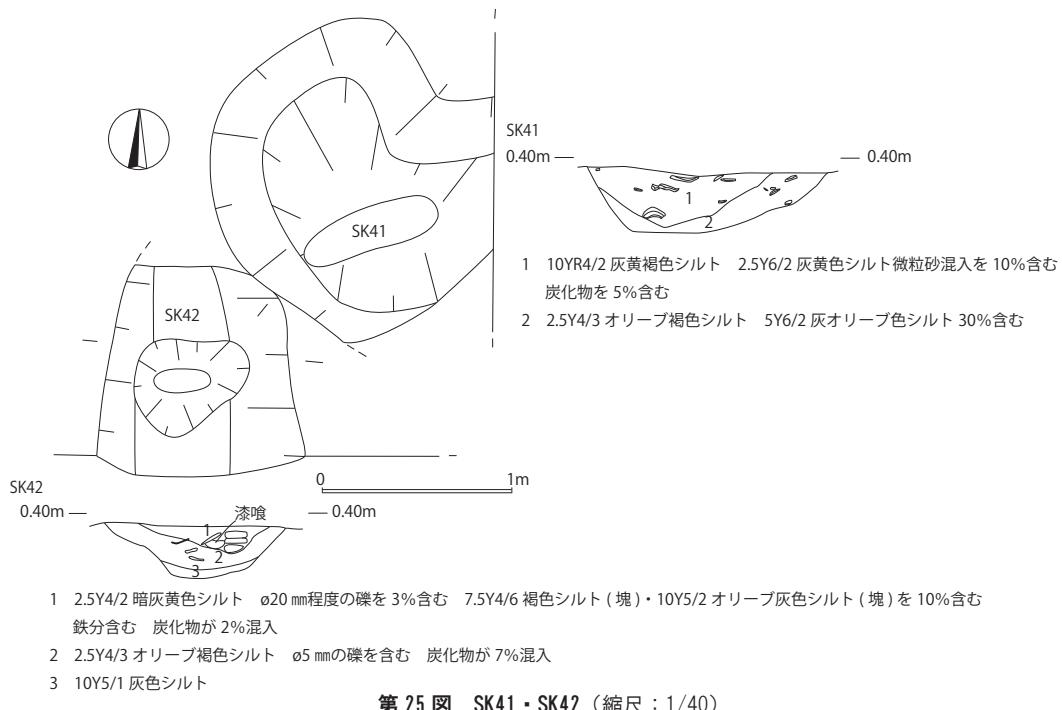
調査区東部（B-7・8）で検出された井戸。平面形は円形で、直径2.2m、深さ1.0mを測る。断面



第23図 SK39（縮尺：1/40）



第24図 SK40（縮尺：1/40）



第25図 SK41・SK42(縮尺:1/40)

形は箱形を呈する。最下部から竹枠と 20 ~ 50 cm の石材が検出された。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、土師質土器、金属製品、石製品などが出土した。時期は 18 世紀後半～19 世紀初頭である。下層にある 17 世紀の遺構を掘り込んで造られているため、17 世紀代の遺物も含まれている。

SK55(第27図、図版12)

調査区東部中央付近(B・C-8)で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径 2.0 m、短径 1.3 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、備前系陶器、土師質土器などが出土した。時期は 18 世紀代である。

SK56(第28図)

調査区中央部(C-6)で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は U 字形を呈する。形状・規模から柱穴の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。時期は層位などから 18 世紀代と考えられる。

SK57(第28図)

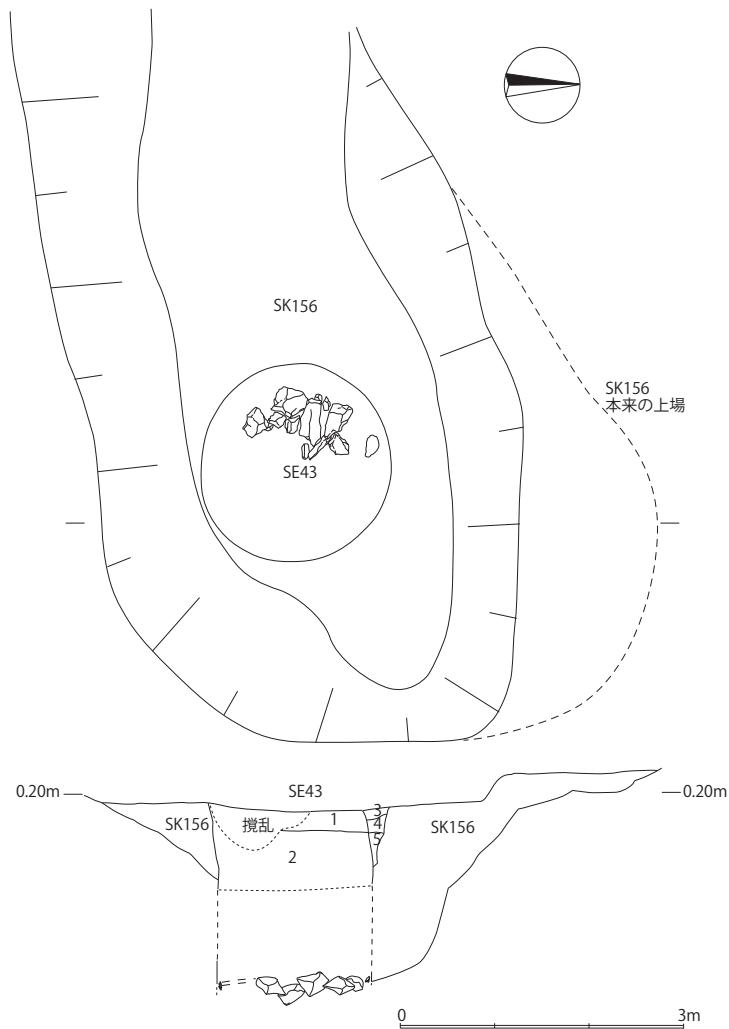
SK56 の南側(C-6)で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.5 m、深さは 0.1 m を測る。断面形は内部に小穴があるため、やや歪になっているが、おおむねレンズ形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器などが出土した。時期は 18 世紀代である。

SK58(第29図)

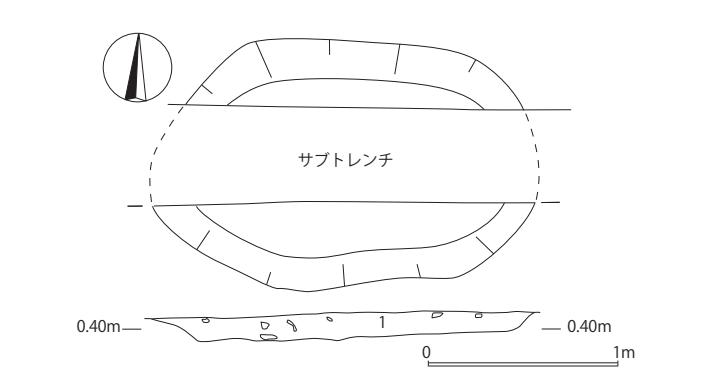
調査区南部(C-5)で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.5 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は土師質土器が出土した。時期は 18 世紀代と思われる。

SK59(第30図)

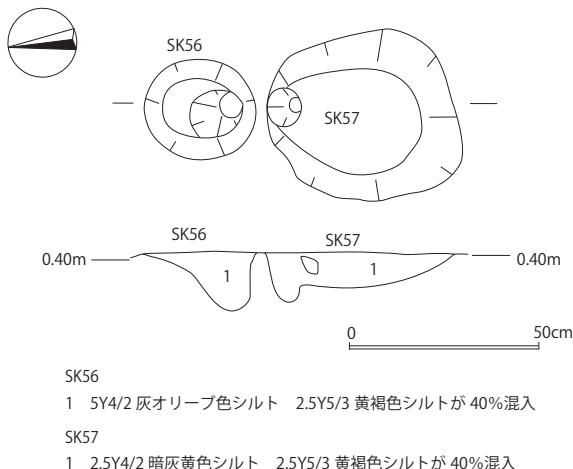
調査区中央部やや東寄り(B-7)で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ 0.7 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 m を測る。遺物は、肥前系磁器、鉄製品などが出土した。時期は 18 世紀代である。



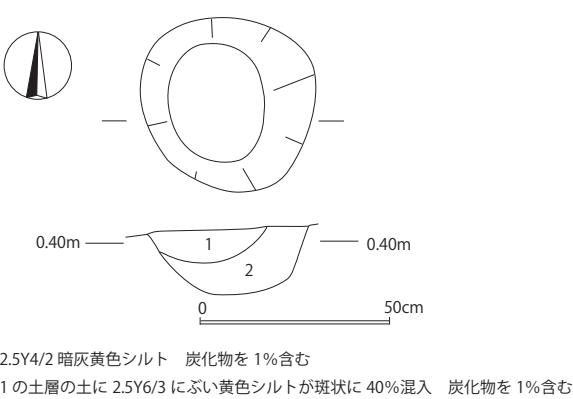
第26図 SE43 (縮尺: 1/80)



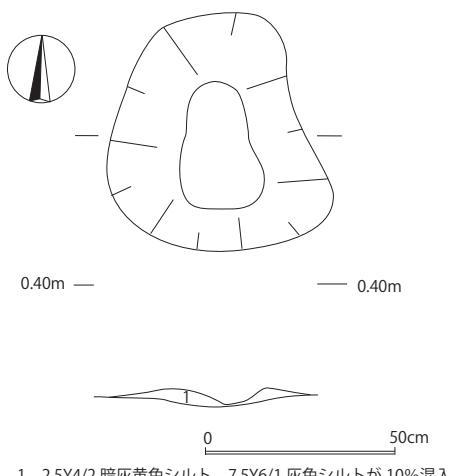
第27図 SK55 (縮尺: 1/40)



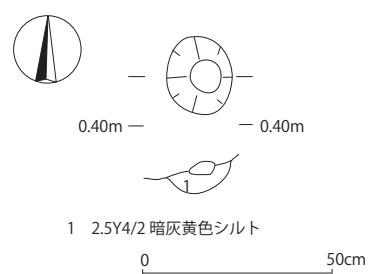
第28図 SK56・SK57（縮尺：1/20）



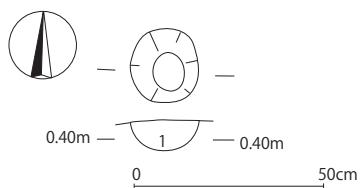
第29図 SK58（縮尺：1/20）



第30図 SK59（縮尺：1/20）



第31図 SK62（縮尺：1/20）



第32図 SK76（縮尺：1/20）

SK62（第31図）

SK59 の南側（C-7）で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は出土しなかった。時期は層位などから 18 世紀代と考えられる。

SK76（第32図）

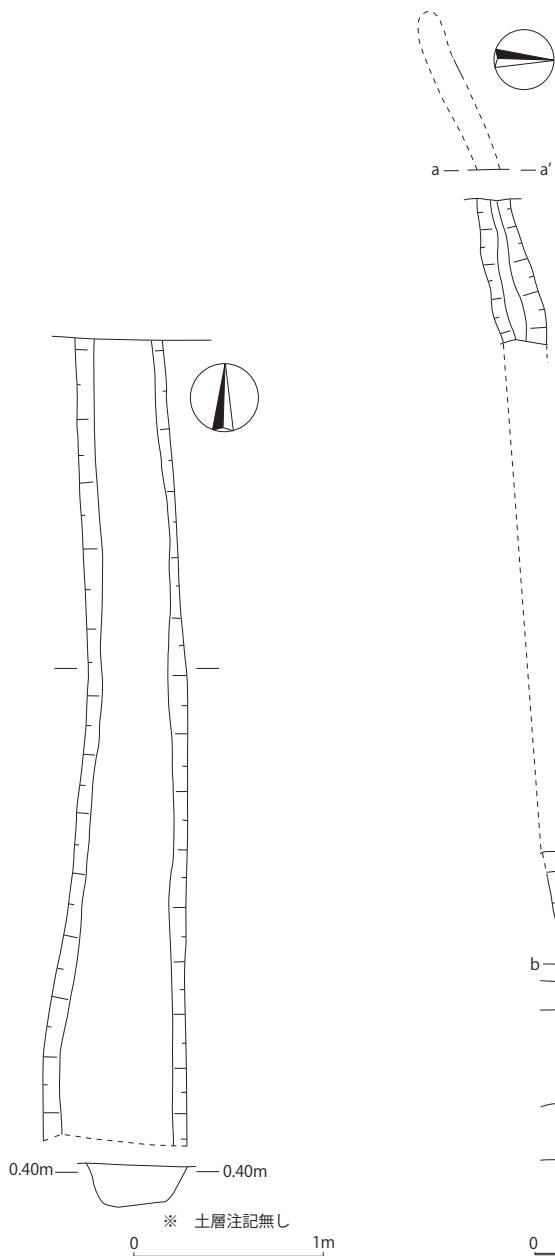
調査区中央部（C-6）で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は出土しなかった。時期は層位などから 18 世紀代と考えられる。

SD91（第33図、図版12）

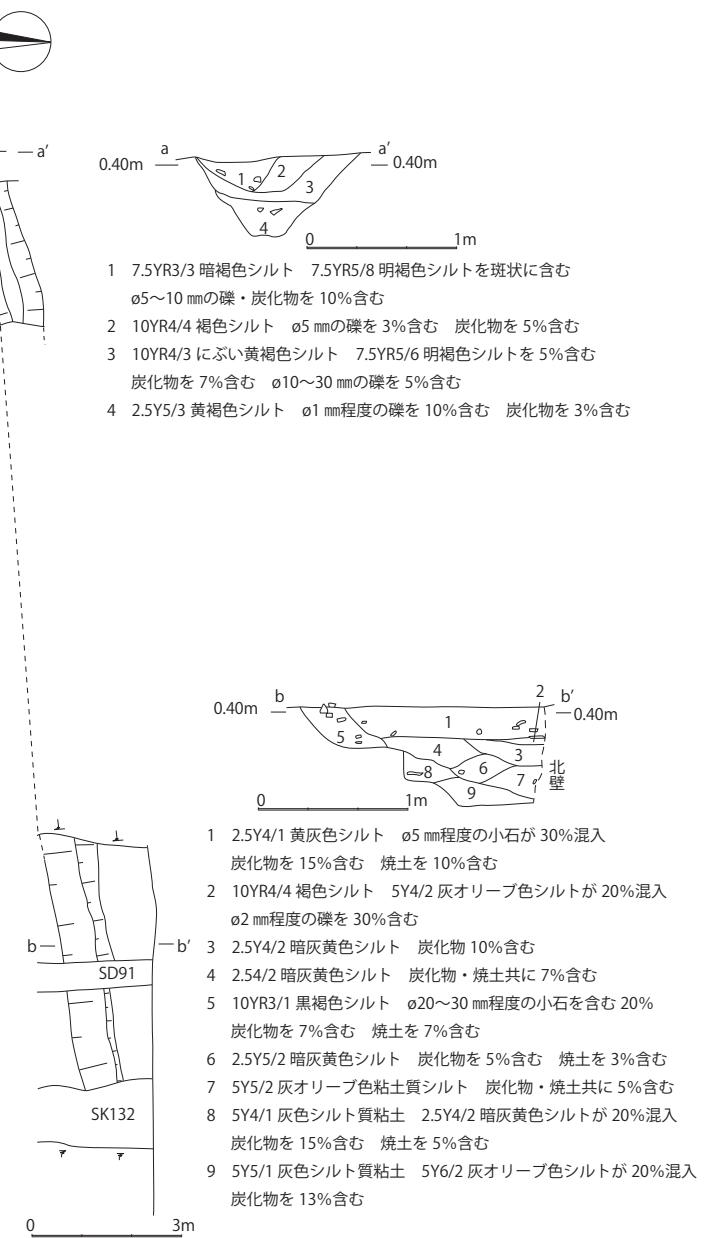
調査区北東部（A-8）で検出された溝。幅 0.5 ~ 0.8 m、深さ 0.2 m を測り、南北に 4.3 m 分を検出した。断面形は逆台形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、土師質土器、金属製品などが出土した。時期は 18 世紀代である。

SD106（第34図、図版12）

調査区北東部（A-7・8）で検出された溝。幅 0.8 ~ 1.1 m、深さ 0.6 m を測り、東西 2箇所に分かれて、西側に 3.0 m 分、東側に 5.3 m 分を検出した。断面形は V 字形を呈する。一部を池状遺構（第1遺構



第33図 SD91（縮尺：1/40）



第34図 SD106（平面図縮尺：1/150・断面図縮尺：1/50）

面)により搅乱を受けている。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器などが出土した。時期は18世紀代であるが、17世紀、19世紀の遺物も少量混入している。

SK107（図版13）

調査区北東部(A-9)で検出された土坑。遺物は、肥前系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、透明釉土器などが出土した。時期は18世紀代であるが、19世紀の遺物も混入している。

SK132（第35図、図版13）

調査区北東部(A-8)で検出された土坑。平面形は長方形で、残存長2.2m、幅1.6m、深さ0.3mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、土師質土器、軟質施釉陶器などが出土した。時期は18世紀代である。

SK148 (第36図、図版13)

調査区北東部で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径1.6m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は、陶器、磁器、土師質土器などが出土した。時期は18世紀代である。

SP152 (第37図)

調査区東部(B-8)で検出された柱穴。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.3mを測る。断面形はU字形を呈する。内部に柱根が残存している。遺物は出土しなかった。時期は18世紀代と思われる。

SP153 (第37図)

調査区東部(B-8)で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.3mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。時期は18世紀代と思われる。

SK154 (第37図)

調査区東部(B-8)で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.2mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。時期は18世紀代と思われる。

SK156 (第38図、図版13)

調査区東部(A・B-7・8)で検出された土坑。平面形は不整な長楕円形で、残存長7.5m、幅4.5m、深さ0.8mを測る。断面形は椀形を呈する。井戸(SE43)を造る際に掘られたものと考えられる。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器、瓦二次加工品、金属製品、石製品、土製品、木製品、動植物遺体などが出土した。時期は18世紀代である。下層に17世紀の屋敷境が通っており、それを掘り込んでいるため、その時期の遺物も含まれている。

SD157 (第39図)

調査区南西部(C・D-3)で検出された溝。幅1.5～1.7m、深さ0.3mを測り、南北に5.2m分を検出した。断面形はU字形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、大谷焼、土師質土器、瓦二次加工品、金属製品、石製品、土製品、動物遺体などが出土した。時期は18世紀代である。

SK162 (第40図)

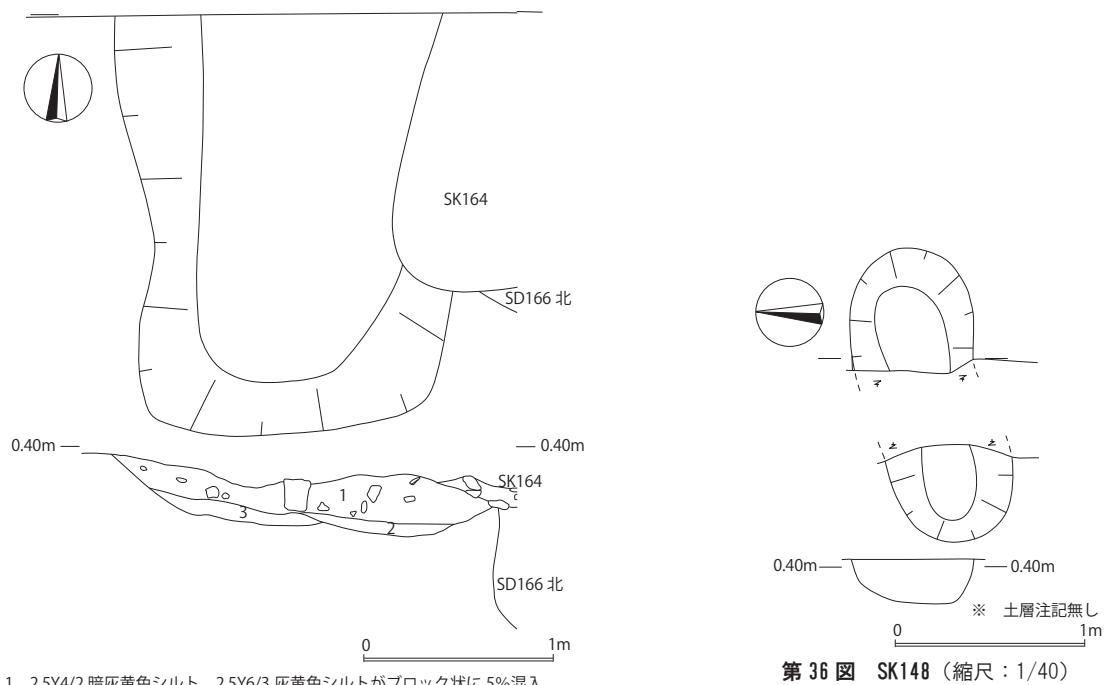
調査区北東部(A-9)で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.1mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。時期は18世紀代と思われる。

SK163 (第40図)

調査区北東部(A-9)で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.2mを測る。断面形は片隅が丸みを帯びた箱形を呈する。遺物は出土しなかった。時期は18世紀代と思われる。

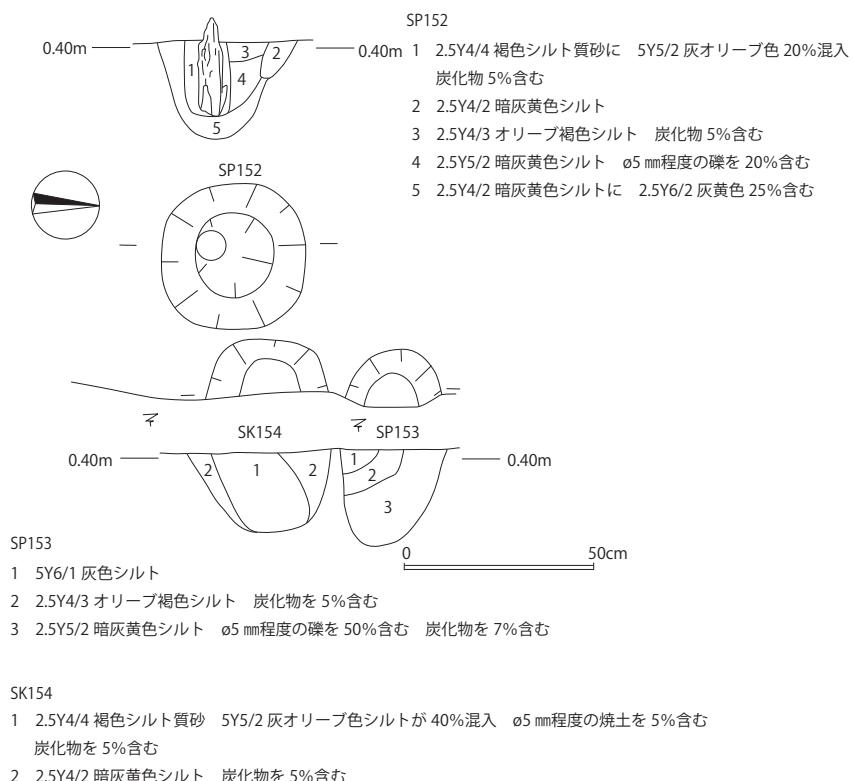
SK164 (第41図、図版14)

調査区北東部(A-8・9)で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値1.4m、東西2.07m、深さ0.3mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、関西系磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、瓦質土器などが出土した。時期は18世紀後半である。

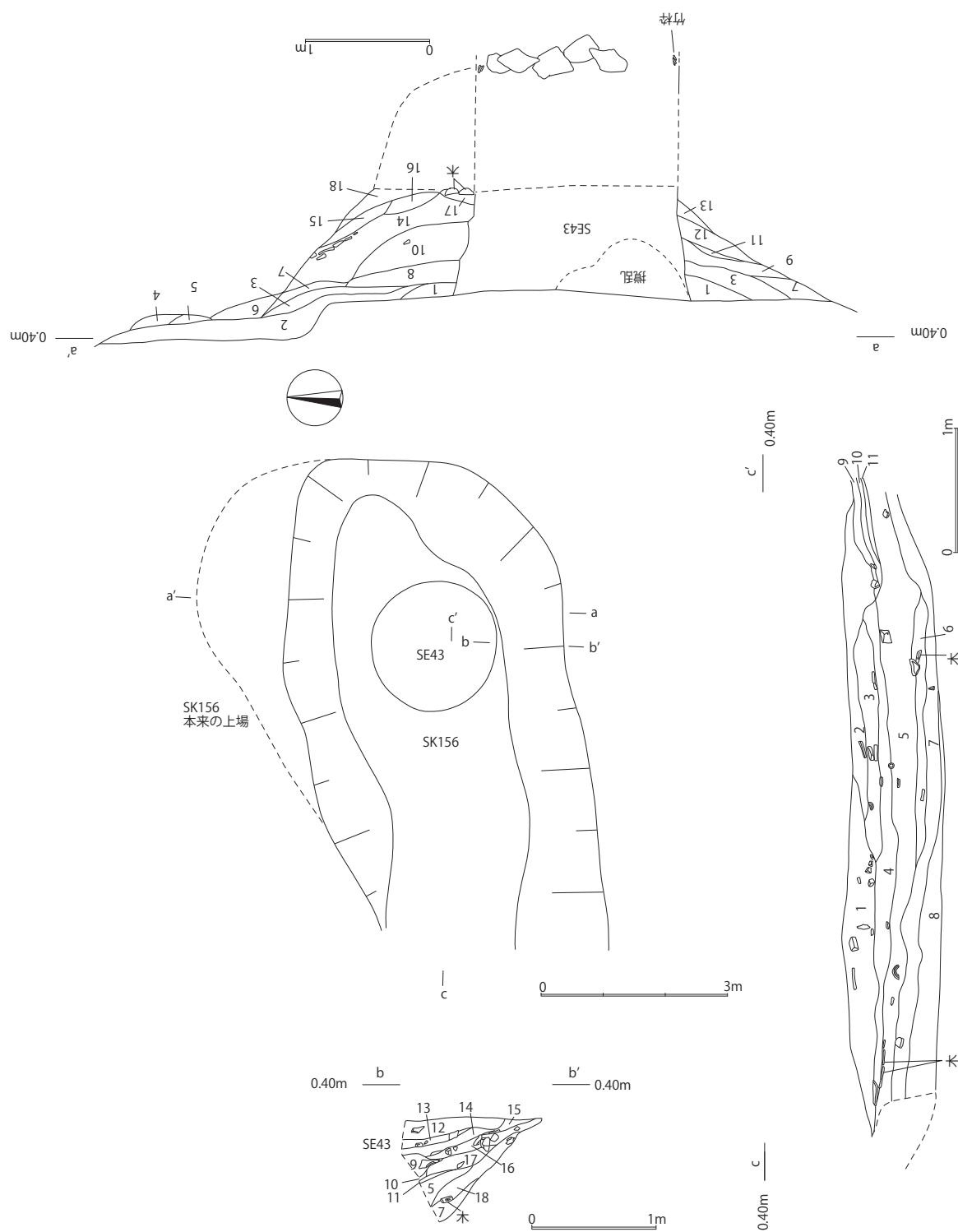


第35図 SK132 (縮尺 : 1/40)

第36図 SK148 (縮尺 : 1/40)



第37図 SP152・SP153・SK154 (縮尺 : 1/20)



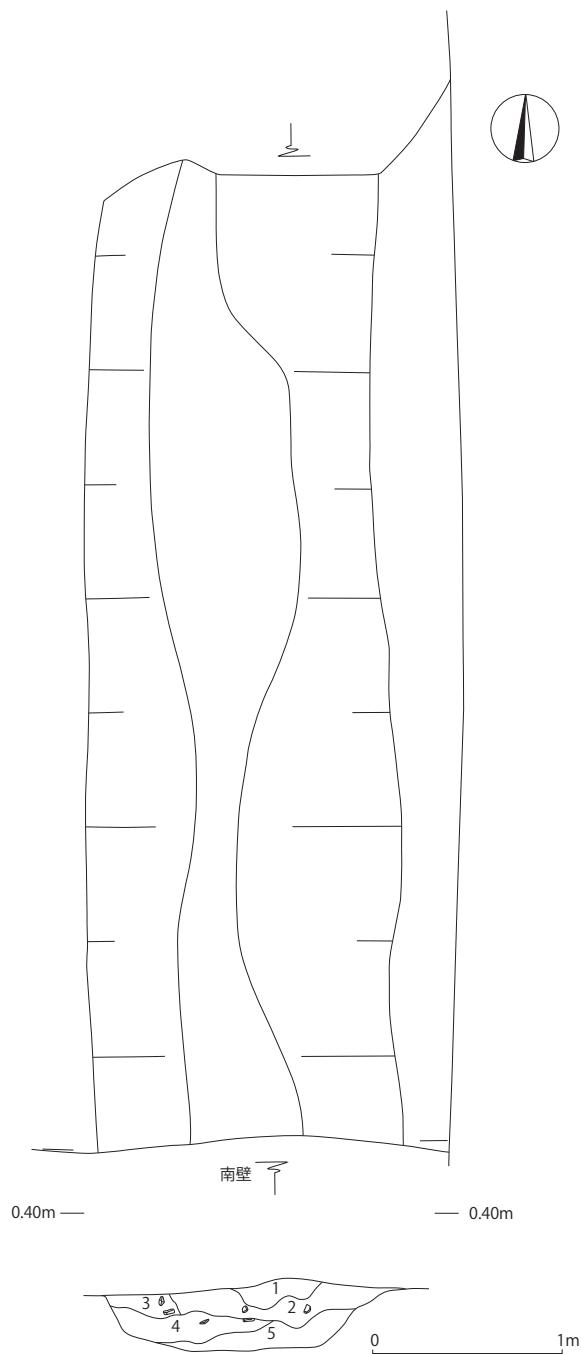
第38図 SK156 (平面図縮尺:1/100・断面図縮尺:1/50)

南北断面 a-a'

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト $\phi 5\sim 10$ mmの礫が 15%混入 炭化物が 10%混入
- 2 2.5Y5/1 黄灰色シルト $\phi 15\sim 20$ mm程度の礫が混入
- 3 10YR4/4 褐色シルト 2.5Y5/1 黄灰色シルトが 15%混入 $\phi 5\sim 10$ mm程度の風化礫を含む
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトが斑状に 30%混入 5Y4/2 灰オリーブ色砂がブロック状に 20%混入
- 5 7.5Y5/1 灰色シルト 鉄分を 20%含む
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト $\phi 5$ mm程度の焼土を 7%含む 炭化物を 5%含む
- 7 2.5Y4/3 オリーブ黒色シルト 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルトが筋状に 15%混入 炭化物が 5%混入
- 8 5Y3/2 オリーブ黒色シルト $\phi 5$ mm程度の礫を 10%含む 炭化物を 7%含む
- 9 5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト 炭化物を 15%含む
- 10 5Y4/1 灰色粘土質シルト 炭化物を 5%含む
- 11 8 層と同じ
- 12 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土 炭化物を 7%含む
- 13 7.5Y2/1 黒色シルト
- 14 7.5Y5/1 灰色粘土 $\phi 15$ mm程度の礫・瓦・陶器を 10%程度含む
- 15 10Y5/1 灰色シルト質粘土を含む 炭化物を 5%含む
- 16 5Y4/1 灰色粘土 有機物 10%含む
- 17 10Y4/1 灰色砂
- 18 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 有機物を 20%含む

南北断面 b-b'・東西断面 c-c'

- 1 5Y5/2 灰オリーブ色微細砂 5Y7/6 黄色シルト・5Y8/6 明赤渴色シルトと共に 3%含む 炭化物を 5%含む 植物遺体を 5%含む
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 微細砂が混入 炭化物を 2%含む 植物遺体を 3%含む
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 炭化物を 50%含む
- 4 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト 植物遺体を 2%含む
- 5 2.5Y3/2 オリーブ黒色シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトが 30%混入 植物遺体を 2%含む
- 6 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 5Y5/2 灰オリーブ色シルトが 30%混入 植物遺体を 2%含む
- 7 5Y6/1 灰色微細砂 5Y5/2 灰オリーブ色シルトが 20%混入
- 8 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト 5Y6/1 微細砂が 5%混入
- 9 5Y4/1 灰オリーブ黄色 5Y6/4 微細砂が 20%混入 炭化物を 30%含む 植物遺体を 5%含む
- 10 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト
- 11 10Y5/2 オリーブ灰色細砂
- 12 10YR5/4 にぶい黄橙色微細砂 炭化物を 2%含む
- 13 10YR6/1 褐灰色シルト 10YR6/2 灰黄褐色シルトが 40%混入 炭化物を 2%含む
- 14 7.5YR6/1 黄橙色シルト 5YR7/6 明黄色シルト・7.5Y6/1 黄灰色シルトがドット状に 30%混入 炭化物を 2%含む
- 15 10YR7/8 黄橙色シルト 炭化物を微量に含む
- 16 2.5Y6/2 黄灰色シルト 微細砂が混入 炭化物を 50%含む
- 17 2.5Y5/1 灰色シルト 5Y6/1 灰色微細砂が 10%混入
- 18 7.5Y6/1 灰色粗砂



- 1 7.5Y4/1 灰色粘土 5Y4/2 灰オリーブ色粘土が 15%混入 炭化物を微量に含む (別遺構埋土?)
- 2 7.5Y5/1 灰色シルト 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトが 30%混入 $\phi 3$ cm程度の礫・瓦を 2%含む
炭化物を微量に含む
- 3 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 10Y4/1 灰色シルトが 20%混入
10Y5/6 黄褐色シルト 1cm以下の点状に 2%含む $\phi 4$ cm程度の礫を含む 炭化物を 3%含む
- 4 10Y5/1 灰色微細砂 10YR1/3 にぶい黄橙色シルトが 10%混入 矿・瓦を 2%含む
- 5 10Y5/1 灰色細砂 10Y5/1 灰色シルトが 20%混入 炭化物を微量に含む

第39図 SD157 (縮尺: 1/40)

SK165（第42図）

調査区北東部（A-8・9）で検出された土坑。平面形は不明確で、残存長2.5m、残存幅1.0m、深さ0.1mを測る。断面形はやや不整な浅い皿形を呈する。遺物は出土しなかった。時期は18世紀代と思われる。

SD166（第15図）

調査区北東部（A-9）で検出された溝。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器、金属製品、石製品、土製品、木製品などが出土した。時期は18世紀後半～19世紀初頭である。なお、遺物はSD166南のものと一括して取り上げてしまったため、まとめて報告する。

SD166南（第43図、図版14）

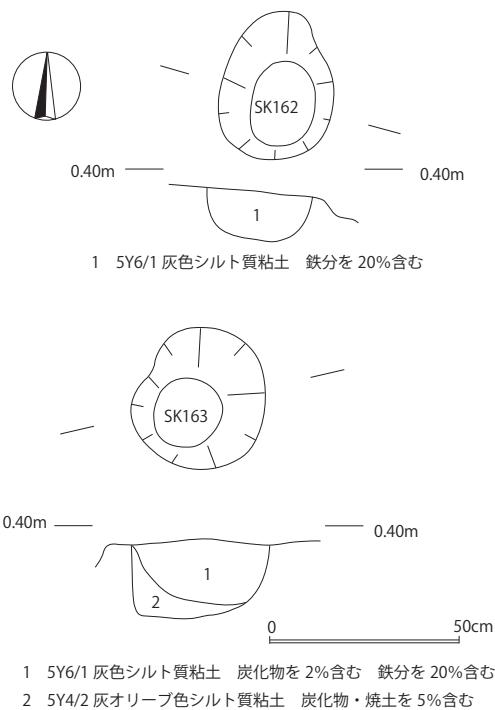
調査区北東部（A-8・9）で検出された溝。幅0.7～1.4m、深さ0.3mを測り、東西に4.7m分を検出した。断面形は丸底の椀形を呈する。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、土師質土器、鉄製品、土製品などが出土した。時期は18世紀代である。

SK178（第44図）

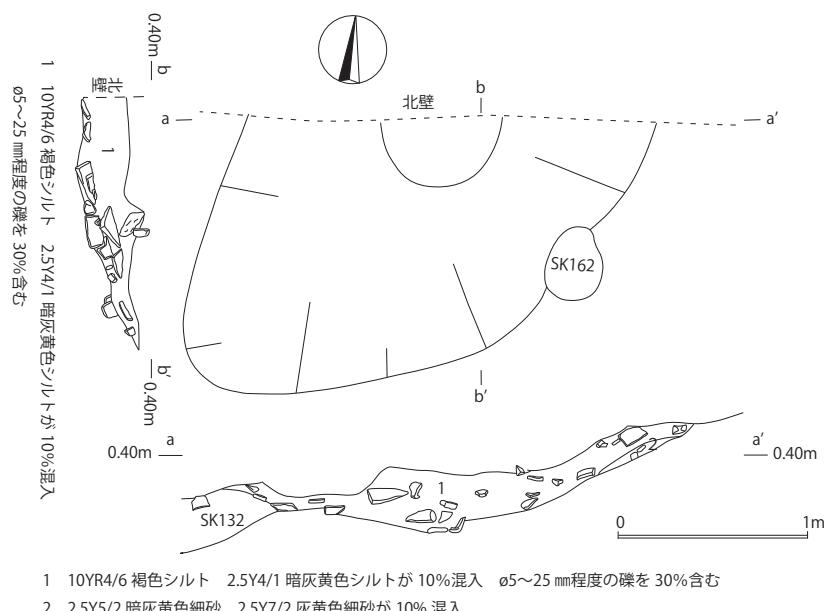
調査区北東部（A・B-9）で検出された土坑。平面形は不明確で、南北長0.5m、東西残存長1.1mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は少量の陶器が出土した。時期は18世紀代と思われる。

SK186（第45図、図版14）

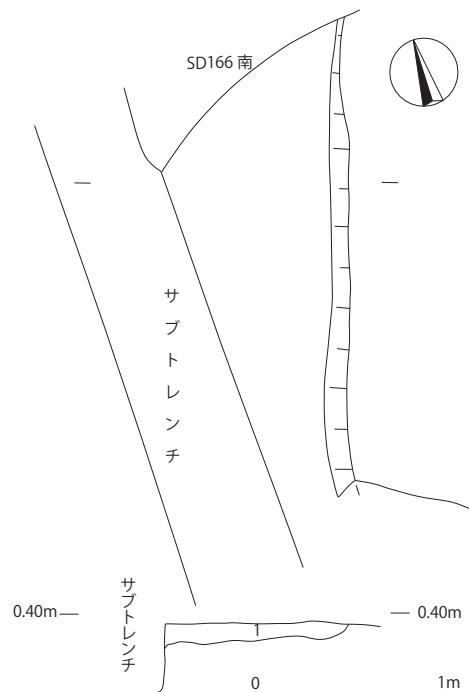
調査区南西部（C・D-3）で検出された土坑。平面形は方形で、残存長5.4m、残存幅3.6m、深さ1.0mを測る。断面形は丸底の皿形を呈する。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦二次加工品、金属製品、土製品、木製品、動物遺体などが出土した。時期は18世紀前半～19世紀初頭である。



第40図 SK162・SK163（縮尺：1/20）

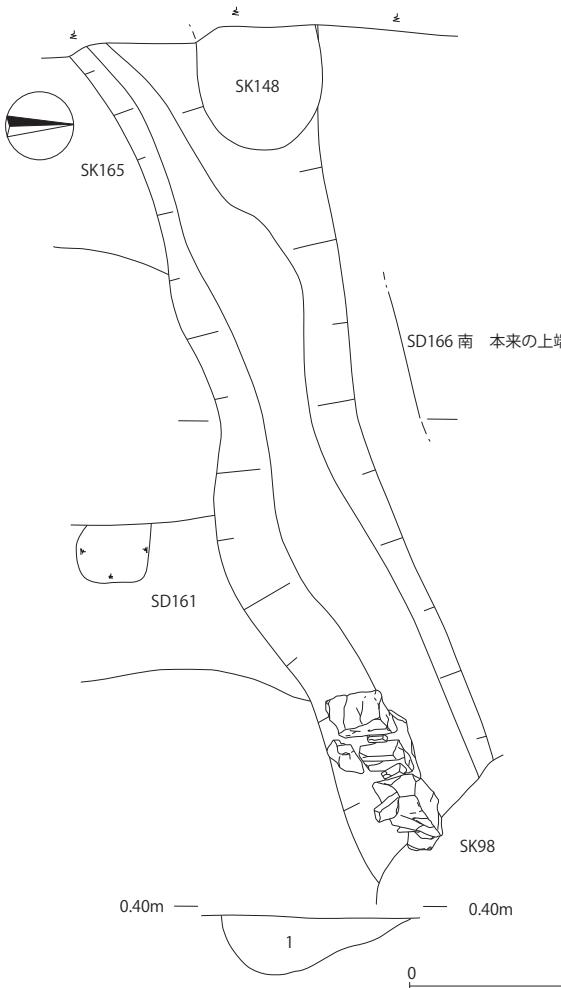


第41図 SK164（縮尺：1/40）



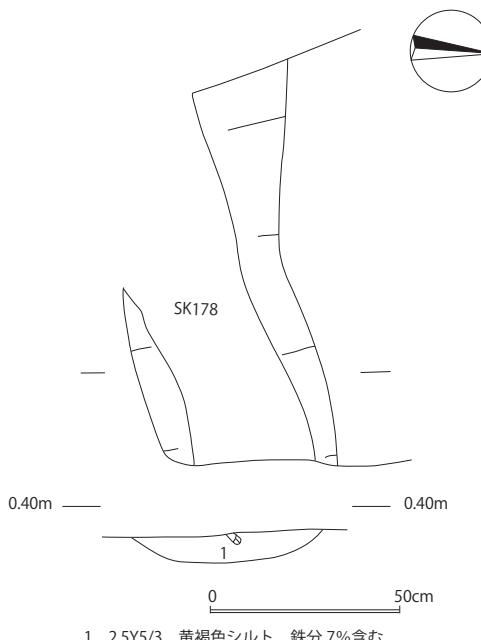
1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
10YR6/6 明黄褐色固く締ったシルトがブロック状に 5%混入
ø20 mm程度の礫を 10%含む 炭化物を 1%含む

第42図 SK165 (縮尺 : 1/40)



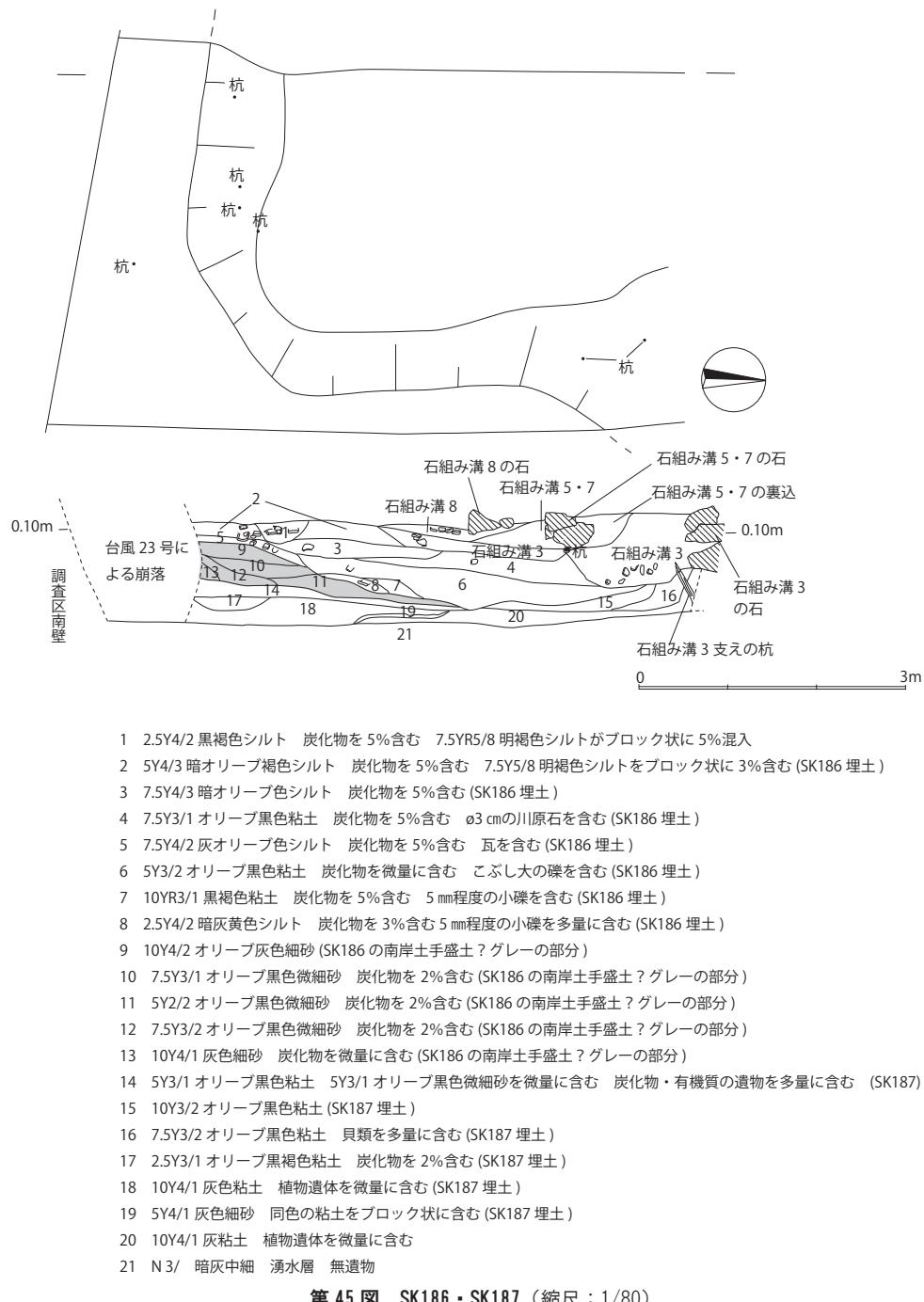
1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトが 20%混入 ø5 mm程度の小石を 10%含む
炭化物を 15%含む 烧土を 10%含む

第43図 SD166 南 (縮尺 : 1/40)



1 2.5Y5/3 黄褐色シルト 鉄分 7%含む

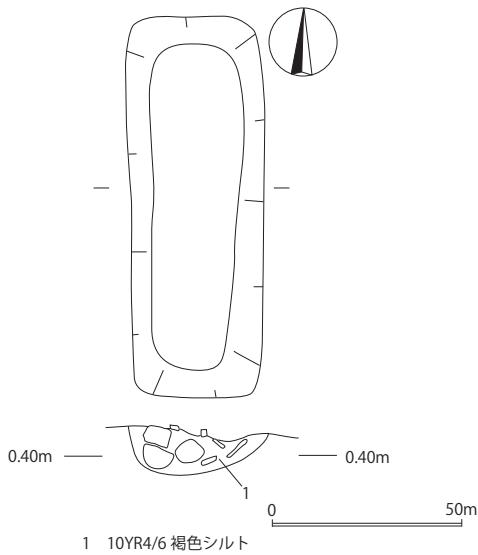
第44図 SK178 (縮尺 : 1/20)



第45図 SK186・SK187 (縮尺: 1/80)

SK187 (第45図)

調査区南西部 (C・D-3) で SK186 の下部で検出された土坑。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、木製品、動植物遺体などが出土した。時期は 18世紀代である。



第46図 SK92(縮尺:1/20)

安富家屋敷地内

SK92(第46図)

調査区北東部(A-8・9)で検出された土坑。平面形は長方形で、長さ1.0m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。時期は18世紀代と思われる。

SK98(第47図、図版15)

調査区北東部(A-9・10)で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、残存長3.8m、残存幅3.1m、深さ1.4mを測る。遺物は、肥前系陶磁器、土師質土器、瓦質土器が出土した。時期は18世紀代である。

SK109(第48図、図版15)

調査区北東部(B-10)で検出された土坑。平面形は楕円形で、直径0.5m、深さ0.2mを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、土師質土器、透明釉土器などが出土した。時期は18世紀代である。

SK110(第49図、図版15)

調査区北東部(A-10)で検出された土坑。平面形は不整な楕円形か。幅1.1m、深さ0.2mを測る。断面形は丸底の椀状を呈する。遺物は、肥前系磁器、土師質土器、石製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK111(第49図、図版15)

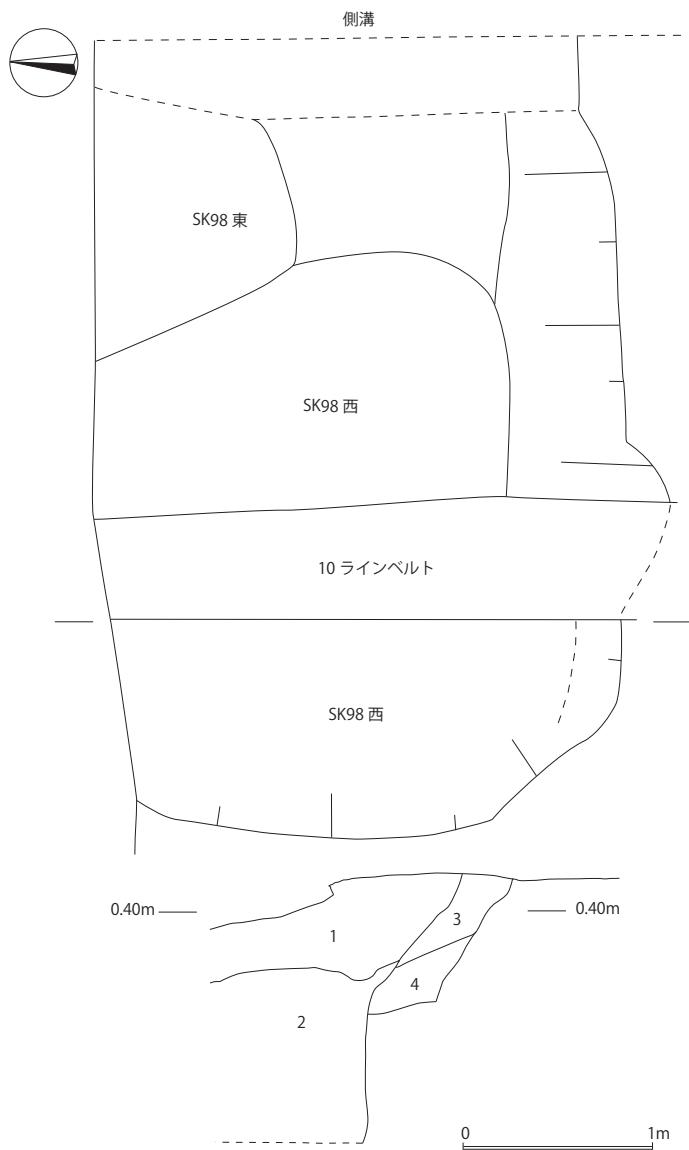
調査区北東部(A-10)で検出された土坑。平面形は不整な楕円形か。幅0.8m、深さ0.2mを測る。断面形は二段掘り状で底面は丸みを帯びる。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、鉄製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK122(第50図)

調査区北東部(A・B-10)で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.5m、深さ0.1mを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は鉄製品が出土した。時期は18世紀代と思われる。

SK123(第50図)

調査区北東部(A-10)で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.7m、短径0.6m、深さ0.06m



- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 2.5Y7/3 浅黄色粘土を 15% 含む $\phi 5$ mm程度の礫を 7% 含む 炭化物を 2% 含む (SK98 西)
- 2 5Y4/1 灰色シルト 7.5Y6/1 灰色粘土シルトを 10% 含む 鉄分を 5% 含む 炭化物を 2% 含む (SK98 西)
- 3 2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂 2.5Y7/2 灰黄色粘土を 7% 含む $\phi 1$ cm程度の礫を 5% 含む 炭化物を 2% 含む (SK98?)
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 2.5Y6/1 黄灰色シルトを 7% 含む $\phi 1$ cm程度の礫を 2% 含む 炭化物を 3% 含む (SK98?)

第47図 SK98 (縮尺: 1/40)

を測る。断面形は浅い皿形を呈する。遺物は、少量の陶器が出土した。時期は18世紀代である。

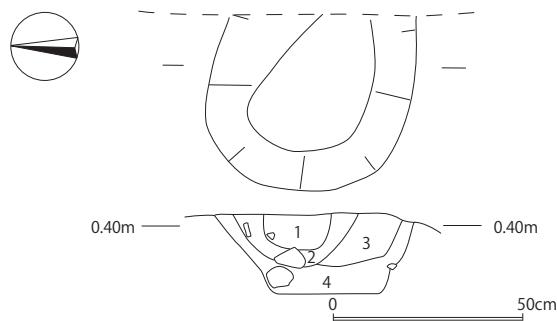
SK131 (第51図)

調査区北東部(A・B-10)で検出された土坑。平面形は不整形で、南北で長さ1.7m、深さ0.2mを測る。

断面形は箱形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器が出土した。時期は18世紀代である。

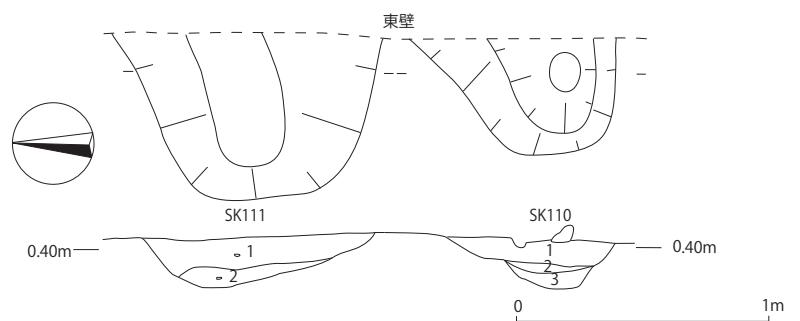
SD182 (第52図、図版15)

調査区北東部(A・B-8～10)で検出された溝。幅1.4～2.0m、深さ0.5mを測り、東西に8.3m分、南北に4.9m分検出した。断面形は東ベルト付近では、底面付近がやや丸みを帯びた椀形を呈し、南壁が上面に行くにつれ、外反する形状をなす。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、金属製品、石製品が出土した。時期は18世紀代である。



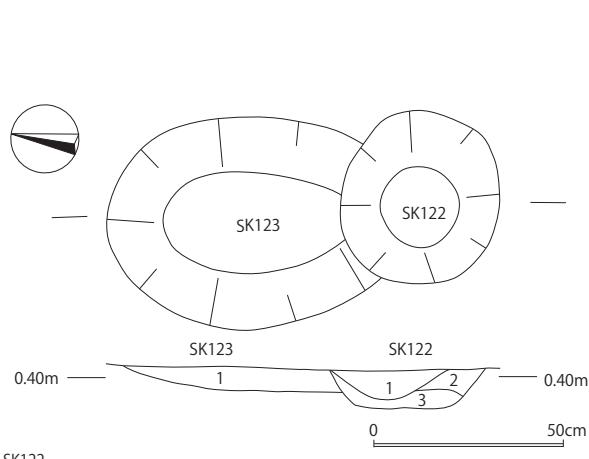
- 1 10Y4/1 灰色シルト $\phi 5$ mm程度の礫を 5%含む 炭化物を 5%含む
- 2 5Y5/2 灰オリーブ色シルト $\phi 5$ mm程度の礫を 5% 鉄分を 2%含む
- 3 5Y4/3 暗オリーブ色シルト $\phi 5$ mm程度の礫を 5%含む 炭化物を 5%含む
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 炭化物を 5%含む

第48図 SK109 (縮尺 : 1/20)



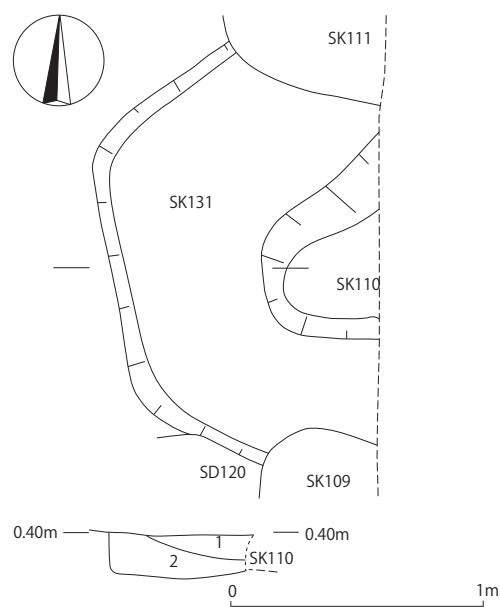
- SK110
- 1 5Y5/2 灰オリーブ色シルト $\phi 5$ mm程度の礫を 10%含む 炭化物を 10%含む 鉄分を 30%含む
 - 2 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 5Y6/6 オリーブ色シルトが斑状に混入 炭化物を 5%含む 鉄分を 30%含む
 - 3 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト 7.5Y6/3 オリーブ黄色シルトが斑状に混入 炭化物を 1%含む 鉄分を 30%含む
- SK111
- 1 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 5Y6/2 灰オリーブ色シルト・5Y6/3 オリーブ黄色シルトが斑状に 20%混入 炭化物を 7%含む 鉄分を 25%含む
 - 2 7.5Y5/1 灰色シルト 5Y2 灰オリーブ色シルトが斑状に 30%混入 炭化物を 5%含む 鉄分を 20%含む

第49図 SK110・SK111 (縮尺 : 1/30)



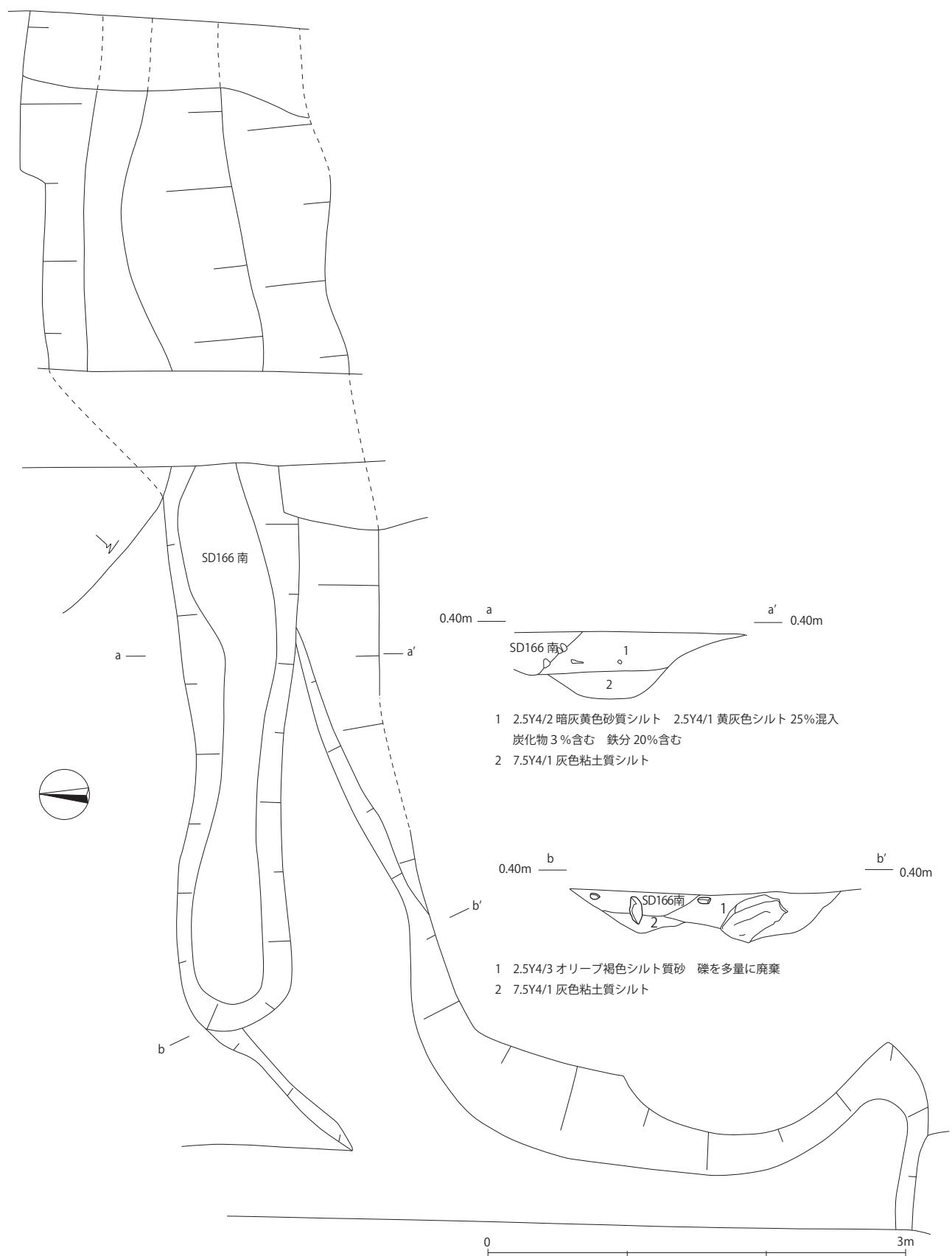
- SK122
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 5Y6/1 灰色シルト・2.5Y6/2 黄灰色シルトが共に 10%混入 炭化物を 3%含む
 - 2 2.5Y5/3 黄褐色シルト 5Y6/1 灰色シルトが 10%混入
 - 3 5Y6/1 灰色シルト 鉄分を 10%含む
- SK123
- 1 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトが斑状に混入 $\phi 5$ mm程度の礫を 5%含む 炭化物を 7%含む 烧土を 5%含む

第50図 SK122・SK123 (縮尺 : 1/20)

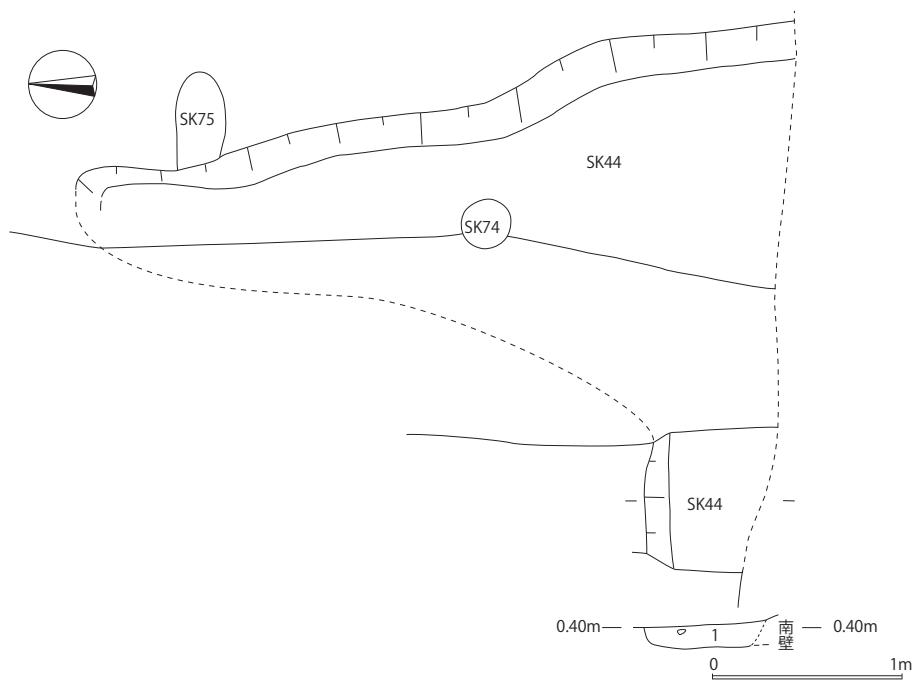


- 1 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 鉄分を 20%含む
- 2 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト 鉄分を 20%含む

第51図 SK131 (縮尺 : 1/30)



第52図 SD182 (縮尺:1/40)



1 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト 5YR4/4 にぶい赤褐色シルトを 10% 含む
ø5 cm の石を 1% 含む 炭化物を 3% 含む

第 53 図 SK44 (縮尺 : 1/40)

太田家屋敷地内

SK44 (第 53 図、図版 16)

調査区南東部 (D-8・9) で検出された土坑。平面形は不整形で、南北で検出された長さは 3.8 m、東西の残存値は 2.9 m、深さは 0.1 m を測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器、金属製品、土製品などが出土した。時期は 18 世紀後半である。

SK45 (第 54 図、図版 16)

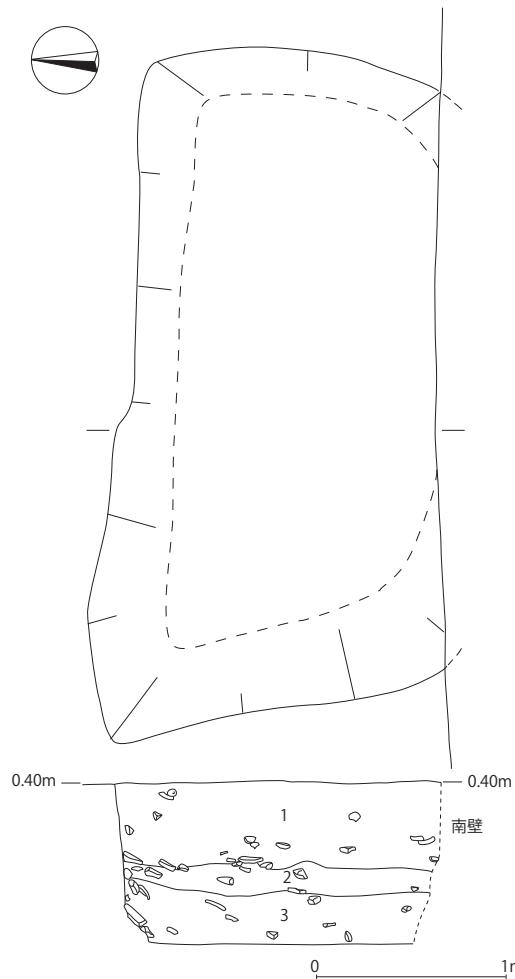
調査区南東部 (D-7・8) で検出された土坑。平面形は長方形で、長さ 3.6 m、残存幅 1.9 m、深さ 0.9 m を測る。断面形は箱形を呈する。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、瓦質土器、金属製品、瓦二次加工品、石製品、木製品、植物遺体などが出土した。時期は 18 世紀後半～19 世紀初頭である。

SK46 (第 55 図)

調査区南東部 (D-7) で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、長さ 1.2 m、幅 0.9 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は箱形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、土師質土器、鉄製品などが出土した。時期は 18 世紀後半～19 世紀初頭である。

SK47 (第 56 図、図版 16)

調査区南東部 (C・D-9) で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、長さ 1.3 m、幅 1.1 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、土師質土器、鉄製品、瓦二次加工品、土製品などが出土した。時期は 18 世紀後半である。



- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 6.5YR4/6 褐色シルトが 40%混入 ϕ 5 mm程度の小石を 20%含む
 ϕ 20~40 mm程度の礫を 15%含む 炭化物を 35%含む
 2 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト 炭化物を 15%含む 有機物(木類)を 7%含む
 3 5Y2/1 黒色シルト質粘土 5Y3/1 オリーブ黒色シルトがブロック状に 5%混入 有機物を 5%含む

第 54 図 SK45 (縮尺 : 1/40)

SK49（第 57 図）

調査区南東部（C-8）で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径 0.8 m、短径 0.6 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は浅い皿形を呈する。遺物は、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器などが出土した。時期は 18 世紀代である。

SK50（第 57 図）

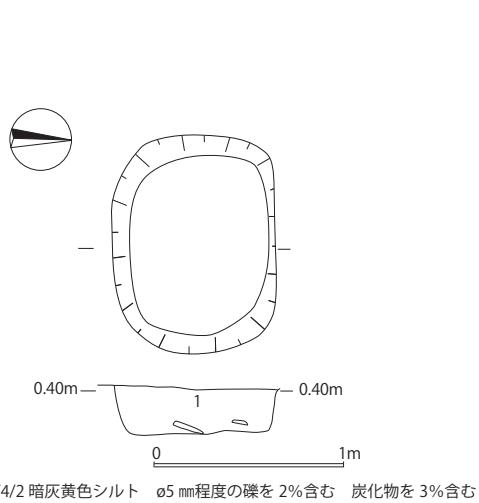
調査区南東部（C-8）で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.6 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は浅い丸底の皿形を呈する。遺物は土師質土器が出土した。時期は 18 世紀代と思われる。

SK51（第 57 図、図版 16）

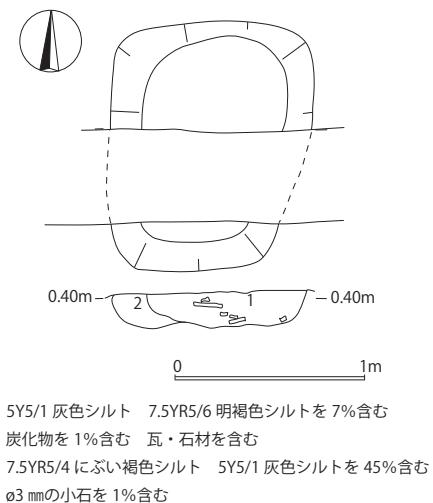
調査区南東部（C-8）で検出された土坑。平面形は円形で、直径 2.0 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は底面に段を有する皿形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、土師質土器、瓦質土器、鉄製品、石製品などが出土した。時期は 18 世紀代である。

SP52（第 58 図）

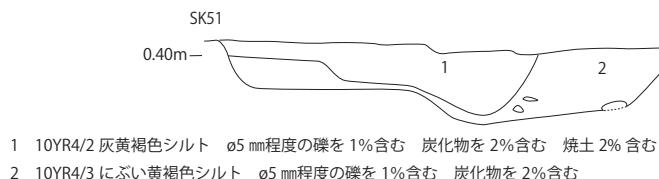
調査区南東部（C-8）で検出された柱穴。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.4 m 以上を測る。



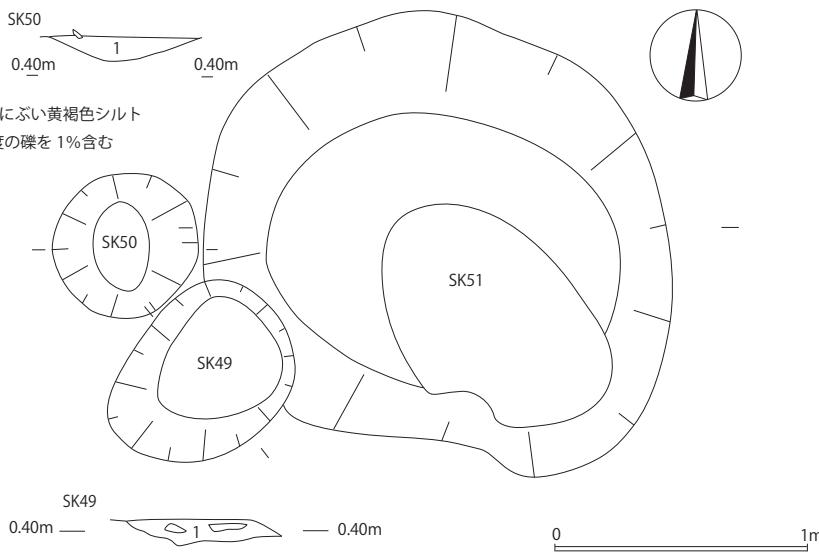
第55図 SK46 (縮尺: 1/40)



第56図 SK47 (縮尺: 1/40)



SK51
0.40m—
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト $\varnothing 5\text{ mm}$ 程度の礫を 1%含む 炭化物を 2%含む 焼土 2%含む
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト $\varnothing 5\text{ mm}$ 程度の礫を 1%含む 炭化物を 2%含む



第57図 SK49・SK50・SK51 (縮尺: 1/30)

断面形は箱形を呈する。柱根と礎板と考えられる石材が検出された。遺物は、肥前系磁器、備前系陶器、丹波系陶器、土師質土器、鉄製品などが出土した。時期は18世紀代である。

SK53 (第58図)

調査区南東部(C-8)で検出された、SP52と対になる土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.2mを測る。断面形は箱形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、土師質土器、瓦二次加工品などが出土した。時期は18世紀代である。

SK54 (第 59 図)

調査区南東部 (C-7) で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ 1.0 m、幅 0.9 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。時期は 18 世紀代と思われる。

SK63 (第 60 図)

調査区南東部 (C-8) で検出された土坑。平面形は円形になると思われるが、その場合の直径は推定で 0.5 m、深さは 0.2 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は出土していない。時期は 18 世紀代と思われる。

SK64 (第 61 図)

調査区南部 (D-5・6) で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.6 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は、少量の陶器、土師質土器、土製品が出土した。時期は 18 世紀代である。

SP65 (第 62 図)

調査区南東部 (D-7) で検出された柱穴。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.05 m を測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は出土していない。時期は 18 世紀代と思われる。

SP66 (第 62 図)

調査区南東部 (D-7) で検出された SP65 と対になる柱穴。平面形は円形で、直径 0.4 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は丸底の椀形を呈する。遺物は少量の陶器が出土した。時期は 18 世紀代と思われる。

SK67 (第 63 図)

調査区南部 (D-6) で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径 0.6 m、短径 0.4 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は底面が丸みを帯びた皿形を呈する。遺物は、肥前系磁器、土師質土器が出土した。時期は 18 世紀代である。

SK68 (第 64 図)

調査区南部 (D-6) で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は出土していない。時期は 18 世紀代と思われる。

SE69 (第 65 図)

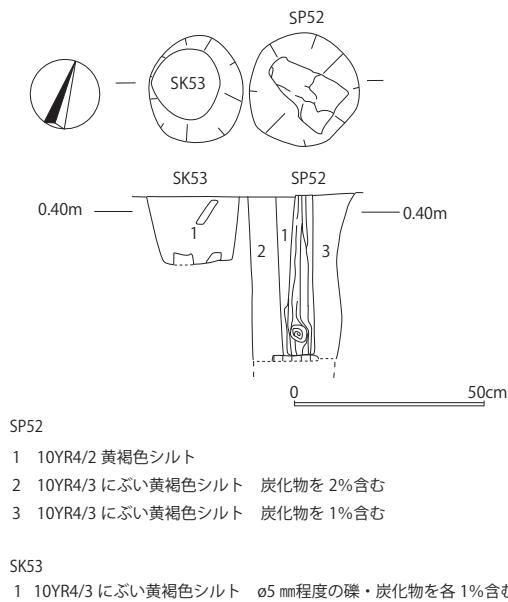
調査区南東部 (C-7) で検出された井戸。平面形は円形で、直径 2.0 m、深さ 0.6 m 以上を測る。断面形は逆凸形を呈する。竹筒が底面に突き刺さった状態で検出された。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、土師質土器、瓦質土器、鉄製品などが出土した。時期は 18 世紀後半～19 世紀初頭である。

SK70 (第 66 図)

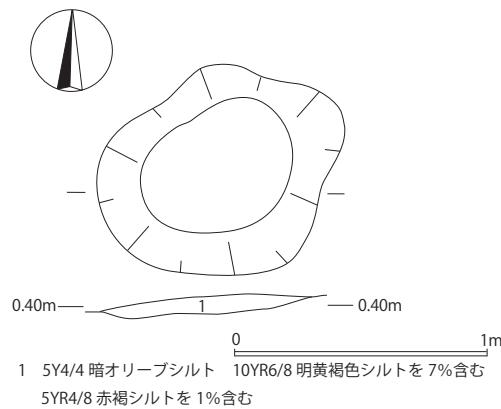
調査区南部 (D-6) で検出された土坑。平面形は橢円形で、直径 1.0 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は、二段掘り状を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、大谷焼、土師質土器、鉄製品などが出土した。時期は 18 世紀後半～19 世紀初頭である。

SK71 (第 67 図、図版 17)

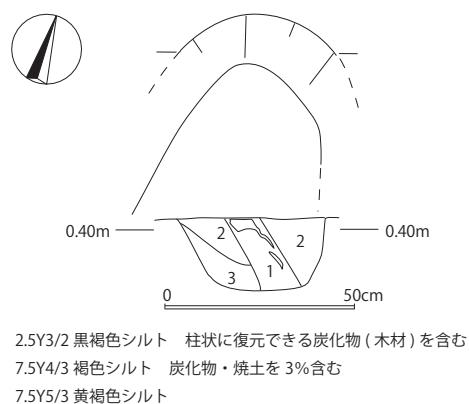
調査区南部 (D-5) で検出された土坑。一部が搅乱により破壊されているが、平面形は長方形で、長さ 2.7 m、幅 0.9 m、深さ 0.5 m を測る。断面形は箱形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、土師質土器、瓦二次加工品、金属製品、木製品などが出土した。時期



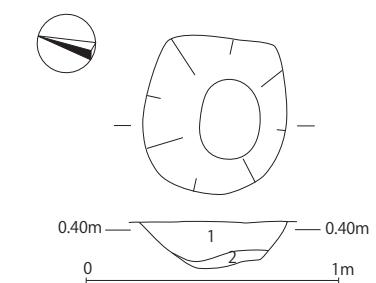
第 58 図 SP52・SK53 (縮尺 : 1/20)



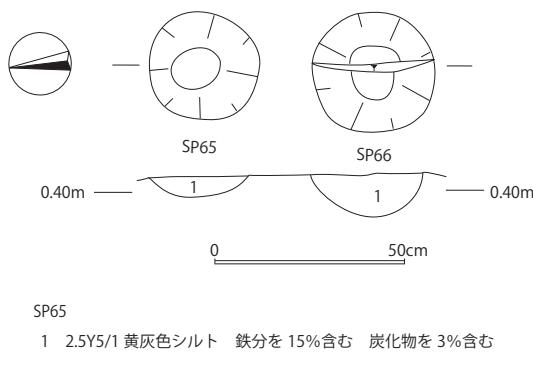
第 59 図 SK54 (縮尺 : 1/30)



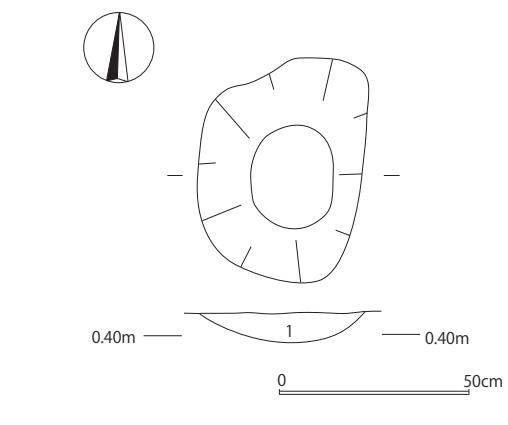
第 60 図 SK63 (縮尺 : 1/20)



第 61 図 SK64 (縮尺 : 1/30)



第 62 図 SP65・SP66 (縮尺 : 1/20)



第 63 図 SK67 (縮尺 : 1/20)

は18世紀代である。

SK72（第67図）

調査区南部（D-5）で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径0.6m、短径0.4m、深さ0.1mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器が出土した。時期は18世紀代である。

SK74（第68図）

調査区南東部（D-9）で検出された柱穴の可能性のある土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.1mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

SK75（第69図）

調査区南東部（D-9）で検出された土坑。平面形は橢円形で、残存長0.5m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

SK77（第70図）

調査区南東部（D-9）で検出された柱穴の可能性のある土坑。平面形は橢円形で、長径0.4m以上、短径0.3m、深さ0.1mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は京・信楽系陶器が出土した。時期は18世紀代と思われる。

SK78（第71図、図版17）

調査区南東部（D-9）で検出された土坑。平面形は円形で、直径3.6m、深さ0.7mを測る。断面形は部分的にやや凹凸があるが、皿形を呈する。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、土師質土器、鉄製品、ガラス製品、土製品、木製品などが出土した。時期は18世紀後半～19世紀初頭である。

SK79（第72図、図版17・18）

調査区南東部（D-10）で検出された土坑。平面形は方形で、南北1.6m、東西残存値1.8m、深さ0.6m以上を測る。断面形は椀形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、土師質土器、瓦質土器、鉄製品、石製品、木製品などが出土した。時期は18世紀後半～19世紀初頭である。

SK80（第73図、図版18）

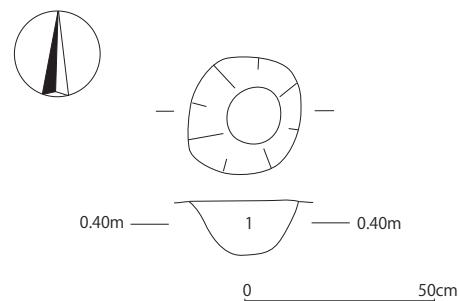
調査区南東部（D-10）で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径1.2m以上、短径1.0m、深さ0.2mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、鉄製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK81（第74図、図版18・19）

調査区南東部（C-9）で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径3.5m、短径3.0m、深さ0.5mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器などが出土した。時期は18世紀代である。

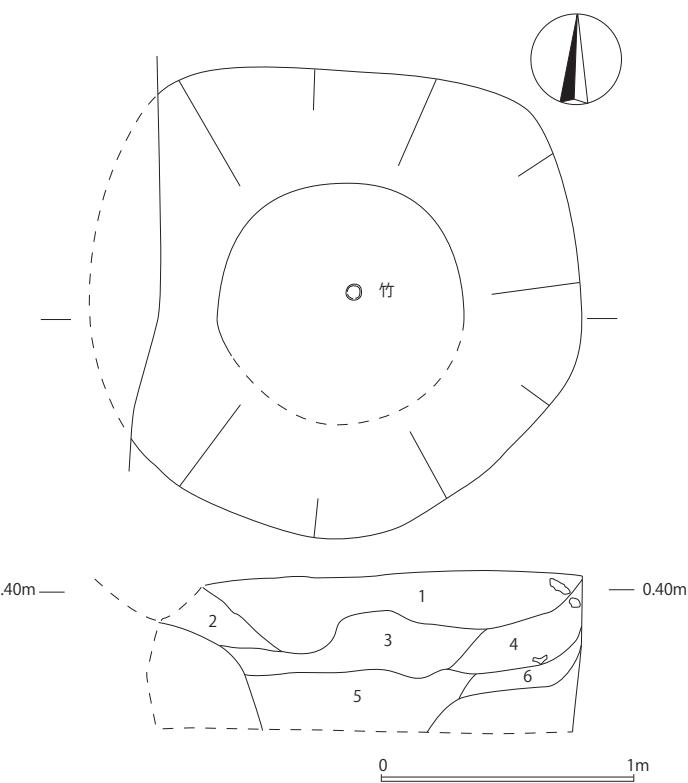
SP82（第75図）

調査区南東部（D-9）で検出された柱穴。平面形は円形、あるいは橢円形と推定され、南北0.3m、深さ0.2mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は京・信楽系陶器が出土した。時期は18世紀代と思われる。



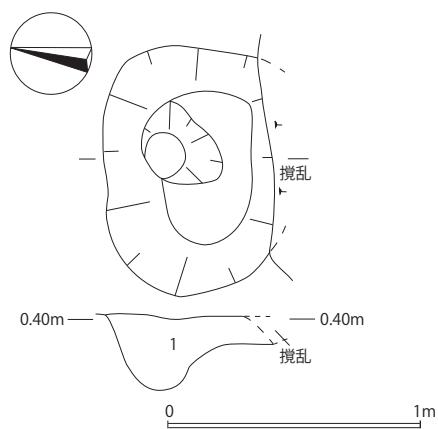
1 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 炭化物を 1% 含む

第 64 図 SK68 (縮尺 : 1/20)

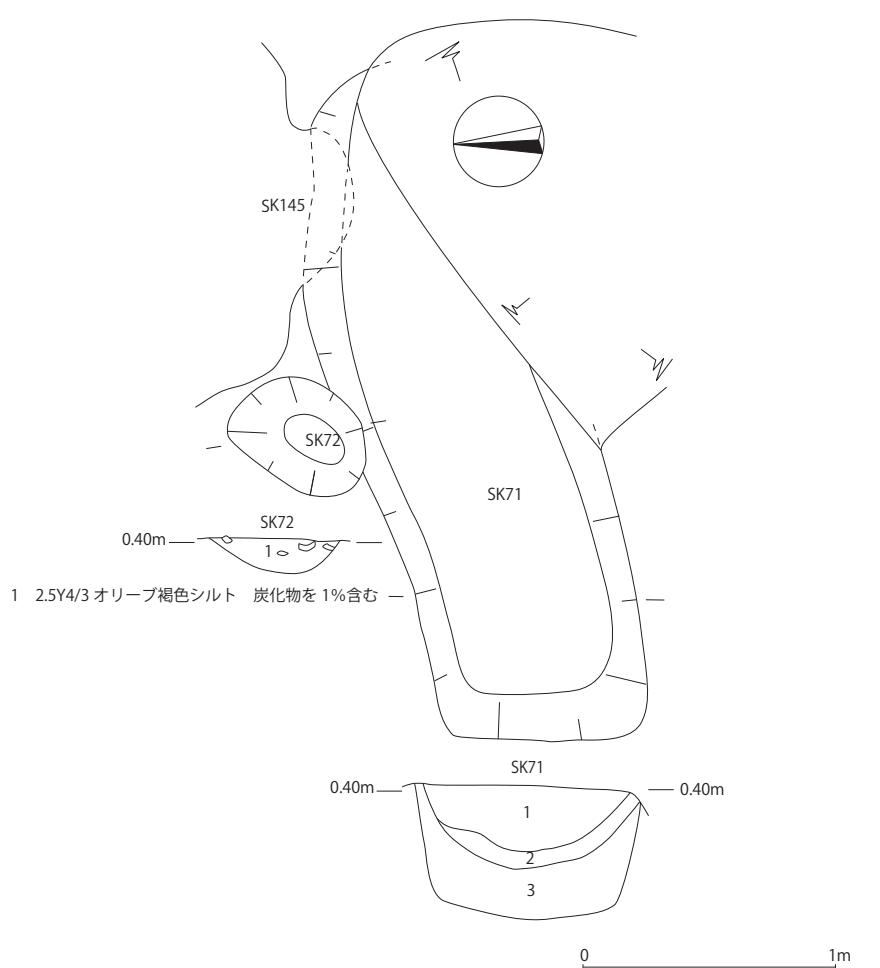


- 1 10Y6/1 灰色シルト 10YR3/3 暗褐色シルトが斑状に 30% 混入 $\phi 5$ mm程度の礫を 7% 含む
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 10Y5/1 灰色シルト(塊)が混入 10YR3/3 暗褐色シルトが斑状に 50% 混入 $\phi 5$ mm程度の礫を 7% 含む
- 3 7.5Y5/1 灰色シルト 10YR3/3 暗褐色シルトが斑状に 50% 混入 $\phi 5$ mm程度の礫を 7% 含む
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 7.5Y5/1 灰色シルトが 20% 混入 10YR3/3 暗褐色シルトが斑状に 50% 混入 $\phi 5$ mm程度の礫を 7% 含む
- 5 10Y4/1 灰色シルト $\phi 5$ mm程度の礫を 7% 含む
- 6 7.5Y5/1 灰色シルト 10YR3/3 暗褐色シルトが斑状に 20% 混入 $\phi 5$ mm程度の礫を 7% 含む

第 65 図 SE69 (縮尺 : 1/30)

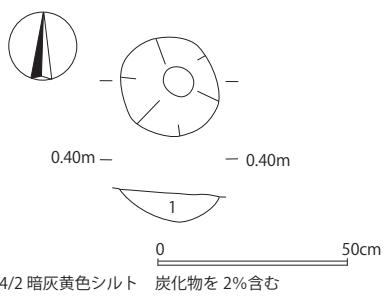


第66図 SK70 (縮尺: 1/30)

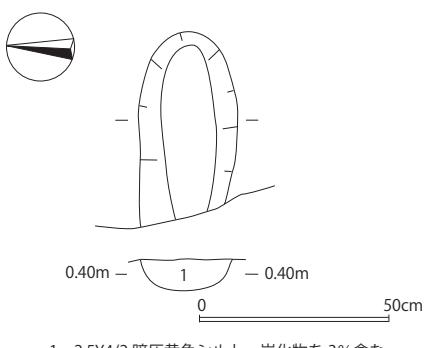


- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 2.5Y6/3 にぶい黄色シルトが 15%・2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトが 5% 斑状に混入
炭化物を 3% 含む (上層)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 炭化物を 50% 含む (下層)
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 細砂を 5% 含む 炭化物を 3% 含む (下層)

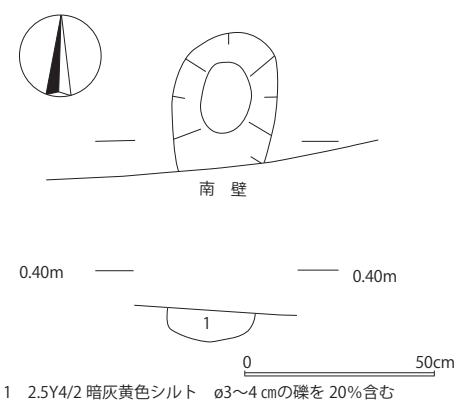
第67図 SK71・SK72 (縮尺: 1/30)



第68図 SK74（縮尺：1/20）



第69図 SK75（縮尺：1/20）



第70図 SK77（縮尺：1/20）

する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器などが出土した。時期は18世紀代である。

SK93（第80図）

調査区南東部（D-9）で検出された土坑。平面形は隅丸長方形と推定される。東西長0.4m、深さ0.25mを測る。断面形は丸底の椀形を呈する。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

SK94（第81図）

調査区南東部（C・D-10）で検出された土坑。平面形は隅丸方形あるいは隅丸長方形と推定され、南北残存値0.5m、東西1.0m、深さ0.2mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、肥前系磁器、京・信楽系陶器、土師質土器などが出土した。時期は18世紀代である。

SK83（第76図、図版19）

調査区南東部（D-10）で検出された土坑。結晶片岩の石材が円形に配列されている。土坑の形状は方形で、南北0.7m以上、東西0.8m、深さ0.4mを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、鉄製品が出土した。時期は18世紀代である。

SP84（第77図）

調査区南東部（D-8）で検出された柱穴。柱根と礎板と考えられる石材が残存している。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.4mを測る。断面形は箱形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器が出土した。時期は18世紀代である。

SK85（第77図）

調査区南東部（D-8）で検出されたSP84と対になる土坑。平面形は円形で、直径0.2m、深さ0.1mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

SK88（第78図）

調査区南部（D-5）で検出された土坑。平面形は不整形で、残存長0.9m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。断面形は浅い皿形を呈する。遺物は土師質土器が出土した。時期は18世紀代と思われる。

SK89（第78図、図版18）

調査区南部（C・D-5）で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、残存長1.2m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。断面形は尖底の椀形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、石製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK90（第79図）

調査区南東部（D-9）で検出された土坑。平面形は長方形で、長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。断面形は椀形を呈

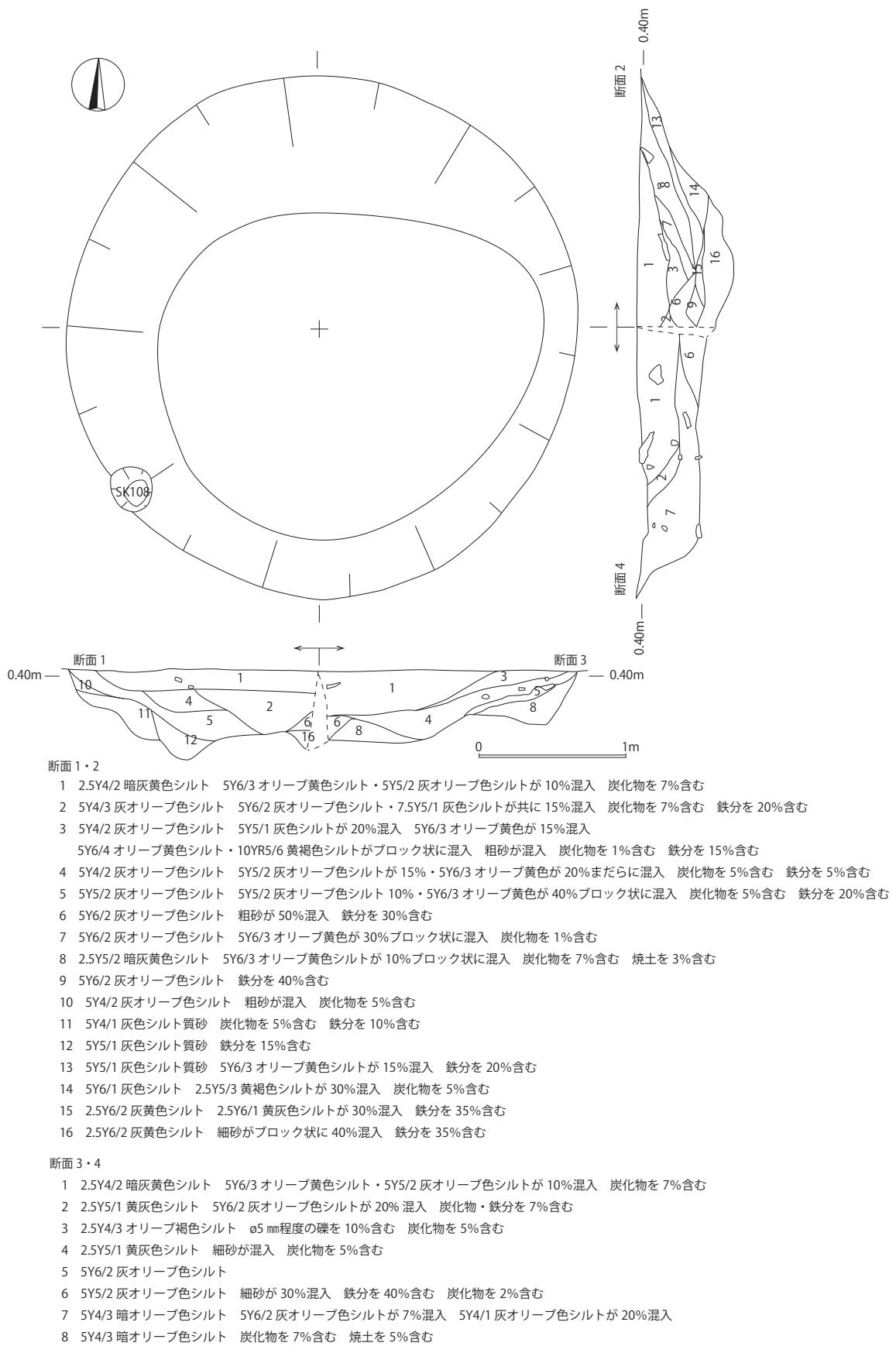
する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器などが出土した。時期は18世紀代である。

SK93（第80図）

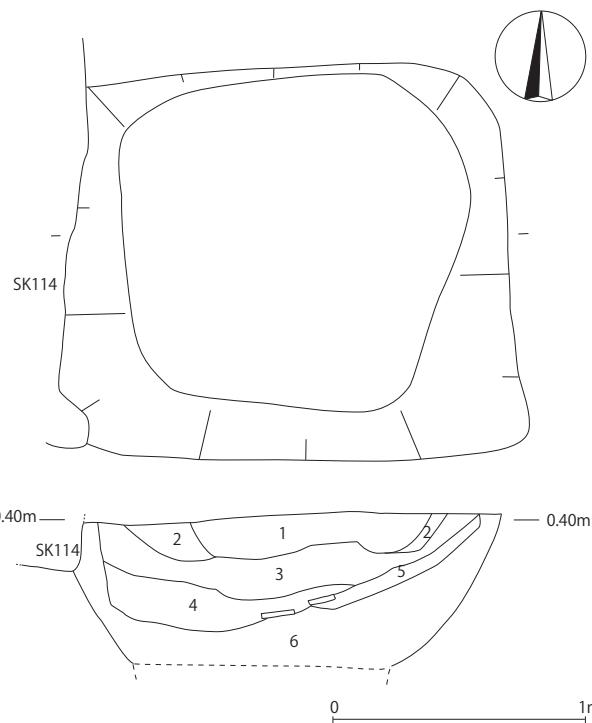
調査区南東部（D-9）で検出された土坑。平面形は隅丸長方形と推定される。東西長0.4m、深さ0.25mを測る。断面形は丸底の椀形を呈する。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

SK94（第81図）

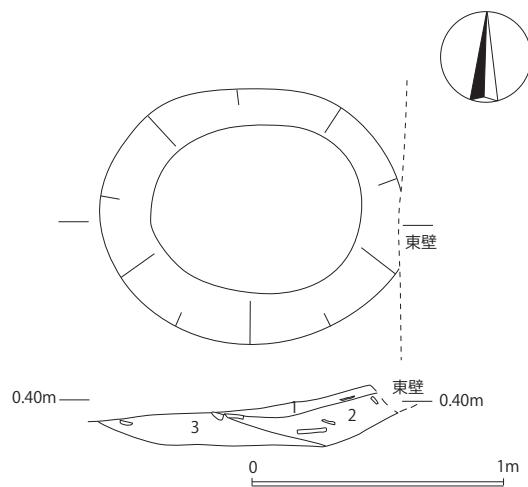
調査区南東部（C・D-10）で検出された土坑。平面形は隅丸方形あるいは隅丸長方形と推定され、南北残存値0.5m、東西1.0m、深さ0.2mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、肥前系磁器、京・信楽系陶器、土師質土器などが出土した。時期は18世紀代である。



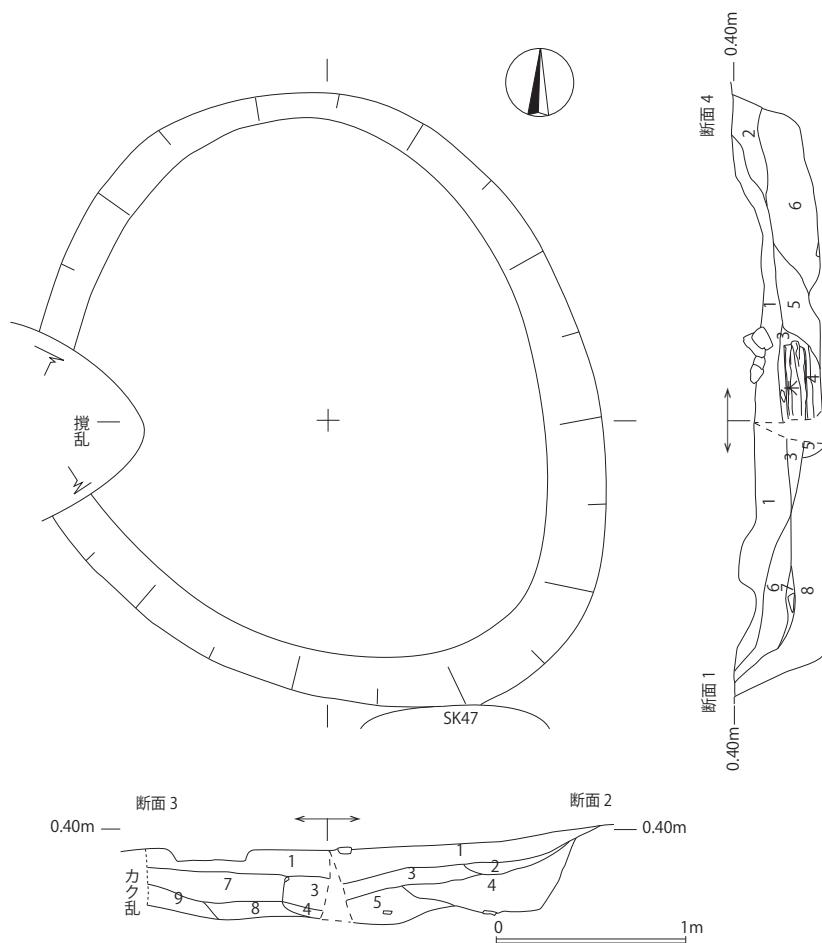
第71図 SK78 (縮尺: 1/40)



第72図 SK79（縮尺：1/30）



第73図 SK80（縮尺：1/30）



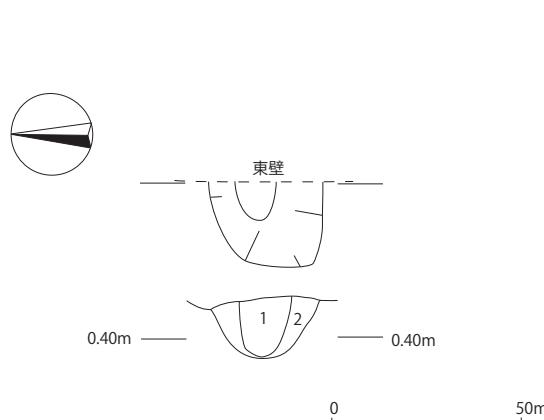
断面 1・2

- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質砂 5Y5/2 灰オリーブ色シルトが 20%混入 5Y4/4 暗オリーブ色シルトが 15%混入
炭化物を 5%含む 鉄分を 10%含む
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂 5Y6/2 灰オリーブ色シルト 30%が混入 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 7%が混入
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質砂 5Y5/1 灰色シルト 35% 5Y5/2 灰オリーブ色シルトが 10%混入 炭化物を 7%含む
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂 5Y5/1 灰色シルトが 30%混入 炭化物を 7%含む 鉄分を 40%含む
- 5 5Y4/2 灰オリーブ色シルト質砂 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質粘土が 20%混入
- 6 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質砂 5Y6/1 灰色シルトが 20%混入 炭化物を 5%含む 鉄分を 5%含む
- 7 5Y6/1 灰色シルト質砂 2.5Y5/3 黄褐色シルト質砂が 10%混入
- 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質砂 5Y6/1 灰色シルトが 20%混入 鉄分を 20%含む

断面 3・4

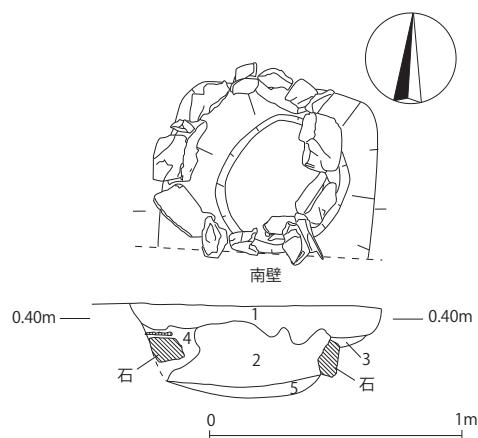
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質砂 5Y5/2 灰オリーブ色シルトが 20%混入 5Y4/4 暗オリーブシルトが 15%混入
炭化物を 5%含む 鉄分を 10%含む
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質砂 5Y5/2 灰オリーブ色シルトが 10%混入 鉄分を 10%含む
- 3 10Y4/1 灰色シルト
- 4 10Y5/1 灰色シルト質砂 鉄分を 15%含む
- 5 5Y5/1 灰色シルト質砂 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質砂が 40%混入 炭化物を 10%含む 鉄分を 10%含む
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂が 25%混入 2.5Y5/2 シルト質砂が 25%混入 2.5Y4/1 黄灰色シルトが 10%混入
鉄分を 10%含む
- 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質砂 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂が 40%混入
- 8 5Y6/1 灰色シルト 鉄分を 40%含む
- 9 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 2.5Y6/1 黄灰色シルトが 10%混入 炭化物を 5%含む

第74図 SK81 (縮尺: 1/40)



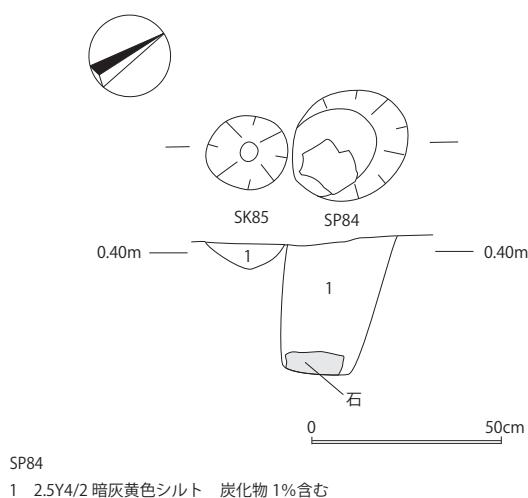
- 1 10YR5/6 黄褐色シルト 5Y6/2 灰オリーブ色シルトを 3%含む
10YR6/6 明黄褐色シルトを 7%含む
ø5 mm程度の礫を 5%含む 炭化物を 3%含む
2 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト 5Y6/1 灰色シルトを 15%含む 炭化物を 2%含む

第75図 SP82 (縮尺: 1/20)



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 5Y5/1 灰色粘土のブロックを 3%含む
7.5YR5/6 明褐色シルトを 3%含む 炭化物を 5%含む
2 7.5YR5/6 明褐色シルト 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトを 10%含む ø2 mmの礫を 5%含む
3 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
4 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトを 5%含む

第76図 SK83 (縮尺: 1/30)

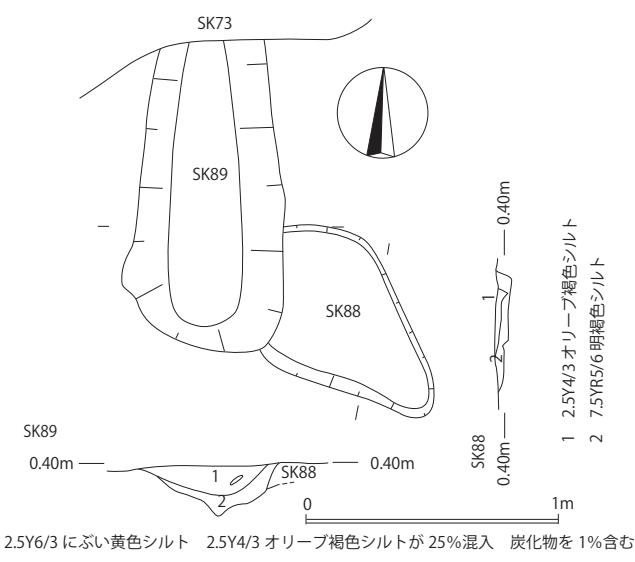


- SP84
1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 炭化物 1%含む

SK85

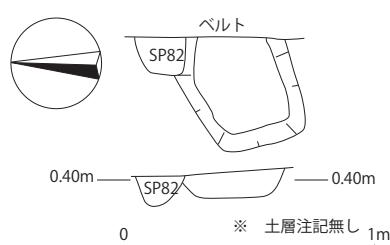
- 1 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 5Y5/2 灰オリーブ色シルトが 15%混入
炭化物を 1%含む

第77図 SP84・SK85 (縮尺: 1/20)

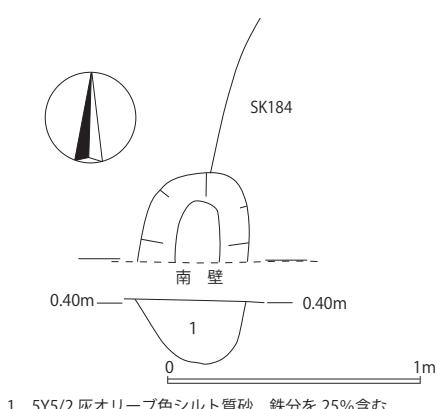


- 1 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトが 25%混入 炭化物を 1%含む
2 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 炭化物を 50%含む

第78図 SK88・SK89 (縮尺: 1/30)



第79図 SK90 (縮尺: 1/30)



- 1 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質砂 鉄分を 25%含む

第80図 SK93 (縮尺: 1/30)

SK95（第82図）

調査区南東部（C-10）で検出された土坑。平面形は不整な橢円形と推定され、残存長径0.3m、短径0.3m、深さ0.2mを測る。断面形は底がやや丸みを帯びたV字形を呈する。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

SK96（第83図）

調査区東部（B・C-9）で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値0.8m、東西残存値0.6m、深さ0.4mを測る。断面形は底がやや丸みを帯びた椀形を呈する。遺物は、肥前系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器、土製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK97（第84図）

調査区南東部（C-10）で検出された土坑。平面形は円形と思われ、直径0.8m、深さ0.1mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

SK99（第85図）

調査区南東部（D-9）で検出された土坑。平面形は不整形を呈する。規模は確認された範囲で、南北1.9m、東西1.8m、深さ0.3mを測る。断面形は南北ベルト付近でレンズ形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器などが出土した。時期は18世紀代である。

SD100（第86図、図版19）

調査区南部（C・D-6・7）で検出された東西方向の溝。残存長4.8m、幅0.7～1.0m、深さ0.2～0.3mを測る。断面形はレンズ形あるいは逆台形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、土師質土器などが出土した。時期は18世紀代である。なお、遺物はSK143のものと一括して取り上げてしまったため、まとめて報告する。

SK102（第87図）

調査区南東部（C-7）で検出された土坑。平面形は不整形で、規模は確認された範囲で、南北1.3m、東西1.0mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、土師質土器などが出土した。時期は18世紀代である。

SK103（第87図）

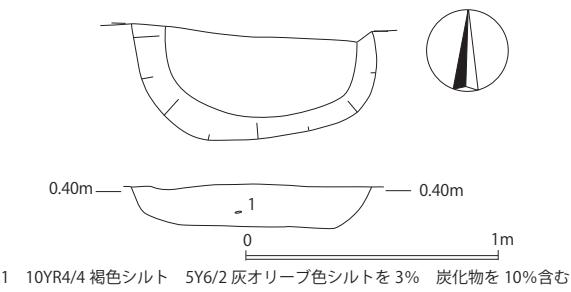
調査区南東部（C・D-7）で検出された土坑。平面形は円形で、直径1.5m、深さ0.4mを測る。断面形はやや不整な椀形を呈する。遺物は、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、土師質土器などが出土した。時期は18世紀代である。

SK104（第88図、図版19）

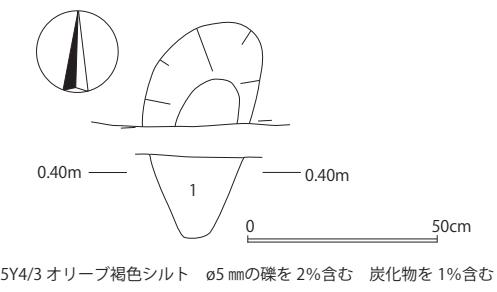
調査区南東部（D-7・8）で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径1.6m、短径1.3m、深さ0.2mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、瀬戸・美濃系磁器、京・信楽系陶器、大谷焼、土師質土器、鉄製品などが出土した。時期は19世紀初頭である。

SK105（第89図）

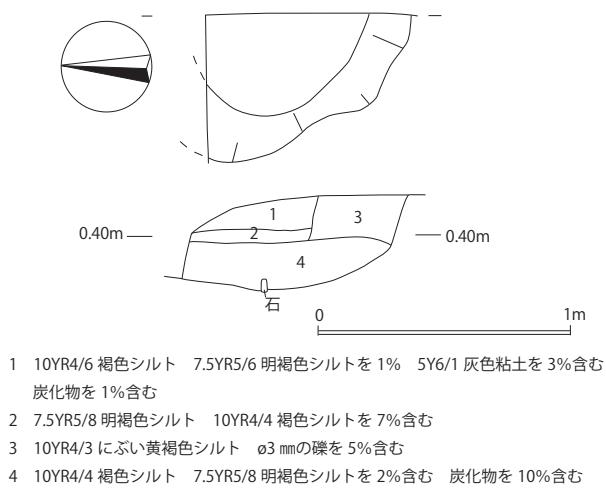
調査区南東部（C-7）で検出された土坑。平面形は不整な橢円形で、長径0.6m、短径0.5m、深さ0.1mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は、肥前系磁器、京・信楽系陶器、ガラス製品などが出土した。時期は18世紀代である。



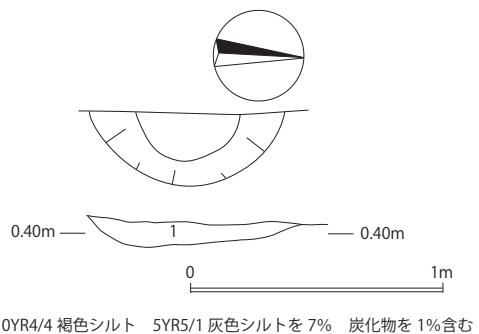
第 81 図 SK94 (縮尺 : 1/30)



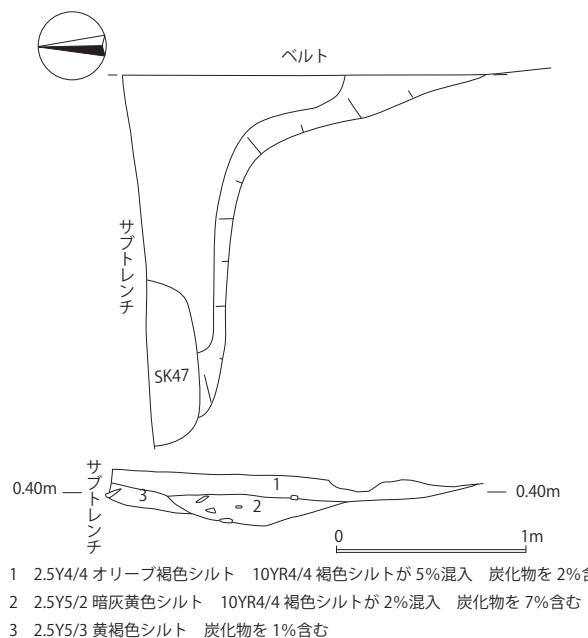
第 82 図 SK95 (縮尺 : 1/20)



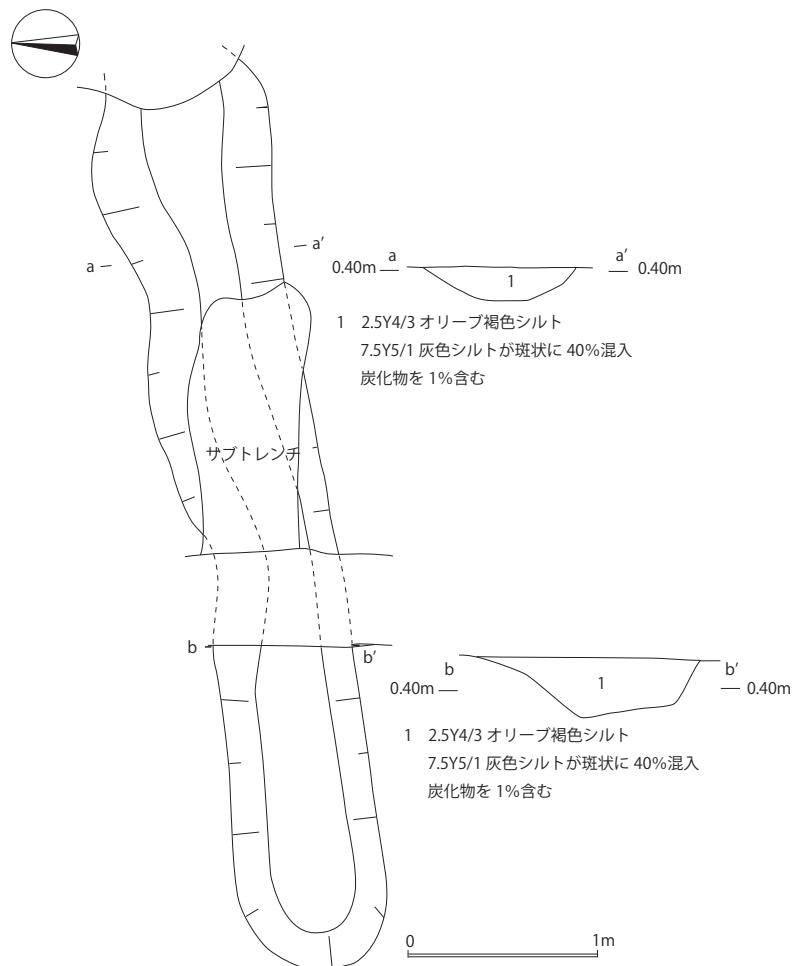
第 83 図 SK96 (縮尺 : 1/30)



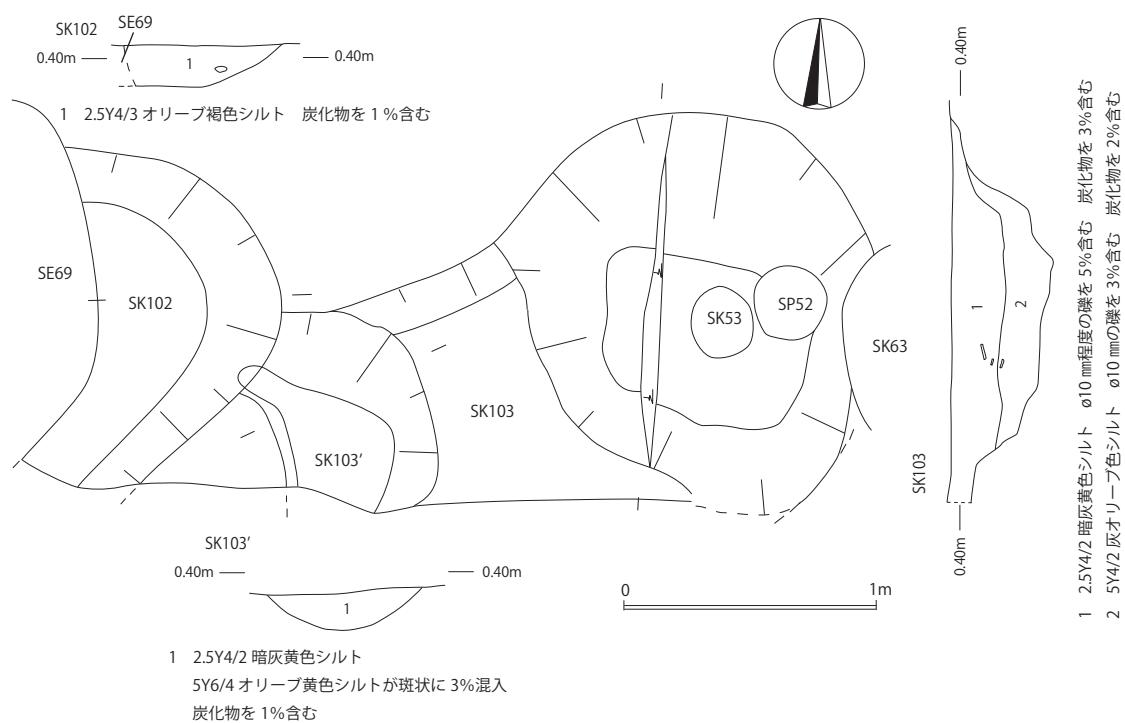
第 84 図 SK97 (縮尺 : 1/30)



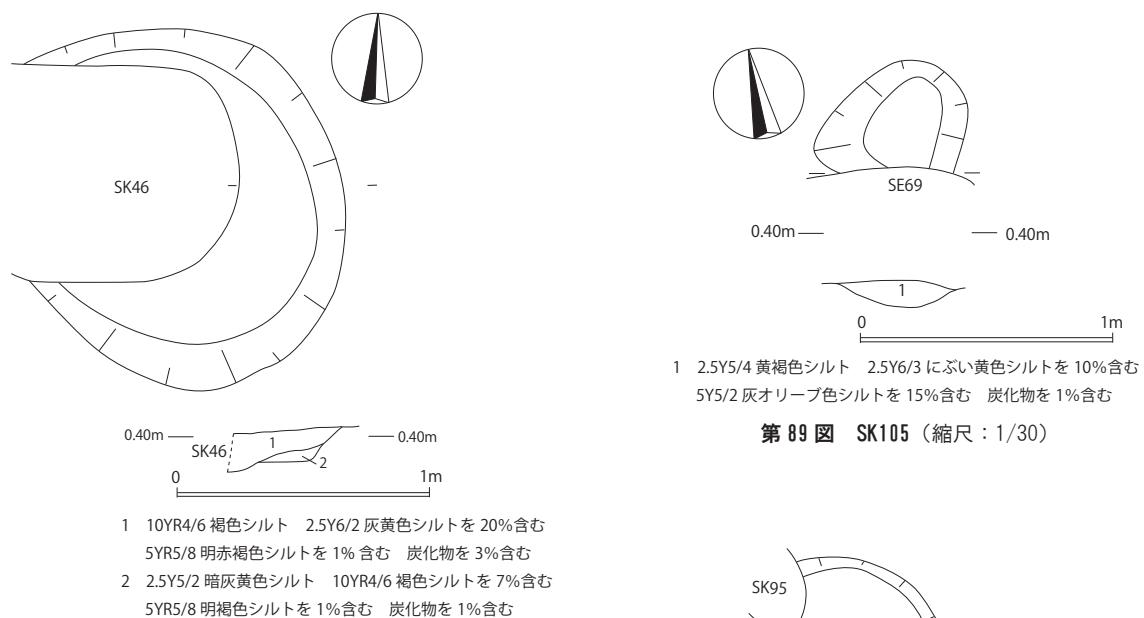
第 85 図 SK99 (縮尺 : 1/40)



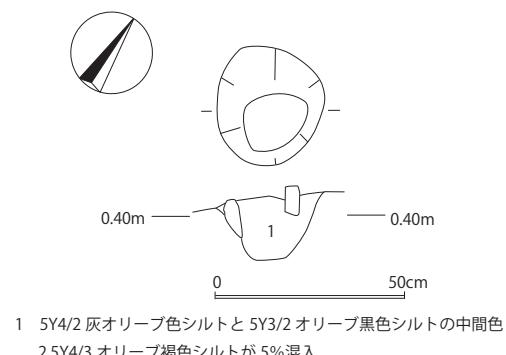
第86図 SD100 (縮尺: 1/40)



第87図 SK102・SK103 (縮尺: 1/30)



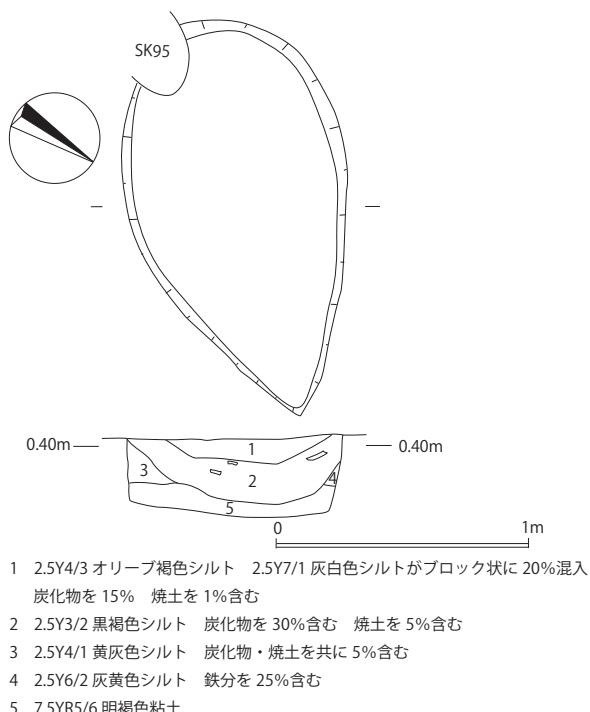
第 88 図 SK104 (縮尺 : 1/30)



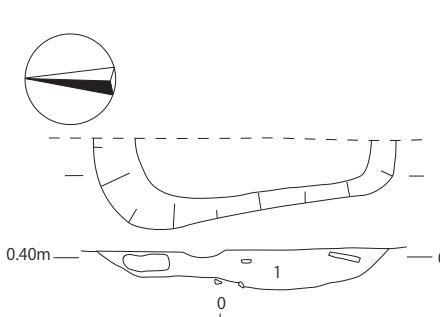
第 90 図 SK108 (縮尺 : 1/20)

1 2.5Y5/4 黄褐色シルト 2.5Y6/3 にぶい黄色シルトを 10%含む
5Y5/2 灰オリーブ色シルトを 15%含む 炭化物を 1%含む

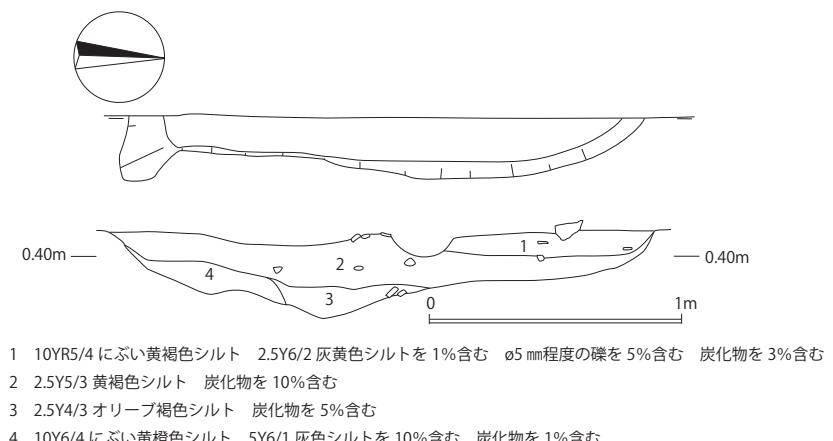
第 89 図 SK105 (縮尺 : 1/30)



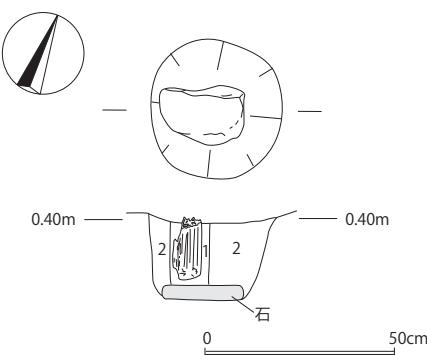
第 91 図 SK112 (縮尺 : 1/30)



第 92 図 SK113 (縮尺 : 1/30)

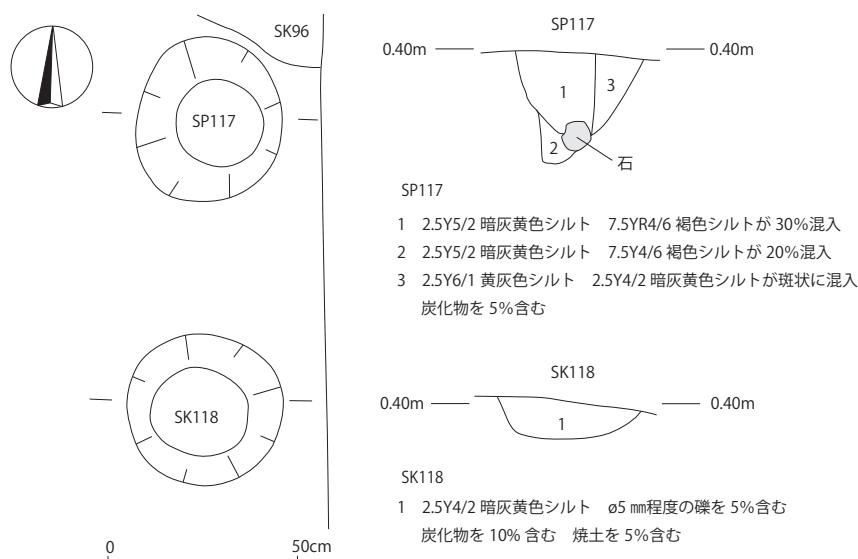


第 93 図 SK114 (縮尺 : 1/30)

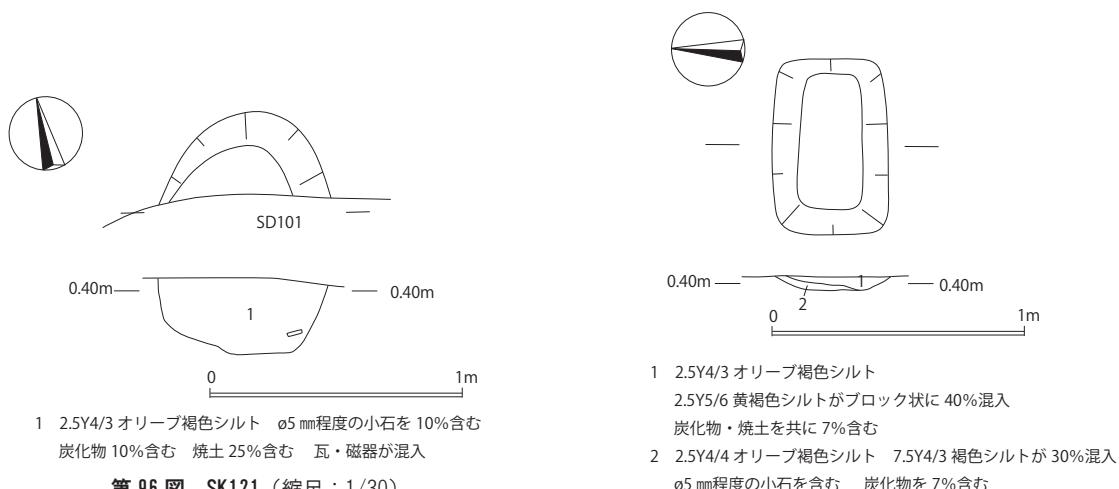


- 1 5Y4/2 オリーブ色シルト 10YR4/6 褐色シルトが斑状に 2%混入
 2 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
 5Y4/2 灰オリーブ色シルトがブロック状に 40%混入
 10YR4/6 褐色シルトが斑状に 10%混入

第94図 SP115 (縮尺 : 1/20)



第95図 SP117・SK118 (縮尺 : 1/20)



第96図 SK121 (縮尺 : 1/30)

第97図 SK124 (縮尺 : 1/30)

SK108（第90図）

調査区南東部（D-9）で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.2mを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は、肥前系磁器、京・信楽系陶器が出土した。時期は18世紀代である。

SK112（第91図、図版20）

調査区南東部（C-10）で検出された土坑。平面形は涙滴形で、長さ1.6m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。断面形は箱形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、土師質土器、鉄製品などが出土した。時期は18世紀代である。

SK113（第92図）

調査区南東部（C-10）で検出された土坑。平面形は隅丸方形あるいは隅丸長方形と思われ、南北1.2m、深さ0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、鉄製品、石製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK114（第93図）

調査区南東部（D-10）で検出された土坑。平面形は楕円形と推定され、長径2.0m、短径0.2m以上、深さ0.3mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、備前系陶器が出土した。時期は18世紀代である。

SP115（第94図）

調査区南部（D-4）で検出された柱穴。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.2mを測る。断面形は箱形を呈する。柱根が残存している。遺物は鉄製品が出土した。時期は18世紀代と思われる。

SP117（第95図）

調査区南東部（C-9）で検出された柱穴。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.3mを測る。断面形はV字形を呈する。底部に礎板石と考えられる石材が残存している。遺物は少量の陶器が出土した。時期は18世紀代と思われる。

SK118（第95図）

調査区南東部（C-9）で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.1mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は、肥前系磁器、土師質土器が出土した。時期は18世紀代である。

SK121（第96図、図版20）

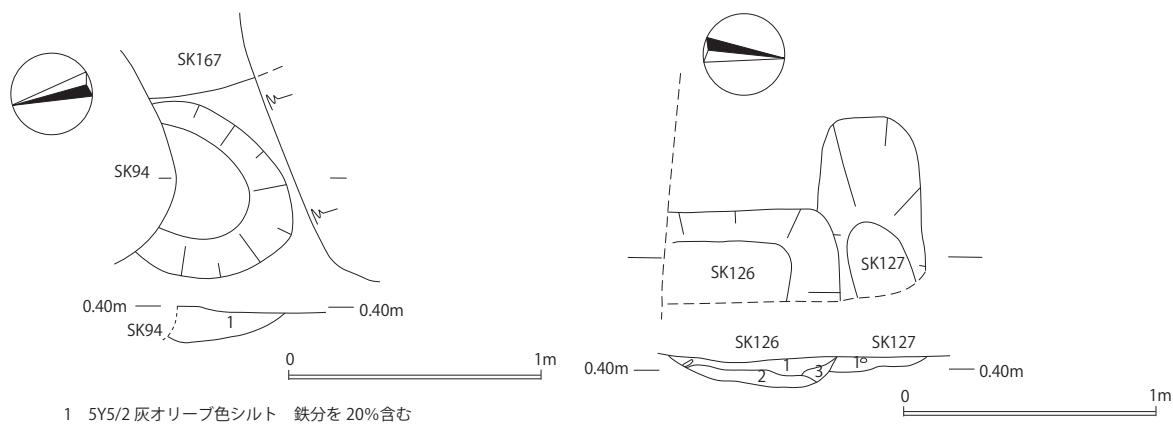
調査区東部（B-10）で検出された土坑。平面形は円形と推定され、直径0.7m、深さ0.3mを測る。断面形は椀形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、土師質土器、鉄製品、土製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK124（第97図）

調査区南東部（D-10）で検出された土坑。平面形は長方形で、長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。断面形は浅い皿形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器が出土した。時期は18世紀代である。

SK125（第98図）

調査区南東部（D-10）で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径0.7m以上、短径0.6m、深さ0.1mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

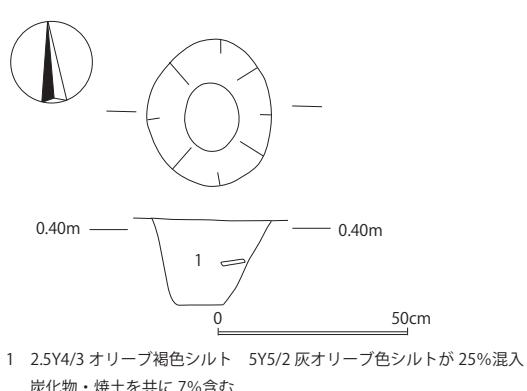


第98図 SK125 (縮尺 : 1/30)

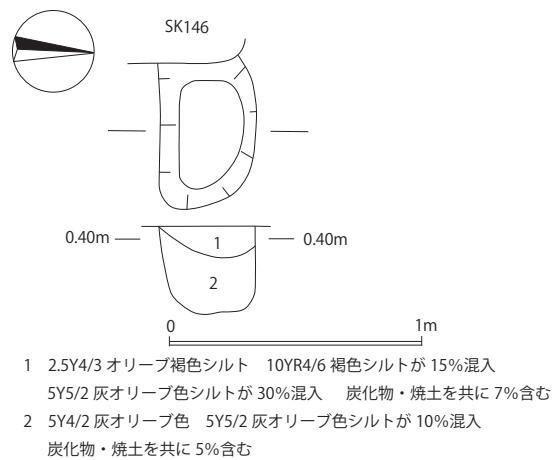
SK126
1 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト $\phi 5\sim10$ mm程度の礫を含む 炭化物を 10% 含む
2 5Y5/3 灰オリーブ色シルト 5Y6/3 オリーブ黄色シルトが斑状に 5% 混入 炭化物を 60% 含む
3 5Y6/3 オリーブ黄色シルト 5Y6/2 灰オリーブ色シルトが 30% 混入 炭化物を 2% 含む

SK127
1 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト $\phi 5\sim10$ mm程度の礫を含む 7% 含む 炭化物を 10% 含む

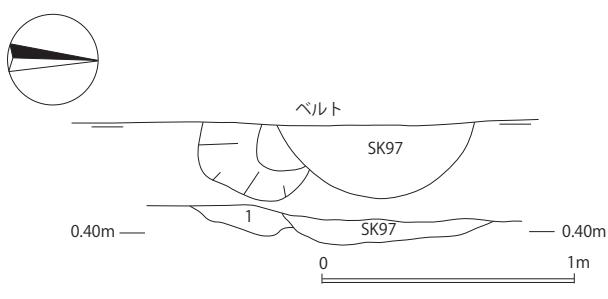
第99図 SK126・SK127 (縮尺 : 1/30)



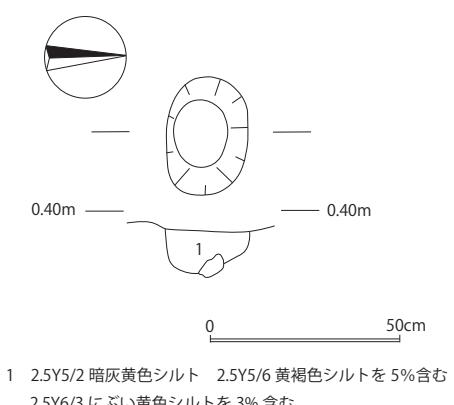
第100図 SK128 (縮尺 : 1/20)



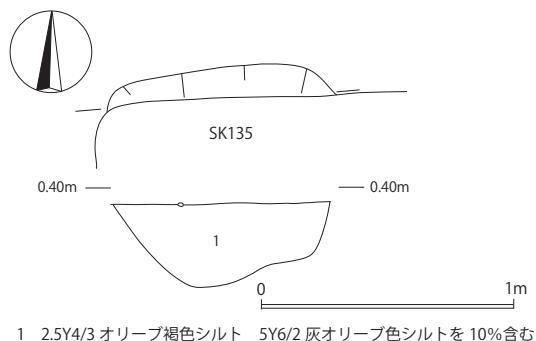
第101図 SK129 (縮尺 : 1/30)



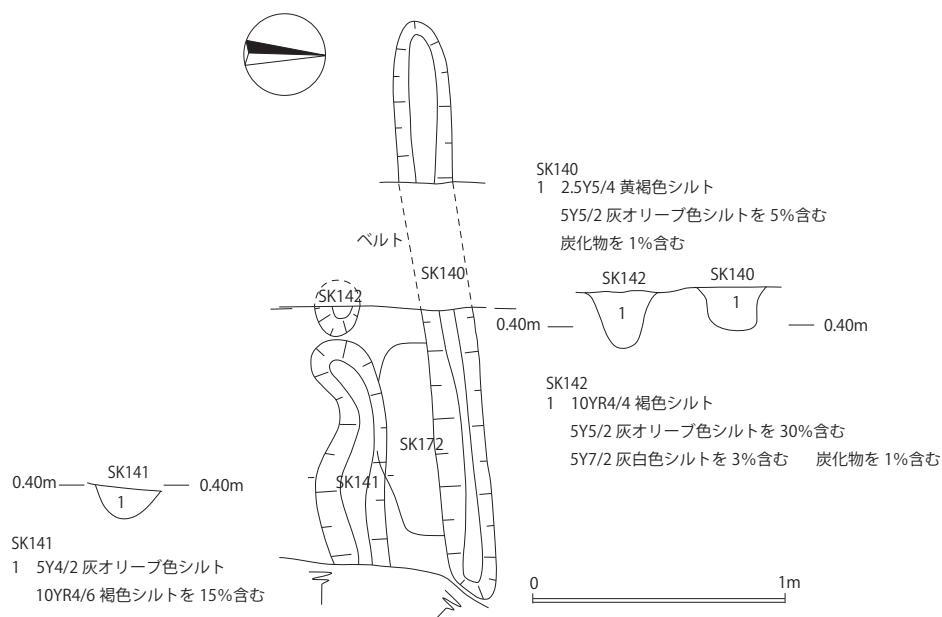
第102図 SK130 (縮尺 : 1/30)



第103図 SK133 (縮尺 : 1/20)



第104図 SK139（縮尺：1/30）



第105図 SK140・SK141・SK142（縮尺：1/30）

SK126（第99図）

調査区南東部（D-10）で検出された土坑。平面形は方形あるいは長方形と推定され、南北残存値0.7m、東西残存値0.4m、深さ0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、鉄製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK127（第99図）

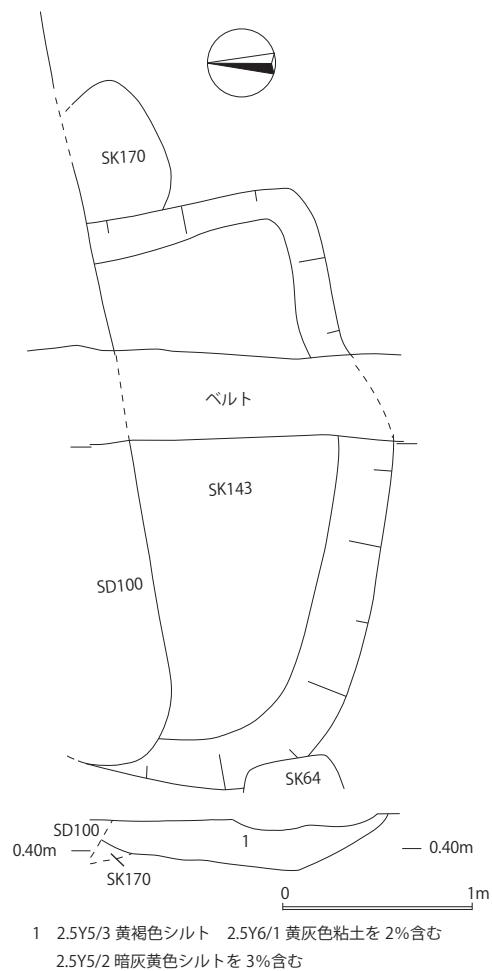
調査区南東部（D-10）で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、残存長0.7m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

SK128（第100図）

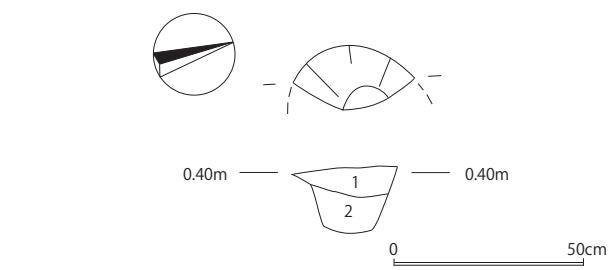
調査区南東部（C-10）で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.2mを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は土師質土器が出土した。時期は18世紀代と思われる。

SK129（第101図）

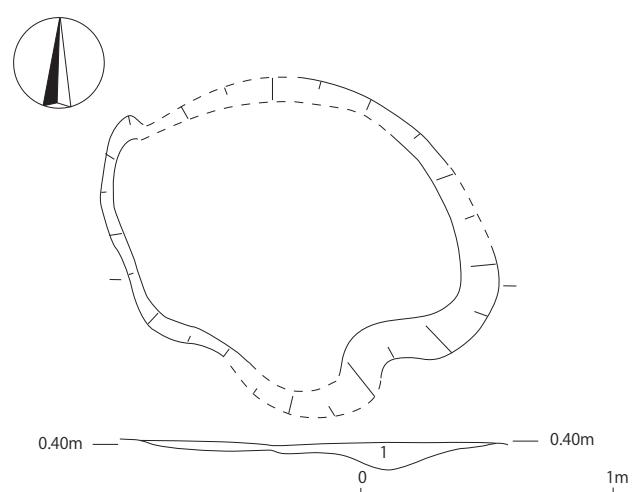
調査区南東部（C-10）で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、残存長0.6m、幅0.4m、深さ



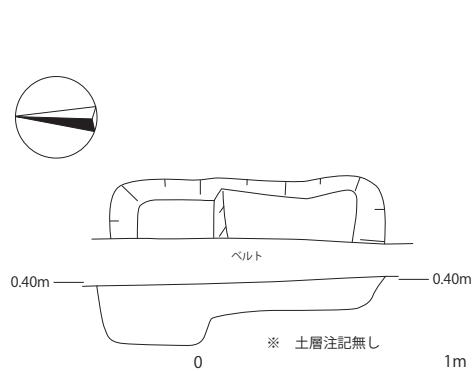
第106図 SK143（縮尺：1/40）



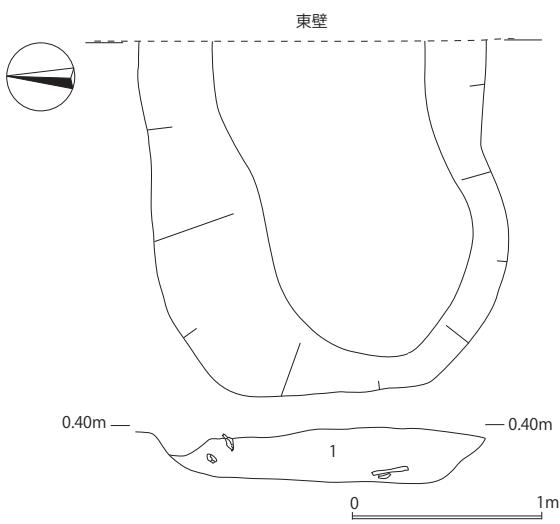
第107図 SK144（縮尺：1/20）



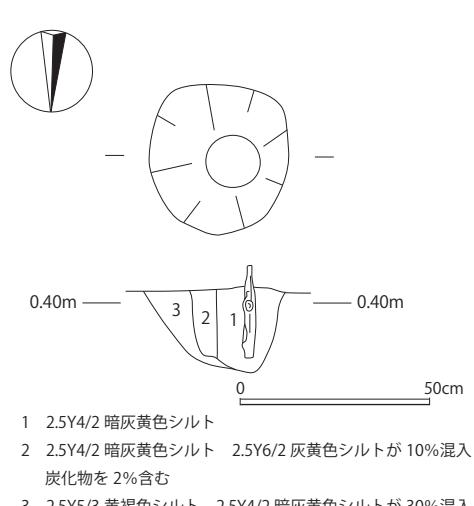
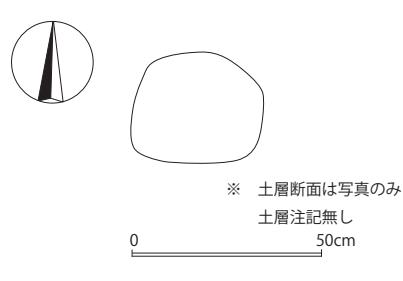
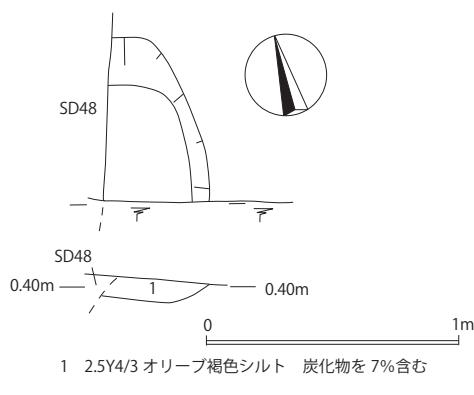
第108図 SK145（縮尺：1/30）



第109図 SK146（縮尺：1/30）



第110図 SK147（縮尺：1/40）



SK142 (第 105 図)

調査区南部 (D-6) で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は出土していない。時期は 18 世紀代と思われる。

SK143 (第 106 図)

調査区南部 (C・D-6) で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値 1.4 m、東西 3.1 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は皿形を呈する。時期は 18 世紀代と思われる。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器などが出土した。時期は 18 世紀代である。なお、遺物は SD100 のものと一括して取り上げてしまったため、まとめて報告する。

SK144 (第 107 図)

調査区南東部 (C-7) で検出された土坑。平面形は円形と思われ、南北残存値 0.3 m、深さ 0.2 m

0.3 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器が出土した。時期は 18 世紀代である。

SK130 (第 102 図)

調査区南東部 (C-10) で検出された土坑。平面形は円形と思われ、直径 0.5 m、深さ 0.1 m を測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は少量の陶磁器が出土した。時期は 18 世紀代である。

SK133 (第 103 図)

調査区南部 (D-4) で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は肥前系磁器が出土した。時期は 18 世紀代である。

SK139 (第 104 図)

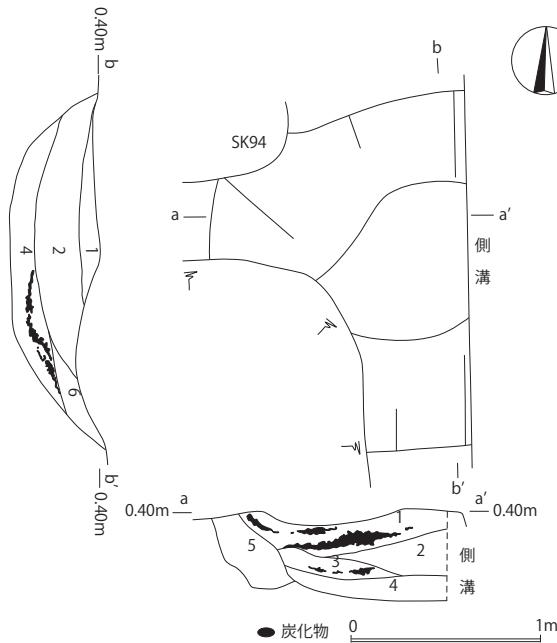
調査区南部 (D-4) で検出された土坑。上層の SK135 により大部分が搅乱を受けているため、形状は不明である。東西残存値 0.9 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は底部の不安定な椀状を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、土師質土器が出土した。時期は 18 世紀代である。

SK140 (第 105 図)

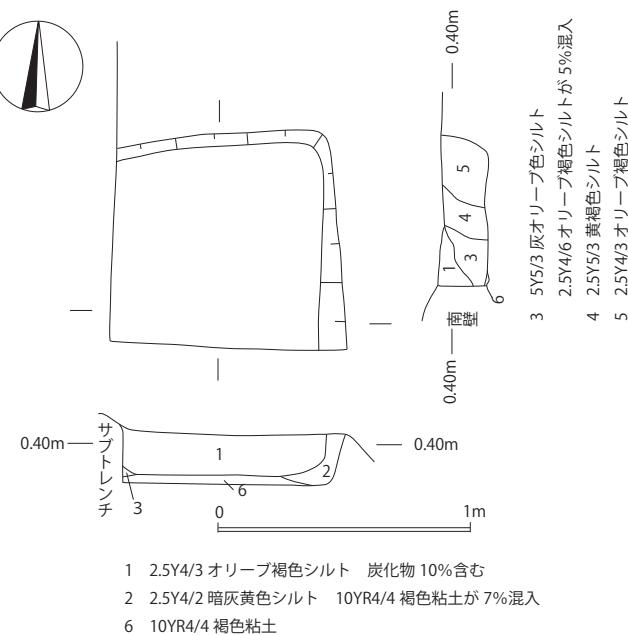
調査区南部 (D-6) で検出された土坑。平面形は細長く、溝状を呈する。長さ 2.3 m、幅 0.2 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は土師質土器が出土した。時期は 18 世紀代と思われる。

SK141 (第 105 図)

調査区南部 (D-6) で検出された土坑。SK140 と同じく、細長い溝状を呈する。長さ 0.9 m、幅 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は鉄製品が出土した。時期は 18 世紀代と思われる。

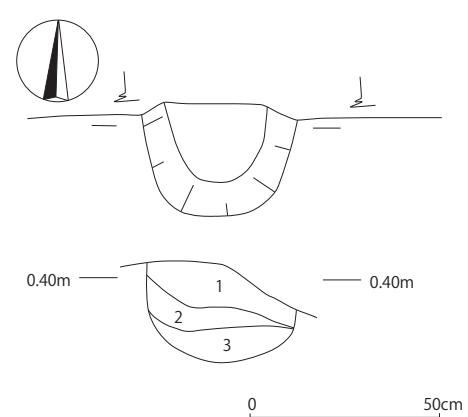


- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト $\phi 5$ mm程度の礫を 30%含む 炭化物を 5%含む
2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂
3 5Y4/2 灰オリーブ色シルト質砂 炭化物を 20%含む
4 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト質粘土 炭化物を 40%含む
5 5Y4/2 シルト $\phi 1.5\sim 2.0$ の礫が 30%混入 炭化物を 20%含む
6 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 2.5Y5/1 黄灰色シルトが斑状に 20%混入
炭化物を 15%含む

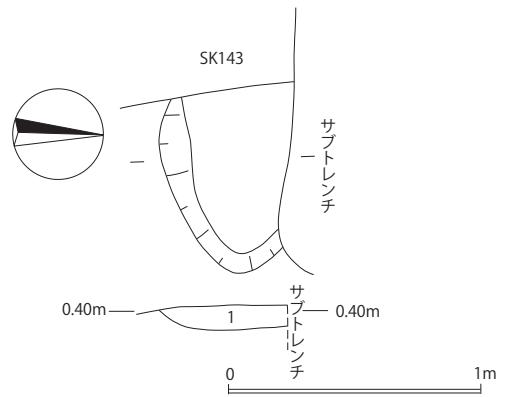


- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 炭化物 10%含む
2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 10YR4/4 褐色粘土が 7%混入
6 10YR4/4 褐色粘土

第115図 SK168 (縮尺 : 1/30)

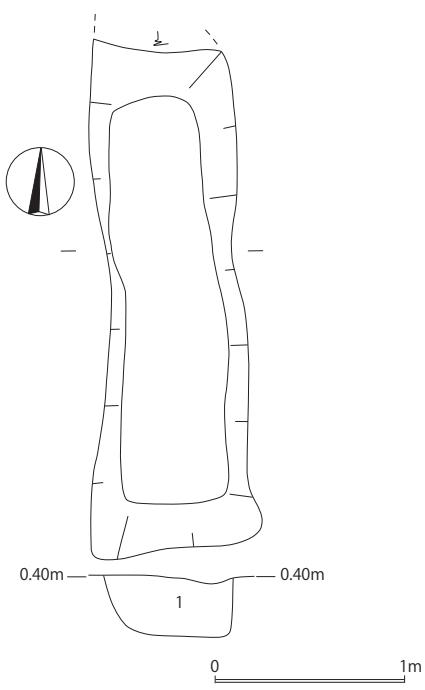


- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質粘土が 20%混入
10YR4/4 褐色シルトが 20%混入
炭化物を 3%含む
2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト 5Y6/3 オリーブ黄色シルトが 10%混入
3 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト



- 1 2.5Y5/3 黄褐色シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトが 30%混入
10Y5/1 灰色微砂シルトが 7%混入

第117図 SK170 (縮尺 : 1/30)



1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 2.5Y7/4 浅黄色シルトが斑状に7%混入
7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト微砂が斑状に7%混入 炭化物を1%含む

第118図 SK172 (縮尺: 1/40)

を測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、鉄製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK149 (第111図)

調査区東部 (B-9) で検出された土坑。平面形は長方形と思われ、南北残存値 0.7 m、東西残存値 0.4 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は浅い皿形を呈する。遺物は、少量の肥前系磁器、土師質土器が出土した。時期は18世紀代である。

SK150 (第15図)

調査区南東部 (D-10) で検出された土坑。平面形は円形あるいは楕円形と推定される。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器が出土した。時期は18世紀代である。

SP151 (第112図)

調査区南東部 (D-7) で検出された柱穴。平面形は円形で、直径 0.3 m を測る。遺物は、少量の陶磁器、ガラス製品が出土した。時期は18世紀代である。

SP155 (第113図)

調査区東部 (B-9) で検出された柱穴。平面形は円形で、直径 0.4 m を測る。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

SK167 (第114図、図版20)

調査区南東部 (C・D-10) で検出された土坑。平面形は円形あるいは隅丸方形と推定され、南北残存値 1.9 m、東西残存値 1.9 m、深さ 0.5 m を測る。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、鉄製品、石製品が出土した。時期は18世紀代である。

を測る。断面形はやや不整な U字形を呈する。遺物は出土していない。時期は18世紀代と思われる。

SK145 (第108図)

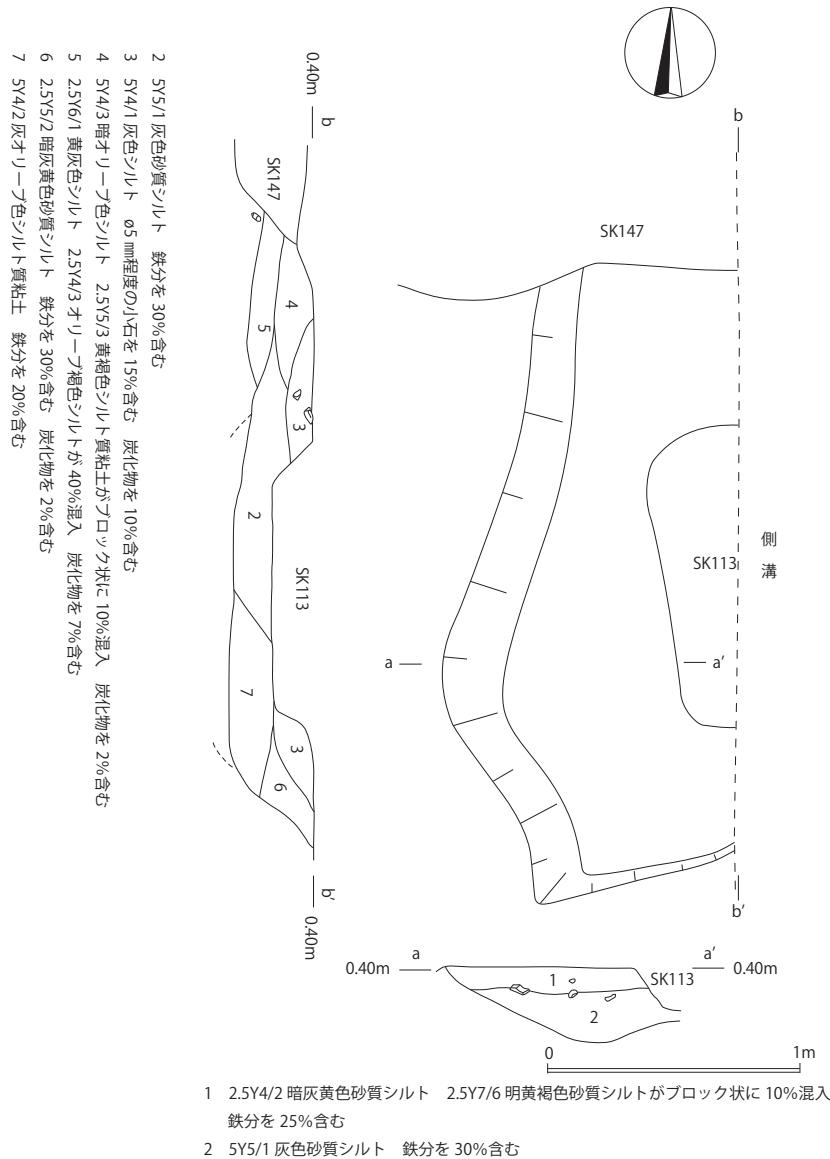
調査区南部 (D-5) で検出された土坑。平面形は不整形で、南北推定長 1.4 m、東西 1.5 m、深さ 0.1 m を測る。断面形は不整な浅い皿形を呈する。遺物は少量の陶器が出土した。時期は18世紀代と思われる。

SK146 (第109図)

調査区南東部 (C-10) で検出された土坑。平面形は隅丸長方形と推定され、長さ 1.1 m、残存幅 0.2 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は底に段を有する箱形を呈する。遺物は、少量の肥前系磁器、土師質土器、鉄製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK147 (第110図)

調査区南東部 (C-10) で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、残存長 1.9 m、幅 1.9 m、深さ 0.3 m



第119図 SK176 (縮尺: 1/30)

SK168 (第115図)

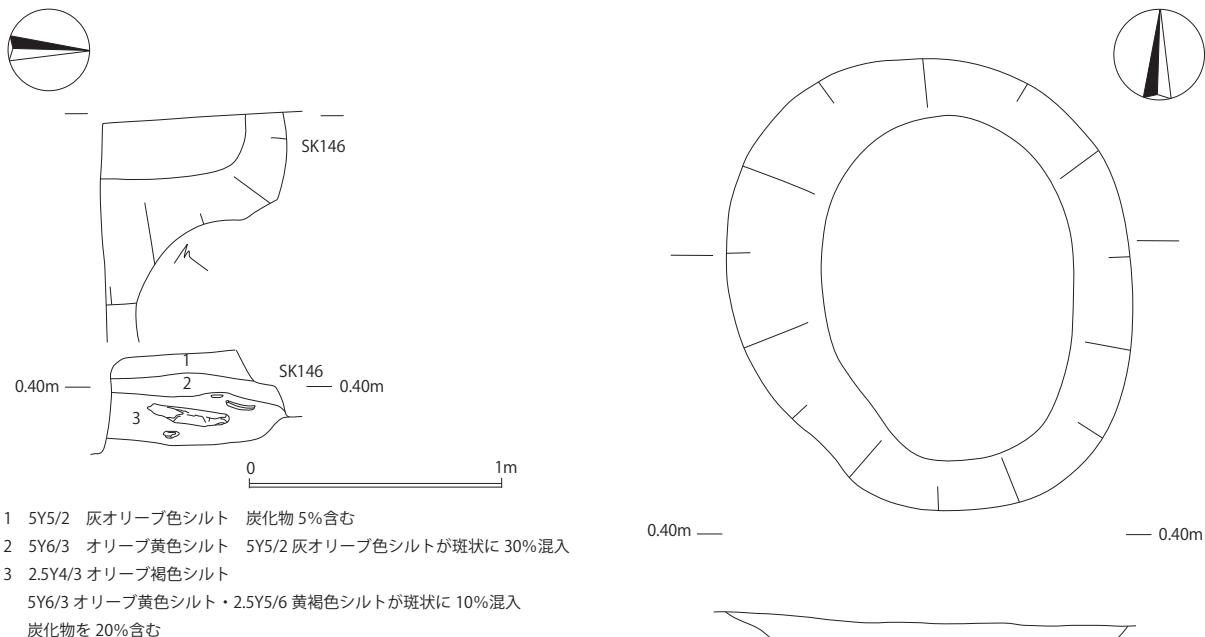
調査区南東部 (D-10) で検出された土坑。平面形は方形あるいは長方形と推定され、南北残存値 0.9 m、東西残存値 1.0 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は箱形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器が出土した。時期は 18 世紀代である。

SK169 (第116図)

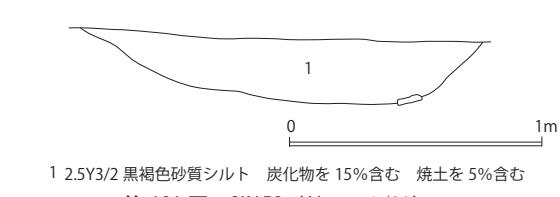
調査区南東部 (D-10) で検出された土坑。平面形は円形あるいは楕円形と推定され、南北残存値 0.3 m、東西 0.4 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は U 字形を呈する。遺物は肥前系磁器が出土した。時期は 18 世紀代である。

SK170 (第117図)

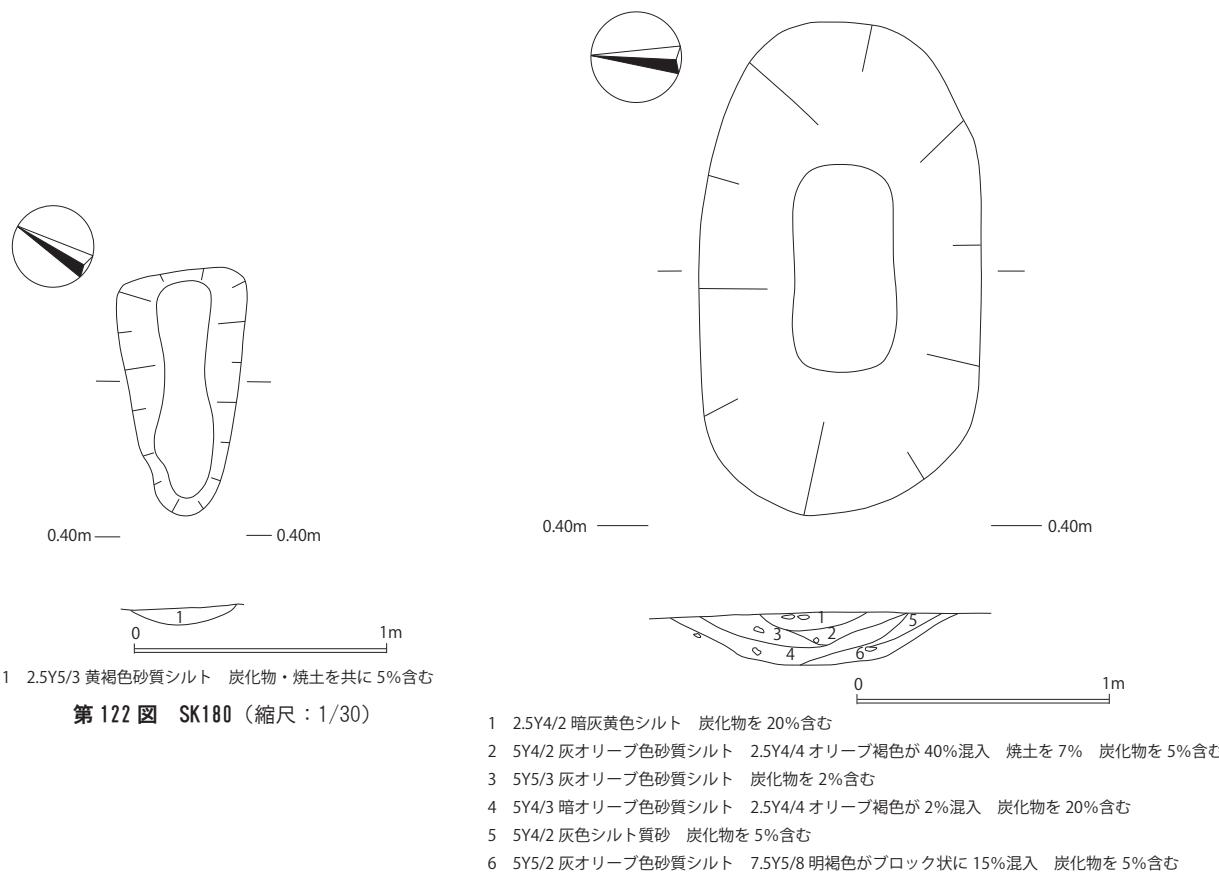
調査区南部 (C・D-6) で検出された土坑。平面形は楕円形と思われ、南北残存値 0.5 m、東西残存値 0.7 m、深さ 0.1 m を測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は出土していない。時期は 18 世紀代と思われる。



第120図 SK177 (縮尺: 1/30)

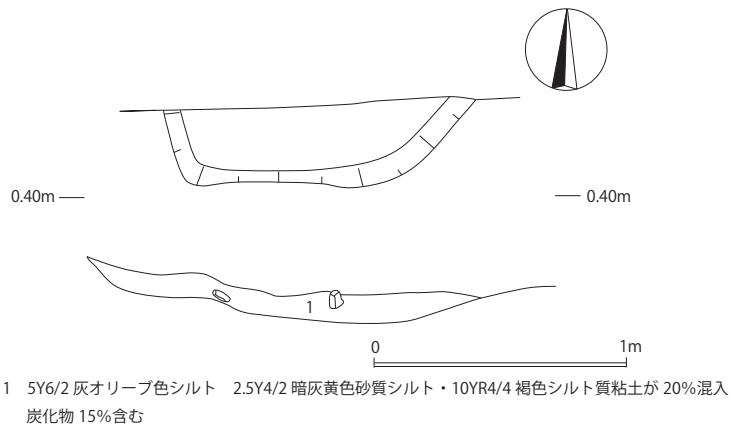


第121図 SK179 (縮尺: 1/30)

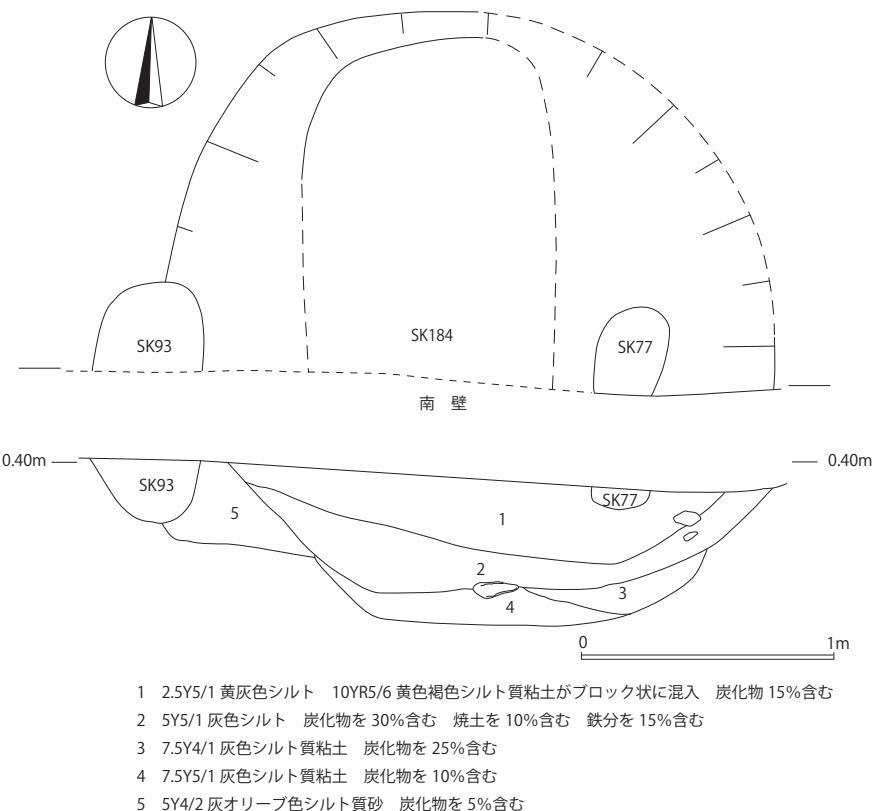


第122図 SK180 (縮尺: 1/30)

第123図 SK181 (縮尺: 1/30)



第124図 SK183（縮尺：1/30）



第125図 SK184（縮尺：1/30）

SK172（第118図）

調査区南部（C・D-6）で検出された土坑。平面形はやや不整な長方形で、残存長 2.6 m、幅 0.7 ~ 0.9 m、深さ 0.3 m を測る。断面形はU字形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器などが出土した。時期は18世紀代である。

SK176（第119図）

調査区南東部（C-10）で検出された土坑。平面形は不整な方形あるいは長方形と思われ、南北残存値 2.5 m、東西残存値 1.2 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は南北方向で皿形、東西方向でレンズ形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、鉄製品、木製品が出土した。時期は18世紀代である。

SK177 (第 120 図)

調査区南東部 (C-10) で検出された土坑。平面形は円形と思われ、南北残存値 0.7 m、東西残存値 0.7 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は椀形を呈する。遺物は、少量の陶器、土師質土器が出土した。時期は 18 世紀代と思われる。

SK179 (第 121 図)

調査区東部 (B・C-9) で検出された土坑。平面形は円形で、直径 1.8 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は皿形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、金属製品、木製品が出土した。時期は 18 世紀代である。

SK180 (第 122 図)

調査区東部 (B・C-9) で検出された土坑。平面形は不整な隅丸長方形で、長さ 1.0 m、幅 0.5 m、深さ 0.1 m を測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は、少量の肥前系磁器、土師質土器が出土した。時期は 18 世紀代である。

SK181 (第 123 図)

調査区南東部 (C-8) で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径 1.9 m、短径 1.1 m、深さ 0.2 m を測る。断面形はレンズ形を呈する。遺物は、少量の陶磁器、土師質土器、石製品が出土した。時期は 18 世紀代である。

SK183 (第 124 図)

調査区南東部 (C-8) で検出された土坑。平面形は不整形で、南北残存値 0.3 m、東西残存値 1.3 m、深さ 0.1 m を測る。断面形はやや不整なレンズ形を呈する。遺物は、少量の陶器、土師質土器が出土した。時期は 18 世紀代と思われる。

SK184 (第 125 図、図版 20)

調査区南東部 (D-9) で検出された土坑。平面形は円形で、直径 2.4 m、深さ 0.6 m を測る。断面形は西側に段を有するが、おおむね椀形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、土師質土器、木製品が出土した。時期は 18 世紀代である。

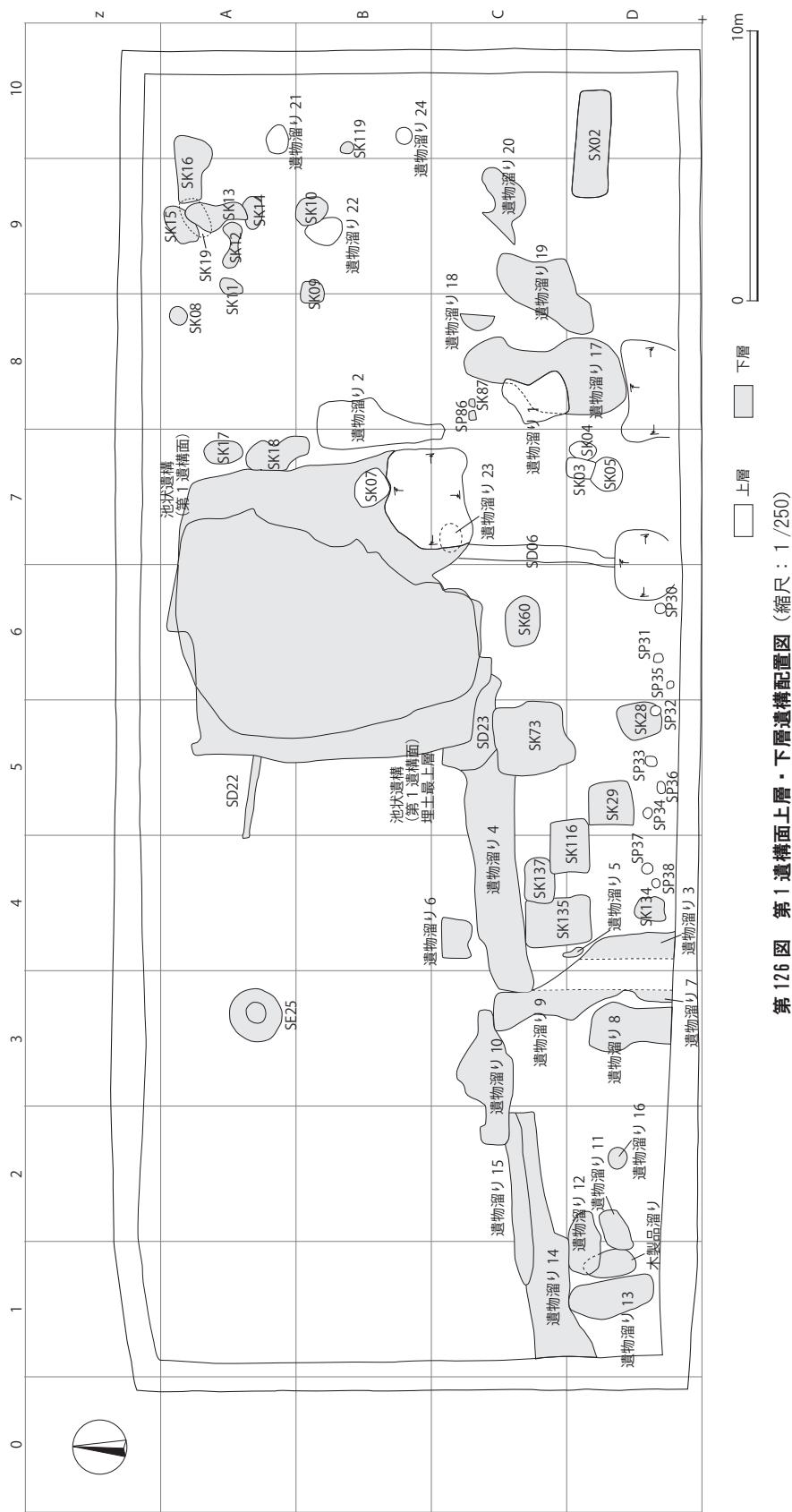
3. 第1遺構面 (第 126 ~ 128 図)

第1遺構面は、上部を削平されており、現状で T.P. = 0.6 ~ 0.45 m で検出された。時期は 19 世紀初頭以降である。上層と下層に分かれ、上層は近代（19世紀中葉以降）、下層は江戸時代後期（19世紀初頭～半ば）である。

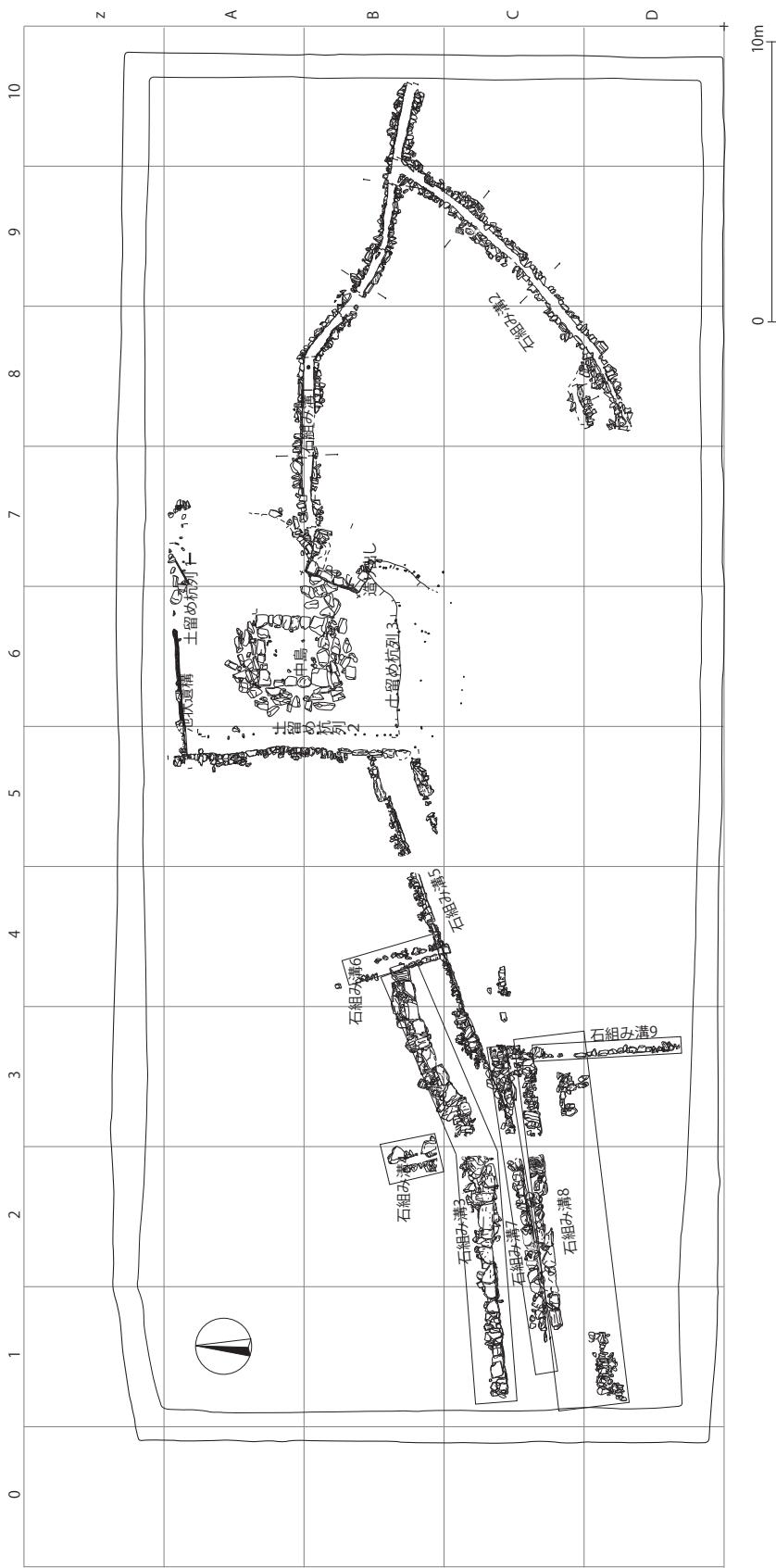
A 下層

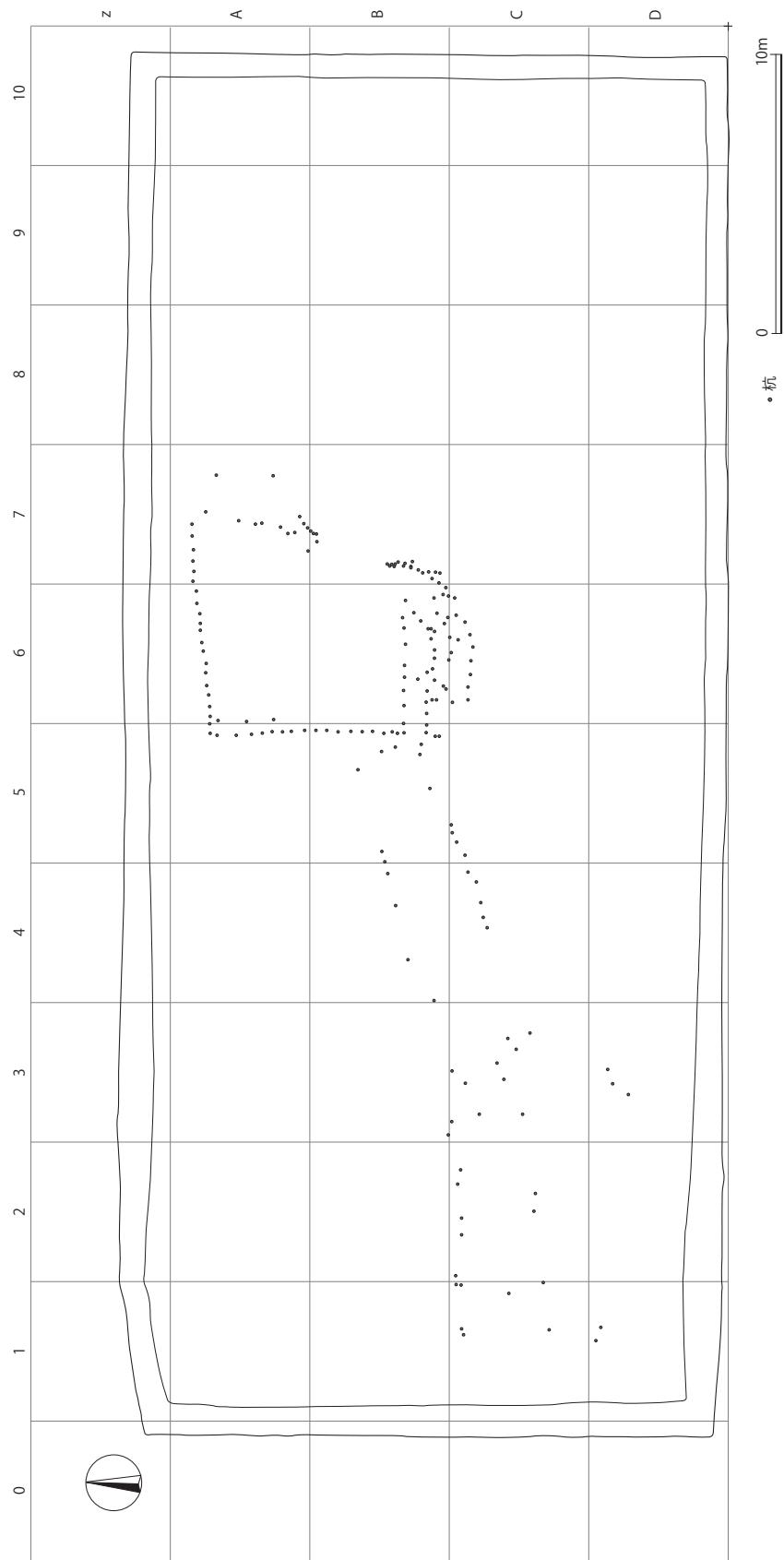
第1遺構面下層では、石組み溝群とその中心に位置する池状遺構が検出された。石組み溝は、調査区の東端から西端まで池状遺構を介してつながっており、一連の遺構を形成している。また、その一部は屋敷境としての機能も有していたと考えられる。

調査区西側の石組み溝群は確認できるだけで 3 回にわたって造り替えが行われており、最終的には



第126図 第1遺構面上層・下層遺構配置図（縮尺：1/250）





第128図 第1構造面下層杭列配置図（縮尺：1/250）



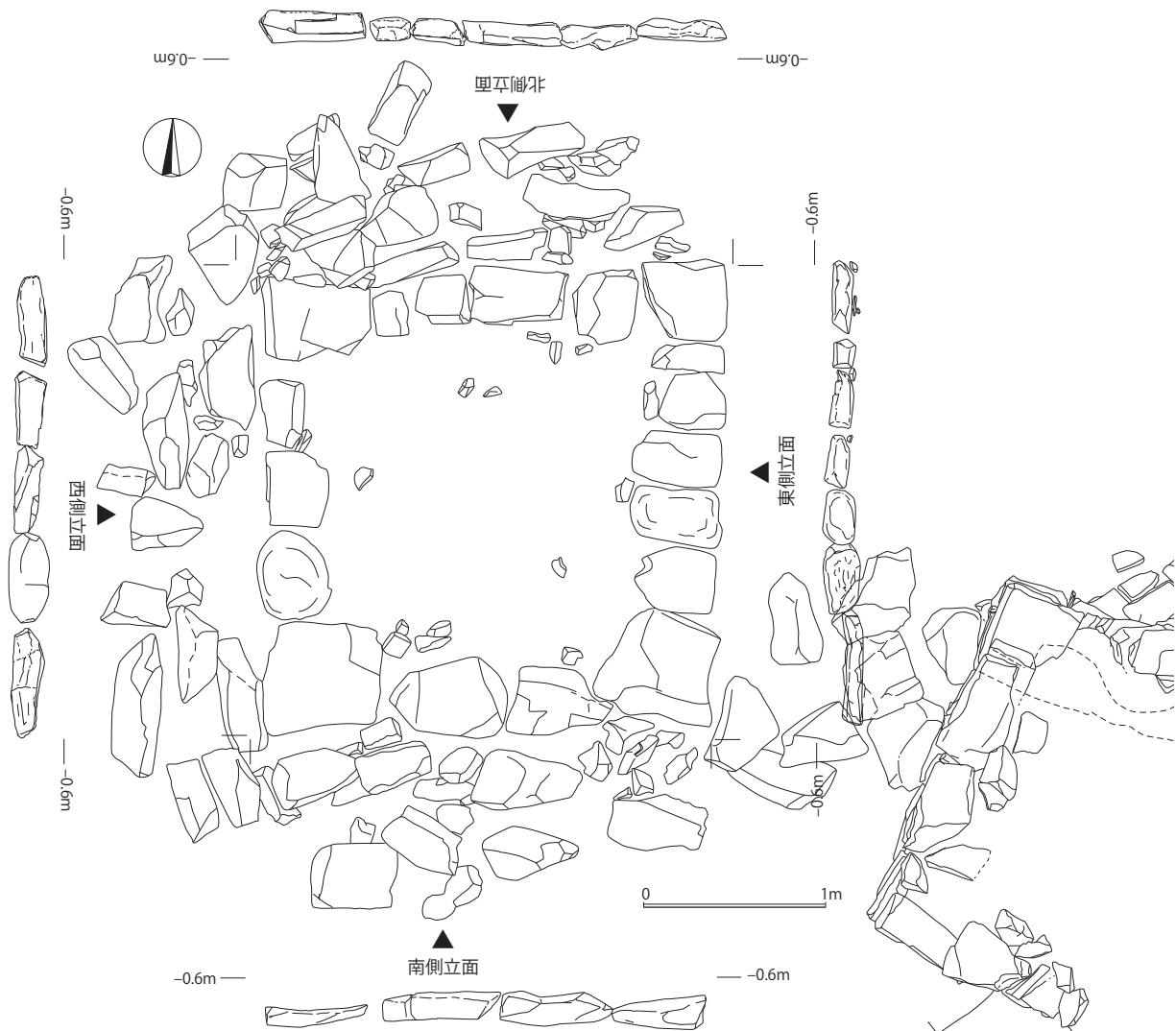
第129図 池状遺構(第1遺構面)(縮尺:1/100)

素掘りの溝となり、その役割を終える段階で、陶磁器や瓦、石材などが廃棄され、埋められている。使用されている石材は、ほとんどが青石と呼ばれる結晶片岩であるが、一部に砂岩や石臼の転用が認められる。

池状遺構(第129~131図、図版21~28)

調査区のほぼ中央部で検出された池。池は石組みと竹と松杭とを組み合わせた土留め用の柵とで囲われている。また、中心部には中島が、東側には造り出しが設けられている。規模は南北8.5m、東西9.5mのほぼ正方形である。

池の西側は石組み溝が接続するように造られている。石組み溝3から5へと付け替えられる段階で



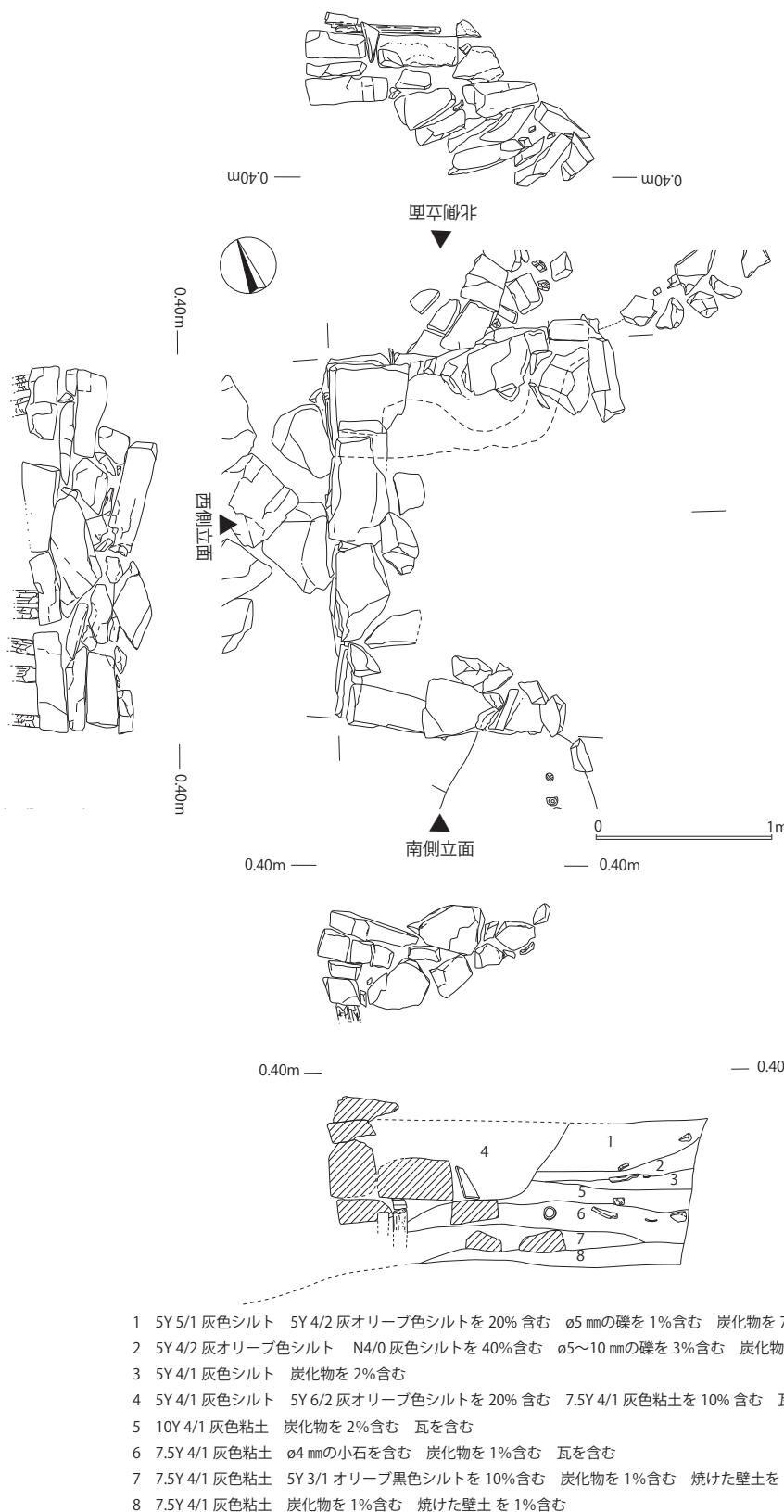
第130図 中島石組み（縮尺：1/40）

1.3 m南にずらされて接続するようになり、石組み溝5から7へと付け替えられる段階では池の南側に接続するようになっている。

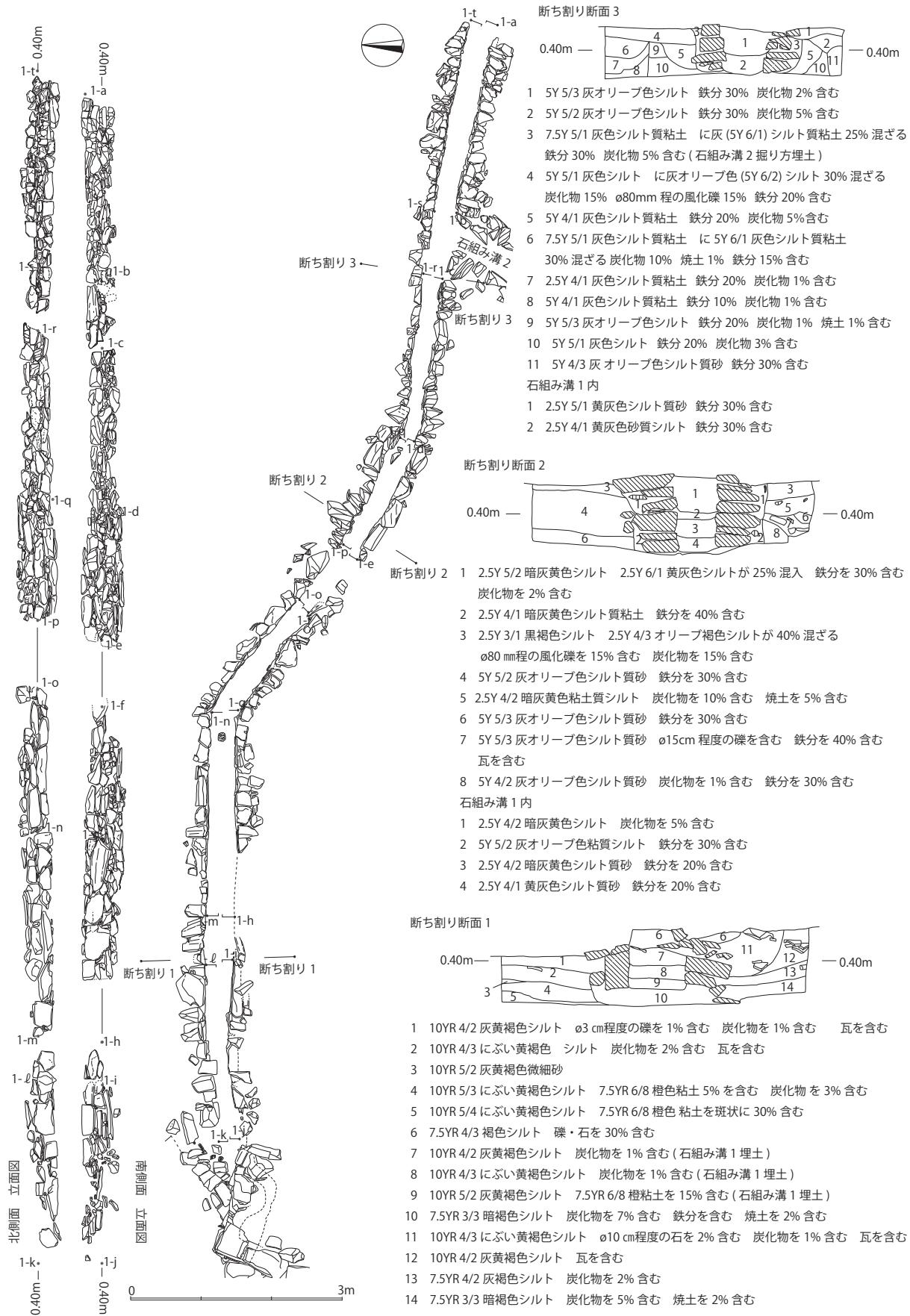
中島は最下段の石材のみが原位置を保っており、南北2.5m、東西2.5mの正方形を呈している。利用されている石材は結晶片岩がほとんどであるが、砂岩も一部に含まれている。また、最下段の石材の下には沈み込み防止のため、結晶片岩を細かく碎いたものが敷き詰められている。

池の東側に設けられた造り出しが長さ2.1m、幅1.6mで、結晶片岩を3～4段積み上げて構築されている。内側には土が充填されていたが、一部砂が詰まっている部分があった。造り出しの北側に石組み溝1が接続する形になっており、溝を流れてきた水は造り出しの中を通り、池の中に流れ込む構造であったと考えられる。

石組みと土留めの柵で囲われた池は、出土遺物から19世紀半ばに周りを黄褐色の土で囲われた池に造りかえられている。最終的に廃棄される段階で、池には遺物や長辺10cm程度の小型の石材が廃棄され、最上層に赤褐色土が入れられて整地されている。



第131図 造り出し（縮尺：1/40）



第132図 石組み溝1（平面図・立面図縮尺：1/80・断面図縮尺：1/40）

石組み溝群（図版 28）

石組み溝 1（第 132 図、図版 29～32）

調査区東側から中央部にかけて検出された石組み溝。蜂須賀家の屋敷地内を東西に通り、池状遺構の造り出し部分に接続する。石組みの内法は幅 0.2～0.4 m、深さ 0.4～0.6 m で、断面形は箱形を呈する。東西に 10.8 m 分が検出された。20～40 cm 程度の小型の石材を 4～7 段積み上げて作られている。使用されている石材は結晶片岩である。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、透明釉土器などが出土した。時期は 18 世紀後半～19 世紀前半である。

石組み溝 2（第 133 図、図版 29・32～34）

調査区東側中央付近で石組み溝 1 に南側から接続する溝。石組み溝 1 を設けた後、期間をおいて付け足されている。石組みの内法は幅 0.2～0.4 m、深さ 0.2 m で、断面形は箱形を呈する。北東～南西に 12.0 m 分を検出した。石材を一段並べただけの簡単な造りである。使用されている石材は結晶片岩がほとんどであるが、一部に砂岩や石臼が利用されている。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、大谷焼、土師質土器、瓦質土器などが出土した。時期は 18 世紀後半～19 世紀前半である。

石組み溝 3（第 134 図、図版 35～37・40・41）

調査区中央部から西側にかけて検出された溝。南側の石組みは、石組み溝 5 構築時に取り除かれたと考えられ、北側の石組みのみが残存している。深さは残存値で 0.6～0.8 m を測り、断面形は箱形と推定される。西側の 3a と東側の 3b の二つに分かれて検出された。3a は東西に 8.4 m、3b は北東～南西に 6.4 m を検出した。石組みは 3～5 段積まれており、使用されている石材は 20～100 cm 程度の結晶片岩である。池状遺構の西側に接続し、東側から流れてきた水を西に流す役割を担っている。また、片山家と黒部家、先山家との屋敷境の機能も有している。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器、瓦質土器などが出土した。時期は 18 世紀後半～末である。

石組み溝 4（第 134 図、図版 36・38）

調査区西側中央付近で石組み溝 3 に北側から接続する溝。北端は搅乱により失われている。石組みの内法は幅 0.2～0.4 m、深さ 0.2～0.3 m で、断面形は箱形を呈する。残存長は 1.8 m を測る。石組みは 1～2 段積みで、使用されているのは 20～60 cm 程度の結晶片岩である。片山家屋敷地内からの排水溝としての機能を有していたと考えられる。遺物は少量の陶磁器、土師質土器が出土した。

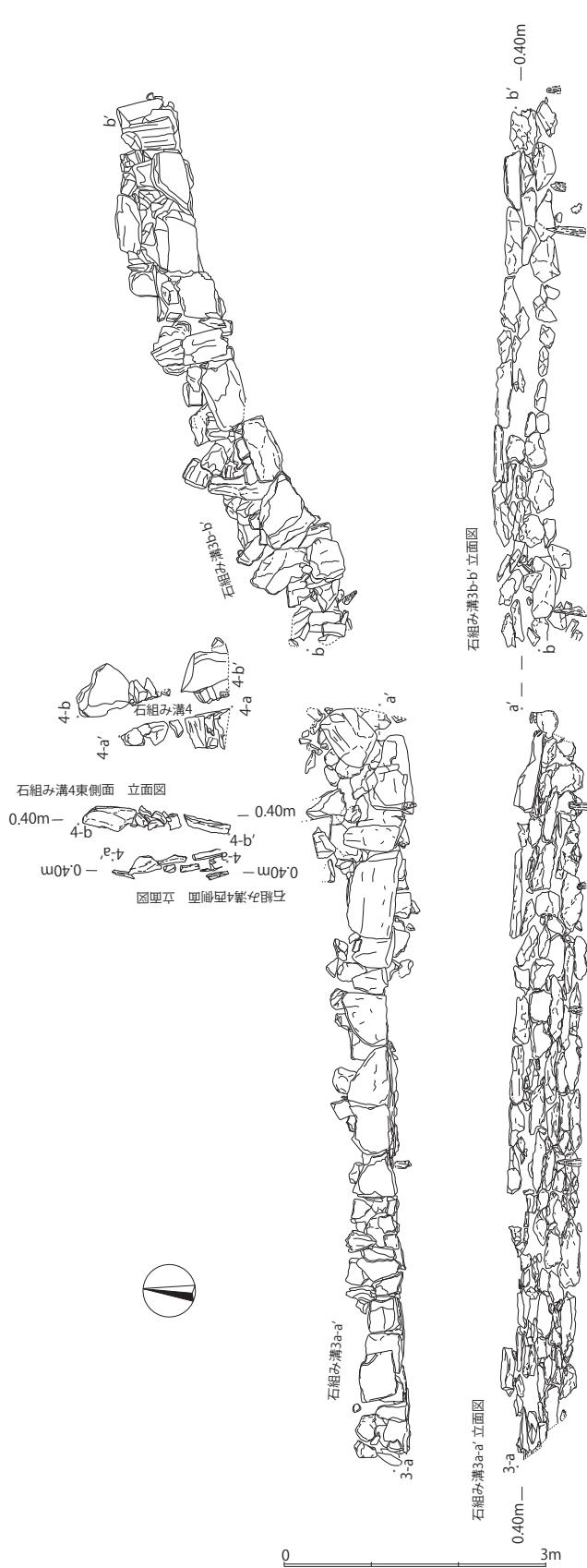
石組み溝 5（第 135・136 図、図版 35・36・38～40）

石組み溝 3 の南側で検出された溝。石組み溝 3 を取り壊し、新たに造り替えられた溝である。北側の石組みはほぼ残存しており、西側の一部は石組み溝 7 としても利用されている。南側の石組みは石組み溝 7 構築時に取り壊されており、一部のみ残存している。石組み内側の断面形は箱形を呈する。石組みは 2～7 段程度積まれており、石材には結晶片岩が使われている。最下段には沈み込み防止のための木材が敷かれており、倒壊防止のための杭が打たれている。

出土遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、堺・明石系陶器、萩系陶器、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器、軟



第133図 石組み溝 2（平面図・立面図縮尺：1/80・断面図縮尺：1/40）



第134図 石組み溝3・4（縮尺：1/80）

質施釉陶器などである。時期は18世紀末～19世紀前半であるが、下層の遺構を掘り込んでいたため、17世紀代の遺物も混入している。

石組み溝6（第135・137図、図版36・39・40）

調査区中央部やや西側で石組み溝5に北から接続する溝。石組み溝3を取り壊し、石組み溝5に造り替えられた際に、石組み溝4に代わって新たに片山家屋敷地内からの排水を目的として設けられたと考えられる。北端は搅乱により失われている。石組み内側の断面形は箱形を呈する。石組みは1～2段程度積まれており、石材は結晶片岩が使われている。溝廃棄時には陶磁器や土器などが廃棄され、遺物溜り（遺物溜り6）が形成されている。

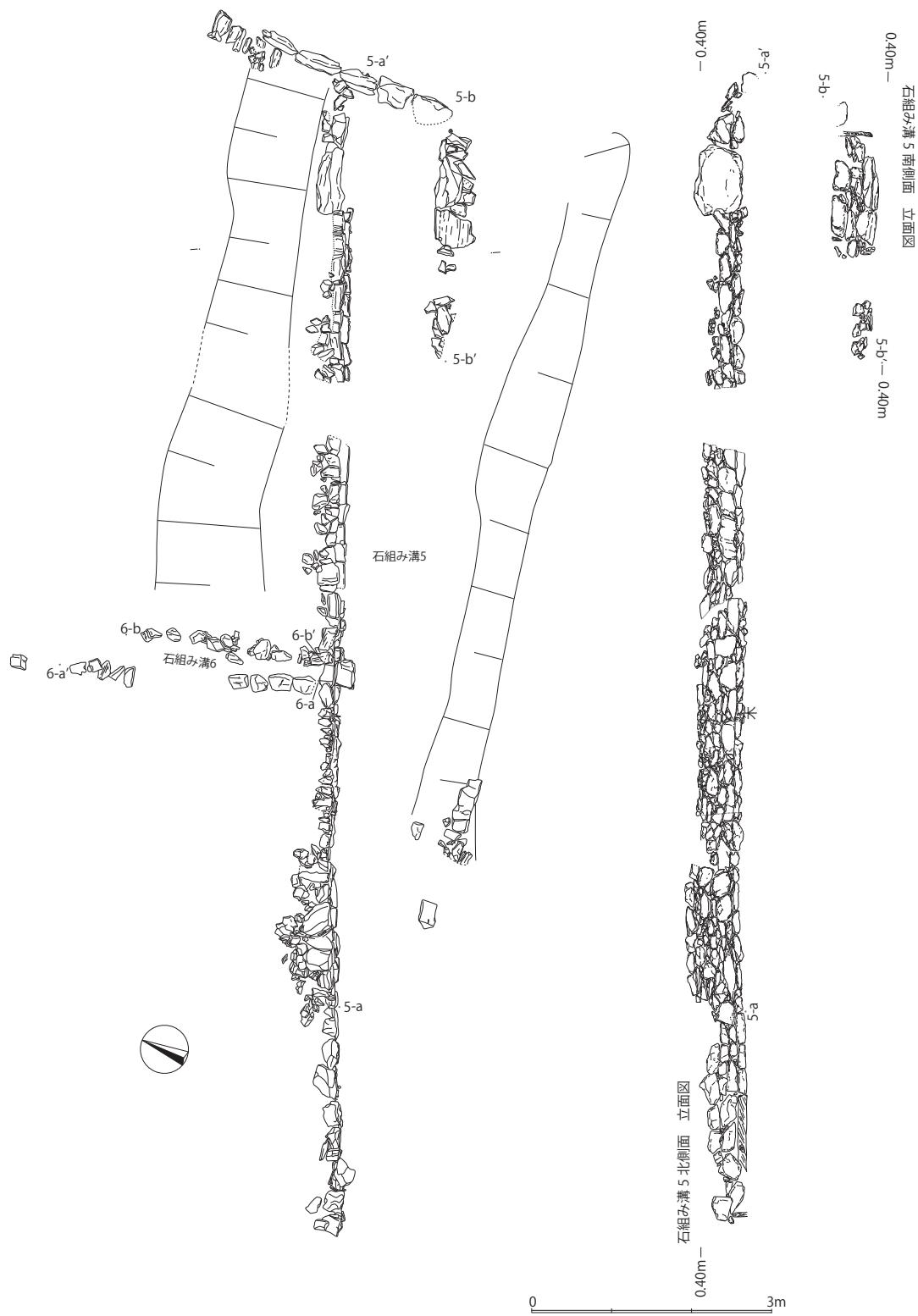
出土遺物は、肥前系磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、大谷焼、丹波系陶器、土師質土器などである。時期は18世紀末～19世紀前半である。

石組み溝7（第138図、図版35・36・40・41）

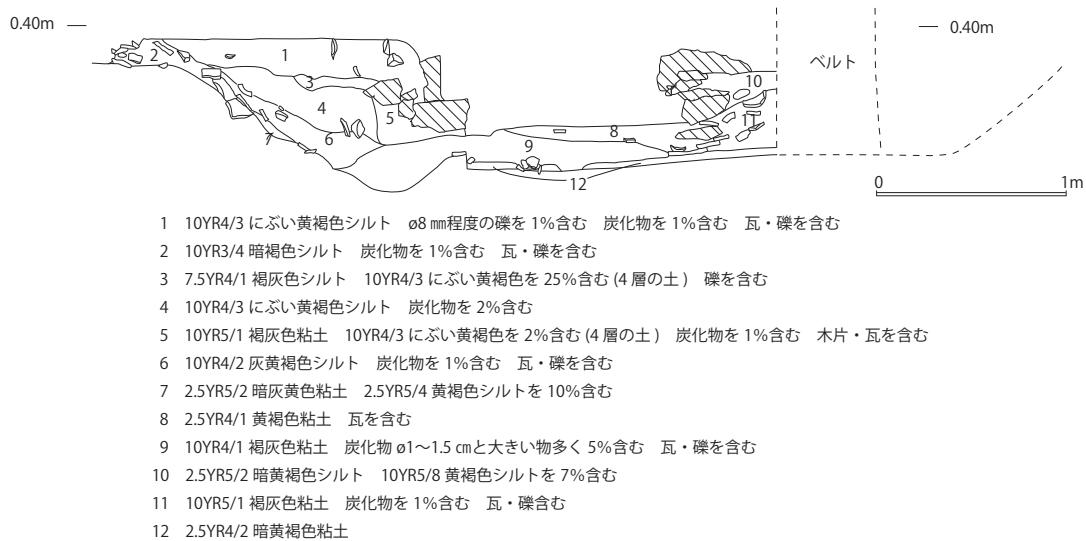
石組み溝5の南側で検出された溝。石組み溝5を取り壊し、新たに造り替えられているが、一部は石組み溝5をそのまま利用している。石組み溝7の造り替えの際に、それまで池の西側に接続していたのが南側に接続するようになっている。北側の石組みは、検出された約半分が後世の搅乱により失われている。南側は石組み溝8への付け替えに伴って取り壊されたと考えられ、残存していない。深さは0.2～0.4mを測り、石組み内側の断面形は箱形と推定される。残存長は10.4mを測る。石組みは1～3段積まれており、石材は10～60cm程度の結晶片岩が使われている。遺物は少量の陶磁器、土師質土器などが出土した。

石組み溝8（第138図、図版34～36・40～42）

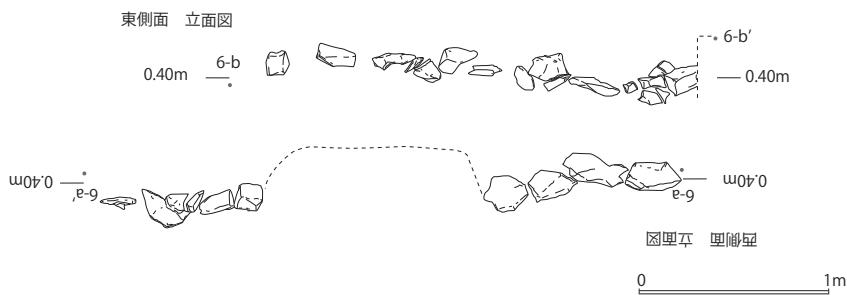
石組み溝7の南側で検出された溝で、石組み溝7を取り壊し、新たに造り替えられたもので



第135図 石組み溝5・6平面図・石組み溝5立面図（縮尺：1/80）



第136図 石組み溝5断面図（縮尺：1/40）



第137図 石組み溝6立面図（縮尺：1/40）

ある。北側の石組みは、石組み溝 7 と同じく後世の搅乱により半分が失われている。南側も一部が残存するのみである。石組みの内法は幅 0.8 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m で、断面形は箱形と推定される。残存長は 12.4 m を測る。石組みは 1 ~ 3 段積まれており、石材は 10 ~ 60 cm 程度の結晶片岩が使われている。溝廃棄時には、溝を埋めるために陶磁器や土器などが廃棄され遺物溜り (SD23、遺物溜り 4、10、14、15) [図版 34・35] が形成された。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、萩系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、大谷焼、堺・明石系陶器、珉平焼、土師質土器、瓦質土器、瓦二次加工品、金属製品、ガラス製品などが出土した。時期は 19 世紀前半である。なお、動物遺体として犬の骨がほぼ一体分出土したが、首輪も同時に出土しており、現代に埋葬されたものの可能性が高い。

石組み溝 9 (第 138 図、図版 34 ~ 36・42)

調査区南側の東寄りの部分から検出された溝で、石組み溝 7 及び 8 に南から接続している。西側の石組みが後世の搅乱により失われている。深さ 0.1 m を測り、断面形は箱形と推定される。残存長は 5.0 m を測る。石組みは 1 ~ 2 段積まれており、石材は 10 ~ 40 cm 程度の結晶片岩が使われている。片山家と黒部家の屋敷境としての機能も有していたと考えられる。溝廃棄時に溝を埋めるように遺物が廃棄され、遺物溜り (遺物溜り 3、5、7 ~ 9) [図版 34・35] が形成されている。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、堺・明石系陶器、備前系陶器、大谷焼、

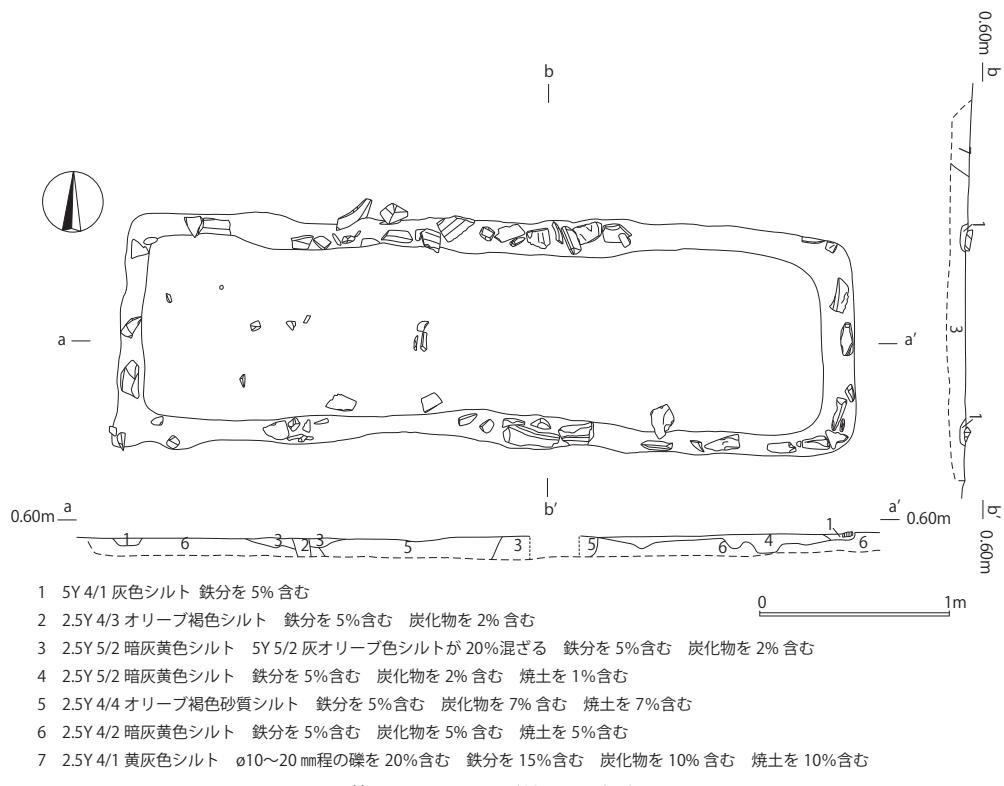


第138図 石組み溝7・8・9 (縮尺:1/80)

萩系陶器、土師質土器、瓦質土器、金属製品、石製品などが出土した。

遺物溜り（第126図）

調査区南西部（D-1・2）で検出された遺構群。屋敷境溝廃棄時に遺物溜り（遺物溜り11～13、木製品溜り）が形成されている。本来は石組み溝8に南からつながる石組み溝があったと考えられるが、石材は検出されなかつたため、廃棄時に取り除かれたか、または後世の搅乱によって失われたと考え



第139図 SX02 (縮尺: 1/40)

られる。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、土師質土器、金属製品、ガラス製品、石製品などが出土した。

蜂須賀家屋敷地内

SX02 (第139図、図版42)

調査区南東部 (D-9・10) から検出された遺構。5~30 cm ほどの結晶片岩の石材を南北 1.2 m、東西 3.9 m の長方形に並べて造られている。石列の内側からは遺物は出土していない。性格は不明であるが、検出された場所が、蜂須賀家屋敷地の庭と推定されることから、花壇の可能性が考えられる。時期は、19世紀代である。

SK08~12 (第126図、図版42)

調査区北東部 (A・B-8・9) で検出された土坑群。平面形は円形、楕円形、不整形などで、直径は 0.5~1.0 m 程度である。検出された段階で底面に近く、深さは不明である。内部に明黄褐色の粘土と結晶片岩の小礫が充填されており、柱穴と考えられる。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦片などが出土したが、すべて破片である。時期は 19世紀代である。

SK13 (第126図、図版43)

調査区北東部 (A-9) で検出された土坑。形状は不整形で、長さ 2.5 m、幅 1.0 m を測る。出土遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器、金属製品などである。時期は 19世紀代である。

SK14（第126図、図版43）

SK13の南側で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径1.0m、短径0.5mを測る。出土遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器などである。時期は19世紀代である。

SK15（第126図、図版43）

SK13の北側で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ1.5m、幅1.0mを測る。出土遺物は、肥前系陶磁器、

瀬戸・美濃系陶磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器、金属製品、土製品などである。時期は19世紀代である。

SK16（第126図、図版43）

SK13の東側で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ2.5m、幅1.5mを測る。出土遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、堺・明石系陶器、珉平焼、萩系陶器、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器、瓦、瓦二次加工品、金属製品、土製品などである。時期は19世紀代である。

SK17（第126図）

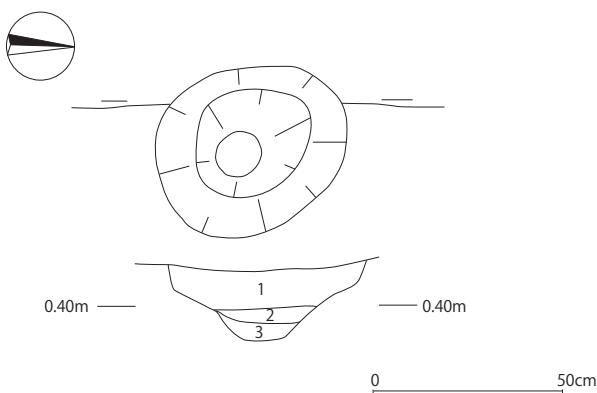
調査区北側やや西より(A-7)で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径1.5m、短径0.8mを測る。出土遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、大谷焼、丹波系陶器、土師質土器、瓦質土器などである。時期は19世紀代である。

SK18（第126図）

SK17の南側で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ2.5m、幅1.2mを測る。出土遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、土師質土器、透明釉土器、金属製品などである。時期は19世紀代である。

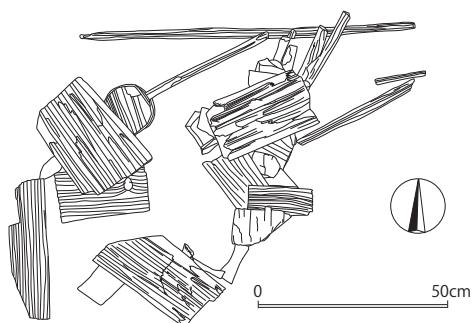
SK19（第126図、図版43）

調査区北東部(A-9)で検出された土坑。平面形は橢円形で、長径1.5m、短径0.5mを測る。出土遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、土師質土器、瓦質土器、透明釉土器などである。SK19出土の萩系陶器ピラ掛け碗の破片とSK16出土のものが接合している。時期は19世紀代である。



- 1 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 5Y6/2 灰オリーブ色シルトが15%混入 10YR5/6 黄褐色シルトが斑状に7%混入
炭化物を5%含む
2 5Y5/3 灰オリーブ色シルト 5Y5/2 灰オリーブ色シルト・7.5Y5/2 灰オリーブ色シルトがまだらに10%混入
炭化物を1%含む
3 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルトが15%・5Y5/2 灰オリーブ色シルトが10%まだらに混入
10YR5/6 黄褐色シルトがブロック状に2%混入

第140図 SK119（縮尺：1/20）



第141図 遺物溜り17木製品類出土状況（縮尺：1/20）

SK119（第140図）

調査区東側（B-10）で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.5m、深さ0.2mを測る。断面形は逆凸字形を呈する。遺物は出土していないが、遺構の切り合いや層位から19世紀代と考えられる。

遺物溜り17（第141図、図版43）

調査区南側やや東寄りで検出された遺物溜り。分布範囲は不整形で、南北0.8m、東西1.1mを測る。検出された時点では底に近く、深さや断面形は不明である。一部を石組み溝2によって搅乱を受けている。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、萩系陶器、堺・明石系陶器、大谷焼、土師質土器、瓦質土器、金属製品、石製品、木製品などが出土した。時期は18世紀末～19世紀前半と考えられる。

遺物溜り18（第126図）

遺物溜り17の東側で検出された土坑。平面形は半円形で、直径1.3mを測る。検出された時点では底に近く、深さや断面形は不明である。出土遺物は、肥前系陶磁器、備前系陶器、大谷焼、土師質土器、金属製品などである。時期は18世紀後半～19世紀前半と考えられる。

遺物溜り19（第126図）

遺物溜り17の東側で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ4.5m、幅2.7mを測る。検出された時点では底に近く、深さや断面形は不明である。一部を石組み溝2によって搅乱を受けている。出土遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、堺・明石系陶器、大谷焼、土師質土器、瓦質土器、金属製品などである。時期は18世紀後半～19世紀前半である。

遺物溜り20（第126図）

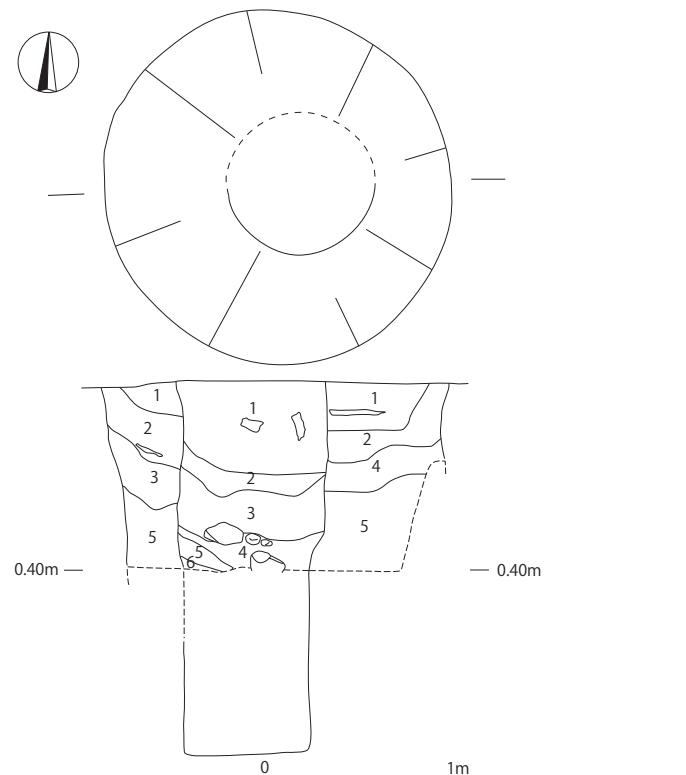
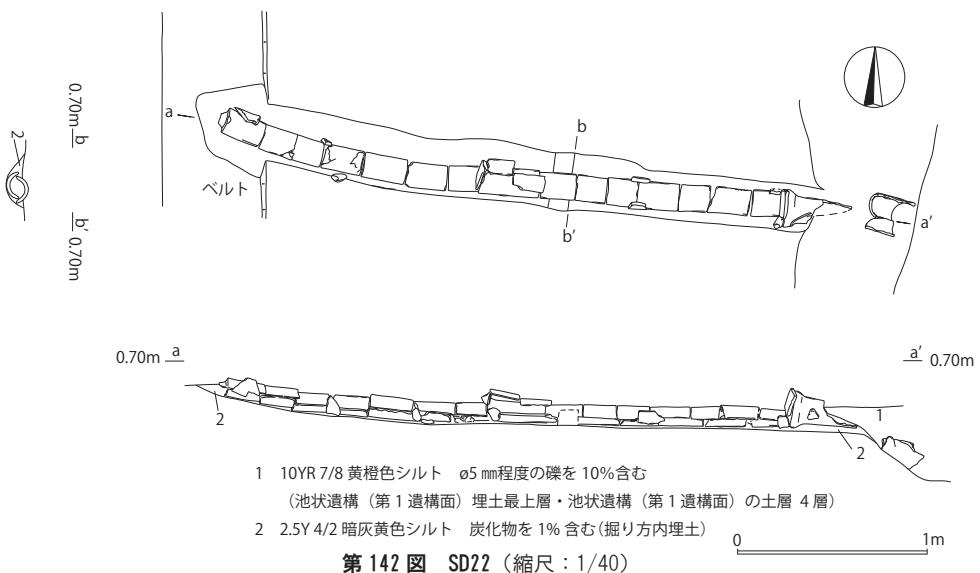
遺物溜り19の東側で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ3.0m、幅1.2mを測る。検出された時点では底に近く、深さや断面形は不明である。一部を石組み溝2によって搅乱を受けている。出土遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、土師質土器、瓦質土器、金属製品などである。時期は18世紀後半である。

片山家屋敷地内**SD22（第142図、図版45）**

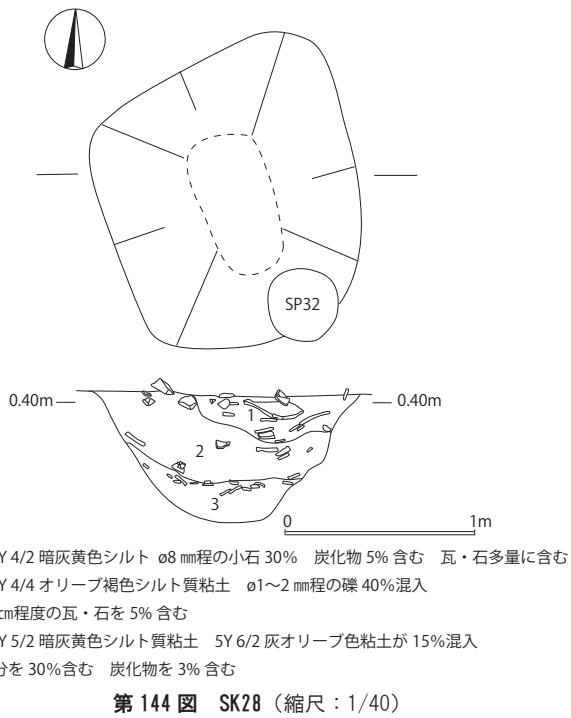
調査区北部中央付近（A-5）で検出された暗渠。丸瓦と土師質土管で構築されている。片山家屋敷地内から池に排水する機能を有していたと考えられる。池状遺構（第1遺構面）が石組みと土留めの柵によるものから、土手によるものに造り替えられた際に破壊されている。幅0.2～0.3m、深さ0.1mを測り、断面形はレンズ形を呈する。東西に3.4m分を検出した。遺物は、遺構を形成していた丸瓦と土師質土管の他に肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、土師質土器などが出土したが、いずれも破片である。時期は、遺構の切り合い関係から18世紀末～19世紀前半と考えられる。

SE25（第143図、図版43）

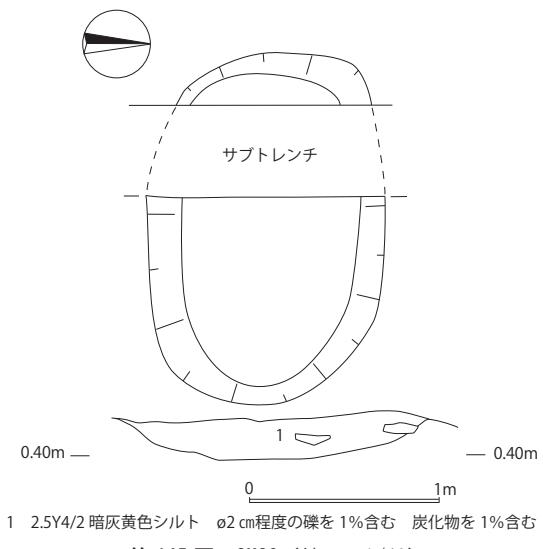
調査区北東部（A-3）で検出された井戸。井戸の構築材は検出されなかつたため、抜き取られた、または素掘りであったと考えられる。直径は1.9mを測り、深さは下層からの湧水により底面まで完掘できなかつたため、正確な値は分からぬが、2.0m以上である。遺物は、肥前系陶磁器、関西系



第143図 SE25 (縮尺: 1/40)



第144図 SK28（縮尺：1/40）



第145図 SK60（縮尺：1/40）

遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、瓦二次加工品などが出土した。時期は18世紀後半～19世紀前半である。

SK73（第146図、図版44）

調査区南部(C-5)で検出された土坑。平面形は不整な方形で、南北2.9m、東西2.7m、深さ0.7mを測る。断面形は底のやや不安定な椀形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、堺・明石系陶器、珉平焼、萩系陶器、土師質土器、瓦質土器、鉄製品などが出土した。時期は18世紀後半～19世紀前半である。

SP86（第147図）

調査区中央部東側(C-8)で検出された柱穴。柱根は残存していないが、底部に礎板石と考えられる

磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、土師質土器、金属製品、木製品などが出土した。下層にある池状遺構（第2・第3遺構面）を掘り込んで造られているため、その時期の遺物も含まれている。時期は19世紀前半である。

SK28（第144図、図版43）

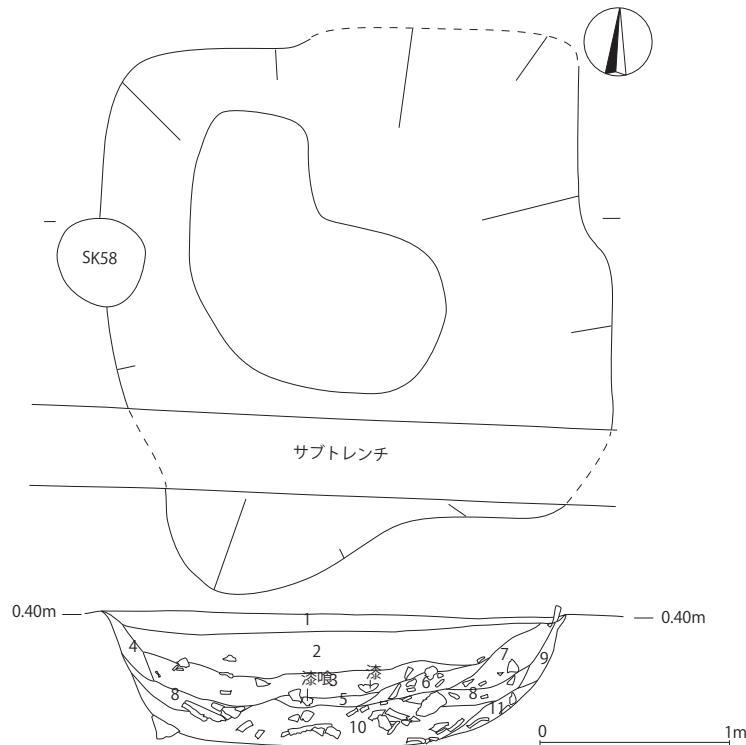
調査区南部中央付近(D-5)で検出された土坑。平面形は円形に近い不整形で、南北1.7m、東西1.4m、深さ0.7mを測る。断面形は底の不安定な椀形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器、瓦質土器、金属製品などが出土した。時期は18世紀後半～19世紀前半である。

SK29（第126図、図版43）

SK28の西側(D-5)で検出された土坑。平面形は方形で、南北長1.7m、東西長1.6mを測る。出土遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、堺・明石系陶器、萩系陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦二次加工品、金属製品、石製品、漆製品などである。時期は18世紀後半～19世紀前半である。

SK60（第145図、図版44）

調査区南部(C-6)で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径1.9m、短径1.3m、深さは0.2mを測る。断面形はレンズ形を呈する。



- 1 2.5Y5/3 黄褐色と 2.5Y4/3 オリーブ褐色の中間色シルト 炭化物 1%含む (上層)
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 10YR4/4 褐色シルトを斑状に 15%含む $\phi 10\text{ mm}$ 程度の礫を 10%含む
炭化物 1%含む (上層)
- 3 2層より強い灰色の灰オリーブ色シルト 10YR4/4 褐色シルトを斑状に 15%含む
 $\phi 10\text{ mm}$ 程度の礫を 10%含む 炭化物 1%含む (下層)
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 5YR5/2 灰オリーブ色シルトが 20%混入 $\phi 10\text{ mm}$ 程度の礫を 2%含む
炭化物 1%含む (下層)
- 5 7.5Y5/1 灰オリーブ色シルト 炭化物 1%含む (下層)
- 6 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトが斑状に 40%混入 (下層)
- 7 5Y4/1 灰色と 5Y4/2 灰オリーブ色の中間色シルト 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトが 30%混入
2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトが 25%混入 $\phi 10\text{ mm}$ 程度の礫を 10%含む 炭化物 2%含む (下層)
- 8 5Y5/2 灰オリーブ色と 5Y4/2 灰オリーブ色の中間色粘土(微砂を 10%含む) 5Y5/1 粘土(微砂を 10%含む)が 2%混入
10YR4/4 褐色シルトが 3%混入 炭化物を 2%含む 木製品含む (下層)
- 9 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトが 7%混入 10YR4/6 褐色シルト 2%混入
- 10 5Y3/1 オリーブ黒色粘土(微砂を 10%含む) 10Y4/1 灰色粘土(微砂を 10%含む)が 5%混入
7.5Y6/2 灰オリーブ色シルトが 15%混入 5Y5/4 オリーブ色シルトが 1%混入 炭化物を 20%含む 多量の木製品等遺物を含む
- 11 5Y4/2 灰オリーブ色粘土(微砂 5%含む) 5Y4/2 灰オリーブ色シルトが 25%混入 炭化物を 1%含む 木片をわずかに含む

第146図 SK73 (縮尺: 1/40)

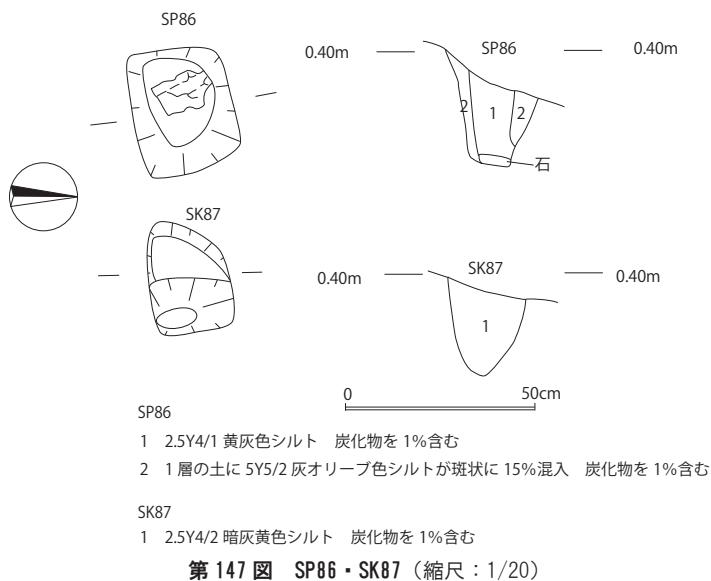
石材が残存していた。平面形は長方形で、長さ 0.3 m、幅 0.2 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。時期は遺構の切り合いから 18 世紀後半～19 世紀前半と考えられる。

SK87 (第 147 図)

SP86 の東側で検出された土坑。SP86 と対になると考えられる。平面形は不整な橢円形で、長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は U 字形を呈する。時期は 18 世紀後半～19 世紀と考えられる。

SK116 (第 148 図、図版 44)

調査区南側 (D-4・5) で検出された土坑。平面形は長方形で、長さ 1.9 m、幅 1.5 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は箱形に近い椀形を呈する。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器、土製品、木製品などが出土した。時期は 18 世紀後半～19 世紀前半である。下層の遺構を掘り込んでいたため、17 世紀代の遺物も混入している。



第147図 SP86・SK87（縮尺：1/20）

SK134（第149図、図版44）

調査区南側（D-4）で検出された土坑。平面形はやや不整な隅丸長方形で、長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.2mを測る。断面形は不整なレンズ形を呈する。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、土師質土器などが出土した。時期は18世紀後半～19世紀前半である。下層の遺構を掘り込んでいるため、17世紀代の遺物も混入している。

SK135（第150図、図版45）

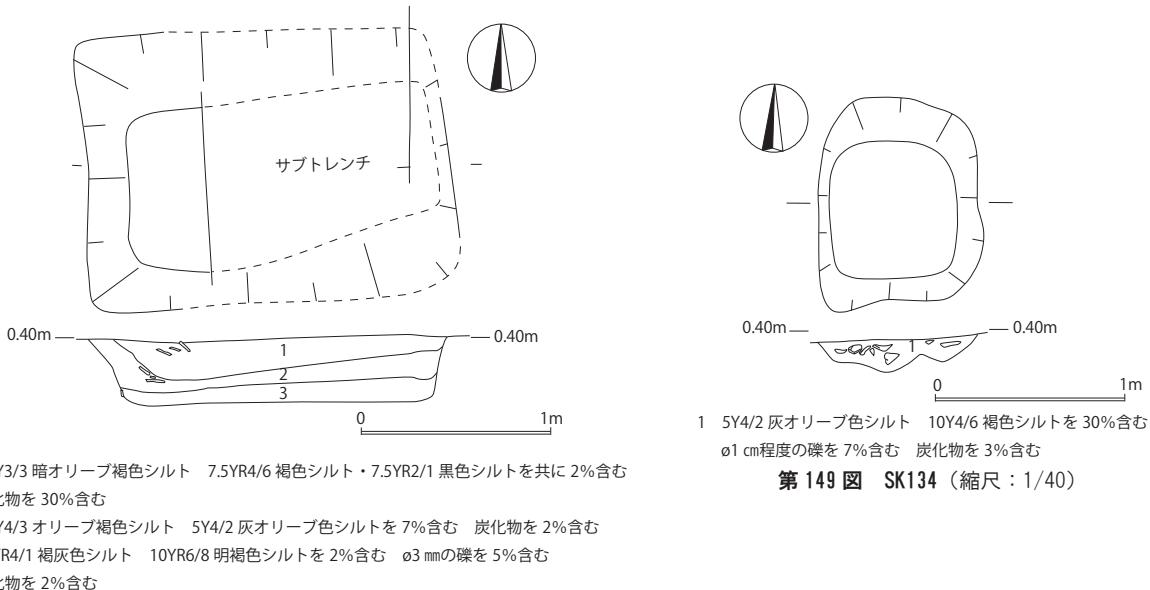
調査区南部（C・D-4）で検出された土坑。平面形は長方形で、長さ2.4m、幅1.8m、深さ0.5mを測る。断面形は椀形を呈する。西端から土師皿が16枚重ねられた状態で出土した。屋敷境に近い場所であることから、地鎮祭祀に伴うもの可能性が考えられる。遺物は、中国系磁器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、土師質土器、瓦質土器、金属製品、土製品などが出土した。時期は18世紀後半～19世紀前半である。下層の遺構を掘り込んでいるため、17世紀代の遺物も混入している。

SK137（第151図、図版45）

SK135の東側（C-4）で検出された土坑。平面形は隅丸長方形で、長さ1.7m、幅1.1m、深さ0.3mを測る。断面形はやや隅丸の箱形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、大谷焼、丹波系陶器、堺・明石系陶器、土師質土器、鉄製品、石製品などが出土した。時期は18世紀後半～19世紀前半である。下層の遺構を掘り込んでいるため、17世紀代の遺物も混入している。

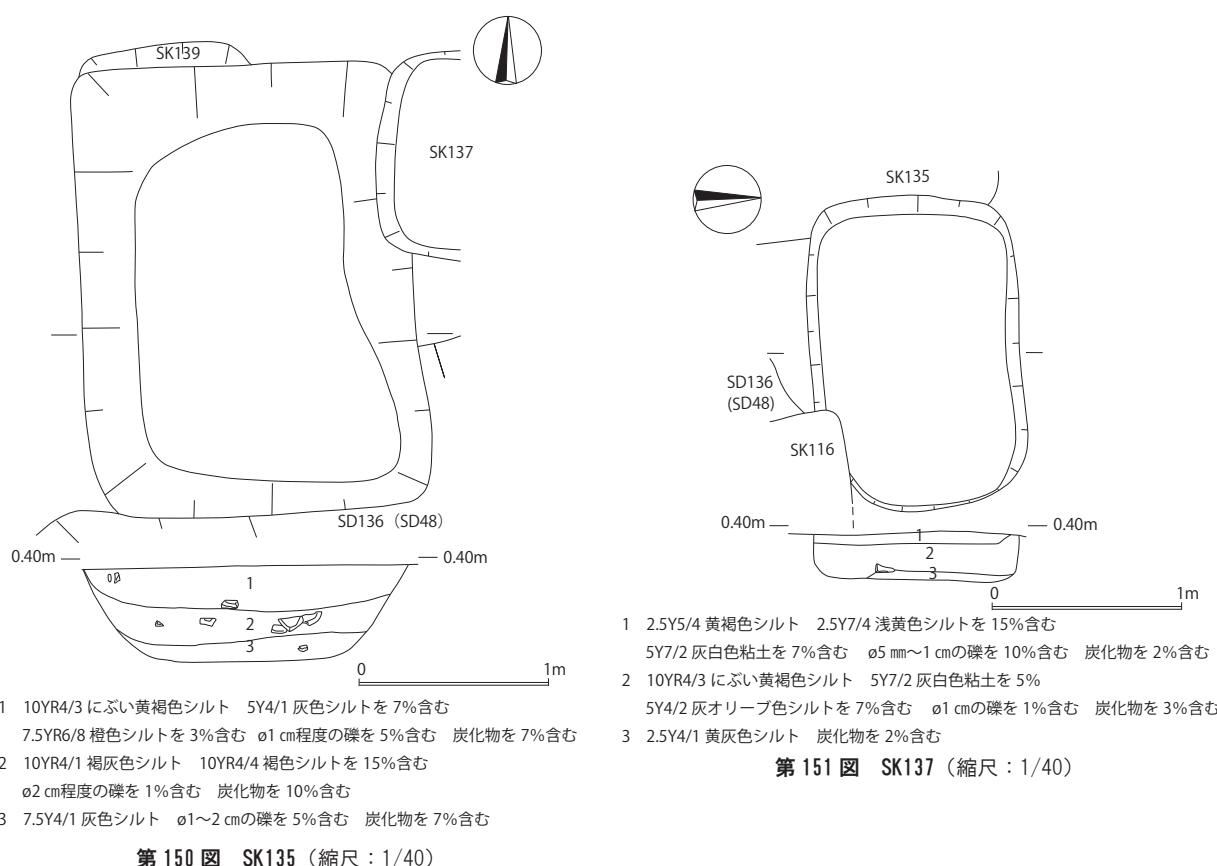
黒部家屋敷地内**遺物溜り16（第126図、図版46）**

調査区南西部（D-2）で検出された土坑。平面形は円形で、直径0.8mを測る。出土遺物は、大谷焼、土師質土器である。時期は19世紀前半である。



1 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 10Y4/6 褐色シルトを 30% 含む
 ϕ 1 cm程度の礫を 7% 含む 炭化物を 3% 含む

第149図 SK134 (縮尺: 1/40)



B 上層

SK03 (第126図)

調査区南側中央よりやや東側 (D-7) から検出された柱穴と考えられる土坑。平面形は長方形で長さ 1.0 m、幅 0.8 m を測る。埋土には炭化物が多く含まれ、底面には礎石と考えられる石材が置かれていた。石材の材質は結晶片岩である。遺物は、京・信楽系陶器、土師質土器などが出土しているが、いずれも破片である。詳細な時期は不明であるが、遺構の切り合いや層位などから 19世紀代と考えられる。

SK04（第126図）

SK03よりやや東側（D-7）で検出された柱穴と考えられる土坑。平面形は楕円形で、長径1.0m、短径0.6mを測る。底面に結晶片岩の石材が置かれており、SK03と同じく礎石と考えられる。一部、SK03との切り合い関係があり、建物の建替え時に柱の位置がSK04からSK03に変更されたと考えられる。遺物は、肥前系磁器などが出土しているが、いずれも破片である。詳細な時期は不明であるが、遺構の切り合いや層位などから19世紀代と考えられる。

SK05（第126図）

SK03のやや南側（D-7）で検出された土坑。平面形は円形で、直径1.3mを測る。出土遺物は破片が多いが、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、大谷焼、丹波系陶器や土師質土器、瓦質土器などがある。時期は19世紀前半～後半に属するものである。図化できた遺物は、産地不明の磁器の皿、コップ、鉢である。

SD06（第126図）

調査区南側中央よりやや東側（C・D-7）で検出された溝。南北に延び、両端を遺構と搅乱により破壊されている。幅0.5mを測り、南北に6.0m分検出した。断面形はU字形を呈する。遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、土師質土器、金属製品などが出土している。いずれも破片資料のため、詳細な時期は不明であるが、遺構の切り合いや層位などから19世紀代と考えられる。

SK07（第126図）

調査区中央部やや東側（B-7）で検出された土坑。平面形は円形で、直径1.5mを測る。出土遺物には、陶磁器類や土器があり、破片資料が多いが、18世紀後半～19世紀後半のものである。

SP30～38（第126図、図版46）

調査区南側中央付近（D-4～6）で検出された土坑群。平面形は円形で、規模はいずれも直径0.3～0.4m程度を測り、断面形はU字形を呈する。東西にほぼ直線に並んでいることから柵列の柱穴と考えられる。遺物は、SP32からガラス片、SP33からガラス瓶が出土している。時期はいずれも近代（19世紀後半以降）と考えられる。

遺物溜り

遺構検出時にすでに、上部の大半が現代の搅乱によって失われており、詳細は不明であるが、おそらくゴミなどの廃棄土坑と考えられる遺構群である。時期はいずれも19世紀代である。

遺物溜り1（第126図、図版46）

調査区南側やや東側（C・D-8）で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ2.3m、幅1.5mを測る。検出された時点ではほとんど底面に近い状態であったため、深さ、断面形は不明である。出土遺物は、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、土師質土器、瓦質土器、金属製品、石製品、動物遺体などである。

遺物溜り2（第126図）

調査区中央部やや東側（B・C-7・8）で検出された土坑。平面形は不整形で、長さ4.7m、幅1.7mを測る。検出された時点ではほとんど底面に近い状態であった。深さ、断面形は不明である。出土遺物は、陶器、肥前系磁器、土師質土器、瓦質土器などである。

遺物溜り 21（第 126 図）

調査区北東部（A-10）で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 1.0 m、短径 0.8 mを測る。検出された時点ではほぼ底面に近い状態だったので、深さ、断面形は不明である。出土遺物は、肥前系陶磁器である。

遺物溜り 22（第 126 図）

調査区北東部（B-9）で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 1.8 m、短径 1.0 mを測る。検出された時点ではほぼ底面に近い状態だったので、深さは不明である。出土遺物は、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、堺・明石系陶器である。

遺物溜り 23（第 126 図）

調査区中央部やや東寄り（C-7）で検出された土坑。平面形は楕円形で、長径 1.0 m、短径 0.8 mを測る。大幅に後世の搅乱を受けており、深さは不明である。出土遺物は、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、関西系磁器、京・信楽系陶器、堺・明石系陶器、大谷焼、土師質土器などである。

遺物溜り 24（第 126 図）

調査区東部（B-10）で検出された土坑。平面形は円形で、直径 0.6 mを測る。大幅に後世の搅乱を受けており、深さは不明である。出土遺物は、肥前系磁器、京・信楽系陶器、瓦質土器などである。

（中原 計・端野晋平）

第3節 遺物

1. 陶磁器・土器・土製品

第3遺構面

池状遺構（第152～162図）

1は景德鎮窯系磁器の碗である。畠付から高台内は無釉である。青花により外面に笛文？、口縁部内に圈線、見込に竹文？を描く。焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。高台際に虫喰い、高台内にカンナ痕がみられる。

2は景德鎮窯系磁器の皿である。青花の芙蓉手。型打成形により口縁部は輪花となり、端部に虫喰いがみられる。高台に粗い砂が多量に付着する。割れ口に漆継の痕跡がみられる。

3・4は景德鎮窯系磁器の鉢である。3は青花により外面に東屋山水文、口縁部内面に圈線、見込に山水文と人物文、高台内に二重圈線内「大明成化年造」銘を描く。高台内側の釉際処理は不揃いで、高台際に虫喰い、高台内にカンナ痕がみられる。4は型打成形により口縁部は輪花となる。外面に青花による柳下人物文を描く。口縁端部と腰部に虫喰いがみられる。

5は漳州窯系磁器の皿である。胴部外面に鎬文を施し、内面に青花と釉裏紅（発色は灰色）による草花文と蝶文を描く。胴部外面と高台内に虫喰いがみられる。

6・7は肥前系磁器の初期伊万里の丸碗である。6は外面に染付による唐草文、7も外面に染付による文様を描く。

8は肥前系磁器の初期伊万里の筒形碗である。外面に染付による松竹梅文を描く。

9は肥前系磁器の天目形の碗である。畠付を含め全面に透明釉をかける。外面に鎬文を施し、染付による「福寿」字を描く。高台に粗い砂が付着する。

10は肥前系磁器のU字形高台の皿である。高台内にハリ支え痕がみられる。染付により外面に唐草文、内側面に墨弾きの蔓草文、高台内に一重圈線を描く。

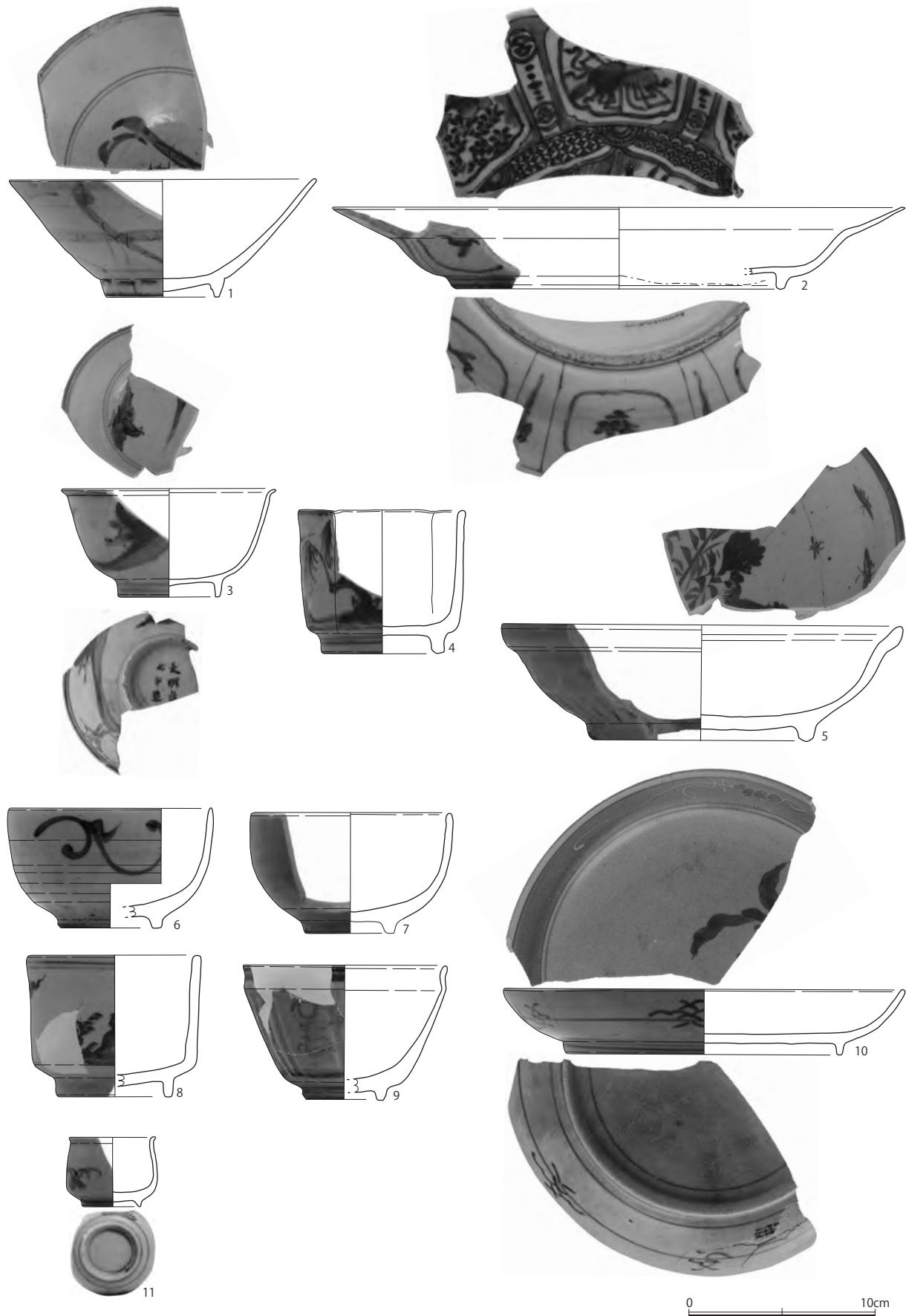
11は肥前系磁器の端反形小坏である。染付により外面に草文、高台内に一重圈線を描く。

12は肥前系陶器の呉器手碗である。畠付を除き灰釉をかける。外面にスヌが付着する。

13～16は肥前系陶器の灰釉唐津碗である。13は胴下半部外面から高台内が無釉で、漆継が施されている。14は畠付が無釉で、わずかに砂が付着する。15は胴下半部外面から底部が無釉で、見込に胎土目、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。16は胴上部外面から底部が無釉で、底部に右回転の糸切り離し痕と砂目の上に置かれていたと思われる白色の痕跡がみられる。

17は肥前系陶器の鉄釉丸碗である。胴下部外面から高台内は無釉である。

18～26は肥前系陶器の灰釉砂目皿である。18・19は胴下半部外面から高台内が無釉で、見込と高台に砂目がみられる。20は胴下半部外面から高台内が無釉で、見込に砂目がみられる。外面にスヌが付着する。21は畠付から高台内が無釉で、高台内にのみ砂目がみられる。22は胴下半部外面から高台内が無釉で、高台にのみ砂目の痕跡がみられる。23は高台と高台内が無釉で、見込に砂目がみられる。24は高台脇から高台内が無釉で、見込に砂目、高台内に「十」の墨書がみられる。25・26は胴下部外



第152図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類（1）（縮尺：1／3）

面から高台内が無釉で、見込に砂目、高台に砂目の上に置かれていたと思われる白色の痕跡がみられる。

27～43は肥前系陶器の灰釉溝縁皿である。27～29・31・32・34・37・38・41は胴部外面から高台内が無釉で、27～29・31・32・37・41は見込と高台、38は見込、34は高台にのみ砂目がみられる。30・33・36・39は全面に灰釉をかけ、30・33は見込と高台、39は見込、36は疊付にのみ砂目がみられる。35・42・43は高台と高台内が無釉で、35・42は見込と高台、43は見込に砂目がみられる。40は高台が無釉で、見込と高台に砂目がみられる。41～43の口縁部に灯芯油痕、43の底部にススの付着がみられ、灯明皿に転用したと思われる。

44は肥前系陶器の絵唐津の皿である。疊付は無釉である。内面に鉄絵による植物文を描く。見込と疊付に砂目がみられる。

45～47は肥前系陶器の灰釉皿である。45は胴下部外面から高台内、46・47は胴下半部外面から高台内が無釉である。目跡はみられない。47の口縁部全周に灯芯油痕がみられ、灯明皿に転用したと思われる。

48～58は肥前系陶器の胎土目皿である。48は胴下部外面から高台内、49～57は胴下半部外面から高台内、58は胴上部外面から高台内を除き灰釉をかける。57は鉄釉を漬け掛けする。見込に胎土目を取り外した痕跡がみられる。56は胴下部外面にも胎土目を取り外した痕跡がみられる。

51は外面、52は内外面にススが付着する。58の口縁部に灯芯油痕がみられ、内面にススが付着する。灯明皿に転用したと思われる。

59は肥前系陶器の陶胎染付の皿である。見込に染付による松文と鳥文を描く。疊付の内側に砂が付着する。高台の残存部に切れ込みが1箇所みられる。池状遺構（第1遺構面）埋土最上層の破片と接合する。

60は肥前系陶器の瓶である。鋳釉を塗布したのち、肩部外面から下に鉄釉（黒飴釉）、口縁部から肩部外面に藁灰釉を掛け分ける。内面に同心円状の当て具痕がみられる。朝鮮唐津。

61は肥前系陶器の絵唐津の壺である。胴下部から底部を除く外面と口縁端部から口縁部内面を除く内面に灰釉をかける。外面に鉄絵による丸文を描く。漆継が施されている。

62～64は瀬戸・美濃系陶器の天目碗である。高台脇から高台内を除き鉄釉（天目釉）をかける。62は疊付際を面取りする。

65・66は瀬戸・美濃系陶器の白天目碗である。65は胴下半部外面から高台内を除き長石釉をかける。疊付際を面取りする。66は疊付から高台内を除き長石釉をかける。

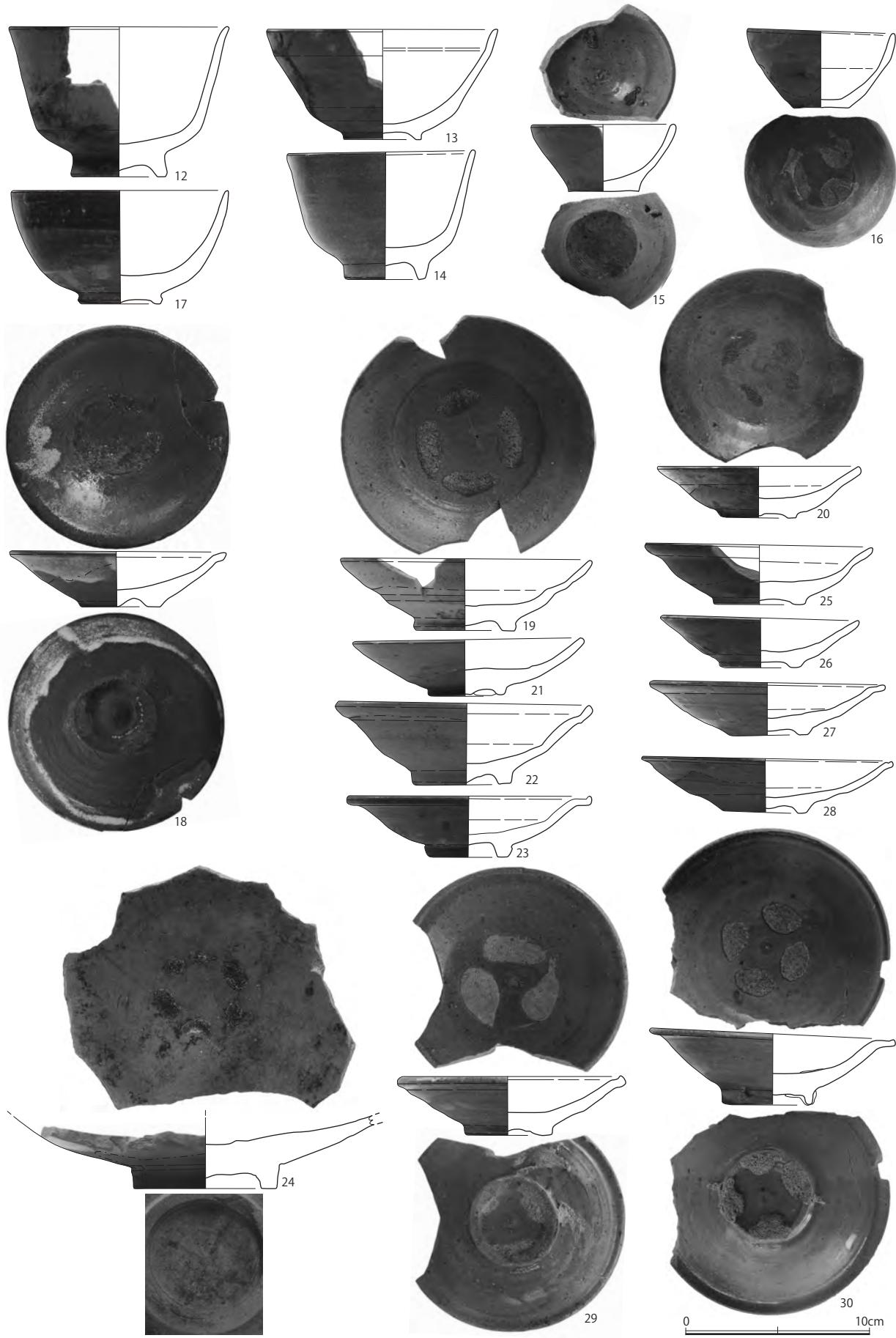
67は瀬戸・美濃系陶器の灰釉碗である。高台内は無釉である。線彫りにより外面に蓮弁文、見込に分銅文と「金・玉?」、「堂・浦」の文字をそれぞれ向かい合わせに描く。割れ口に漆継の痕跡がみられる。

68・69は瀬戸・美濃系陶器の鉄釉丸碗である。68は高台と高台内、69は疊付から高台内が無釉である。

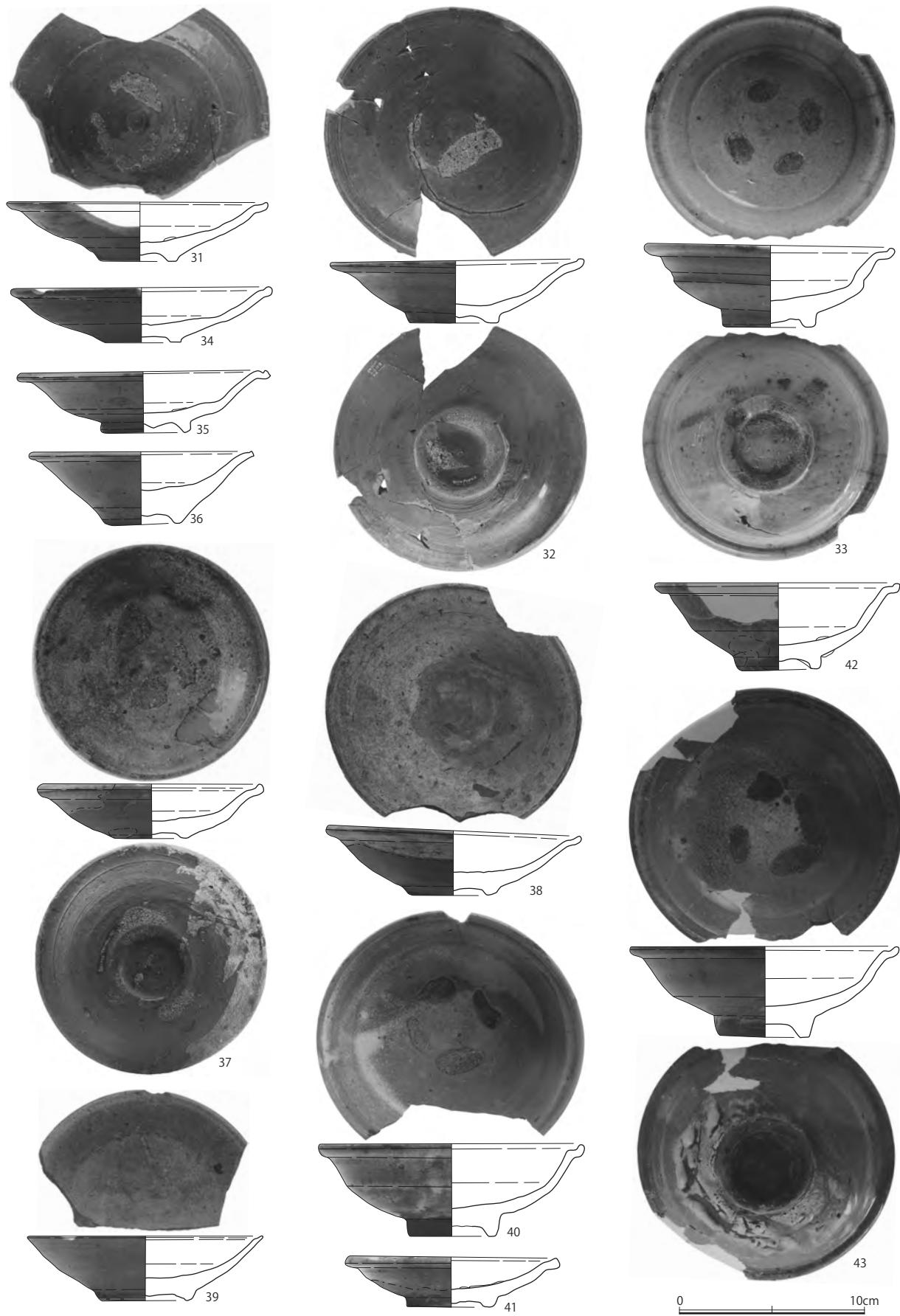
70は瀬戸・美濃系陶器の灰釉丸皿である。全面に灰釉をかける。見込に円錐ピン痕が5箇所、高台内に窯道具痕が環状にみられる。

71は瀬戸・美濃系陶器の型打皿である。型打成形により葉形となる。環状の三足の疊付を除き灰釉をかける。

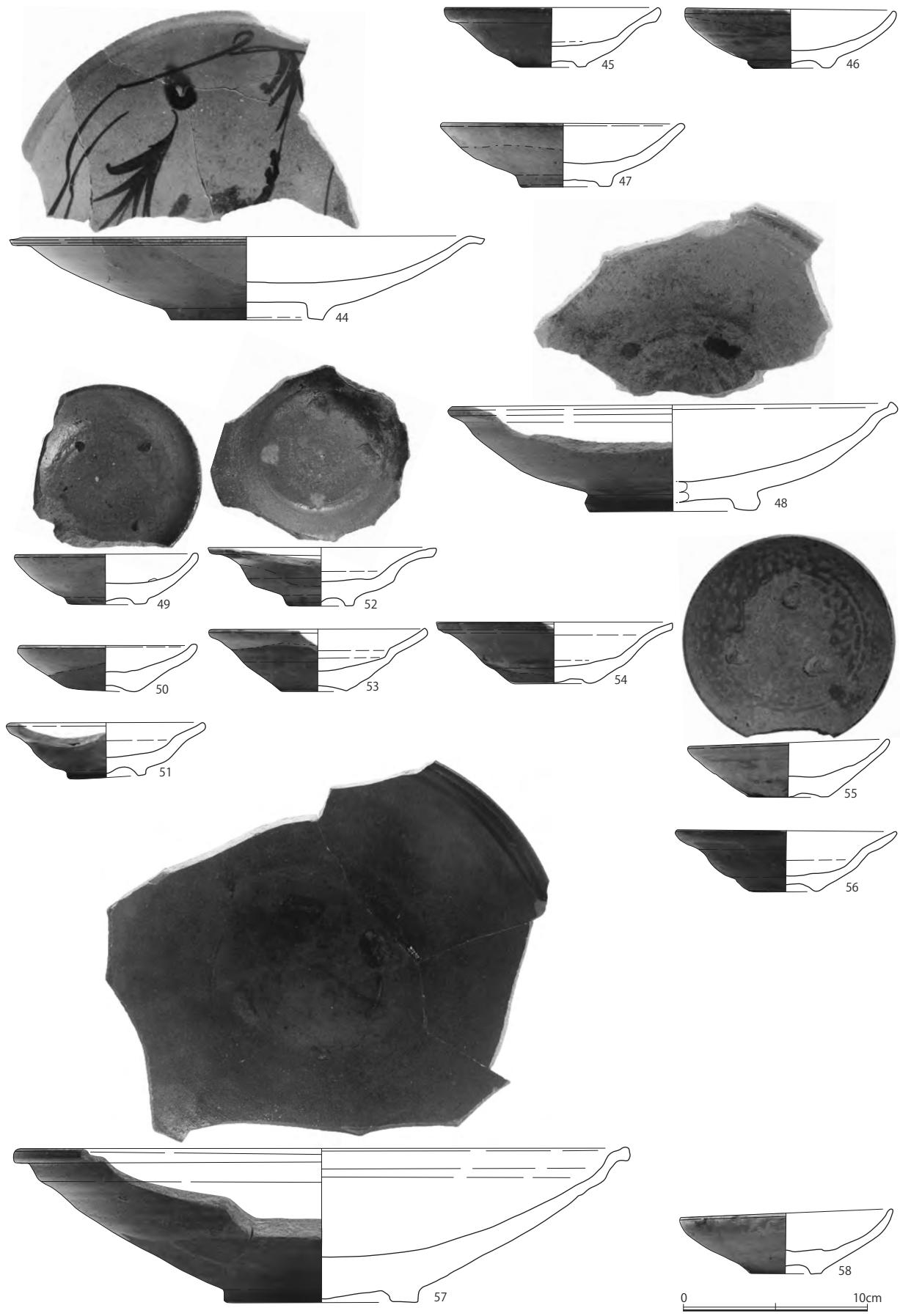
72は瀬戸・美濃系陶器の鉄絵皿である。疊付を除き長石釉をかける。内側面に鉄絵による唐草文を描く。高台内に円錐ピン痕がみられる。



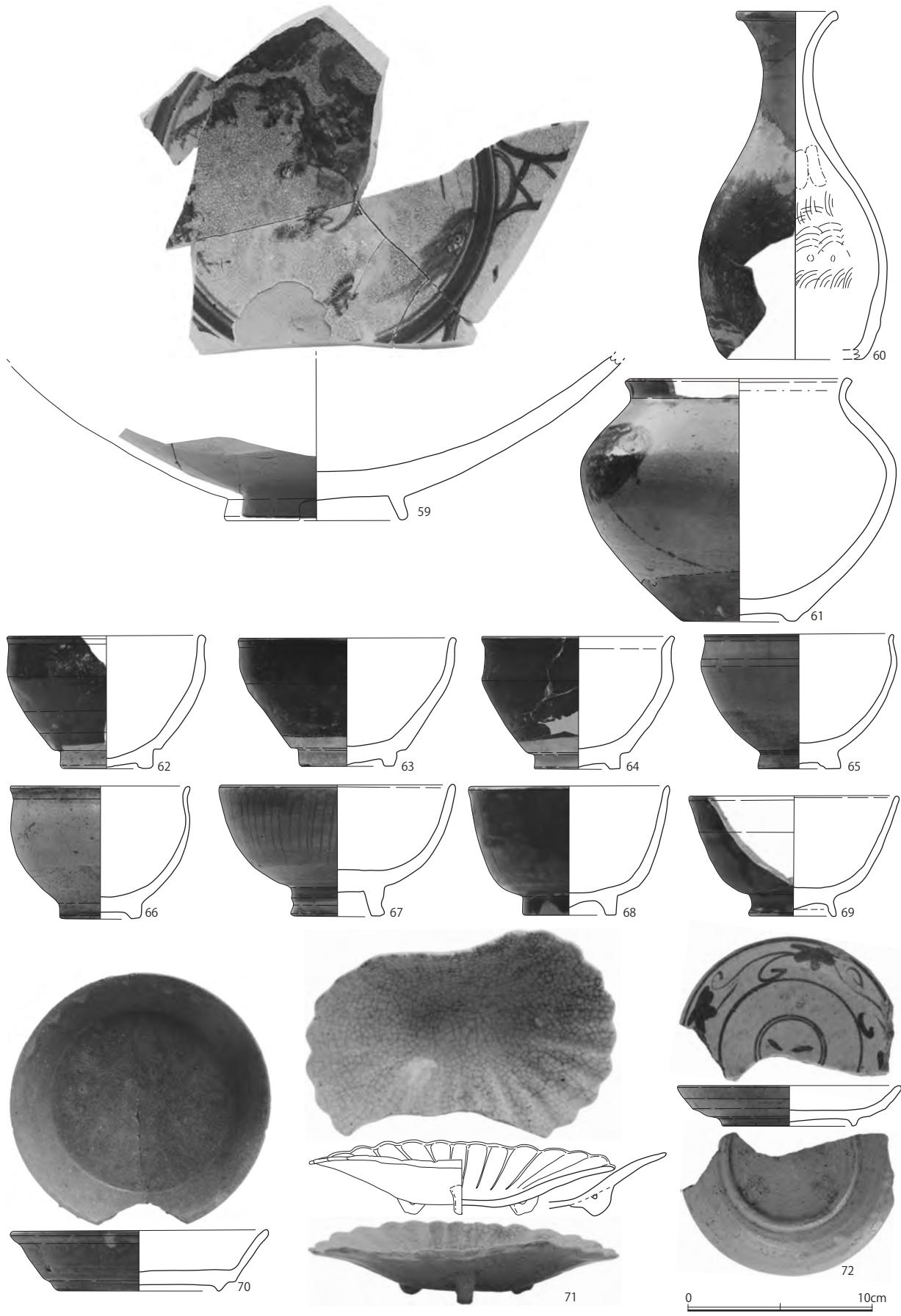
第153図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類（2）（縮尺：1／3）



第154図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類(3)（縮尺：1／3）



第155図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類（4）（縮尺：1／3）



第156図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類（5）（縮尺：1／3）

73・74は瀬戸・美濃系陶器の志野織部の向付である。73は高台脇から高台内を除き長石釉をかける。鉄絵により見込に木賊文、外面にも文様を描く。74は全面に長石釉をかける。鉄絵により外面に木賊文、見込に帆掛け舟文を描く。底部に円錐ピン痕がみられる。

75は瀬戸・美濃系陶器の青織部の向付である。板作り成形および型打成形で、内面全面に布目痕がみられる。底部を除き長石釉をかけ、緑釉を漬け掛けする。鉄絵により外面に木賊文、見込に花文と葉文を描く。底部露胎部全面にススの付着がみられる。

76は瀬戸・美濃系陶器の黄瀬戸鉢である。高台内中央部を除き灰釉をかけ、内側面に緑釉を流し掛ける。見込に櫛描きによる同心円文と印花による菊花文を施す。見込文様の外側を方形に釉剥ぎし、この部分に団子トチンの痕跡がみられる。畳付には団子トチンが付着する。

77は備前系陶器のサヤ形鉢である。底部を除く外面に塗土を施す。底部外面に重ね焼き痕と「〇」の刻印がみられる。

78は備前系陶器の瓶である。外面に自然釉がかかる。

79は備前系陶器の盤である。外面に火襷がみられる。

80・81は備前系陶器の擂鉢である。口縁帶上端と下端に重ね焼き痕がみられる。

82は備前系陶器の急須である。注口は欠損する。胴部外面に火襷、底部外面に右回転の糸切り離し痕がみられる。内面にススが付着する。

83～126は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。86・90・91・94・96・98・101・102・104・106・108・112・114～119は口縁部に灯芯油痕がみられ、93は見込、96・108・116は底部と見込、99・103・106は底部、97・98・102・110・118は内外面、123は内面にススが付着する。

127～137は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。130～132は口縁部に灯芯油痕がみられる。127・132は底部と見込にススが付着する。129は内外面にススが付着し、外面のススは一部タール状である。

138～142は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕は不明である。138・139は摩耗が著しい。139・142は口縁部に灯芯油痕がみられ、142は内外面にススが付着する。

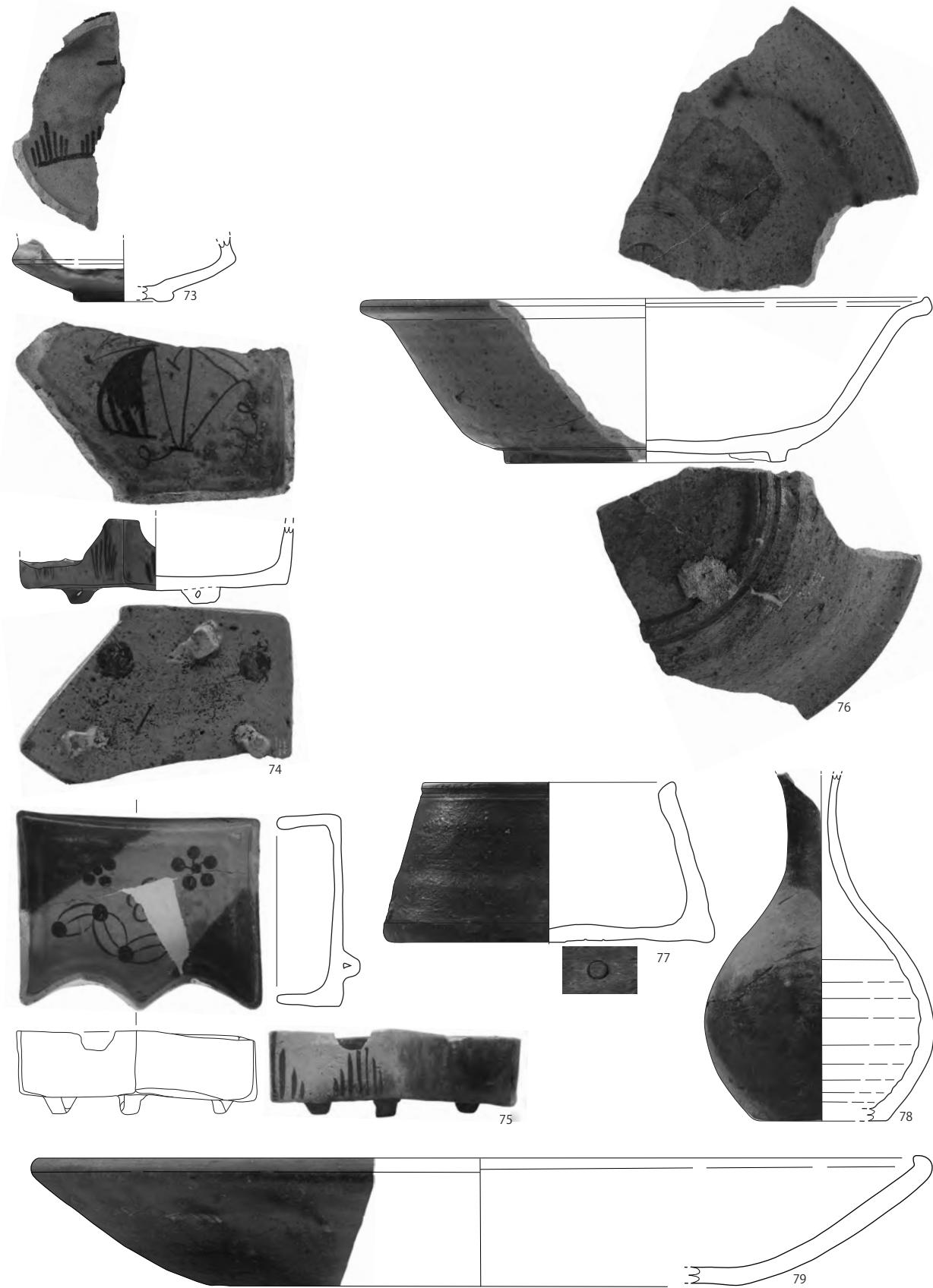
143～146は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。143・145・146は口縁部に灯芯油痕がみられる。

147～149は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕は不明である。149は口縁部に灯芯油痕がみられる。147は見込にタール状のスス、148は胴部内外面にススが付着する。

150は土師皿である。手捏ね成形。胴下部外面と底部に指頭圧痕がみられる。見込にススが付着する。胴部外面に金箔の付着がわずかにみられる。

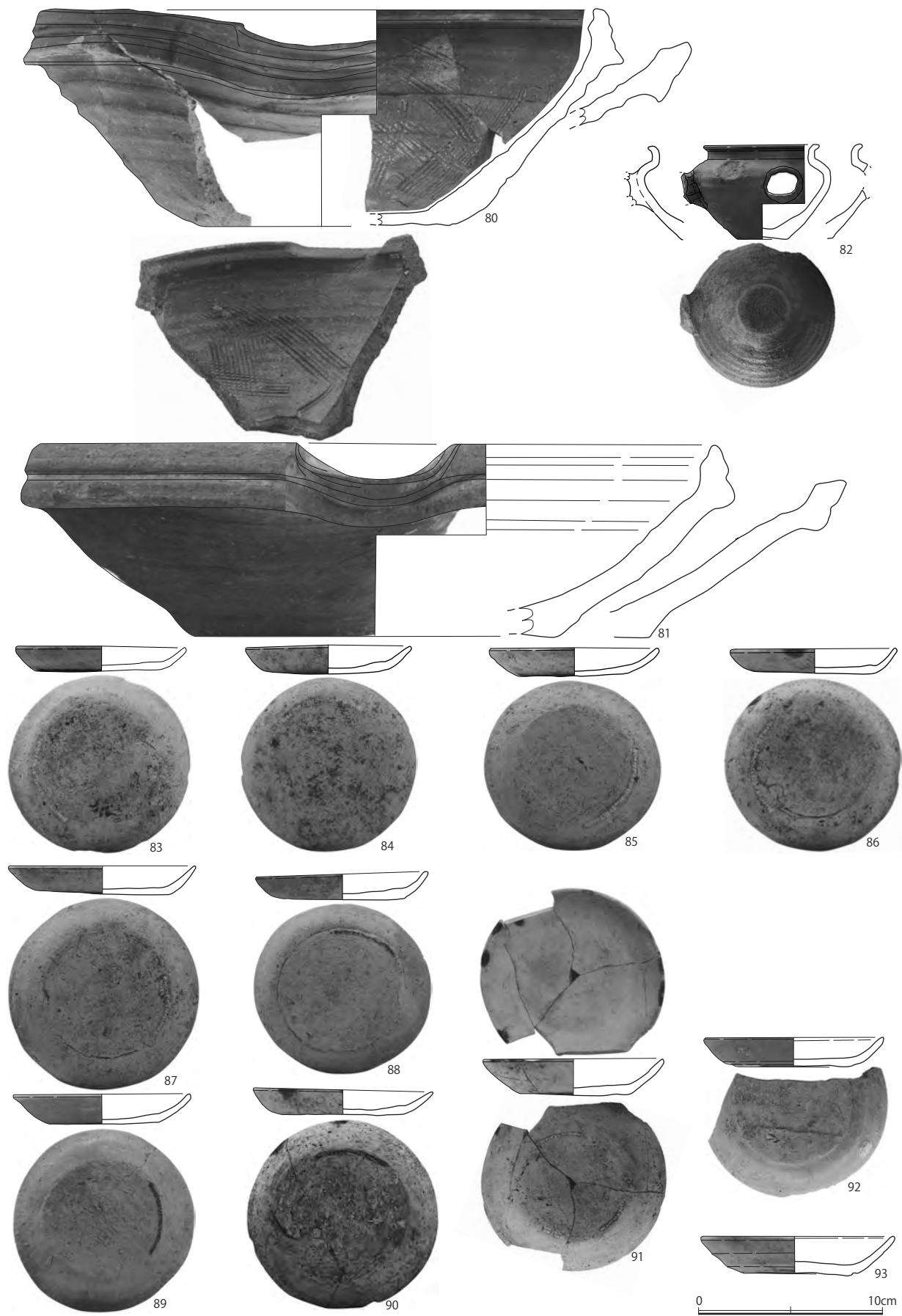
151～157は土師質土器の焼塩壺である。輪積み成形。155は胴部外面、156は胴部から底部外面にススが付着する。151～155は残存部に刻印はみられず、156・157に刻印はない。

158～161は土師質土器の焼塩壺の蓋である。手捏ね成形。158は砂粒を多く含む粗い胎土である。

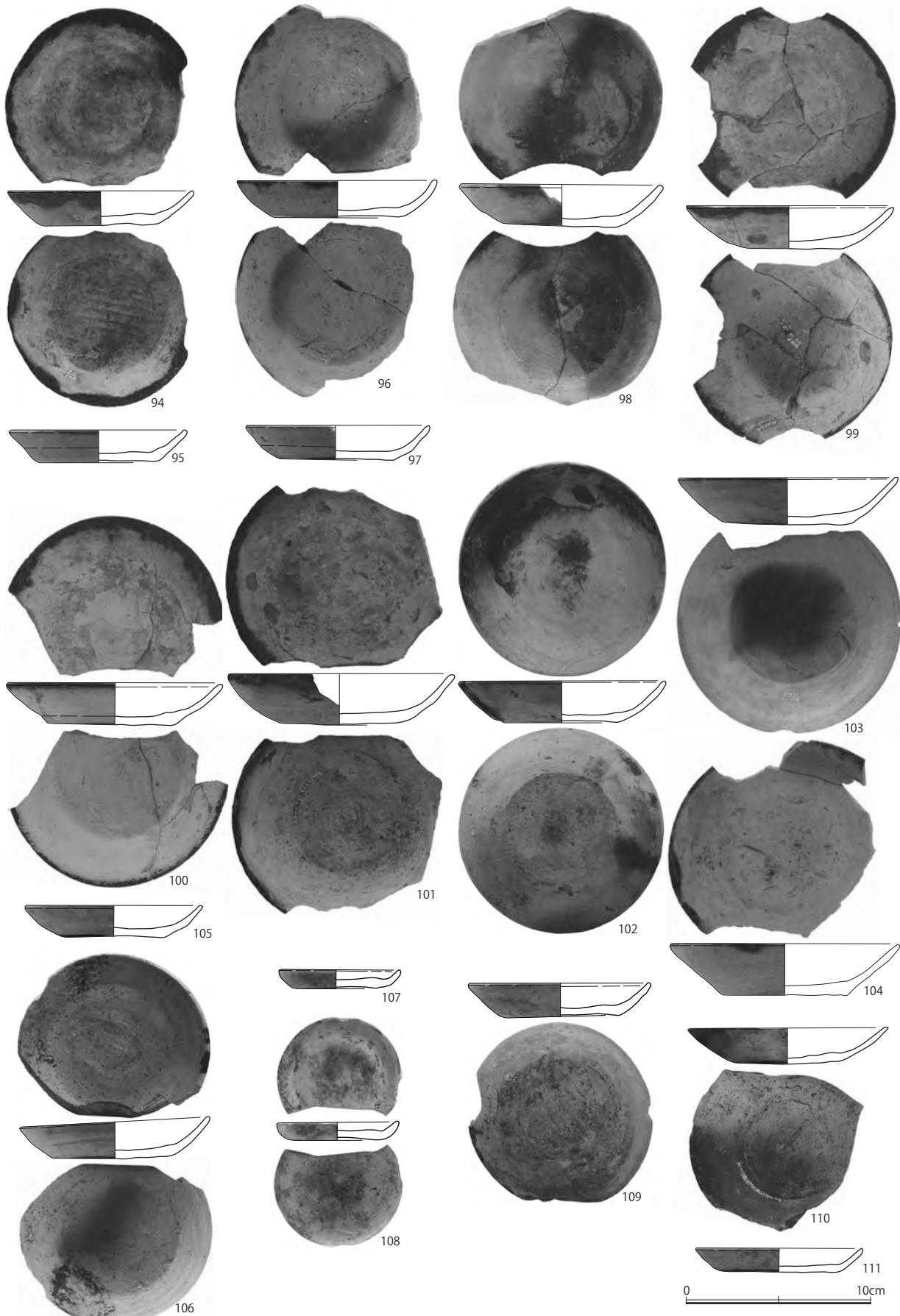


第157図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類（6）（縮尺：1／3）

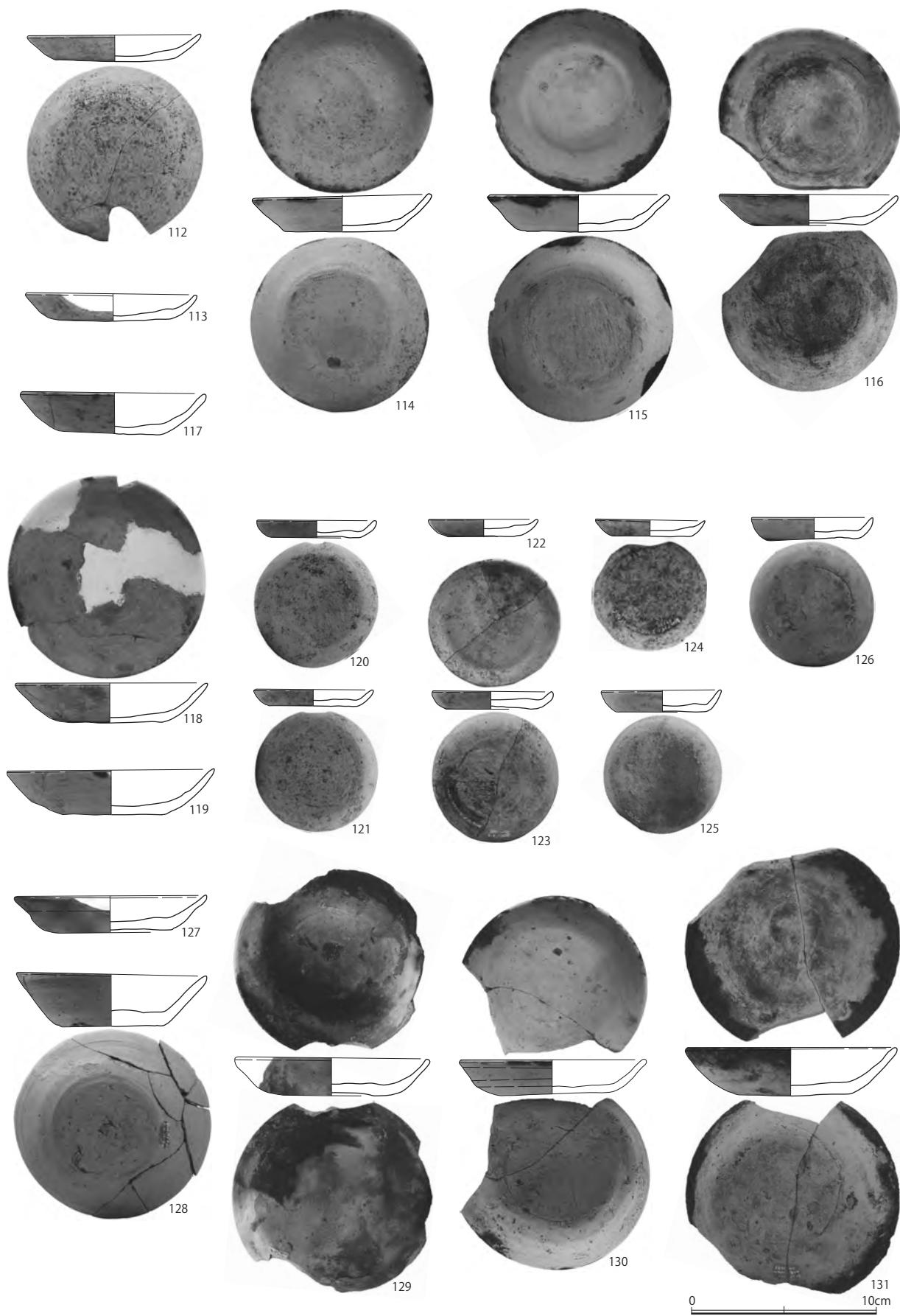
0 10cm



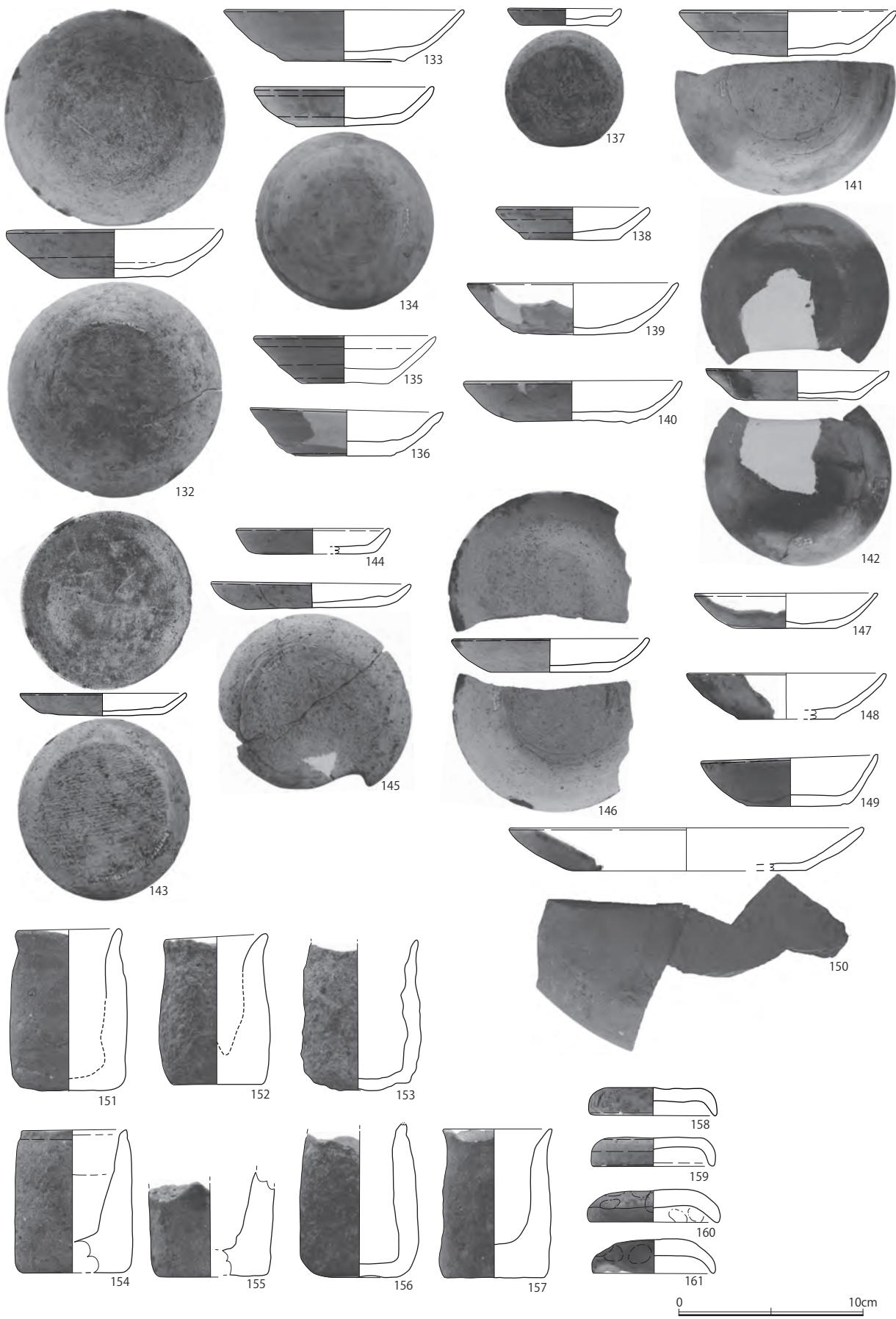
第158図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類(7)（縮尺：1/3）



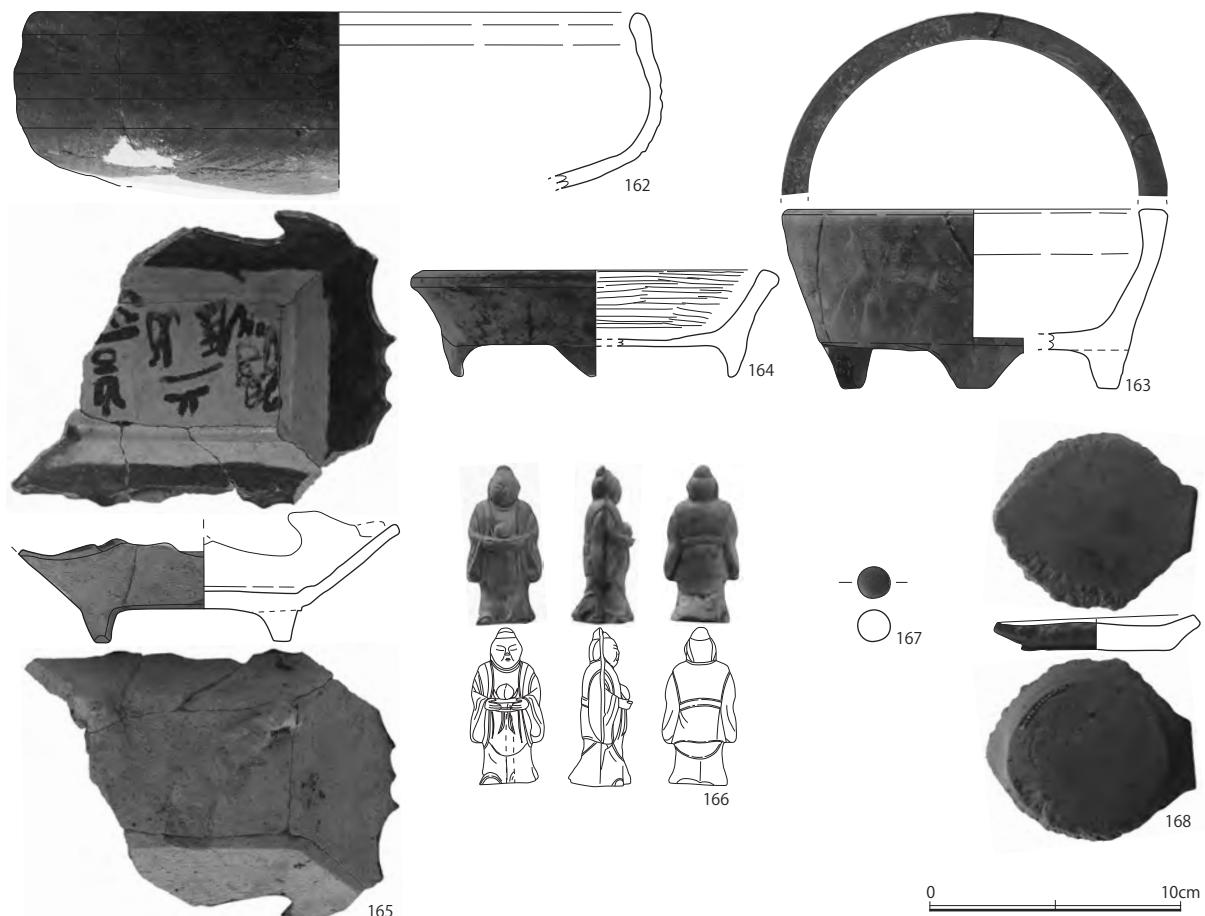
第159図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類（8）（縮尺：1／3）



第160図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類（9）（縮尺：1/3）



第161図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類（10）（縮尺：1／3）



第162図 池状遺構（第2・第3遺構面）出土陶磁器類（11）（縮尺：1／3）

160は内外面に指頭圧痕がみられる。161は口縁部内外面にススが付着し、外面に指頭圧痕がみられる。

158・159は残存部に刻印はみられず、160に刻印はない。

162は土師質土器の関西系焙烙である。胴上半部外面は横ナデ、胴下半部外面から底部外面にかけ右上がりのタタキを施す。内面はナデ調整である。胴部内外面にススが付着する。

163は土師質土器の火鉢・焜炉類である。口縁部上面に印花による菊花文を施す。

164は瓦質土器の火鉢・焜炉類である。口縁端部にススが付着する。

165は産地不明の軟質施釉陶器の皿である。板作り成形。畳付を除き透明釉、口縁端部から内側面の上半部に緑釉をかける。見込に鉄釉による文字を描く。

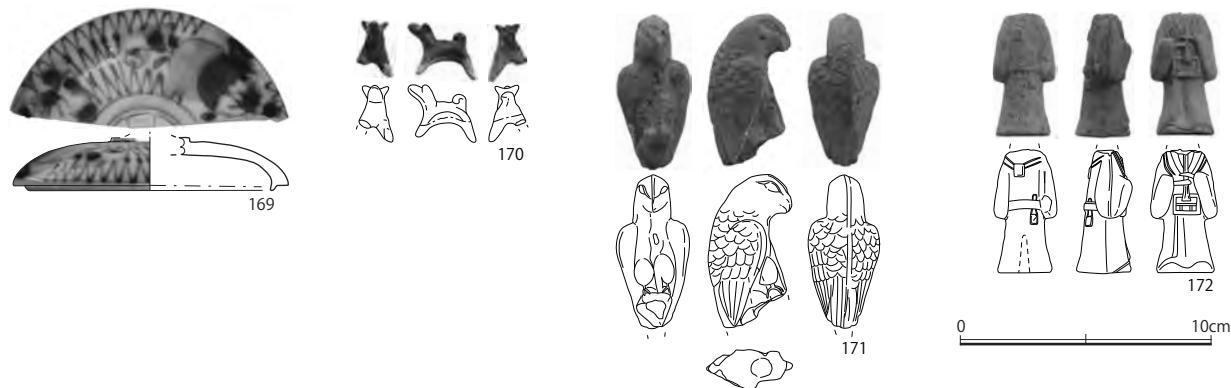
166は土人形である。両手で桃を持つ男性像。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。全面に雲母の付着がみられる。

167は玩具の土玉である。手捏ね成形。

168は加工円盤である。土師皿を二次加工したものである。見込周辺に加工を施した際の工具の痕跡がみられる。底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられるが、摩耗が著しい。製作途中と思われる。

SD101（第163図）

169は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。口縁部は無釉で砂が付着する。外面に染付による草花文と



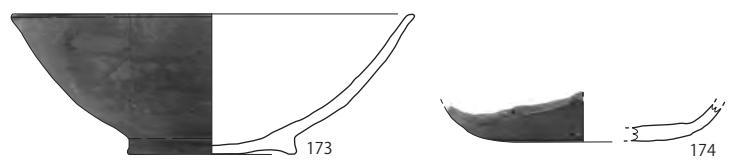
第163図 SD101出土陶磁器類（縮尺：1／3）

丸文と網目文を描く。

170は産地不明陶器の人形である。手捏ね成形による犬。中実。腹部と脚部を除き鉄釉をかける。

171・172は土人形である。171は鷹。型押成形による左右型合わせの中実で、胴部に穿孔がみられる。

172は虚無僧。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。



第164図 SD185出土陶磁器類（縮尺：1／3）

SD185（第164図）

173は黒色土器の碗である。内面のみ黒色。11世紀後半。

174は土師器の皿である。手捏ね成形。内外面に赤彩を施すが、外面の赤彩はわずかに痕跡を残すのみである。10～11世紀。

第2遺構面

SD48（第165図）

175は肥前系磁器のU字形高台の皿である。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に半菊唐草文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圈線内「大明年製」銘を描く。呉須の発色は悪い。

176・177は肥前系磁器の碁笥底の小坏である。177は外面に染付による矢羽根文を描く。

178は肥前系磁器の仏飯器である。外面に染付による蝶文を描く。呉須の発色は悪い。

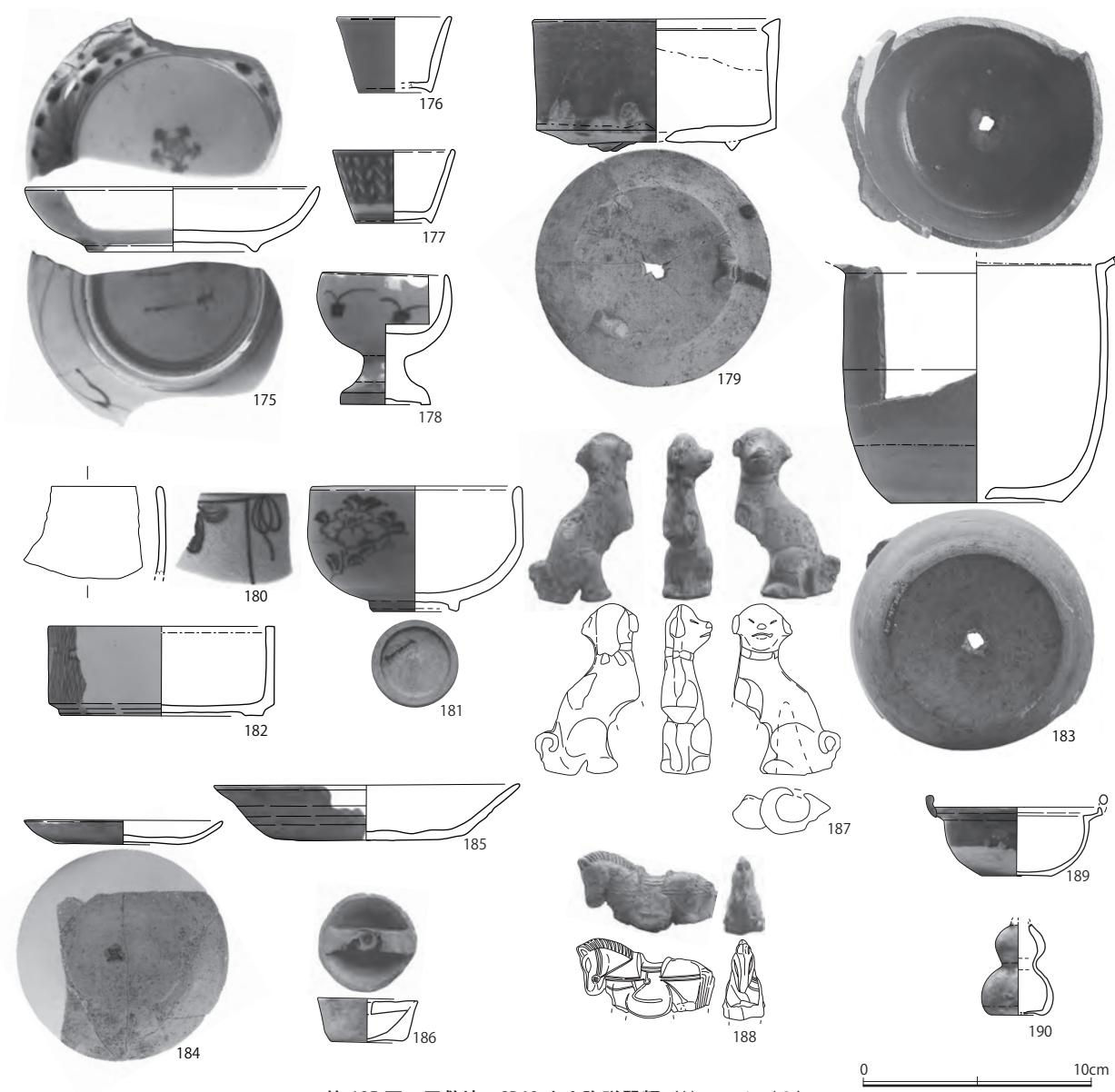
179は瀬戸・美濃系陶器の香炉・火入である。底部と内面を除き飴釉をかける。底部に焼成後の穿孔がみられ、植木鉢に転用したと思われる。

180は京・信楽系陶器の注連縄文碗である。外面に錆絵と呉須による注連縄文を描く。

181は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。高台脇から高台内は無釉である。外面に錆絵と呉須による椿文を描く。高台内をわずかに渦巻状に削り込み、畳付際を面取りする。

182は京・信楽系陶器の段重・蓋物である。口縁端部から口縁部内面と畠付を除き灰釉をかける。外面に錆絵による草文、呉須と白化粧土による帆掛け舟文を描く。畠付際を面取りする。

183は京・信楽系陶器の爛鍋である。底部内面に三足付板トチ痕がみられる。胴下部から底部外面と蓋受けを除き灰釉をかける。底部に焼成後の穿孔がみられ、植木鉢に転用したと思われる。SK156の破片と接合する。



第165図 屋敷境 SD48 出土陶磁器類（縮尺：1/3）

184・185は土師皿である。ロクロ成形。184は底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。口縁部に灯芯油痕、外面にススの付着がみられる。185の底部は丁寧なナデ調整のため、回転糸切り離しの痕跡がみられない。内面にススが付着する。

186は土師質土器の秉燭である。芯立に灯芯油痕がみられる。

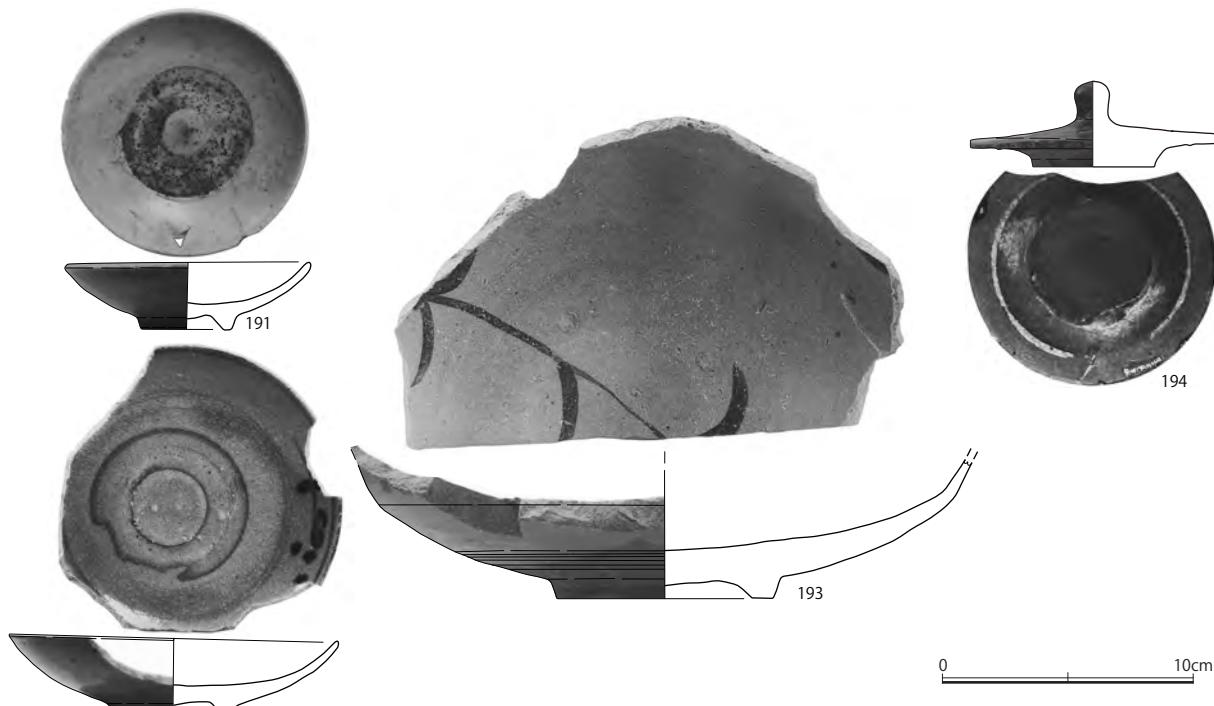
187・188は土人形である。187は犬。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に大きく穿孔する。188は馬。型押成形による左右型合わせの中実で、胴部に穿孔がみられる。

189は産地不明陶器のミニチュアの鍋である。胴下半部から底部外面を除き鉄釉をかける。

190は土師質のミニチュアの瓶である。型押成形による前後型合わせである。胴下部から底部外面と内面を除き緑釉？をかける。

SD136（第166図）

191肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台が無釉のものである。高台と畳付に砂が付着する。



第166図 屋敷境 SD136出土陶磁器類（縮尺：1／3）

192は肥前系陶器の陶胎染付の皿である。胴下半部外面から高台内は無釉である。見込を蛇ノ目釉剥ぎし、内側面に呉須による草花文を描く。

193は肥前系陶器の絵唐津の皿である。見込に胎土目が2箇所みられる。胴下半部外面から高台内を除き灰釉をかけ、内面に鉄絵による葦文？を描く。畠付に胎土目を取り外す際に生じたと思われる欠損が3箇所みられる。

194は産地不明陶器の水注？の蓋である。上面に錆釉をかけ、灰釉を流し掛ける。下面に環状の重ね焼き痕、底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

SD161（第167図）

195は景德鎮窯系磁器の皿である。見込に青花による雨龍文を描く。呉須の発色は悪い。高台内にカンナ痕がみられる。高台にわずかに砂が付着する。

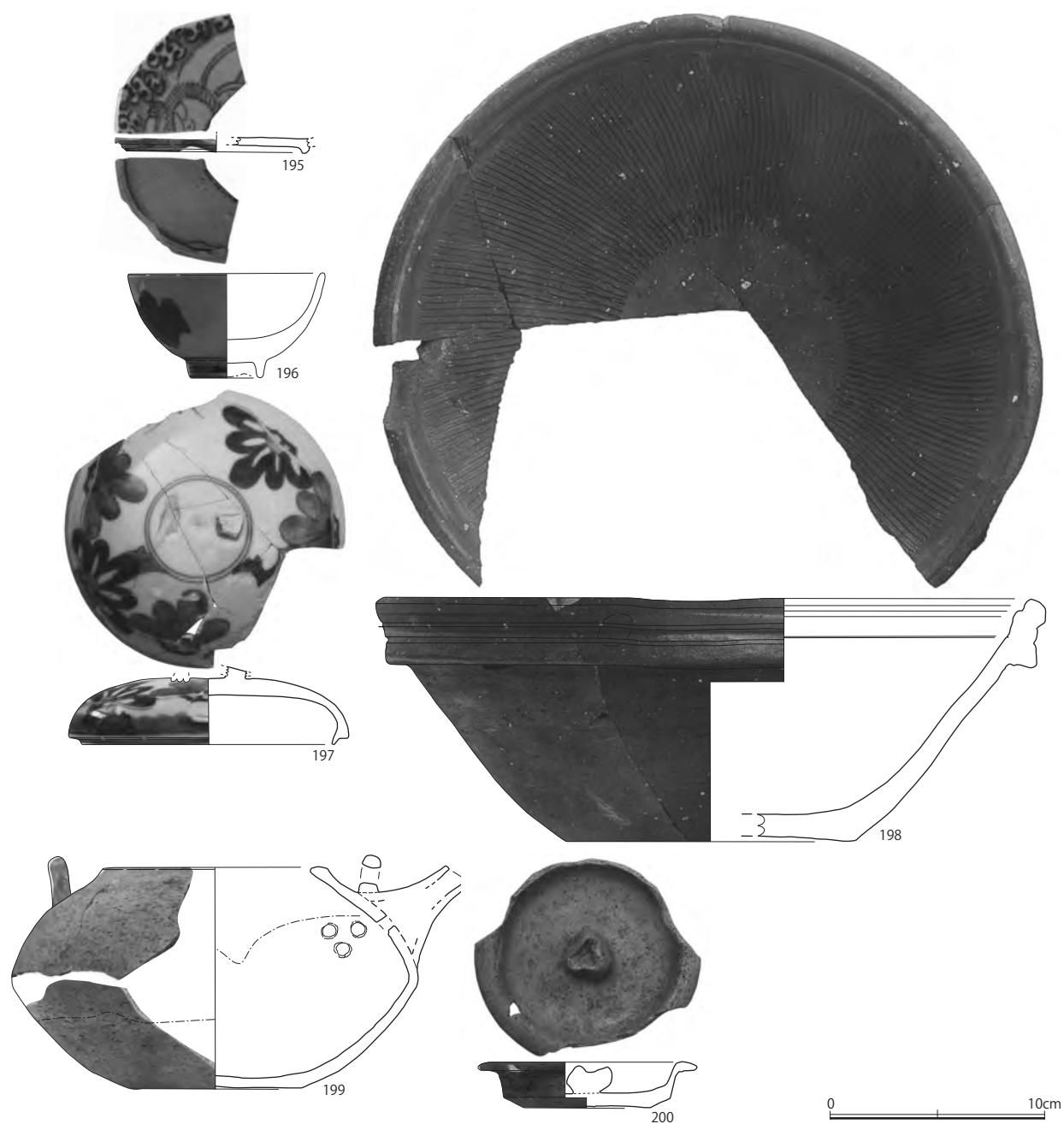
196は肥前系磁器のくらわんか碗である。外面に染付によるコンニヤク印判の桐文を描く。高台の釉際処理は不揃いである。

197は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。口縁部は無釉で砂が付着する。外面に染付による松文を描く。

198は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは「*」。見込に焼き台痕、底部に板目状圧痕がみられる。胴部外面調整はヘラケズリのち横ナデである。

199は土師質土器の土瓶である。口縁部と胴下半部から底部を除く外面、および胴上部を除く内面に透明釉をかける。底部外面にススが付着する。

200は土師質土器の土瓶の蓋である。外面に透明釉をかける。199の蓋か？



第167図 屋敷境 SD161 出土陶磁器類（縮尺：1／3）

SD166 北（第168図）

201は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。外面に染付による蓮文を描く。

202は大谷焼の水滴である。型押成形により僧侶の形となる。外面全面に鉄釉をかける。

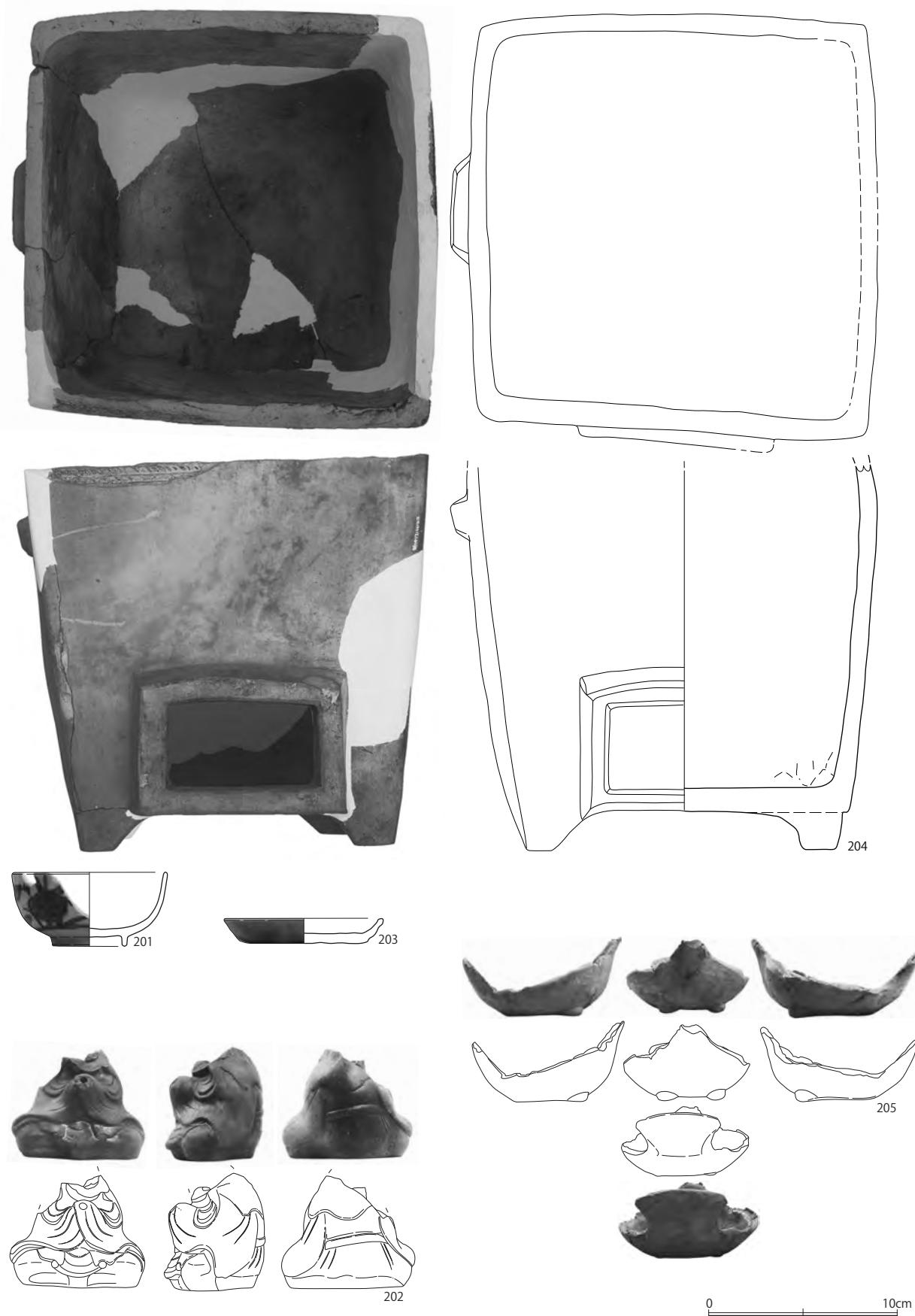
203は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離しのち、板目状圧痕がみられる。

204は土師質土器の火鉢・焜爐類である。慣用名「七厘」。

205は土人形である。型押成形による上下型合わせの鴛鴦？の下半部である。

遺物溜り 25（第169～171図）

206は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。染付により外面にコンニャク印



第168図 屋敷境 SD166北出土陶磁器類（縮尺：1／3）

判の紅葉文、高台内に一重圏線を描く。高台の釉際処理は不揃いである。

207は肥前系磁器の小広東碗である。染付により外面と見込に「寿」字、口縁部内面に圏線を描く。

208は肥前系磁器の端反碗である。染付により外面に竹文と梅花文、見込に梅花文を描く。

209は肥前系磁器のくらわんかの皿である。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に宝珠文・雲文と蛇籠文・草文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圏線と一重方形枠内「渦福」銘を描く。高台に砂が付着する。

210は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿のうち高台の低いものである。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に梅文・書物文と松文、見込に環状松竹梅文を描く。

211は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の大きいものである。蛇ノ目釉剥ぎ部分に環状にわずかに砂が付着する。染付により内側面に草花文?、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。呉須の発色は悪く、高台の内側に砂が付着する。

212は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎの皿のうち高台が無釉のものである。蛇ノ目釉剥ぎ部分に砂が付着する。白磁。高台の内側に砂が付着する。口縁部に灯芯油痕?がみられる。灯明皿に転用か?

213は肥前系磁器の小広東碗の蓋である。染付により外面に雲龍文と梅花文と格子目文、口縁部内面に梅花文と波文、見込に団鳳凰文、摘み内に二重方形枠内「筒江」銘を描く。

214は肥前系磁器の瓶である。内面は無釉である。外面に染付による梅文を描く。呉須の発色は悪い。

215は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。口縁部は無釉で砂が付着する。外面に染付による花文を描く。

216は肥前系磁器の水滴である。上面に型押成形による陽刻の十二单を着た女性。染付。水穴の反対側の面を除き透明釉をかける。底部に布目痕がみられる。

217は瀬戸・美濃系磁器の端反碗である。染付により外面に草花文と太湖石文、口縁部内面に帶線を描き、見込にも文様がみられる。

218は瀬戸・美濃系磁器の端反碗の蓋である。染付により外面に唐花文と鳥文、口縁部内面に墨弾きの如意頭文、見込に蝶文、摘み内に一重方形枠内変形字銘を描く。疊付の内側に砂が付着する。

219は肥前系陶器の刷毛目碗である。疊付の内側に砂が付着する。

220は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。外面に染付による半菊花文を描く。高台の釉際処理は不揃いで、高台の内側に砂が付着する。

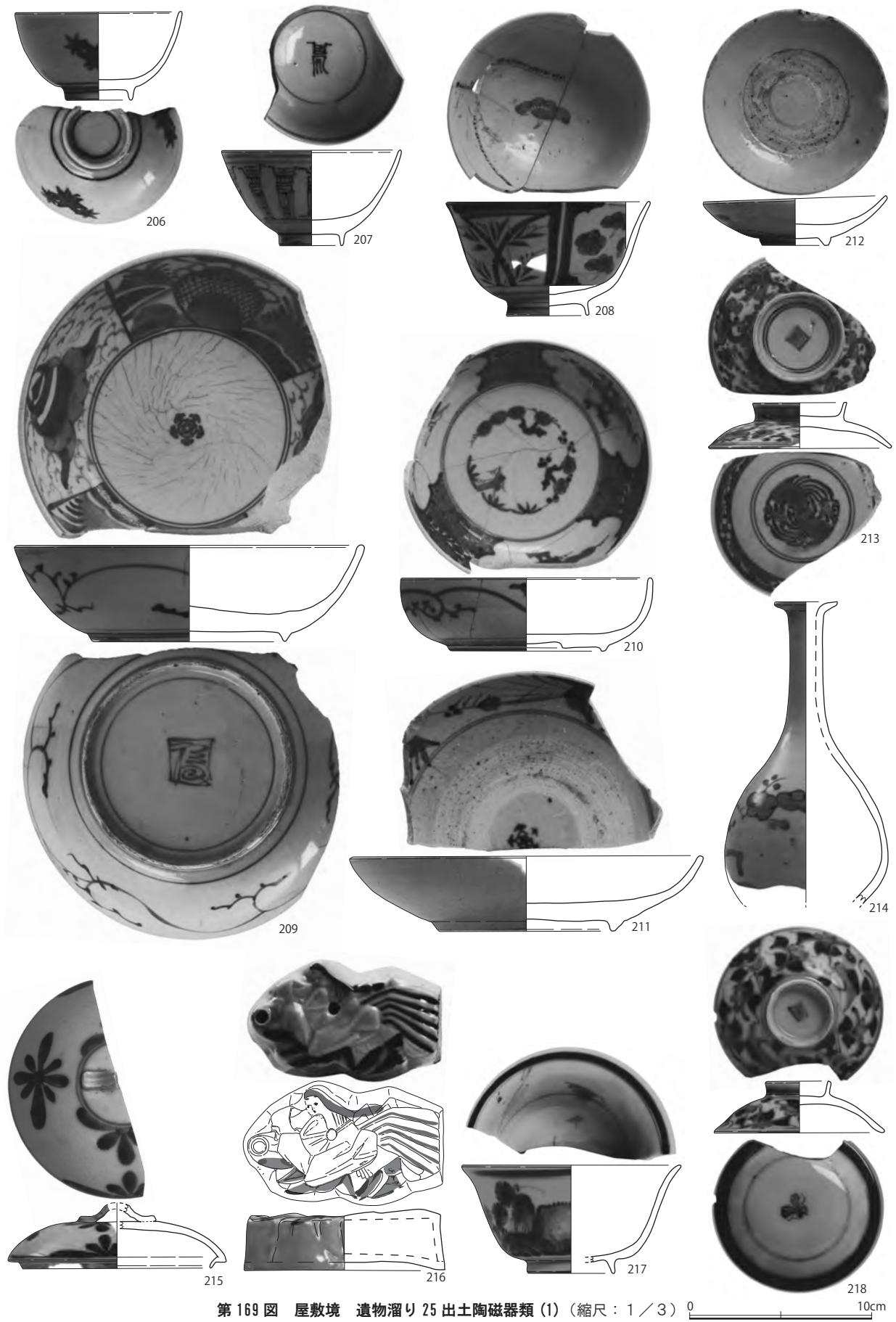
221は瀬戸・美濃系陶器の輪花皿である。疊付を除き灰釉をかける。高台内は薄く施釉する。

222は瀬戸・美濃系陶器の水盤である。見込に円錐ピン痕がみられる。胴下部外面から底部を除き灰釉をかける。外面からの押圧により口縁部は凹む。碁笥底。

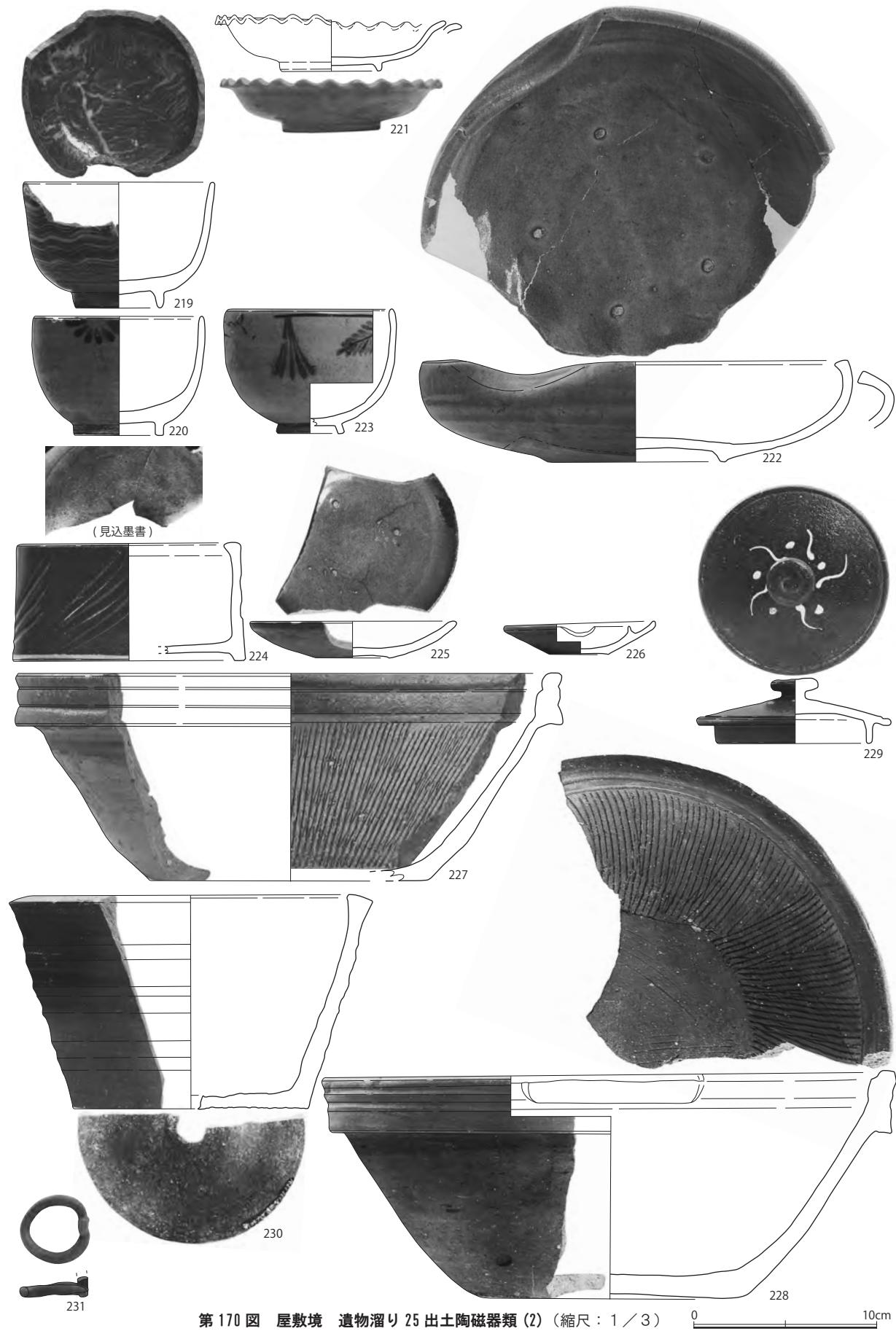
223は京・信楽系陶器の注連縄文碗である。高台脇から高台内を除き、白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に色絵による注連縄文（赤色・緑色・他）と海老文（赤色・黒色）を描く。疊付際を面取りする。

224は京・信楽系陶器の香炉・火入である。白色砂粒を多く含む胎土である。底部を除く外面に鉄釉をかける。外面に鎬文を施す。見込に墨書がみられる。

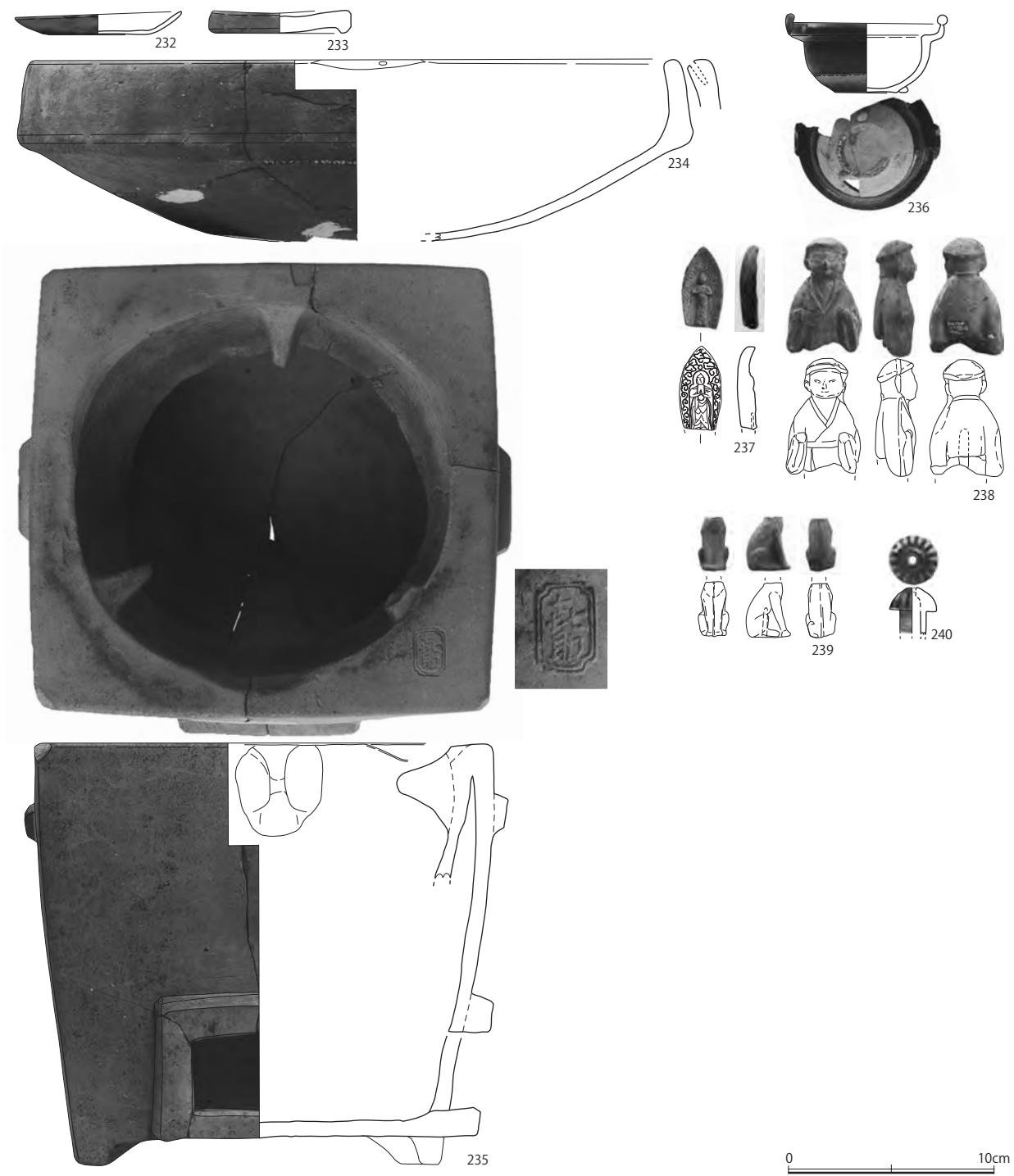
225は京・信楽系陶器の灯明皿である。見込に三足付板トチの支え痕がみられる。口縁部外面から



第169図 屋敷境 遺物溜り 25 出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3) 0 10cm



第170図 屋敷境 遺物溜り 25 出土陶磁器類 (2) (縮尺: 1/3)



第171図 屋敷境 遺物溜り 25 出土陶磁器類(3) (縮尺: 1/3)

内面全面に灰釉をかける。口縁部に灯芯油痕がみられる。

226は京・信楽系陶器の灯明受皿である。口縁部外面から内面全面に灰釉をかけ、仕切り端部を釉剥ぎする。仕切りにU字形の溝が1箇所みられる。

227は堺・明石系の擂鉢である。見込に焼き台痕?がみられる。胴部外面調整はヘラケズリののちナデである。注口あり。

228は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは三角形。底部外面に焼き台痕がみられる。胴

部外面調整はヘラケズリののちナデである。

229は産地不明陶器の土瓶の蓋である。外面に鉄釉をかけ、白化粧土のイッチン描による捻花文を描く。

230は産地不明陶器の植木鉢である。口縁端部から胴上半部外面に自然釉がかかる。底部内面に火襷、底部外面に板目状圧痕がみられる。

231は産地不明陶器の灯芯押さえである。上面に鉄釉をかける。

232は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。口縁部に灯芯油痕がみられる。

233は土師質土器の焼塩壺の蓋である。型押成形。内面に布目痕がみられる。刻印はない。

234は土師質土器の関西系焙烙である。口縁部外面に粘土を貼り付け、口縁端部に貫通しない穿孔を施す。

235は土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「七厘」。外壁上面に二重隅入方形枠内「喜助」(「喜助」)の刻印がみられる。外壁上面にススが付着する。

236は産地不明陶器のミニチュアの鍋である。胴下部から底部外面を除き鉄釉をかける。

237～239は土人形である。237は観音菩薩像。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ穿孔していたと思われる。238は頭巾を被った人物像。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ穿孔していたと思われる。239は犬？。型押成形による左右型合わせの中実で、底部から胴部にかけ小さく穿孔する。

240は土師質のミニチュアの蓋である。上面に緑釉をかける。

SD120 (第172図)

241は肥前系磁器の丸碗の蓋である。内外面に染付による竹垣文と鉄線文を描く。

242は土人形である。馬。型押成形による左右型合わせの中実で、底部から後脚にかけ円錐状に小さく穿孔する。

SD159 (第173図)

243は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の小さいものである。内側面に染付による斜格子文を描く。呉須の発色は悪く、蛇ノ目釉剥ぎ部分と畳付と高台内に砂が付着する。SD157と接合する。

片山家屋敷地内

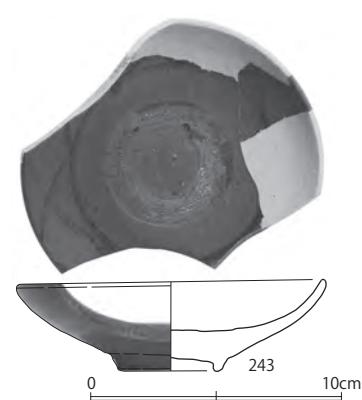
SD24 (第174・175図)

244は肥前系磁器の高台無釉の碗である。青磁。

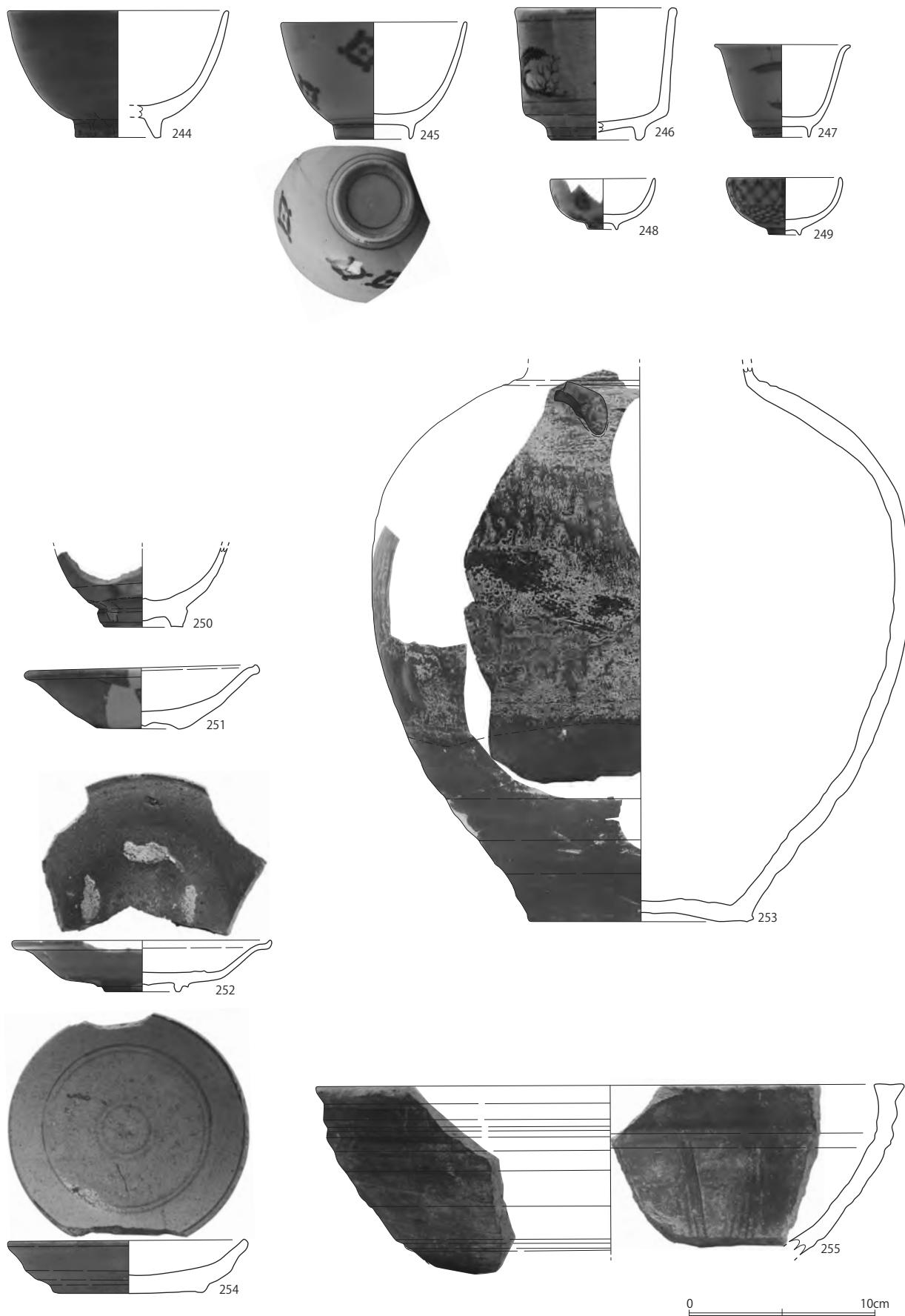
245は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の高いものである。



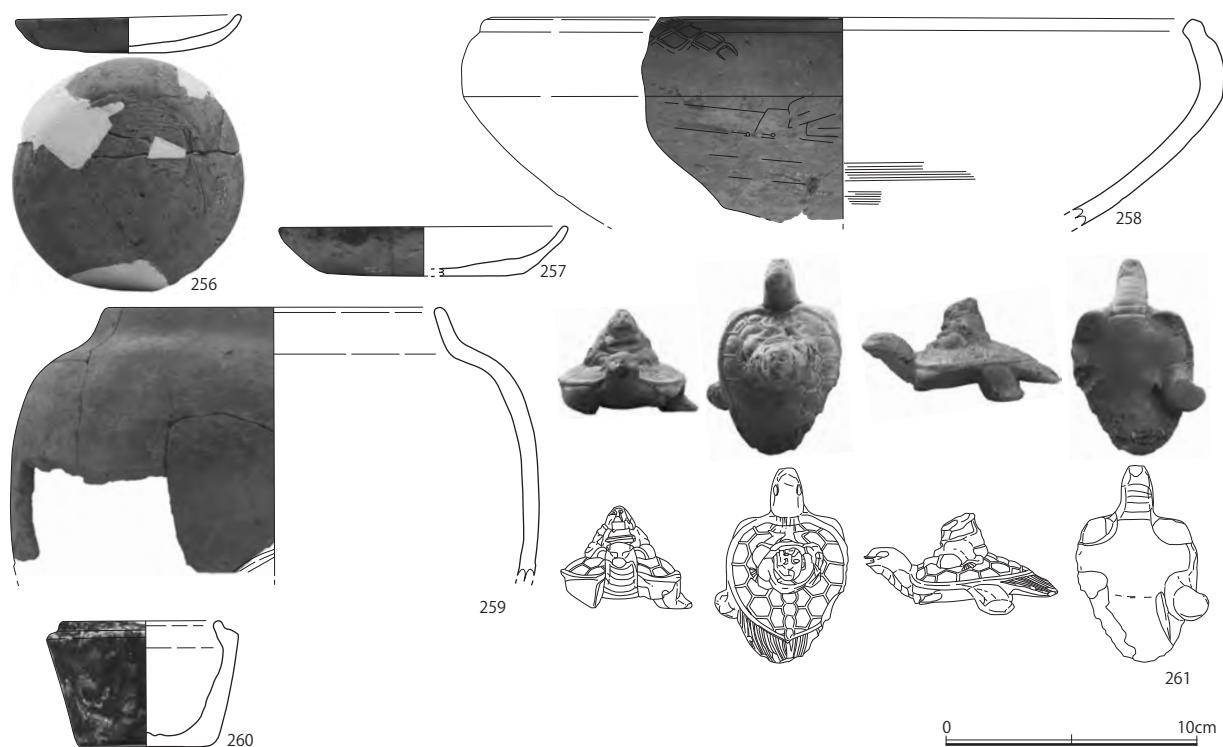
第172図 屋敷境 SD120 出土陶磁器類 (縮尺: 1/3)



第173図 屋敷境 SD159 出土陶磁器類 (縮尺: 1/3)



第174図 片山家屋敷地内 SD24 出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)



第175図 片山家屋敷地内 SD24 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)

染付により外面に七宝文、高台内に一重圏線を描く。高台の釉際処理は揃い、畳付に砂の付着はない。

246は肥前系磁器の筒形碗である。外面に染付による羊齒文を描く。焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。

247は肥前系磁器の端反形小壺である。外面に染付による遠山文と船文と草文を描く。高台の釉際処理は不揃いで、畳付の内側に砂が付着する。全面に貫入がみられる。

248・249は肥前系磁器の半球形小壺である。248は外面に染付による梅花文を描く。紅皿か。249は外面に染付による四方櫛文と青海波文を描く。

250は肥前系陶器の灰釉唐津碗である。高台脇から高台内は無釉である。

251・252は肥前系陶器の灰釉溝縁皿である。251の外面は無釉である。252は高台と高台内が無釉である。見込と高台に砂目がみられる。

253は肥前系陶器の壺である。胴上半部外面は鉄釉に灰釉掛け流し、胴下半部から底部外面は鉄漿を塗布する。

254は瀬戸・美濃系陶器の鉄絵皿である。見込に円錐ピン痕が3箇所みられる。底部を除き長石釉をかける。内面に鉄絵による圏線を描く。

255は京・信楽系陶器の擂鉢である。スリメの上端はナデ消さない。

256・257は土師皿である。ロクロ成形。256は底部に右回転の糸切り離しのち、板目状圧痕がみられる。257は底部に回転方向不明の糸切り離しのち、板目状圧痕がみられる。口縁部に灯芯油痕がみられ、底部と見込にススが付着する。

258は土師質土器の関西系焙烙である。口縁部から胴上部外面に格子状タタキ目がみられる。口縁端部にススが付着する。

259 は土師質土器の火消壺である。外面にススが付着する。

260 は瓦質土器の火入か。口縁部から胴上半部に切り込む開口部をもつ。

261 は土人形である。亀に乗る人物。型押成形による上下型合わせの中実。全面に雲母の付着がみられる。裏面中央部にわずかに指頭圧痕がみられる。

SK26 (第 176 ~ 182 図)

262 は高台内にカンナ痕、口縁端部に虫喰いはみられないが、胎土と呉須の発色から景德鎮窯系磁器と思われる。端反碗。青花により外面に赤壁図と「後赤壁賦」の詩句、口縁部内面と見込に渦文と花文、見込中央に「□□年製」銘を描く。接合はしないが、同一個体と思われる底部破片の見込に「永」の文字がみられることから「永楽年製」銘と思われる。SK39 の破片と接合する。

263 は肥前系磁器の U 字形高台の碗のうち高台の低いものである。染付により外面に太湖石文と松竹梅文と如意頭文、口縁部内面に四方襍文、見込に手描きの五弁花文、高台内に二重方形枠内「筒江」銘を描く。

264 は肥前系磁器のくらわんか碗である。染付により外面に二重網目文、内面に一重網目文、見込に花文、高台内に「渦福」銘を描く。呉須の発色は悪い。

265 は肥前系磁器の碗である。外面に染付による渦文、染付と色絵（黒色）による窓絵松文、色絵（赤色・黒色・金色）による梅文、色絵（赤色）による唐草文を描く。

266 ~ 269 は肥前系磁器の U 字形高台の皿である。266 は高台内にハリ支え痕とカンナ痕がみられる。染付により外面に唐草文、内面に牡丹唐草文、高台内に一重圈線を描く。呉須の発色は良好である。267 は染付により外面に如意頭状唐草文、内面に牡丹唐草文、見込に団鳳凰文、高台内に一重圈線と二重方形枠内「渦福」銘を描く。268 は染付により外面に宝文？を描き、内面は芙蓉手である。畳付の内側に砂が付着する。269 は型打成形で、口縁部は輪花となる。染付により外面に梅花唐草文、内面に冰裂文と菊花文、見込に宝尽くし文（蕉葉文・隱蓑文）、高台内に一重圈線と二重方形枠内「渦福」銘を描く。

270 は肥前系磁器の U 字形高台の大皿である。染付により外面に花唐草文、内面に芙蓉手花鳥文、高台内に一重圈線を描く。呉須の発色は悪く、全面に貫入がみられる。

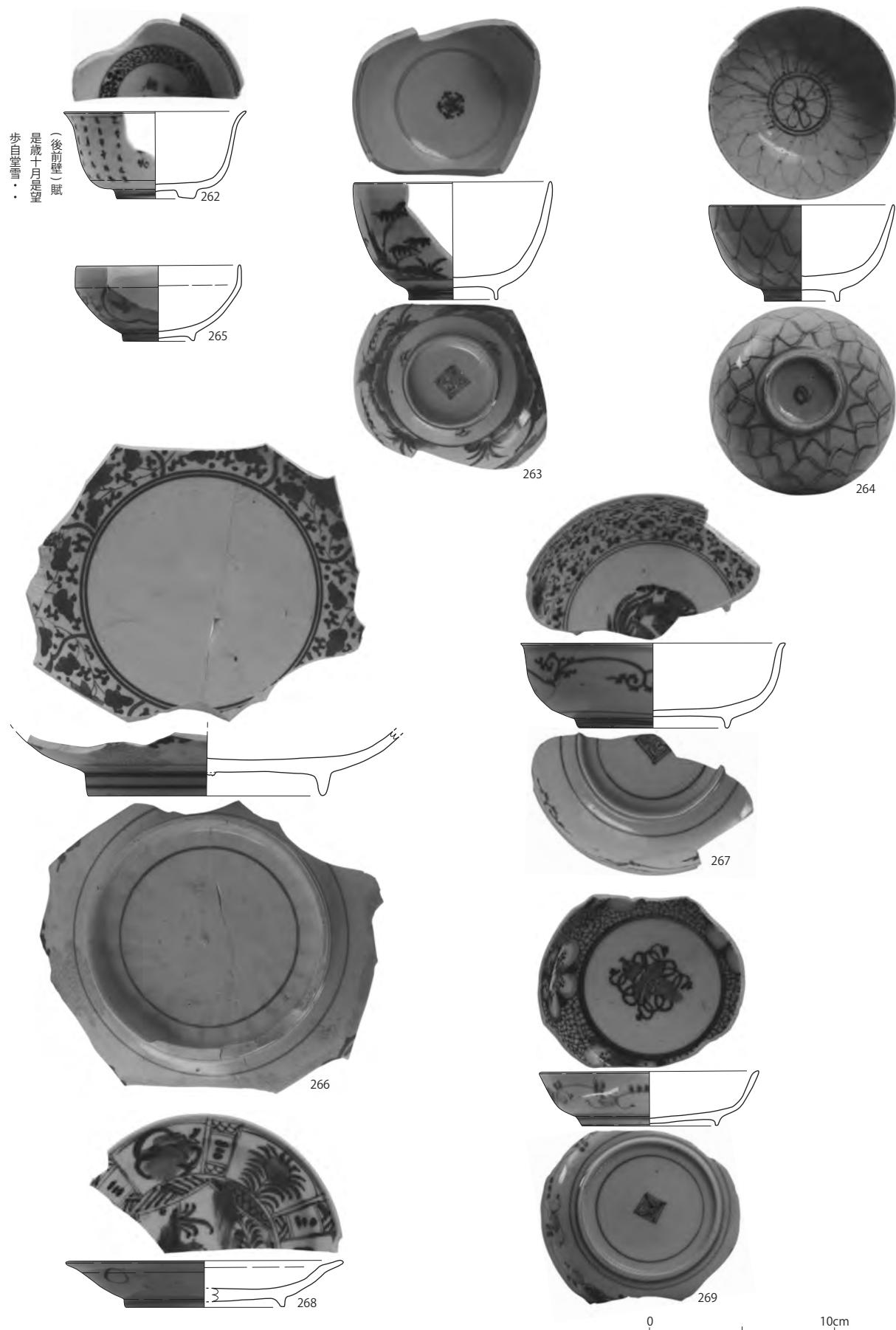
271・272 は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の小さいものである。272 の透明釉は暗オリーブ色を呈する。内面に染付による斜格子文を描く。呉須の発色は悪く、畳付に砂が付着する。271 は蛇ノ目釉剥ぎ部分に砂が付着する。

273・274 は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台が無釉のものである。蛇ノ目釉剥ぎ部分に砂が付着する。内面に染付による折松葉文？を描く。呉須の発色は悪い。

275 は肥前系磁器の端反形小坏である。外面に染付による草花文を描く。呉須の発色は悪く、畳付の釉際処理は揃わず砂が付着する。見込に降灰がみられる。くらわんか。

276・277 は肥前系磁器の丸碗形小坏である。276 は外面に染付による薄文？と雪輪文を描く。呉須の発色は良好である。全面に貫入がみられる。277 は外面に染付によるコンニャク印判の菊花文を描く。呉須の発色は悪く、高台に砂が付着する。くらわんか。

278 は肥前系磁器の碁笥底の小坏である。外面に染付による草花文を描く。呉須の発色は良好である。



第176図 片山家屋敷地内 SK26 出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)



第177図 片山家屋敷地内 SK26 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)



第178図 片山家屋敷地内 SK26 出土陶磁器類(3) (縮尺: 1/3)

279 は肥前系磁器の腰折れ直立形小壺である。染付により外面に桜唐草文と竹文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。

280 は肥前系磁器の油壺である。外面に染付による葡萄文？を描く。呉須の発色は悪く、曇付に砂が付着する。

281 は肥前系磁器の段重である。口縁端部から口縁部内面と高台脇から高台外面は無釉。外面に染付による斜格子文と梅花文を描く。高台脇から高台外面の露胎部に砂が付着する。

282 は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。口縁部は無釉である。外面に染付による牡丹唐草文と鳳凰文を描く。

283 は肥前系磁器の仏飯器である。内面に降灰がみられる。高台内に円刻あり。

284 は肥前系磁器の香炉・火入である。曇付から高台内と胴上部を除く内面は無釉である。外面に染付による竹文を描く。見込に「イトカ」？の墨書がみられる。呉須の発色は悪い。

285 は肥前系陶器の刷毛目碗である。曇付に砂が付着する。

286～288 は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。286・287 染付により外面に如意頭文と唐子文と蝶文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。全面に貫入がみられ、曇付に砂が付着する。288 は外面に染付による四方襍文、雪持柳文、梅文？、松文を描く。曇付に砂が付着する。

289 は肥前系陶器の銅緑釉皿である。胴下部から高台内を除く外面に透明釉、内面に銅緑釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。蛇ノ目釉剥ぎ部分と曇付にわずかに砂が付着する。

290 は肥前系陶器の刷毛目皿である。胴下部から高台内を除き灰釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。内面に刷毛目を施す。高台内に円刻あり。

291 は肥前系陶器の刷毛目鉢である。外面に鉄釉、内面に灰釉を流し掛ける。曇付際を大きく面取りする。

292 は瀬戸・美濃系陶器の灰釉碗である。高台脇から高台内は無釉である。

293 は瀬戸・美濃系陶器の手水鉢である。内面と口縁部外面に灰釉、胴部外面に鉄釉をかける。外面に型押菊花文と円形文を貼り付ける。底部に「新久トカ」の墨書がみられる。

294・295 は京・信楽系陶器の半球碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。294 は色絵により外面に笹文と花文？、見込に花文？を描く。高台内に円刻あり。曇付際を面取りする。295 は外面に錆絵による草文？を描く。曇付際を面取りする。

296 は京・信楽系陶器の碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。見込に三足付板トチの支え痕がみられる。外面に錆絵と白化粧土による草文？を描き、高台脇には櫛状工具によると思われる装飾的なケズリが施される。高台内に判読不明の墨書がみられる。曇付際を面取りする。

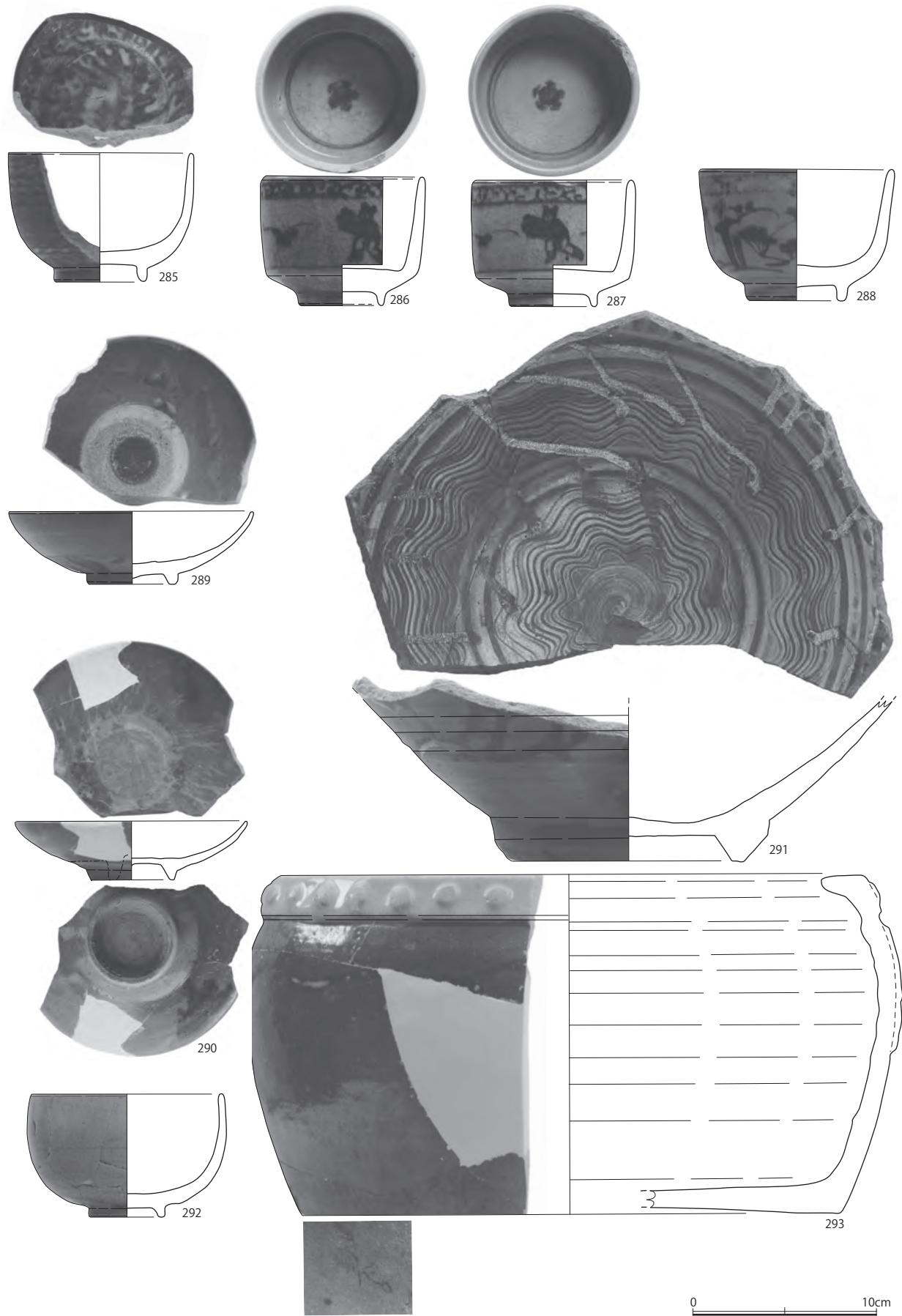
297 は京・信楽系陶器の碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。渦巻高台。

298 は京・信楽系陶器の段重・蓋物の蓋である。外面に灰釉をかける。

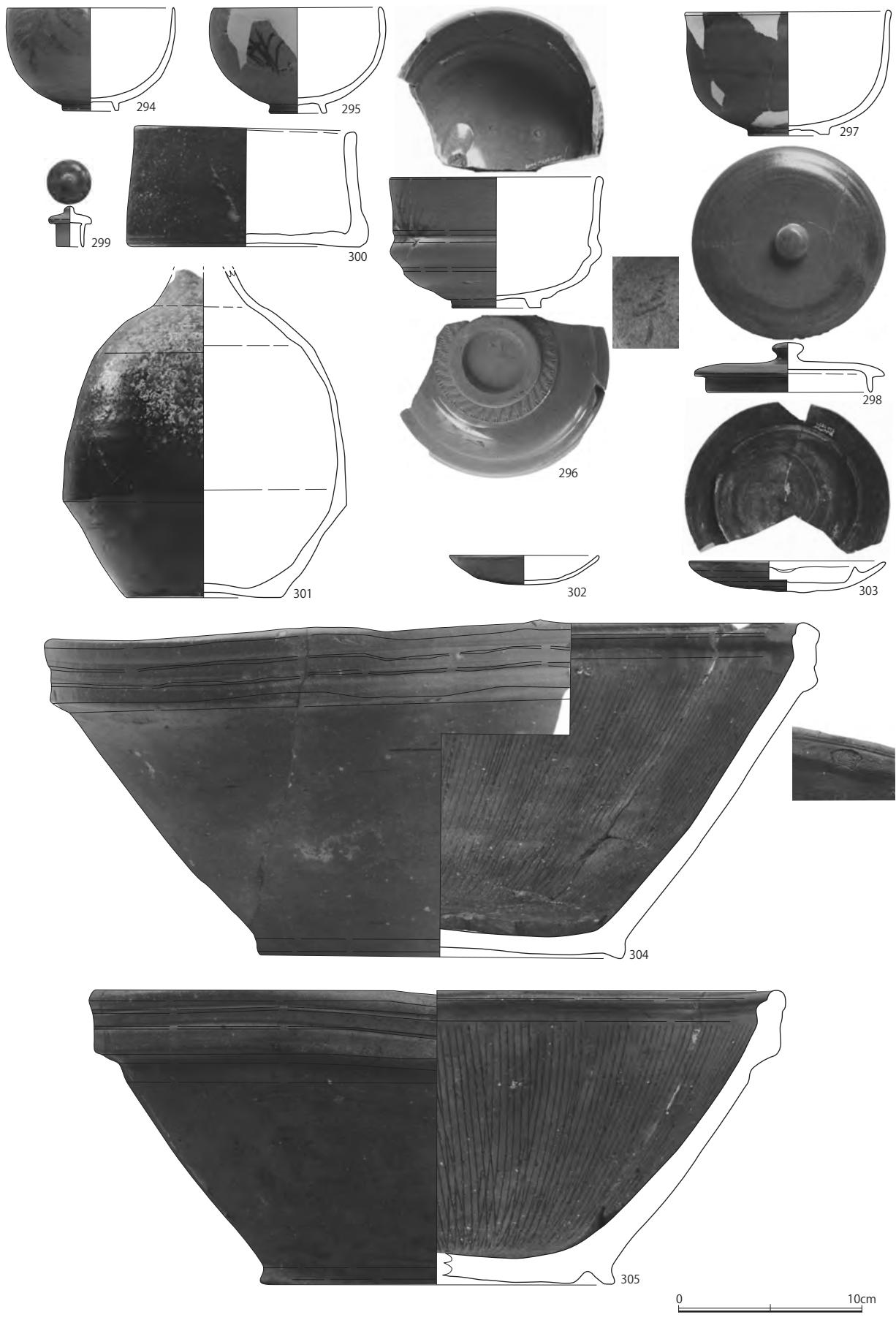
299 は京・信楽系陶器の瓶？の蓋である。上面に色絵による文様を描く。

300 は備前系陶器のサヤ形鉢である。口縁端部と底部を除く外面に塗土を施す。見込に牡丹餅、底部に重ね焼きの痕跡と思われる色調変化がみられる。底部に刻印あり。

301 は備前系陶器の瓶である。外面に塗土を施す。胴部内面に鉄錆状物質、底部外面に砂が付着する。



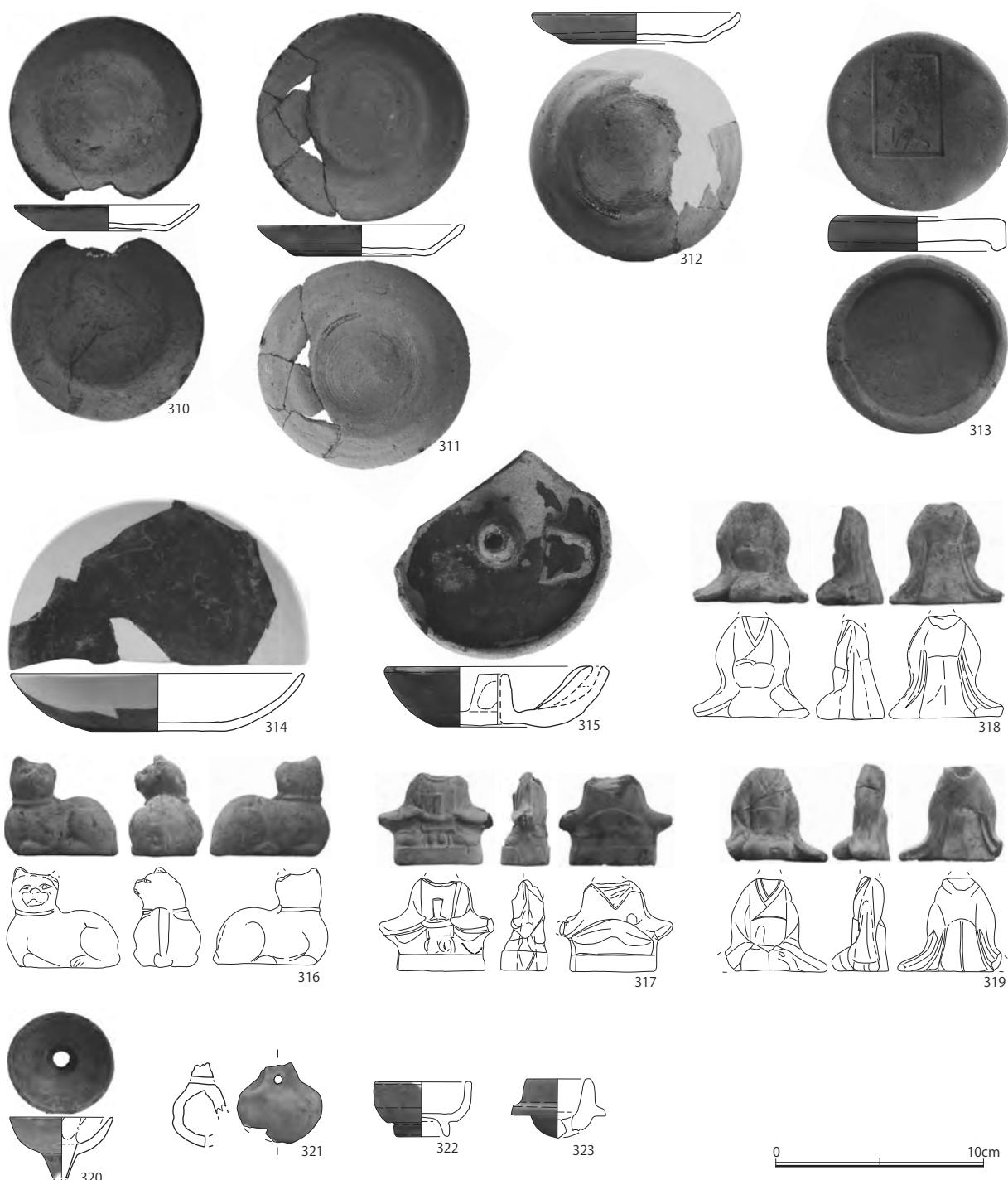
第179図 片山家屋敷地内 SK26出土陶磁器類(4) (縮尺: 1/3)



第180図 片山家屋敷地内 SK26 出土陶磁器類(5) (縮尺: 1/3)



第181図 片山家屋敷地内 SK26 出土陶磁器類(6) (縮尺: 1/3)



第182図 片山家屋敷地内 SK26 出土陶磁器類(7) (縮尺: 1/3)

302は備前系陶器の灯明皿である。内面に塗土を施す。

303は備前系陶器の灯明受皿である。内面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が2箇所みられる。

304～306は堺・明石系陶器の擂鉢である。304の見込のスリメは「*」。注口部内面に扇面内判読不明文字の刻印がみられる。底部に幅の広い凹線が浅くめぐり、高台風となる。見込と底部に焼き台痕がみられ、見込には焼き台が付着する。胴部外面調整はヘラケズリで、底部に板目状圧痕がみられる。305の胴部外面調整はヘラケズリ。削り出し高台。306の見込のスリメは「*」。注口部内面に扇

面内「上長」の刻印がみられる。底部に幅の広い凹線が浅くめぐり、高台風となる。底部に焼き台痕がみられ、焼き台が付着する。胴部外面調整はナデ。

307は志戸呂系陶器の灯明受皿である。胴下半部から底部を除き鉄泥を塗布する。仕切り下部にアーチ状の溝が2箇所みられる。底部に左回転糸切り離し痕がみられる。

308は産地不明陶器の植木鉢？である。胴部外面に粗く灰釉をかけ、内面には鉄釉をかける。

309は産地不明陶器の壺？の蓋である。外面に鉄釉をかける。底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

310～312は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。310・311は口縁部に灯芯油痕がみられる。

313は土師質土器の焼塩壺の蓋である。型押成形で、内面全面に布目痕がみられる。外面に一重方形枠内「鷺坂」の刻印がみられる。

314は硬質土師質土器の皿である。ロクロ成形で、底部調整は同心円状回転ヘラケズリである。内面全面にススが付着する。外面にも薄くススが付着する。

315は土師質土器の秉燭である。全面に褐色を呈する透明釉をかけるが、剥離が顕著である。底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。接合はしないが、同一個体のものと思われる把手の破片がある。

316～319は土人形である。316は猫。型押成形による前後型合わせの中空で、振ると音が鳴る。317は天神。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に大きく穿孔する。318・319は姉様。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に大きく穿孔する。

320は土師質のミニチュアの漏斗である。全面に浅黄橙色の透明釉をかける。

321はミニチュアの土鈴である。手捏ね成形。

322は土師質のミニチュアの碗である。

323は土師質のミニチュアの羽釜である。焼成後底部に穿孔したと思われる。

SK39（第183図）

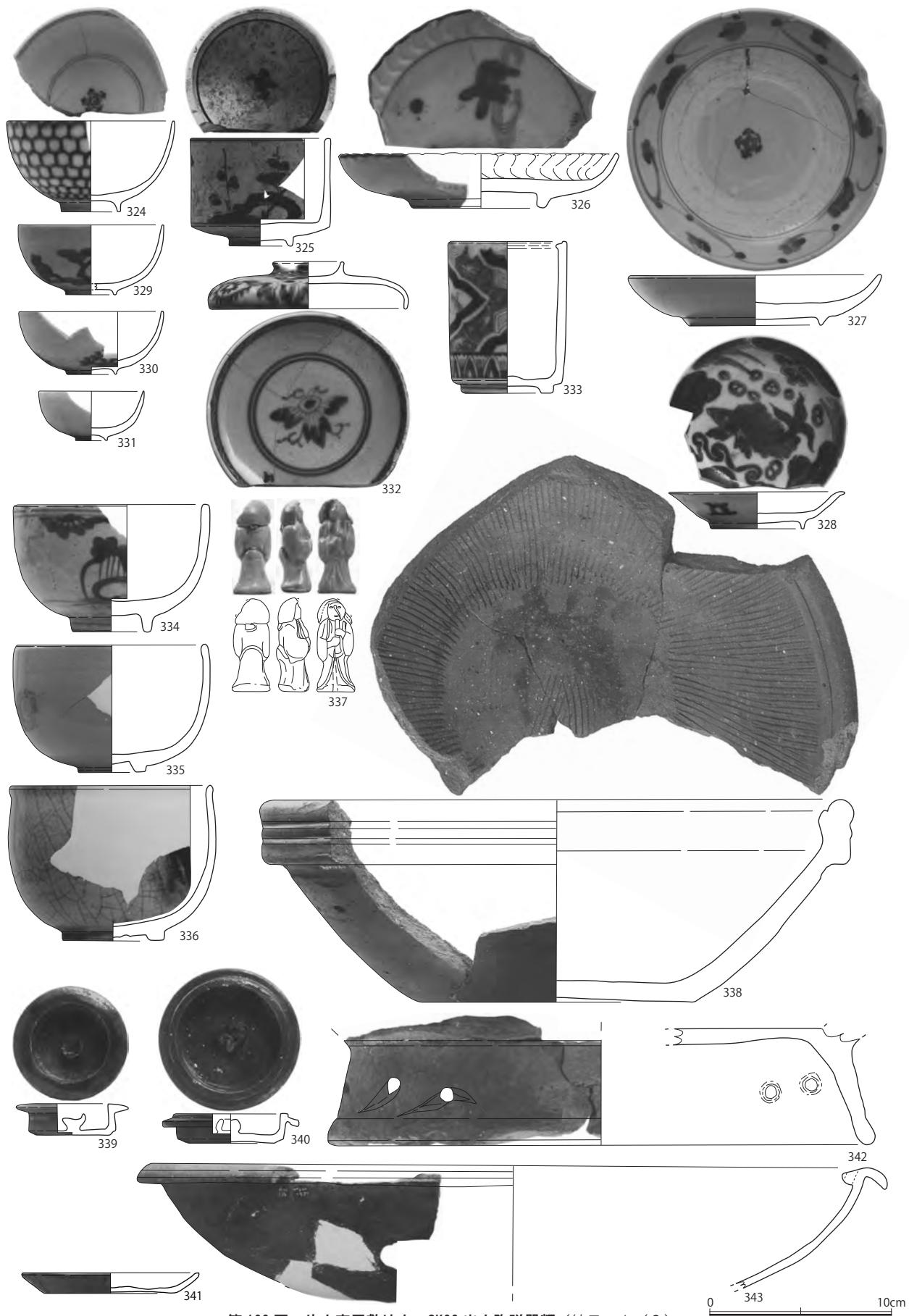
324は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。染付により外面に亀甲繋ぎ文、口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文を描く。

325は肥前系磁器の筒形碗である。染付により外面に松竹梅文と折松葉文、口縁部内面に四方櫛文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。焼成不良。

326は肥前系磁器の初期伊万里の皿である。型打成形で口縁部は輪花となり、端部に口紅を施す。見込に染付による兎文を描く。畳付に砂が付着する。

327は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の大きいものである。染付により内面に花唐草文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。呉須の発色は悪い。蛇ノ目釉剥ぎ部分に環状の重ね焼き痕がみられる。畳付に砂が付着する。

328は肥前系磁器のU字形高台の小皿である。染付により外面に宝文、内面に魚文と青海波文と波文を描く。



第183図 片山家屋敷地内 SK39 出土陶磁器類（縮尺：1／3）

329・330は肥前系磁器の半球形小壺である。329は外面に染付による松文と太湖石文を描く。330は外面に染付による若葉文を描く。

331は肥前系磁器の紅猪口である。残存部に文様はみられない。

332は肥前系磁器の撥高台碗の蓋である。染付により外面に唐花文と蛸唐草文、口縁部内面に四方櫛文、見込に唐花文を描く。焼成不良。

333は肥前系磁器の灰落しである。蓋受けと畳付は無釉である。外面に染付と色絵(赤色・黒色・金色)による窓絵松竹梅文、唐草文、亀甲繋ぎ文、蓮弁文を描く。口縁端部から口縁部外面に敲打痕、割れ口に焼継の痕跡がみられる。

334は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。外面に染付による松竹梅文を描く。

335は京・信楽系陶器の碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に色絵による宝珠文を描く。注連縄文碗と思われる。畳付際を面取りする。SK40の底部破片と接合する。

336は京・信楽系陶器の碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に錆絵による文様を描く。渦巻高台で、畳付際を面取りする。

337は京・信楽系陶器の人形である。虚無僧。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。底部を除く全面に灰釉をかけ、鉄釉により色付ける。

338は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは三角形と思われる。見込に焼き台痕がみられる。胴部外面調整はヘラケズリである。

339は大谷焼の水注または土瓶の蓋である。外面に鉄釉をかける。

340は産地不明陶器の水注または土瓶の蓋である。外面に鉄釉をかける。底部は同心円ケズリである。

341は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。

342は土師質土器の火鉢・焜炉類である。外面に赤彩を施す。

343は瓦質土器の御廐系焙烙である。内耳に貫通する穿孔が1箇所みられる。外面調整は指頭圧痕の上にハケメ、内面調整は丁寧な横ナデである。外面にススが付着する。

SK40 (第184図)

344は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の鉢である。型打成形で、口縁部は輪花となる。青磁染付。染付により内側面に窓絵と唐草文、見込に花唐草文と宝珠文、高台内に二重方形枠内「筒江」銘を描く。高台内の蛇ノ目部分は無釉で砂が付着する。

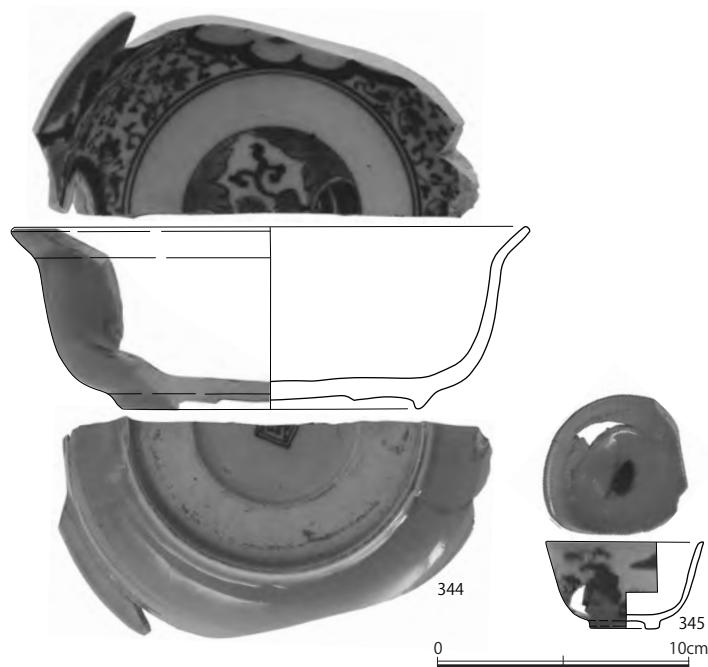
345は肥前系磁器の端反形小壺である。染付により外面に山水文、見込に岩波文を描く。呉須はにじむ。

SK41 (第185図)

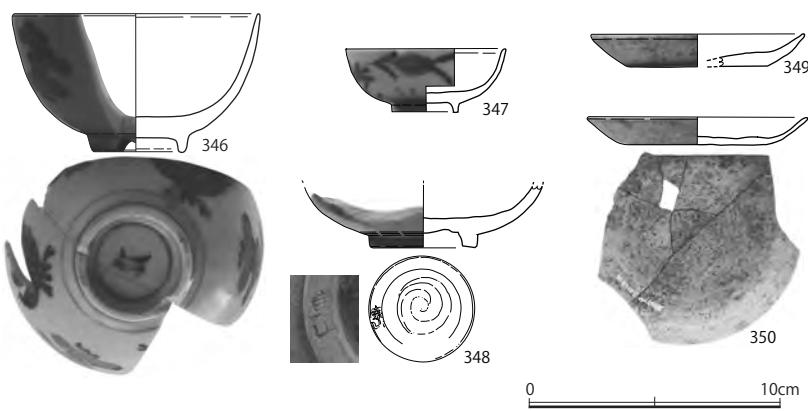
346は肥前系磁器のくらわんか碗である。染付により外面にコンニヤク印判の松文と若松文、高台内に一重圈線内「大明年製」銘を描く。呉須の発色は悪い。高台の釉際処理はやや揃わず、高台内に砂が付着する。

347は肥前系磁器の丸碗形小壺である。外面に染付による草花文を描く。

348は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。錆絵と呉須による文様を描く。渦巻高台で、畳付に「東山」



第184図 片山家屋敷地内 SK40出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第185図 片山家屋敷地内 SK41出土陶磁器類（縮尺：1／3）

の刻印がみられる。畠付際を面取りする。

349・350は土師皿である。ロクロ成形。349は底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。350は底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。

SK42（第186図）

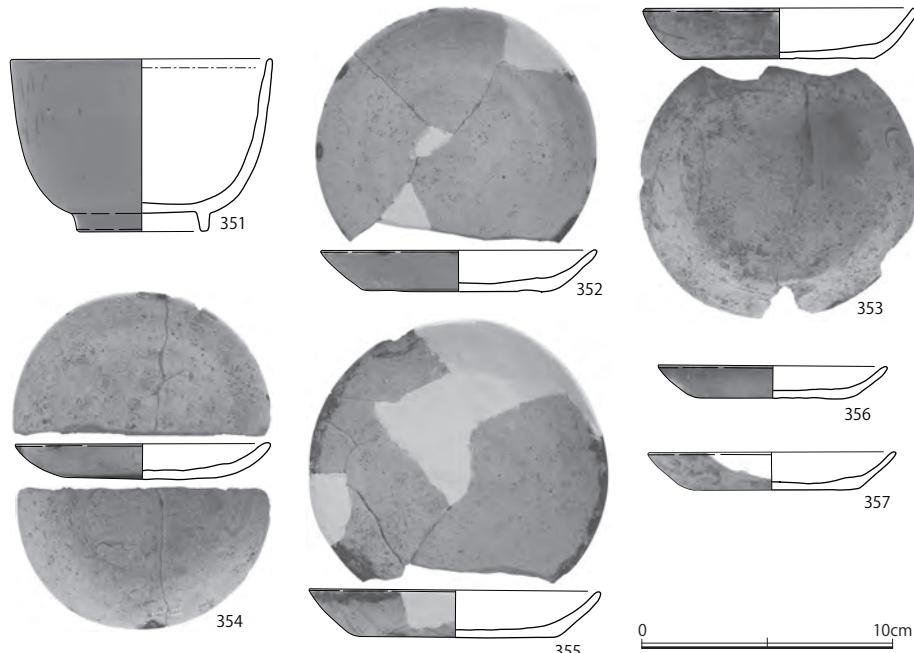
351は肥前系磁器の蓋物である。口縁部内面は無釉である。外面に赤色の色絵による網目文を描く。畠付の内側に砂が付着する。

352～356は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。352～355は口縁部に灯芯油痕がみられる。353は底部、356は内外面にススが付着する。

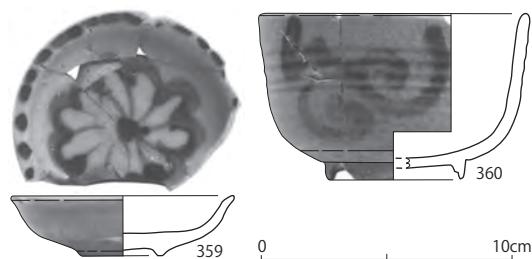
357は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。

SE43（第187図）

358は碁石形土製品である。手捏ね成形。



第186図 片山家屋敷地内 SK42 出土陶磁器類（縮尺：1／3）

第187図 片山家屋敷地内 SE43 出土陶磁器類
(縮尺：1／3)第188図 片山家屋敷地内 SK55 出土陶磁器類
(縮尺：1／3)

SK55（第188図）

359は肥前系磁器の初期伊万里の皿である。染付により口縁部内面に列点文、見込に菊花文を描く。呉須の発色は悪く、疊付の内側に砂が付着する。

360は瀬戸・美濃系陶器の灰釉碗である。高台脇から高台内は無釉である。胴中部外面に4条の沈線と押圧による凹みが2箇所みられる。鉄絵による渦巻文を描く。SK156の破片と接合する。

SD91（第189図）

361は肥前系磁器の撥高台の碗である。染付により外面に瓢箪文と竹垣文、口縁部内面に圈線、見込に瓢箪の葉文を描く。

362は肥前系磁器の紅皿である。菊花形に型押成形される。

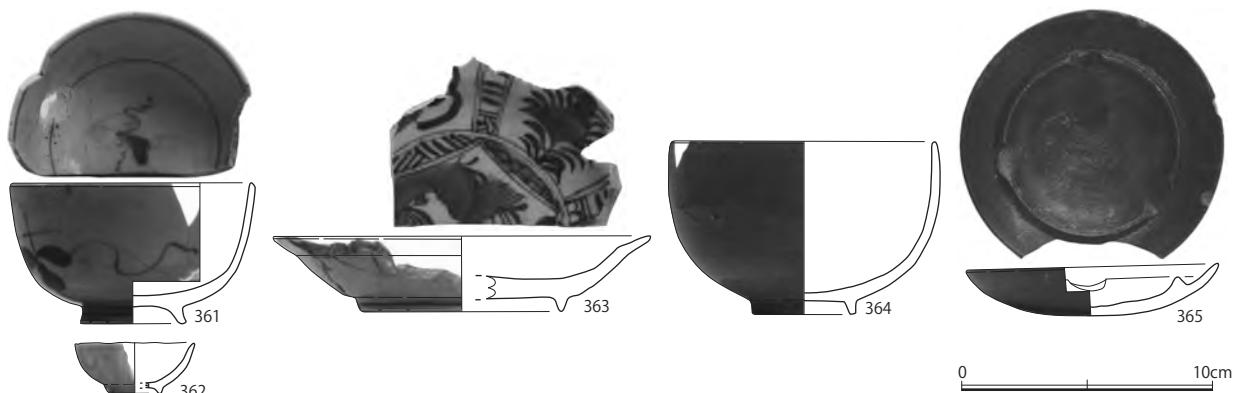
363は肥前系磁器のU字形高台の皿である。内面は染付による芙蓉手である。高台に砂が付着する。

364は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。高台脇から高台内は無釉で、高台内に「テル」？の墨書きがみられる。疊付際を面取りする。

365は備前系陶器の灯明受皿である。内面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が3箇所みられる。

SD106（第190・191図）

366は肥前系磁器の初期伊万里の碗である。外面に染付による梅花文を描く。高台に砂が付着する。



第189図 片山家屋敷地内 SD91出土陶磁器類（縮尺：1／3）

367は肥前系磁器のくらわんか碗である。外面に染付による網目文を描く。呉須の発色は悪く、畳付に砂が付着する。

368・369は肥前系磁器のU字形高台の皿である。368は染付により外面に唐草文、内側面に半菊唐草文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圏線内「渦福」銘を描く。高台に砂が付着する。369は染付により内面に雲龍文、高台内に一重圏線内「太明成化年製」銘を描く。

370は肥前系磁器の碁笥底の小坏である。外面に染付による若松文を描く。

371は肥前系磁器の紅皿である。外面に染付による笹文を描く。

372は肥前系磁器の丸碗の蓋である。染付により外面に草文と雲状土坡文、高台内に一重圏線を描く。

373・374は肥前系磁器の瓶である。畳付と内面は無釉である。外面に染付による草花文？を描く。呉須の発色は悪く、373は高台と高台内、374は高台内に砂が付着する。

375は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。口縁部は無釉で砂が付着する。外面に染付による牡丹唐草文を描く。

376は肥前系磁器の香炉・火入である。畳付と胴下半部内面から見込を除き青磁釉をかける。見込に砂が付着し、畳付に重ね焼き痕？がみられる。

377は肥前系陶器の刷毛目碗である。高台に砂が付着する。

378は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。外面に染付による唐草文を描く。

379は肥前系陶器の見込蛇ノ目釉剥ぎの皿である。胴下半部外面から高台内を除き鉄釉をかける。高台に砂が付着する。

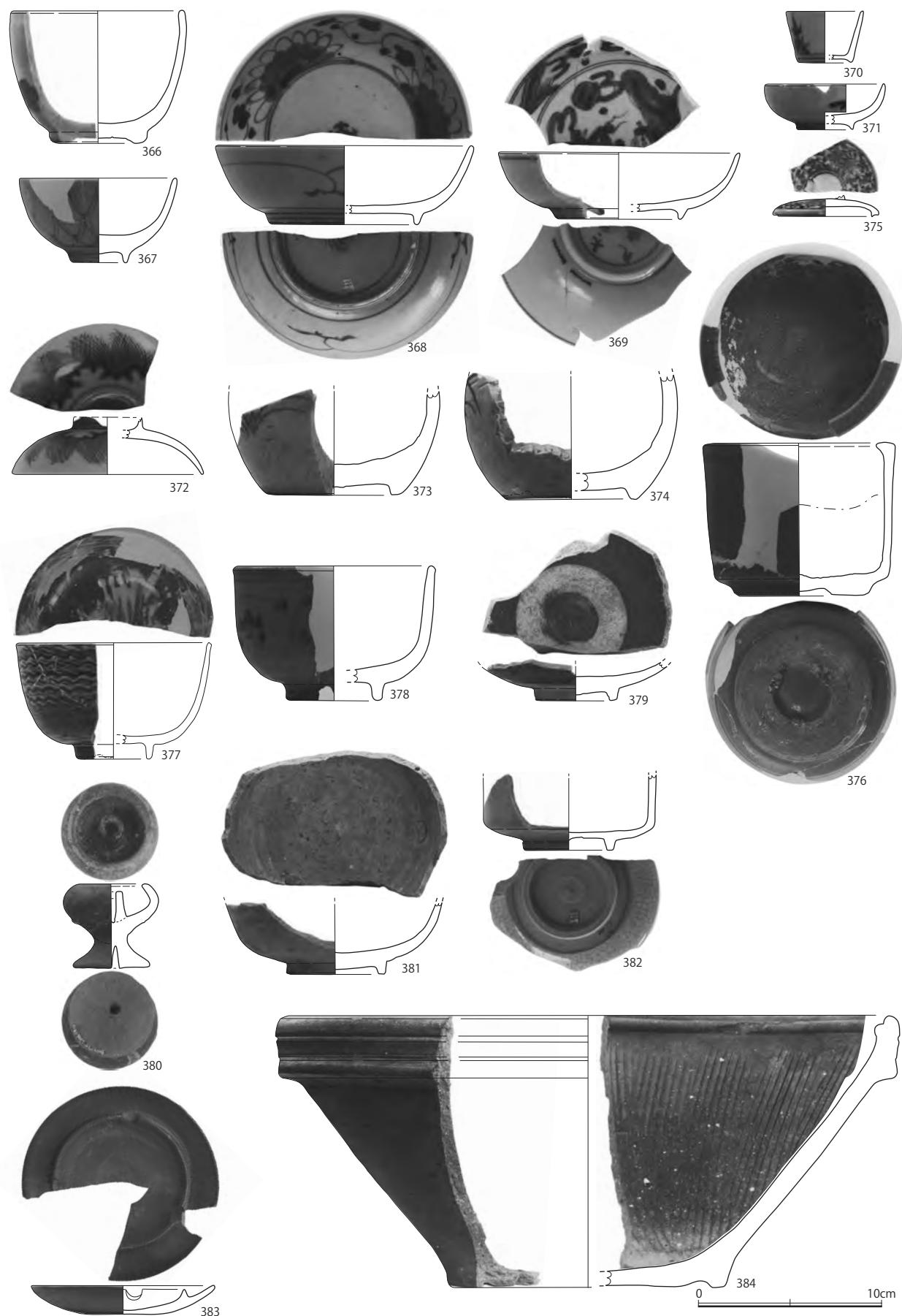
380は肥前系陶器の秉燭である。脚部を除き鉄釉をかける。底部に左回転の糸切り離し痕と円錐状の穿孔がみられる。芯立に灯芯油痕がみられる。

381は瀬戸・美濃系陶器の碗である。胴下半部外面から高台内を除き灰釉をかける。見込に円錐ピング痕がみられる。

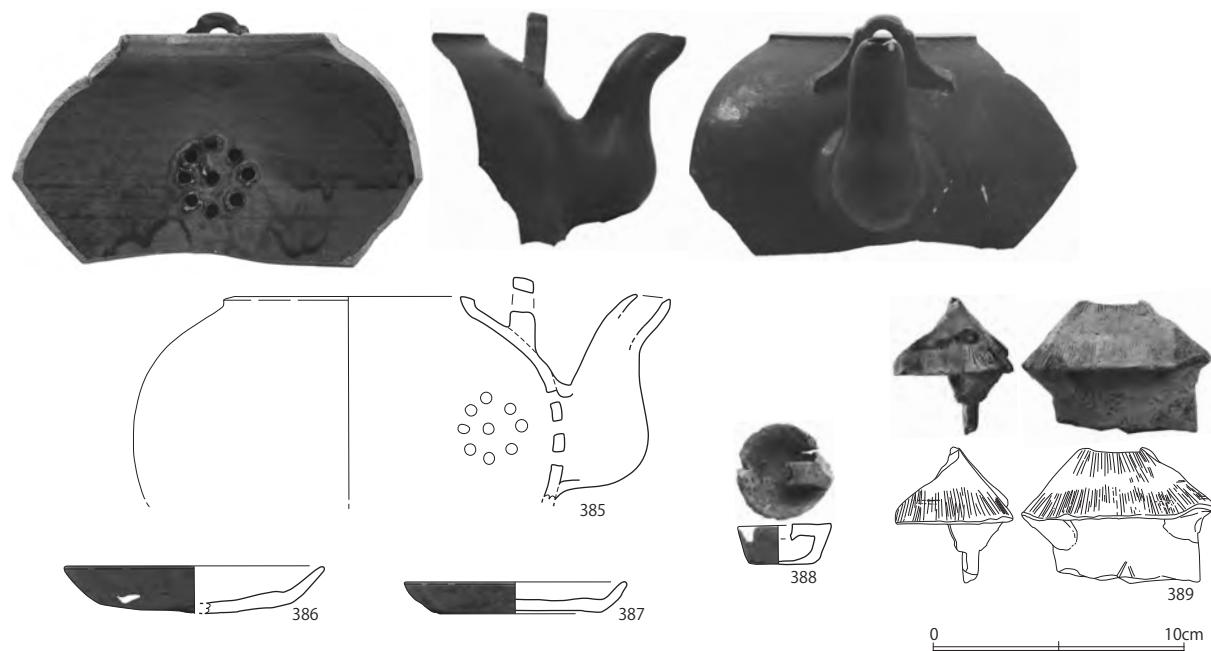
382は京・信楽系陶器の筒形碗である。高台脇から高台内を除き白化粧土を塗布したち灰釉をかける。渦巻高台で、畠付際を面取りする。

383は備前系陶器の灯明受皿である。内面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が3箇所みられる。

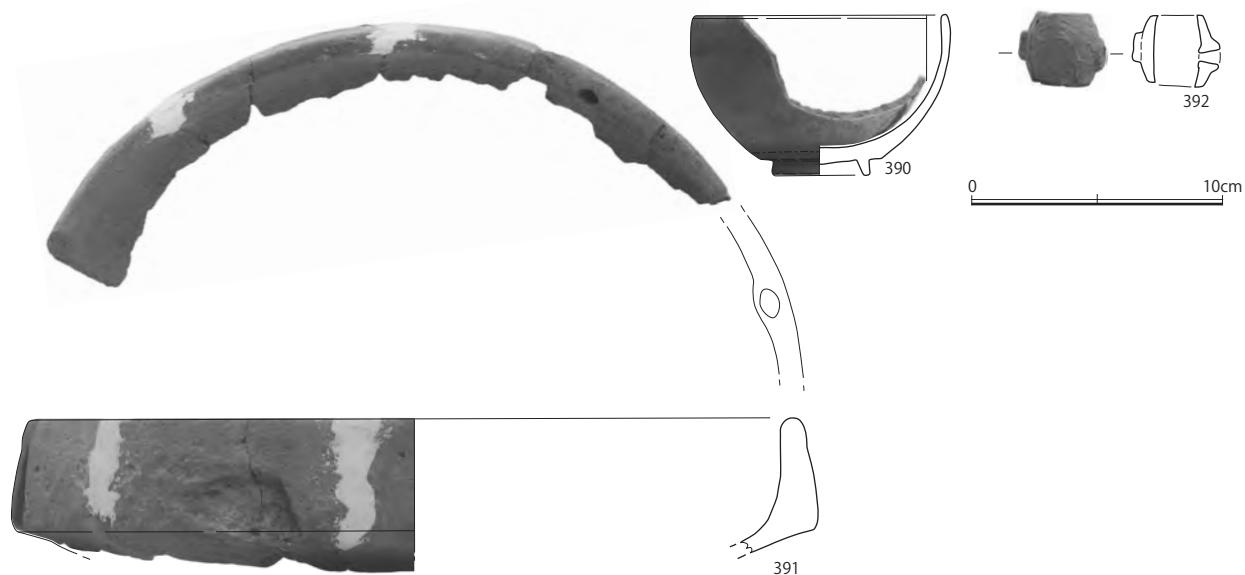
384は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは「*」または三角形になると思われる。上端



第190図 片山家屋敷地内 SD106 出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)



第191図 片山家屋敷地内 SD106 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)



第192図 片山家屋敷地内 SK148 出土陶磁器類 (縮尺: 1/3)

はナデ消さない。外面調整はヘラケズリののち横ナデである。

385 は産地不明陶器の土瓶である。口縁部を除き鉄釉をかける。内面は薄く施釉する。

386・387 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。

388 は土師質土器の秉燭である。内面と芯立上面に透明釉をかける。

389 は土師質のミニチュアの民家である。屋根部分に透明釉をかけ、緑釉と鉄釉で装飾する。

SK148 (第192図)

390 は京・信楽系陶器の小杉碗である。高台脇から高台内を除き白化粧土を塗布したのち灰釉をか

ける。外面に呉須による草花文？を描く。疊付際を面取りする。

391は土師質土器の関西系焙烙である。口縁端部に貫通しない穿孔がみられる。

392は土師質土器のミニチュアの打出の小槌である。型押成形。

SK156（第193～206図）

393～396は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の高いものである。高台の釉際処理は揃い、疊付に砂の付着はない。393は外面に染付による草花文を描く。395は染付により外面に草花文、口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文、高台内に一重圏線内「富貴長春」銘を描く。396は染付により外面に牡丹文と草文、口縁部内面に四方櫛文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。393・394は全面に貫入がみられる。

397～399は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。397は染付により外面に折枝松文と松笠文、口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文を描く。高台の釉際処理はやや不揃いである。398は染付により外面に団扇文と丸文、コンニャク印判の軍配文、高台内に一重圏線内「大明年製」銘を描く。399は外面に染付による草文を描く。

400は肥前系磁器の半球碗である。外面に染付による若松文を描く。

401は肥前系磁器の湯飲碗である。染付により外面に四方櫛文、樹木文・太湖石文と竹文・雲文、口縁部内面に松文、高台内に一重圏線内「大明」銘を描く。

402は肥前系磁器の碗である。白磁。うがい茶碗か？

403は肥前系磁器の碗である。青磁。型打成形で、口縁部は輪花となる。

404は肥前系磁器の碗である。染付により外面に山水文、網干文、帆掛け舟文、雁文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。底部に焼成後の穿孔がみられる。

405は肥前系磁器の初期伊万里の皿である。蛇ノ目高台。染付により外面に圏線、内面に桔梗文、薄文、兎文、三日月文、短冊文（「天量」？）を描く。吹墨がみられる。

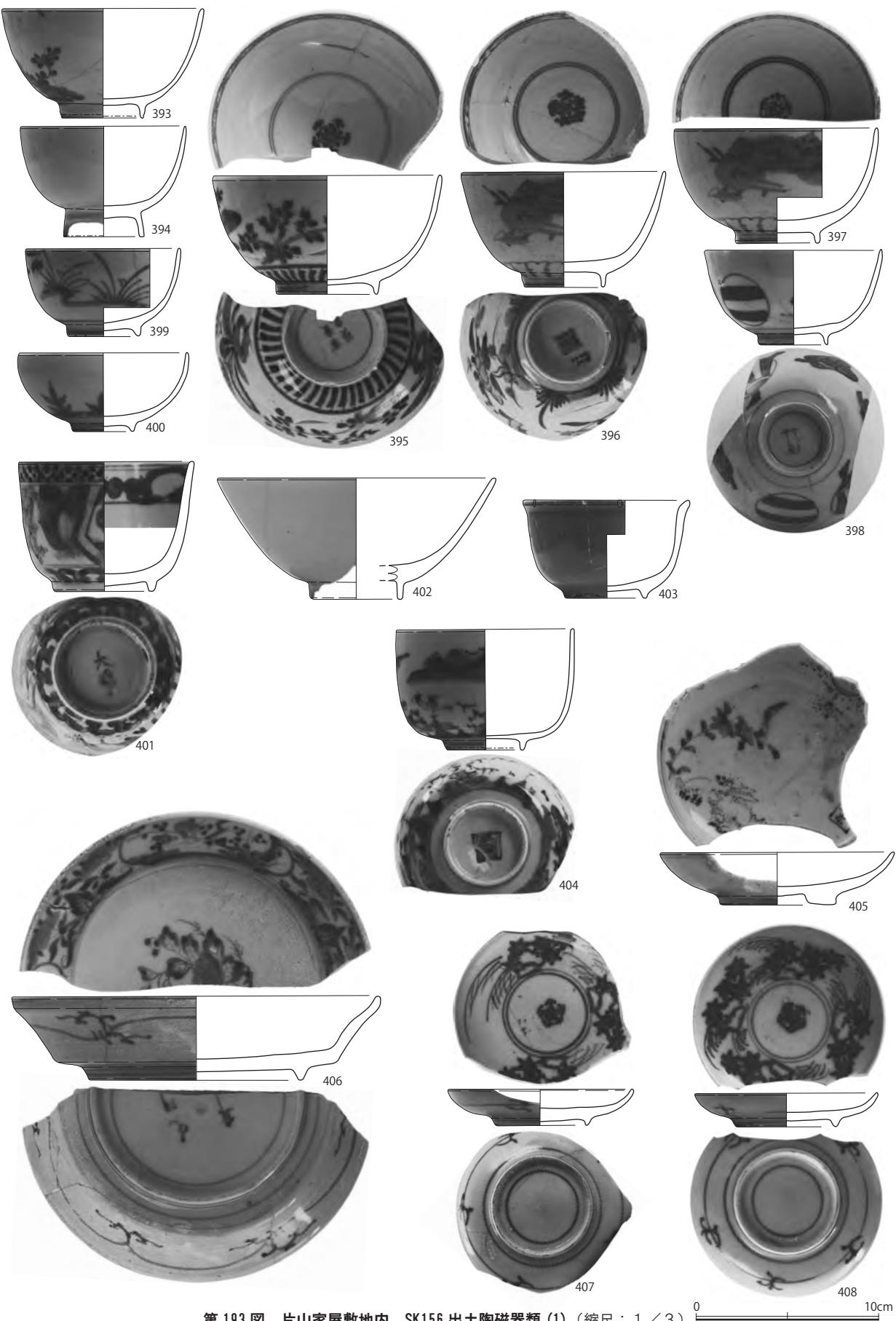
406は肥前系磁器のU字形高台の皿である。高台内にハリ支え痕がみられる。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に梅文と牡丹文、見込に牡丹文、高台内に一重圏線内「大明（成化）？年製」銘を描く。

407・408は肥前系磁器のU字形高台の小皿である。染付により外面に唐草文、内側面に薄文とコンニャク印判の紅葉文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圏線を描く。407は高台に砂が付着する。

409～413は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台が無釉のものである。内側面に染付による不明文様を描く。409・411・413は呉須の発色が悪い。409・412は蛇ノ目釉剥ぎ部分、410・411・413は蛇ノ目釉剥ぎ部分と疊付に砂が付着する。413は割れ口に漆継の痕跡？がみられる。

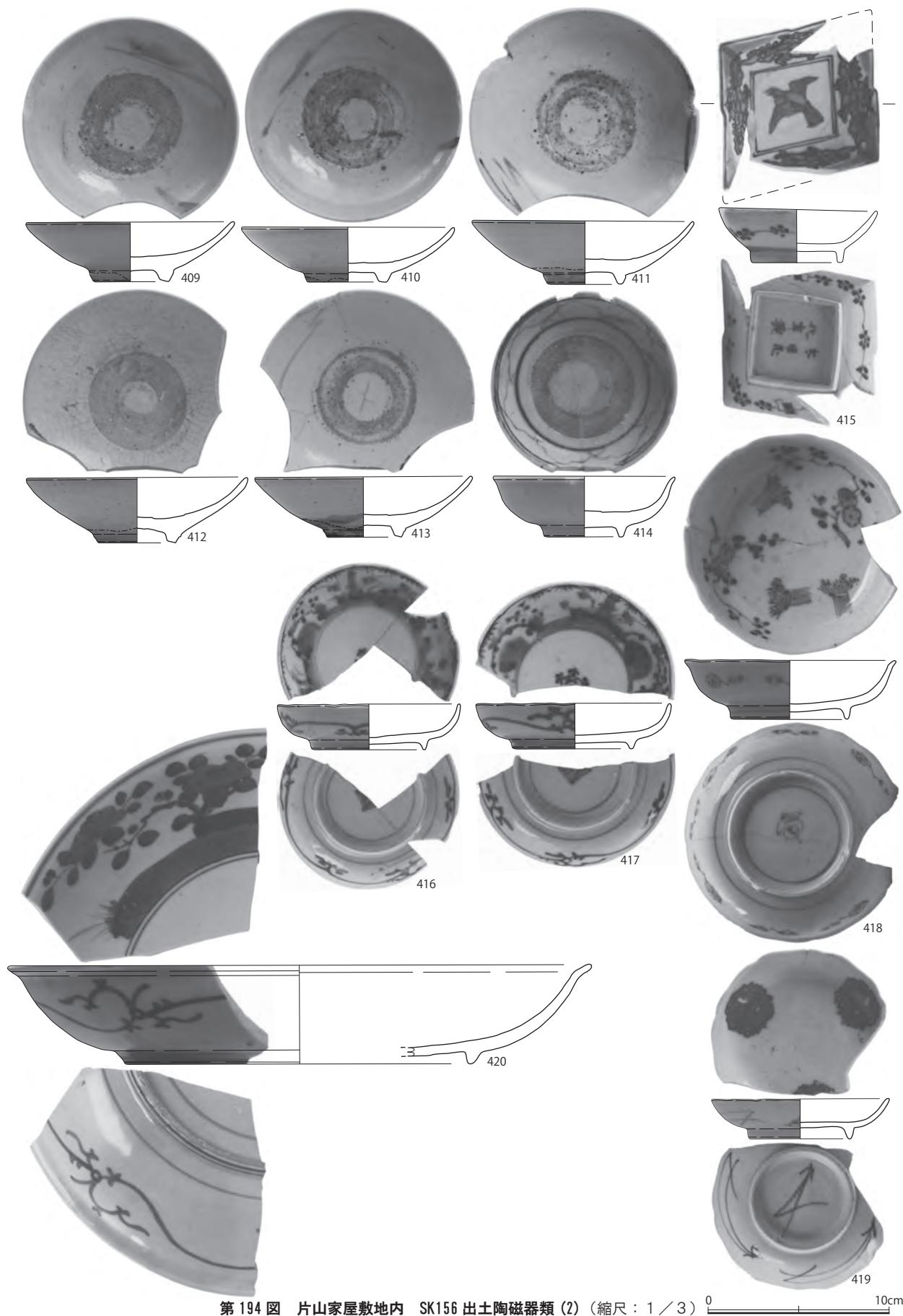
414は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の小さいものである。内側面に染付による斜格子文を描く。呉須の発色は悪い。蛇ノ目釉剥ぎ部分と疊付に砂が付着する。

415は肥前系磁器の糸切り細工成形の皿である。高台は方形の貼り付け高台。染付により外面に花唐草文と宝（巻物）文、内側面にコンニャク印判の牡丹唐草文、見込にコンニャク印判の鳥文、高台内に「太明成化年製」銘を描く。口縁端部に口紅を施す。



第193図 片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)

0 10cm



第194図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)

416～419は肥前系磁器の型打小皿である。型打成形により口縁部は輪花となる。416・417は染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に竹文と梅文と雪輪文、見込に手描きの五弁花文、高台内に一重圏線と二重方形枠内「渦福」銘を描く。418は染付により外面に梅花文、内側面に折枝梅文と柴束文、高台内に一重圏線内「渦福」銘を描く。419は染付により外面に松葉文、内側面にコンニャク印判の菊花文、高台内に折松葉文を描く。高台に砂が付着する。

420は肥前系磁器のU字形高台の大皿である。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に椿文、高台内に一重圏線を描く。

421は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎの鉢である。内側面に染付による文様、見込に染付によるコンニャク印判の五弁花文を描く。蛇ノ目釉剥ぎ部分に砂が付着する。

422は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の鉢である。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に四方櫛文と蛸唐草文、見込に山水文と釣人文、高台内に二重圏線と二重方形枠内「渦福」銘を描く。呉須の発色は悪い。高台内の蛇ノ目部分は無釉で重ね焼き痕がみられる。

423は肥前系磁器の端反形猪口である。外面に染付による圏線、高台内に一重圏線内不明文字を描く。疊付の内側に砂が付着する。全面に貫入がみられる。

424は肥前系磁器の碁笥底の猪口である。染付により外面に草花文と橋文、高台内に一重圏線内「大(太?)明年製」銘を描く。

425～428は肥前系磁器の端反形小壺である。425は外面に染付によるコンニャク印判の紅葉文を描く。427は外面に染付による草花文?を描く。428は外面に染付による松文を描く。425・426は疊付、427は高台の内側に砂が付着する。

429～431は肥前系磁器の丸碗形小壺である。429は全面に貫入がみられる。430は外面に染付による折松葉文を描く。疊付に砂が付着する。くらわんか。431は外面に染付によるコンニャク印判の紅葉文を描く。呉須の発色は悪い。疊付の内側に砂が付着する。

432は肥前系磁器の半球形小壺である。外面に染付による秋草文を描く。

433は肥前系磁器の碁笥底の小壺である。外面に染付による柴束文と草花文を描く。

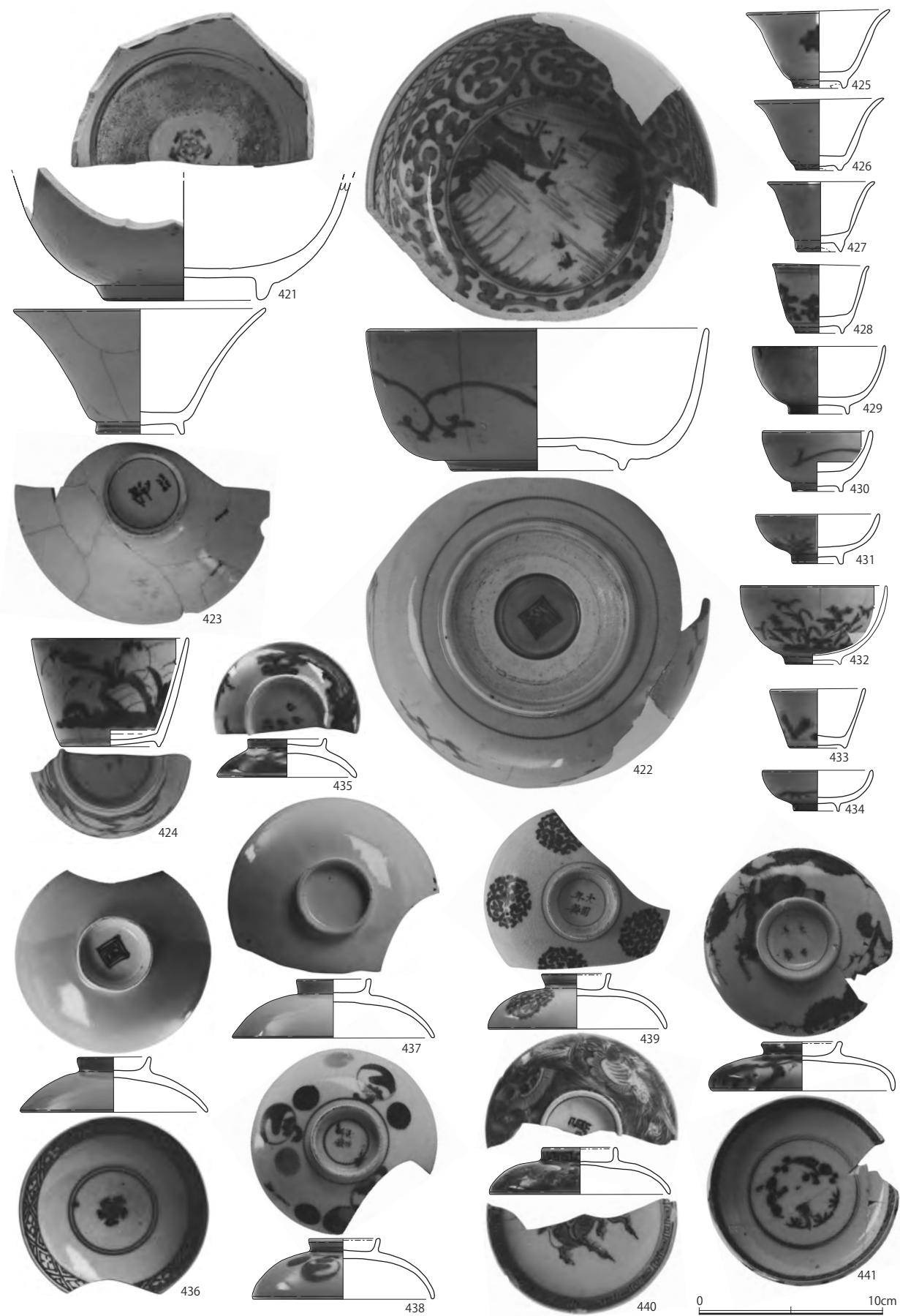
434は肥前系磁器の紅皿である。外面に染付による笹文を描く。

435は肥前系磁器の小広東碗の蓋である。染付により外面に山水文、摘み内に帆掛け舟文を描く。

436～440は肥前系磁器の丸碗の蓋である。436は青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文、摘み内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。437は白磁。438は染付により外面に団扇文と丸文、摘み内に一重圏線内「大明年製」銘を描く。439は染付により外面に蛸唐草文、見込に手描きの五弁花文、摘み内に「大明年製」銘を描く。全面に貫入がみられる。440は染付により外面に蓑亀文と流水文と櫛歯文、口縁部内面に雷文、見込に麒麟文、摘み内に「乾」字を描く。焼継が施されている。

441は肥前系磁器の撥高台碗の蓋である。染付により外面に桐文と太湖石文、口縁部内面に四方櫛文、見込に環状松竹梅文、摘み内に一重圏線内「太明年製」銘を描く。

442～444は肥前系磁器の蓋物である。442は蓋受けが無釉で、砂が付着する。外面に染付による蔓草文を描く。443は口縁部内面と蓋受けが無釉である。外面に染付による紅葉文を描く。444は口



第195図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(3) (縮尺: 1/3)

縁部内面が無釉である。外面に染付による牡丹文を描く。畳付に砂が付着する。全面に貫入がみられる。

445は肥前系磁器の段重・蓋物である。口縁部内面は無釉である。外面に染付による草花文？と流水文を描く。

446～448は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。口縁部は無釉で砂が付着する。446は外面に染付による唐草文と雪輪文を描く。漆継が施されている。447は外面に染付による宝文と七宝文を描く。448は外面に染付による七宝文を描く。

449～458は肥前系磁器の仏飯器である。449は外面に染付による帆掛け舟文と遠山文と柳文を描く。450は外面に染付による遠山文と宝文？を描く。451は外面に染付による東屋山水文？を描く。452は外面に染付による唐草文を描く。呉須の発色は悪い。453は外面に染付による松文を描く。呉須の発色は悪い。455は外面に染付による遠山文？を描く。呉須の発色は悪い。456は畳付の内側に砂が付着する。458は外面に染付による梅文を描く。呉須の発色は悪い。

459・460は肥前系磁器の香炉・火入である。青磁。459は底部を除き内外面に青磁釉、底部に鋸釉をかける。底部に砂が付着する。460は高台脇から高台内と内面は無釉である。

461は肥前系磁器の灰落しである。底部と内面を除き青磁釉、底部に鋸釉をかける。

462は肥前系陶器の京焼風碗である。高台と高台内を除き灰釉をかける。外面に呉須による山水文を描く。高台内に円刻がみられる。

463は肥前系陶器の刷毛目碗である。畳付に砂が付着する。

464～469は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。464は外面に染付による山水文と家屋文と雁文を描く。465は外面に染付による山水文を描く。466は外面に染付による如意雲文を描く。畳付に砂が付着する。467は外面に染付による四方櫻文とコンニヤク印判の菊花文を描く。468は外面に染付による東屋山水文を描く。469は外面に染付による松竹梅文と太湖石文と遠山文を描く。

470は肥前系陶器の銅緑釉皿である。胴下部から高台内を除く外面に透明釉、内面に銅緑釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。

471は肥前系陶器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿である。畳付から高台内を除き灰釉をかける。内面に銅緑釉を流し掛ける。蛇ノ目釉剥ぎ部分と畳付に砂が付着する。

472は肥前系陶器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿である。胴下部から高台内を除き灰釉をかける。畳付際を面取りする。

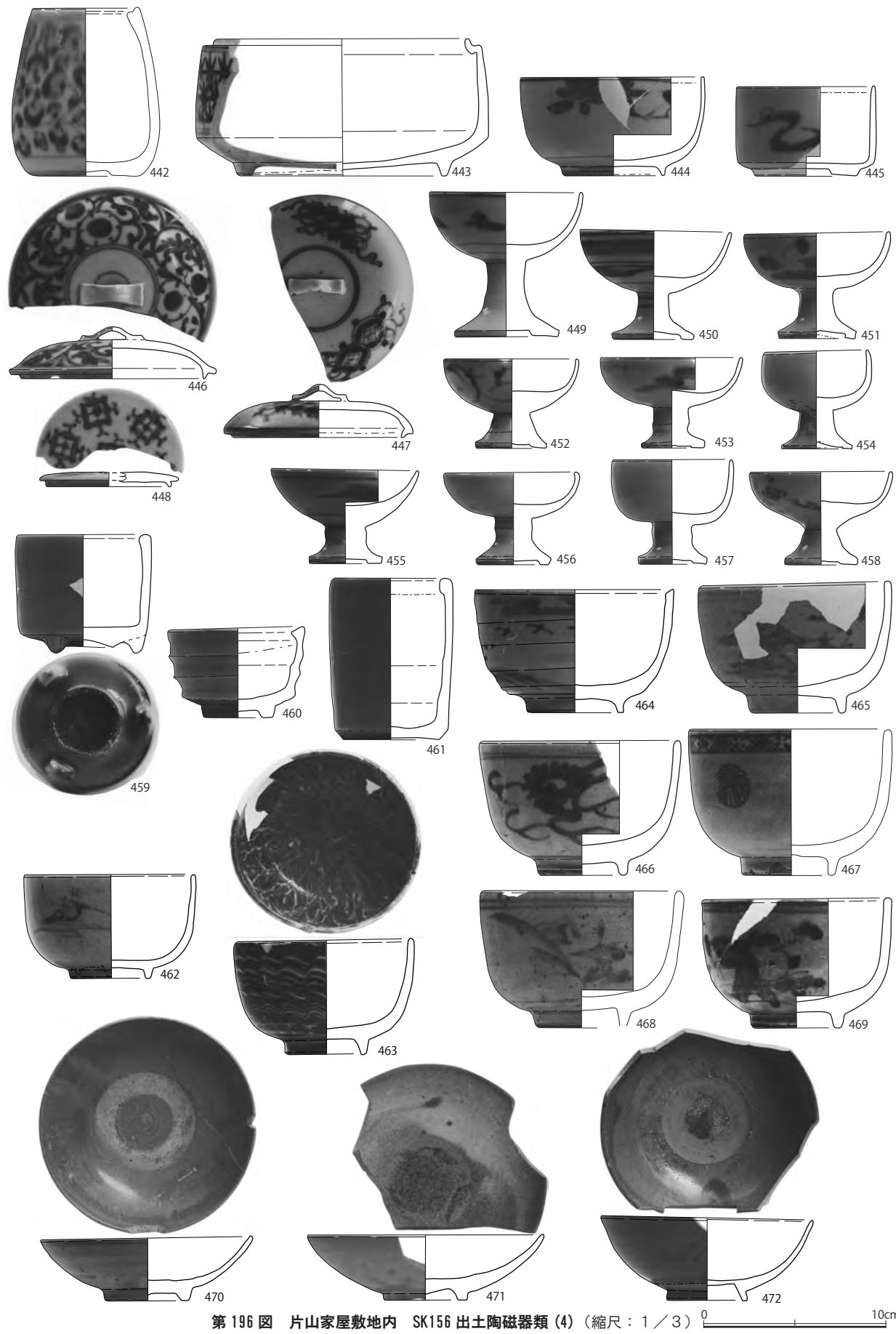
473は肥前系陶器の灰釉溝縁皿である。胴下半部外面から高台内を除き灰釉をかける。見込と畳付に砂目がみられる。

474は肥前系陶器の刷毛目皿である。畳付を除き鉄釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。内面に刷毛目を施す。見込と高台に砂が付着する。

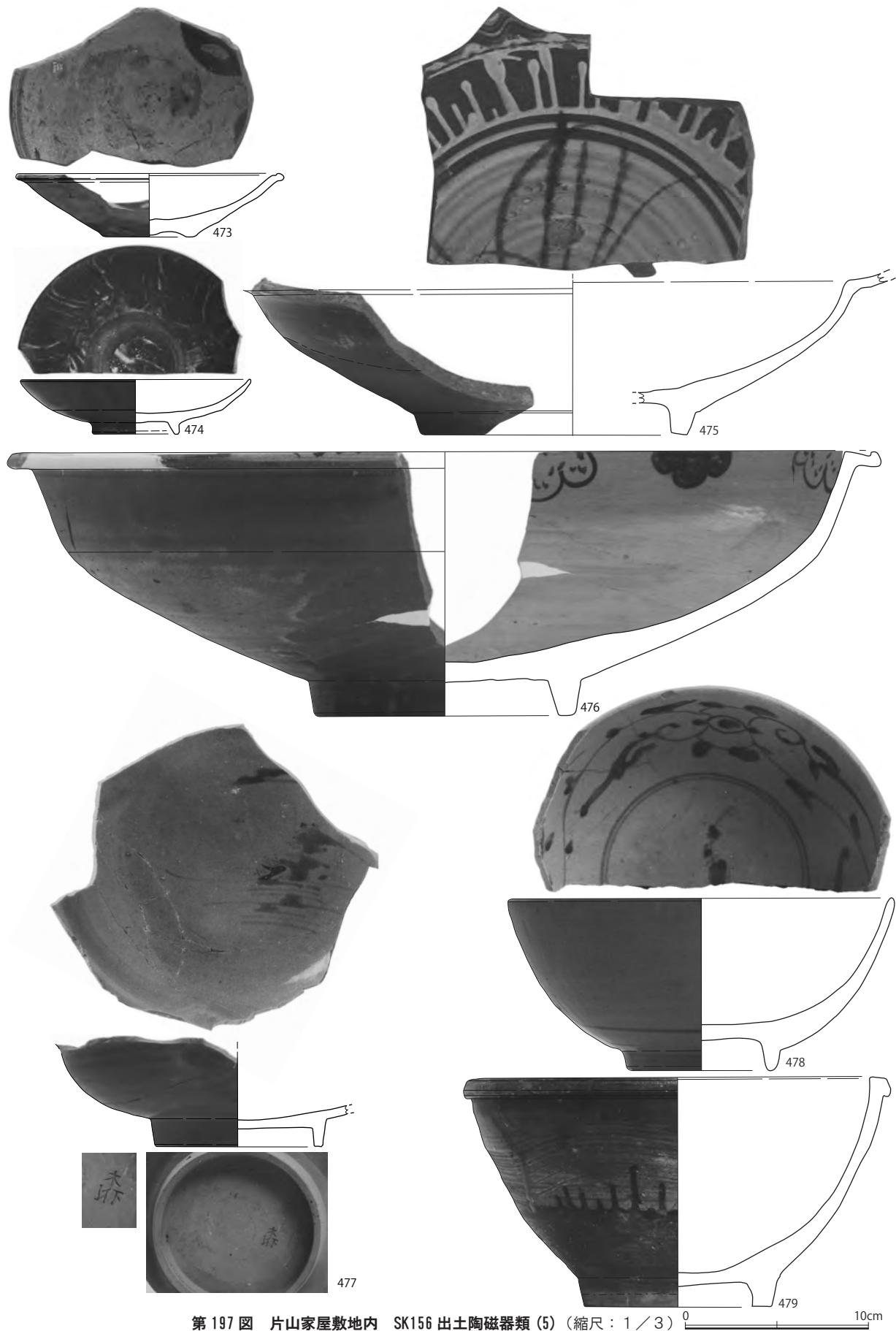
475は肥前系陶器の刷毛目鉢である。見込と畳付に胎土目をはずした痕跡がみられる。見込に鉄絵による文様を描く。

476は肥前系陶器の二彩手鉢である。口縁部内面から内側面にかけ鉄釉と緑釉による花文を描く。高台に切り込みが2箇所みられ、高台の内側に砂が付着する。割れ口に漆継の痕跡？がみられる。

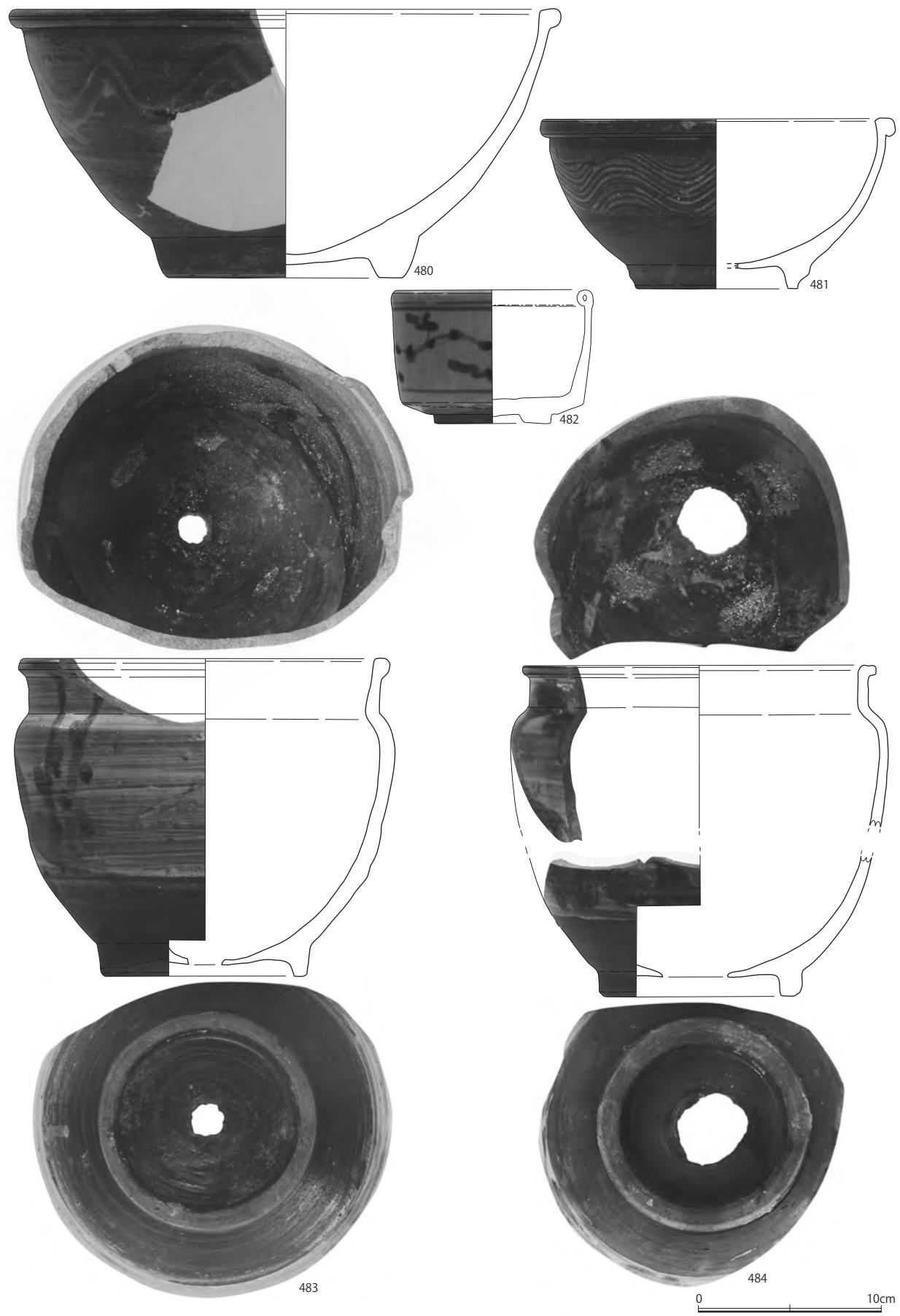
477は肥前系陶器の京焼風鉢である。型打成形で、胴部に押圧による凹みがみられる。胴下部から



第196図 片山家屋敷地内 SK156出土陶磁器類(4) (縮尺: 1/3) 0 10cm



第197図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(5) (縮尺: 1/3)



第198図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(6) (縮尺: 1/3)

0 10cm

高台内を除き灰釉をかける。見込に呉須による山水文を描き、高台内に円刻と「木下弥」の刻印がみられる。畳付際を面取りする。

478は肥前系陶器の陶胎染付の鉢である。染付により外面に圈線、内側面と見込に唐草文を描く。

479～481は肥前系陶器の刷毛目の片口である。479・481の口縁部上面に重ね焼き痕がみられる。481の高台内にススが付着する。

482は肥前系陶器の陶胎染付の香炉・火入である。高台脇から高台内と内面は無釉である。外面に染付による如意頭状唐草文を描く。見込に砂が付着する。

483・484は肥前系陶器の刷毛目の甕である。底部内面に砂目がみられる。外面に鉄絵による不明文様を描く。底部に焼成後の穿孔がみられ、植木鉢に転用したと思われる。

485は瀬戸・美濃系陶器の灰釉碗である。畳付から高台内は無釉である。

486・487は瀬戸・美濃系陶器の半筒形碗である。慣用名「せんじ」。486は高台脇から高台内を除き灰釉をかけ、口縁部内外面に鉄釉を流し掛ける。胴部に押圧による凹みがみられる。渦巻高台。487は畳付から高台内を除き灰釉をかける。

488は瀬戸・美濃系陶器の碗である。口縁部外面から内面全面に灰釉、口縁部と畠付を除く外面に錆釉を掛け分け、胴部外面に長石釉を散らす。胴部に押圧による凹みがみられる。

489は瀬戸・美濃系陶器の黄瀬戸鉢である。高台から高台内を除き灰釉をかけ、内面に緑釉を流し掛ける。見込に櫛描きによる同心円文と波状文、中央に印花による菊花文を施す。見込に団子トチン痕、胴部外面に重ね焼き痕がみられる。

490は瀬戸・美濃系陶器の植木鉢である。底部を除く外面に灰釉をかける。

491は瀬戸・美濃系陶器の片口である。高台脇から高台内を除き鉄釉をかける。胴部内面から見込は粗く施釉する。

492は瀬戸・美濃系陶器の手水鉢である。底部と三足を除き鉄釉をかける。底部中央に焼成後の穿孔がみられ、植木鉢に転用したと思われる。

493は京・信楽系陶器の注連縄文碗である。高台脇から高台内を除き、白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に錆絵と呉須による注連縄文を描く。高台内に円刻がみられる。畠付際を面取りする。

494～497は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。高台脇から高台内は無釉で、畠付際を面取りする。494は外面に錆絵による草花文？を描く。高台内に円刻がみられる。495は外面に錆絵による松葉文？を描く。高台内に円刻がみられる。496は外面に色絵（赤色・緑色・金色）による梅文を描く。高台内に円刻がみられる。497は高台脇から高台内を除き、白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に錆絵と呉須による岩波文を描く。渦巻高台。高台内に「錦光山」の刻印がみられる。

498は京・信楽系陶器の筒形碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に錆絵と呉須による秋草文を描く。高台内に円刻がみられる。畠付際を面取りする。

499・500は京・信楽系陶器の半筒形碗である。高台脇から高台内を除き、白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。畠付際を面取りする。499は外面に錆絵による松文を描く。高台内に円刻がみられる。

500は見込に三足付板トチの支え痕がみられる。渦巻高台。

501は京・信楽系陶器の平碗である。高台脇から高台内を除き、白化粧土を塗布したのち灰釉をか

ける。見込に錆絵による文様を描く。高台内に円刻がみられる。畳付際を面取りする。

502は京・信楽系陶器の碗である。高台脇から高台内を除き、白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に錆絵と呉須による水仙文?を描く。渦巻高台。畳付際を面取りする。

503は京・信楽系陶器の土瓶の蓋である。内面に灰釉をかける。外面にスヌが付着する。

504は京・信楽系陶器の香炉・火入である。底部と内面を除き、白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。底部に不明文字の墨書がみられる。

505は京・信楽系陶器の灯明皿である。口縁部外面から内面全面に灰釉をかける。口縁部に灯芯油痕がみられる。

506・507は備前系陶器のサヤ形鉢である。506は底部に「①」の刻印がみられる。507は口縁端部と底部を除く外面に塗土を施す。口縁端部と底部に重ね焼き痕がみられる。

508・509は備前系陶器の擂鉢である。508は口縁帯から内面にかけて塗土を施す。見込のスリメは「*」。胴上半部外面の調整は横ナデ、下半はヘラケズリである。509の見込のスリメは「*」と思われる。口縁帯下端に重ね焼き痕、口縁帯と胴部外面に色調差がみられる。口縁帯に黄ゴマがみられる。胴部外面の調整は横ナデである。

510～512は備前系陶器の灯明皿である。口縁部に灯芯油痕がみられる。510は内面に塗土を施す。511・512は口縁部外面から内面全面に塗土を施す。

513・514は備前系陶器の灯明受皿である。513は全面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が3箇所みられる。514は内面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が1箇所みられる。

515～517は丹波系陶器の甕である。515は全面に薄く鉄釉をかけ、底部外面に砂が付着する。胴上部外面に不遊環を貼り付ける。石組み溝5の破片と接合する。516は口縁部上面に団子トチンが付着する。全面に鉄泥を塗布したのち、口縁部を除く外面に灰釉をかける。底部外面に砂が付着する。517は全面に鉄釉をかける。胴上部外面に不遊環を貼り付ける。底部外面に砂が付着する。内面に白色の付着物がみられる。

518は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは三角形。胴部外面の調整はヘラケズリののち横ナデである。底部外面に砂が付着する。

519は産地不明陶器の水注または土瓶の蓋である。外面に錆釉ののち灰釉をかける。

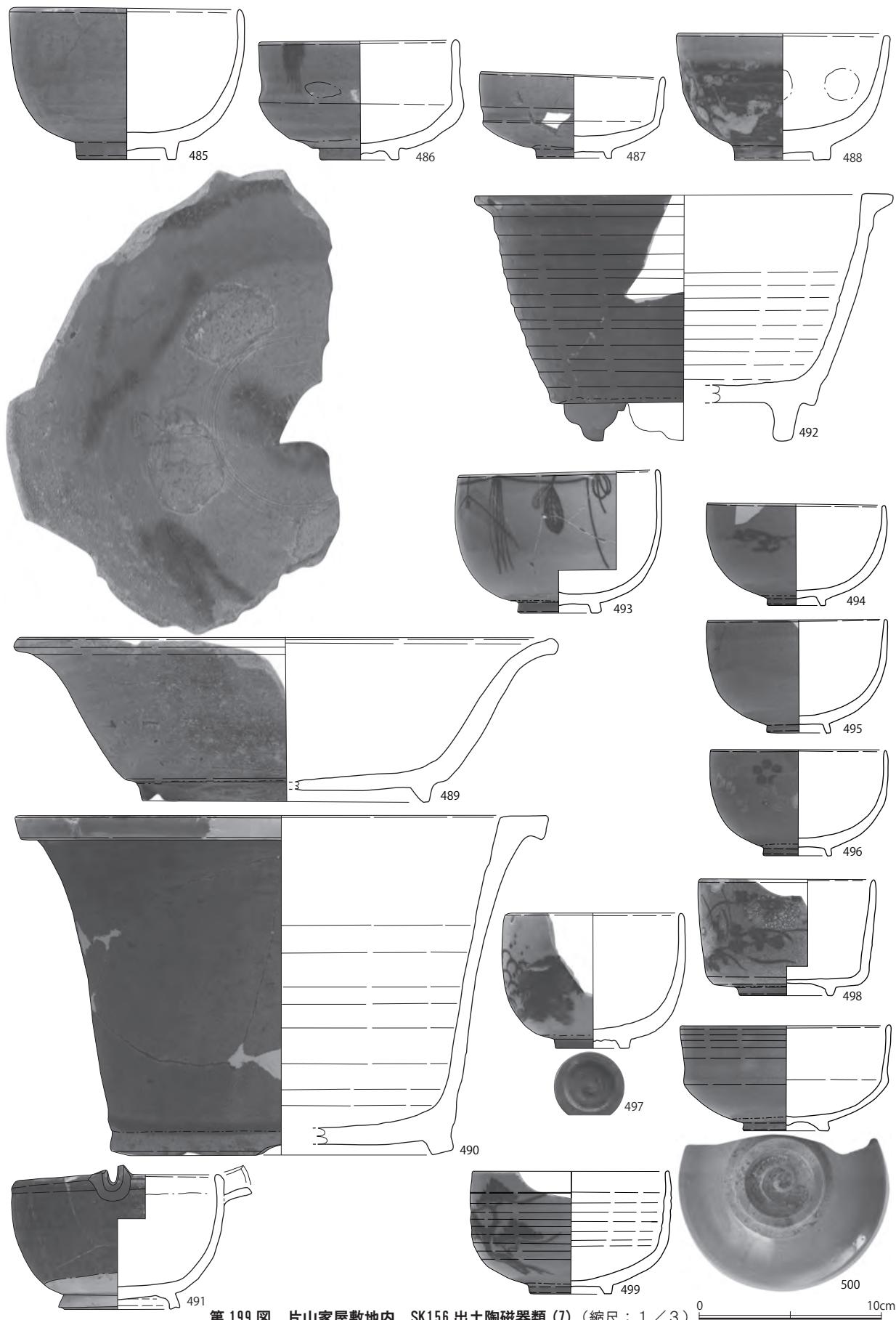
520は産地不明陶器の鍋である。胴下半部から底部外面を除き鉄釉をかける。底部内面にハリ支え痕がみられる。底部外面にスヌが付着する。

521・522は土師皿である。手捏ね成形で、外面に指頭圧痕がみられる。

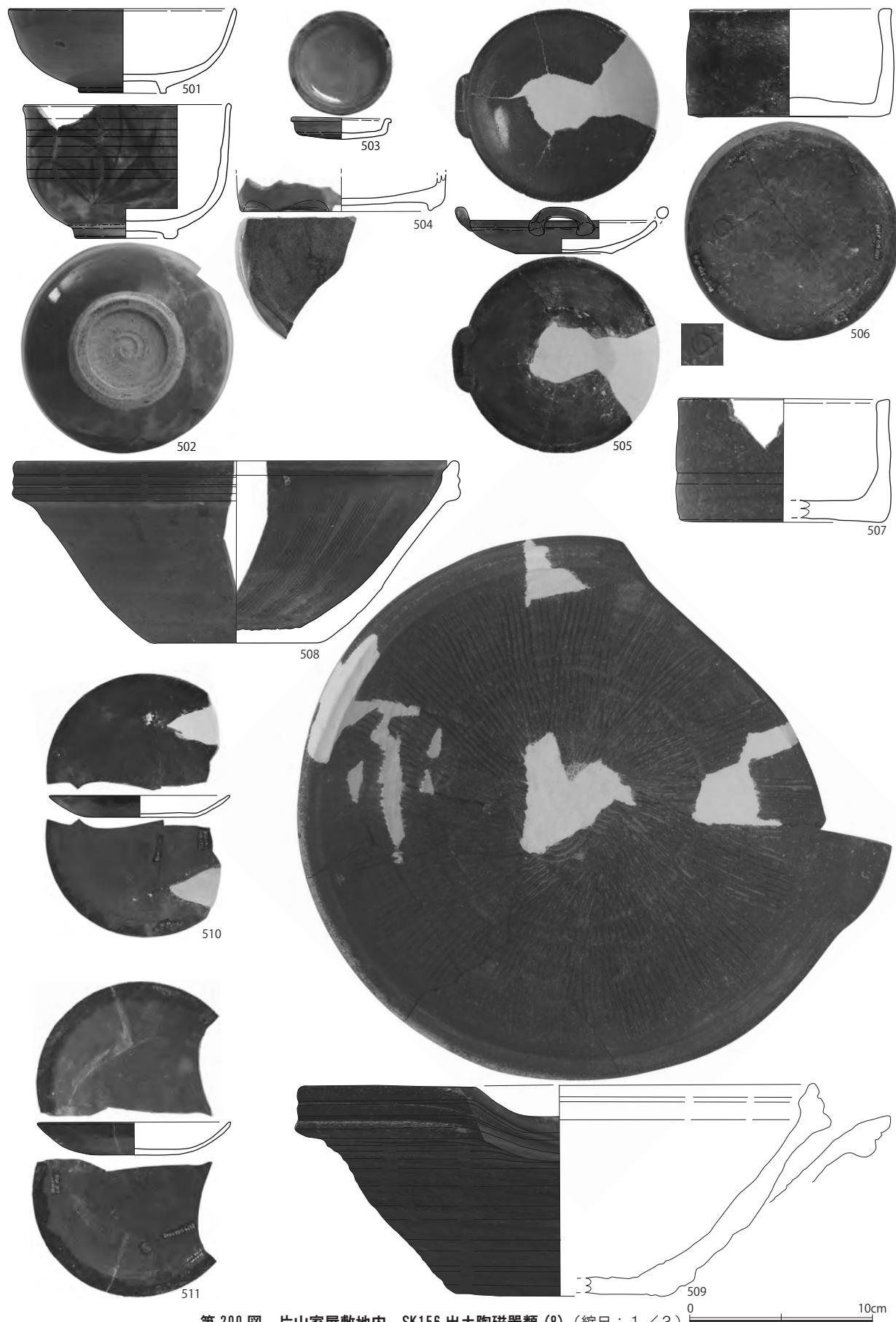
523～535は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。531・532・535は口縁部に灯芯油痕がみられる。524は口縁部内外面、527は口縁部内外面と底部、528・531・533・534は内外面にスヌが付着する。

536～540は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。537は外面、539は底部にスヌが付着する。

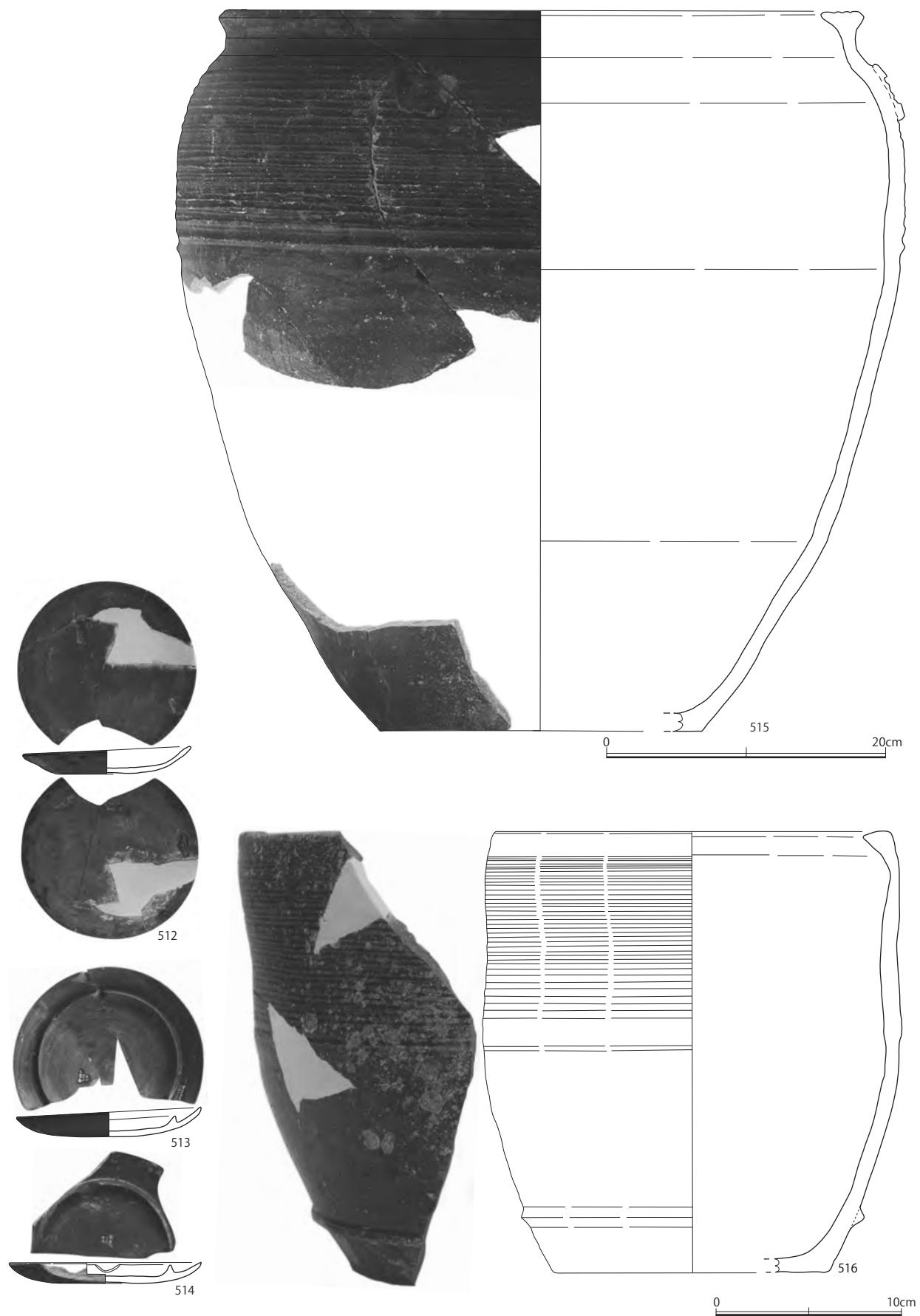
541～546は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕は不明である。541～543は礫が少なく精緻な胎土である。546は底部に穿孔がみられる。



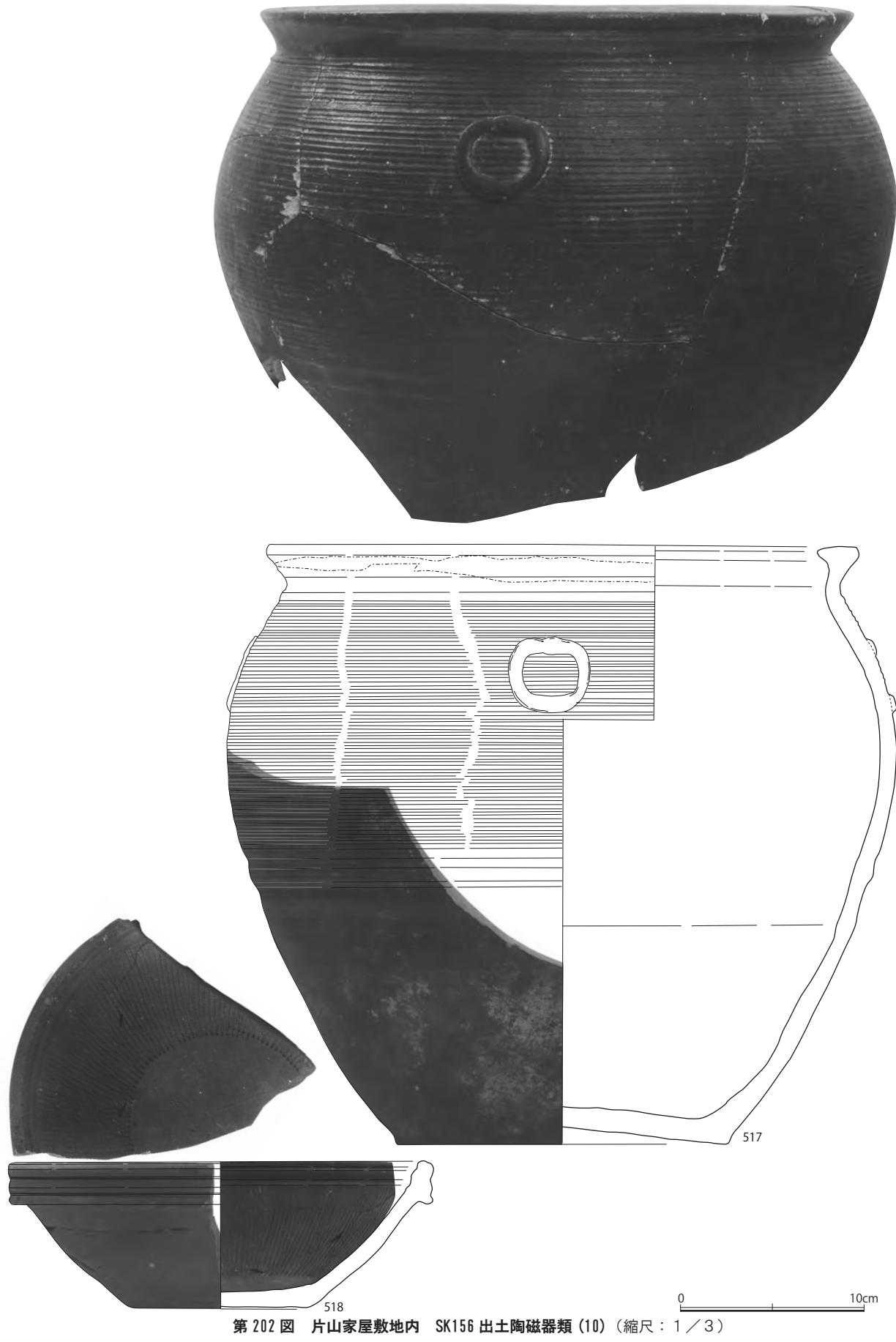
第199図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(7) (縮尺: 1/3) 0 10cm



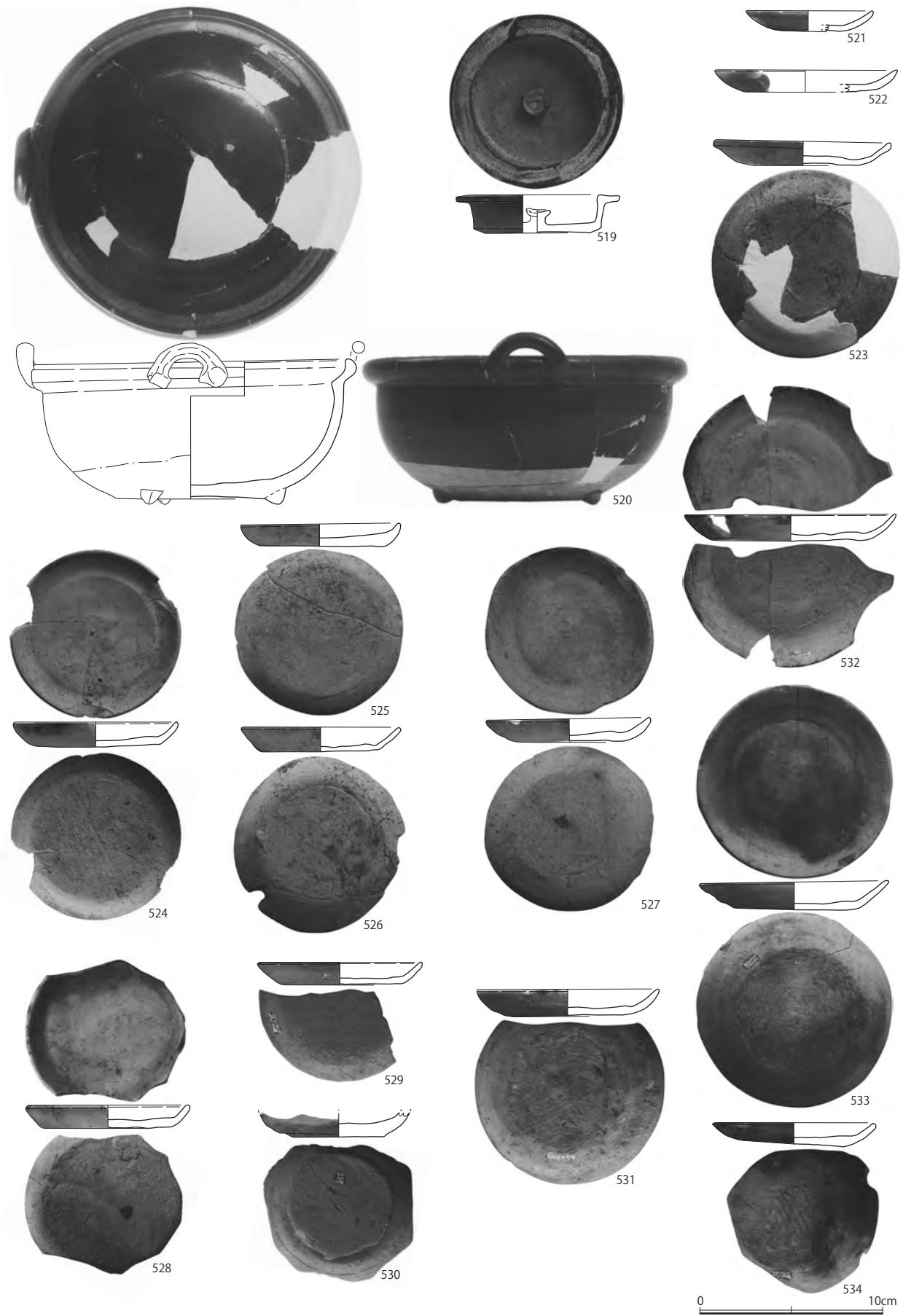
第200図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(8) (縮尺: 1/3)



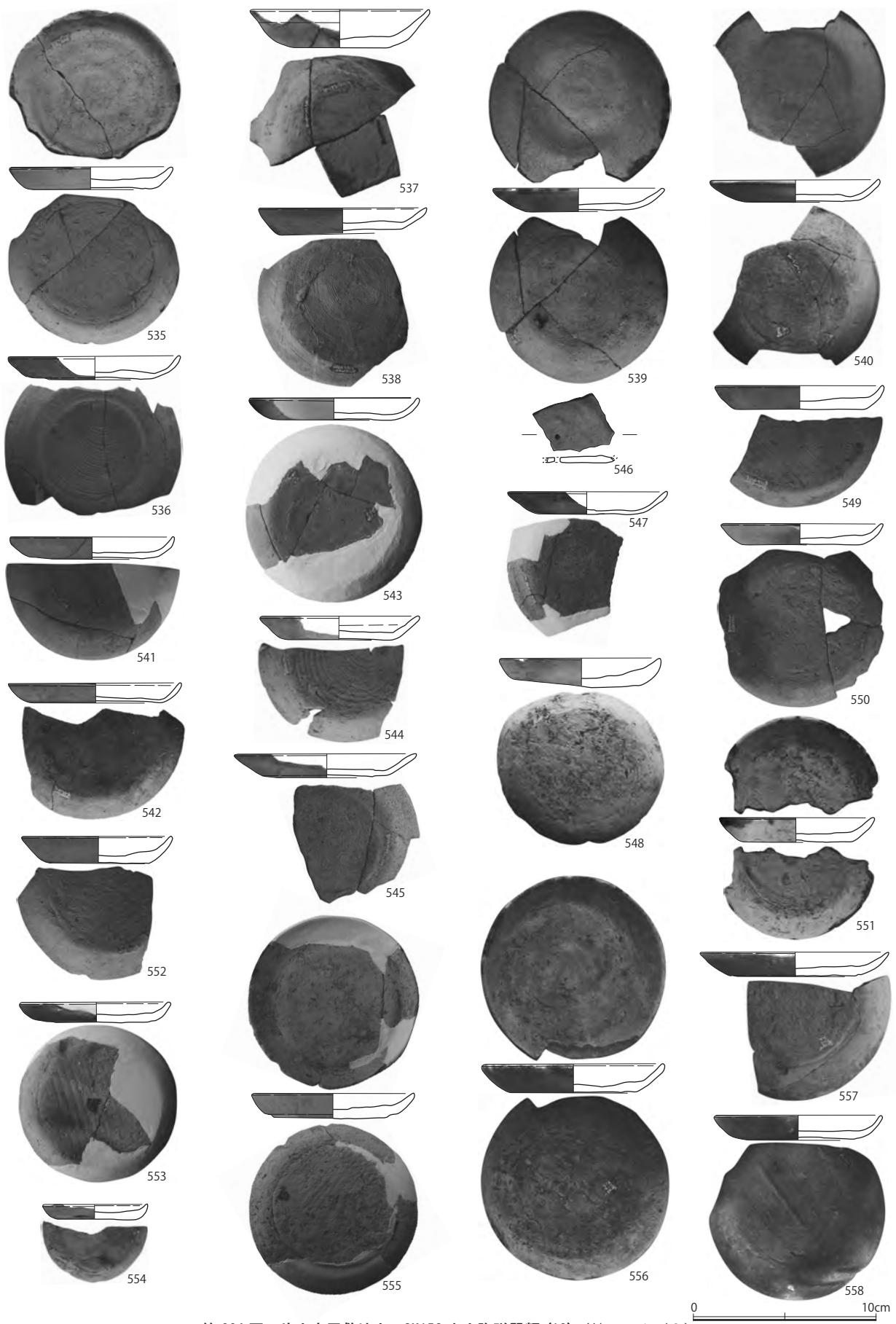
第201図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(9) (縮尺: 1/3 515 縮尺: 1/4)



第202図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(10) (縮尺: 1/3)



第203図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(11) (縮尺: 1/3)



第204図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(12) (縮尺: 1/3)

547 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に左回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。

548～558 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。551・555・556 は口縁部に灯芯油痕がみられる。550 は口縁部外面から底部、553 は内外面、556 は全面、558 は外面全面にススが付着する。551 は表面剥離が著しい。

559 は土師質土器の碗である。胎土は灰白色を呈し硬質である。京都系と思われる。

560～564 は土師質土器の関西系焙烙である。560 は口縁部外面に粘土を貼り付け、口縁端部に貫通しない穿孔を施す。内外面にススが付着する。561 は体部上半外面と底部内面、562 は体部外面から底部外面の外周、563 は体部外面と底部内面、564 は体部外面と内面全面にススが付着する。

565 は京都系土師質土器の焙烙である。胎土は灰白色を呈し、硬質で鬆が入る。体部に穿孔、底部外面に板目状圧痕がみられる。底部内面にススが付着する。体部内外面は丁寧な横ナデであるが、体部と底部の境目はヘラケズリである。

566 は土師質土器の秉燭である。全面に鉄釉を施すが、剥離が顕著である。底部に回転方向不明の糸切り離し痕がみられる。

567 は土師質土器の火鉢・焜炉類である。底部を除く外面に丁寧なミガキを施す。体部外面に方形枠内「吉」の刻印がみられる。

568～571 は土錘である。

572 は瓦質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「七厘」。外壁外面は丁寧なミガキ、外壁内面は粗い縦ハケを施す。

573・574 は土師質土器の秉燭である。573 は内外面と芯立上面に透明釉をかけたのち、部分的に緑釉を施す。574 は内外面と芯立上面に透明釉と緑釉を部分的に施す。底部外面に指頭圧痕がみられる。

575 は土師質土器の燭台？である。全面に透明釉をかけたのち、部分的に緑釉を施す。

576 は肥前系磁器のミニチュアの瓶である。外面に染付による梅花唐草文と松文描く。

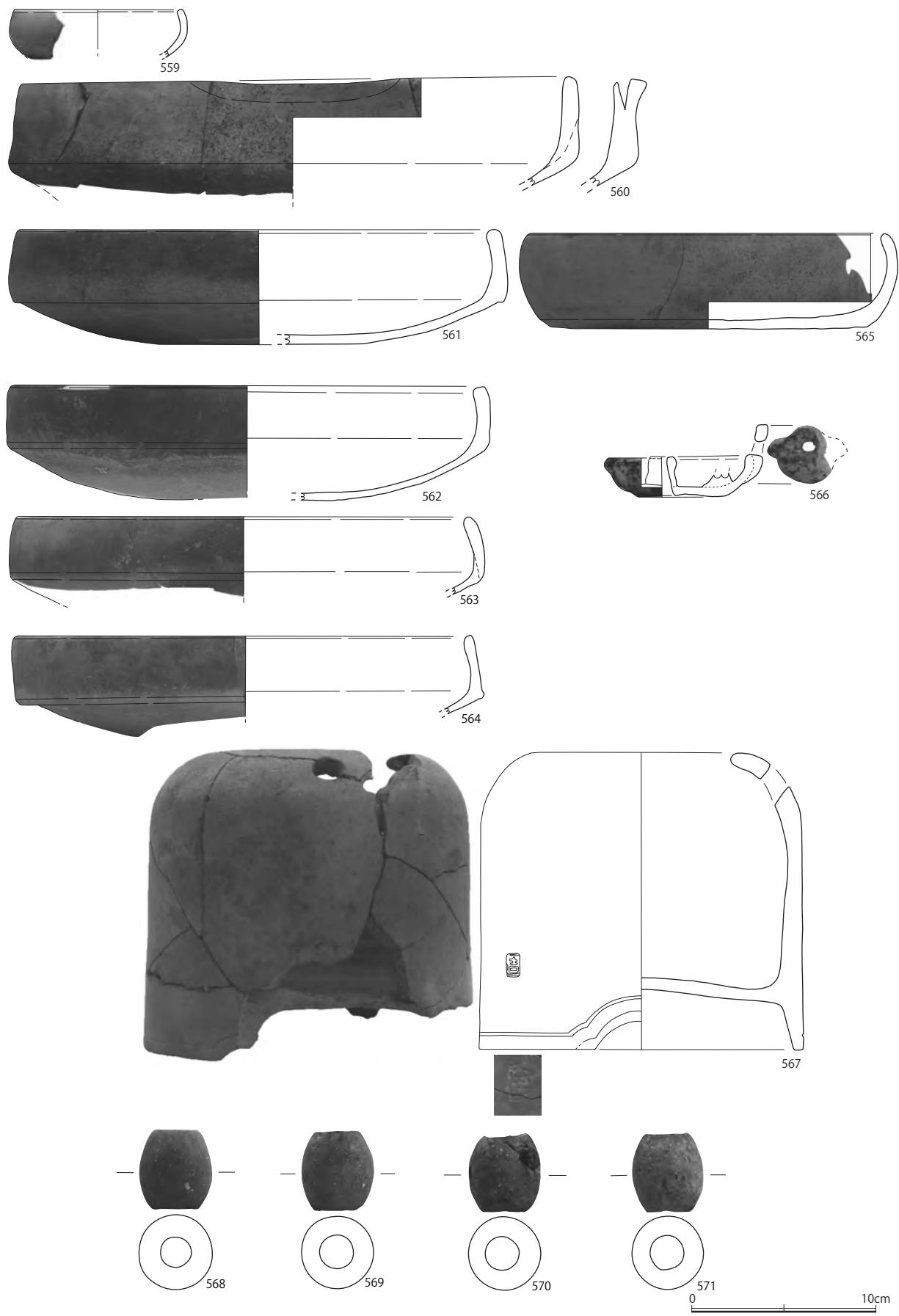
577 は土師質のミニチュアの皿である。外面は型打成形による菊花形で、内面は陽刻の菊花文である。内面に透明釉をかけたのち、緑釉を部分的に施す。

578 は土師質のミニチュアの鉢である。

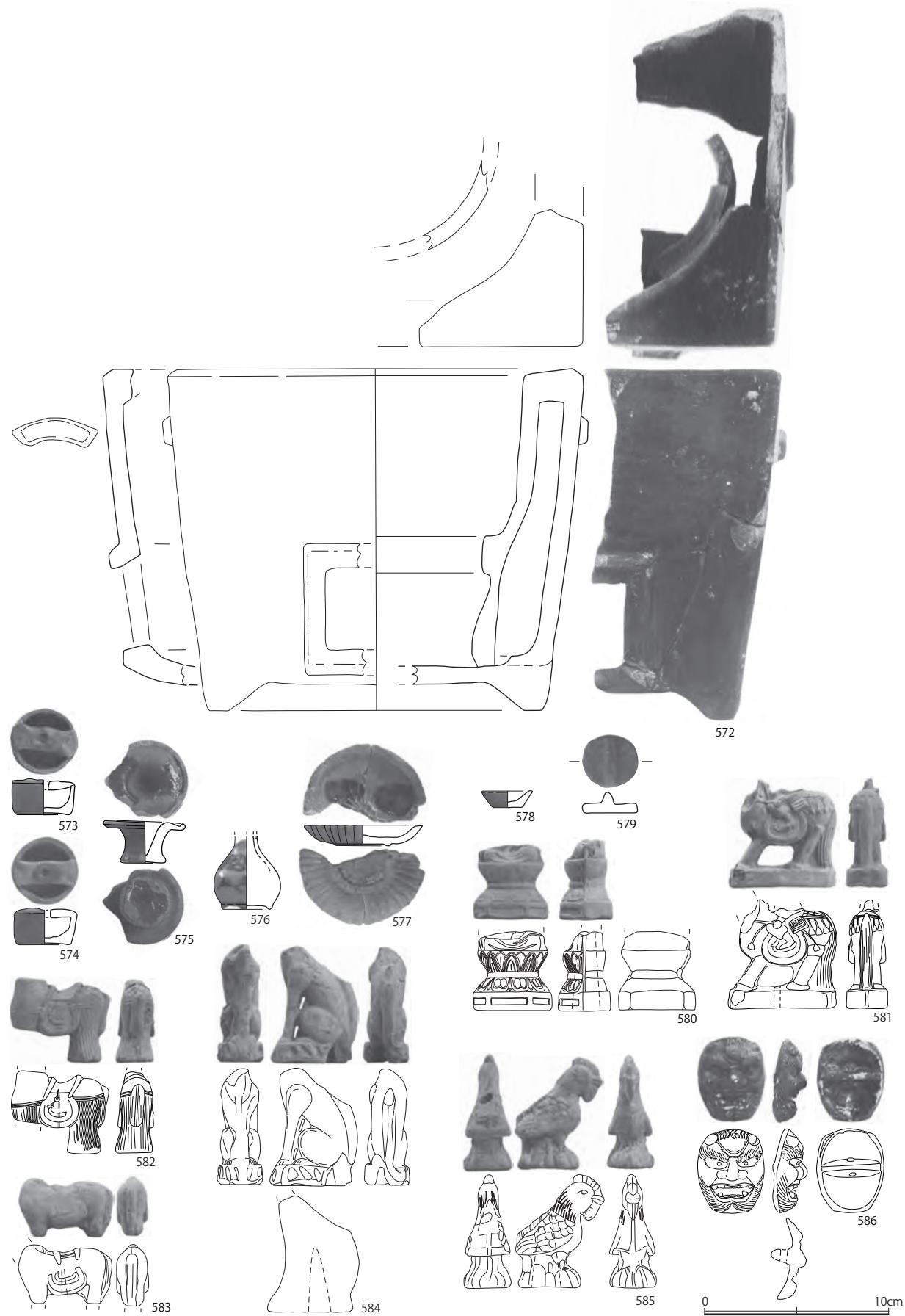
579 は土師質のミニチュアの釜の蓋である。型押成形で、上面に雲母が多く付着する。

580～585 は土人形である。580 は釈迦如来像。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ大きく穿孔する。581 は鎧姿の人物を乗せた馬。型押成形による左右型合わせの中実である。台座と鞍に黒色の彩色の痕跡がみられる。台座に貫通する穿孔がみられる。582 は馬。型押成形による左右型合わせの中実で、腹部に円錐状に小さく穿孔する。583 は馬。型押成形による左右型合わせの中実で、腹部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。584 は狐。型押成形による左右型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に大きく穿孔する。585 は鶏。型押成形による左右型合わせの中実で、底部から背部にかけ大きく穿孔する。

586 は玩具の土面である。般若。型押成形で、全面に鉄釉をかける。裏面の仕切り部分に紐孔がみられる。



第205図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類(13) (縮尺: 1/3)



第206図 片山家屋敷地内 SK156 出土陶磁器類 (14) (縮尺: 1/3)

SD157 (第 207 図)

587 は肥前系磁器の碗または蓋物である。外面に色絵（赤色・金色）による松文と松皮菱唐花文、染付による蓮弁文を描く。

588 は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台が無釉のものである。内側面に染付による不明文様を描く。呉須の発色は悪い。畳付に砂が付着する。

589 は肥前系磁器の端反形小坏である。残存部に文様はみられない。

590・591 は肥前系磁器の丸碗形小坏である。590 は外面に染付による草花文を描く。畳付に砂が付着する。くらわんか。591 は外面に染付による笹文を描く。呉須の発色は悪い。畳付に砂が付着する。くらわんか。

592 は肥前系磁器の端反碗の蓋である。染付により外面と見込に草花文、口縁部内面に圈線を描く。

593 は肥前系磁器の仏飯器である。外面に染付による菊弁文と松文を描く。

594 は肥前系陶器の刷毛目皿である。高台脇から高台内を除き灰釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。蛇ノ目釉剥ぎ部分にアルミナ砂を塗布する。内側面に刷毛目を施す。

595 は瀬戸・美濃系陶器の花生である。底部外面を除く内外面に鉄釉をかけ、頸部から口縁部の外面上に長石釉を散らす。底部外面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

596 は京・信楽系陶器の灰落しである。底部を除き内外面に白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に色絵（緑色・黒色・金色）による松文と梅文を描く。口縁端部に敲打痕がみられる。

597 は大谷焼の小壺である。底部を除く外面に鉄釉をかける。底部外面は同心円ケズリである。

598 は産地不明陶器の水注の蓋である。上面に灰釉を流し掛ける。

599 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。口縁部に灯芯油痕がみられる。

600 は土師質土器の秉燭である。口縁部内面に貼り付けられた橋状の芯立を欠損する。欠損部周辺に透明釉の痕跡がみられる。

601 は土師質土器の秉燭である。底部に焼成後の穿孔がみられる。

602・603 は土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「風炉」。602 は胴上部に穿孔がみられる。口縁部上面から内面にかけススが付着する。603 は高台内を除く外面に赤彩を施す。高台に穿孔がみられる。

604 は土師質土器の火消壺の蓋である。見込にススが付着する。

605 は土人形である。御高祖頭巾を被った女性。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。

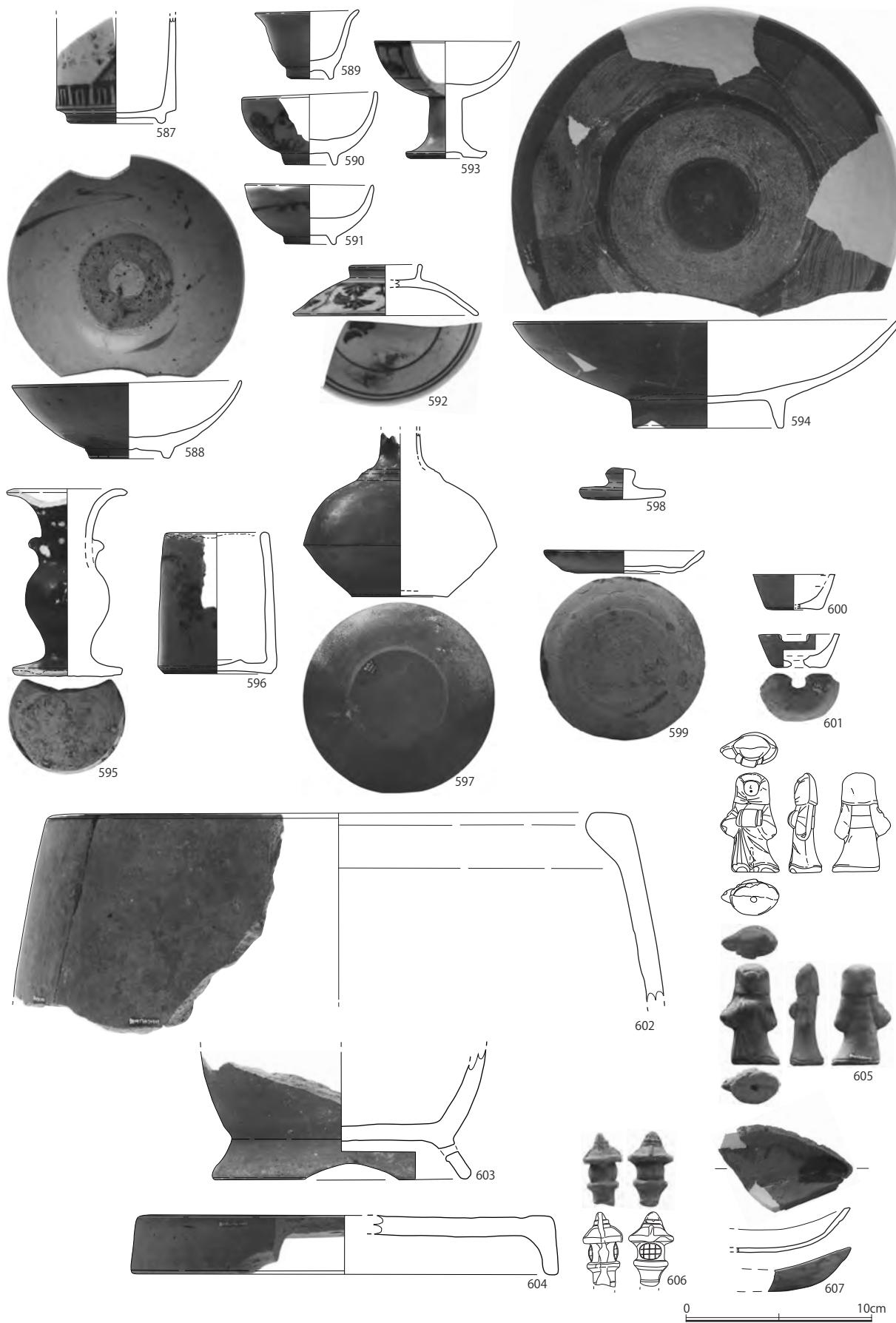
606 は土師質のミニチュアの灯籠である。型押成形による前後型合わせの中実である。

607 は土師質のミニチュアの舟である。型押成形。内外面に透明釉をかけ、内面を緑釉で装飾する。

SK164 (第 208 図)

608 は肥前系磁器のくらわんか碗である。染付により外面に水仙文？、口縁部内面に四方櫛文、見込にコンニャク印判の菊文を描く。畳付に重ね焼き痕がみられる。

609 は肥前系磁器の半球形小坏である。外面に染付による秋草文を描く。



第207図 片山家屋敷地内 SD157 出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第208図 片山家屋敷地内 SK164 出土陶磁器類（縮尺：1/3）

610は土師質土器の関西系焙烙である。口縁部に粘土の付加はなく、口縁端部に貫通しない穿孔がみられる。

SD166・SD166南（第209・210図）

611は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に三方割銀杏文、高台内に二重方形枠内に銘（「渦福」？）を描く。割れ口に漆継の痕跡がみられる。

612は肥前系磁器の丸碗形小坏である。外面に染付による文様を描く。呉須の発色は悪い。高台の釉際処理は不揃いで、畳付に砂が付着する。くらわんか。

613は肥前系磁器のくらわんか碗の蓋である。青磁染付。外面の青磁釉下に染付がみられる。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文、摘み内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。高台の釉際処理は不揃いで、畳付にアルミナ砂が塗布されている。

614は肥前系磁器の灰落しである。青磁。畳付から高台内には鋳釉をかける。口縁端部に敲打痕がみられる。

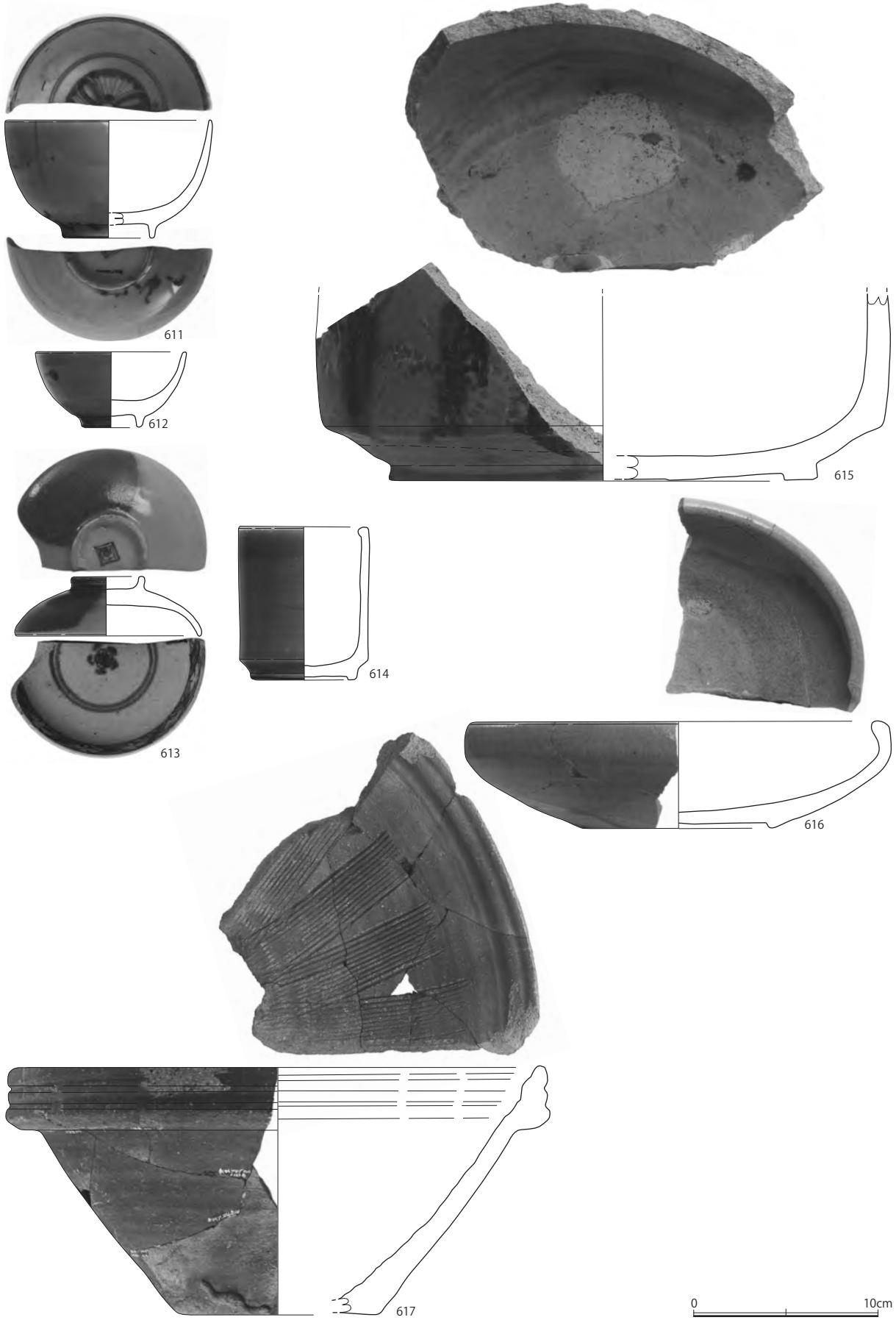
615は瀬戸・美濃系陶器の水甕である。見込に团子トチン痕がみられる。高台脇から高台内を除く内外面に灰釉をかけ、外面に鉄釉と緑釉を流し掛ける。外面に工具による流水文、印花による列点文を施す。

616は瀬戸・美濃系陶器の水盤である。見込に円錐ピン痕がみられる。胴下半部外面から底部を除き灰釉をかける。SD23の口縁部破片と接合する。

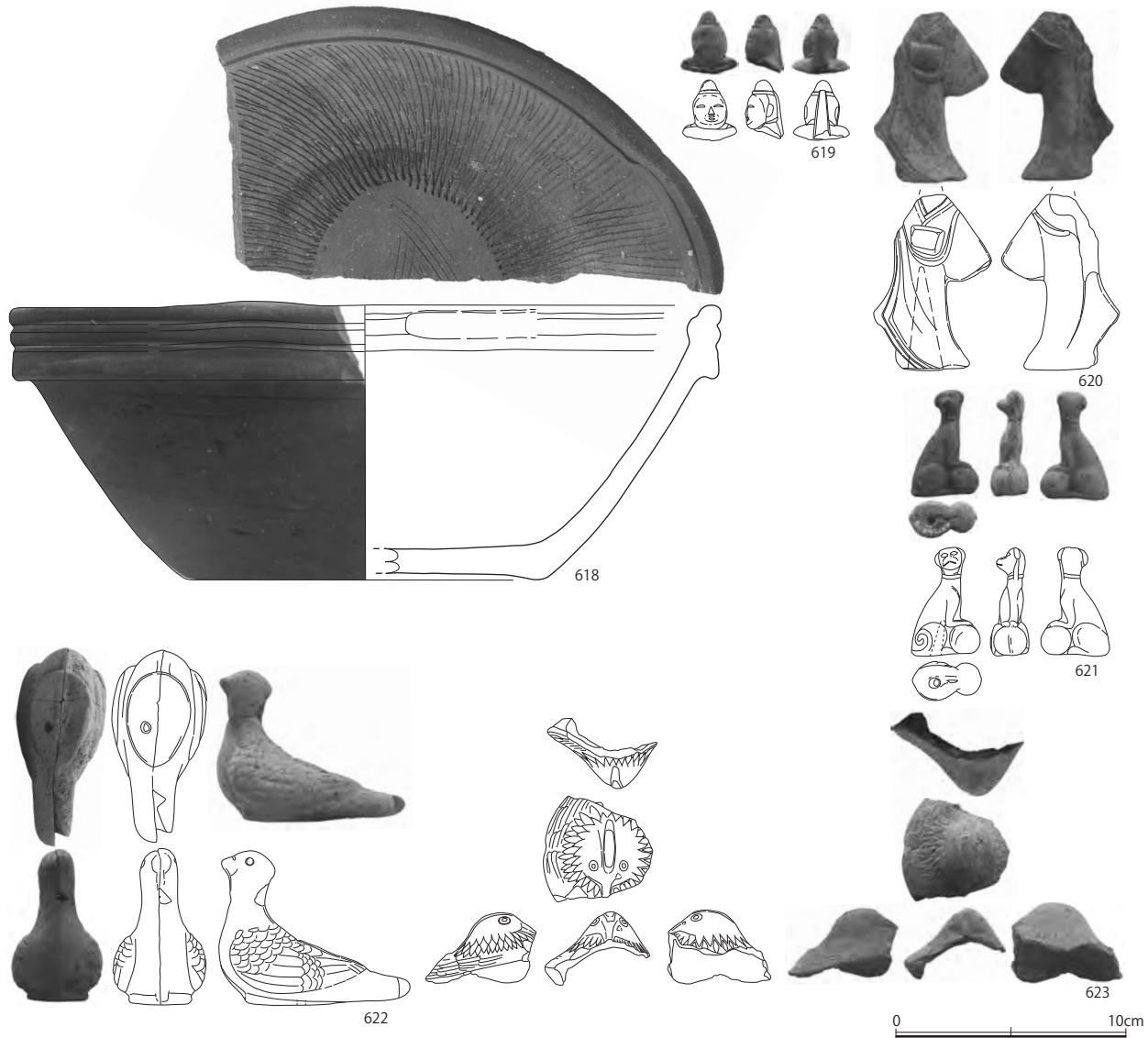
617は備前系陶器の擂鉢である。口縁帶上端と下端に重ね焼き痕がみられる。胴部外面調整は横ナデである。

618は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは三角形。見込に焼き台痕、底部に焼き台痕と板目状圧痕がみられる。胴部外面調整はヘラケズリののち横ナデである。

619～623は土人形である。619は天神の頭部。型押成形による前後型合わせの中実である。雲母の付着が部分的にみられる。620は太夫。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に大きく穿孔する。621は犬。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。雲母の付着が部分的にみられる。622は鳩。型押成形による左右型合わせ



第209図 片山家屋敷地内 SD166・SD166南出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)



第210図 片山家屋敷地内 SD166・SD166南出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)

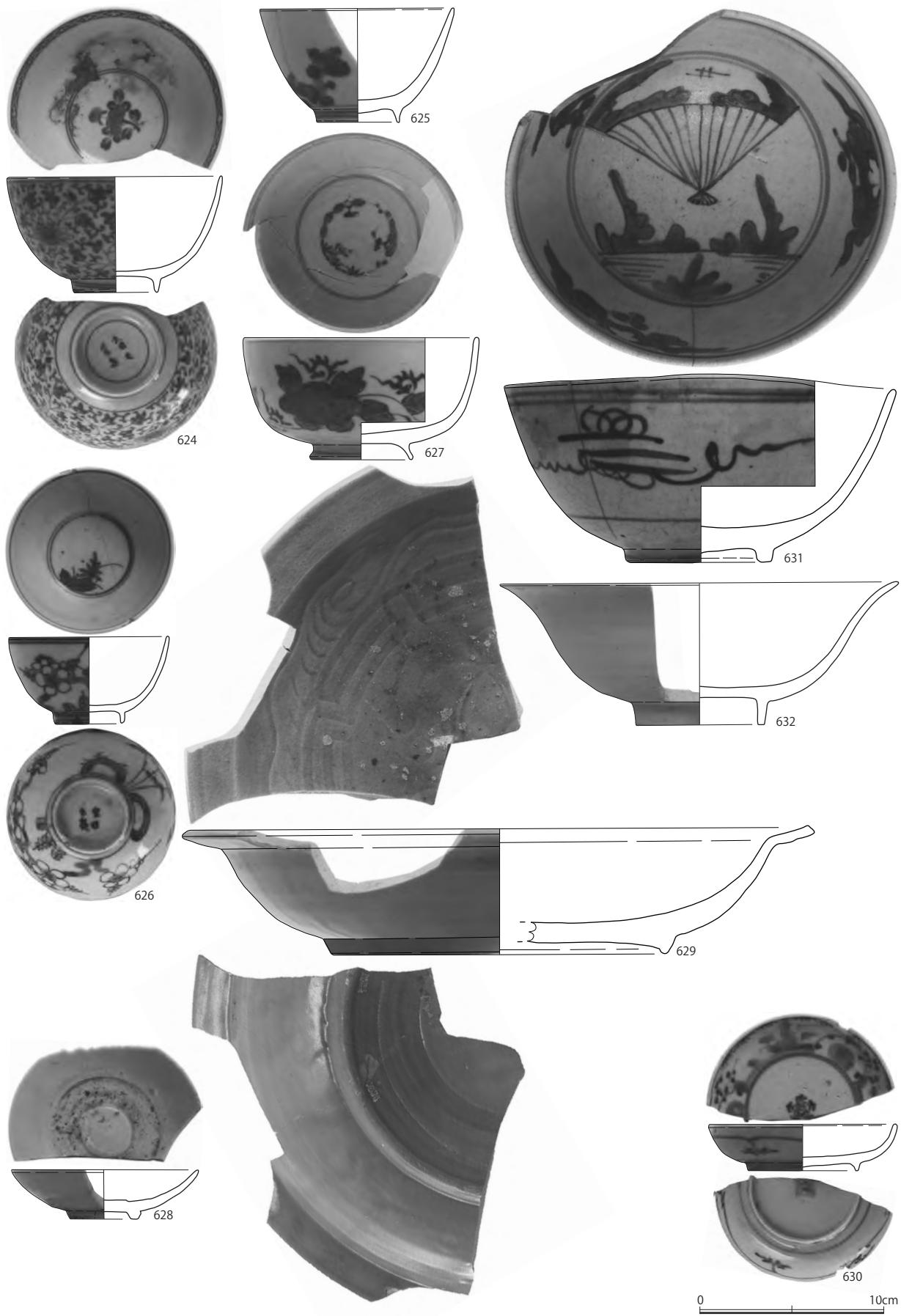
の中空で、底部に穿孔がみられる。雲母の付着が部分的にみられる。623は鴛鴦の上半部。型押成形による上下型合わせである。

SK186 (第211～213図)

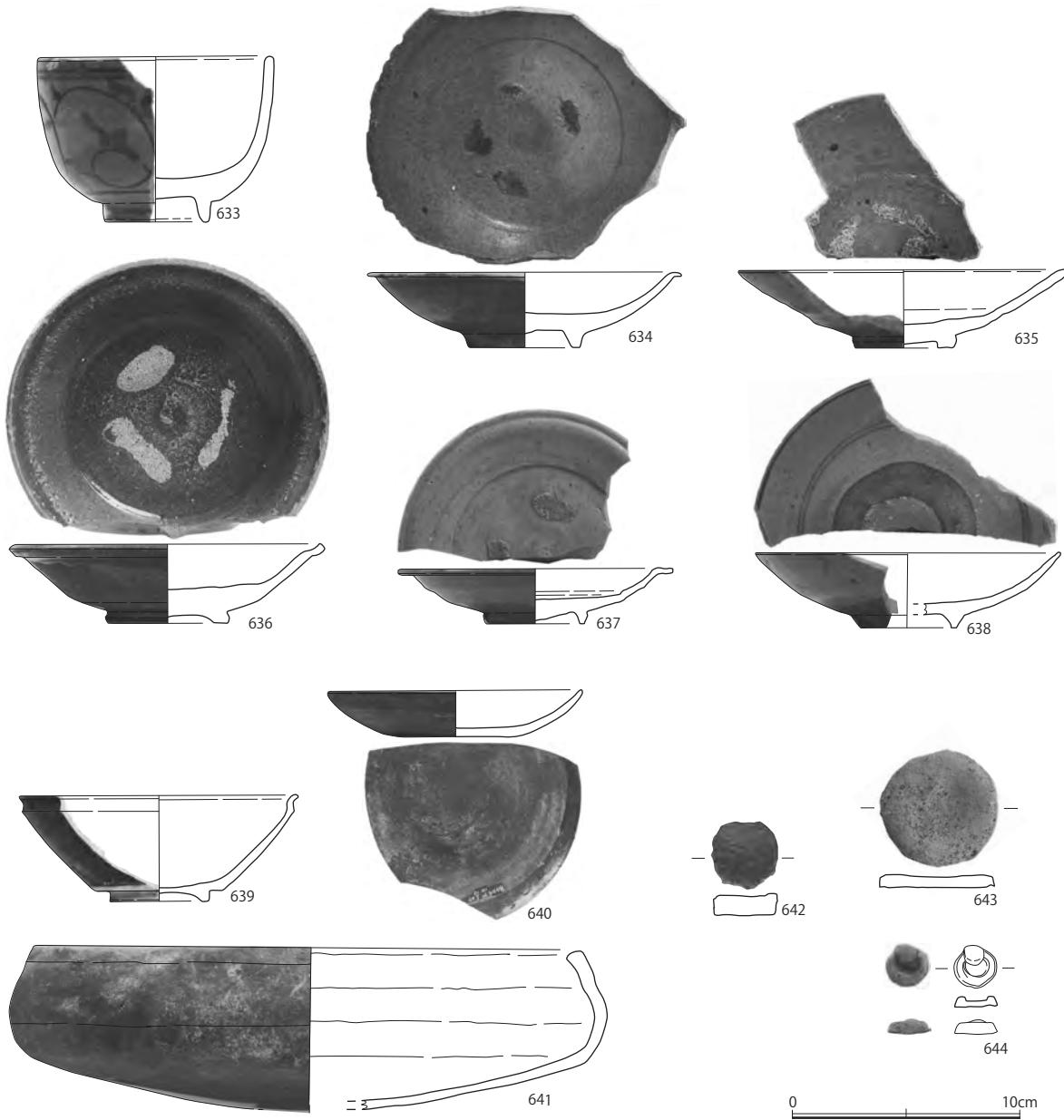
624・625は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の高いものである。624は染付により外面に牡丹唐草文、口縁部内面に四方櫻文、見込に牡丹文、高台内に一重圏線内「大明成化年製」銘を描く。高台の釉際処理は揃い、疊付に砂の付着はみられない。625は外面に染付による草花文を描く。高台の釉際処理は不揃いで、高台の内側に砂が付着する。

626は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。染付により外面に素書の松竹梅文、口縁部内面に圏線、見込に素書の草花文、高台内に「宣明年製」銘を描く。

627は肥前系磁器の撥高台の碗である。染付により外面に牡丹唐草文、口縁部内面に四方櫻文、見



第211図 片山家屋敷地内 SK186 出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)



第212図 片山家屋敷地内 SK186 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)

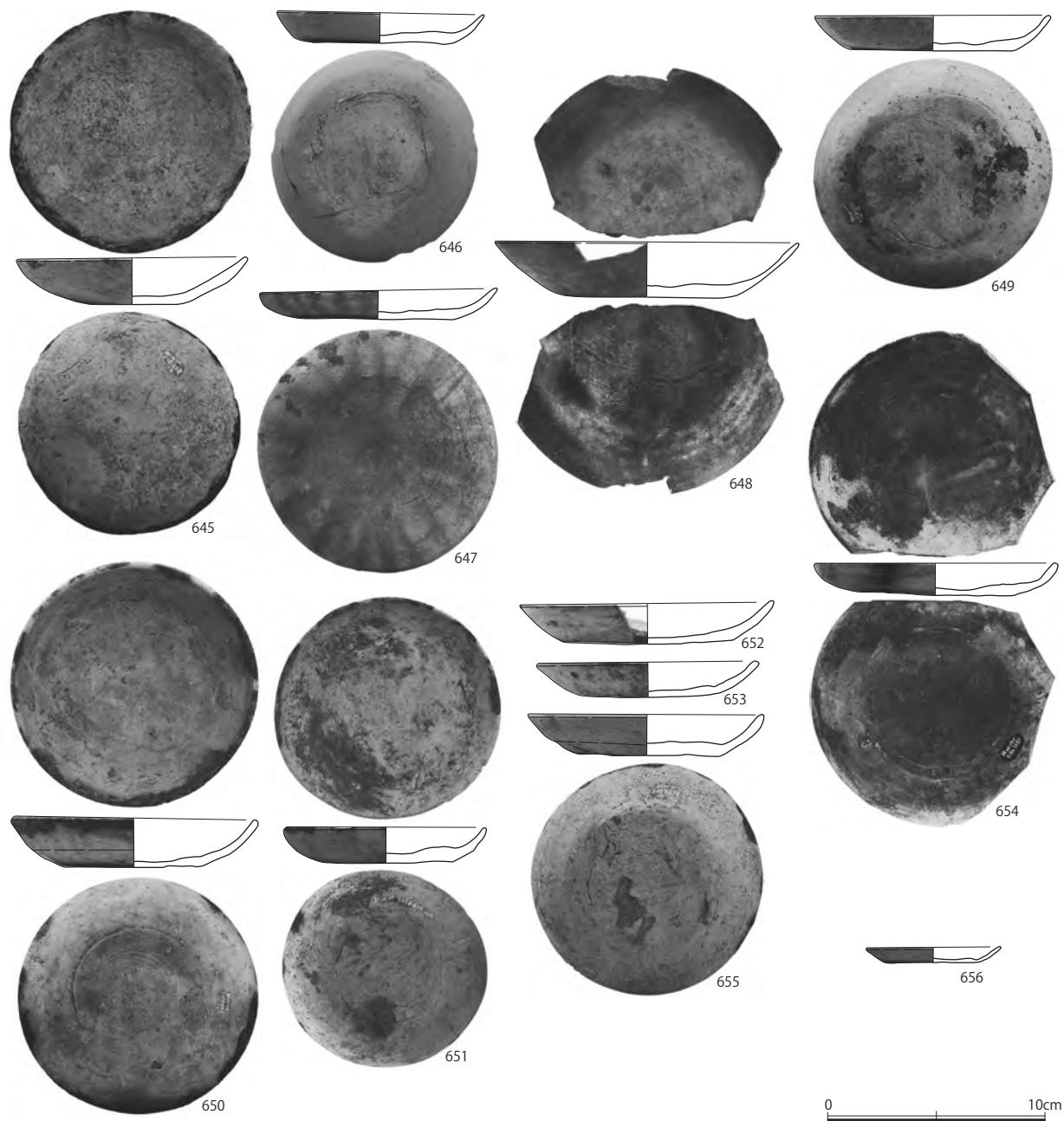
込に環状松竹梅文を描く。

628は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台が無釉のものである。蛇ノ目釉剥ぎ部分と畳付に砂が付着する。

629は肥前系磁器の高台内を蛇ノ目釉剥ぎする大皿である。青磁。蛇ノ目釉剥ぎ部分に錆釉をかけ、重ね焼き痕がみられる。内側面にヘラ彫りによる波文と雷文、見込にもヘラ彫りによる文様を施す。

630は肥前系磁器の型打小皿である。型打成形により口縁部は輪花となる。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に竹文と梅文と雪輪文、見込に手描きの五弁花文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。

631は肥前系磁器の初期伊万里の鉢である。染付により外面に宝文、内側面に如意頭文と雲文、見込に扇面文と草文を描く。高台の内側に砂が付着する。



第213図 片山家屋敷地内 SK186 出土陶磁器類(3) (縮尺: 1/3)

632は肥前系磁器のU字形高台の端反鉢である。畠付に砂が付着する。

633は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。外面に染付による唐草文を描く。畠付に砂が付着する。

634・635は肥前系陶器の灰釉砂目皿である。634は畠付から高台内が無釉である。見込と畠付に砂目がみられる。635は胴下部外面から高台内が無釉である。見込に砂目がみられる。高台の内側に砂が付着する。

636・637は肥前系陶器の灰釉溝縁皿である。636は胴下半部外面から高台内が無釉である。見込と畠付に砂目がみられる。637は高台内が無釉である。見込に砂目がみられる。高台に砂が付着する。

638は肥前系磁器の陶胎染付の皿である。胴下部外面から高台内は無釉である。見込を蛇ノ目釉剥ぎし、砂が付着する。内側面に染付による圈線を描く。

639は瀬戸・美濃系陶器の天目碗である。高台脇から高台内を除き鉄釉をかける。畳付際を面取りする。

640は備前系陶器の灯明皿である。口縁部外面から内面全面に塗土を施す。内面に重ね焼き痕、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。外面にタール状物質が付着する。

641は土師質土器の関西系焙烙である。体部外面上半には横ナデ、下半には指頭圧痕がみられる。体部外面と底部内面にススが付着する。石組み溝5の破片と接合する。

642・643は加工円盤である。642は産地不明陶器の擂鉢の胴部を二次加工したものである。643は土師皿を二次加工したものである。底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。

644は泥面子（芥子面）である。蛇？。型押成形。

645は土師皿である。手捏ね成形で、口縁部に灯芯油痕がみられる。

646～653は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。650・651・653は口縁部に灯芯油痕がみられる。647・648・650・652・653は内外面にススが付着し、647の外面のススは放射状に付着する。

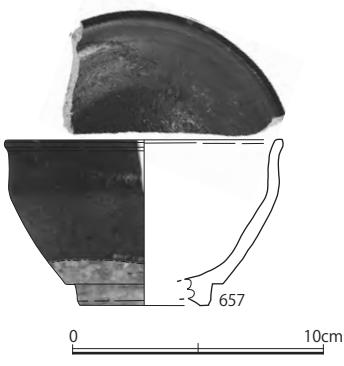
654は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。

655は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。口縁部に灯芯油痕がみられる。

656は瓦質土器の皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。口縁部に灯芯油痕がみられ、内外面にススが付着する。

SK187（第214図）

657は瀬戸・美濃系陶器の天目碗である。胴下部外面から高台内を除き鉄釉をかけ、体部内外面に灰釉を流し掛ける。



第214図 片山家屋敷地内 SK187
出土陶磁器類（縮尺：1/3）

安富家屋敷地内

SK98（第215図）

658は肥前系磁器のU字形高台の皿である。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に牡丹唐草文、見込に草花文？、高台内に一重圈線を描く。

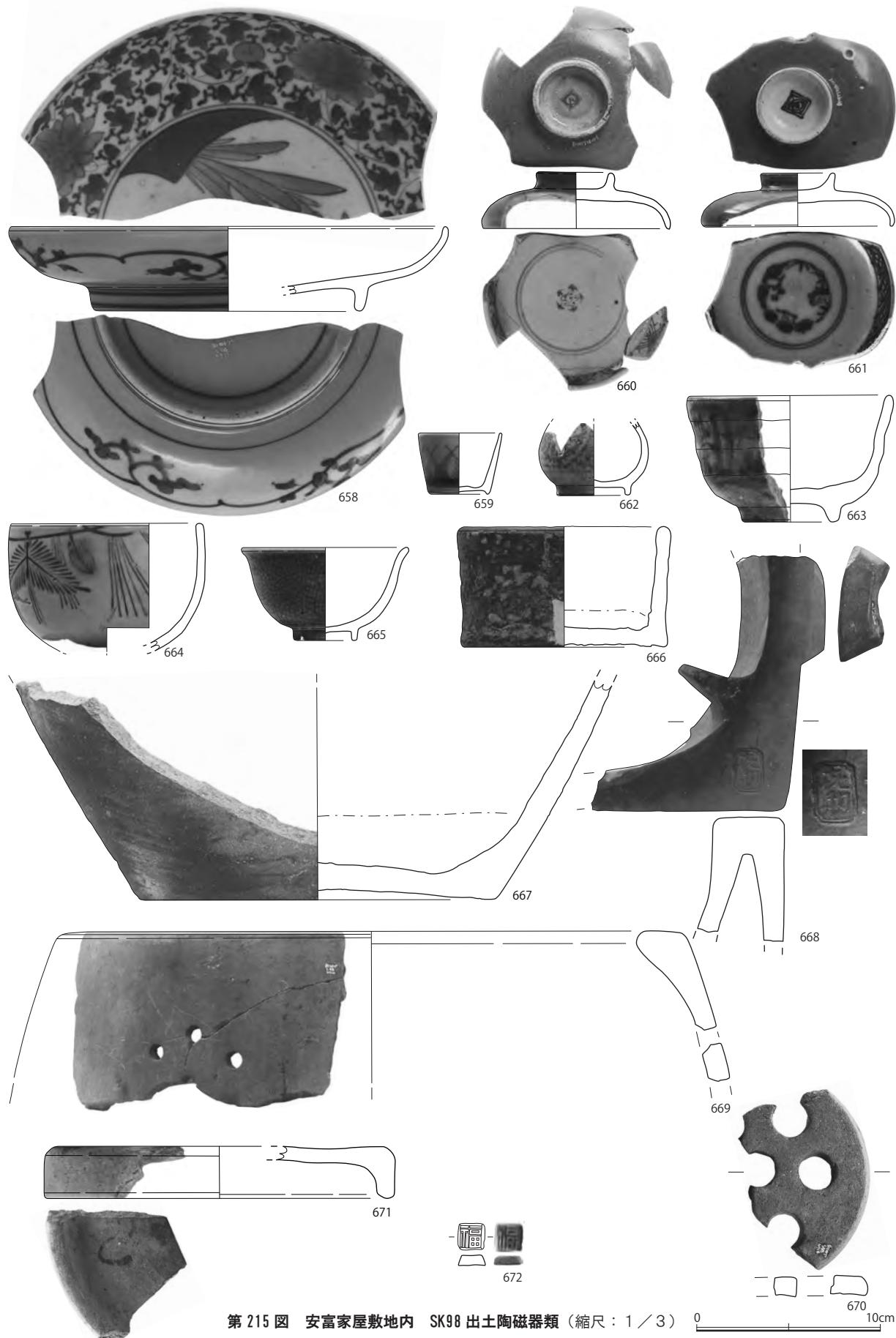
659は肥前系磁器の碁笥底の小坏である。外面に染付による草文と雲状土坡文を描く。

660は肥前系磁器の丸碗の蓋である。青磁染付。染付により摘み内に二重方形枠内「渦福」銘、口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文を描く。

661は肥前系磁器の撥高台碗の蓋である。青磁染付。染付により摘み内に二重方形枠内「渦福」銘、口縁部内面に四方櫛文、見込に環状松竹梅文を描く。

662は肥前系磁器の神酒徳利である。外面に染付による蛸唐草文を描く。焼成不良のため透明釉は白濁する。

663は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。外面に染付による松文を描く。畳付に砂が付着する。



第215図 安富家屋敷地内 SK98 出土陶磁器類（縮尺：1／3） 0 10cm

664は京・信楽系陶器の注連縄文碗である。外面に色絵（赤色・緑色・黒色）による注連縄文と宝尽くし文を描く。

665は京・信楽系陶器の端反碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。畳付際をわずかに面取りする。

666は備前系陶器のサヤ形鉢である。外面と見込を除く内面に塗土を施す。胴部外面に「◇」の刻印、底部に重ね焼き痕がみられる。

667は丹波系陶器の甕または壺である。外面と胴下部内面に鉄釉を薄く施釉する。底部外面に目跡がみられる。

668は土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「七厘」。外壁上面に二重枠内「㐂助」（「喜助」）の刻印がみられる。外壁内面と内部施設内面の調整は粗いハケメのちナデである。開口部外面にススが付着する。

669は土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「風炉」。外面に赤彩を施す。口縁端部と内面にススが付着する。

670は土師質土器のさなである。

671は土師質土器の火消壺の蓋である。見込に墨書がみられ、ススが付着する。

672は泥面子である。陽刻の「福」の文字。型押成形。

SK109（第216図）

673は肥前系磁器の紅皿である。外面に染付による笹文を描く。呉須の発色は悪い。

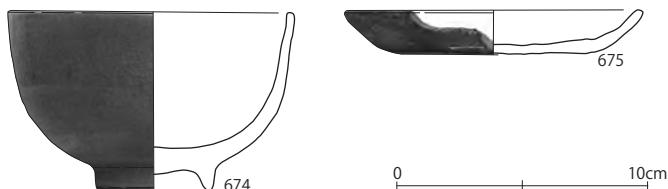
SD182（第217図）

674は肥前系陶器の呉器手碗である。畳付を除き灰釉をかける。畳付に砂が付着する。

675は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しのち、板目状圧痕がみられる。全面にスス、見込にタール状の物質が付着する。



第216図 安富家屋敷地内 SK109
出土陶磁器類（縮尺：1/3）



第217図 安富家屋敷地内 SD182 出土陶磁器類（縮尺：1/3）

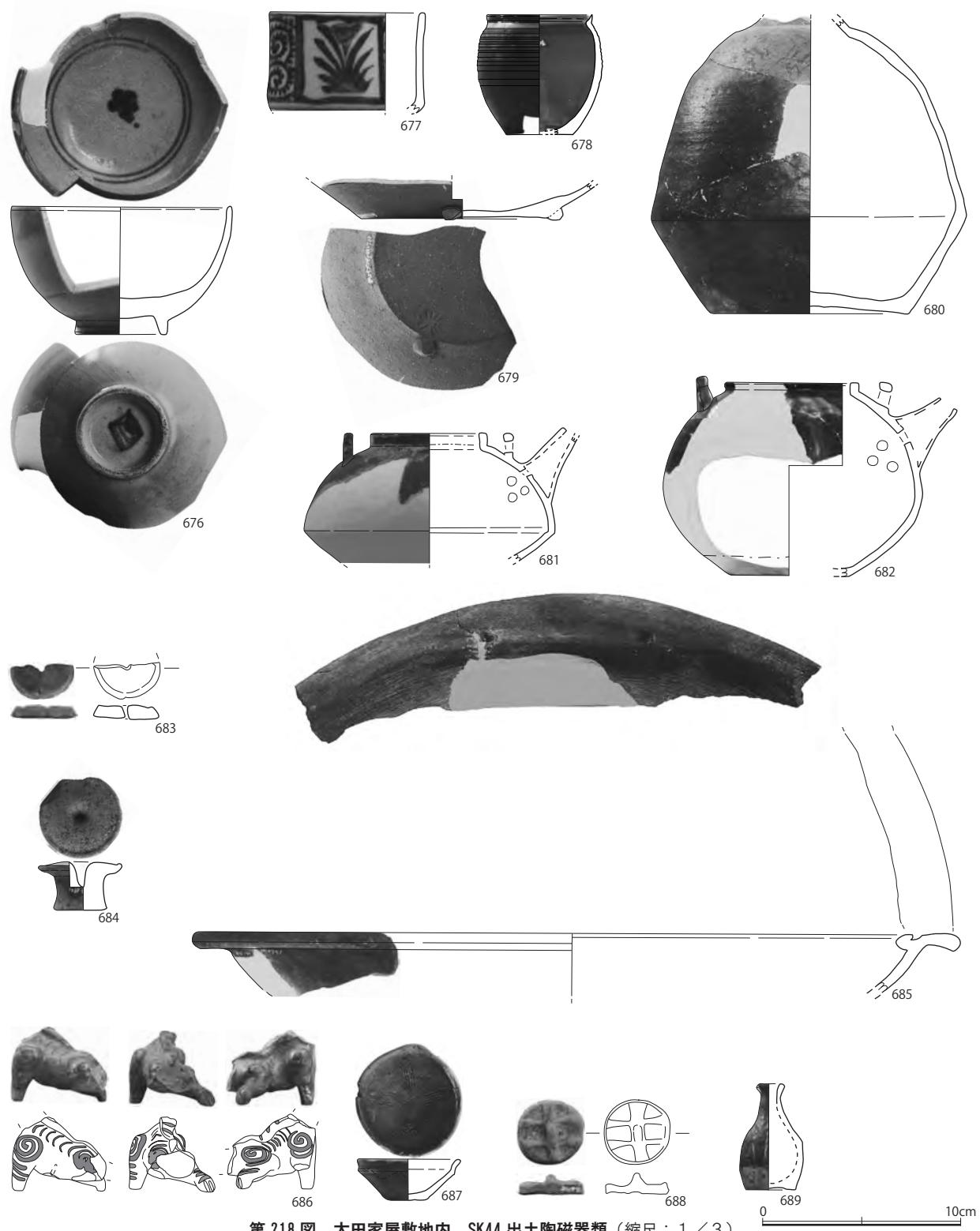
太田家屋敷地内

SK44（第218図）

676は肥前系磁器のくらわんか碗である。青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込にコシニヤク印判の五弁花文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。畳付に砂が付着する。

677は肥前系磁器の筒形碗である。染付により外面に草花文と蛸唐草文、口縁部内面に四方櫛文を描く。

678は備前系陶器の極小甕である。外面と蓋受けに塗土を施す。胴下部と底部の内外面に火櫛がみられる。



第218図 太田家屋敷地内 SK44 出土陶磁器類 (縮尺: 1/3)

679は産地不明陶器の鍋または土瓶である。胎土は浅黄色を呈し、白色砂粒を多く含み粘性がある。胴下部から底部外面を除き鉄釉をかける。底部外面に印花による花文がみられる。

680は産地不明陶器の瓶である。外面に鉄釉をかける。

681・682は産地不明陶器の土瓶である。681は口縁端部を除く外面と内面の一部に鉄釉をかけ、胴上部外面に灰釉を流し掛ける。682は口縁端部を除く内外面に鉄釉をかけ、胴上部外面に灰釉を流し掛ける。

683は土師質土器の燭台である。型押成形で、中心部に焼成前の穿孔がみられる。全面にススが付着する。

684は土師質土器の燭台？である。ロクロ成形で、中心部を円錐状に穿孔する。透明釉をかけていたと思われる。

685は瓦質土器の御厩系焙烙である。内耳に貫通しない穿孔が2箇所みられる。外面に指頭圧痕がみられ、内面調整は粗い横ハケである。外面にススが付着する。

686は土人形である。獅子。型押成形による左右型合わせの中実で、頭部と足と尾は貼り付ける。腹部を除きにぶい黄橙色の釉をかけ、鉄釉で毛並みを表現する。腹部に判読不明の墨書と貫通しない小さな穿孔がみられる。

687は土師質のミニチュアの擂鉢である。内面に明赤褐色を呈する透明釉をかける。

688は土師質のミニチュアの釜蓋である。型押成形で、上面に白色の彩色を施していたと思われる。

689は土師質のミニチュアの六角瓶である。型押成形で、胴下部から底部を除く外面と口縁部内面に緑釉を施す。

SK45（第219図）

690は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の高いものである。青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。高台の釉際処理はやや不揃いで、畳付に砂が付着する。

691・692は肥前系磁器のくらわんか碗である。691は外面に染付による網目文を描く。呉須の発色は悪く、畳付に砂が付着する。692は染付により外面に松文と太湖石文と草花文、口縁部内面に斜格子文、見込にコンニャク印判の菊文を描く。高台の釉際処理はやや不揃いで、高台の内側に砂が付着する。

693は肥前系磁器の小広東碗である。染付により外面に斜格子文と羽子板の羽根文？と丸文、口縁部内面に圈線、見込に羽子板の羽根文？を描く。

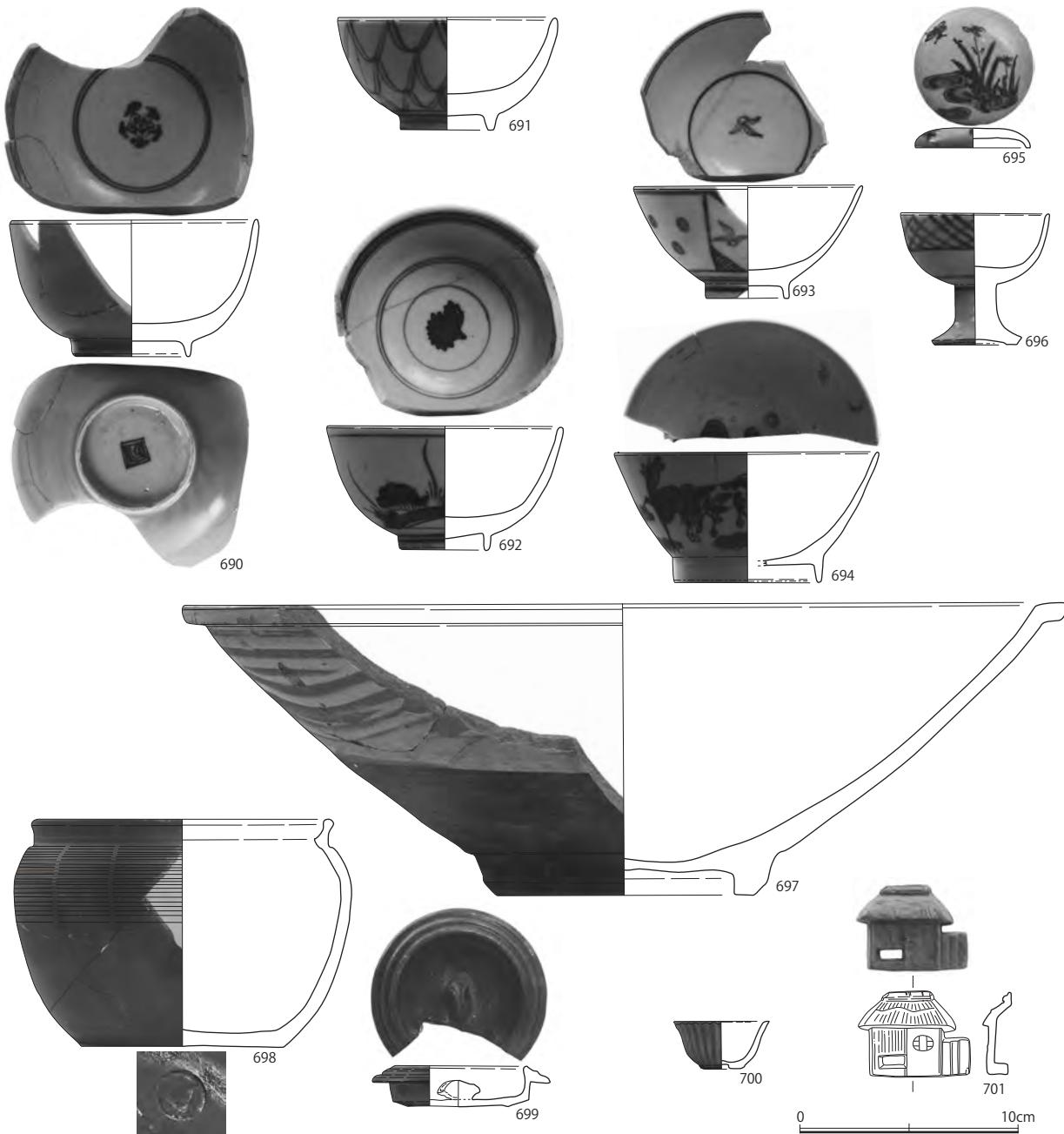
694は肥前系磁器の広東碗である。外面に染付による馬文、見込にも染付による文様を描く。呉須の発色は悪い。

695は肥前系磁器の合子の蓋である。外面に染付による菖蒲文と蝶文と流水文を描く。

696は肥前系磁器の仏飯器である。外面に染付による斜格子文を描く。呉須の発色は悪く、底部に砂が付着する。

697は肥前系陶器の刷毛目鉢である。畳付際を面取りする。

698は備前系陶器の極小甕である。外面に塗土を施す。底部外面に「Ⓐ」の刻印がみられる。胴部と底部の外面に火櫛がみられる。



第219図 太田家屋敷地内 SK45 出土陶磁器類（縮尺：1/3）

699は産地不明陶器の水注または土瓶の蓋である。灰白色の胎土で、外面に鉄釉をかける。

700は肥前系磁器のミニチュアの鉢である。菊花形に型押成形される。

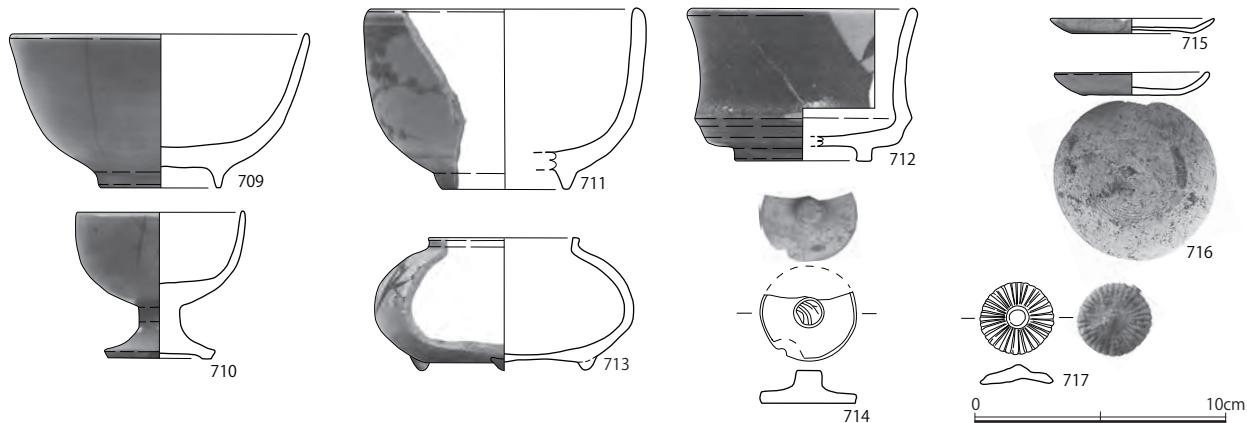
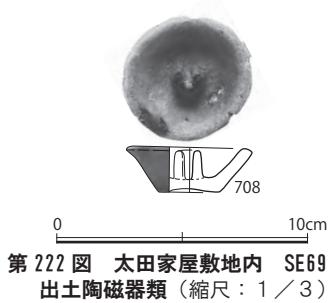
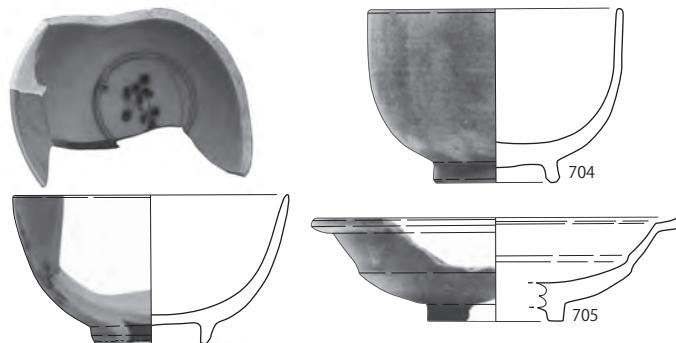
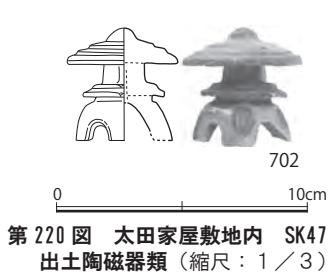
701は土師質のミニチュアの民家である。型押成形で、外面に白色の彩色を施していたと思われる。

SK47（第220図）

702は土師質のミニチュアの灯籠である。型押成形で、外面に透明釉と緑釉をかける。

SK51（第221図）

703は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の高いものである。染付により外面に草花文、口縁部内面に圈線、見込に草花文、高台内に「太明」銘を描く。高台の釉際処理は揃い、置付の内側に砂



が付着する。

704は肥前系陶器の呉器手碗である。畠付を除き灰釉をかける。畠付の内側に砂が付着する。

705は肥前系陶器の灰釉溝縁皿である。高台と高台内は無釉である。畠付に砂が付着する。

706は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しのち、板目状圧痕がみられる。底部にススが付着する。

707は瓦質土器の皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しのち、板目状圧痕がみられる。口縁部に灯芯油痕がみられる。

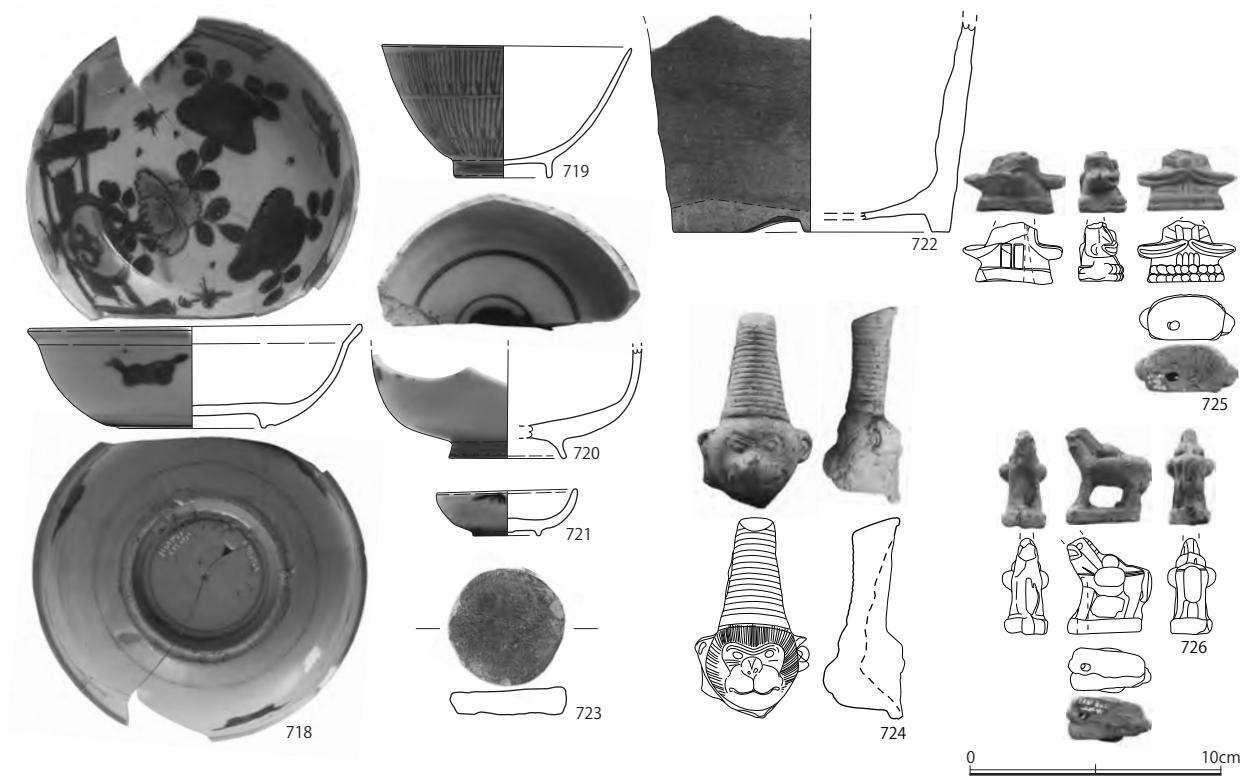
SE69（第222図）

708は土師質土器の秉燭である。口縁部と芯立に灯芯油痕がみられる。

SK71（第223図）

709は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。青磁。高台の釉際処理はやや不揃いで、高台に砂が付着する。

710は肥前系磁器の仏飯器である。残存部に文様はみられない。



第224図 太田家屋敷地内 SK78 出土陶磁器類（縮尺：1／3）

711は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。外面に染付による松文を描く。

712は京・信楽系陶器の碗である。高台と高台内を除く外面には錆釉をかけたのち灰釉をかけ、内面には白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に錆絵と白化粧土による文様を描く。畠付際を面取りする。SK28の破片と接合する。

713は京・信楽系陶器の土瓶である。底部外面と口縁端部から口縁部内面を除き灰釉をかける。外面に錆絵と呉須と白化粧土による梅文を描く。胴下部から底部外面にススが付着する。

714は産地不明陶器のミニチュアの蓋である。上面に灰釉をかける。

715・716は土師皿である。ロクロ成形。715は底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。716は底部に左回転の糸切り離しがみられる。板目状圧痕はない。

717は土師質のミニチュアの蓋である。菊花形に型押成形される。下面に指頭圧痕がみられる。

SK78（第224図）

718は景德鎮窯系磁器の皿である。染付により外面に雲文、内面に花器草花文と蝶文、高台内に二重圈線を描く。高台内にカンナ痕、口縁端部に虫喰いがみられる。

719は肥前系磁器の小広東碗である。染付により外面に梵字文、口縁部内面に圈線、見込に「寿」字を描く。焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。

720は肥前系磁器の撥高台の碗である。染付により外面に八卦文？、見込に太極文を描く。

721は肥前系磁器の紅皿である。外面に染付による笹文を描く。呉須の発色は悪い。

722は瀬戸・美濃系陶器の植木鉢である。底部を除く外面に灰釉をかける。

723は産地不明陶器の加工円盤である。二次加工前の器種は不明であるが、片面にススが付着する。

724～726は土人形である。724は猿。型押成形による前後型合わせの中空である。725は天神。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。726は馬。型押成形による左右型合わせの中実で、底部から前脚にかけ円錐状に小さく穿孔する。

SK79（第225・226図）

727は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。外面に染付による源氏香文と羊齒文を描く。

728は肥前系磁器の腰張碗である。内外面に染付による帶線を描く。畠付に砂が付着する。

729は肥前系磁器の小広東碗である。染付により外面に宝尽くし文と草花文、口縁部内面に圈線、見込に貝文？、高台内に不明文字？を描く。

730は肥前系磁器の広東碗である。染付により内外面に雲龍文、高台内に「富貴長春」銘を描く。SK44の破片と接合する。

731は肥前系磁器の撥高台の碗である。染付により外面に四方櫛文と斜格子文、口縁部内面に四方櫛文、見込に二重圈線内文様を描く。

732は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿のうち高台の低いものである。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に牡丹唐草文と蛇籠文、見込に蛇籠文と波頭文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。高台に砂が付着する。

733・734は肥前系磁器の仏飯器である。733は外面に染付による斜格子文を描く。焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。734は外面に染付による半菊花文と斜格子文を描く。

735は肥前系磁器の撥高台碗の蓋である。染付により外面に花唐草文、口縁部内面に四方櫛文、見込に牡丹文と熨斗文を描く。

736は肥前系磁器のくらわんか碗の蓋である。青磁染付。染付により摘み内に二重方形枠内「渦福」銘、口縁部内面に四方櫛文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。畠付の内側に砂が付着する。

737は瀬戸・美濃系陶器の型打皿である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。

738は産地不明陶器の土瓶である。口縁端部から口縁部内面と底部外面を除き鉄釉をかけ、胴上部外面に灰釉を流し掛ける。

739は肥前系磁器のミニチュアの碗である。外面に染付による梅文と鳥文を描く。呉須の発色は悪い。

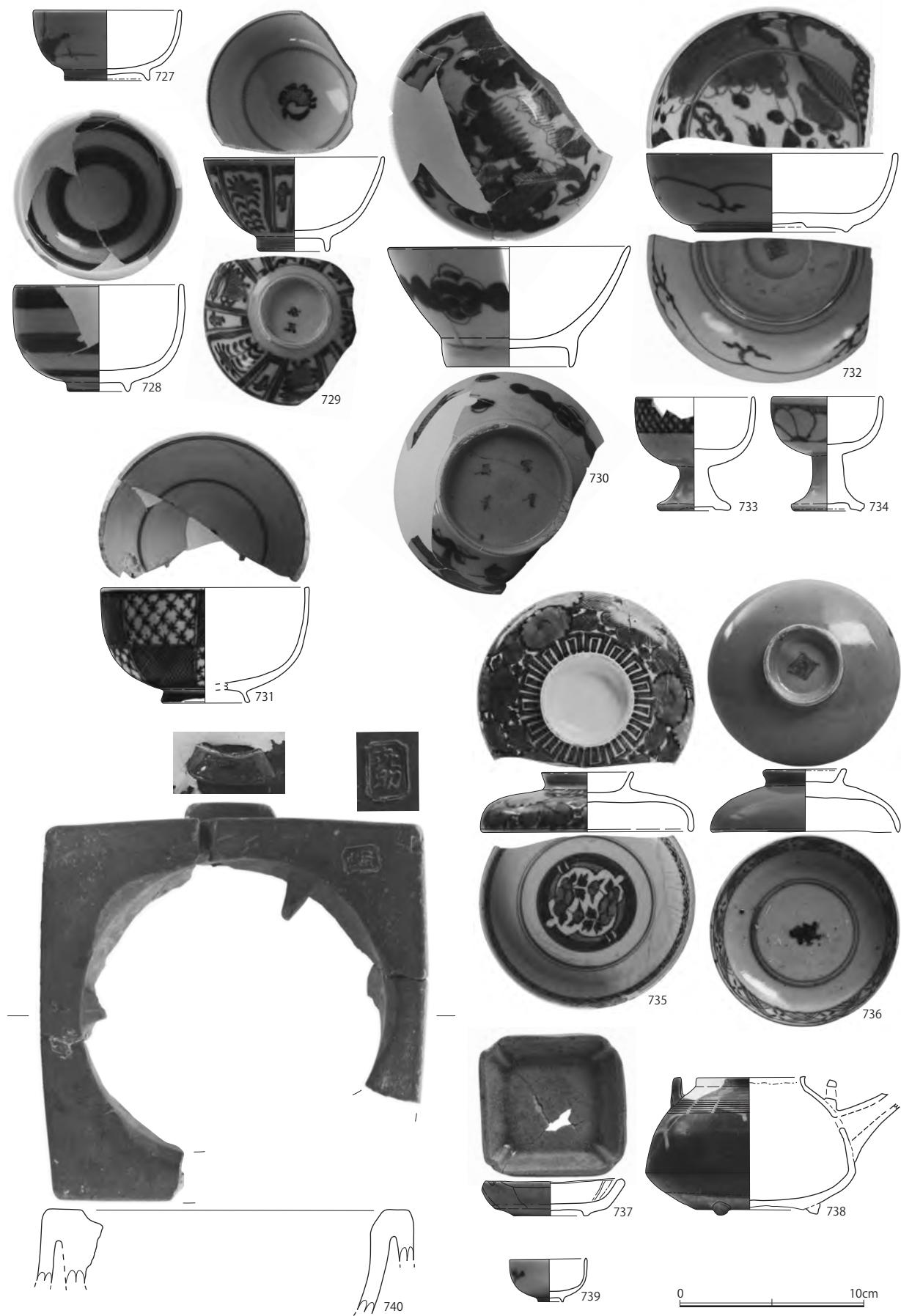
740は土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「七厘」。外壁上面に二重枠内「嵐助」（「喜助」）の刻印がみられる。外壁内面と内部施設内外面の調整は丁寧なナデである。

741は土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「風炉」。

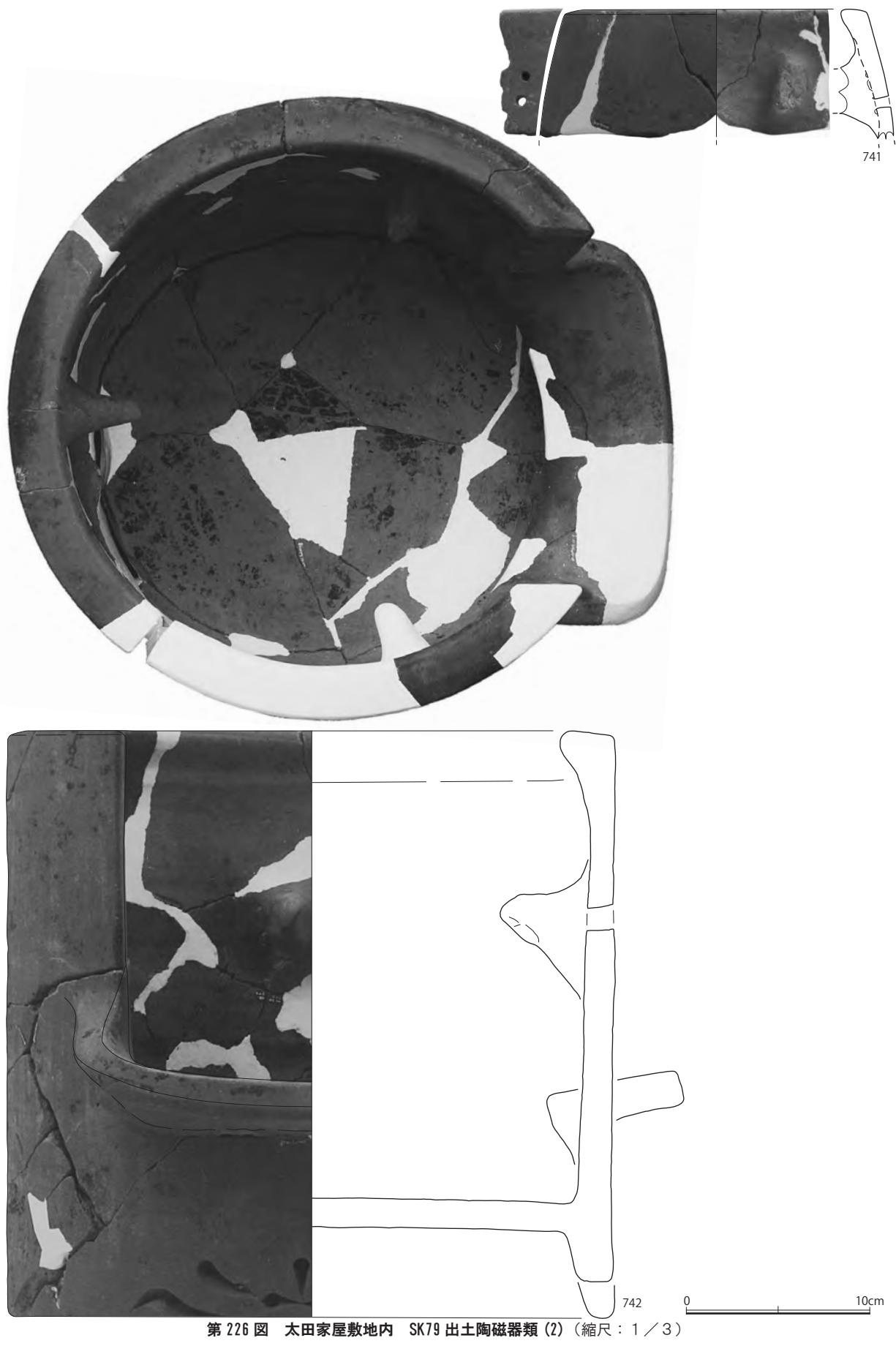
742は土師質土器の火鉢・焜炉類である。外面に赤彩、高台部に透かし文様を施す。口縁端部と窓部と内面にススが付着する。

SK80（第227図）

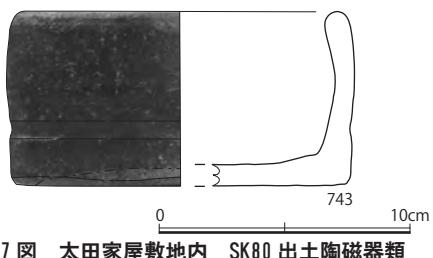
743は備前系陶器のサヤ形鉢である。口縁端部と底部を除く外面に塗土を施す。口縁端部と底部際に重ね焼き痕がみられる。



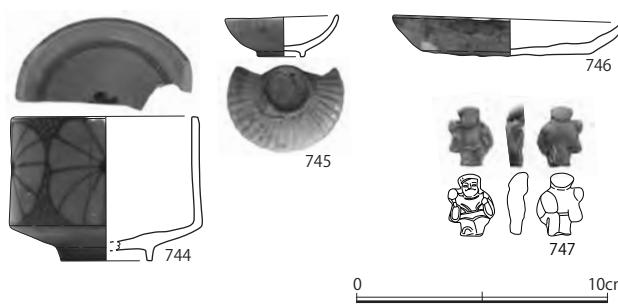
第225図 太田家屋敷地内 SK79 出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)



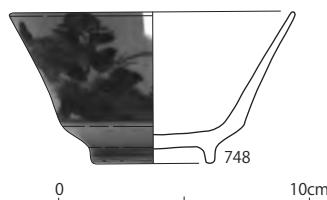
第226図 太田家屋敷地内 SK79 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)



第227図 太田家屋敷地内 SK80出土陶磁器類（縮尺：1/3）



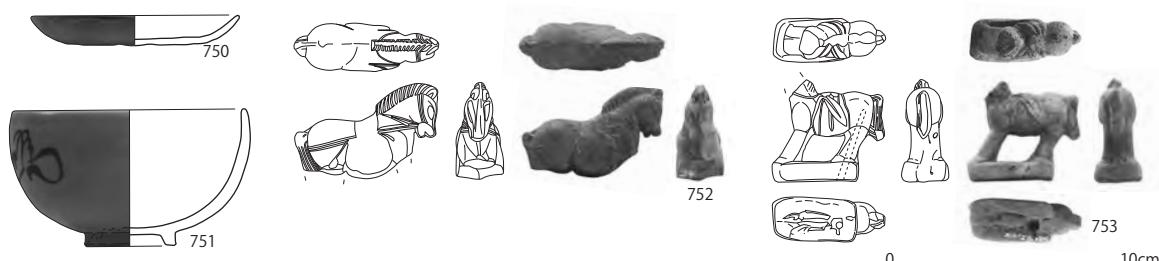
第228図 太田家屋敷地内 SK81出土陶磁器類（縮尺：1/3）



第229図 太田家屋敷地内 SK83出土陶磁器類（縮尺：1/3）



第230図 太田家屋敷地内 SK89出土陶磁器類（縮尺：1/3）



第231図 太田家屋敷地内 SK96出土陶磁器類（縮尺：1/3）

SK81（第228図）

744は肥前系磁器の筒形碗である。染付により外面に菊花文と斜格子文、口縁部内面に圈線、見込にコンニヤク印判の五弁花文を描く。呉須の発色は悪い。

745は肥前系磁器の紅皿である。貝殻状に型押成形される。白磁で、内面にのみ透明釉をかける。

746は土師皿である。ロクロ成形で、底部に左回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。口縁部に灯芯油痕がみられる。

747は土人形である。大黒。型押成形による前後型合わせの中実である。

SK83（第229図）

748は肥前系磁器の朝顔形碗である。外面に染付による牡丹文を描く。

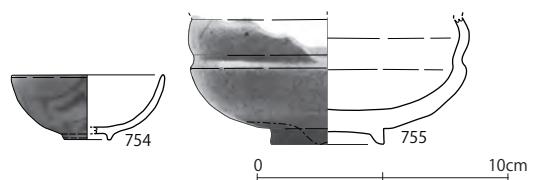
SK89（第230図）

749は産地不明陶器の水注または土瓶の蓋である。外面に鉄釉をかける。

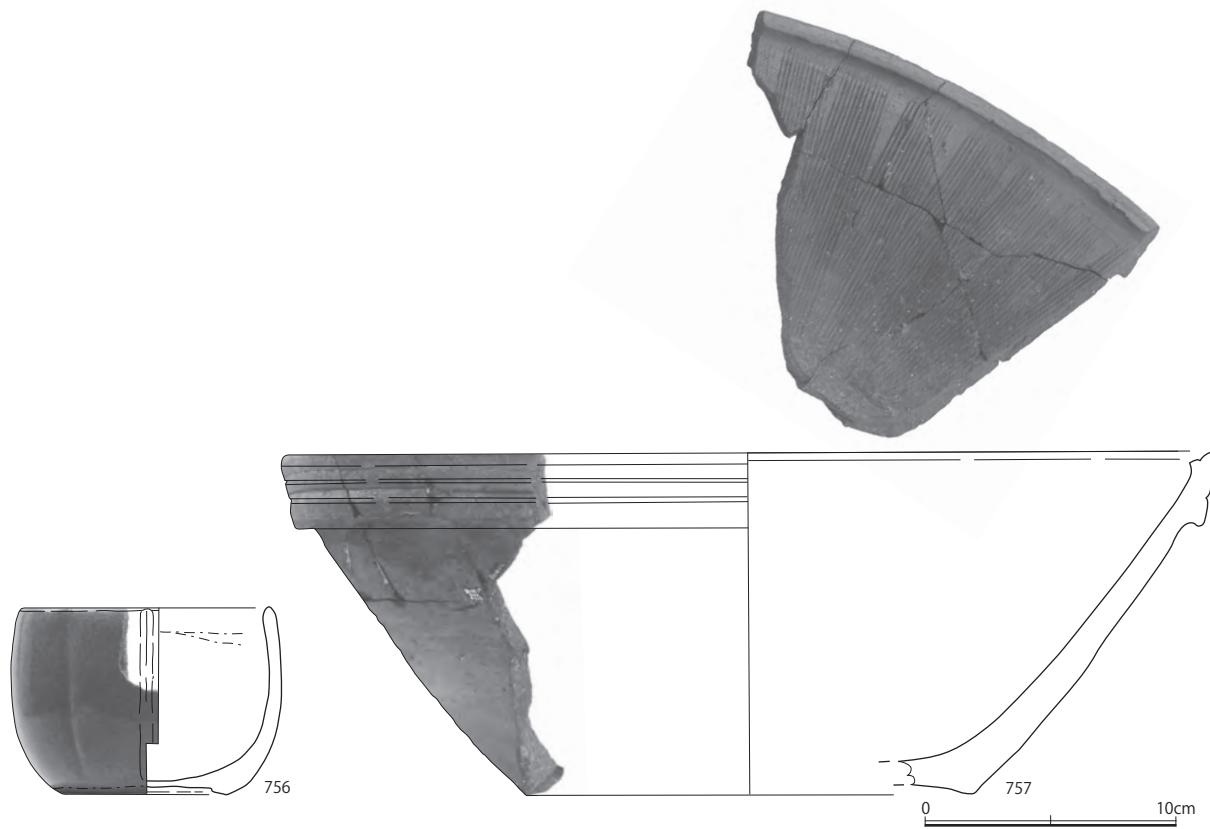
SK96（第231図）

750は備前系陶器の灯明皿である。内面に塗土を施す。

751京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。外面に錆絵による不明文様を描く。疊付際をわずかに面取りする。



第232図 太田家屋敷地内 SD100・SK143出土陶磁器類
(縮尺: 1/3)



第233図 太田家屋敷地内 SK112出土陶磁器類 (縮尺: 1/3)

752・753は土人形である。馬。型押成形による左右型合わせの中実である。753は底部から後脚にかけ円錐状に穿孔する。

SD100・SK143 (第232図)

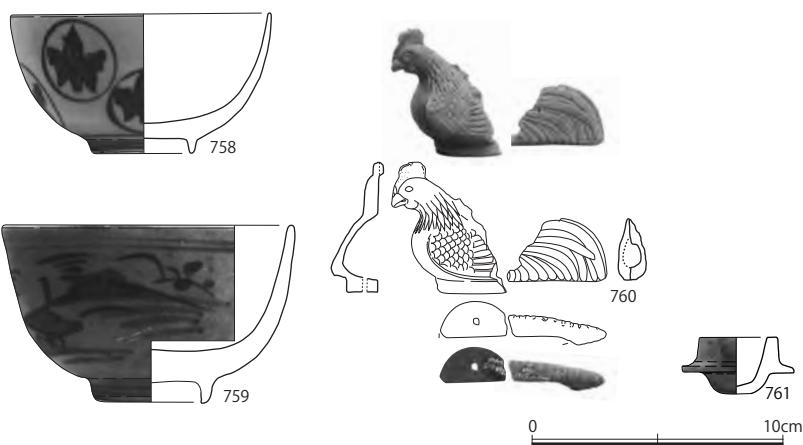
754は肥前系磁器の紅皿である。外面に染付による注連縄文と羽子板文を描く。呉須の発色は悪い。

755は瀬戸・美濃系陶器の碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかけ、鉄釉を流し掛けたと思われる。

SK112 (第233図)

756は京・信楽系陶器の香炉・火入である。型押成形。口縁部内面と底部を除く外面に白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。

757は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込と底部に焼き台痕がみられる。胴部外面調整は横ナデである。



第234図 太田家屋敷地内 SK121 出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第235図 太田家屋敷地内 SK167 出土陶磁器類（縮尺：1／3）

SK121（第234図）

758は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。外面に染付によるコンニャク印判の沢渦文を描く。

759は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。外面に染付による東屋山水文を描く。疊付に砂が付着する。

760は土人形である。鶏。型押成形による左右型合わせの中空で、底部に穿孔がみられる。

761は土師質のミニチュアの釜である。型押成形で、外面にススが付着する。

SK167（第235図）

762は肥前系磁器の紅皿である。貝殻状に型押成形される。白磁で、胴下半部外面から高台内を除き透明釉をかける。

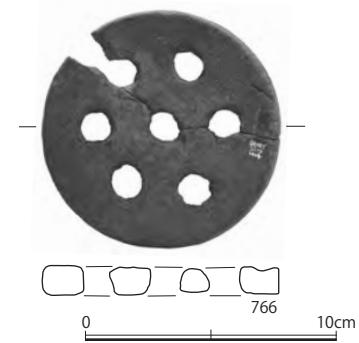
763は産地不明陶器の鍋である。底部内面にハリ支え痕がみられる。胴下部から底部外面を除き鉄釉をかける。露胎部にススが付着する。

764は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しのち、板目状圧痕がみられる。

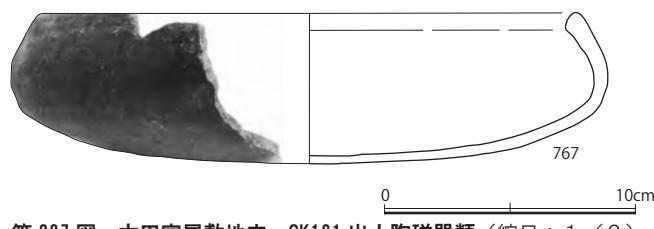
765は土師質土器の碗である。底部に左回転の糸切り離しのち、ナデ調整がみられる。見込にわずかにススが付着する。

SK172（第236図）

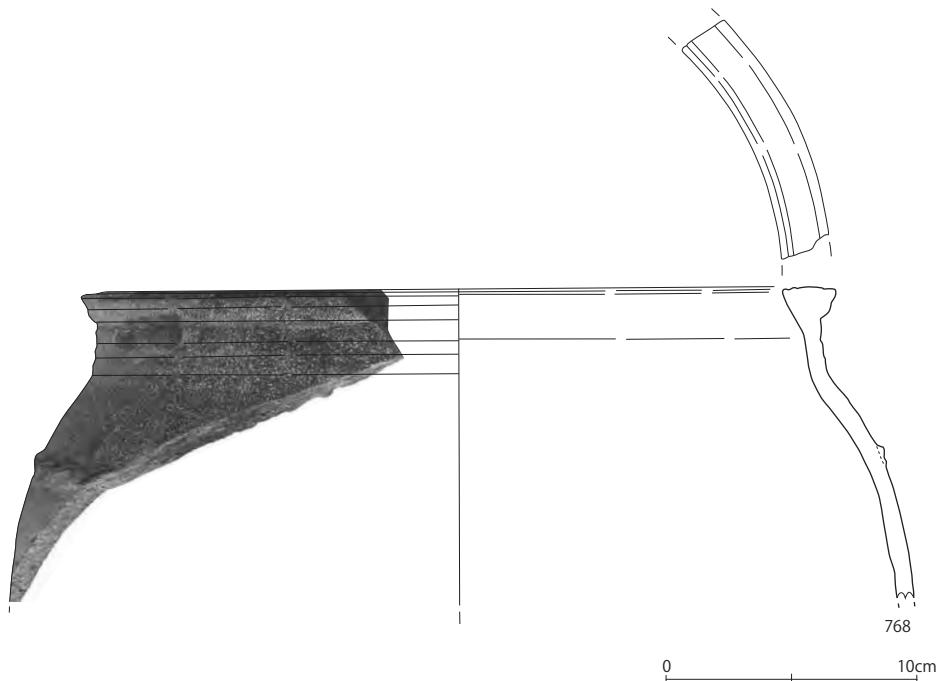
766は土師質土器のさなである。



第236図 太田家屋敷地内 SK172 出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第237図 太田家屋敷地内 SK181 出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第238図 太田家屋敷地内 SK184 出土陶磁器類（縮尺：1／3）

SK181（第237図）

767は土師質土器の関西系焙烙である。外面にススが付着する。

SK184（第238図）

768は肥前系陶器の甕である。内外面に鉄釉をかけ、口縁部上面を釉剥ぎする。釉剥ぎ部分に貝目がみられる。胴部外面に縄状突帯を貼り付ける。胴部内面に同心円状の当て具痕がみられる。

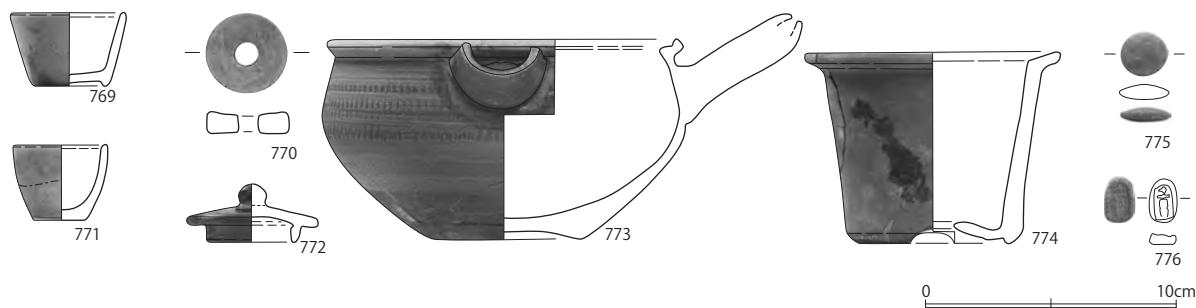
第1遺構面**A 下層****池状遺構埋土最上層（第239図）**

769は肥前系磁器の碁笥底の小壺である。残存部に文様はみられない。

770は肥前系磁器の戸車である。穿孔面を除く側面にのみ透明釉をかける。穿孔面の片面に砂が付着する。

771は瀬戸美濃系陶器の小壺である。胴下半部から底部を除く外面に灰釉をかける。底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。

772は産地不明陶器の土瓶の蓋である。外面に鉄釉、内面に錆釉をかける。



第239図 池状遺構（第1遺構面）埋土最上層出土陶磁器類（縮尺：1／3）

773は産地不明陶器の行平鍋である。底部内面にハリ支え痕がみられる。口縁部と胴下部から底部を除く外面に鋸釉、蓋受けを除く内面に灰釉をかける。胴上半部外面にトビガンナを施す。把手は型押による陽刻。胴下部外面の露胎部にスヌが付着する。

774は土師質土器の植木鉢である。

775は碁石形土製品である。手捏ね成形。

776は泥面子（面打）である。陽刻の「當百」の文字。型押成形。

池状遺構（第240～289図）

777は景德鎮窯系磁器の朝顔形碗である。青花により外面に素書の松竹梅文と蝶文、口縁部内面に圈線、内面に素書の梅文、高台内に「嘉靖？年製」銘を描く。呉須の発色は良好で、口縁端部に虫喰いがみられる。SD23の破片と接合する。

778は景德鎮窯系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿である。精良で硬質な胎土である。型打成形で口縁部は輪花となり、端部に虫喰いがみられる。青花により外面に蝙蝠文と蓮弁文、口縁部内面に墨弾きの草花文、内側面に花唐草文、見込に団龍文、高台内に「乾」字を描く。焼継が施されている。

779は景德鎮窯系磁器の六角形の水指である。板作り成形。青花により外面に山水文、内側面に菊文と梅文を描く。口縁端部にわずかに虫喰いがみられる。

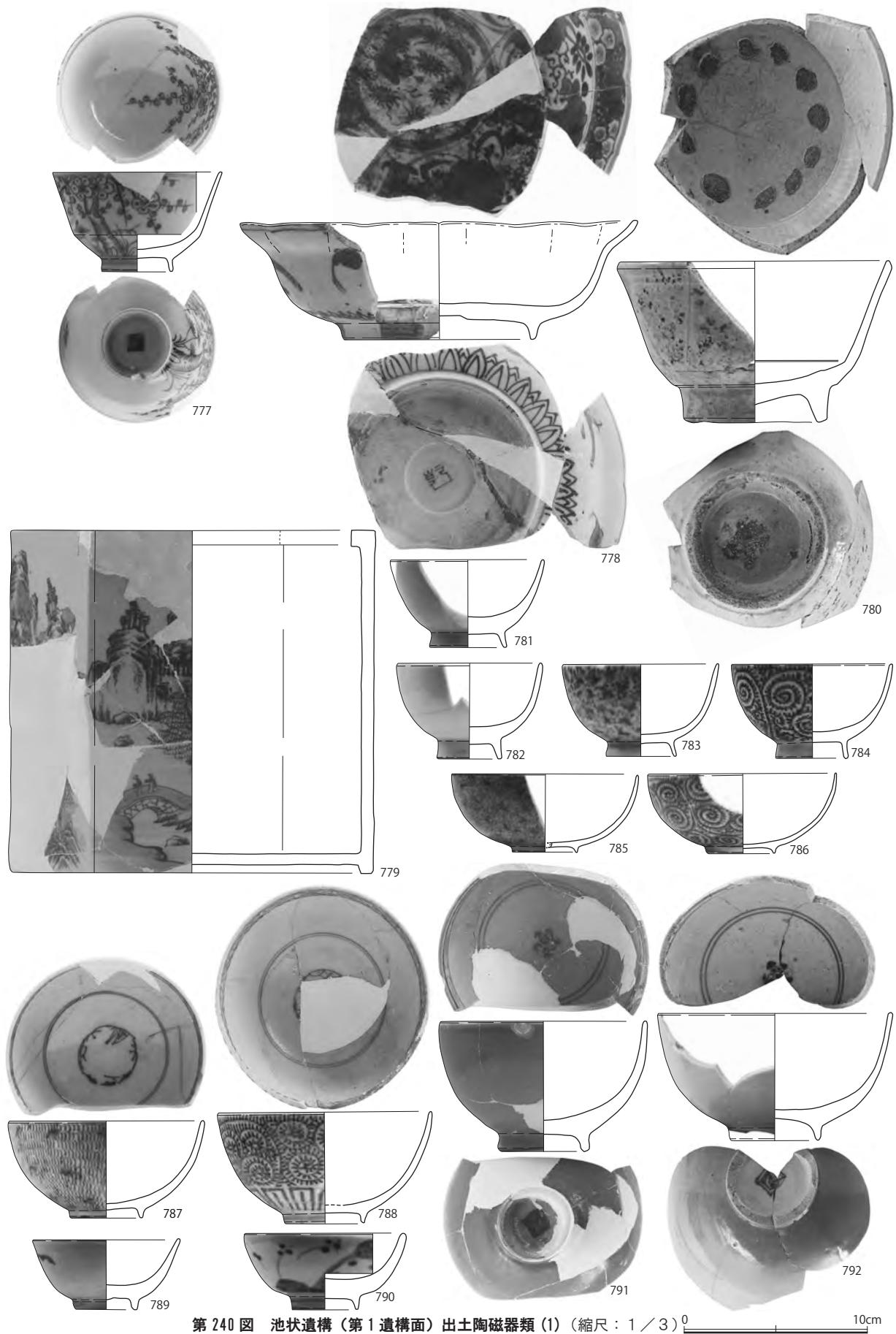
780は朝鮮系の白磁碗である。見込に砂目がみられる。内側面にヘラ彫りによる鎬文を施す。疊付と高台に粗い砂が付着する。

781～784は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の高いものである。高台の釉際処理は揃い、疊付に砂は付着しない。783は外面に染付による唐草文を描く。784は外面に染付による蛸唐草文を描く。

785・786は肥前系磁器の半球碗である。785は外面に染付によるみじん唐草文を描く。786は外面に染付による蛸唐草文を描く。

787・788は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。787は染付により外面にみじん唐草文、口縁部内面に四方櫛文、見込に素書の環状松竹梅文を描く。焼継が施され、高台内に判読不明の焼継師印がみられる。788は染付により外面に蛸唐草文と蓮弁文、口縁部内面に四方櫛文、見込に素書の環状松竹梅文を描く。

789～792は肥前系磁器のくらわんか碗である。789は外面に染付による雁文を描く。焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。790は染付により外面に草花文と雪輪文、高台内に不明



第240図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（1）（縮尺：1／3）⁰ 10cm

文様を描く。791・792は青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。呉須の発色は悪い。

793・794は肥前系磁器の小広東碗である。793は染付により外面に草花文?、見込に火焰宝珠文を描く。焼成不良のため透明釉は白濁する。794は染付により外面に東屋山水文と網干文、口縁部内面に圈線、見込に「寿」字?を描く。畳付に砂が付着する。

795・796は肥前系磁器の広東碗である。795は染付により外面に素書の紫陽花文と梅文、口縁部内面に圈線、見込に一重圈線を描く。796は染付により外面に鶴文、見込に鷺文を描く。

797～805は肥前系磁器の端反碗である。797は染付により外面に草文、口縁部内面に圈線、見込に雁文を描く。焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。798は色絵（赤色・黄色・黒色）による草花文と蝶文を描く。口縁端部に赤色の色絵具を施す。799は染付により口縁部内外に工字繋ぎ文、胴部外面に背景塗埋めの草文と虫文、見込に草文・鳥文と遠山文・月文を描く。800は染付により外面と見込に露草丸文を描く。呉須の発色は悪く、高台の内側に砂が付着する。801は染付により外面に素書の唐花文と青海波文と櫛齒文、口縁部内面に墨弾きの紗綾形文、見込に丸文内唐花文?と輪宝文と格子文、高台内に一重圈線と二重方形枠内に銘を描く。802は染付により外面と見込に如意頭文、口縁部内面に雨降り文を描く。803は染付により外面に花唐草文と丸文内梅文、口縁部内面に雷文、見込に素書の丸文内環状松竹梅文を描く。804は外面に染付による草花文、青海波文、流水文、火焰宝珠文、二重丸文内薄文、櫛齒文を描く。染付により口縁部内面に墨弾きの紗綾形文、見込に麒麟文、高台内に一重圈線と二重方形枠内に銘を描く。805は染付により外面に八卦文、口縁部内面に圈線、見込に一重圈線内文様を描く。

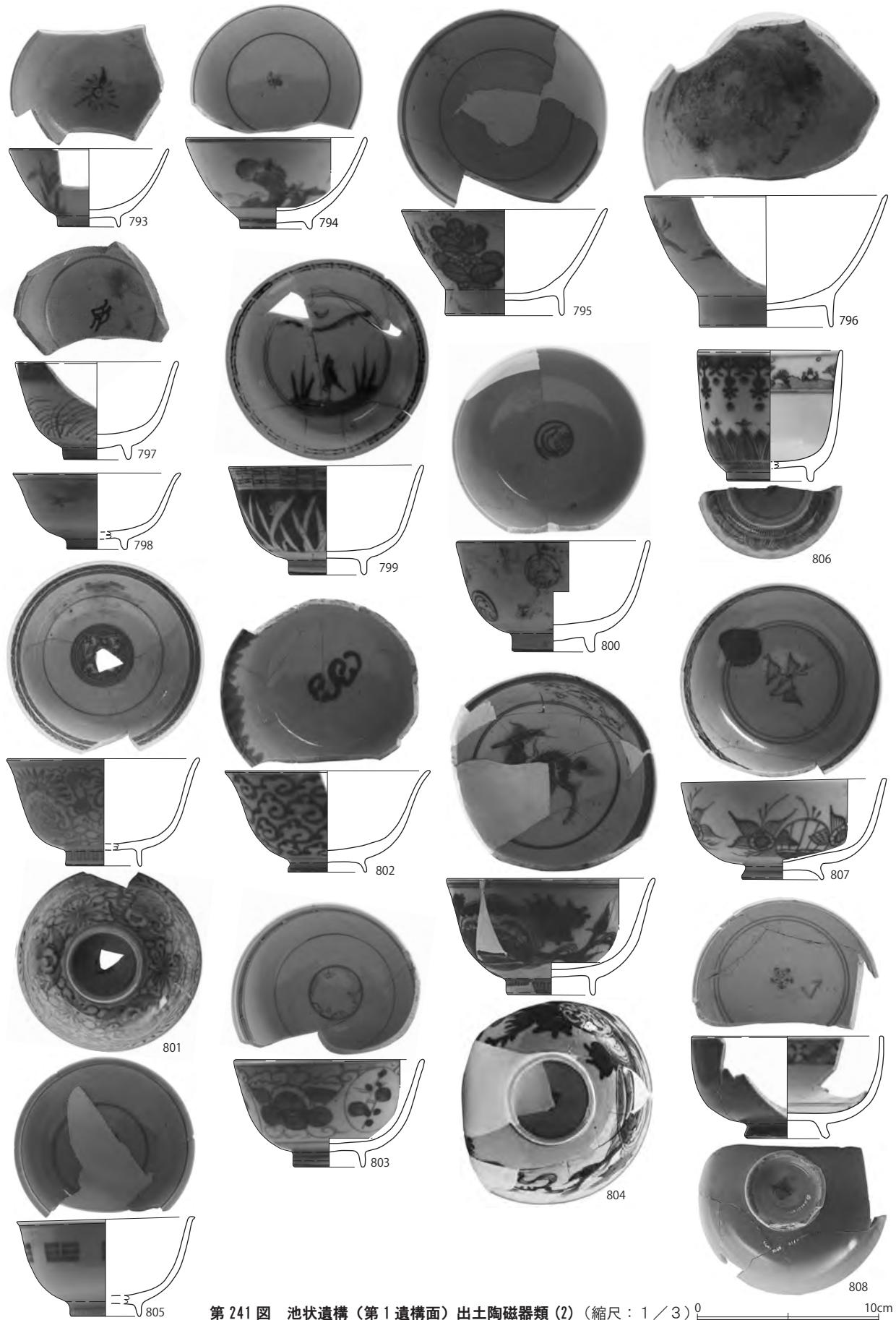
806は肥前系磁器の湯飲碗である。染付により外面に瓔珞文と蓮弁文、口縁部内面に東屋文と人物文と月文、高台内に一重圈線と二重方形枠内に銘を描く。焼継が施され、高台内に「T」の焼継師印がみられる。

807・808は肥前系磁器の撥高台の碗である。807は染付により外面に団扇文と素書の草花文、口縁部内面に四方櫛文、見込に素書の草花文を描く。見込に鉄釉の滴が付着する。808は青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。畳付に砂が付着する。

809・810は肥前系磁器のうがい茶碗である。809は内面に染付による水仙文?と蝶文を描く。焼継が施され、高台内に判読不明の焼継師印がみられる。810は内面に染付による山水文、建物文、帆掛け舟文、雁文を描く。

811は肥前系磁器の碗である。外面に色絵（赤色・他）による桜文?を描く。

812～815は肥前系磁器のU字形高台の皿である。812は青磁。型打成形。外面に色絵（赤色・他）による水仙文、見込に色絵（赤色・黒色・他）による菖蒲文を描く。口縁端部に口紅を施す。813は硬質で精良な胎土である。染付により外面に梅花唐草文、内面に菊花散らし文と麻の葉文を描く。焼継が施され、高台内に「山」字の焼継師印がみられる。814は染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に梅文と雪輪文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圈線内「渦福」銘を描く。815は型打成形。高台内にハリ支え痕がみられる。染付により外面に背景塗埋めの七宝繋ぎ文と八卦

第241図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（2）（縮尺：1／3）⁰ 10cm

文と波文、口縁部内面に背景塗埋めの七宝繋ぎ文、内面に背景塗埋めの鷺文と菊文と牡丹文、高台内に二重方形枠内「宣徳年製」銘を描く。焼継が施されている。

816は肥前系磁器のくらわんかの皿である。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に扇面文と花文と四方襷文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圏線内「渦福」銘を描く。呉須の発色は悪く、高台に砂が付着する。

817は肥前系磁器の初期伊万里の皿である。蛇ノ目高台で、口縁端部に口紅を施す。

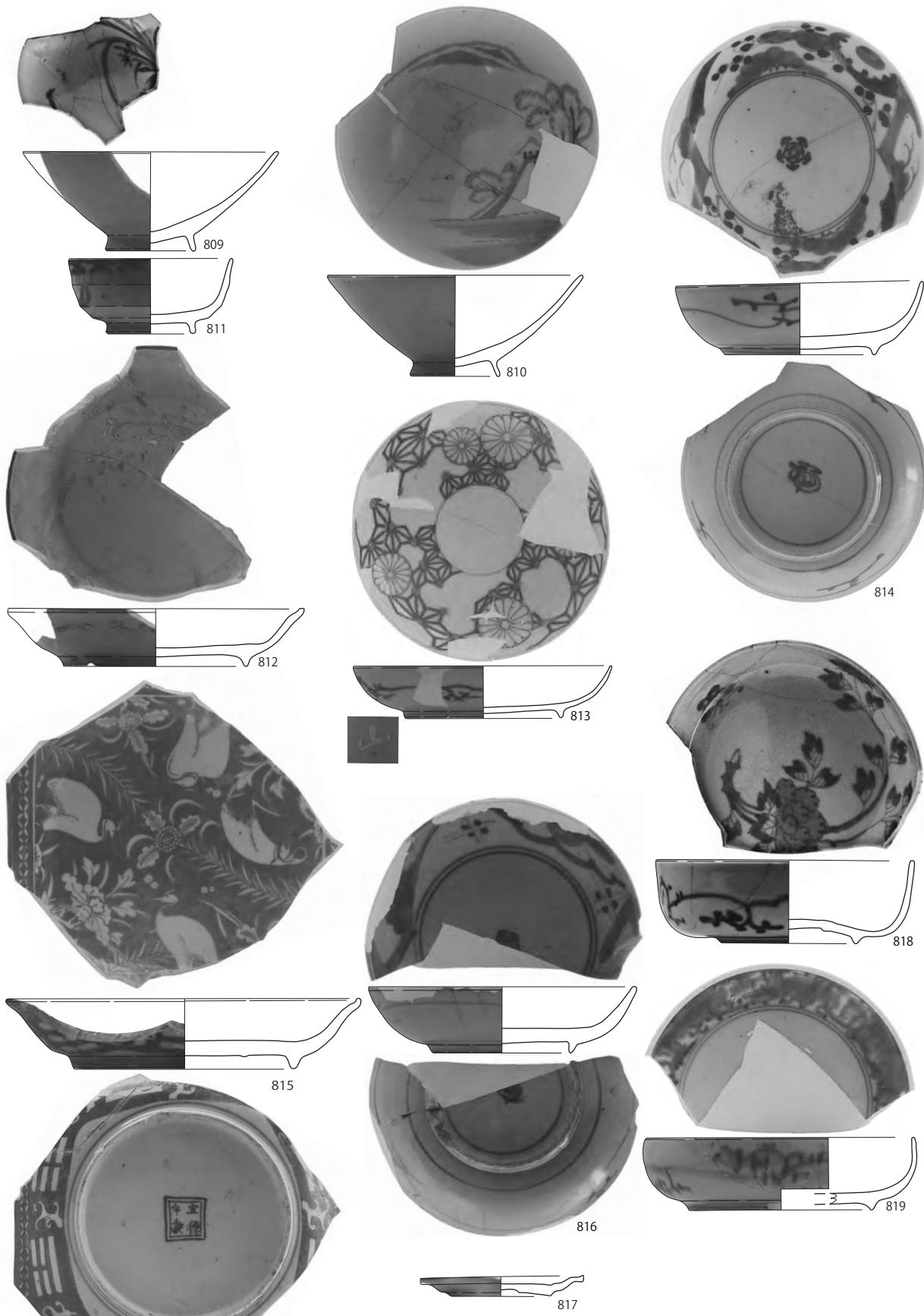
818～823は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿のうち高台の低いものである。818は染付により外面に如意頭状唐草文、内面に牡丹文と蝶文を描く。高台内の蛇ノ目部分は無釉で重ね焼き痕がみられる。819は染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に花唐草文を描く。呉須は滲む。高台内の蛇ノ目部分は無釉で重ね焼き痕がみられる。820は染付により内側面に格子文、見込に格子目文を描く。焼成不良のため呉須の発色悪く、透明釉は白濁する。821は染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に撫子文と丸文、見込に三方割銀杏文を描く。焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。822は染付により外面に如意頭状唐草文、内側面と見込に蛸唐草文を描く。823は型打成形で、口縁部は輪花となる。染付により外面に花唐草文、内面に松竹梅文を描く。焼成不良のため透明釉は白濁する。

824～826は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿のうち高台の高いものである。824は型打成形で口縁部は輪花となり、端部に口紅を施す。外面に染付により山水文と家屋文と帆掛け舟文を描く。825は型打成形で、口縁部は輪花となる。染付により外面に如意頭状唐草文と○×繋ぎ文、内面に蛸唐草文と花文、見込に環状松竹梅文、高台内に「成化年製」銘を描く。826は型打成形で、口縁部は輪花となる。染付により外面に折枝梅文、口縁部内面に帶線、内側面に松竹梅文、見込に鶴文を描く。

827～829は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の大きいものである。827・829は蛇ノ目釉剥ぎ部分に環状の重ね焼き痕がみられる。染付により内側面に花唐草文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。疊付に砂が付着する。828は染付により内側面に草花文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。呉須の発色は悪い。

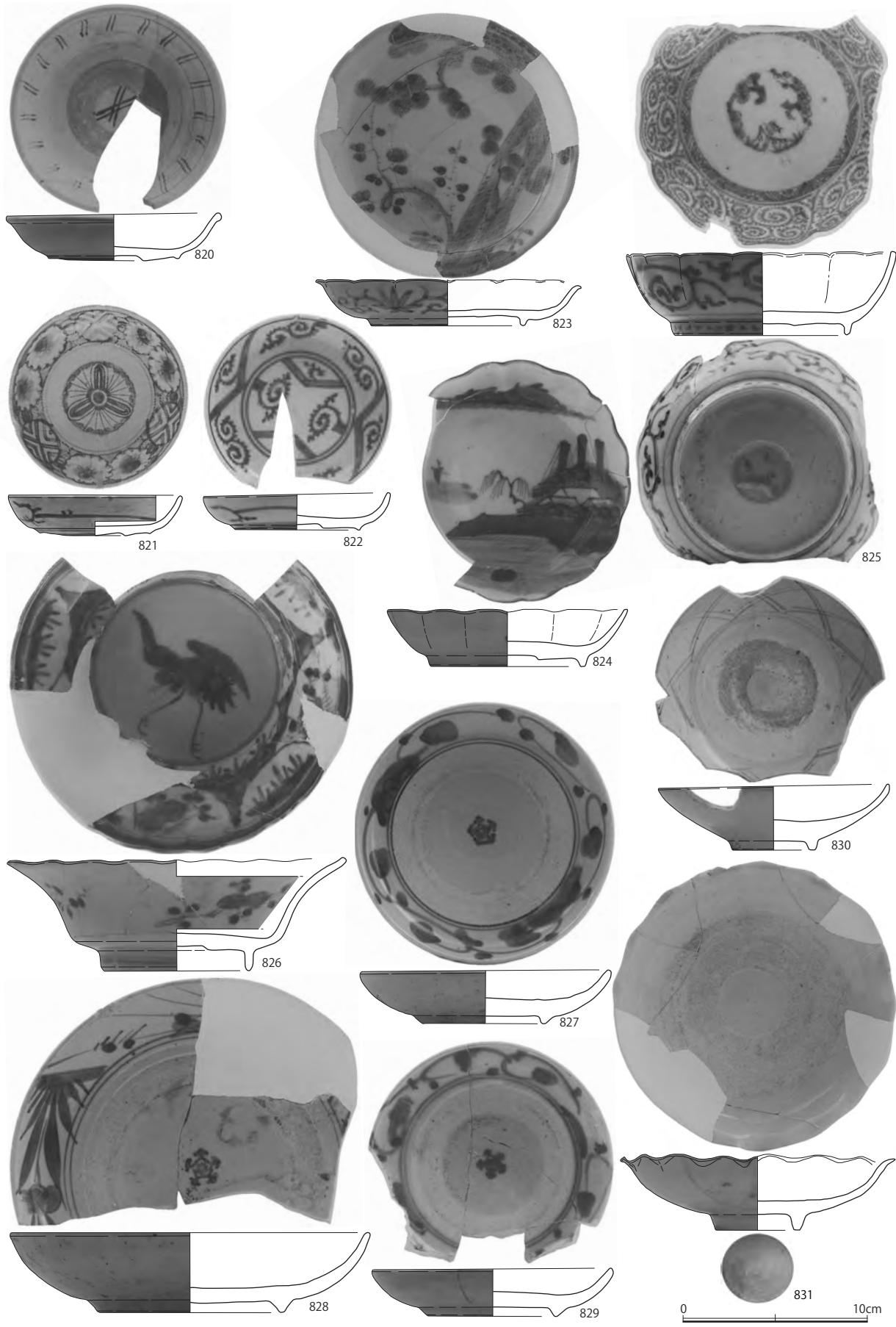
830・831は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の小さいものである。830は染付により内側面に斜格子文を描く。呉須の発色は悪く、蛇ノ目釉剥ぎ部分と高台の内側に砂が付着する。831は型打成形で、口縁部は輪花となる。蛇ノ目釉剥ぎ部分にアルミナ砂を塗布する。焼継が施され、高台内に判読不明の焼継師印がみられる。

832～837は肥前系磁器のU字形高台の小皿である。832は染付により外面に如意頭状唐草文、口縁部内面に雷文、見込に墨弾きの花文を描く。833は口縁端部に口紅を施していたと思われる。外面に染付による如意頭状唐草文、口縁部内面に染付による雷文、見込中央に色絵（赤色）による一重方形枠内変形字銘、その周辺に染付による松文と鶴文、色絵（赤色）による折松葉文を描く。高台内に染付による一重圏線と二重方形枠内に銘がみられる。834は見込に染付による素書の竹文を描く。口縁端部に口紅を施す。835・836は見込を蛇ノ目釉剥ぎし、重ね焼き痕がみられる。染付により内側面に草文、見込に一重圏線を描く。呉須の発色は悪く、疊付に砂が付着する。837は染付により外面に折松葉文、口縁部内面に梅花文と花文と山文、見込に梅文と鶯文、高台内に一重圏線を描く。高台



第242図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（3）（縮尺：1/3）

A horizontal ruler scale marked from 0 to 10 cm. There are two major tick marks, one at 0 and one at 10 cm. Between these major marks, there are four smaller tick marks, creating five equal segments. The third tick mark from the left is labeled '5'.



第243図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(4)（縮尺：1/3）

の内側に砂が付着する。

838・839は肥前系磁器の型打小皿である。838は型打成形により口縁部は輪花となり、端部に口紅を施す。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に不明文様、見込に牡丹文と蝶文と太湖石文を描く。839は型打成形により見込に陰刻の松竹梅文を施し、染付ける。

840・841は肥前系磁器のU字形高台の大皿である。840は型打成形で、口縁部は輪花となる。高台内にハリ支え痕がみられる。内面に染付による山水文と家屋文と帆掛け舟文を描く。焼継が施され、高台内に「村口岡」の焼継師印がみられる。841は型打成形で、高台内にハリ支え痕がみられる。染付により外面に波文、内側面に背景塗埋めの渦文?、見込には竹文で区画した中に竹下人物文を描き、区画間を菊唐草文と笹文で埋める。高台内に染付による一重圏線内「乾」字を描く。焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。焼継が施されている。

842・843は肥前系磁器の輪花一枚絵皿である。842は型打成形。口縁端部に口紅を施していたと思われる。外面に染付による流水文?と草文?、見込に染付と色絵（赤色・金色）による貝藻文と流水文と草文、色絵（赤色・緑色）による丸文（巴文と半梅花文?）、高台内に染付による一重圏線内「山福」銘を描く。843は型打成形。見込に染付による梅文?と不明文様を描く。疊付に砂が付着する。

844は肥前系磁器の輪花深手皿である。型打成形。白磁。内側面に陽刻の松竹梅文、見込に陽刻の梅花文?を施す。焼継が施され、高台内に「□谷?」の焼継師印がみられる。

845は肥前系磁器の皿である。青磁染付・色絵。外面に染付による花唐草文と籠目文、内側面に色絵（赤色・緑色・黒色・金色）による唐花文、見込に染付による牡丹文と牡丹唐草文を描く。焼継が施されている。

846は肥前系磁器の皿である。青磁染付。蛇ノ目高台で、三足を貼り付ける。高台の蛇ノ目部分を除く内外面に青磁釉、蛇ノ目部分に錆釉をかける。内側面にヘラ彫りによる雲文と草文と葉文、見込に染付による桔梗文を描く。口縁端部に呉須を塗布する。蛇ノ目部分に重ね焼き痕がみられる。

847は肥前系磁器のU字形高台の端反鉢である。染付により外面に龍文と雲文と△×繋ぎ文、見込に団龍文、高台内に一重圏線内「大明年製」銘を描く。

848は肥前系磁器の端反形猪口である。染付により外面と見込に文様、口縁部内面に圏線、高台内に二重方形枠内に銘を描く。底部に焼成後の穿孔がみられる。

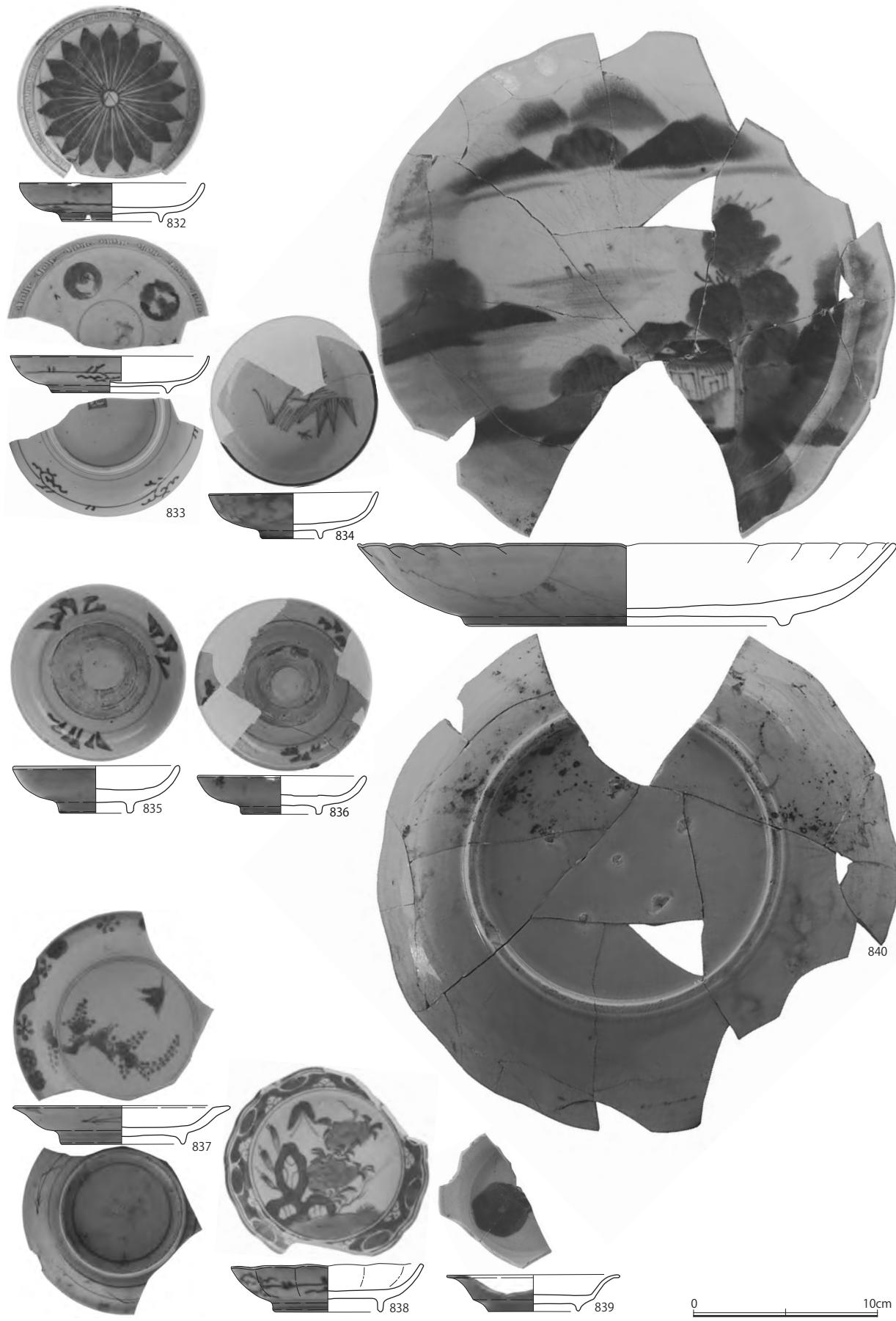
849は肥前系磁器のU字形高台の端反鉢である。染付により外面と内側面に窓絵桐文と二重方形枠内変形字銘、見込に窓絵桐文を描く。呉須の発色は悪い。

850は肥前系磁器のU字形高台の端反鉢である。染付により外面に唐草文と斜格子文、内側面に花唐草文、見込に鳳凰文と桐文を描く。焼継が施され、高台内に「片山」?の焼継師印がみられる。

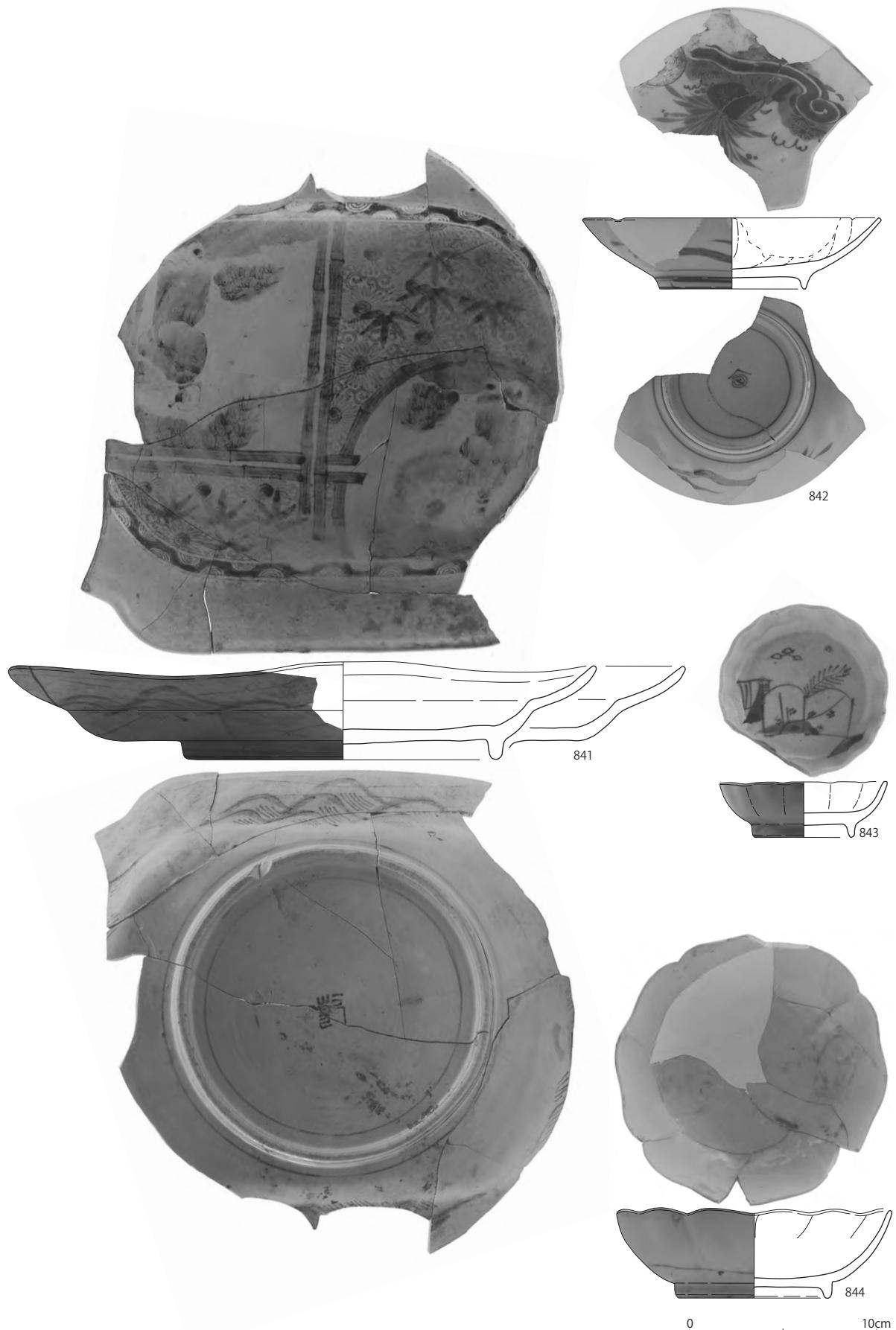
851は肥前系磁器のU字形高台の丸碗形鉢である。染付により外面に菊文と蝶文、口縁部内面に四方襷文、見込にも文様を描く。

852は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の鉢である。慣用名「八角鉢」。型打成形。染付により外面と内側面に「福寿」字と墨弾きの亀甲繋ぎ文、見込に鶴文を描く。焼継が施され、高台内に「一」の焼継師印がみられる。

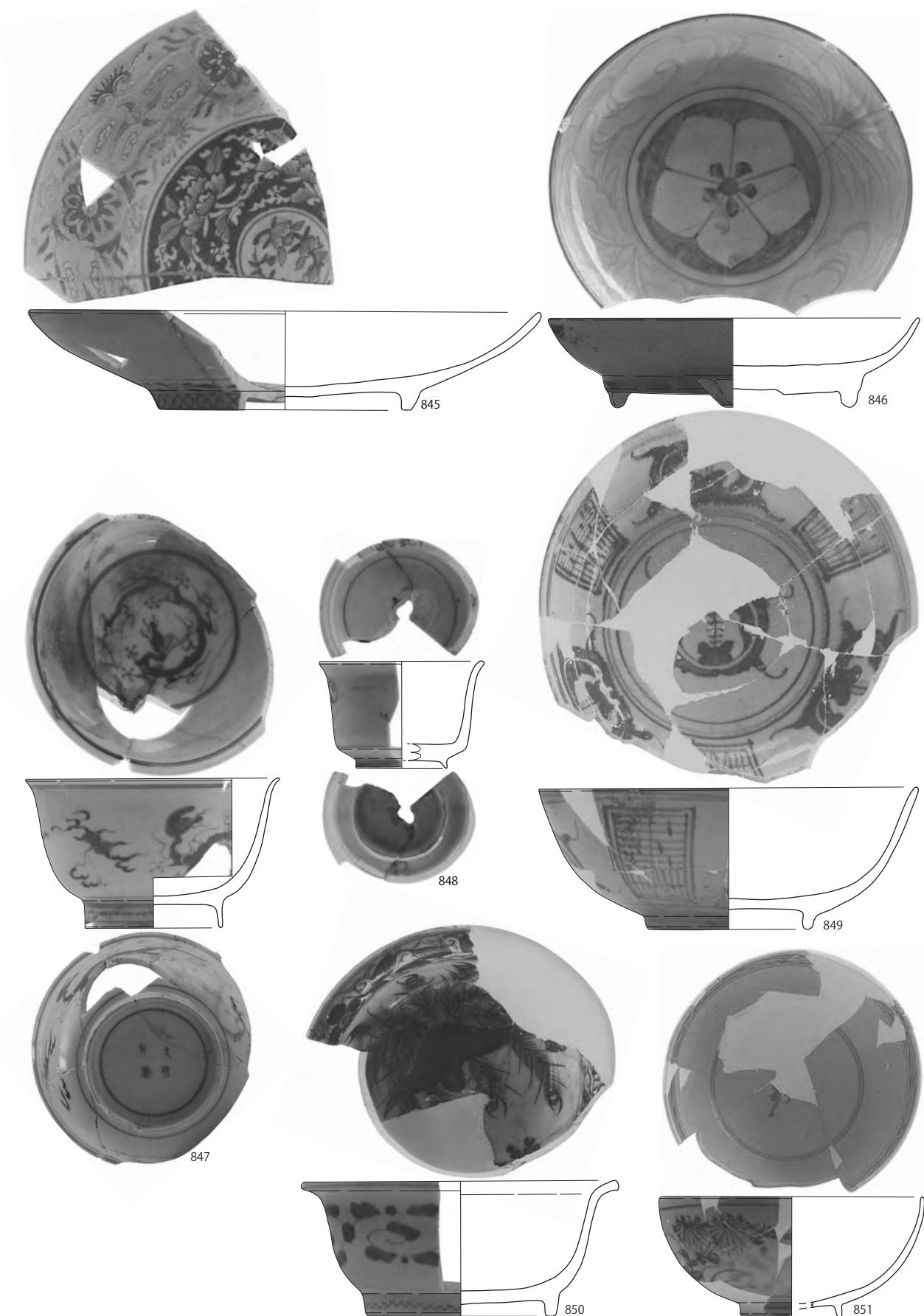
853は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の鉢である。型打成形で口縁部は輪花となり、端部に口紅を施



第244図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（5）（縮尺：1／3）



第245図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(6)（縮尺：1／3）



第246図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(7)（縮尺：1／3） 0 10cm

す。染付により外面に草花文、内側面に鳥文と草花文、見込に丸文内鳥文と草文を描く。焼継が施され、高台内に焼継師印「大」がみられる。

854は肥前系磁器の猪口である。わずかに蛇ノ目凹形高台となる。外面に染付による竹文と太湖石文を描く。口縁端部に口紅を施す。

855・856は肥前系磁器の輪花猪口である。型打成形。855は染付により外面にみじん唐草文と蓮弁文、口縁部内面に四方襷文、見込に素書の環状松竹梅文、高台内に「成化年製」銘を描く。856は染付により外面に葡萄文と竹垣文と四方襷文、見込に手描きの五弁花文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘?を描く。

857は肥前系磁器の初期伊万里の鉢である。見込にハリ支え痕がみられる。染付により外面に樓閣文、雲文、菊文、笹文、口縁部内面に圈線、内側面に雲文、見込に菊文と笹文と雲文を描く。呉須の発色は悪い。

858は肥前系磁器のU字形高台の鉢である。慣用名「八角鉢」。型打成形。染付により外面に花唐草文と○×文と連弧文、内側面に草花文と網目文と青海波文、見込に牡丹文と蝶文を描く。割れ口に漆継の痕跡がみられる。

859～863は肥前系磁器の端反形小坏である。859は染付により外面と口縁部内面と見込に圈線、高台内に一重圈線内「大明成化年製」銘を描く。焼成不良のため透明釉は白濁する。860は外面に染付による笹文を描く。呉須の発色は悪く、畳付の釉剥ぎも十分ではなく、高台内は粗く施釉される。861は外面に染付による草花文を描く。草花文の葉の部分は墨弾きである。862は外面に染付による草文と山文と樹木文を描く。863は染付により外面に舟文、人物文、遠山文、雁文、口縁部内面に圈線、高台内に一重圈線内不明文字（「寿」字?）を描く。

864～874は肥前系磁器の丸碗形小坏である。864は外面に染付による笹文を描く。高台の内側に砂が付着する。865は口縁端部に口紅を施す。畠付際を面取りする。866は外面に染付による井桁文を描く。呉須の発色は悪く、高台の内側に砂が付着する。867は外面に染付による紅葉文を描く。呉須の発色は悪く、畠付に砂が付着する。紅皿か。869は残存部に文様はみられない。高台の釉際処理は不揃いで、畠付露胎部は橙色を呈する。870は残存部に文様はみられない。紅皿か。871は外面に染付による山水文と家屋文と雁文を描く。872は外面に染付による笹文を描く。紅皿か。873は外面に染付による捻花文を描く。874は外面に染付による紅葉文を描く。高台の内側に砂が付着する。

875～882は肥前系磁器の半球形小坏である。875は外面に染付による萩文?を描く。876は外面に染付による菊花文と格子文を描く。焼成不良のため透明釉は白濁する。877は外面に染付による素書の松竹梅文を描く。878は外面に染付による草花文を描く。高台の内側に砂が付着する。879は外面に染付による草花文と蝶文を描く。880は外面に赤色の色絵具により背景を塗埋め、赤色の色絵具と金彩により桜文を描く。881は外面に染付により葦文と鷺文を描く。882は外面に染付による文様を描く。

883・884は肥前系磁器のくらわんかの小坏である。883は外面に染付によるコンニャク印判の菊文を描く。畠付の内側に砂が付着する。884は外面に染付による笹文を描く。畠付に砂が付着する。

885 は肥前系磁器の薄手酒杯である。外面に染付による文様、内面に色絵（青色）による山水文と家屋文を描く。

886 は肥前系磁器の小杯である。外面に染付による雁文を描く。畳付露胎部は橙色を呈する。

887 は肥前系磁器の小杯である。外面を面取する。透明釉は高台と高台内を除き生掛けする。外面に染付による草花文と詩句を描く。削り込み高台。

888 は肥前系磁器の小杯である。色絵（青色）により口縁部内面に圈線と不明文様、見込に藤文？と一重方形枠内変形字銘を描く。

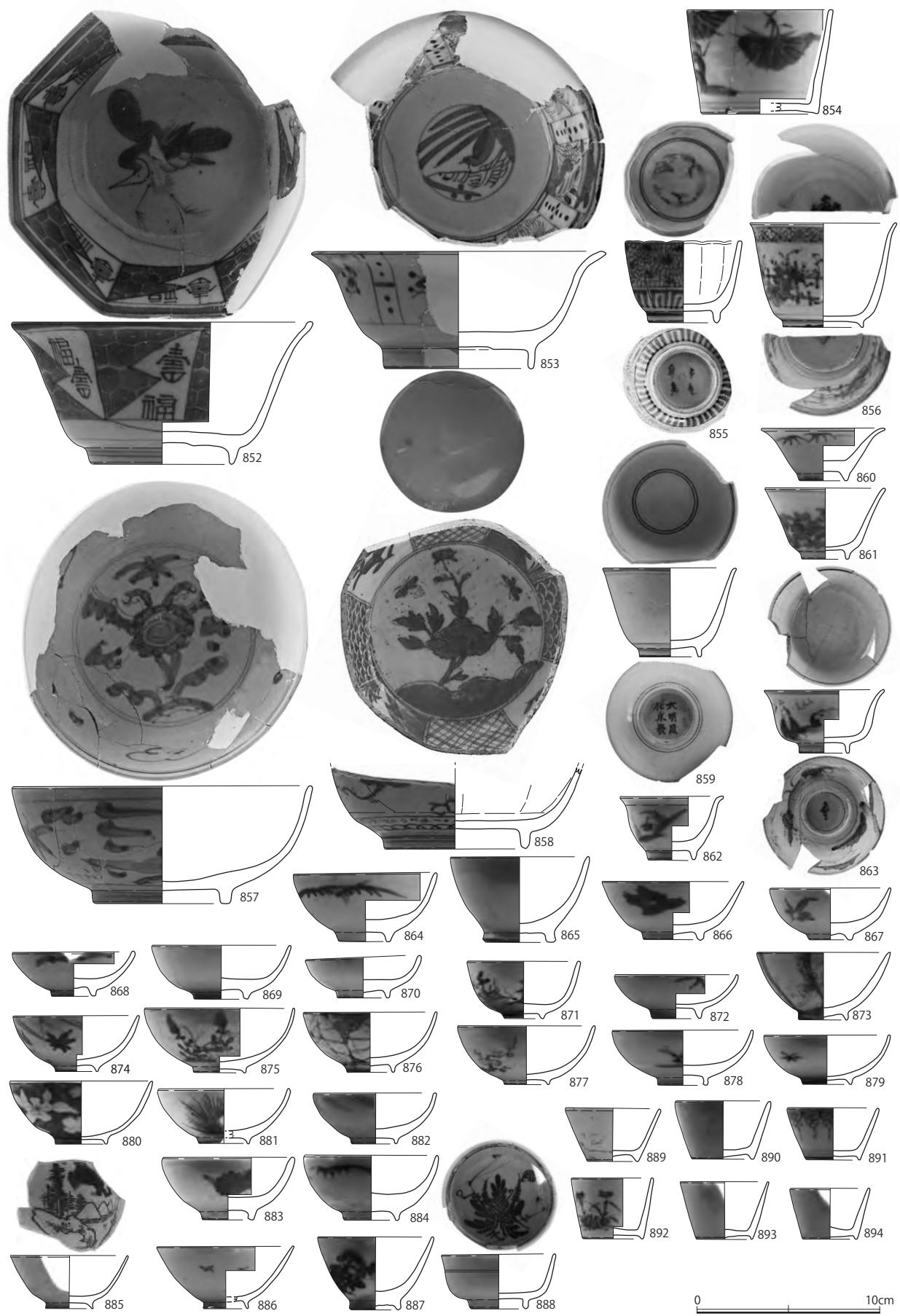
889～894 は肥前系磁器の碁笥底の小杯である。889 は白磁。890 は残存部に文様はみられない。高台の内側に砂が付着する。891 は外面に染付による輪宝文を描く。892 は底部中央に透明釉がかかっていない。外面に染付による草花文を描く。893 は残存部に文様はみられない。畳付際を面取りする。894 は残存部に文様はみられない。

895～899 は肥前系磁器の紅皿である。895～897 は貝殻状に型押成形される。白磁。内面にのみ透明釉をかける。898 は外面に染付による笹文を描く。呉須の発色は悪い。899 の残存部に文様はみられない。

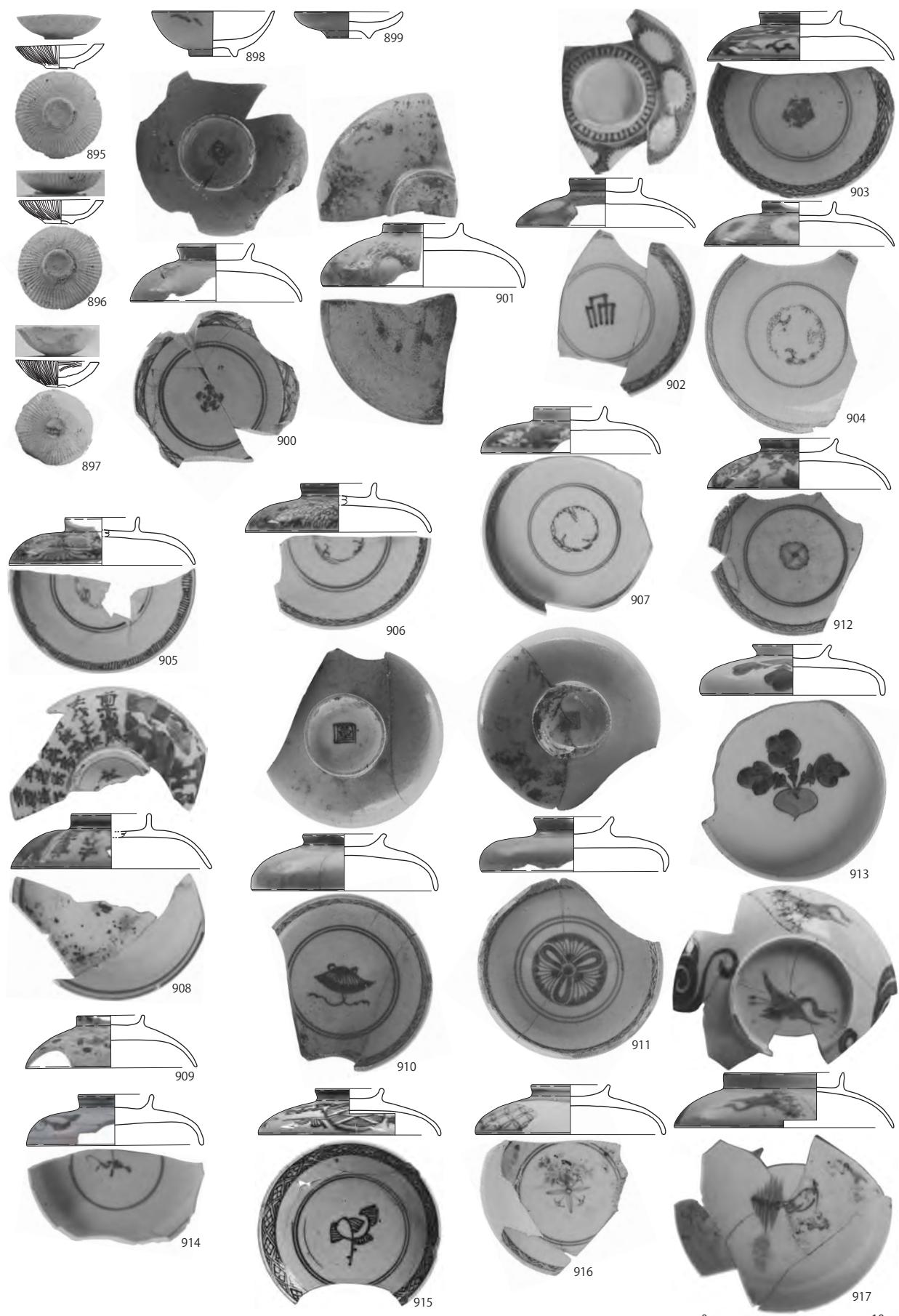
900～909 は肥前系磁器の丸碗の蓋である。900 は青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文、摘み内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。901 は青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に不明文様、摘み内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。焼成不良のため内面の透明釉は白濁する。902 は染付により外面に雪輪文、口縁部内面に四方櫛文、見込に源氏香文を描く。903 は染付により外面に唐花文と渦文、口縁部内面に四方櫛文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。904 は染付により外面に撫子文と渦文、口縁部内面に四方櫛文、見込に素書の環状松竹梅文を描く。905 は染付により外面に唐花文、口縁部内面に雷文、見込に素書の環状松竹梅文？を描く。906 は染付により外面にみじん唐草文、口縁部内面に四方櫛文、見込に環状松竹梅文を描く。907 は染付により外面に桜花唐草文、口縁部内面に雷文、見込に素書の環状松竹梅文を描く。908 は染付により外面に「前赤壁賦」の詩句と舟遊び文、口縁部内面に帶線、摘み内に一重圈線内「一製」？を描く。口縁端部に口紅を施す。909 は外面に染付による菊文を描く。焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。

910～916 は肥前系磁器の撥高台碗の蓋である。910 は青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に笠文、摘み内に二重方形枠内「筒江」銘を描く。911 は青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に三方割銀杏文、摘み内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。912 は染付により外面に丸文内松文と草花文、口縁部内面に四方櫛文、見込に十字花文を描く。913 は染付により外面と見込に蕪文を描く。914 は染付により外面に軍配文と宝珠文、口縁部内面に圈線、見込に「寿」字を描く。畳付に砂が付着し、露胎部は橙色を呈する。915 は染付により外面に素書の丸文内青海波文と桜花文と流水文、口縁部内面に四方櫛文、見込に素書の草花文を描く。916 は染付により外面に七宝繫ぎ文と蓮弁文、口縁部内面に四方櫛文、見込に十字花文を描く。

917～926 は肥前系磁器の広東碗の蓋である。917 は染付により外面に鶴文と雲文、見込に鷺文を描く。918 は染付により外面に扇面文、口縁部内面に圈線、見込に蝶文を描く。919 は染付により外



第247図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（8）（縮尺：1／3）



第248図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(9)（縮尺：1/3）

0 10cm

面に松文と帆掛け舟文、口縁部内面に圈線、見込に岩波文？を描く。920は染付により外面に東屋山水文、口縁部内面に圈線、見込に岩波文、摘み内に帆掛け舟文を描く。921は染付により外面に素書の丸寿字文と瑞雲文、口縁部内面に圈線、見込に素書の丸文内青海波文と丸寿字文、摘み内に一重圈線と二重方形枠内「青」字を描く。922・923は染付により外面に松文と帆掛け舟文と鳥文、見込に鷺文と水文、摘み内に鶴文を描く。924は染付により外面に帶線、口縁部内面に圈線、見込に草花文を描く。925は染付により外面に蛸唐草文、口縁部内面に圈線を描く。926は染付により外面に「寿」字と草花文と波文、口縁部内面に圈線、見込に火焔宝珠文？、摘み内に草花文を描く。

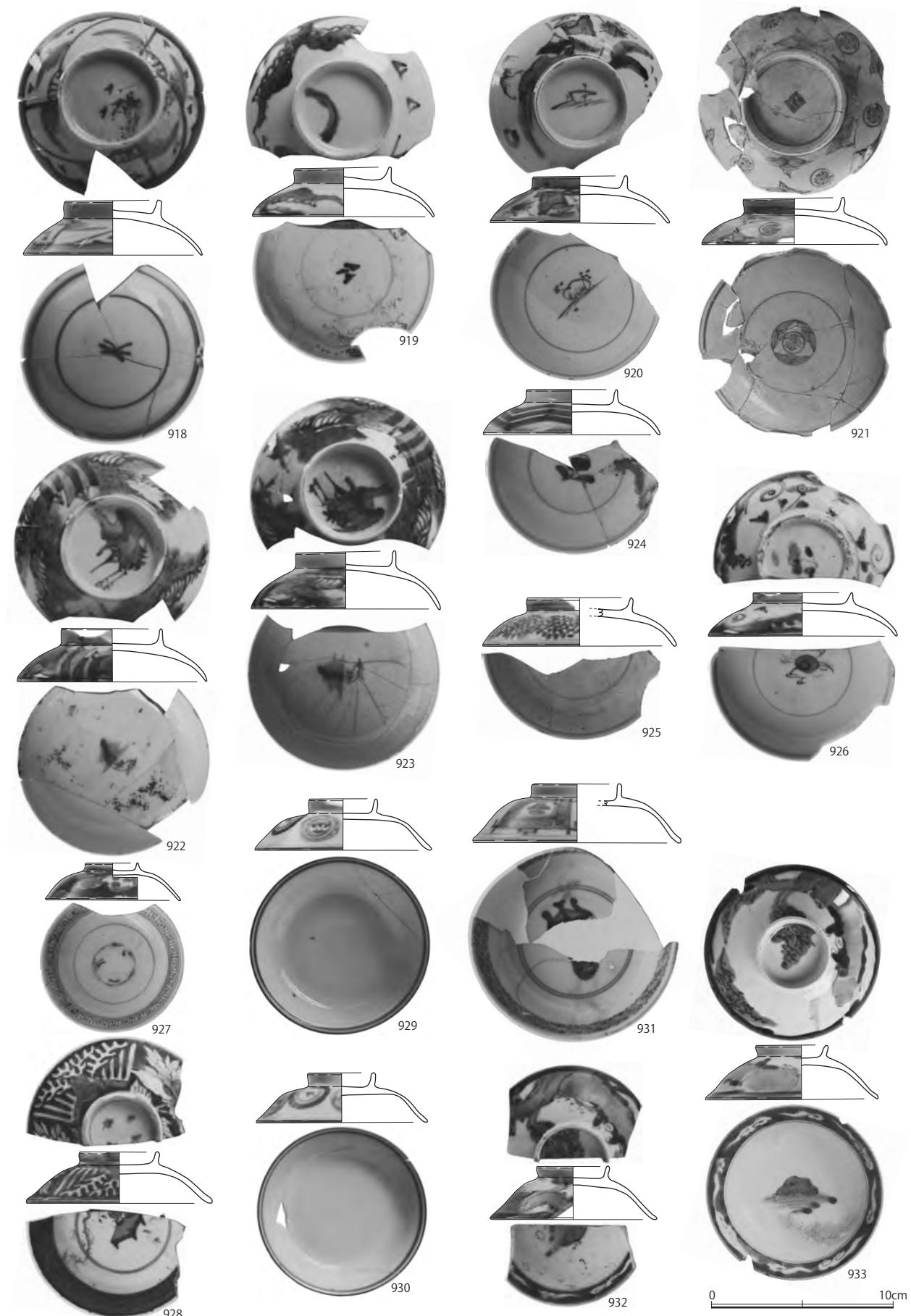
927～945は肥前系磁器の端反碗の蓋である。927は染付により外面に雲文？（部分的に墨弾き）と丸文、口縁部内面に素書の雷文、見込に素書の環状松竹梅文を描く。928は染付により外面に牡丹文と鳳凰文、口縁部内面に墨弾きの如意頭文、見込に不明文様、摘み内に一重圈線内「成化年製」銘を描く。929・930は染付により外面に丸文内舟上人物文と騎馬人物文、口縁部内面に帶線を描く。口縁端部に口紅を施す。931は染付により外面に宝尽くし文、口縁部内面に四方襷文、見込にも文様を描く。焼継が施されている。932・933は外面に染付による樹下人物文、口縁部内面に背景塗埋めの雲文、見込に岩波文を描く。934～936は染付により外面と見込に丸文内草文を描く。934・935は焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。高台の内側に砂が付着する。937は染付により外面に宝文（隠笠文）、口縁部内面に注連縄文、見込に桜花文を描く。938は染付により外面に橘文？と蝶文、口縁部内面に帶線、見込に岩波文を描く。939は染付により外面に花唐草文と蝶文、口縁部内面に雷文、見込に蝶文？と唐草文、摘み内に一重圈線と一重方形枠内「青」字を描く。940は染付により外面に東屋山水文、口縁部内面に烈点文？、見込に「寿」字を描く。941は外面に痕跡のみであるが色絵（赤色・他）による花唐草文？、見込に色絵（赤色）による薊文と蝶文、摘み内に色絵（赤色）による二重方形枠内変形字銘を描く。942は染付により外面に格子文と紅葉文、口縁部内面に帶線、見込に格子目文を描く。943は染付により外面に花唐草文と蝶文、口縁部内面に花唐草文、見込に蝶文、摘み内に一重圈線と一重方形枠内「寿」字を描く。944は染付により外面に青海波文と丸文内雨龍文と雁文、口縁部内面に墨弾きの七宝文、見込に山水文を描く。945は染付により外面に唐花文、口縁部内面に雷文、見込に素書の環状松竹梅文、摘み内に一重圈線と一重方形枠内「青」字を描く。

946～948は肥前系磁器の小広東碗の蓋である。946は染付により外面に「寿」字と蝶文、口縁部内面に圈線、見込に昆虫文と丁子文を描く。呉須の発色は悪い。947は染付により外面に紅葉文、口縁部内面に圈線、見込に「寿」字を描く。948は染付により内外面に松文と鶴文を描く。

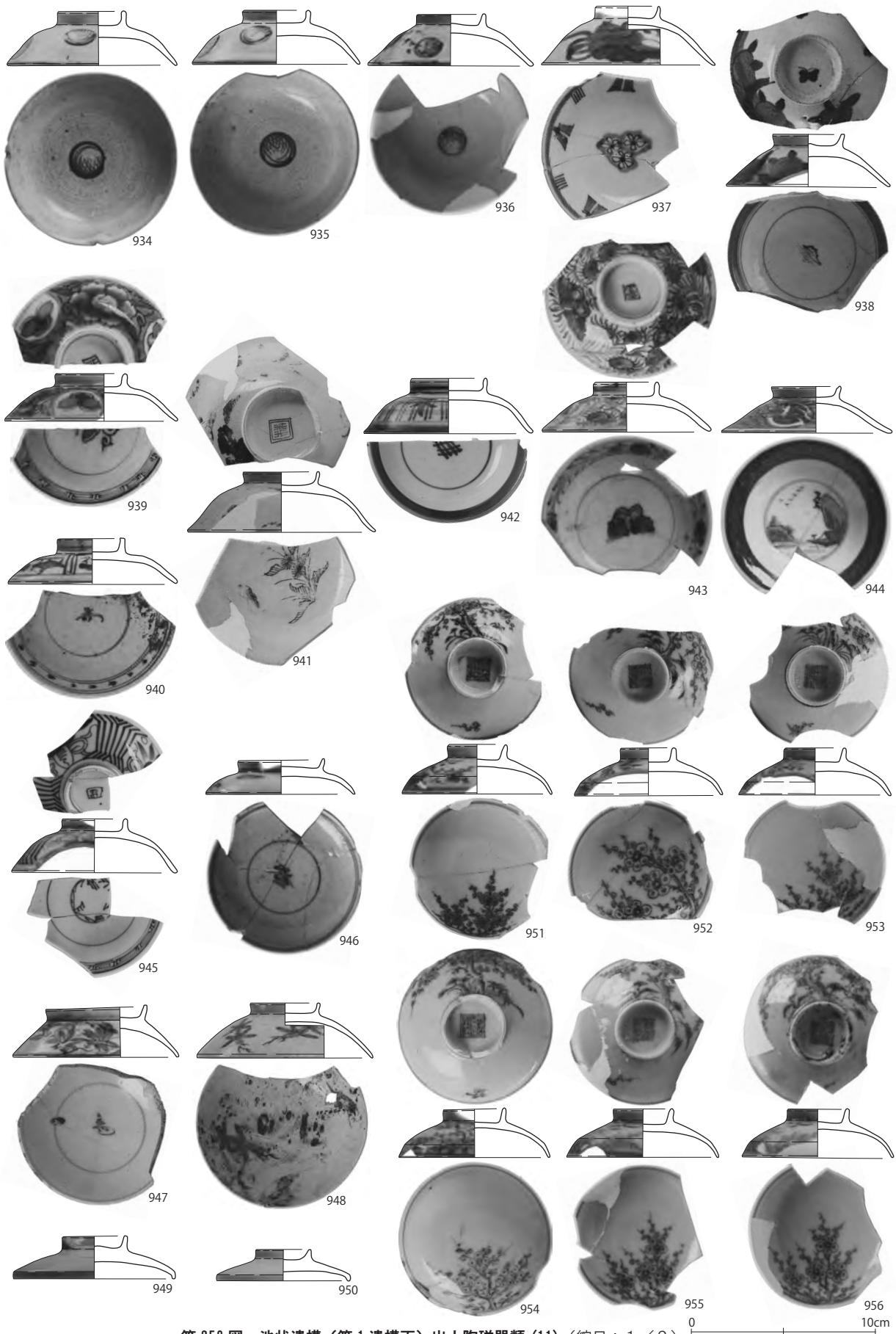
949・950は肥前系磁器の碗の蓋である。白磁。

951～956は肥前系磁器の朝顔形碗の蓋である。染付により外面に素書の松竹梅文、口縁部内面に圈線、内面に素書の梅文、摘み内に「嘉慶？年製」銘を描く。954は口縁部に焼継が施され、摘み内に「廿」の焼継師印がみられる。

957・958は肥前系磁器の御酒徳利である。957は口縁部内面と疊付を除く外面に透明釉をかける。外面に染付による草花文と草文を描く。呉須の発色は悪い。疊付に重ね焼き痕がみられる。958は口縁部内面と疊付を除く外面に透明釉をかける。外面に染付による蛸唐草文を描く。疊付に砂が付着する。



第249図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（10）（縮尺：1／3）



第250図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（11）（縮尺：1／3）

959は肥前系磁器の油壺である。口縁部内面と疊付を除く外面に透明釉をかける。外面に染付による梅文を描く。呉須の発色は悪い。

960～962は肥前系磁器の段重である。960は口縁端部から口縁部内面と腰部の括れ部が無釉である。疊付は施釉される。腰部の露胎部にはアルミナ砂が付着する。外面に染付による山水文と帆掛け舟文と窓絵柳文を描く。961は口縁端部から口縁部内面と腰部の括れ部が無釉である。腰部の露胎部には砂が付着する。外面に染付による背景塗埋めの菊文を描く。962は型押成形により平面形が桃形となる。口縁端部と底部際の括れ部は無釉である。外面に染付による雲文？を描く。

963～966は肥前系磁器の蓋物である。口縁部内面は無釉である。963は外面に素書の文様を描く。疊付に砂が付着する。964は外面に染付による帶線を描く。965は外面に染付と鏽釉による帶線を描く。966は外面に染付による花唐草文と短冊文を描く。

967～971は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。口縁部は無釉で、969・970はアルミナ砂を塗布する。967は外面に染付による墨弾きの波文、染付と鏽釉による円圈文を描く。968は外面に染付による富士山文と樹木文と帆掛け舟文を描く。焼継が施され、内側面に「片山」の焼継師印がみられる。969は外面に色絵（赤色・青色・金色）による蝙蝠文と半菊唐草文、染付による圈線を描く。摘みに金彩を施す。970は外面に染付による草文と岩文を描く。呉須の発色は悪い。971は外面に染付による「嘉」字を描く。

972は肥前系磁器の合子である。蓋受けと底部は無釉で、蓋受けに砂が付着する。外面に染付による山文と波文を描く。

973・974は肥前系磁器の合子の蓋である。973は口縁部が無釉で、砂が付着する。外面に染付による宝珠文と砂金袋文を描く。974は青磁。口縁端部から口縁部内面は無釉である。型押成形により外面に陽刻の梅文と鶯文を施す。

975・976は肥前系磁器の花生である。975は口縁部内面と疊付を除く外面に透明釉をかける。外面に染付による東屋山水文と帆掛け舟文を描く。疊付の内側に砂が付着する。976は全面に青磁釉をかける。疊付と高台内に砂が付着する。

977・978は肥前系磁器の仏飯器である。底部を除き透明釉をかける。977は外面に色絵（赤色・茶色？）による牡丹文を描く。978は外面に染付による蛸唐草文を描く。底部に砂が付着する。

979は肥前系磁器の灰落しである。蛇ノ目凹形高台。内面にも透明釉をかける。外面に染付による竹文を描く。

980は肥前系磁器の香炉・火入である。底部と胴下半部内面から見込は無釉である。口縁部上面に色絵（赤色）による○×文、胴部外面に染付による区画文と窓を描き、その中に色絵（赤色・緑色・他）による牡丹文と草花文と花文を描く。内側面に染付による区画文を描き、その中に色絵（赤色・緑色・他）による花文を描く。底部に「ヘラシ」？の墨書がみられる。見込に砂が多量に付着する。

981は肥前系磁器の戸車である。白磁。両面にアルミナ砂を塗布する。端部をわずかに面取りする。

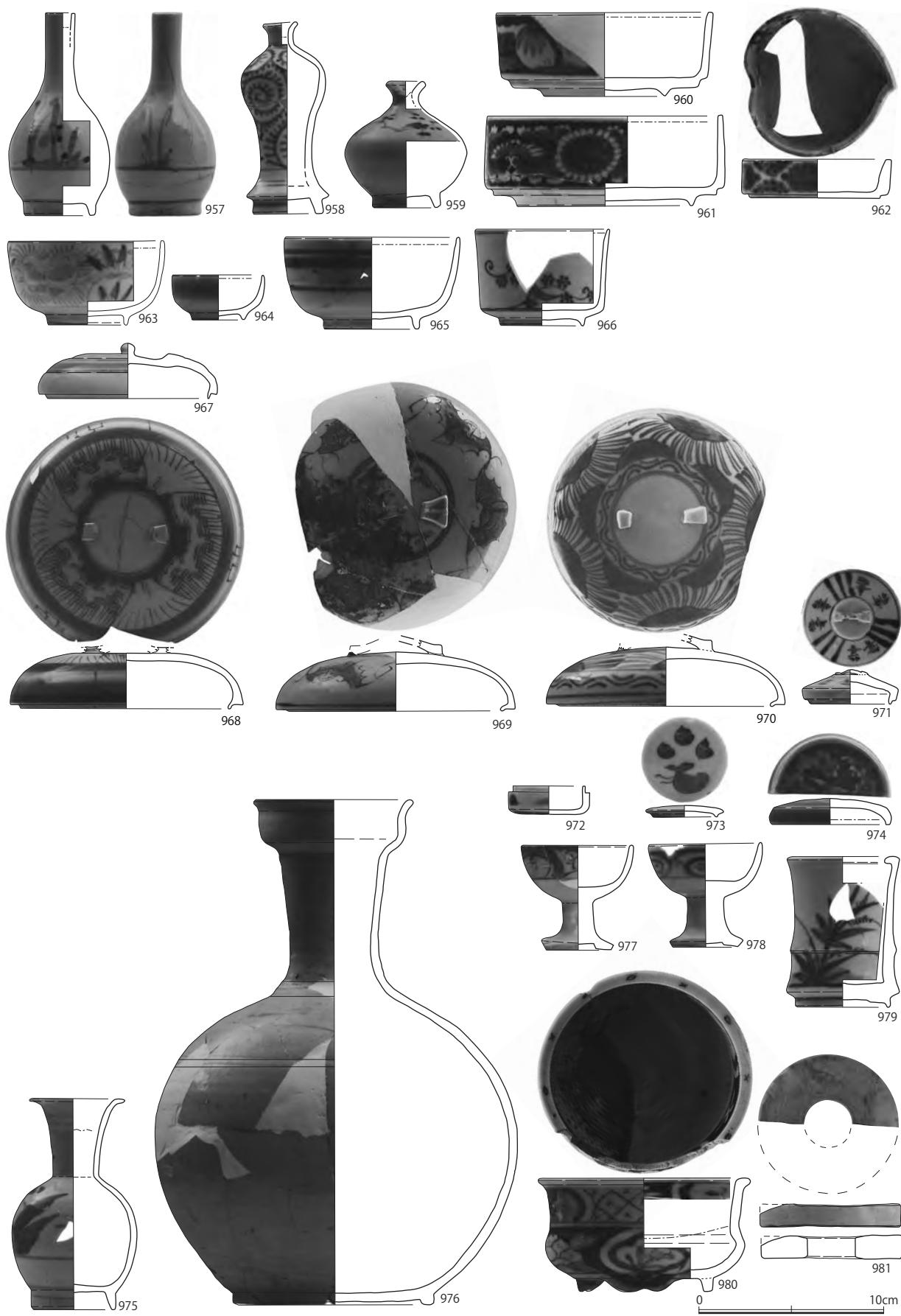
982～999は瀬戸・美濃系磁器の端反碗である。982は青磁染付。内面に染付による靈芝文を描く。983は色絵。外面に草花文（赤色・青色）、見込に雁文（赤色）を描く。口縁端部に赤色の色絵具を施す。984は外面に色絵具（赤色）の搔き落しによる渦文、色絵による紗綾形文（不明色）と文字（痕跡の

み)、見込に雁文(赤色)を描く。口縁端部に赤色の色絵具を施す。985は色絵。外面に朝顔文と瓢箪文と菊文(赤色・黄色・他)、青海波文(赤色)を描く。見込に昆虫文(赤色)を描く。焼継が施され、高台内に「一」の焼継師印がみられる。口縁端部に赤色の色絵具を施す。986は色絵。外面に花文(赤色・青色・緑色・黄色)と青海波文(緑色・赤色)、口縁部内面に圈線(赤色)、見込に雁文(赤色)を描く。口縁端部に赤色の色絵具を施す。987は色絵。外面に蝙蝠文と如意雲文?と櫛齒文(赤色)、「寿」字(痕跡のみ)を描く。見込に「寿」字(赤色)を描く。988は外面に染付による秋草文と鳥文を描く。989は外面に色絵(赤色・青色・緑色)による東屋山水文を描く。口縁端部に赤色の色絵具を施す。990は染付により外面に蝶文、口縁部内面に圈線、見込に文字?を描く。991は外面に染付による松文と笹文を描く。口縁端部に口紅を施す。992は色絵。外面に鶴文と乱れ亀甲文(赤色・他)、見込に不明文様(赤色)を描く。993は染付により外面に桜花文、見込に不明文様を描く。口縁端部に口紅を施す。994は色絵。外面に草花文(赤色・黄色・緑色・黒色)と鼓文(赤色)、口縁部内面に圈線(赤色)、見込に雁文(赤色)を描く。995は染付により外面に松竹梅文、口縁部内面に雷文、見込に折枝松文を描く。996は外面に染付と線彫りによる葵葉文と染付による「實」字?、見込に染付による雁文を描く。口縁端部に口紅を施す。997は染付により外面に松竹梅文、口縁部内面に帶線と圈線、見込に草花文を描く。998は染付により外面に扇面文、口縁部内面に帶線と圈線、見込に雁文?を描く。999は染付により外面に葡萄文?と太湖石文、口縁部内面に渦繋ぎ文、見込に亀文を描く。

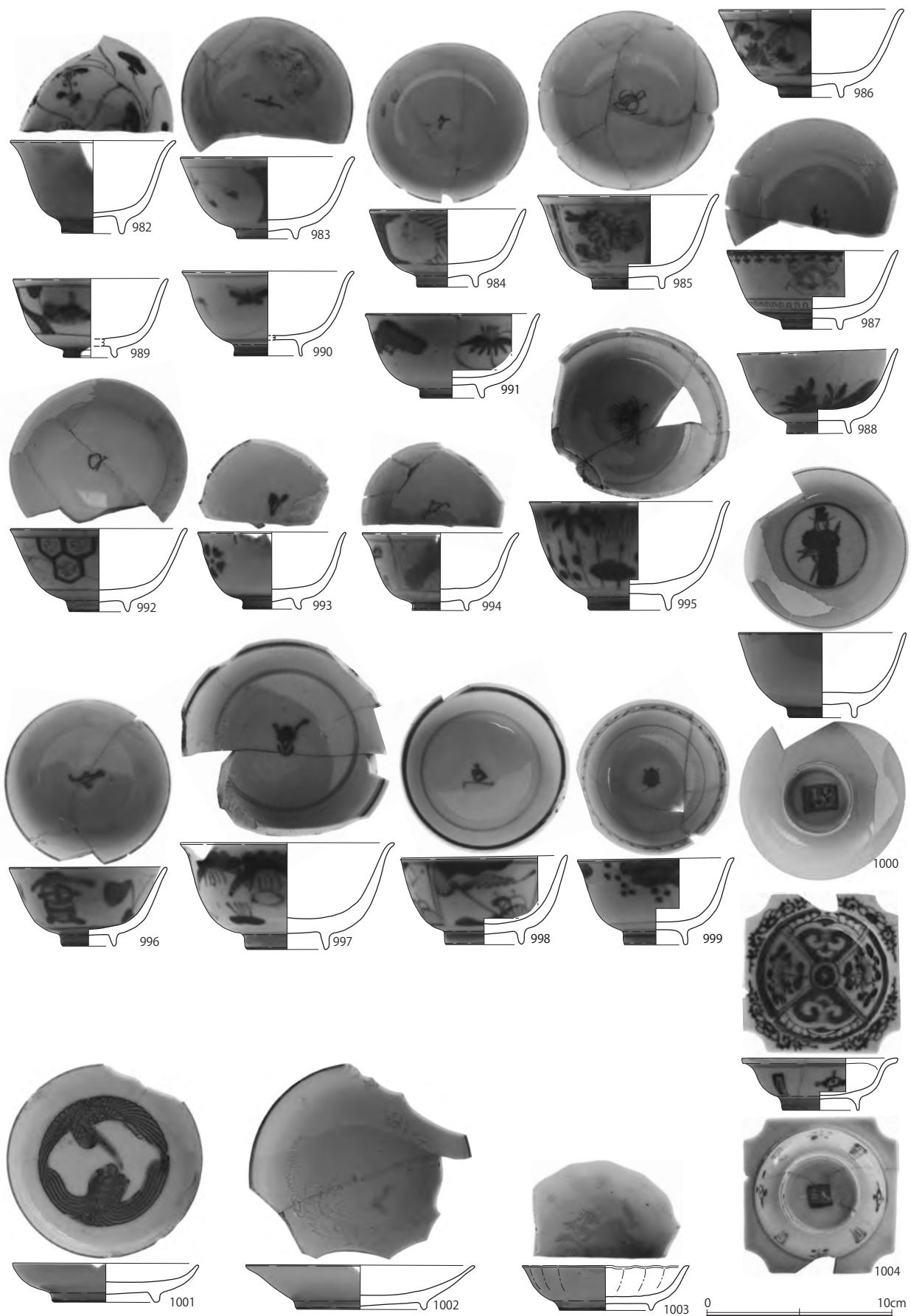
1000は瀬戸・美濃系磁器の丸碗である。染付により外面と口縁部内面に圈線、見込に人物文、高台内に二重方形枠内「大明成化年製」銘を描く。

1001～1020は瀬戸・美濃系磁器の型皿である。1001は見込に型打成形による陰刻の鶴文と亀文を施し、その上から染付ける。口縁端部に口紅を施す。1002は白磁。見込に型打成形による陰刻の龍文を施す。口縁端部に口紅を施す。1003は白磁。型打成形により口縁部は輪花となり、口縁部内面に陽刻の雷文、見込に変形字銘を施す。1004は型打成形。染付により外面に宝文と源氏香文と「米」字文、口縁部内面に花唐草文、内面に牡丹文と如意雲文、高台内に一重方形枠内変形字銘を描く。1005～1008は白磁。型打成形により見込に陰刻の「壽」字を施す、いわゆる「寿文皿」である。1008は疊付にアルミナ砂を塗布すると思われる。1009～1011は白磁。型打成形により見込に陰刻の龍文を施す。1012は糸切り細工成形で、高台は隅入方形の貼り付け高台である。内側面に陽刻の雷文、見込に陽刻の落款文様を施し、その上から染付ける。1013～1015は型打成形により見込に陰刻の落款文様を施し、その上から染付ける。1015は疊付にアルミナ砂を塗布する。1016は糸切り細工成形で、高台は方形の貼り付け高台である。内側面に陽刻の松葉文、見込に陽刻の十字花文を施し、染付ける。1017は白磁。糸切り細工成形で、高台は隅入方形の貼り付け高台である。内側面に陽刻の岩波文、見込に陽刻の唐花文を施す。1018・1019は内面全面に瑠璃釉をかける。糸切り細工成形で、貼り付け高台である。内側面に陽刻の紗綾形文、見込に陽刻の牡丹花文を施す。1020は白磁。糸切り細工成形で、高台は花形の貼り付け高台である。内側面に陽刻の葉文、見込に陽刻の木瓜形窓絵内に天保通宝文を施す。

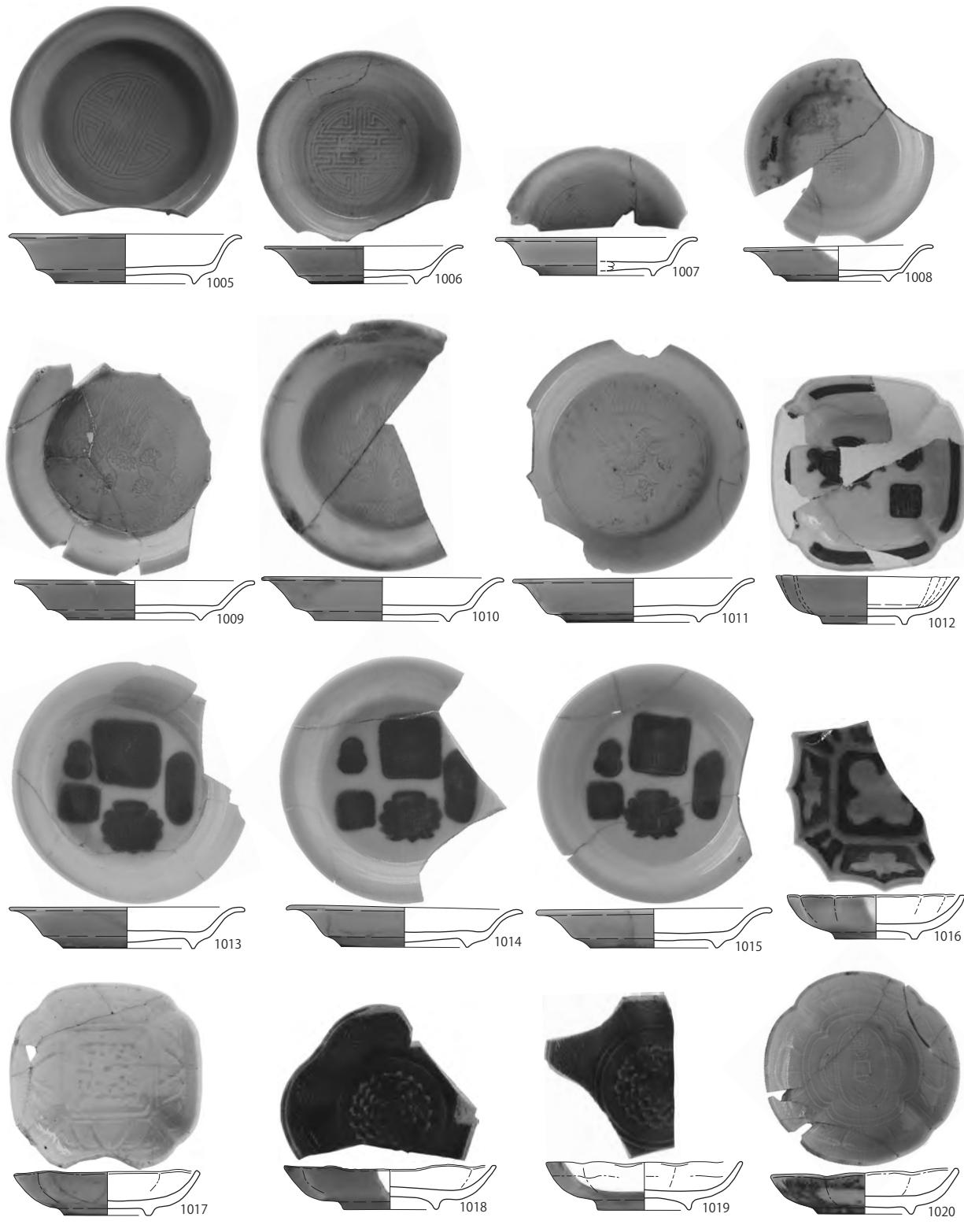
1021～1024は瀬戸・美濃系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿である。染付により外面に唐草文?、内側面と見込に葉文?を描く。高台内の蛇ノ目部分は無釉である。1023は高台内の蛇ノ目部分も粗く透



第251図 池状構造（第1構造面）出土陶磁器類（12）（縮尺：1/3）



第252図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(13)（縮尺：1／3）



0 10cm

第253図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（14）（縮尺：1／3）

明釉をかける。

1025は瀬戸・美濃系磁器の皿である。染付により外面に宝文（蕉葉文）と雁文、口縁部内面に圈線、見込に蛸唐草文と桜花文を描く。

1026は瀬戸・美濃系磁器の皿である。見込に染付による文様がみられるが、焼成不良のため透明釉が白濁し不鮮明である。

1027は瀬戸・美濃系磁器のU字形高台の小皿である。色絵。口縁端部に口紅を施す。内側面に雷文（茶色？）、見込に旅人文（赤色・青色・黄色・黒色・緑色・茶色？）と「立場だん子ハひご□□（「てし」または「とし」）あり」（黒色）、高台内に「までばかん（「い」の誤記）ろのひより有」（黒色）を描く。

1028は瀬戸・美濃系磁器の丸碗形小壺である。外面に染付と線彫りによる葵葉文を描く。

1029～1038は瀬戸・美濃系磁器の端反形小壺である。1029・1030は畳付と高台内を除く外面に瑠璃釉、高台内と内面に透明釉をかける。1029は焼成不良のため透明釉は白濁する。1031は染付により外面に菊文？と一重方形枠内変形字銘、口縁部内面に圈線、高台内に一重圈線内「玩品」の文字を描く。1032は染付により外面と口縁部内面に圈線、見込に一重圈線、高台内に一重圈線と一重方形枠内変形字銘を描く。1033は内面に色絵（青色）による矢羽根文を描く。口縁端部に口紅を施す。1034の残存部に文様はみられない。1035は染付により外面と口縁部内面に圈線、見込に二重圈線、高台内に一重圈線内に銘？を描く。口縁端部に口紅を施す。1036は染付により外面と口縁部内面に圈線、見込に二重圈線を描く。1037は内面に色絵（赤色・黄色・黒色・他）による鶏文？と兎文を描く。口縁端部に赤色の色絵具を施す。1038は染付により外面に草花文？、見込に宝文？を描く。

1039は瀬戸・美濃系磁器の小壺である。色絵（青色）により見込に山水文と帆掛け舟文と雁文、内側面に圈線を描く。胴中部外面に突帯が1条めぐる。

1040は瀬戸・美濃系磁器の小壺である。型打成形で、平面方形となる。色絵（赤色）により外面に金魚文と草花文、口縁部内面に圈線、見込に金魚文、高台内に「大明口（「年」）？造」銘を描く。

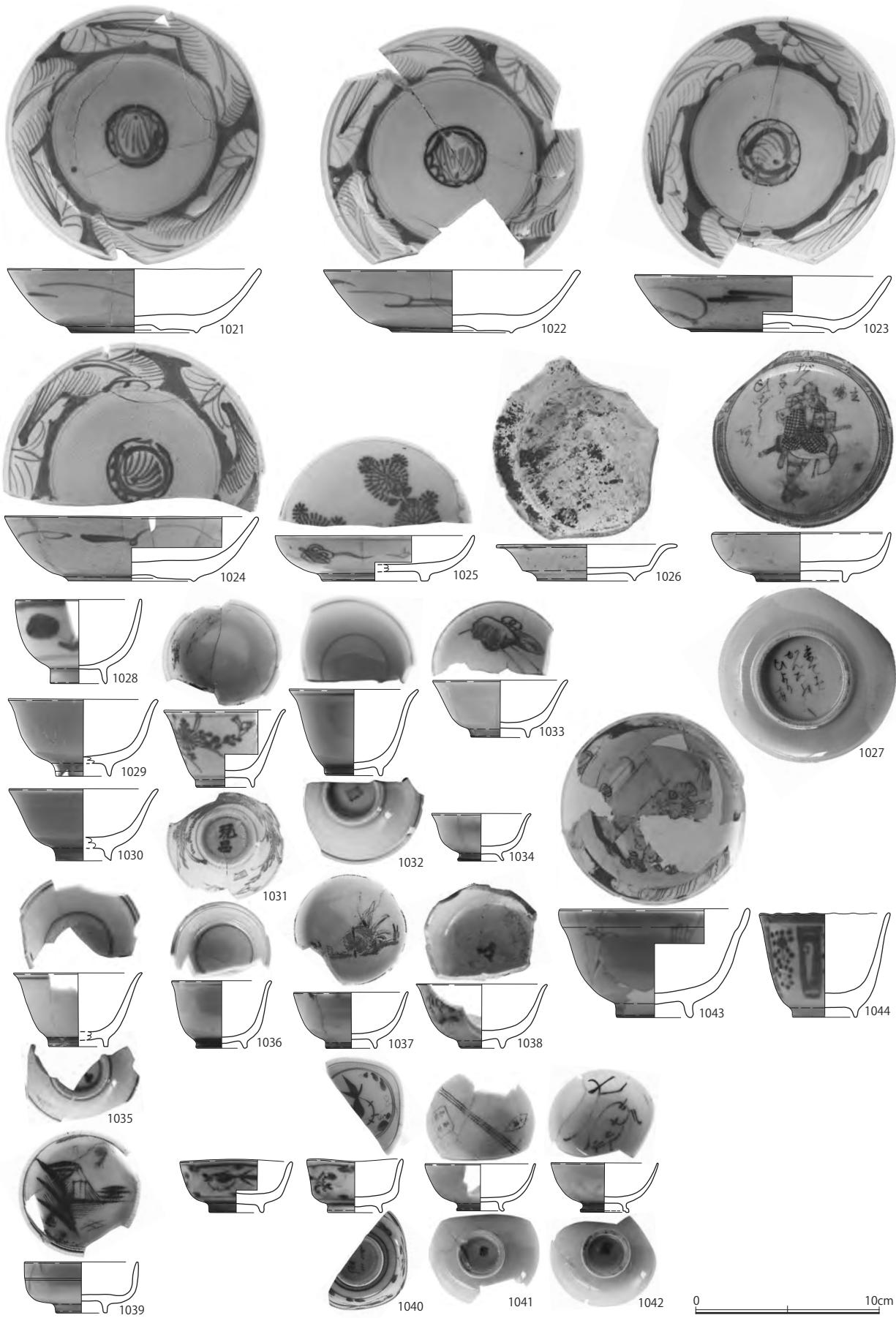
1041・1042は瀬戸・美濃系磁器の薄手酒壺である。1041は染付により外面に鋸歯文、高台内に一重方形枠内「青」字を描く。内面に色絵（青色）による圈線と葉形枠内「小傳」、隅切方形枠内「谷古家様」の文字を描く。畳付に段をもち、畠付際を面取りする。1042は染付により外面に鋸歯文、高台内に一重圈線内変形字銘を描く。内面に色絵（青色が黒色に変色？）による判じ絵を描く。畠付に段をもつ。

1043は瀬戸・美濃系磁器の鉢である。色絵により外面に雁文と源氏香文（赤色）、口縁部内面に雲気文、青海波文、よろけ縞文、鼓文（赤色・黄色・他）を描く。内面に色絵（赤色・青色・黄色・緑色・他）による竹の花生に生けられた花と蝶文を描く。口縁端部に赤色の色絵具を施す。

1044は瀬戸・美濃系磁器の向付である。型打成形で、口縁部は輪花となる。染付により外面に草花文と背景塗埋めの雲文と烈点文、口縁部内面に雷文を描く。口縁部に焼継が施され、高台内に「キ」の焼継師印がみられる。

1045は瀬戸・美濃系磁器の丸碗の蓋である。外面に染付による菊花文、口縁部内面に染付と線彫りによる四方櫻文、見込に染付による「大化年製」銘を描く。

1046～1057は瀬戸・美濃系磁器の端反碗の蓋である。1046は染付により外面に不明文様、摘み内



第254図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（15）（縮尺：1／3）

に「澤山」の文字を描く。1047は染付により外面に葵葉唐草文、口縁部内面に斜格子文、見込に「寿」字を描く。1048は染付により外面・口縁部内面・見込によろけ縞文を描く。1049は染付により外面に草花文と蝶文、摘み内に一重方形枠内「寿」字、口縁部内面に連弧文?、見込に「寿」字を描く。1050は染付により内外面に麦藁手、摘み内に一重方形枠内に銘を描く。1051は染付により外面に竹文、口縁部内面に帶線、見込に火焔宝珠文、摘み内に一重方形枠内変形字銘を描く。1052は染付により外面に扇面文、口縁部内面に帶線と圈線、見込に不明文様を描く。1053は染付により外面に扇面文と四方襷文、口縁部内面に線彫りの四方襷文、見込に「大化年造」銘を描く。1054は染付により外面に花唐草文と墨弾きの如意頭文、口縁部内面に墨弾きの如意頭文、見込に蝶文、摘み内に一重方形枠内変形字銘を描く。1055は染付により外面に扇面文、口縁部内面に雷文、見込に「大化□（「年」）製」銘を描く。1056は染付により外面に草花文と瓔珞文、口縁部内面に帶線、見込にも文様を描く。1057は染付により外面に花唐草文と墨弾きの如意頭文、口縁部内面に墨弾きの如意頭文、見込に草花文、摘み内に一重圈線と一重方形枠内変形字銘を描く。

1058は瀬戸・美濃系磁器の仏飯器である。底部から脚部内面を除き透明釉をかける。外面に染付による半菊花文を描く。

1059は瀬戸・美濃系磁器の水滴である。板作り成形。外面の長側面のうち1側面と内面を除き透明釉をかける。無釉の長側面には墨が塗られる。上面に型押による陽刻の富士山文と雲文を施し、背景を呉須で塗埋める。底部の内外面に布目痕がみられる。

1060は瀬戸・美濃系磁器の紅皿である。外面に染付による草花文を描く。

1061は瀬戸・美濃系磁器の爛徳利である。胴上部内面から底部を除く外面と底部内面に透明釉をかける。外面に染付による瓔珞文と牡丹文と草花文を描く。焼継が施されている。

1062は瀬戸・美濃系磁器の段重である。口縁端部と腰部の括れ部は無釉である。腰部の露胎部にアルミナ砂を塗布する。外面に染付による葡萄文を描く。

1063は瀬戸・美濃系磁器の筆立て?である。外面に染付によるよろけ縞文を描き、透彫りを施す。焼継が施されている。

1064は瀬戸・美濃系磁器の蓮華である。型押成形。底部を除き透明釉をかける。染付により外面に草花文?、内面に梅花文と唐草文を描き、型押による陽刻の蝶文を貼り付ける。底部に「□次」の墨書きがみられる。

1065～1069は関西系磁器の端反碗である。1065は青磁。高台の釉際処理は不揃いで、露胎部は橙色を呈する。1066は外面に染付による山水文と樹木文と鹿文?を描く。疊付際を面取りする。1067は色絵により外面に草花文と花文（赤色・青色・緑色・黄色）、口縁部内面に渦繋ぎ文（赤色）、見込に雁文（赤色）を描く。口縁端部に赤色の色絵具施す。高台の釉際露胎部は橙色を呈する。1068は疊付から高台内が無釉である。見込に染付による瓢箪文?を描く。蛇ノ目高台。1069は染付により外面に松竹梅文と鶴文と雲文、口縁部内面に四方襷文、見込に素書の唐花文、高台内に二重方形枠内変形字銘を描く。

1070・1071は関西系磁器の皿である。1070は青磁。幅広高台。1071は疊付と高台内を除き青磁釉、高台内に透明釉をかける。高台内に一重方形枠内変形字銘を描く。幅広高台。

1072～1075は関西系磁器の型皿である。青磁。1072は内型の型押成形により内側面に陰刻の雲文、見込に陰刻の花文を施す。高台の釉際処理は不揃いで、露胎部は橙色を呈する。貼付高台。1073は内型の型押成形により内側面に陽刻の牡丹唐草文、見込に陽刻の蝶文を施す。貼付高台。1074は内型の型押成形により見込に陽刻の双魚文を施す。文様部分は露胎で橙色を呈する。貼付高台。1075は糸切り細工成形で、貼り付け高台である。畳付露胎部は橙色を呈する。見込に陽刻の草花文を施す。

1076・1077は関西系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿である。染付により外面に笹文、口縁部内面に雷文、内面に丸文（騎馬人物文、樹下人物文、墨弾きの青海波文）、蝙蝠文、墨弾きの雲文を描く。高台内の蛇ノ目部分は無釉で、1076は重ね焼き痕がみられ、1077は環状に砂が付着する。

1078～1080は関西系磁器の輪花一枚絵皿である。型打成形により口縁部は輪花となり、見込に陽刻の葵葉文と蝶文を施し、その上から染付ける。

1081～1083は関西系磁器のU字形高台の小皿である。1081は染付により外面に宝文、口縁部内面に圈線、見込に雨龍文、高台内に一重圈線と二重方形枠内「青」字を描く。焼継が施され、高台内に「山」の焼継師印がみられる。1082は染付により外面に雲文、内側面に梅花文と氷裂文、見込に「章武年製」銘、高台内に一重方形枠内「福」字？を描く。1083は染付により外面に唐草文、口縁部内面に圈線、見込に水鳥文と流水文と桜花文、高台内に一重圈線と二重方形枠内「嘉」字？を描く。

1084は関西系磁器の薄手酒杯である。染付により外面に櫛歯文、高台内に一重方形枠内変形字銘を描く。内面に色絵（青色・金色）による牡丹文と「松風亭 梅月」の文字、一重方形枠内「梅月」の銘を描く。畳付に段をもつ。

1085は関西系磁器の小杯である。口縁部内面に金彩による帶線、内面に色絵（青色）による山水文と帆掛け舟文と中国の故事「姜詩 きょうし 湧泉躍鯉」ゆうせん やくり（金彩）を描く。畳付に段をもつ。

1086～1088は関西系磁器の端反形小杯である。1086は染付により外面に草花文？と蝙蝠文？、高台内に一重方形枠内「寿」字？を描く。1087は蛇ノ目高台。内外面に染付による網目文を描く。1088は染付により外面と口縁部内面に圈線、高台内に二重方形枠内変形字銘を描く。

1089・1090は関西系磁器の小杯である。高台外面から畳付は無釉で、露胎部は橙色を呈する。染付により外面に椿文、牡丹文？、蝶文、鳥文、鋸歯文、口縁部内面に松文と橋上人物文と舟文を描く。

1091・1092は関西系磁器の丸碗の蓋である。1091は外面に染付による藤文？を描く。1092は染付により外面に雲龍文、見込にも文様を描く。高台の釉際露胎部は橙色を呈する。

1093～1097は関西系磁器の端反碗の蓋である。1093・1094は染付により外面に朝顔文？、口縁部内面に渦繋ぎ文、見込に亀文を描く。呉須の発色は悪い。1095は染付により外面に草花文？、口縁部内面に省略した四方襍文、見込に「寿」字を描く。1096は染付により外面に蝙蝠文、口縁部内面に圈線、見込に「化成年製」銘、摘み内に二重圈線を描く。1097は色絵（赤色）により外面に窓絵、摘み内に一重方形枠内変形字銘、見込にも文様を描く。口縁端部に赤色の色絵具を施す。高台の釉際露胎部は橙色を呈する。

1098は関西系磁器の蓋である。青磁。口縁部内外面は無釉で、露胎部は橙色を呈する。

1099は肥前系陶器の京焼風碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に呉須？による山水文を描く。畳付際を面取りする。

1100・1101は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。1100は外面に染付による草花文を描く。高台の内側に砂が付着する。1101は外面に染付による松文を描く。畳付の内側に砂が付着する。

1102は肥前系陶器の三島手の碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。印花内に黒色の化粧土を充填する。

1103は肥前系陶器の銅緑釉皿である。胴下半部から高台内を除く外面に透明釉、内面に銅緑釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。

1104は肥前系陶器の京焼風皿である。畳付を除き内外面に灰釉をかける。見込の一部は白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。

1105は肥前系陶器の灰釉溝縁皿である。口縁部外面から内面全面に灰釉をかける。見込と畠付に砂目がみられる。

1106・1107は肥前系陶器の土瓶または急須の蓋である。型押成形した亀形の体部に手捏ね成形の足を貼り付けた摘みをもつ。1106は外面に灰釉をかけ、刷毛目装飾である。底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。1107は外面に鉄釉をかけ、刷毛目装飾である。口縁部内面に白化粧土を塗布する。底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1108は肥前系陶器の灰落しである。外面に鉄釉を流し掛ける。底部に焼成後の穿孔がみられ、植木鉢に転用したと思われる。

1109・1110は瀬戸・美濃系陶器の柳茶碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。1109は柳文が描かれた部分を欠損していると思われる。1110は外面に鉄絵による柳文を描く。見込にも鉄絵?がみられる。畠付際をわずかに面取りする。

1111は瀬戸・美濃系陶器の太白手碗である。畠付を除き透明釉をかける。外面に染付による斜格子文と松竹文、線彫りによる圈線を描く。

1112は瀬戸・美濃系陶器の半筒形碗である。胴下半部外面から高台内を除きに鉄釉(黒釉)をかける。

1113は瀬戸・美濃系陶器の腰錆碗である。体部上半外面と内面に灰釉、体部下半外面から高台内に錆釉をかけ、畠付を釉剥ぎする。胴中部外面に沈線を施す。

1114は瀬戸・美濃系陶器の拳骨茶碗である。高台と高台内を除き鉄釉(黒釉)をかけ、胴部外面に長石釉を散らす。高台内は鉄釉をかける。

1115は瀬戸・美濃系陶器の端反碗である。白化粧土を口縁部外面から内面全面に塗布したのち、畠付を除く内外面に灰釉をかける。外面に白化粧土のイッチン描と鉄釉による雲文と波文と連弧文を描き、刺突文を施す。

1116～1118は瀬戸・美濃系陶器の灰釉大皿である。慣用名「石皿」。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。見込に円錐ピン痕がみられる。

1119は瀬戸・美濃系陶器の皿である。高台と高台内を除き長石釉をかけ、内面に緑釉と鉄釉を掛け分ける。鉄絵により外面に「米」字文、見込に記号のような文様を描く。口縁部は内面に押圧を加えることにより輪花となる。復興織部。

1120は瀬戸・美濃系陶器の馬目皿である。見込に円錐ピン痕がみられる。高台内に墨で菊花文を描く。

1121 は瀬戸・美濃系陶器の皿である。型押成形で、内面に布目痕がみられる。外面に緑釉をかけ、内面は緑釉と長石釉？を掛け分ける。見込に鉄絵による菊花文を描く。復興織部。

1122・1123 は瀬戸・美濃系陶器の灰釉丸皿である。1122 は高台脇から畳付を除き灰釉をかける。1123 は口縁部外面から内面全面に灰釉をかける。

1124・1125 は瀬戸・美濃系陶器の型打皿である。1124 は型打成形により口縁部は輪花となる。畠付を除く内外面に鉄釉（飴釉）をかける。内側面に陽刻の波文、見込に陽刻の花文を施す。1125 はタタラ型打成形により口縁部は輪花となる。貼り付け高台。高台脇から高台内を除き灰釉をかけ、内側面に緑釉を流し掛ける。見込に鉄絵による薄文？を描く。

1126 は瀬戸・美濃系陶器の輪花皿である。畠付を除き灰釉をかける。

1127 は瀬戸・美濃系陶器の黄瀬戸皿である。全面に灰釉（黄瀬戸釉）をかける。見込に印花による菊花文を施す。高台内に砂が環状に付着する。

1128 は瀬戸・美濃系陶器の刷毛目皿である。畠付を除く内外面に灰釉をかける。内外面に刷毛目を施す。

1129 は瀬戸・美濃系陶器の皿である。畠付を除き長石釉をかける。見込と高台内に円錐ピン痕がみられる。見込に型紙の上から鉄釉を霧状に吹き付け笛文を施す。

1130 は瀬戸・美濃系陶器の向付である。畠付を除く内外面に灰釉をかけ、緑釉を流し掛ける。鉄絵により内側面に植物文？、見込に五弁花文を描く。口縁部は指で押さえ輪花となり、端部に口紅を施す。復興織部。

1131 は瀬戸・美濃系陶器の鉢である。慣用名「笠原鉢」。畠付から高台内を除き灰釉をかける。内面に鉄絵による葦文を描く。

1132 は瀬戸・美濃系陶器の鉢である。見込に円錐ピン痕がみられる。畠付を除く内外面に灰釉をかける。内外面に刷毛目を施す。

1133 は瀬戸・美濃系陶器の向付である。内外面に長石釉をかける。外面と見込に鉄絵を描く。口縁部は押圧により変形する。

1134・1135 は瀬戸・美濃系陶器の鉢である。底部を除き長石釉をかける。見込に円錐ピン痕がみられる。鉄絵により内側面に半菊花文、見込に草花文を描く。口縁端部に口紅を施す。

1136 は瀬戸・美濃系陶器の瓶である。慣用名「高田徳利」。削り込み高台で、口縁部は折り返す。底部外面を除く内外面に灰釉をかけ、口縁端部は釉剥ぎする。肩部外面に浅い沈線がめぐる。

1137 は瀬戸・美濃系陶器の練鉢・捏鉢である。胴下部外面から底部を除き灰釉をかける。見込に团子トチン痕がみられる。

1138・1139 は瀬戸・美濃系陶器の片口である。注口は欠損する。高台と高台内を除き灰釉をかけ、見込に円錐ピン痕がみられる。1138 の高台内に「匁キ」の墨書がみられる。

1140 は瀬戸・美濃系陶器の壺である。口縁端部と胴下部から高台内を除く外面に灰釉をかける。胴中部内面に鉄錆状物質が付着する。お歯黒壺と思われる。

1141～1143 は瀬戸・美濃系陶器の植木鉢である。1141・1142 は底部を除く外面に灰釉をかける。1142 は高台に U 字形の切れ込みが 1 箇所みられる。1143 は底部を除く外面に鉄釉をかける。高台に

U字形の切れ込みが1箇所、高台内に墨書がみられる。

1144は瀬戸・美濃系陶器の水甕である。高台と高台内を除き灰釉をかけ、外面に鉄釉と緑釉を流し掛ける。見込に団子トチン痕がみられる。

1145は瀬戸・美濃系陶器の小壺である。胴下半部外面から底部を除き長石釉をかける。胴部外面の露胎部に「六一」、高台内に「青」字の墨書がみられる。

1146・1147は瀬戸・美濃系陶器の花生である。1146は体部上半内外面に灰釉、体部下半外面に鉄釉を掛け分ける。底部外面に右回転の糸切り離し痕がみられる。1147は型押成形で、口縁部外面下に耳を貼り付けていたと思われる。口縁端部を除く内外面に灰釉をかける。

1148は瀬戸・美濃系陶器の甕である。高台と高台内を除き鉄釉（柿釉）をかけ、外面に灰釉を流し掛ける。底部内面に団子トチン痕がみられる。

1149は瀬戸・美濃系陶器の溲瓶である。底部を除く外面に灰釉をかける。内面にも薄く粗く灰釉をかける。内面に鉄鑄状物質がわずかに付着する。

1150は瀬戸・美濃系陶器の蓋である。外面に鉄釉をかけ、灰釉を流し掛ける。

1151は瀬戸・美濃系陶器の鉢形容器である。高台脇から高台内を除く外面に灰釉をかける。内面に鉄鑄状物質、外面露胎部にススが付着する。お歯黒碗として使用されたものと思われる。

1152は瀬戸・美濃系陶器の擂鉢である。胴下部外面から高台内を除き鉄釉をかけ、高台内に鉛釉をかける。

1153・1154は瀬戸・美濃系陶器の灯明具である。台皿の外面を除き灰釉をかけ、円筒形受皿の口縁端部は釉剥ぎする。削り込み高台。

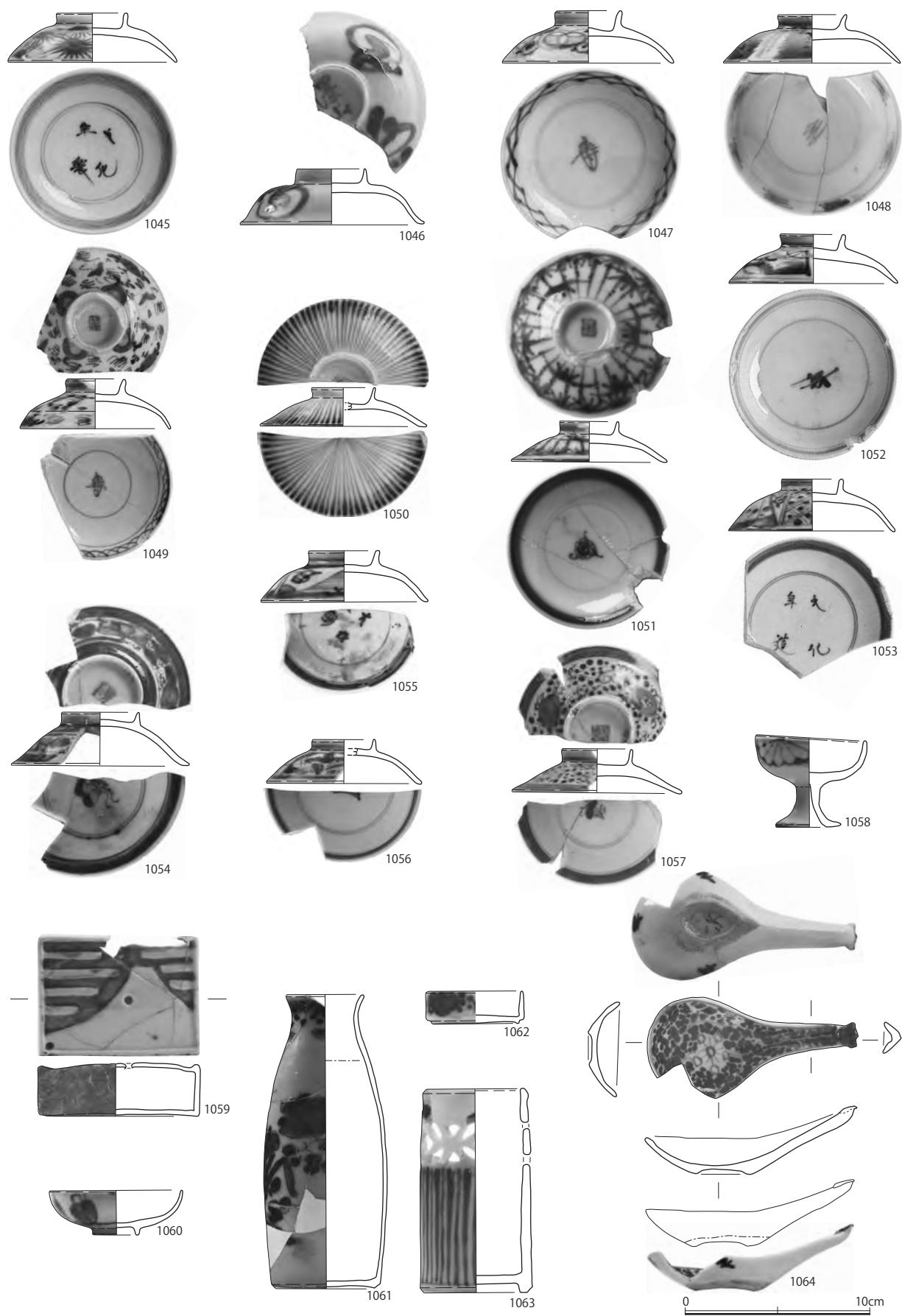
1155は瀬戸・美濃系陶器の火鉢・焜炉類である。底部を除く外面に灰釉をかけ、白釉と緑釉を流し掛ける。底部外面に鉛釉を化粧掛けし、内面に刷毛掛けする。外面に丸ノミ状工具による陰刻の桐文を施す。ボタン状の三足の脇に貫通しない穿孔がみられる。底部内面に重ね焼き痕がみられる。池状遺構（第1遺構面）埋土最上層とSD22の破片と接合する。

1156は瀬戸・美濃系陶器の火鉢・焜炉類である。慣用名「風炉」。底部を除く外面と胴上半部内面に白化粧土を塗布したのち灰釉をかけ、外面に白釉と緑釉を流し掛ける。底部外面と胴下半部内面に鉛釉をかける。ボタン状の三足の脇に貫通する穿孔があり、底部内面から粘土でふさいでいる。

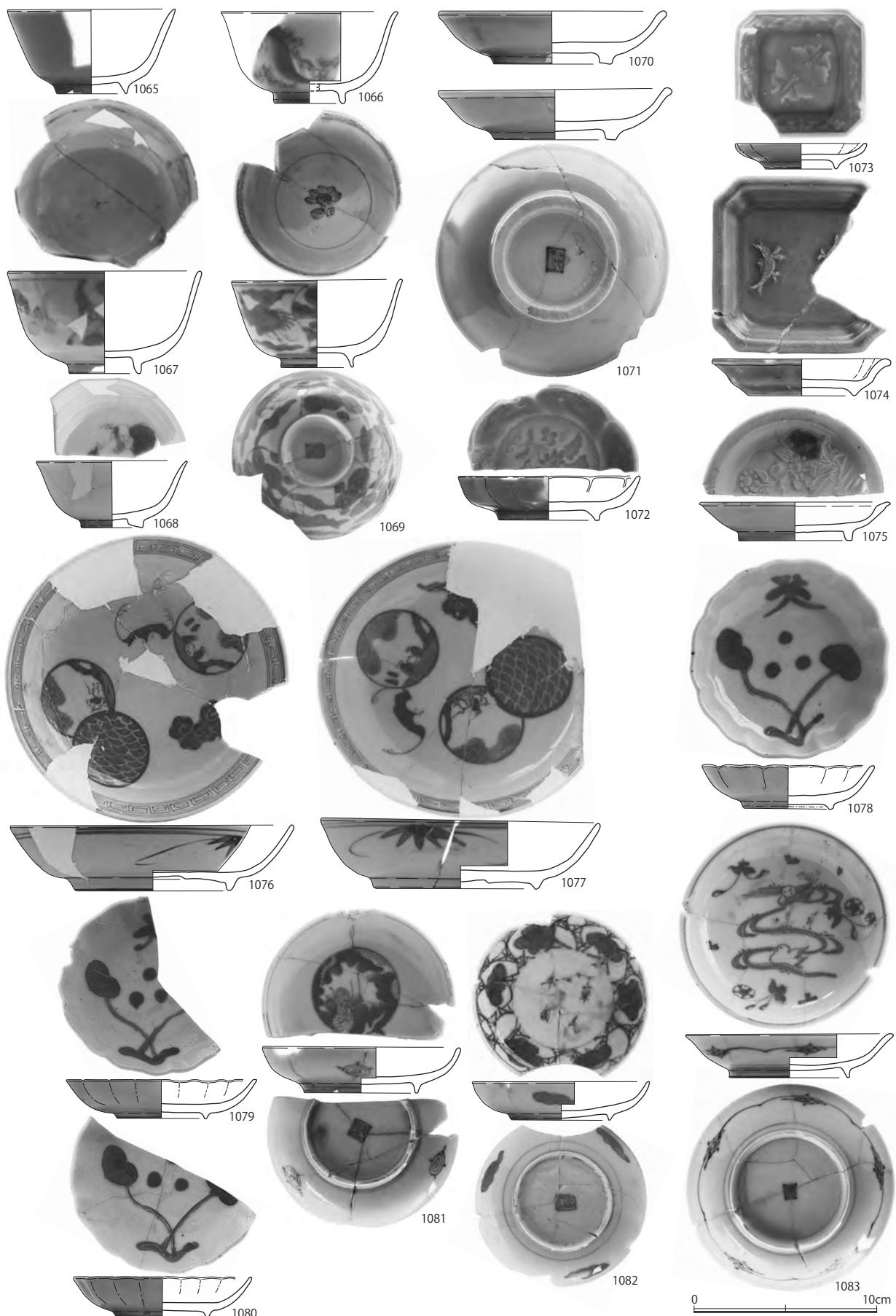
1157は瀬戸・美濃系陶器の火鉢・焜炉類である。慣用名「風炉」。底部を除く外面と胴上半部内面に白化粧土を塗布したのち灰釉をかけ、外面に白釉と緑釉を流し掛ける。底部外面と胴下半部から底部内面に鉛釉をかける。底部内面に目跡、外面に環状の砂の付着がみられる。ボタン状の三足の脇に貫通する穿孔があり、底部内面から粘土でふさいでいる。

1158は瀬戸・美濃系陶器の火鉢・焜炉類である。慣用名「風炉」。胴下部から底部内面を除き長石釉をかける。底部外面は粗く施釉する。外面に鉄絵による雪輪文を描く。内側面の露胎部に「リチナ」？の墨書、底部外面に団子トチン痕がみられる。

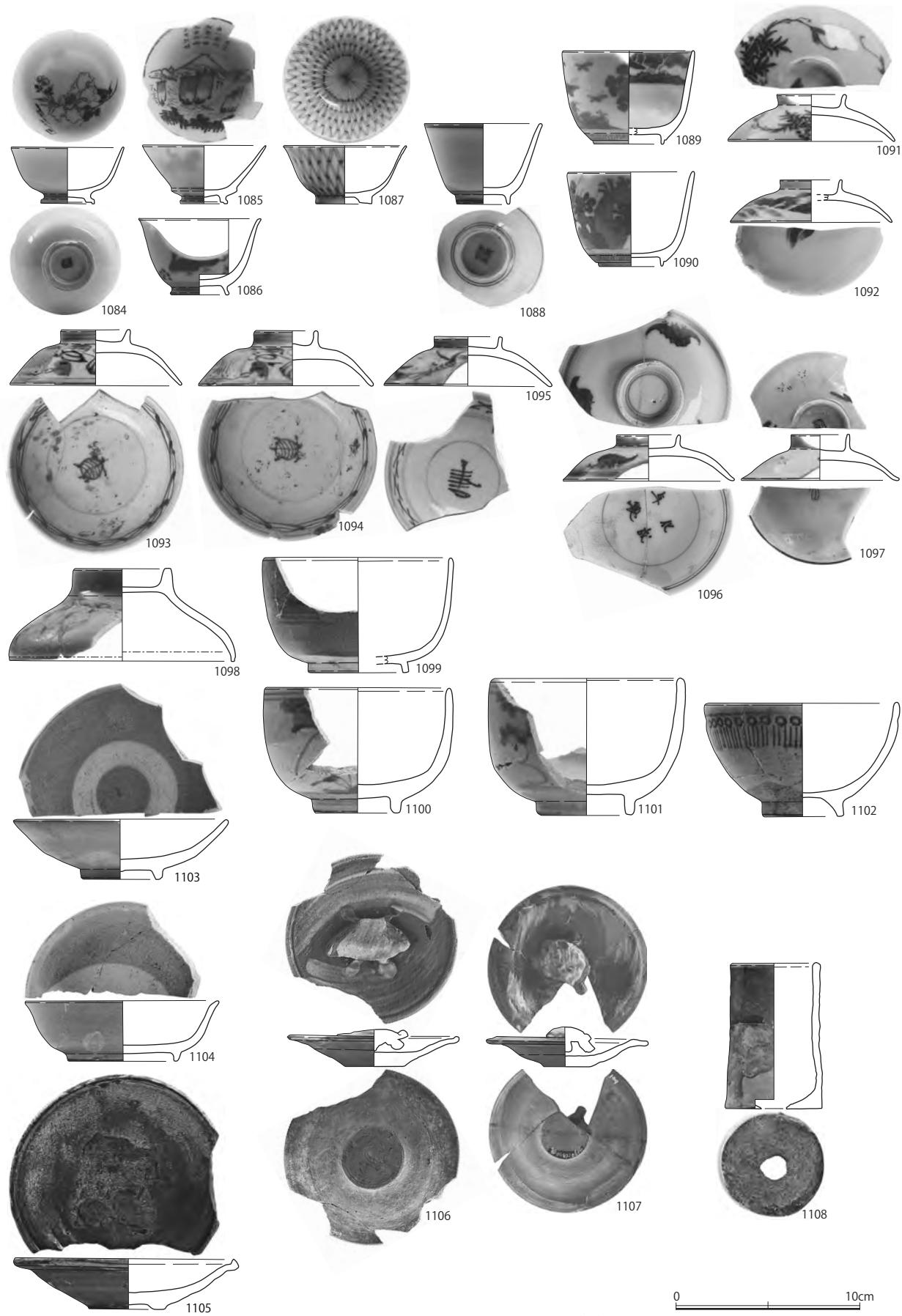
1159は瀬戸・美濃系陶器の手水鉢である。高台脇から高台内を除く内外面に灰釉をかけ銅緑釉を流し掛ける。疊付を除く高台と高台内には鉛釉をかける。見込に団子トチン痕、口縁部外面に3箇所の押圧がみられる。



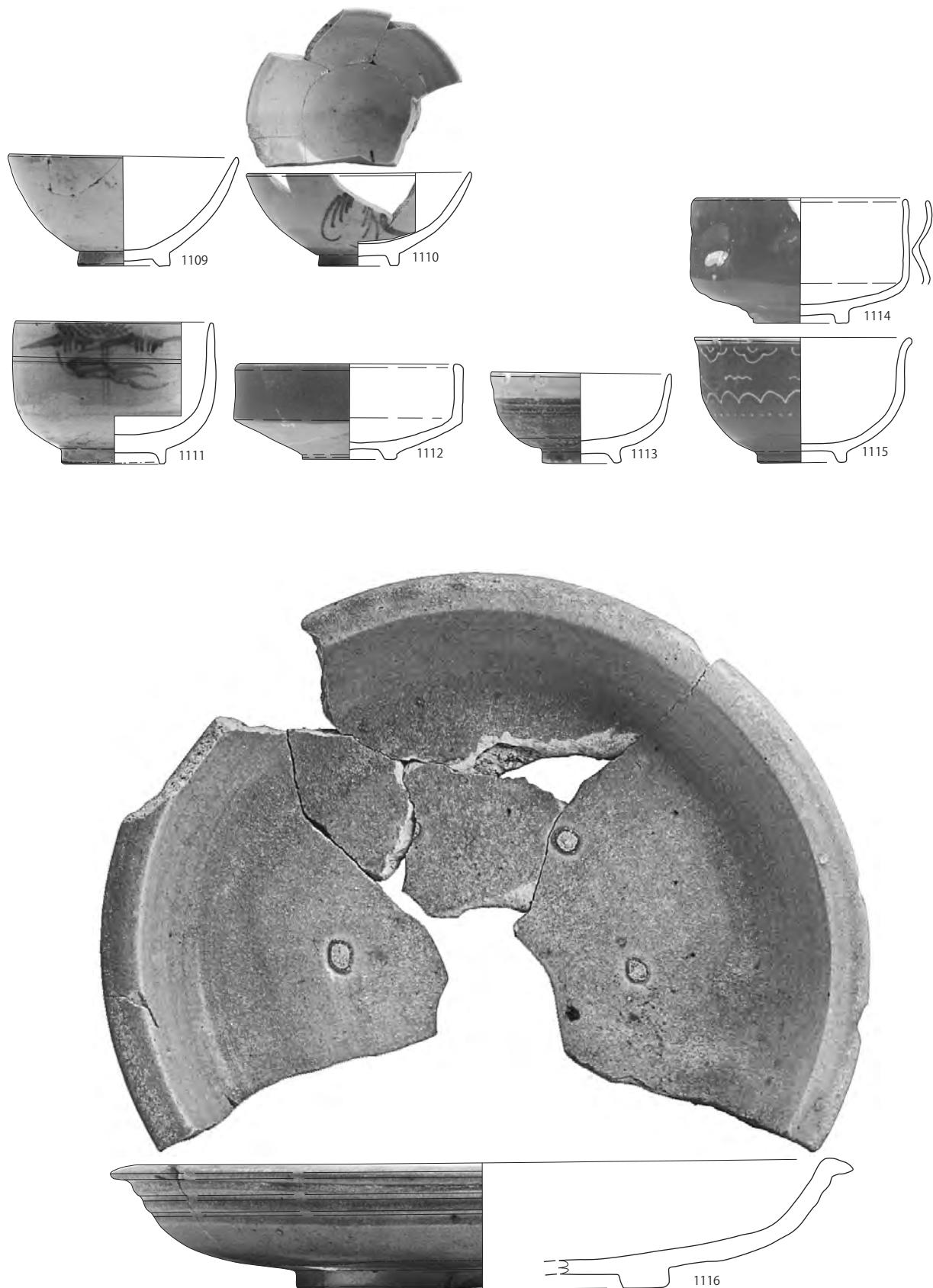
第255図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（16）（縮尺：1/3）



第256図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（17）（縮尺：1／3）

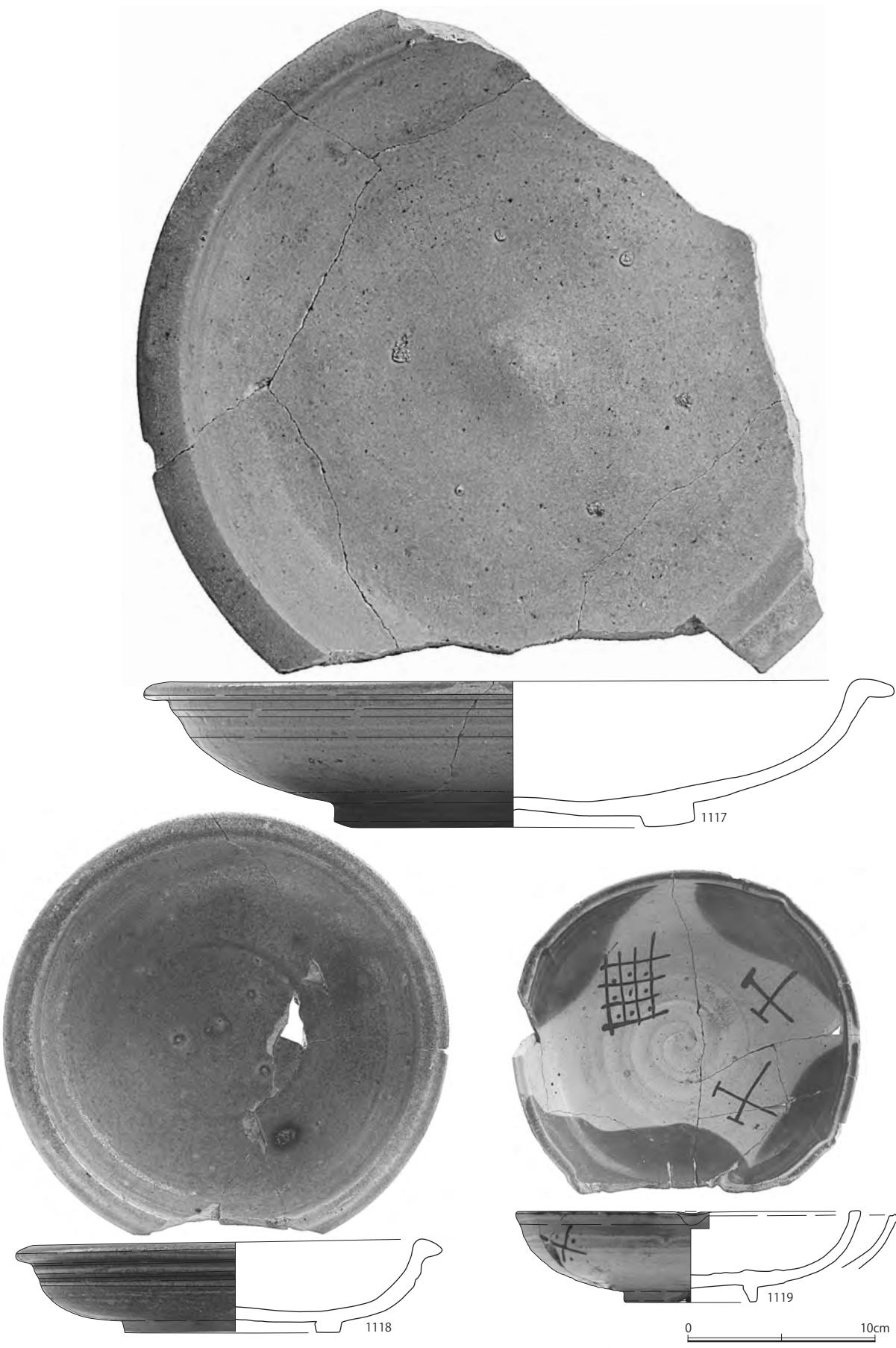


第257図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（18）（縮尺：1／3）

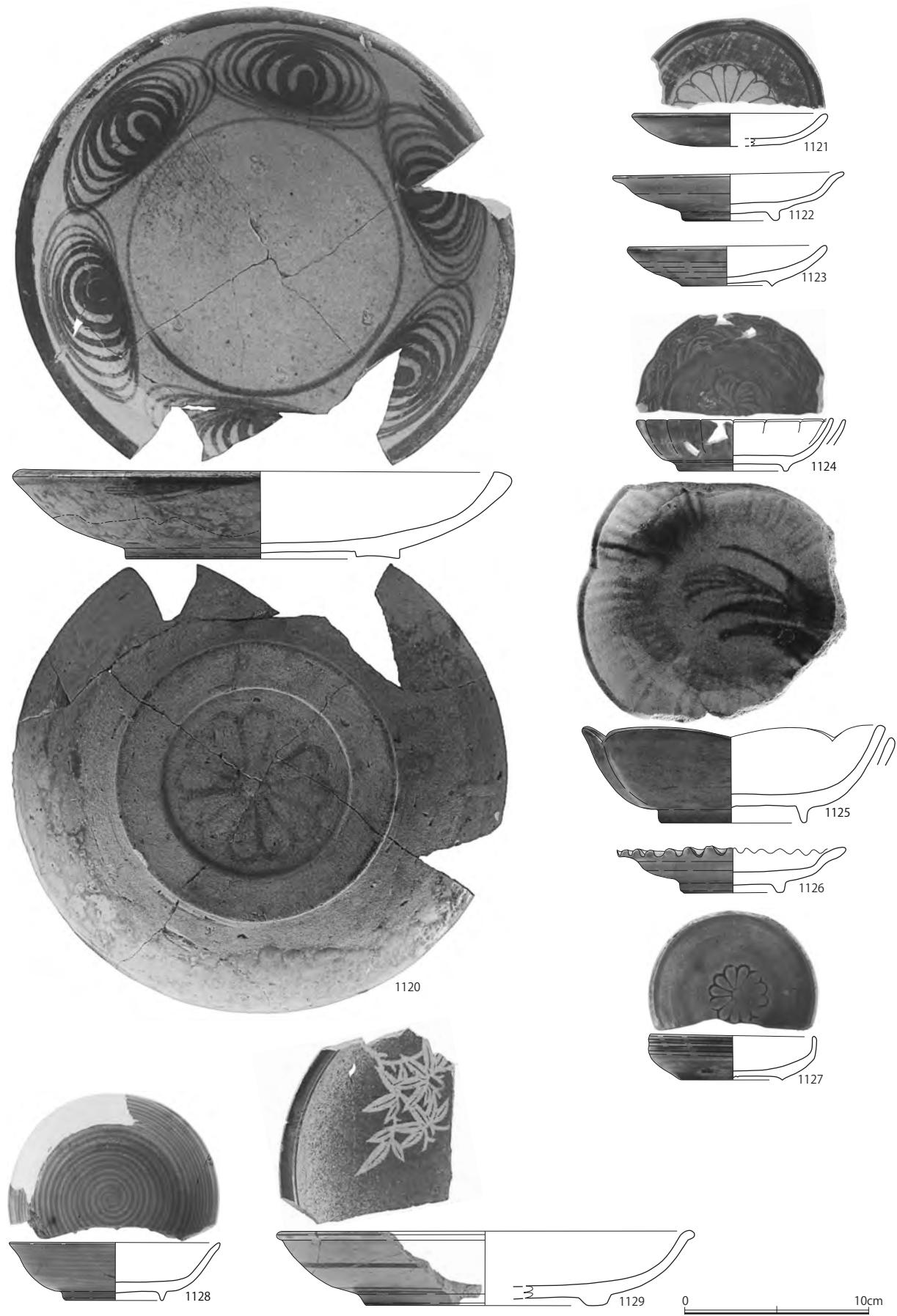


第258図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（19）（縮尺：1/3）

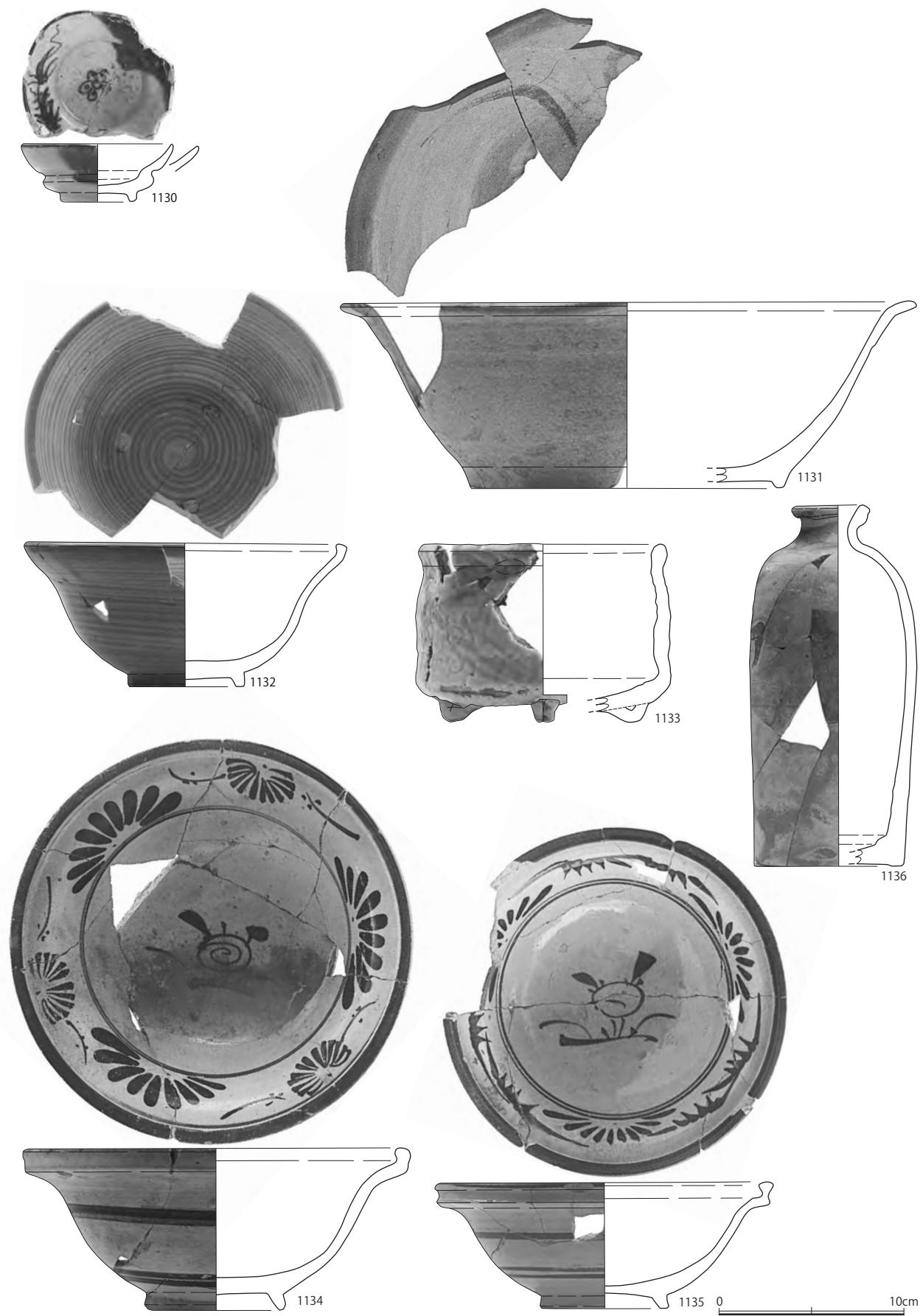
0 10cm



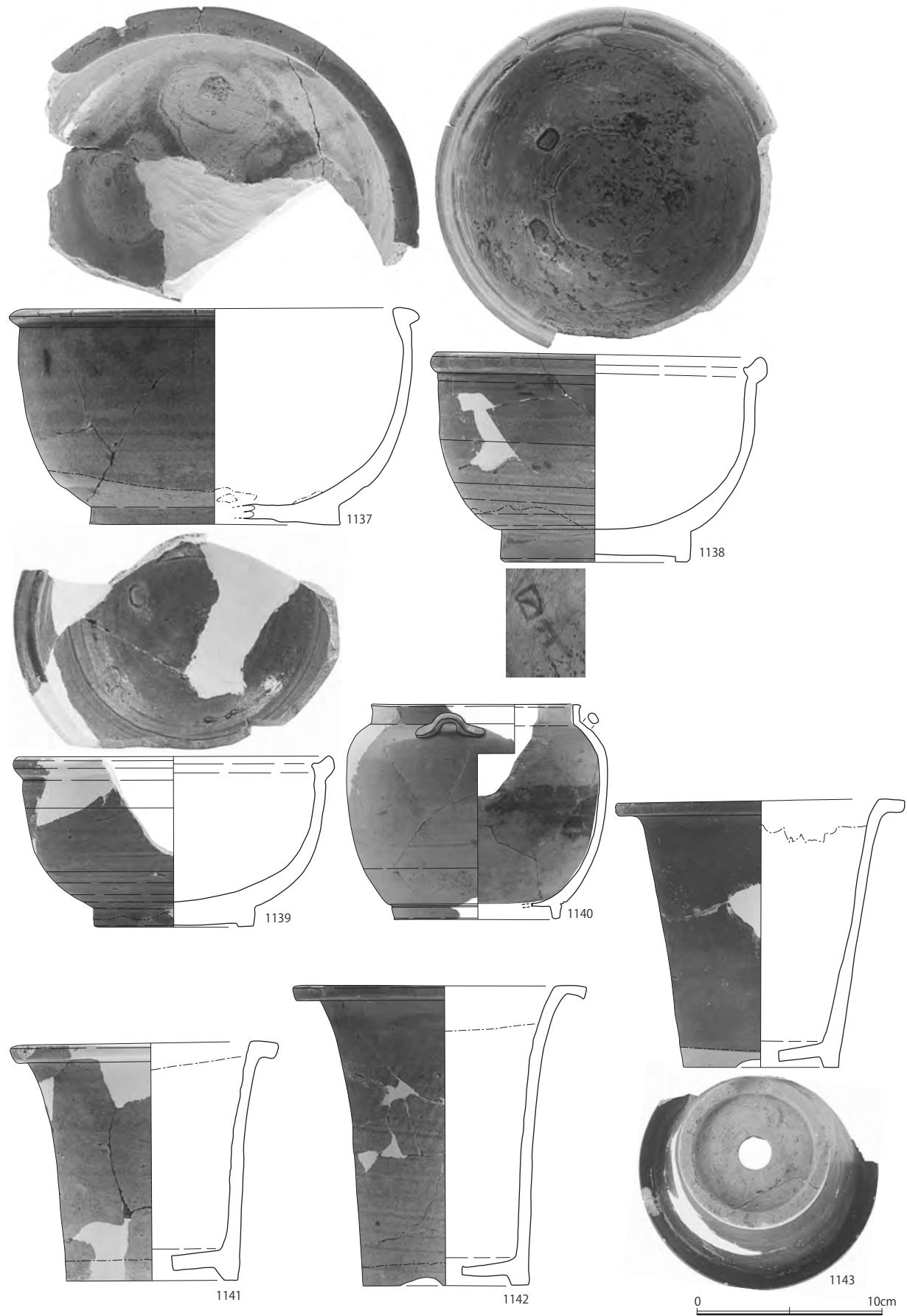
第259図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（20）（縮尺：1／3）



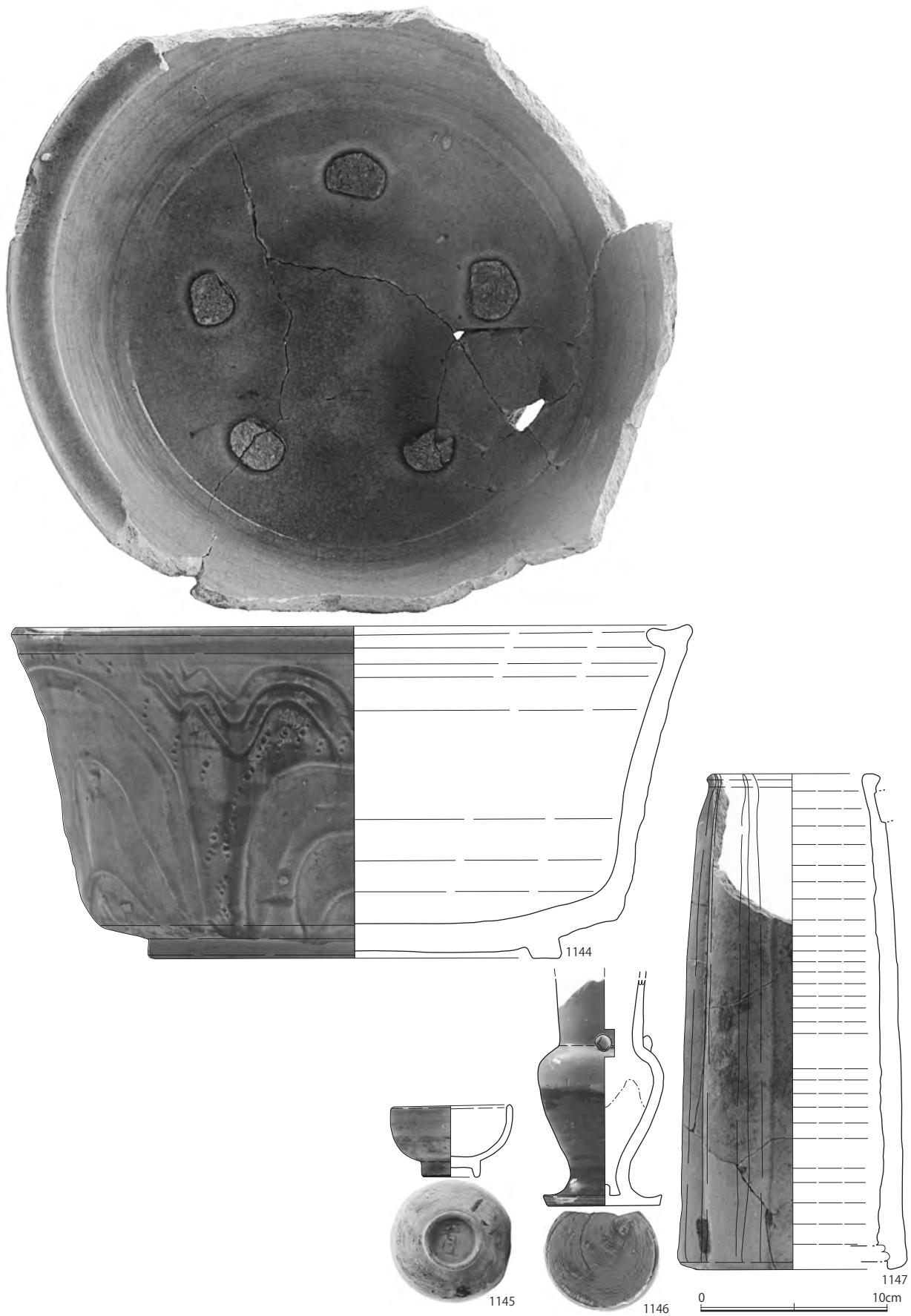
第260図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(21)（縮尺：1/3）



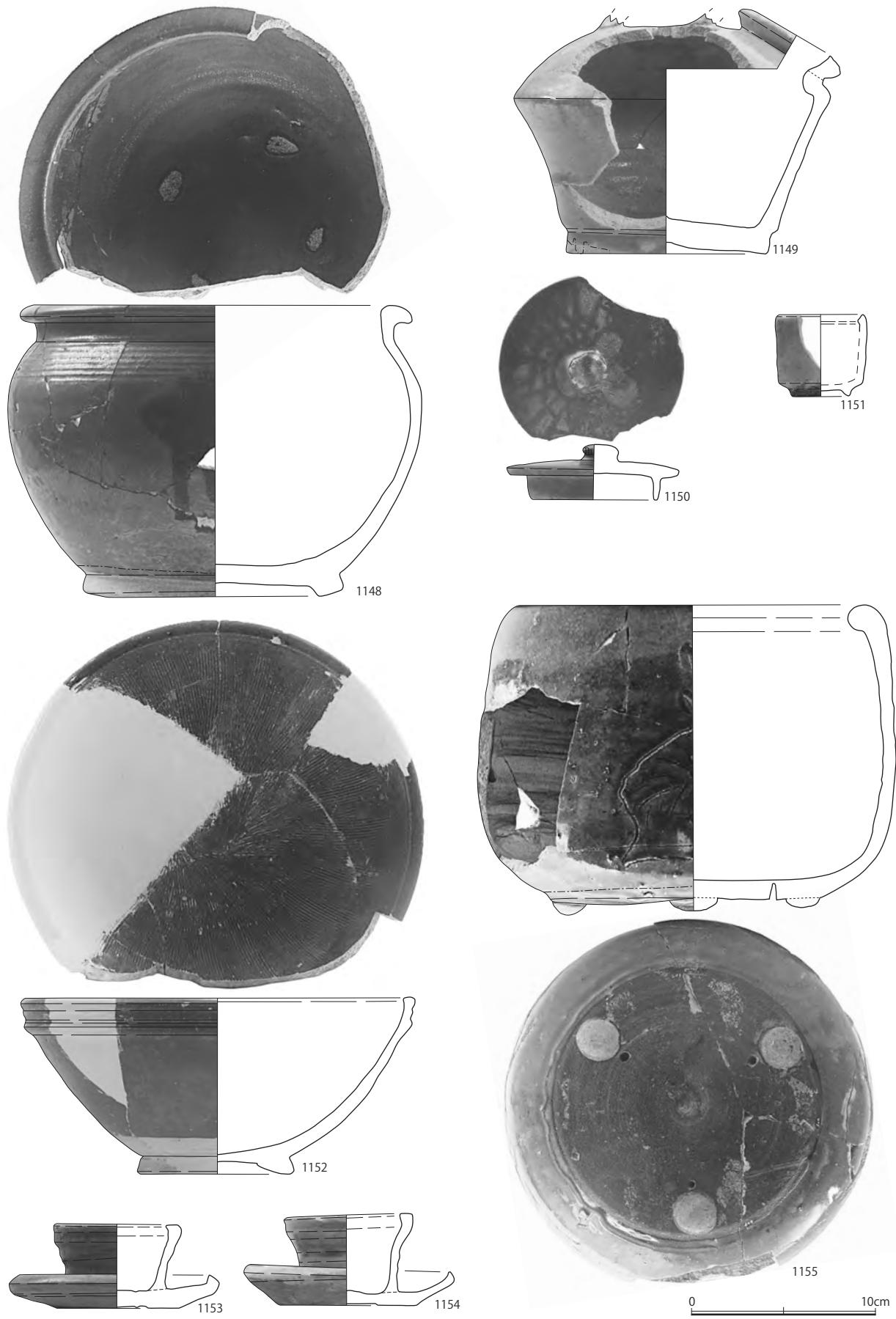
第261図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(22)（縮尺：1/3）



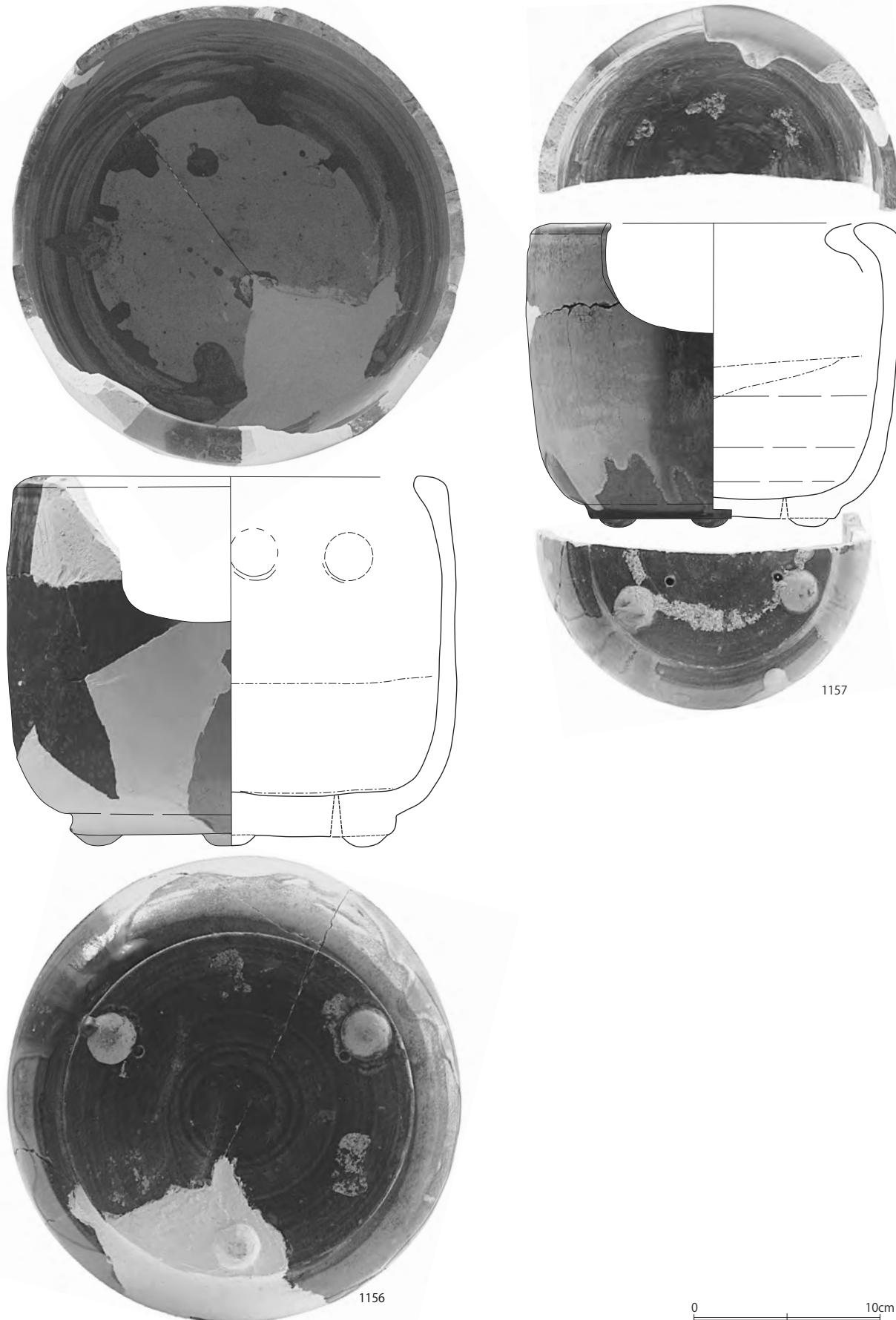
第262図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（23）（縮尺：1／3）



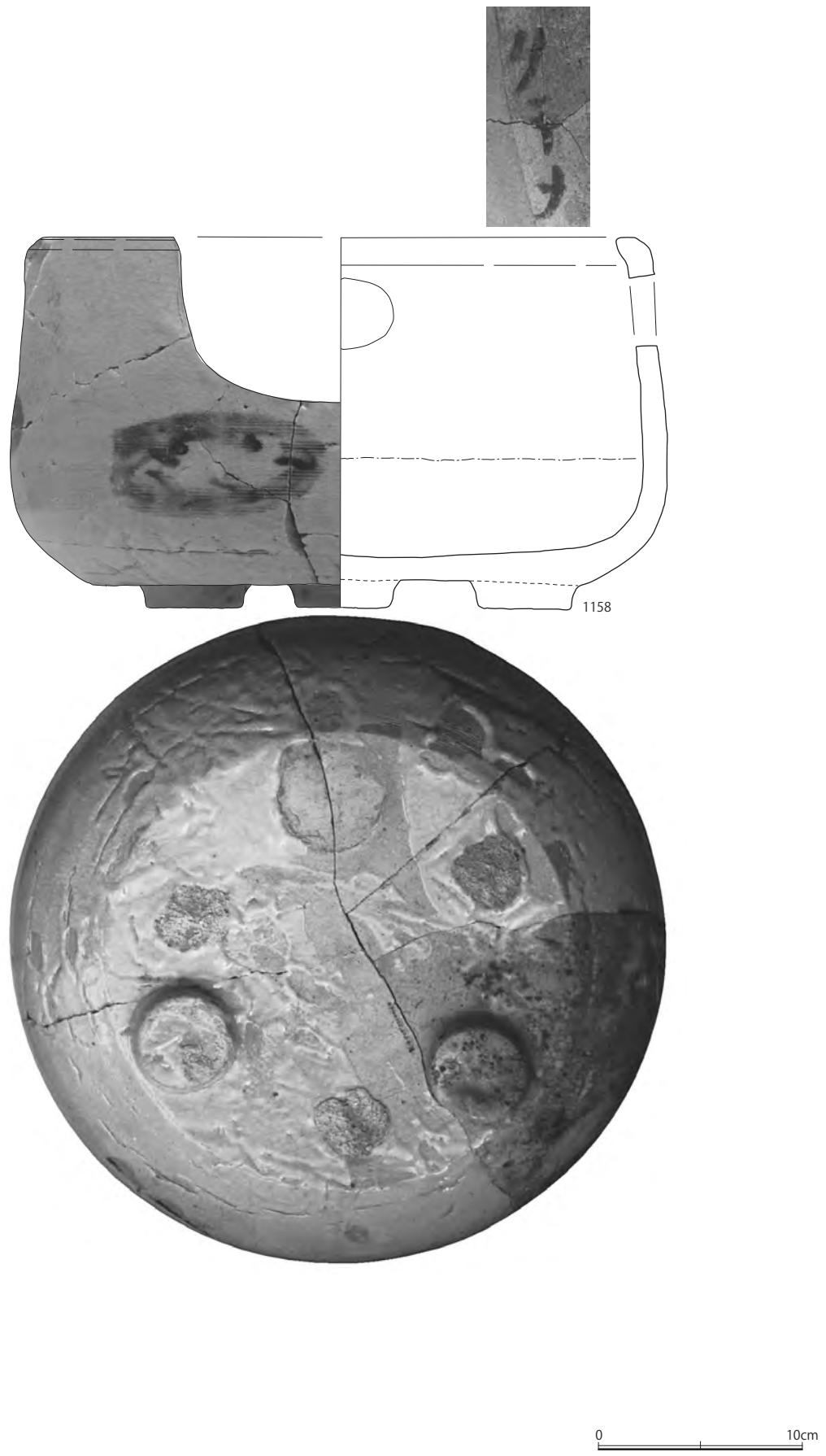
第263図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(24)（縮尺：1／3）



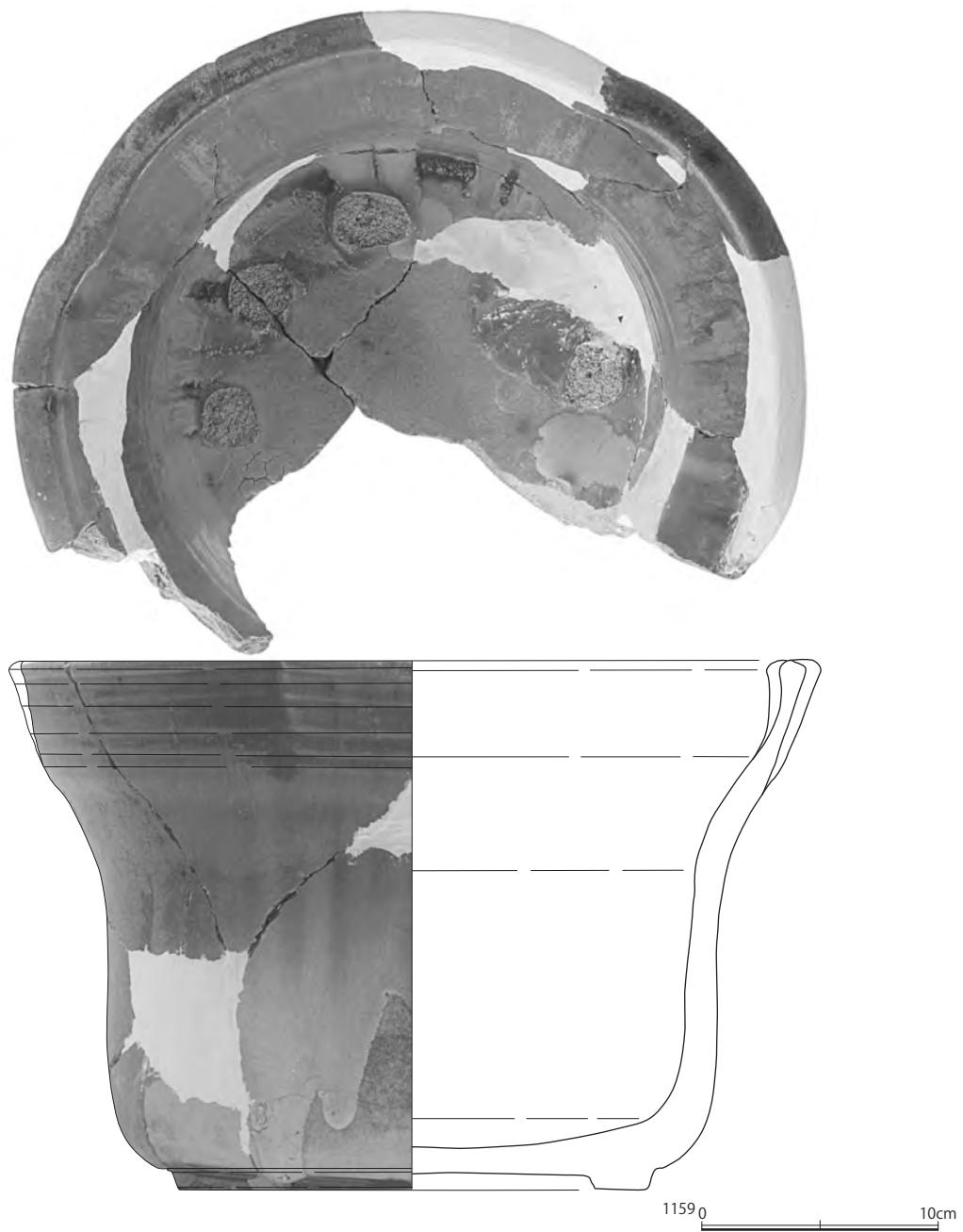
第264図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（25）（縮尺：1／3）



第265図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（26）（縮尺：1／3）



第266図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（27）（縮尺：1／3）



第267図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（28）（縮尺：1／3）

1160～1162は京・信楽系陶器の小杉碗である。1160は高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に錆絵による若松文を描く。畳付際をわずかに面取りする。1161は高台脇から高台内を除き、白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に錆絵と呉須による若松文を描く。畳付際をわずかに面取りする。1162は高台脇から高台内を除き、白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に錆絵による若松文を描く。高台内に円刻がみられる。

1163～1165は京・信楽系陶器の注連縄文碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。1163は外面に錆絵による注連縄文を描く。畳付際をわずかに面取りする。1164は外面に色絵（赤色・黒色・他）による注連縄文と海老文を描く。1165は外面に色絵（赤色・緑色・黒色）による注連縄文と海老文を描く。

1166は京・信楽系陶器の半球碗である。高台脇から高台内を除き、白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に色絵による笹文？を描く。畳付際をわずかに面取りする。

1167～1170は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。1167は高台脇から高台内が無釉である。外面に錆絵による松文を描く。渦巻高台で畳付際を面取りする。1168は高台脇から高台内が無釉である。残存部に文様はみられない。畳付際をわずかに面取りする。1169は高台脇から高台内が無釉である。残存部に文様はみられない。1170は畠付を除き高台内にも灰釉をかける。外面に錆絵による秋草文を描く。高台内に円刻がみられるが、施釉されているため不鮮明である。

1171は京・信楽系陶器の半筒形碗である。腰部に外面からの押圧による凹みが1箇所みられる。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に錆絵による笹文を描き、高台内に浅い円刻がみられる。畠付際を面取りする。

1172・1173は京・信楽系陶器の端反碗である。1172は胴下部外面から高台内を除き灰釉をかける。焼成不良のため灰釉は白濁する。1173は高台脇から高台内を除き灰釉をかける。畠付際をわずかに面取りする。

1174は京・信楽系陶器の皿である。型打成形で、口縁部は輪花となる。見込にハリ支え痕がみられる。高台脇から高台内を除き白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。見込に錆絵による折松葉文？を描く。畠付際をわずかに面取りする。

1175は京・信楽系陶器の三島手の皿である。胴下半部外面から高台内を除き灰釉をかける。内側面に網代文、見込に菊花文と蓮弁文と花文を施す。高台内に二重亀甲文内「清」字？の刻印がみられる。

1176は京・信楽系陶器の皿である。型押成形による菊花長皿。底部を除き灰釉をかける。口縁端部に口紅を施す。

1177～1179は京・信楽系陶器の小壺である。1177は高台脇から高台内を除き灰釉をかける。1178は畠付を除き灰釉をかける。外面に鉄釉で描いた文字がみられる。高台内には段があり、畠付際を面取りする。1179は高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に錆絵がみられる。渦巻高台で、切れ込みがみられる。

1180・1181は京・信楽系陶器の水注である。1180は底部外面と口縁端部を除き灰釉をかける。1181は口縁端部と底部を除く外面および口縁部内面に灰釉をかける。内面にスス？が付着する。

1182・1183は京・信楽系陶器の柄杓である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。胴中部内面

に鉄釉による一条の横線を描く。畳付際を面取りする。

1184は京・信楽系陶器の水注とその蓋である。水注本体は口縁部上面を除く外面に白化粧土を塗布したのち、口縁部上面と胴下部から底部を除く外面に灰釉をかける。蓋は外面に白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。本体・蓋ともに外面に銹絵による丸文内菊花文を描く。

1185・1186は京・信楽系陶器の片口である。型押成形。口縁部外面から内面全面に灰釉をかける。1186の外面露胎部は橙色を呈する。

1187は京・信楽系陶器の蓋物である。高台と高台内および蓋受けを除き灰釉をかける。見込にハリ支え痕？がみられる。外面に銹絵と呉須による亀文と水草文を描く。畳付に「帶山」の刻印がみられ、畳付際を面取りする。

1188～1190は京・信楽系陶器の段重・蓋物の蓋である。1188・1189は外面に灰釉をかける。1190は外面と見込に灰釉をかける。

1191は京・信楽系陶器の合子である。口縁端部と底部を除き灰釉をかける。底部の露胎部は赤橙色を呈する。

1192は京・信楽系陶器の土瓶の蓋である。外面に灰釉をかける。

1193は京・信楽系陶器の土瓶とその蓋である。無釉焼締陶器。白化粧土のイッチン描により土瓶本体の外面に宝珠文、蓋の外面に不明文様を描く。土瓶本体の外面と蓋の外面にススが付着する。蓋の底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1194～1196は京・信楽系陶器の灯明皿である。内面に灰釉をかける。見込に三足付板トチの支え痕、口縁部に灯芯油痕がみられる。

1197～1200は京・信楽系陶器の灯明受皿である。1197は口縁部外面から内面全面に灰釉をかけ、仕切り端部は釉剥ぎする。仕切りにU字形の溝が1箇所みられる。1198・1199は内面に灰釉をかけ、仕切り端部は釉剥ぎする。仕切りにU字形の溝が1箇所みられる。1199は口縁部に灯芯油痕がみられる。1200は内面に灰釉をかけ、仕切り端部は釉剥ぎする。仕切りにV字形の溝が1箇所みられる。

1201・1202は京・信楽系陶器の脚付灯明受皿である。底部と脚部内面を除き灰釉をかけ、仕切り端部は釉剥ぎする。仕切りにU字形の溝が1箇所みられる。1202は底部にススが付着する。

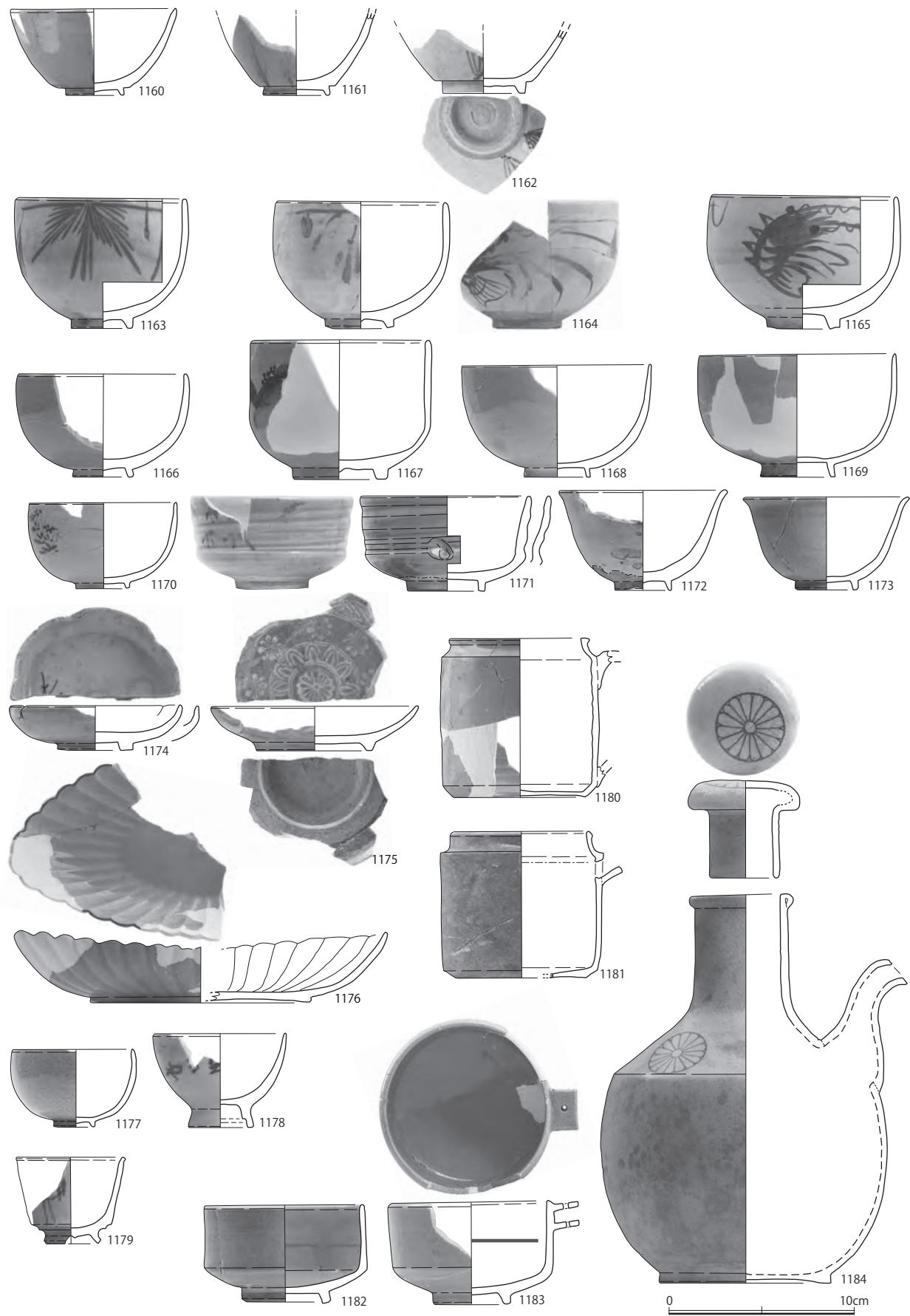
1203は京・信楽系（伊賀？）陶器の急須の蓋である。無釉焼締陶器。下面是3方面取りする。

1204は京・信楽系陶器の灰落しである。外面全面と口縁部内面に白化粧土を塗布したのち、底部外面を除く内外面に灰釉をかける。外面に銹絵と呉須による笹文を描く。口縁端部に敲打痕がみられる。

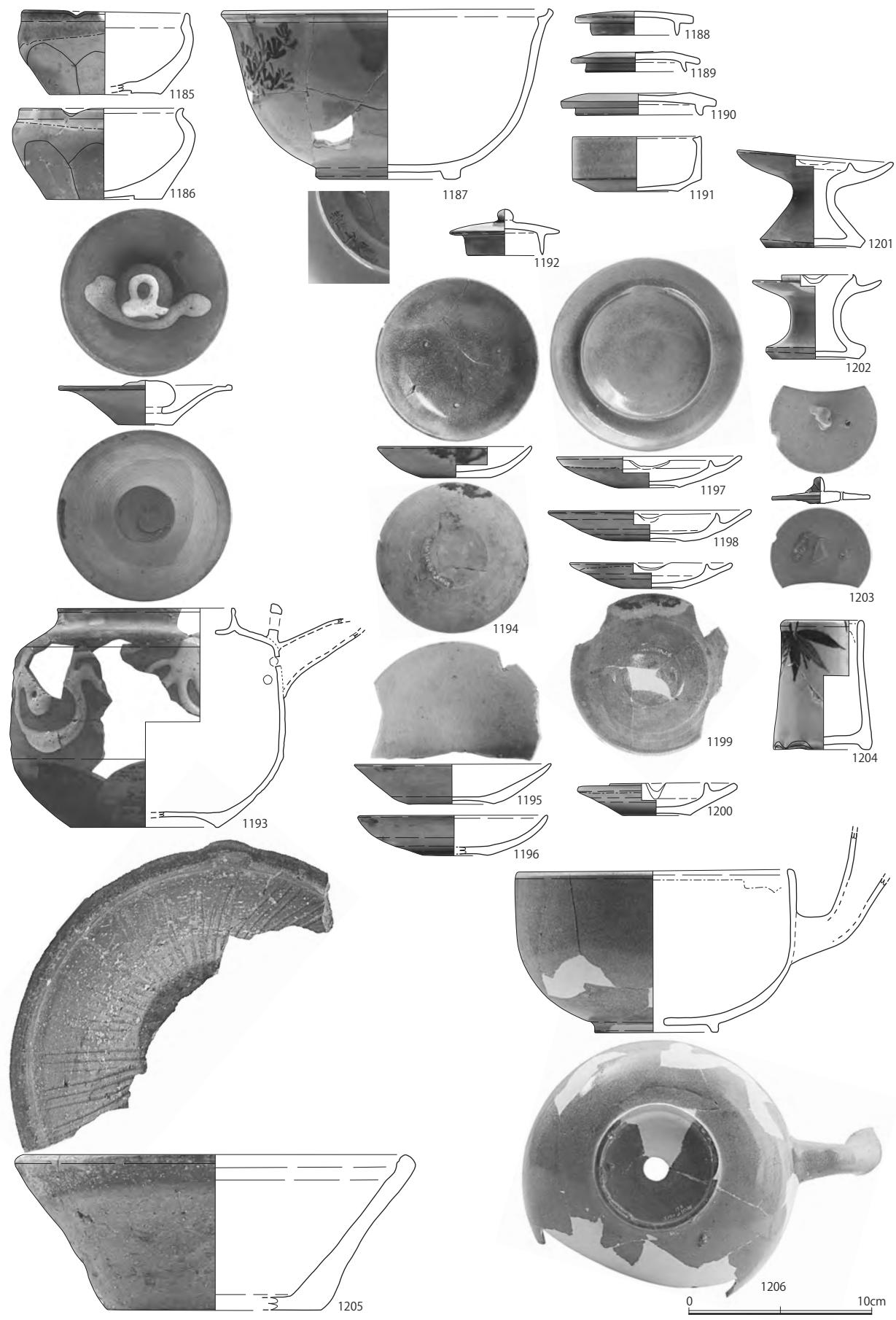
1205は京・信楽系陶器の擂鉢である。白色の粗砂粒を多く含む胎土である。輪積み成形で、胴部外面に指頭圧痕がみられる。内側面のスリメは3本単位の櫛描きである。内側面と底部外縁に重ね焼き痕がみられる。

1206は京・信楽系陶器の蘭引と思われる。畳付と口縁端部から口縁部内面を除き灰釉をかける。底部中央に焼成前の穿孔がみられる。

1207・1208は萩系陶器のピラ掛け碗である。内面に藁灰釉をかける。外面に白釉と鉄釉によるピラ掛けを施す。渦巻高台。



第268図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（29）（縮尺：1／3）



第269図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（30）（縮尺：1/3）

1209は舞子焼の皿である。灰白色を呈する緻密な胎土。内面に藁灰釉をかけ、口縁部から胴上半部外面に鉄釉を流し掛ける。渦巻高台の高台内に楕円形枠内「宗平」の刻印がみられる。

1210は舞子焼の皿である。胴部に押圧による凹みがめぐる。底部と見込を除き鉄染みがみられる灰釉をかける。見込に白化粧土を塗布したのち、鉄絵による詩句を描く。

1211～1213は舞子焼の小壺である。黒色の鉄粉状微粒子を多量に含む胎土。1211は高台外面と畳付を除き鉄染みがみられる灰釉をかける。畳付にはアルミナ砂を塗布する。外面に白化粧土のイッチン描による文様を描く。1212は畳付を除き鉄染みがみられる灰釉をかける。外面に白化粧土のイッチン描による山水文と帆掛け舟文を描く。胴中部外面に浅い沈線を施す。1213は畳付を除き灰釉をかける。畳付にはアルミナ砂を塗布する。外面に白化粧土のイッチン描による文様を描く。

1214は備前系陶器の瓶である。外面に塗土を施す。胴部外面に火襷がみられる。

1215～1219は備前系陶器の灯明皿である。1215は口縁部外面から内面全面に塗土を施す。口縁部に灯芯油痕がみられる。1216は内面に塗土を施す。口縁部に灯芯油痕がみられる。1217は口縁部外面から内面全面に塗土を施す。見込に重ね焼き痕がみられる。1218は口縁部外面から内面全面に塗土を施す。底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。1219は内面に塗土を施す。底部に右回転の糸切り離しののち、同心円状回転ヘラケズリ痕がみられる。

1220～1226は備前系陶器の灯明受皿である。1220は内面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が3箇所、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。口縁部内面にススが付着する。1221は内面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が3箇所、底部に右回転の糸切り離しののち、ナデ調整がみられる。口縁部と仕切り端部に灯芯油痕がみられる。1222は口縁部外面から内面全面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が3箇所みられ、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。1223は内面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が3箇所みられ、底部に右回転の糸切り離しののち、同心円状回転ヘラケズリ痕がみられる。1224は口縁部外面から内面全面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が2箇所、底部に回転方向不明の糸切り離しののち、同心円状回転ヘラケズリ痕がみられる。1225の胎土は橙色を呈し、焼成は甘い。口縁部外面から内面全面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が3箇所みられる。口縁部に灯芯油痕がみられる。1226は内外面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が3箇所みられる。

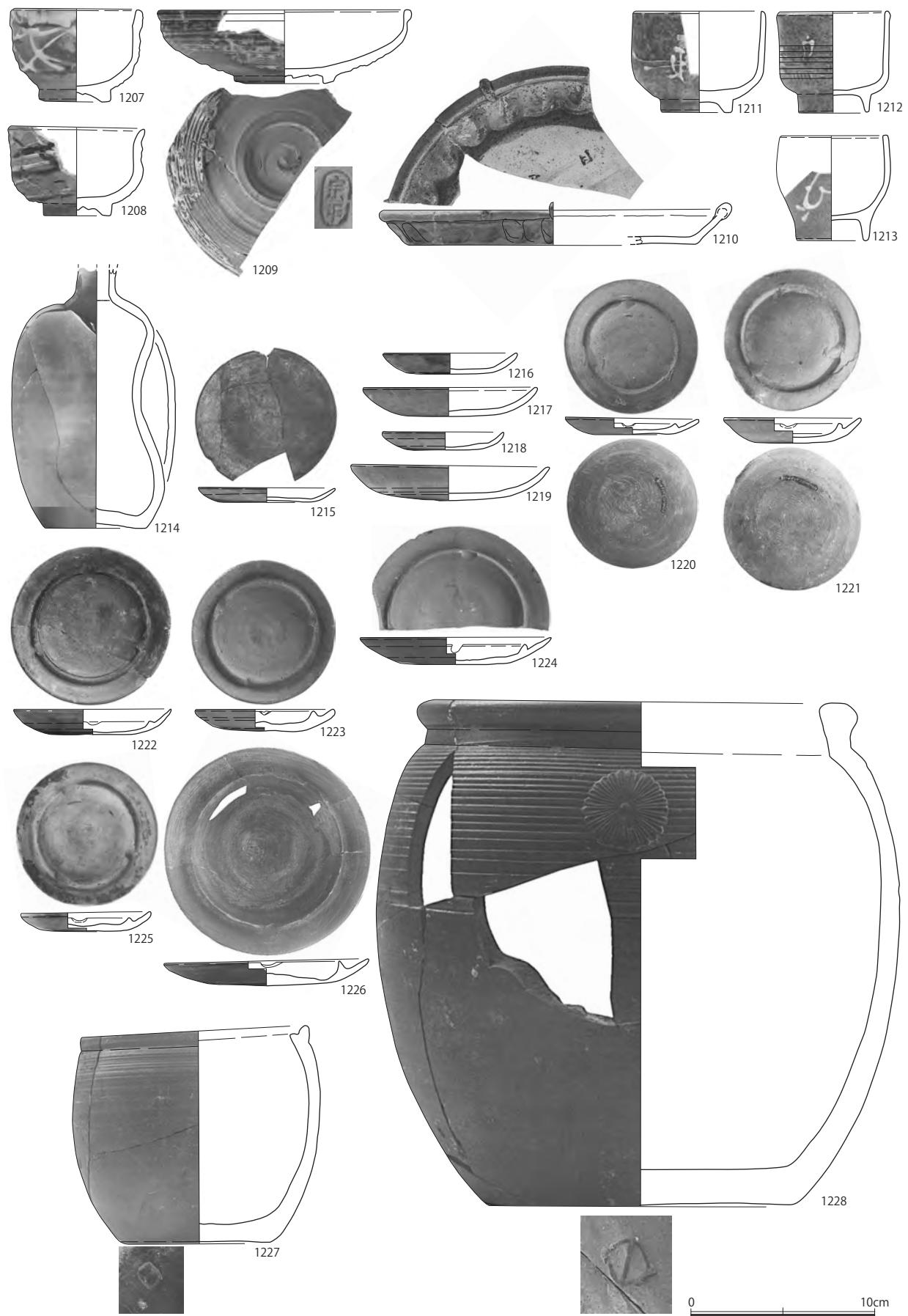
1227は備前系陶器の極小甕である。外面に塗土を施す。外面全面に火襷、底部内面に植物の圧痕がみられる。底部外面に「日」の刻印がみられる。

1228は備前系陶器の甕である。底部を除く外面に褐色の塗土を化粧土的に塗布し、内面と底部外面に赤色の塗土を刷毛塗りする。胴上部外面に型押成形による菊花文を2方向に貼り付け、底部外面に「匚」の刻印がみられる。口縁部から胴上部内外面に墨状物質が付着する。

1229は備前系陶器の甕である。口縁部上面に黄ゴマがみられる。胴下部外面に重ね焼き痕と備前系陶器の破片の付着がみられ、その部分より下は色調が変わる。胴下部内面に白色物質が付着する。池状遺構（第1遺構面）埋土最上層の破片と接合する。

1230は備前系陶器の甕である。外面に塗土を施し、内外面に火襷がみられる。底部外面に「日」の刻印がみられる。

1231は備前系陶器の植木鉢である。胴部外面に粘土を貼り付け花文を施す。



第270図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（31）（縮尺：1／3）

1232 は備前系陶器の水注？の蓋である。上面に塗土を施す。

1233 は備前系陶器の小壺である。外面に塗土を施す。底部内面にスス？が付着する。

1234 は備前系陶器の蓋である。外面に型押成形による陽刻の松文を施し、枝形の摘みを貼り付ける。見込に墨書がみられる。

1235 は丹波系陶器の片口である。内面全面に鉄釉（黒釉）をかける。口縁部上面に重ね焼き痕がみられ、底部全面にススが付着する。

1236 は丹波系陶器の甕である。内外面に鉄釉をかける。胴上部外面に不遊環を貼り付ける。内面に褐色の付着物がみられる。

1237～1241 は堺・明石系陶器の擂鉢である。1237 の見込のスリメは放射状である。退化した注口がみられる。底部と体部外面、見込と体部内面では色調差がみられる。胴部外面調整はヘラケズリのち横ナデである。底部に砂が付着する。1238 の見込のスリメは三角形と思われる。胴部外面調整はヘラケズリのち横ナデである。底部に砂が付着する。1239 の見込のスリメは三角形と思われる。胴部外面調整はヘラケズリのち丁寧に横ナデされ、ヘラケズリの痕跡はほとんどみられない。底部に砂が付着する。1240 の見込のスリメは三角形と思われる。注口はない。胴部外面調整はヘラケズリのち横ナデである。底部に砂の付着と焼成後の穿孔がみられ、植木鉢に転用したと思われる。1241 の見込のスリメは三角形と思われる。胴部外面調整はヘラケズリのち横ナデである。底部に砂が付着する。

1242・1243 は大谷焼の鉢である。高台脇から高台内を除き鉄釉をかける。1242 の見込は渦巻き状に彫り込まれる。1243 の見込には環状の重ね焼き痕がみられる。

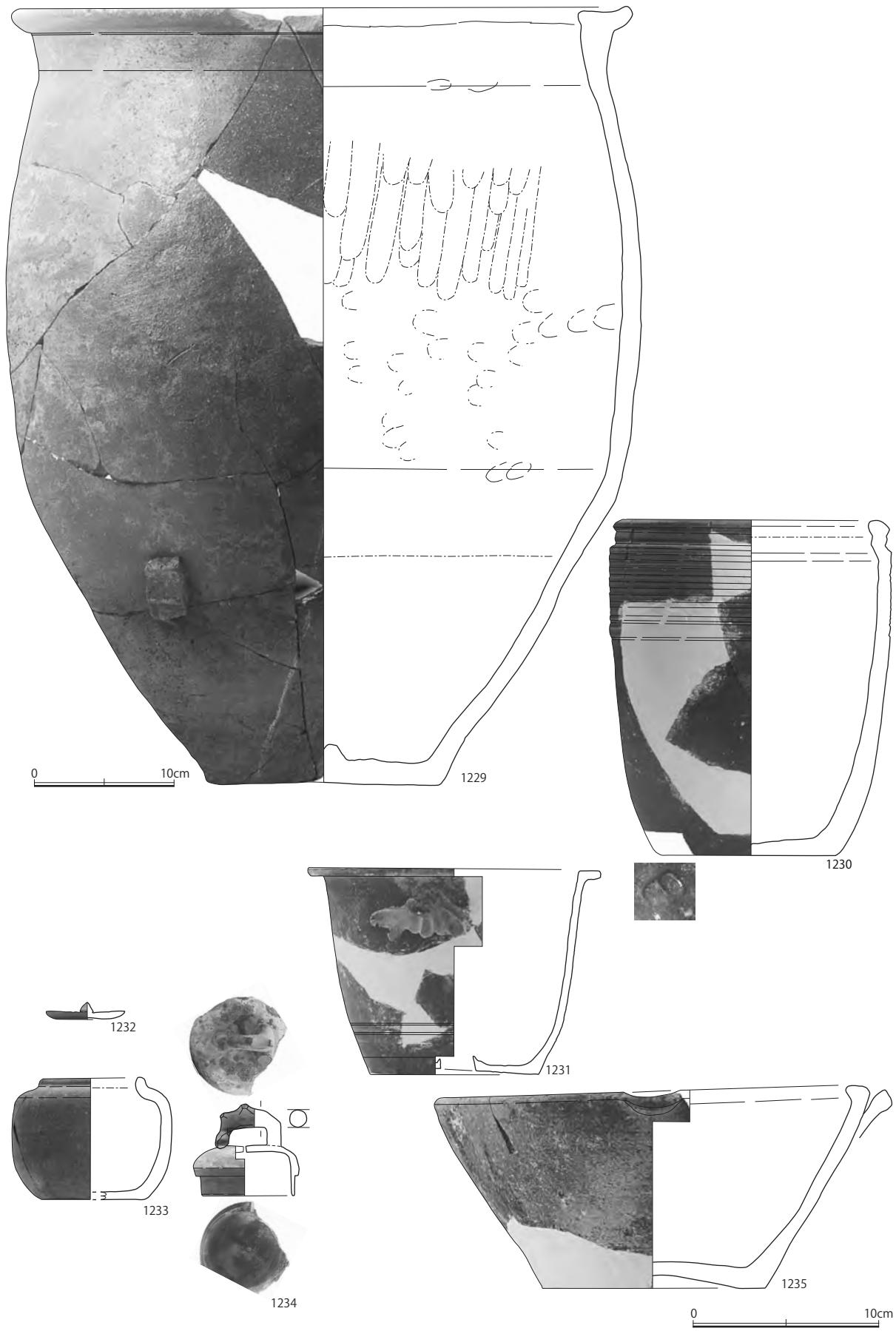
1244・1245 は大谷焼の瓶である。胴下部から底部を除く外面に鉄釉をかける。

1246 は大谷焼の瓶である。底部を除く外面に鉄釉をかける。底部外面に「壹岡酒」の墨書がみられる。底部際を面取りする。

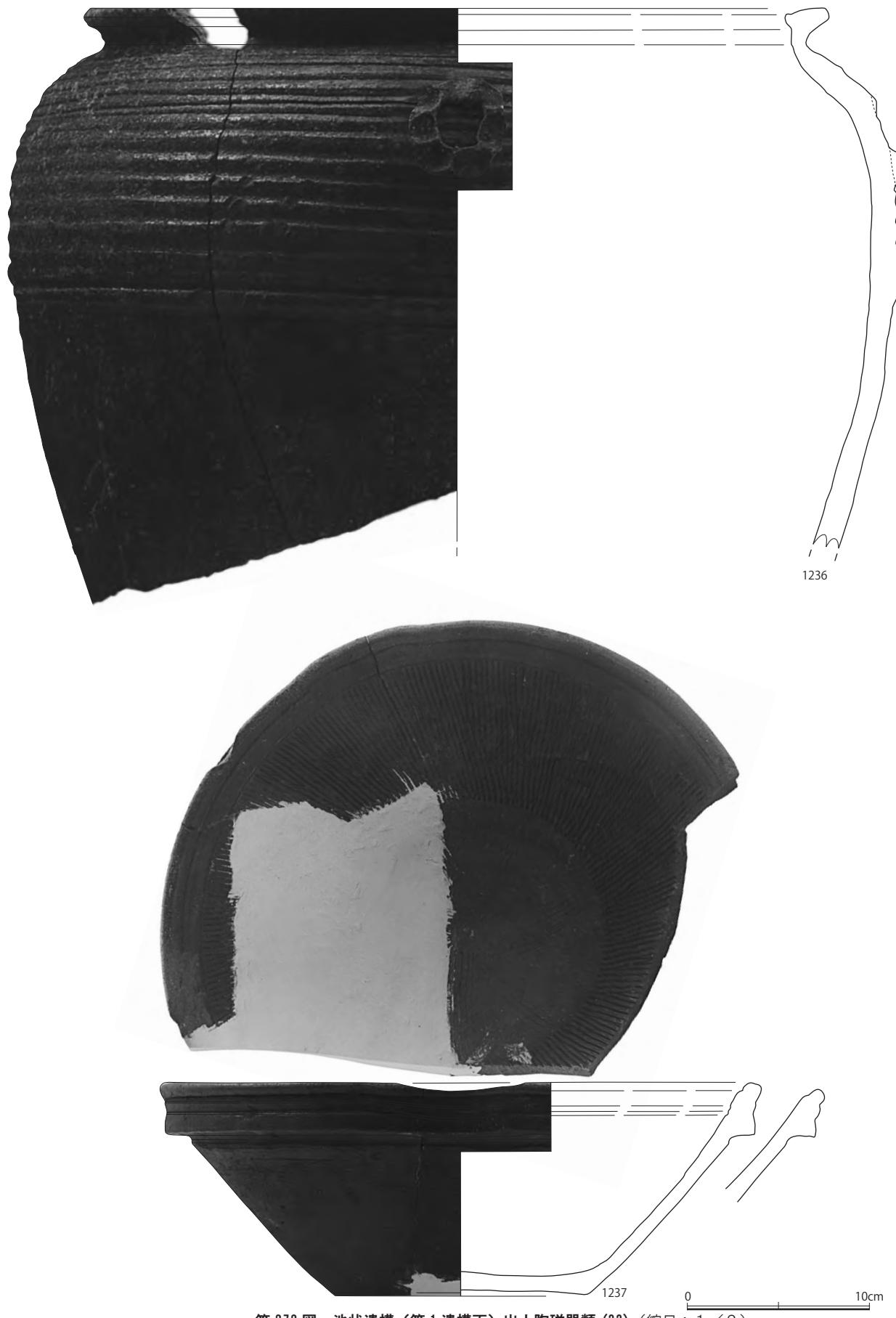
1247 は大谷焼の瓶である。底部を除く外面に鉄釉をかける。底部際を面取りする。

1248～1256 は大谷焼の瓶である。慣用名「口長」。1248 は畳付を除く外面に鉄釉をかける。肩部の3方向に陰刻の「藤」、「村」、「未」の文字がみられる。高台外面に「入」の刻印がみられる。1249 は畠付から高台内を除く外面に鉄釉をかける。肩部の3方向に陰刻の「藤」、「村」、「巳秋」の文字がみられる。1250 は畠付と高台の内側を除く外面に鉄釉をかける。肩部の4方向に陰刻の「福」、「綿」、「酒」、「午秋」の文字がみられる。1251 は畠付を除く外面に鉄釉をかける。肩部の4方向に陰刻の「福」、「嶋」、「辰秋」の文字と「×」（屋号？）がみられる。1252 は畠付を除く外面に鉄釉をかける。肩部の3方向に陰刻の「藤」、「村」、「酉？冬」の文字がみられる。1253 は畠付を除く外面に鉄釉をかける。肩部の4方向に陰刻の「福嶋」、「申夏り」、「酒」の文字と「×」（屋号？）がみられる。1254 は畠付を除く外面に鉄釉をかける。肩部の4方向に陰刻の「通」、「三丁目」、「て」、「寅冬」の文字がみられる。1255 は畠付を除く外面に鉄釉をかける。肩部の4方向に陰刻の「森」、「登？」、「□（不明）」、「子夏」の文字がみられる。1256 は畠付を除く外面に鉄釉をかける。肩部の4方向に陰刻の「通」、「壹」、「岡？」、「申春」の文字がみられる。高台に砂が付着する。

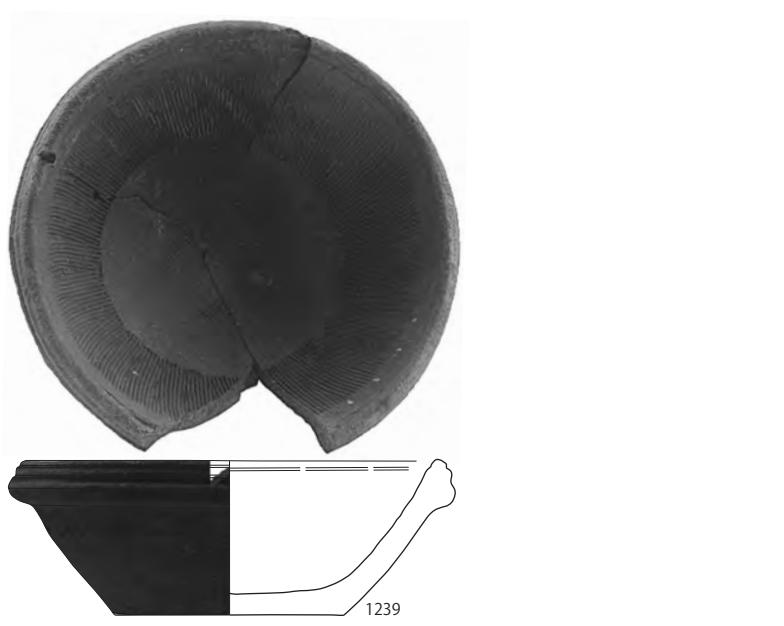
1257・1258 は大谷焼の水注である。1257 は口縁端部を除く外面に鉄釉をかける。1258 は口縁端部



第271図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（32）（縮尺：1／3 1229 縮尺：1／4）

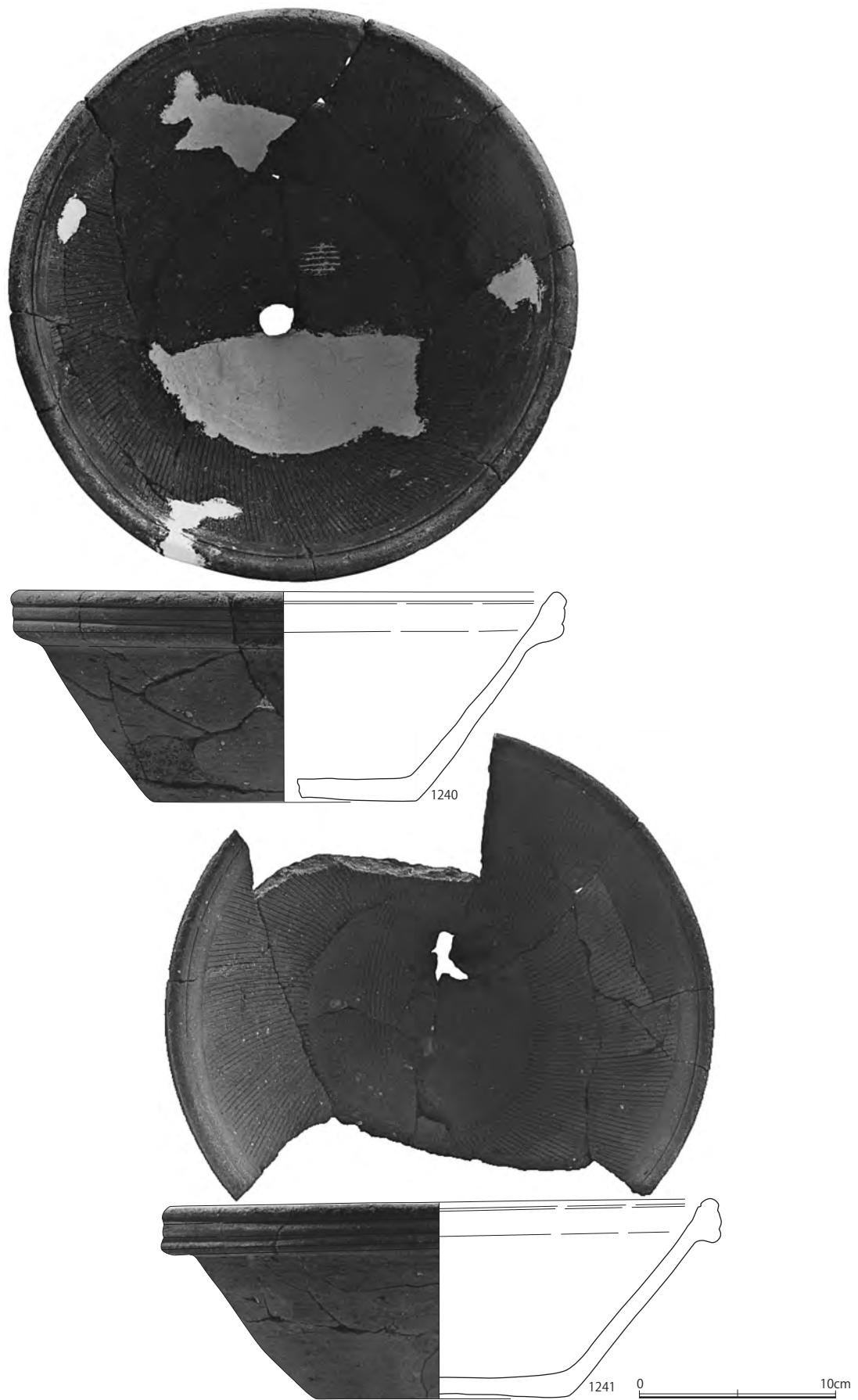


第272図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（33）（縮尺：1／3）

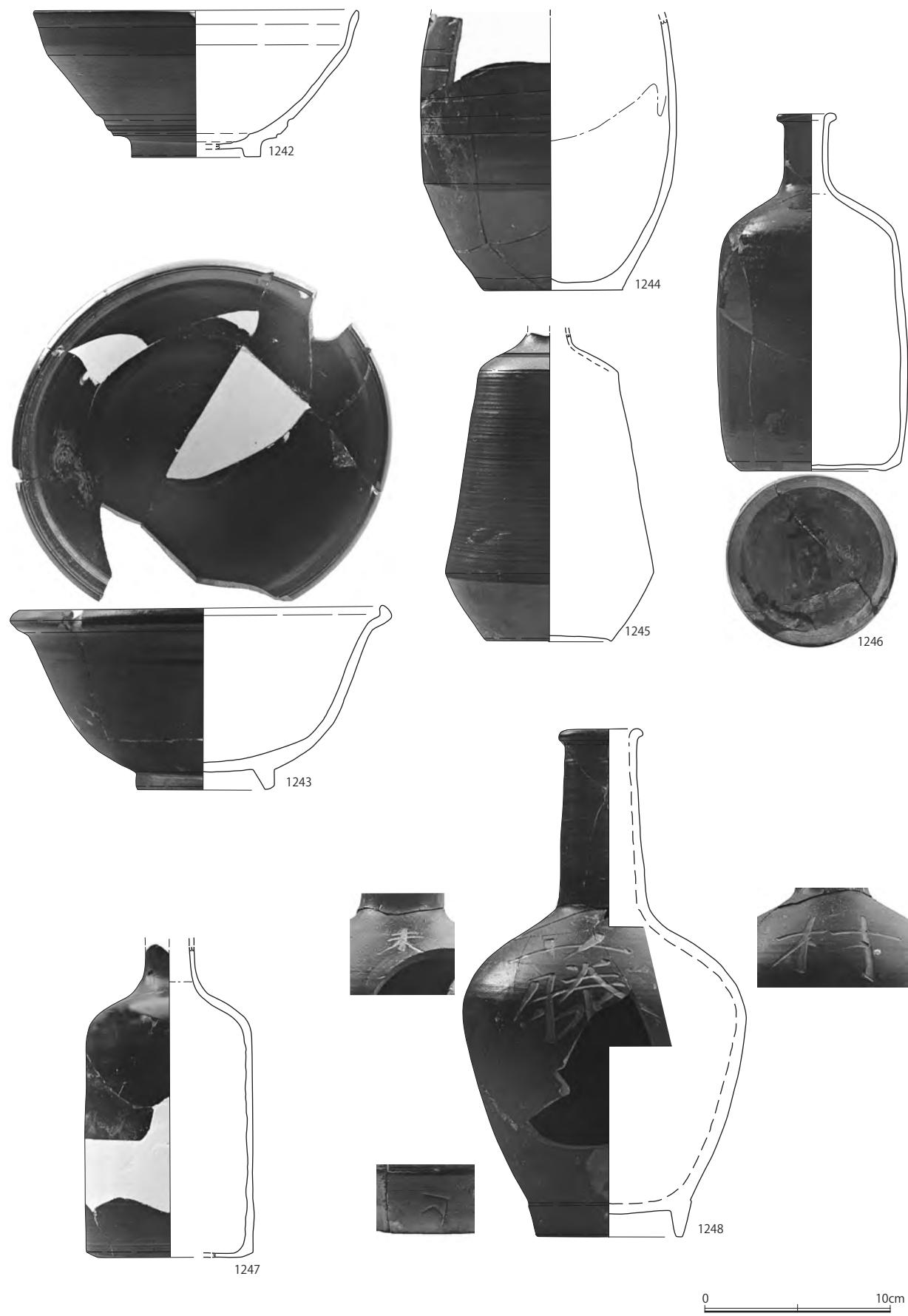


第273図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（34）（縮尺：1／3）

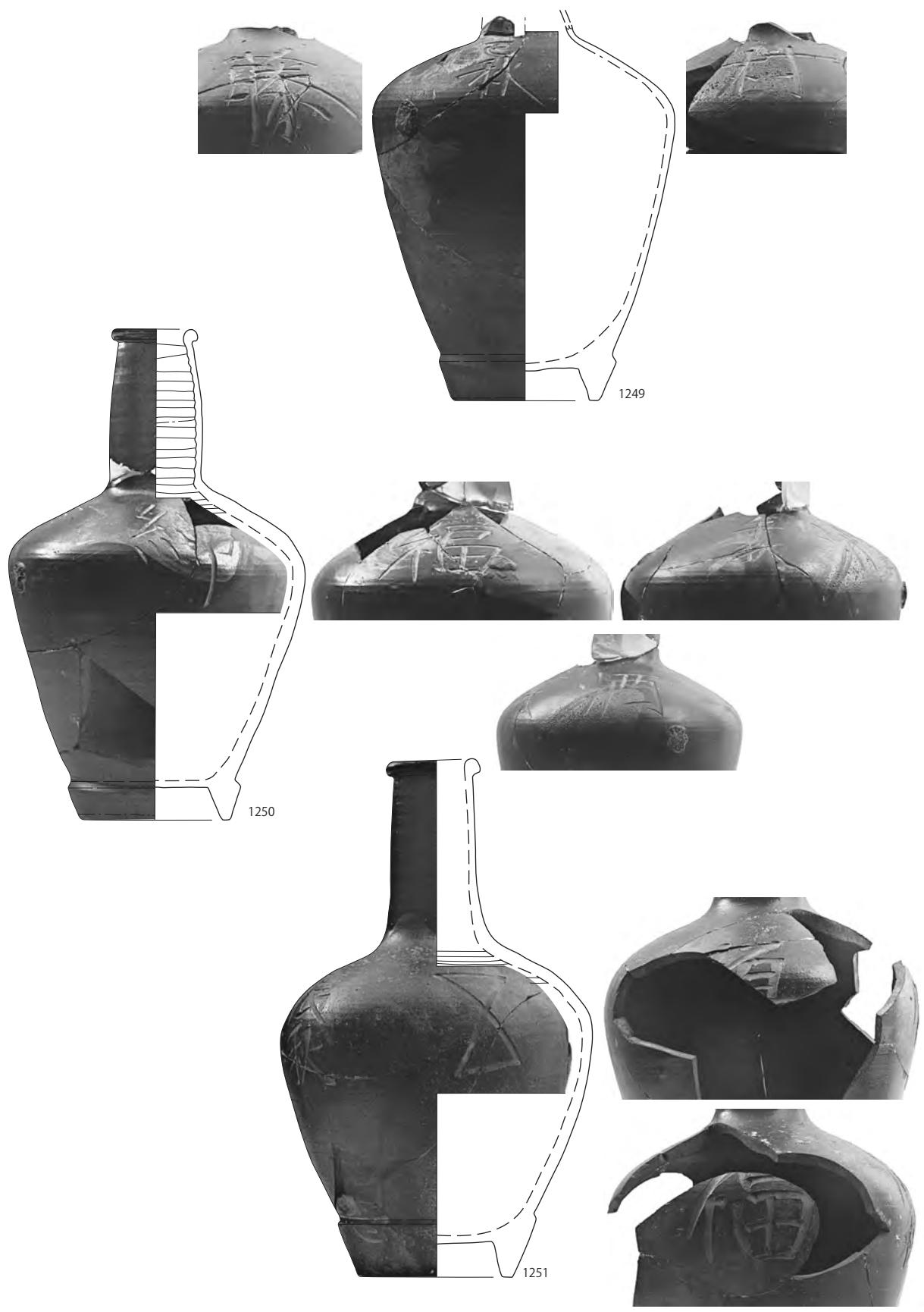
0 10cm



第274図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（35）（縮尺：1／3）

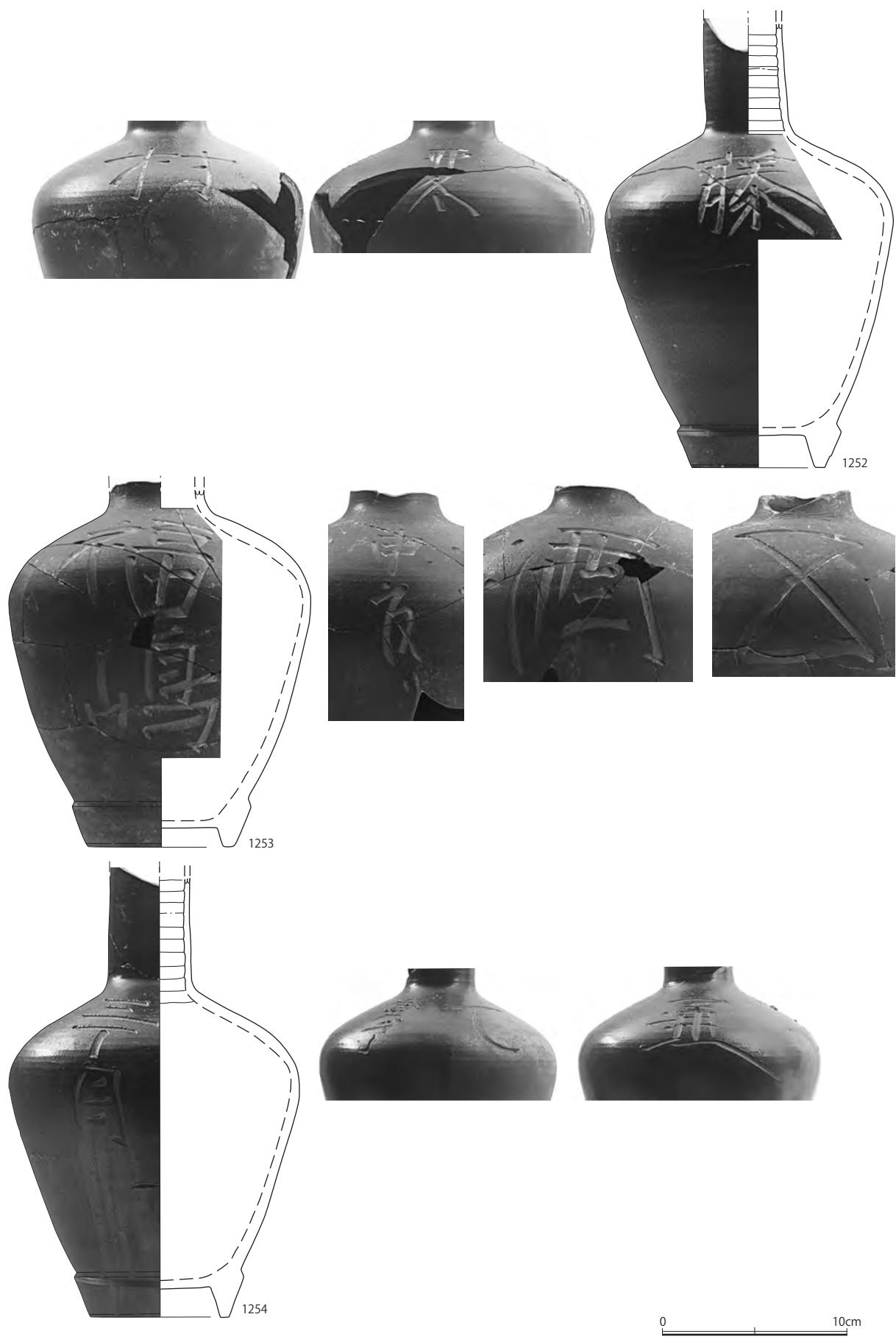


第275図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（36）（縮尺：1／3）



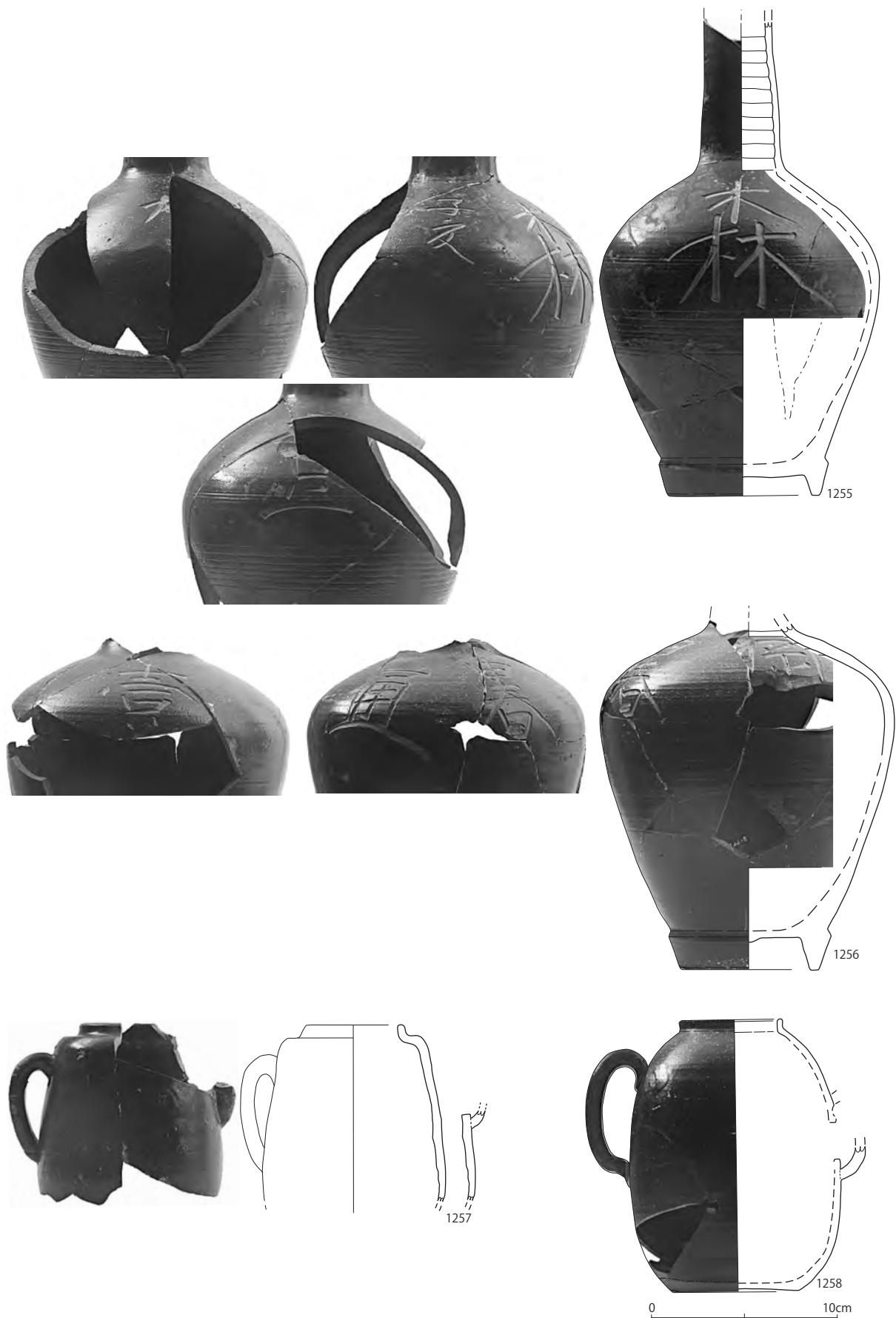
第276図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（37）（縮尺：1／3）

0 10cm



第277図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（38）（縮尺：1／3）

0 10cm



第278図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（39）（縮尺：1／3）

と底部外面を除き鉄釉をかける。内面も粗く施釉される。口縁端部に砂が付着する。

1259 は大谷焼の擂鉢である。高台脇から高台内を除く外面と口縁部内面に鉄釉をかける。

1260～1262 は大谷焼の甕である。1260 は底部外面を除く内外面に鉄釉をかけ、口縁部上面は釉剥ぎする。釉剥ぎ部分に砂が付着する。1261 は底部外面を除く内外面に鉄釉をかけ、口縁部上面は釉剥ぎする。底部に焼成後の穿孔と墨書がみられる。1262 は底部外面を除く内外面に鉄釉をかけ、口縁部から胴部外面に鉄釉を流し掛ける。

1263 は大谷焼の土瓶の蓋である。外面に鉄釉をかける。

1264～1268 は大谷焼の灯明具である。1264 は底部を除き鉄釉をかける。1265・1266 は底部を除く外面に鉄釉をかける。受皿の仕切り端部に上皿を重ねて焼成した痕跡がみられるが、上皿は欠損する。1267 は底部を除く外面に鉄釉をかける。受皿の仕切りに U 字形の溝が 1 箇所みられる。仕切り端部に上皿を重ねて焼成した痕跡がみられるが、上皿は欠損する。1268 は底部を除く外面に鉄釉をかける。受皿の仕切りに V 字形の溝が 1 箇所みられる。仕切り端部に上皿を重ねて焼成した痕跡がみられるが、上皿は欠損する。

1269・1270 は大谷焼の小壺である。1269 は胴下部から底部を除く外面と口縁部を除く内面に鉄釉をかける。底部外面に「△」の刻印と不明文字の墨書がみられる。口縁部内面に重ね焼き痕がみられる。1270 は胴下部から底部外面を除き鉄釉をかける。底部外面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1271 は大谷焼の大鉢である。慣用名「睡蓮鉢」。口縁部上面と底部を除く外面に胎土に似た色調の塗土を施す。内面には光沢のない鉄釉を刷毛掛けする。外面に型押による陽刻の牡丹唐草文と円形の粘土を貼り付ける。底部中央に焼成前の穿孔がみられる。

1272 は大谷焼の植木鉢など大鉢類の足と思われる。型押成形による陰刻の竹編み文様と不明文字を施す。文様のある面に鉄釉をかける。

1273・1274 は大谷焼の油壺である。1273 は胴下部から底部を除く外面に鉄釉をかける。口縁部は片口状になる。1274 は底部を除く外面に鉄釉をかける。

1275～1277 は大谷焼の蓋である。外面に鉄釉をかける。1276・1277 は底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1278・1279 は珉平焼の小判形皿である。全面に黄釉をかけ、底部に目跡がみられる。型打成形により見込に陰刻の龍文を施す。

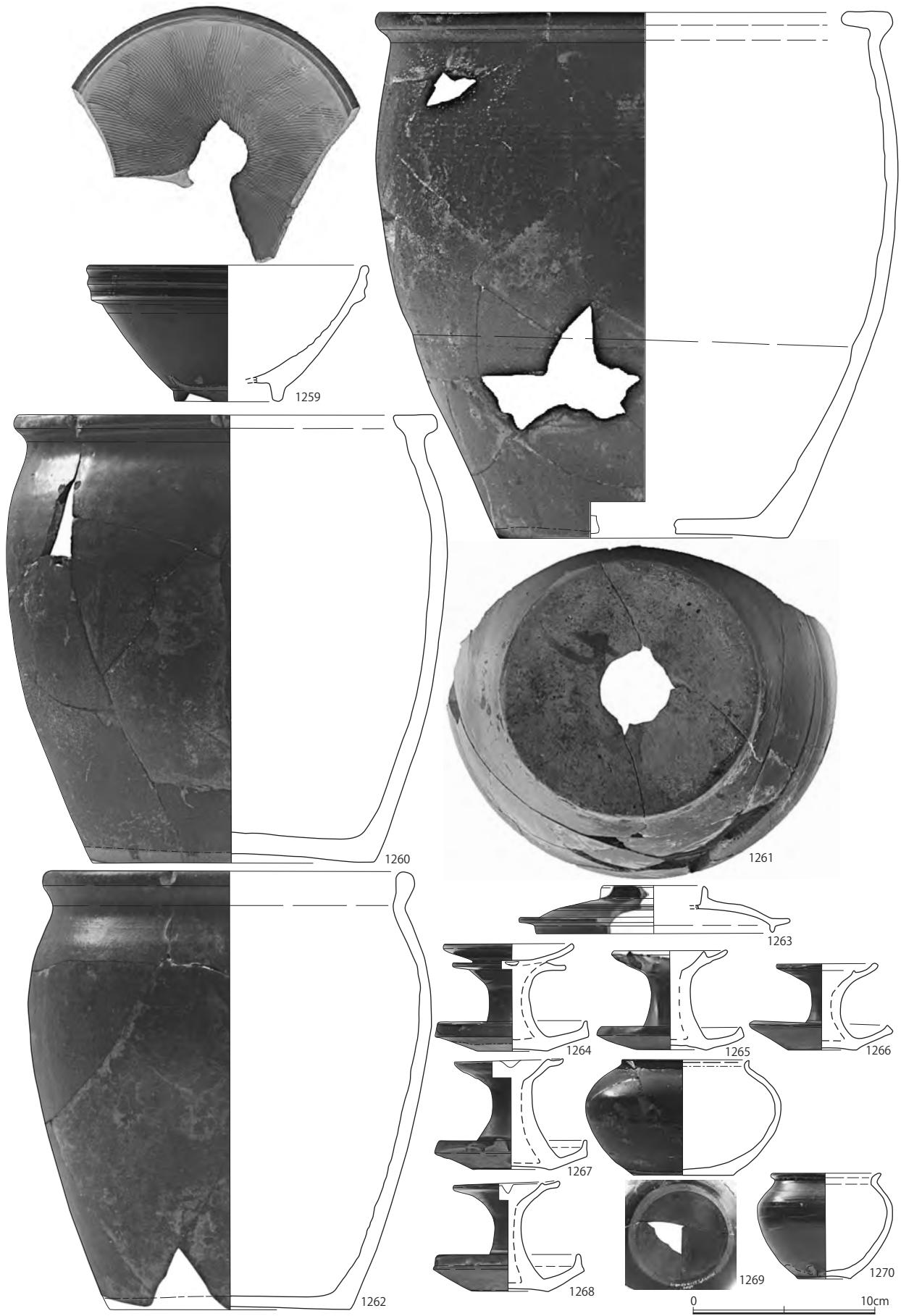
1280 は珉平焼の皿である。型打成形で、口縁部は輪花となる。畳付を除く内外面に緑釉をかける。

1281 は珉平焼の急須である。底部と蓋受けを除く外面に緑釉、内面に透明釉をかける。底部外面に「イ小」の墨書と重ね焼き痕がみられる。

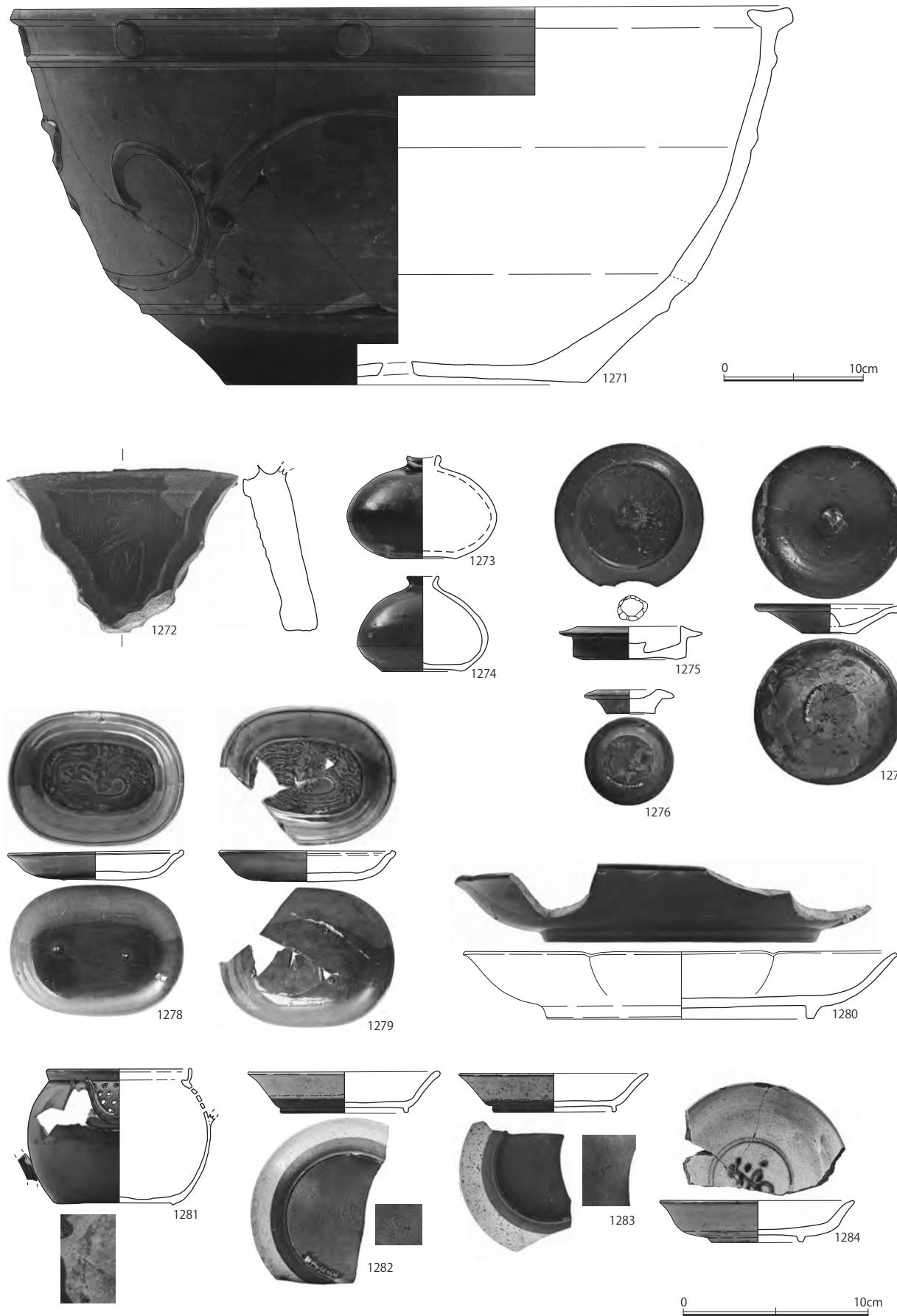
1282・1283 は産地不明陶器の皿である。胴下半部外面から高台内を除き白化粧土を塗布したのち、黒色の鉄粉状微粒子を含む透明釉をかける。高台内に不鮮明な楕円枠内不明文字の刻印がみられる。

1284 は産地不明陶器の皿である。畳付から高台内を除き白化粧土を塗布したのち透明釉をかける。見込に呉須による「寿」字を描く。

1285 は産地不明陶器の鉢である。胴下半部外面から高台内を除き灰釉をかける。内面に白化粧土のイッチン描と緑釉により文様を描く。畳付際を面取りする。



第279図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(40)（縮尺：1／3）



第280図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(41)（縮尺：1／3 1271 縮尺：1／4）

1286 は産地不明陶器の瓶である。底部を除く外面に灰釉をかける。外面に鉄釉による文字を描く。

1287 は産地不明陶器の壺である。口縁端部と胴下部から底部を除く外面に鉄釉（鮫釉）をかける。

1288 は産地不明無釉焼締陶器の練鉢・捏鉢である。底部に環状の沈線と板目状圧痕がみられる。見込および底部と体部には色調差がある。

1289～1291 は産地不明陶器の鍋である。1289 は胴下部から底部外面を除き鉄釉をかける。底部内面にハリ支え痕がみられる。1290 は胴下部外面を除き鉄釉をかける。1291 は胴下部から底部外面を除き鉄釉をかける。見込にハリ支え痕がみられる。底部外面にススが付着する。

1292 は産地不明陶器の行平鍋である。口縁部から胴上半部外面に鋳釉、蓋受けから胴上部を除く内面に灰釉、把手に鉄釉をかける。胴上半部外面にトビガンナを施し、把手上面には型押成形による陽刻の菱文と変形字銘を施す。底部外面にススが付着する。

1293～1297 は産地不明陶器の行平鍋の蓋である。1293 は口縁部内面を除く内外面に灰釉をかける。外面に白化粧土と鉄釉による花文？を描く。1294 は見込に灰釉をかける。外面にトビガンナを施し、鋳釉による帶線を描く。1295 は見込に鉄釉をかける。外面にトビGANNAを施し、鋳釉による帶線と白化粧土による花文を描く。1296 は見込に灰釉をかける。外面にトビGANNAを施し、鋳釉による帶線と白化粧土のイッチン描による折松葉文と梅花文？を描く。1297 は全面に灰釉をかけ、口縁部内外面は釉剥ぎする。

1298 は産地不明陶器の急須とその蓋である。手のない小壺形の急須である。急須本体の底部を除く外面と蓋の外面に白化粧土を塗布したのち透明釉をかける。急須本体の外面に鉄絵と白化粧土のイッチン描による葡萄文を描く。蓋の外面にも鉄絵を描く。蓋の底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1299～1302 は産地不明陶器の土瓶である。1299 は口縁端部を除く外面と胴上部内面に灰釉、胴中部内面に透明釉をかける。外面に鉄絵による松文を描く。内外面にススが付着する。1300 は外面と口縁部内面から胴上部内面に白化粧土を塗布したのち、口縁端部と胴下部から底部を除く外面に黒色の鉄粉状微粒子を含む透明釉をかける。胴上部から底部内面には鋳釉をかける。外面に白化粧土を塗布したのち呉須による窓絵山水文と丸文内七宝繋ぎ文を描く。底部外面にススが付着する。1301 は外面全面に白化粧土を塗布したのち口縁端部と胴下半部から底部を除く外面に透明釉をかける。胴部内面に粗く灰釉をかけ、鉄染みがみられる。外面に呉須による菊文と牡丹文を描く。1302 は口縁端部と胴下半部から底部を除く外面と胴上部内面に鉄釉（褐釉）をかける。口縁端部の露胎部にはアルミナ砂を塗布する。胴上半部外面にトビGANNAを施す。胴下半部から底部外面にススが付着する。池状遺構（第1遺構面）埋土最上層の破片と接合する。

1303～1316 は産地不明陶器の土瓶の蓋である。1303 は外面にトビGANNAを施し、鉄釉をかける。1304 の摘みには体部と異なる胎土で手捏ね成形の狛犬？を貼り付ける。摘みを除く外面に白化粧土を塗布したのち、黒色の鉄粉状微粒子を含む透明釉をかける。呉須による捻文を描く。1305～1307 は外面に白化粧土を塗布したのち、黒色の鉄粉状微粒子を含む透明釉をかける。1305 は呉須と白化粧土による放射状文を描く。1306 は白化粧土のイッチン描と呉須による花文を描く。1307 は呉須と白化粧土による放射状文と烈点文を描く。1308・1309 は外面に白化粧土を塗布したのち透明釉をか

ける。鉄釉と緑釉による捻花文を描く。1310は外面に灰釉をかける。外面に白化粧土のイッチン描による文様を描く。1311は外面に白化粧土を塗布したのち黒色の鉄粉状微粒子を含む透明釉をかける。1312は外面に灰釉をかける。1313は外面に白化粧土を塗布したのち透明釉をかけ、緑釉を流し掛けする。1314・1315は外面に白化粧土を塗布したのち透明釉をかける。1314は外面に呉須による草花文、1315は外面に呉須による松文を描く。1316は無釉焼締陶器。

1317は産地不明陶器の土瓶または段重・蓋物の蓋である。外面に灰釉をかける。

1318は産地不明陶器の土瓶または段重・蓋物の蓋である。外面と見込に灰釉をかける。外面に鉄釉による帶線を描く。

1319は産地不明陶器の土瓶または急須の蓋である。外面に白化粧土を塗布したのち透明釉をかける。外面に鉄釉と緑釉による捻花文を描く。

1320は産地不明陶器の蓋である。外面に灰釉をかけ、鉄釉を流し掛ける。

1321は産地不明陶器の蓋である。外面に灰釉をかけ、鉄釉を流し掛ける。底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1322・1323は産地不明陶器の蓋である。外面に鉄釉をかける。

1324は産地不明陶器の蓋である。外面に白化粧土を塗布したのち透明釉をかける。外面に鉄絵による唐草文？を描く。

1325は産地不明陶器の水注の蓋である。上面に鉄釉をかける。下面に左回転の糸切り離し痕がみられる。

1326は産地不明陶器の花生である。底部外面を除き内外面に鉄釉をかける。

1327は産地不明陶器の灯芯押さえである。手捏ね成形で、上面に鉄釉をかける。

1328は産地不明陶器の陶錘である。部分的に鉄釉をかける。

1329は産地不明陶器の窯道具（輪トチ）である。無釉焼締陶器。

1330は産地不明陶器の窯道具（エブタ）である。無釉焼締陶器。鉄釉のかかった陶片が付着する。

1331～1336は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。1331・1333・1336は口縁部に灯芯油痕がみられ、1331は見込と底部、1332は底部全面、1333は内外面にススが付着する。

1337～1340は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。1337・1339は口縁部に灯芯油痕がみられ、1337～1339は外面にススが付着する。

1341・1342は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右？回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕は不明である。1342は見込にススが付着する。

1343は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。内外面にススが付着する。

1344～1346は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕は不明である。

1347は土師質土器の御廐系焙烙である。底部と口縁部外面に指頭圧痕がみられる。内面はナデ調整である。

1348・1349は土師質土器の秉燭である。1348は口縁部に灯芯油痕、底部に板目状圧痕がみられる。1349は型押成形で、内面に指紋がみられる。芯立上面にススが付着する。

1350は土師質土器の焼塩壺である。ロクロ成形で、底部に左回転の糸切り離し痕がみられる。刻印はない。

1351は土師質土器の焼塩壺の蓋である。型押成形で、内面に布目痕がみられる。

1352は土師質土器の焼塩壺の蓋である。片面に墨書きがみられる。

1353は京都系土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「涼炉」。胎土は白色に近い灰白色、硬質で鬆が入る。窓上部に「松□（「湯」）」と「聯泉」、窓下部に「□□（「ふか」）くさ」の陰刻がみられる。外面はヘラケズリが顯著で、口縁端部から胴上部内面にススが付着する。

1354は土師質土器の火鉢・焜炉類である。上半部は欠損するが、口縁部から切り込む出窓をもつ。高台は2方向に切り込まれる。底部を除く外面にミガキと赤彩を施す。窓の下に印花の唐草文を施す。

1355は土師質土器の火鉢・焜炉類である。上半部は二重構造であるが、内部施設は欠損する。上半部の内面上部に角状突起を3方向に貼り付ける。下半部の高台に穿孔を4方向に施す。上半部の窓横に「⊕」と楕円枠内「ふかくさ？平蔵」の刻印がみられる。上半部の内面上部にススが付着する。上下ともに外面にミガキを施す。

1356は京都系土師質土器の五徳の脚部である。胎土は白色に近い灰白色、硬質で精良である。全体に丁寧なナデが施され、下部に指頭圧痕がみられる。

1357は京都系土師質土器の五徳の環状の台部である。胎土は白色に近い灰白色、硬質で精良である。全体に丁寧なナデが施される。ススが付着する。

1358は京都系土師質土器の五徳である。胎土は白色に近い灰白色、硬質で精良である。全体に丁寧なナデが施される。

1359は土師質土器の火鉢・焜炉類の蓋である。1363のように平面方形の上方を開放する箱形の火鉢・焜炉類の蓋と思われる。内面全面にススが付着する。

1360は土錘である。

1361は硬質土師質土器の皿である。底部は同心円状の回転ヘラケズリである。

1362は瓦質土器の鍋敷きである。輪切りにした木を模している。底面に「雲」の刻印がみられる。

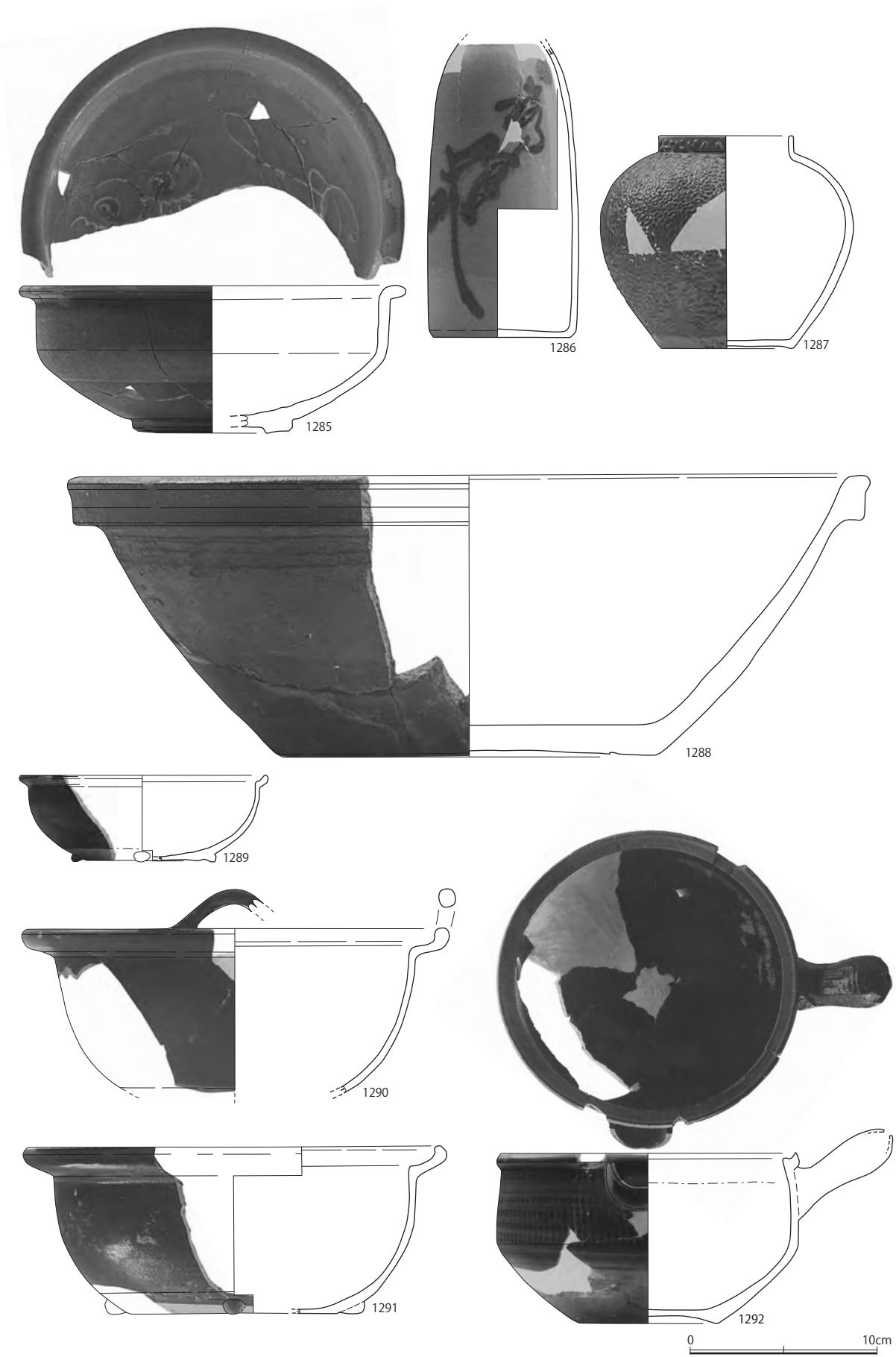
1363は瓦質土器の火鉢・焜炉類である。口縁部上面に「龕」の刻印がみられる。

1364は瓦質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「置竈」。底部外面に板状の三足を貼り付ける。胴上部外面に浅い沈線と2連の穿孔を施す。窓上部に「④」の刻印がみられる。底部を除く外面にミガキを施す。内面にわずかに漆喰が付着する。

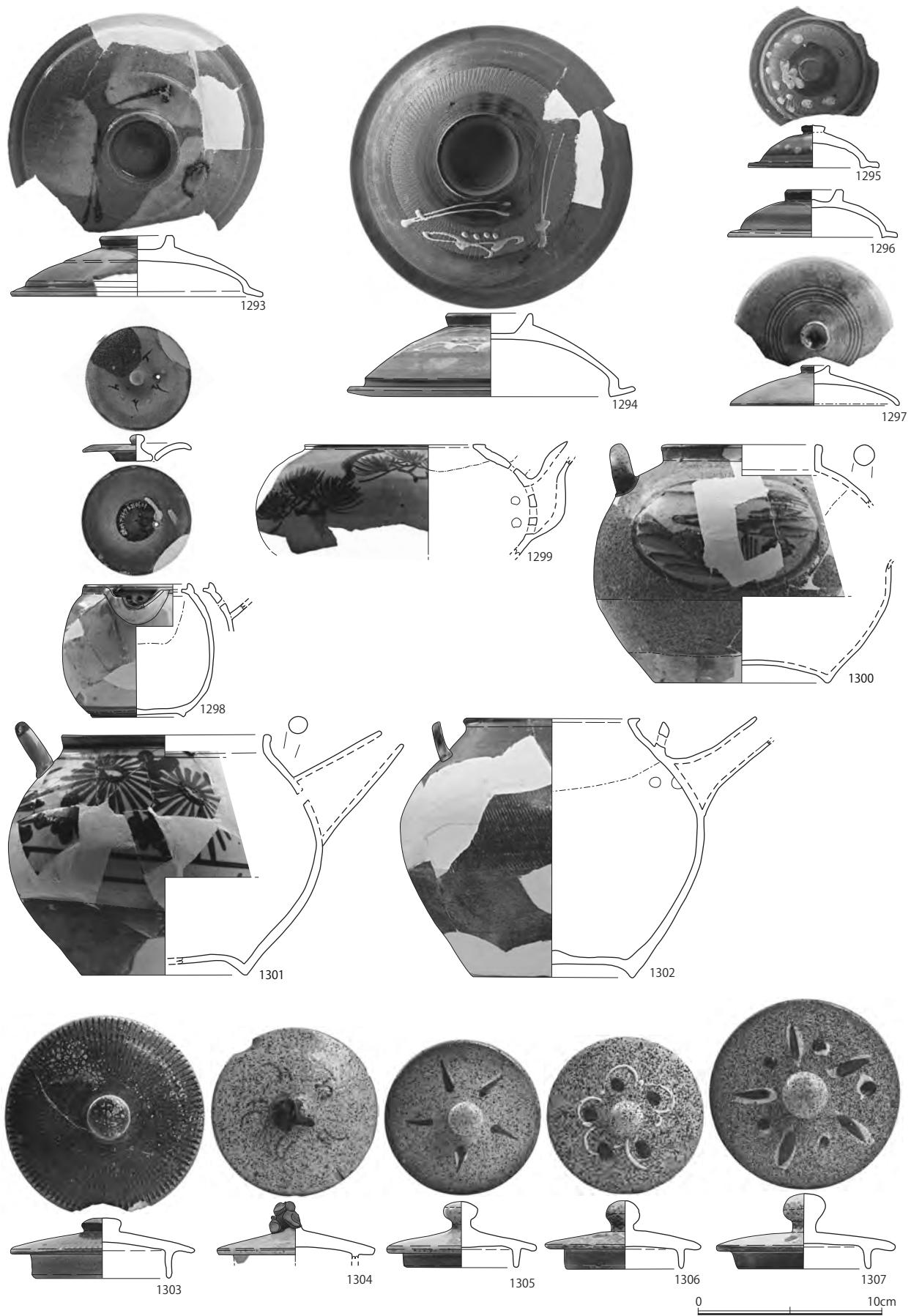
1365・1366は土師質土器の皿である。1365は口縁部外面から内面全面に橙色を呈する透明釉をかける。見込に「元」の刻印、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。1366は内面に明赤褐色を呈する透明釉をかける。口縁部に灯芯油痕がみられる。

1367は土師質土器の土瓶とその蓋である。土瓶本体の胴上部内面と三足の先端部を除く内外面に暗赤褐色を呈する透明釉をかける。蓋は全面に暗赤褐色を呈する透明釉をかける。

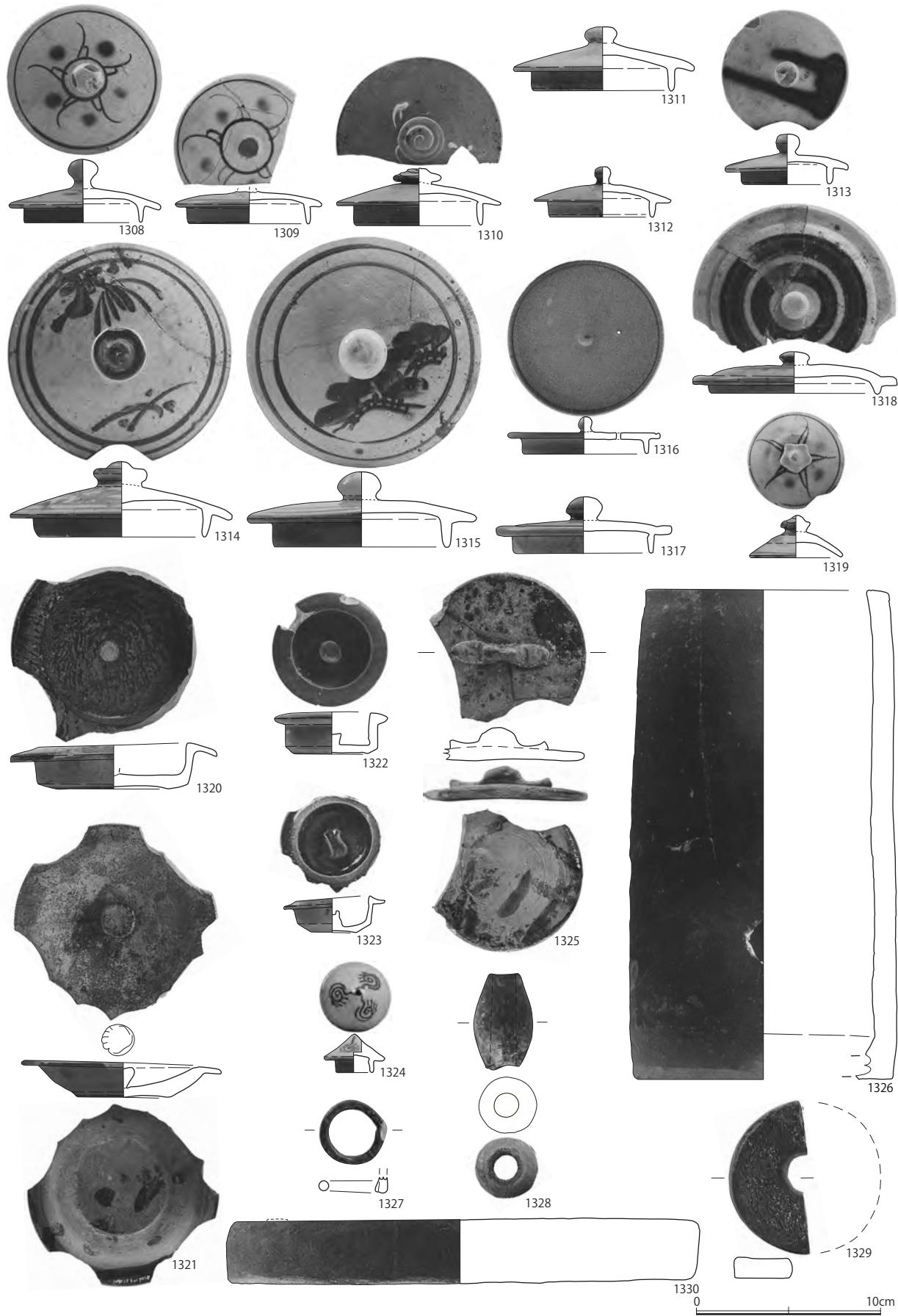
1368は土師質土器の土瓶である。胴上部内面を除く内外面に赤褐色を呈する透明釉をかける。



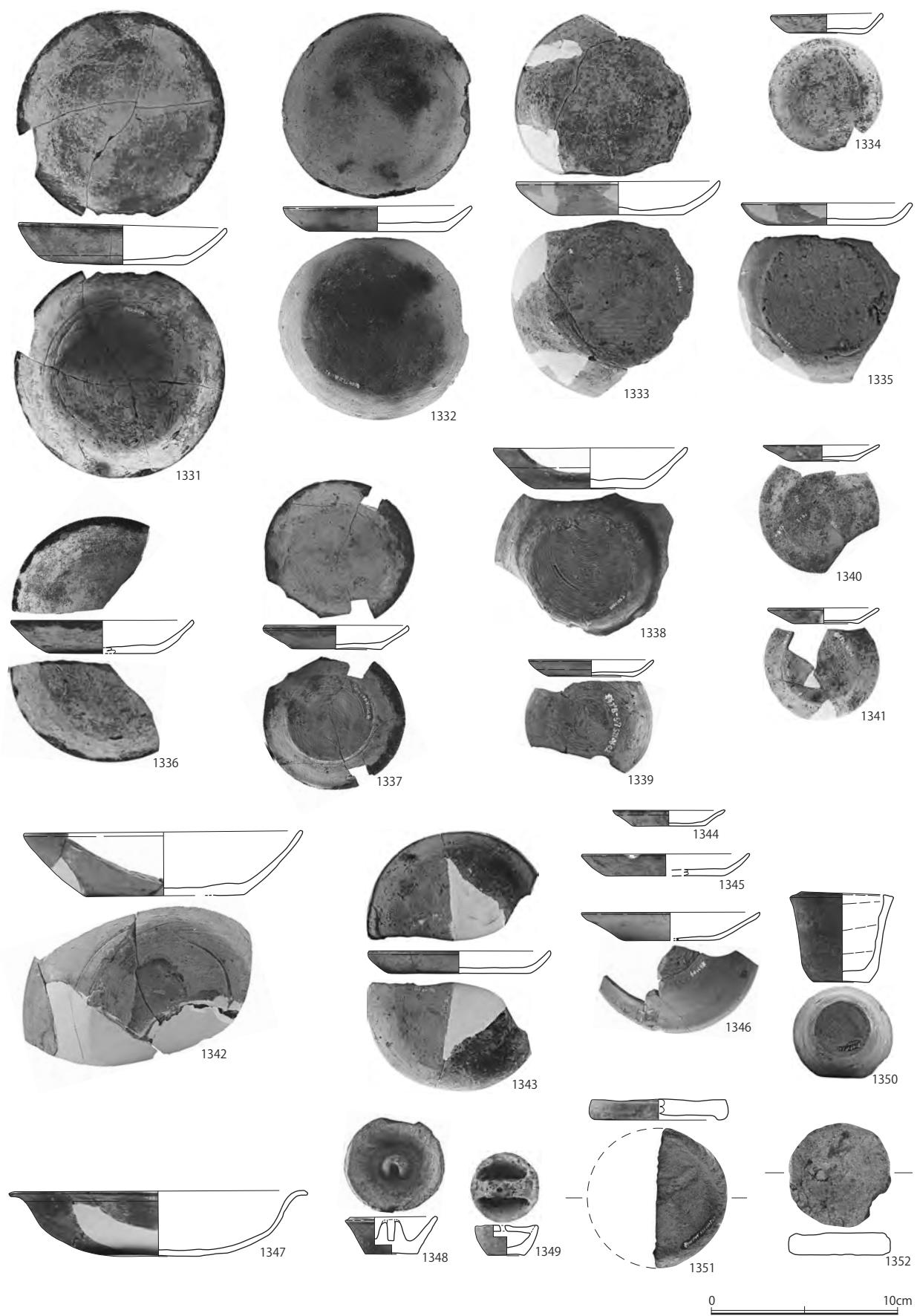
第281図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（42）（縮尺：1／3）



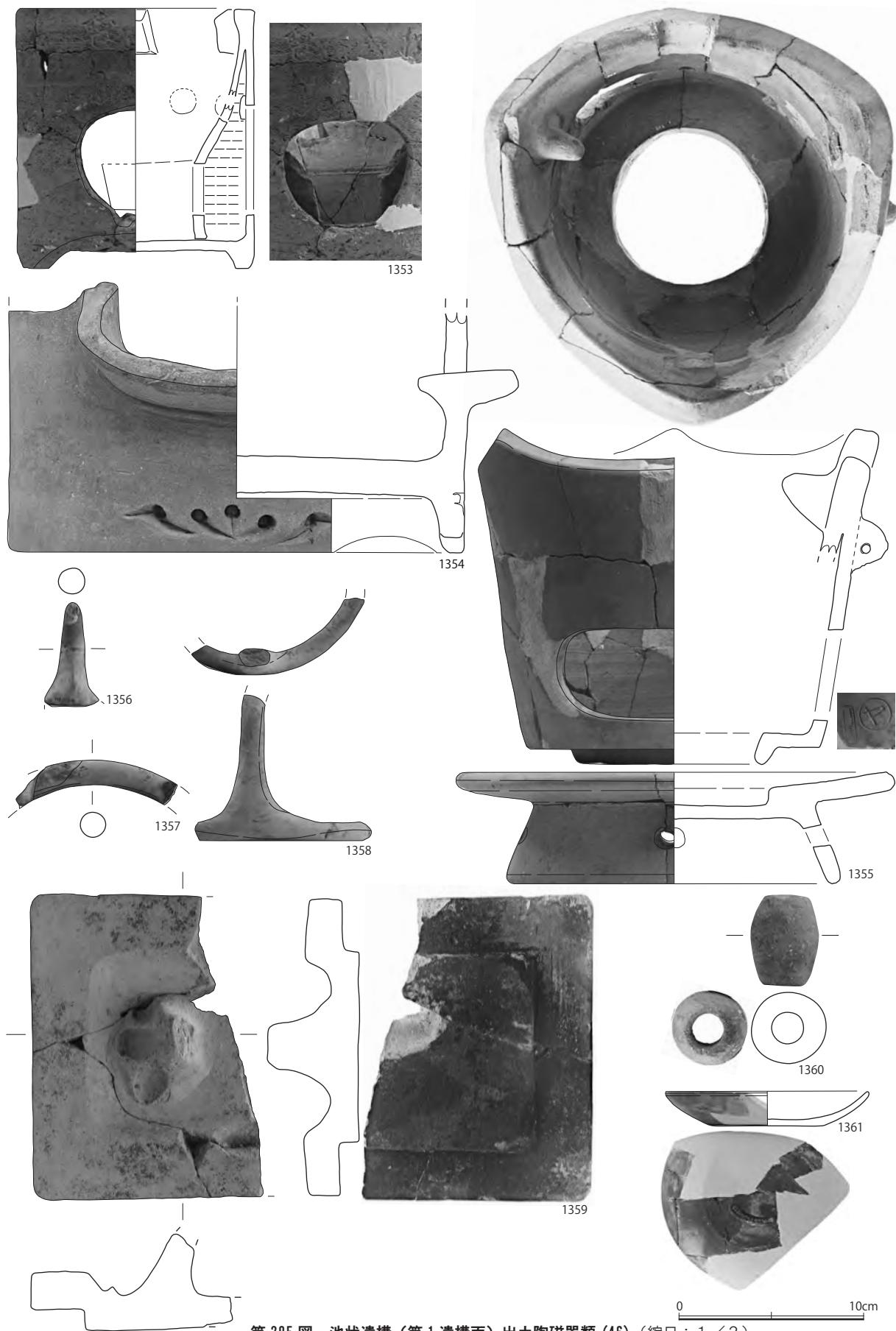
第282図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（43）（縮尺：1／3）



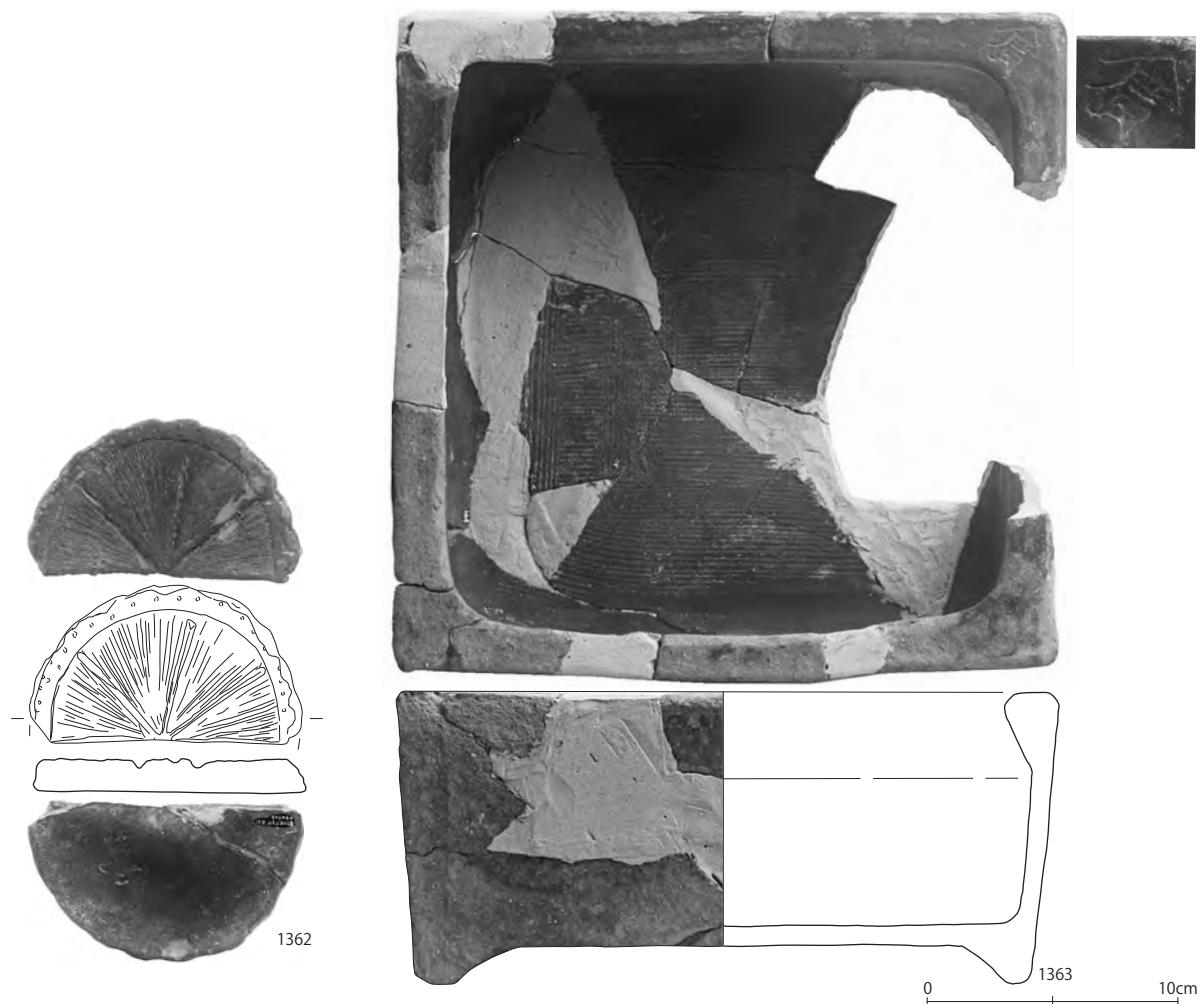
第283図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(44)（縮尺：1／3）



第284図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(45)（縮尺：1/3）



第285図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（46）（縮尺：1／3）



第286図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(47)（縮尺：1／3）

1369～1371は土師質土器の土瓶の蓋である。1369・1370は外面に明赤褐色を呈する透明釉をかける。底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。1370は口縁端部にススが付着する。1371は外面に赤褐色を呈する透明釉をかける。底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。口縁端部にススが付着する。

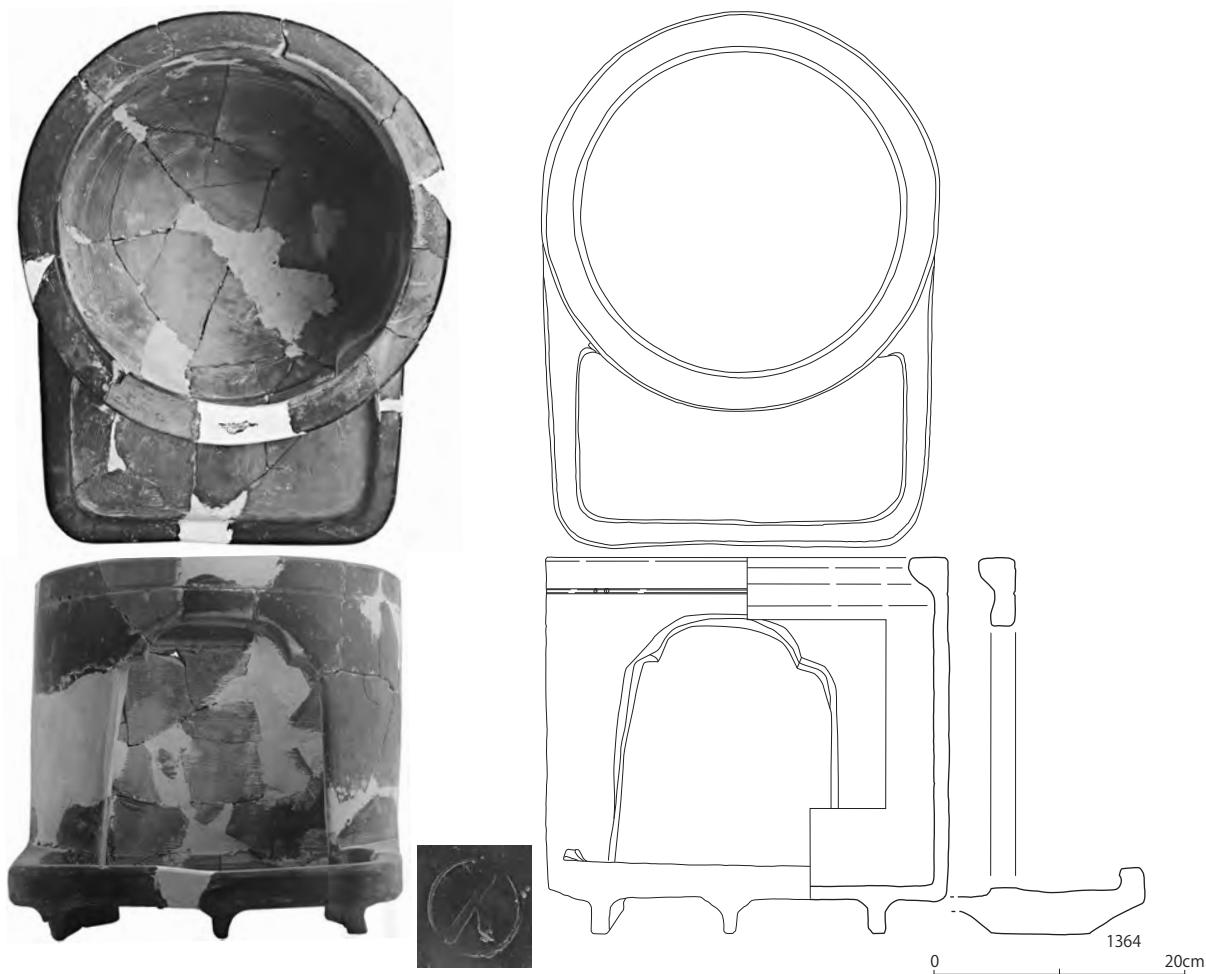
1372は土師質土器の土瓶の蓋である。内面の立ち上がり部分を除き赤褐色を呈する透明釉をかける。

1373は土師質土器の蓋である。外面に赤褐色を呈する透明釉をかけたのち、白化粧土による紅葉文？を描く。外面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1374は土師質土器の蓋である。型押成形による鳥形で、翼は貼り付けである。全面に透明釉をかけるが、剥離と銀化が著しい。内面に貫通しない穿孔がみられる。

1375は土師質土器の火鉢・焜炉類である。高台脇から畳付を除き赤褐色を呈する透明釉をかける。口縁部からU字形に3方向に切り込み、口縁部内面に突起を3方向に貼り付ける。底部は大きく穿孔され、これを受ける台部があったと思われる。

1376は土師質土器の行平鍋である。口縁部から胴上部外面、把手と注口外面、蓋受けを除く内面に赤褐色を呈する透明釉をかける。胴下半部外面にススが付着する。



第287図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（48）（縮尺：1／6）

1377・1378は源内焼と思われる軟質施釉陶器の皿である。1377は型打成形で、口縁部は輪花となる。白色化しているが、緑釉と思われる釉を全面にかける。釉の表面は銀化する。口縁部内面に陽刻の如意頭文、内側面に陽刻の菊唐草文を施す。1378は型打成形で、口縁部は輪花となる。全面に緑釉をかける。口縁部内面に陽刻の放射状文、内面に陽刻の松文を施す。

1379は産地不明の軟質施釉陶器の行灯皿である。底部を除く内外面に緑釉、底部に透明釉をかける。釉の剥離が著しく、緑釉の表面は銀化する。

1380は肥前系磁器のミニチュアの碗である。型押成形。内面にのみ透明釉をかける。

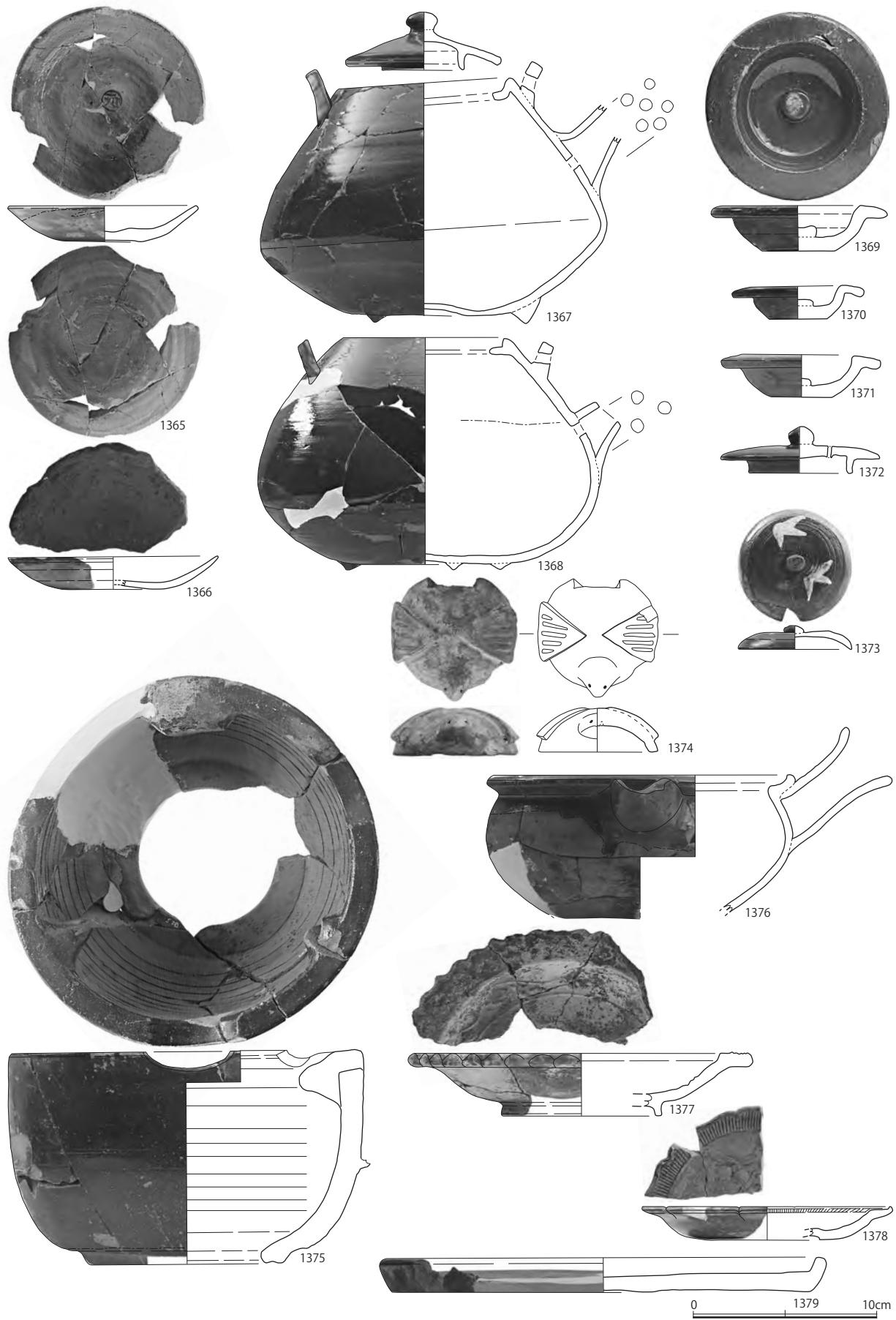
1381は肥前系磁器のミニチュアの碗蓋である。白磁。

1382は関西系磁器のミニチュアの瓶である。底部を除く外面に透明釉をかける。外面に染付による松竹梅文を描く。

1383は京・信楽系陶器のミニチュアの碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。

1384は備前系陶器のミニチュアの擂鉢である。口縁部外面から内面全面に塗土を施す。わずかに注口をつくる。

1385は産地不明陶器のミニチュアの蓋である。型押成形で、底面に指紋がみられる。外面に鉄釉をかける。



第288図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類（49）（縮尺：1／3）

1386 は産地不明陶器のミニチュアの城壁である。褐灰色を呈する胎土で、型押成形の中実である。無釉焼締陶器。

1387 は産地不明陶器の加工円盤である。片面には鉄釉が施釉され、無釉の面には指頭圧痕がみられる。二次加工前の器種は不明である。

1388～1391 は土人形である。1388 は西行。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に大きく穿孔する。全面に雲母の付着がわずかにみられる。1389 は大黒。型押成形による前後型合わせの中実で、底部を除き明黄褐色を呈する透明釉をかける。1390 は布袋。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。1391 は犬。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。

1392・1393 は土師質のミニチュアの碗である。1392 は型押成形。内面に明赤褐色を呈する透明釉をかける。1393 は畳付から高台内を除き赤褐色を呈する透明釉をかける。高台内に「樂」の刻印がみられる。畳付に重ね焼き痕がみられる。

1394 は土師質のミニチュアの行平鍋？である。内面に赤褐色を呈する透明釉をかける。底部外面に右回転の糸切り離し痕がみられる。把手は欠損する。

1395 は土師質のミニチュアの竈である。板作り成形。底部を除く外面に赤彩を施す。底部外面に墨書がみられる。外面は丁寧なミガキである。

1396・1397 は土師質のミニチュアの橋である。型押成形。1396 は上面全面に透明釉をかけ、白色の釉で橋板を部分的に装飾する。1397 は上面全面に透明釉をかけ、白色の釉と緑釉で欄干を装飾する。裏面に「ニヘ」？の墨書がみられる。橋板に穿孔が 1 箇所みられる。

1398 は土師質のミニチュアの灯籠である。型押成形による前後型合わせの中実である。白色で彩色されていたと思われる痕跡がみられる。

1399 は土師質のミニチュアの車輪である。型押成形。裏面に車軸用の穿孔（貫通しない）がみられる。

1400 は土師質の鳩笛である。型押成形による左右型合わせの中空である。背部から胴部、尾部から胴部にかけ小さく穿孔する。胸部と腹部と足を除き透明釉をかけ、頭部から翼の前半分を緑釉、尾部上面を褐色釉で彩色する。

1401 は土師質の面模である。型打成形による猿？である。外面に指頭圧痕、内面全面に雲母の付着がみられる。

1402～1404 は泥面子（面打）である。型押成形。1402 は陽刻の家紋「梅鉢」。1403 は陽刻の家紋「三ツ柏」。1404 は陽刻の家紋「かたばみ」。

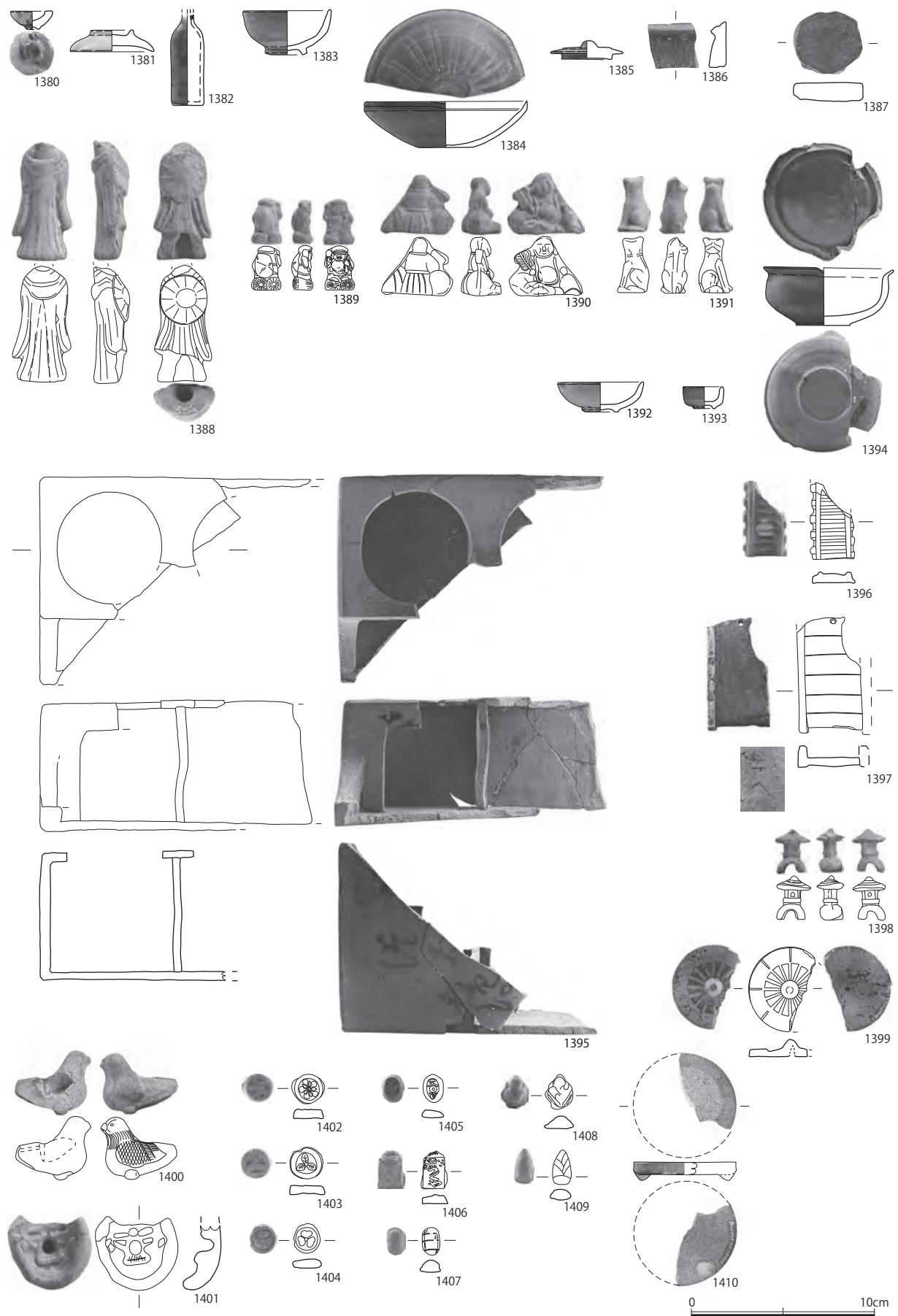
1405～1409 は泥面子（芥子面）である。型押成形。1405 は錢貨。陽刻の「文百」の文字。1406 は陽刻の「本家こ？ろくや」の文字。1407 は俵。1408 は蛙。1409 は筍。

1410 は窯道具（足付ハマ）である。円盤部分は耐火粘土、足は磁器製である。上面に墨書と環状の色調変化がみられる。

造り出し（第 290 図）

1411 は肥前系磁器の腰張碗である。内外面に染付による帶線を描く。

1412 は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台が無釉のものである。蛇ノ目釉剥ぎ部分に砂



第289図 池状遺構（第1遺構面）出土陶磁器類(50)（縮尺：1/3）

が付着する。内側面に染付による不明文様を描く。呉須の発色は悪い。

1413 は肥前系磁器の撥高台碗の蓋である。染付により外面に氷裂文と窓絵山水文・網干文、口縁部内面に四方櫻文、見込に草花文を描く。

1414 は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。口縁部は無釉で砂が付着する。外面に染付による扇面文と梅文を描く。

1415 は瀬戸・美濃系陶器の蓋である。口縁端部を除く外面に灰釉をかける。内面にススが付着する。

1416 は京・信楽系陶器の小壺である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。見込にハリ支え痕がみられる。外面に錆絵と呉須による琴柱文を描く。畳付際を面取りする。

1417 は備前系陶器のサヤ形鉢である。胴中部外面に判読不明の刻印がみられる。

1418 は備前系陶器の灯明皿である。口縁部外面から内面全面に塗土を施す。口縁部に灯芯油痕がみられる。

1419 は備前系陶器の片口をもつ壺である。内面全面に鉄鑄状物質が付着している。お歯黒壺と思われる。底部外面に植物（藁？）の纖維状圧痕がみられる。

1420 は産地不明陶器の鍋である。胴下部から底部外面を除き鉄釉をかける。露胎部分にススが付着する。

1421 は産地不明陶器の爛鍋の蓋である。口縁端部を除く外面に鉄釉をかける。

1422 は土師質土器の関西系焙烙である。胴部外面と底部内面にススが付着する。

1423・1424 は土人形である。1423 は武者。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。上半部全面に茶色の彩色の痕跡がみられる。1424 は馬。型押成形による左右型合わせの中実で、台座に小さく穿孔する。

1425 は土師質のミニチュアの六角瓶である。型押成形。胴下部から底部を除く外面に緑釉をかける。

石組み溝1（第291図）

1426 は肥前系磁器の端反形小壺である。残存部に文様はみられない。

1427 は肥前系磁器の端反碗の蓋である。染付により外面に素書の梅文、口縁部内面に渦文、見込に素書の草花文を描く。

1428・1429 は肥前系磁器の御酒徳利である。内面は無釉。染付による松文と草文を描く。

1430 は肥前系陶器の刷毛目皿である。高台脇から高台内を除き鉄釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。内面に刷毛目を施す。

1431 は肥前系陶器の二彩手の甕である。

1432 は瀬戸・美濃系陶器の灰釉大皿である。慣用名「石皿」。

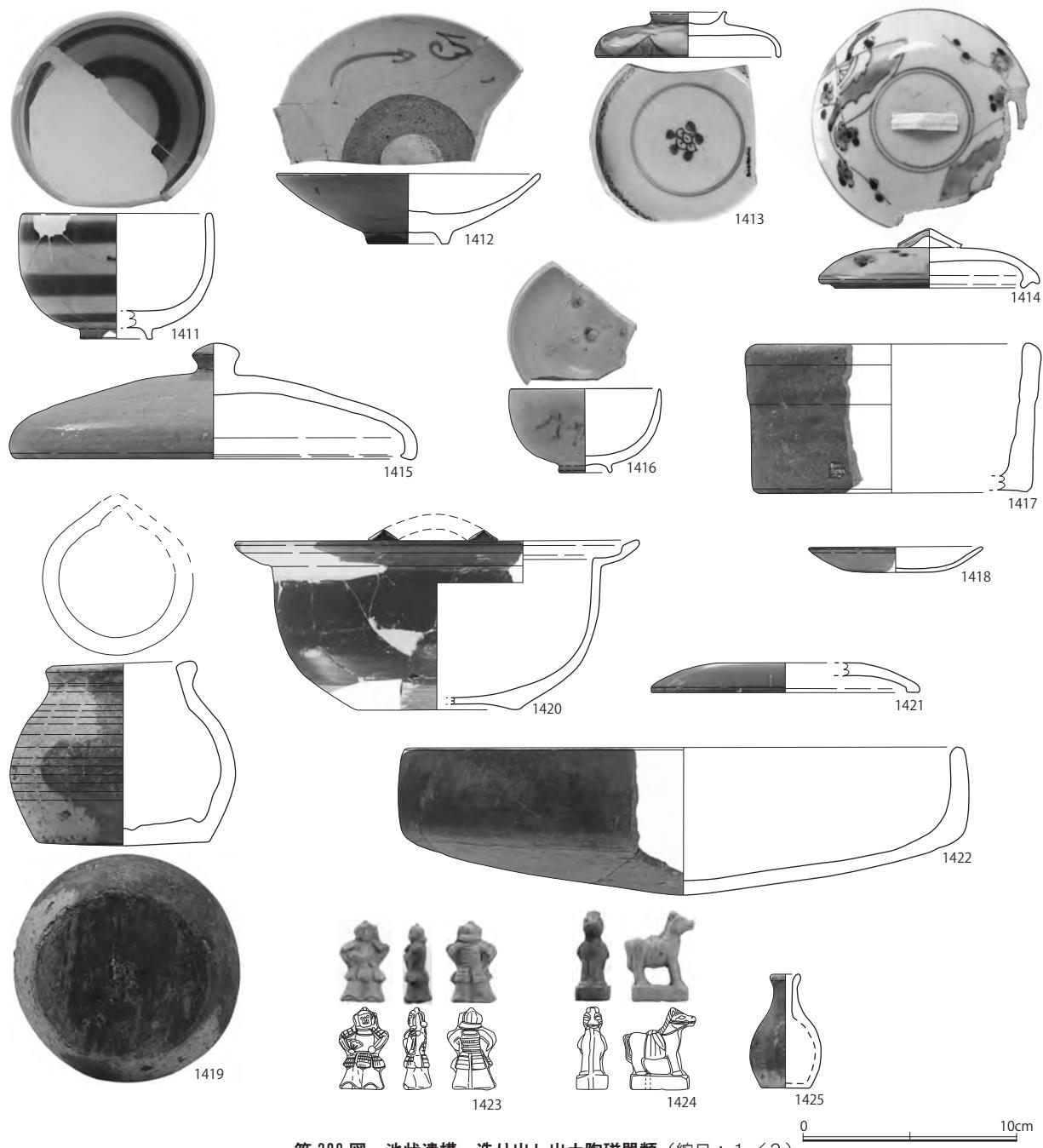
1433 は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。

1434 は京・信楽系陶器の端反碗である。胴部内外面に灰釉、口縁部内外面に緑釉を掛け分ける。

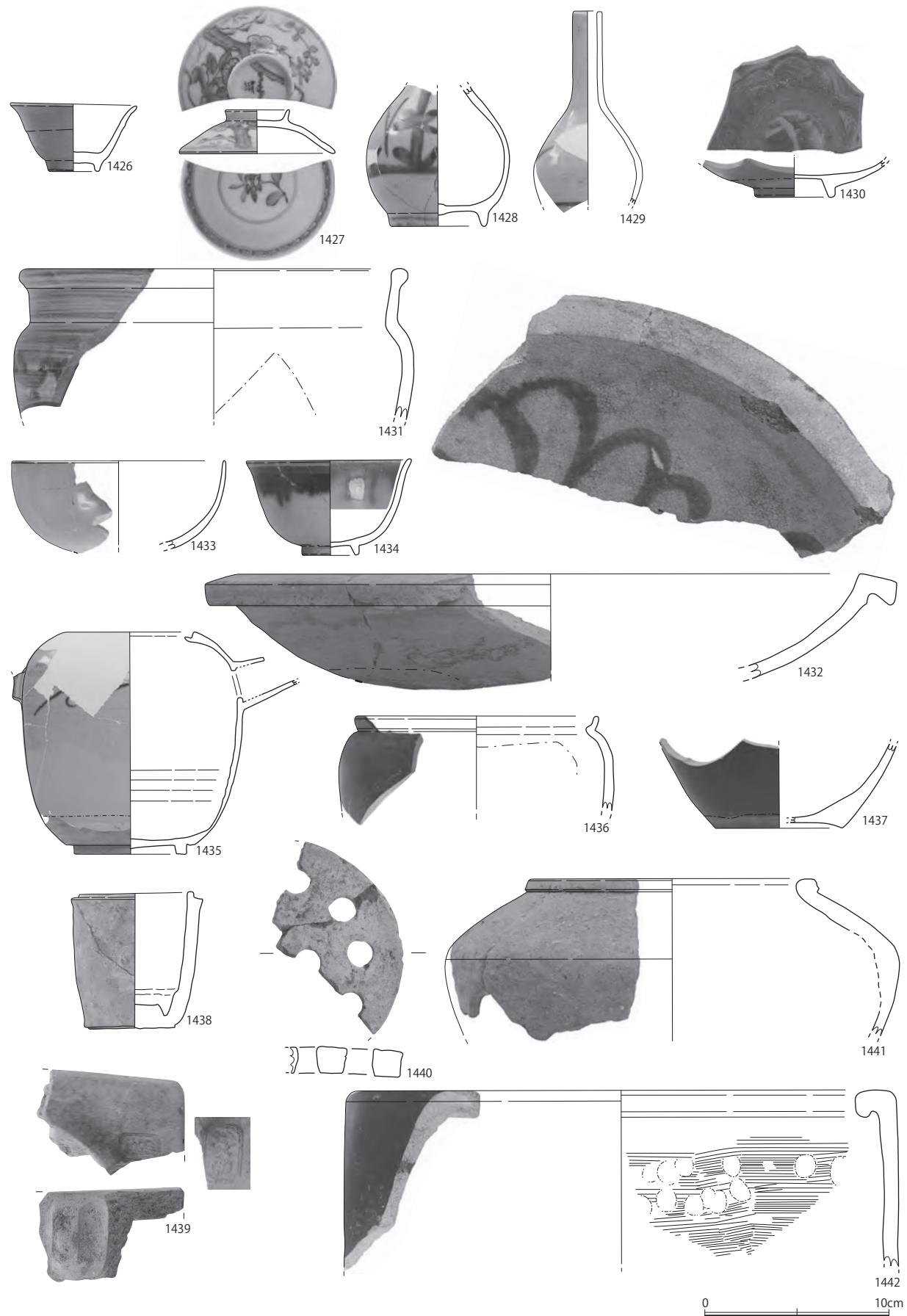
1435 は京・信楽系陶器の水注である。胴下部から高台内を除く外面と蓋受けを除く内面に灰釉をかける。外面に錆絵と呉須による流水文を描く。

1436 は備前系陶器の極小甕である。胴上部内面から外面にかけ塗土を施す。

1437 は大谷焼の瓶である。底部を除く外面に鉄釉をかける。



第290図 池状遺構 造り出し出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第291図 石組み溝1出土陶磁器類（縮尺：1/3）

1438 は土師質土器の焼塙壺である。板作成形。粘土塊を外側から詰めて底部とし、底部外面には板目状圧痕がみられる。

1439 は土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「七厘」。外壁上面にススが付着し、二重枠内「喜助」（「喜助」）の刻印がみられる。

1440 は土師質土器のさなである。

1441 は土師質土器の火消壺である。口縁部内面から肩上部内面にススが付着する。胴部内外面は表面剥離が著しい。

1442 は瓦質土器の火鉢・焜炉類である。外面はミガキ、内面は横ハケを施す。外面に陰刻の花文がみられる。

石組み溝 2 (第 292 ~ 294 図)

1443 は肥前系磁器のくらわんか碗である。染付により外面に靈芝文、口縁部内面に四方擗文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圈線内文様を描く。

1444 ~ 1446 は肥前系磁器の端反碗である。1444 は染付により外面に柳文と雪文？と三日月文、口縁部内面に格子文、見込に岩波文を描く。高台に砂が付着する。1445 は染付により外面に松文と蓮弁文、口縁部内面に墨弾きの雲文、見込に蓑亀文を描く。1446 は染付により外面に笹文と草文と半菊花文、口縁部内面に波線、見込に草文を描く。

1447 は肥前系磁器の半球形小杯である。外面に染付による宝珠文と稻束文を描く。

1448 は肥前系磁器の碁笥底の小杯である。残存部に文様はみられない。

1449 は肥前系磁器の薄手酒杯である。内面に色絵（青色）による吹墨と墨弾きの折枝松文を描く。

1450 は肥前系磁器の鉢である。外面に瑠璃釉、内面と高台内に透明釉をかける。畳付は無釉。染付により口縁部内面に雷文、内面に扇面内薄文と紫陽花文、高台内に「閑？造祥瑞」銘を描く。

1451 は瀬戸・美濃系磁器の端反碗の蓋である。染付により外面に折枝桜文と線彫りの宝文？、口縁部内面に波線、見込に桜文を描く。

1452 は関西系磁器の皿である。胎土は光沢があり、畳付露胎部は薄い橙色を呈する。染付により外面に折松葉文、内面に山水文を描く。呉須の発色は良好である。

1453 は肥前系陶器の三島手の碗である。

1454 は肥前系陶器の植木鉢である。底部を除く外面に灰釉をかけ、底部と内面に鉄漿を塗布する。

1455 は肥前系陶器の瓶である。畳付を除く外面に藁灰釉をかける。高台内に鉄釉による文字または文様がみられる。畳付に砂が付着する。

1456 は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。高台脇から高台内は無釉である。

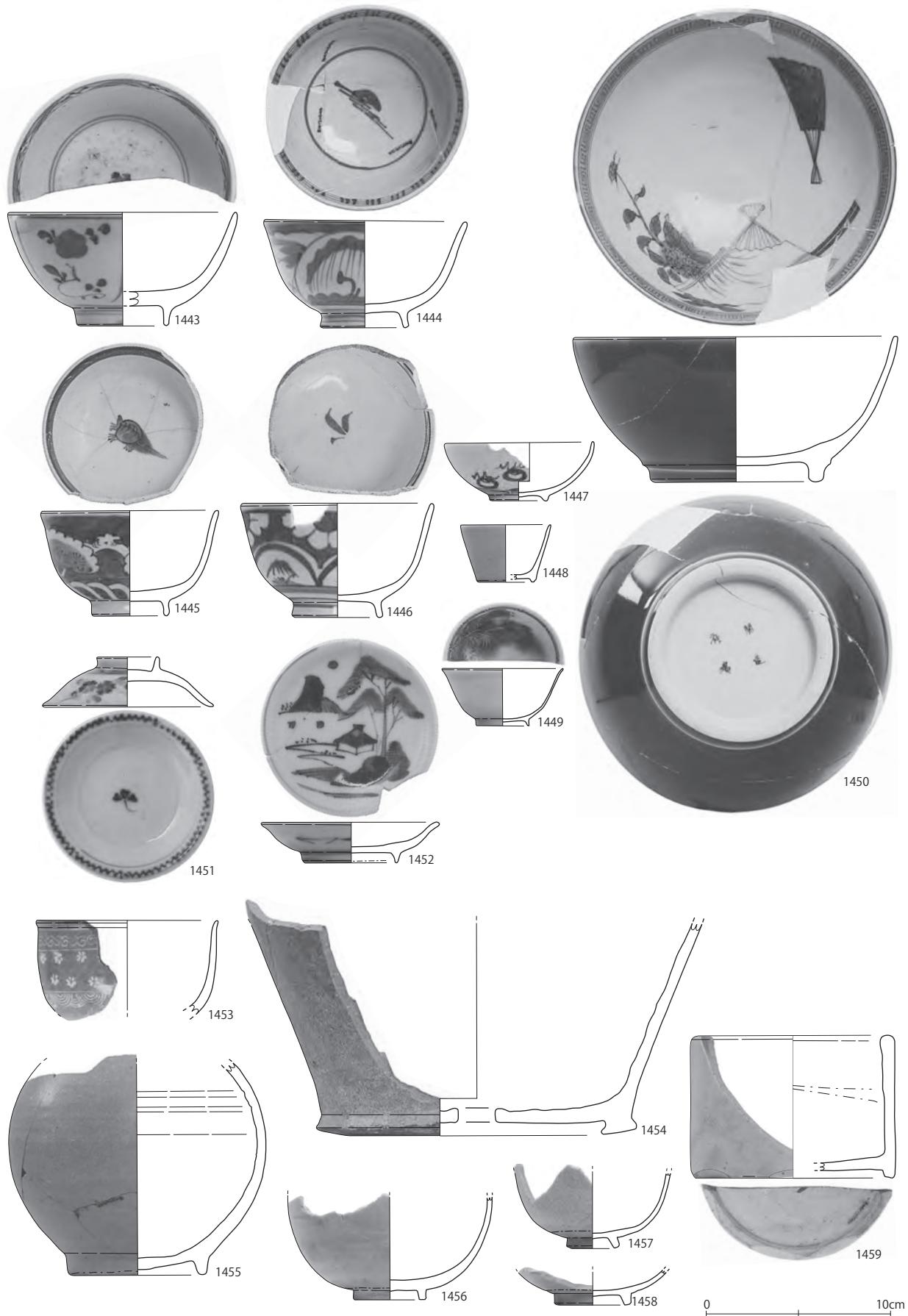
1457 は京・信楽系陶器の端反碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。

1458 は京・信楽系陶器の碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。

1459 は京・信楽系陶器の香炉・火入である。内面上半から外面全面に白化粧土を塗布したのち口縁端部と底部を除き灰釉をかける。底部に墨書がみられる。

1460・1461 は京・信楽系陶器の灯明受皿である。内面に灰釉をかけ、仕切り端部は釉剥ぎする。

1461 は仕切りに U 字形の溝が 1 箇所みられる。



第292図 石組み溝2出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)

1462 は瀬戸・美濃系陶器の甕である。内外面に鉄釉をかける。

1463 は備前系陶器の灯明皿である。内面に塗土を施す。口縁部に灯芯油痕がみられる。

1464～1466 は堺・明石系陶器の擂鉢である。胴部外面調整はヘラケズリ。1464 は退化した注口をもつ。1466 は口縁帶内外面に自然釉がかかる。見込のスリメは放射状と思われる。胴部外面調整のヘラケズリは丁寧に横ナデされ、ヘラケズリの痕跡はほとんどみられない。

1467・1468 は大谷焼の瓶である。慣用名「口長」。1467 は畳付から高台内を除く外面に鉄釉をかける。1468 は畠付を除く外面に鉄釉をかけ、肩部の 4 方向に陰刻の「森」、「嘉」、「登」、「戌秋」の文字がみられる。畠付に砂が付着する。

1469 は大谷焼の瓶である。底部を除く外面に鉄釉をかける。

1470 は大谷焼の土瓶または水注の蓋である。外面に鉄釉をかける。

1471 は大谷焼の甕である。蓋受けをもつ。内外面に鉄釉をかける。

1472 は大谷焼の植木鉢である。胴上部内面から底部を除く外面に鉄釉をかける。

1473～1475 は産地不明陶器の土瓶である。1473 は外面と口縁部内面に灰釉をかけ、口縁端部にアルミナ砂を塗布する。外面に白化粧土と緑釉のイッチン描による花文を描く。内面にススが付着する。1474 は口縁端部から胴上部内面を除き灰釉をかける。外面に白化粧土と鉄釉による鷹文を描く。1475 は口縁端部から口縁部内面を除き灰釉をかける。外面に白化粧土と鉄釉による文様を描く。

1476・1477 は産地不明陶器の土瓶の蓋である。1476 は外面に灰釉をかけ、白化粧土のイッチン描による捻花文を描く。1477 は外面に灰釉をかけ、鉄絵による山水文と帆掛け舟文を描く。

1478 は土師質土器の秉燭である。全面に透明釉をかける。底部に型押成形による陽刻の「下人」の文字がみられる。芯立先端にススが付着する。

1479 は土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「七厘」。外壁上面にススが付着し、二重枠内「姫助」（「喜助」）の刻印がみられる。

1480 は土師質土器の行平鍋の蓋である。全面に橙色を呈する透明釉をかける。

1481 は土師質土器の行平鍋である。底部と蓋受けを除き赤褐色を呈する透明釉をかける。

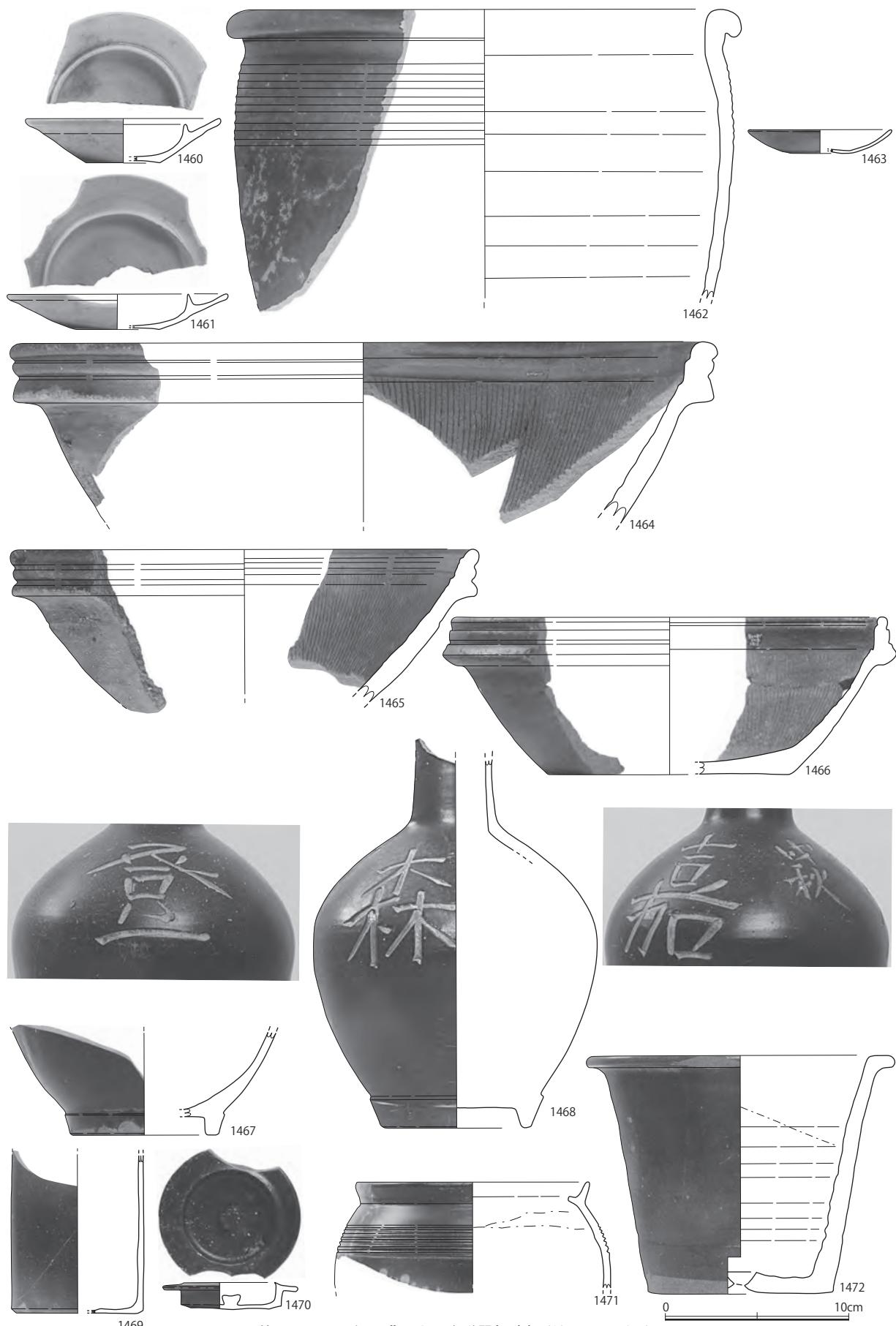
1482 は産地不明の軟質施釉陶器の皿である。淡黄色の透明釉をかけていたと思われるが、剥離が著しい。内面に型打成形による陽刻の斜格子内花文を施す。

石組み溝 3 (第 295～303 図)

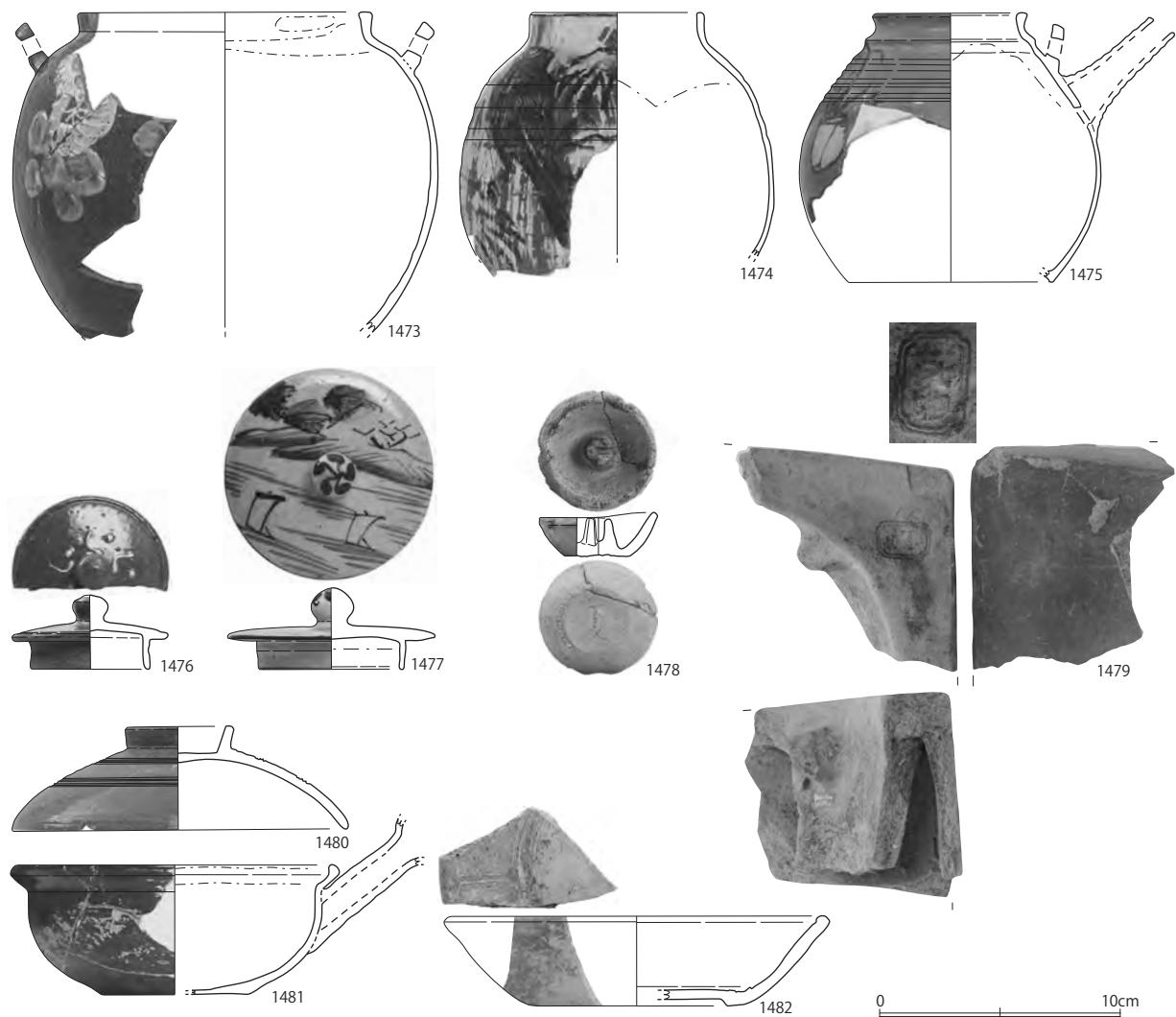
1483・1484 は肥前系磁器の U 字形高台の碗のうち高台の高いものである。1483 は青磁染付。口縁部内面に染付による雨降り文？を描く。口縁端部に口紅を施す。高台の釉際処理はやや不揃いで、畠付に砂が付着する。1484 は染付により外面に草花文、高台内に一重圈線内「大明年製」銘を描く。高台の釉際処理は揃い、畠付に砂の付着はみられない。

1485～1488 は肥前系磁器の U 字形高台の碗のうち高台の低いものである。1485 は外面に染付による竹文、梅文、霞文を描く。1486 は染付により外面に竹垣文と草花文、高台内に「渦福」銘を描く。1487 は染付により外面に山水文と帆掛け舟文と雁文、高台内に一重圈線を描く。高台に砂が付着する。1488 は染付により外面に草花文、高台内に一重圈線を描く。吳須の発色は悪い。

1489～1491 は肥前系磁器のくらわんか碗である。1489 は染付により外面にコンニャク印判の松文



第293図 石組み溝2出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)



第294図 石組み溝2出土陶磁器類(3) (縮尺: 1/3)

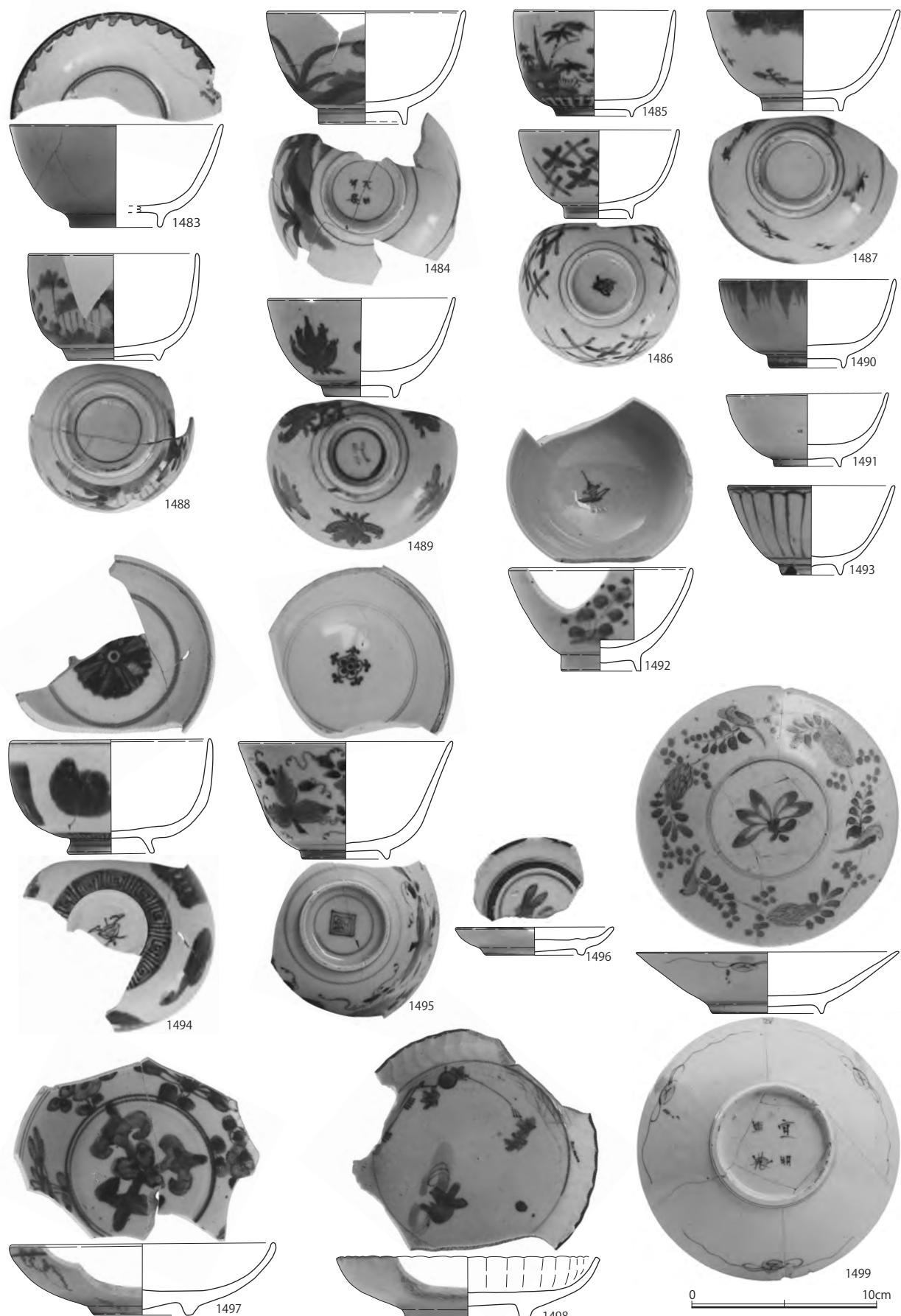
と若松文、高台内に一重圏線内「大明年製」銘を描く。呉須の発色は悪く、高台の釉際処理はやや不揃い。1490は外面に染付による雨降り文を描く。呉須の発色は悪く、高台に砂が付着する。1491は口縁端部に口紅を施す。高台の釉際処理は不揃いで、砂が付着する。

1492・1493は肥前系磁器の小広東碗である。1492は染付により外面に草花文、見込に昆虫文を描く。呉須の発色は悪く、滲む。疊付の内側に砂が付着する。1493は外面に染付による菊弁文を描く。高台に砂が付着し、釉際処理は不揃いである。

1494は肥前系磁器の撥高台の碗である。染付により外面に不明文様、口縁部内面に四方擗文、見込に花文、高台内に昆虫文を描く。呉須は滲む。

1495は肥前系磁器の端反碗である。染付により外面に花唐草文、口縁部内面に四方擗文、見込に手描きの五弁花文、高台内に一重圏線と二重方形枠内「簡江」銘を描く。

1496～1498は肥前系磁器の初期伊万里の皿である。1496は見込に染付による兎文と圏線、鋸釉とヘラ彫りによる帶線を描く。口縁端部に口紅を施す。1497は内側面に草花文、見込に唐花文を描く。疊付の内側に砂が付着する。1498は型打成形で、口縁部は輪花となり端部に口紅を施す。見込に染



第295図 石組み溝3出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)

付による兎文と竹文と月文を描く。畳付に砂が付着する。割れ口に漆継の痕跡がみられる。

1499・1500は肥前系磁器の三角高台の皿である。1499は染付により外面に宝文、内側面に花唐草文と鳥文、見込に花文、高台内に「宣明年製」銘を描く。呉須の発色は悪く、畳付に砂が付着する。1500は染付により外面に宝文?、内面に芙蓉手花虫文を描く。呉須の発色は悪く、高台に砂が付着する。

1501～1503は肥前系磁器のU字形高台の皿である。1501は染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に斜格子文と半菊花文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圏線内「大明年製」銘を描く。口縁端部に口紅を施す。焼成不良のため呉須の発色は悪く、外面の透明釉は白濁する。高台に砂が付着する。1502は高台内にハリ支え痕がみられる。染付により外面に花唐草文、内面に草花文と柴垣文、高台内に一重圏線を描く。1503は染付により外面に唐草文、内側面にヘラ彫りによる捻文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圏線を描く。焼成不良のため透明釉は白濁する。

1504は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の小さいものである。内側面に染付による斜格子文を描く。呉須の発色は悪い。

1505～1507は肥前系磁器の輪花深手皿である。型打成形。1505は染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に竹垣文と草花文と蛇籠文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圏線と二重方形枠内「渦福」銘を描く。高台に砂が付着する。1506は染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に松文・東屋文と雪持笹文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圏線内「渦福」銘を描く。1507は高台内にハリ支え痕がみられる。染付により外面に梅花唐草文、内側面に松竹梅文、見込に手描きの五弁花文、高台内に一重圏線と二重方形枠内「渦福」銘を描く。口縁端部に口紅を施す。

1508は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の大きいものである。染付により内側面に梅花唐草文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。呉須の発色は悪い。

1509は肥前系磁器の糸切細工成形の皿である。染付により外面に折松葉文、内面に型紙摺の桜花文と霞文を描く。口縁端部に口紅を施す。高台は変形の貼り付け高台である。

1510は肥前系磁器の型打小皿である。型打成形により口縁部は輪花となり、端部に口紅を施す。染付により外面に梅花唐草文、内側面に梅花文と陽刻の捻花文、見込に雲龍文と火焰宝珠文、高台内に一重圏線を描く。畳付に砂が付着する。

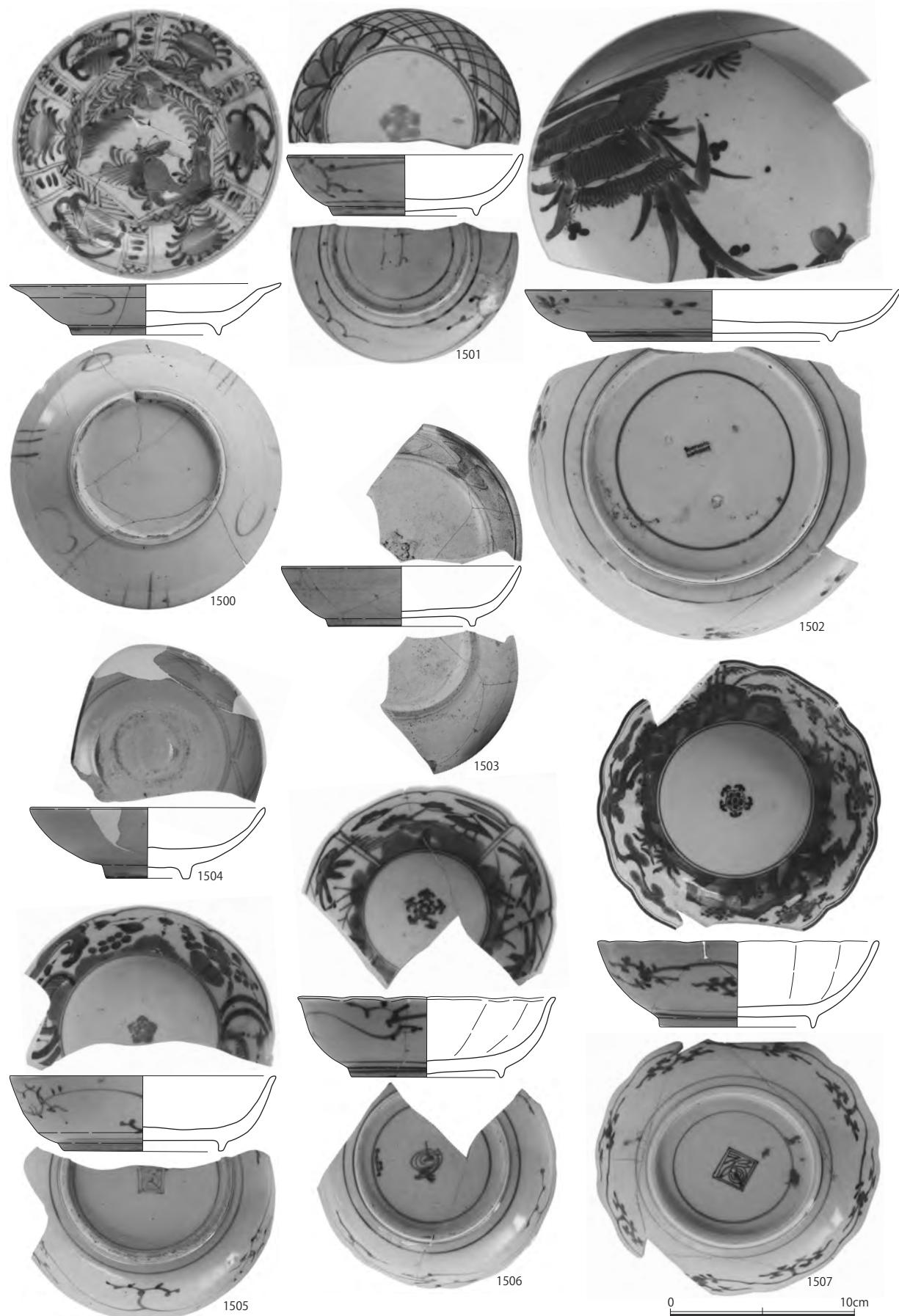
1511・1512は肥前系磁器の碁笥底の猪口である。1511は染付により外面に草花文、高台内に一重圏線を描く。呉須の発色は悪く、畳付に砂が付着する。1512は割れ口に漆継の痕跡がみられる。

1513・1514は肥前系磁器の鉢である。1513は染付により外面に蛸唐草文、口縁部内面に四方擗文、見込に環状松竹梅文を描く。1514は型打成形。高台内にハリ支え痕がみられる。口縁端部に口紅を施す。畳付に砂が付着する。

1515は肥前系磁器の端反形小坏である。高台の釉際処理はやや不揃いで、砂が付着する。

1516～1518は肥前系磁器の丸碗形小坏である。1516は外面に染付による草花文を描く。呉須の発色は悪い。やや幅の広い高台で、畳付に砂が付着する。1517は外面に染付による若葉文と竹垣文を描く。呉須は滲む。1518は外面に染付による海老文を描く。呉須の発色は悪い。紅皿か。

1519は肥前系磁器の半球形小坏である。外面に染付による草花文と蝶文を描く。



第296図 石組み溝3出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)

1520は肥前系磁器の撥高台碗の蓋である。染付により外面に窓絵と花唐草文、口縁部内面に四方襷文、見込に環状松竹梅文を描く。

1521は肥前系磁器の油壺である。外面に染付による草花文を描く。呉須の発色は悪く、畳付の内側に砂が付着する。

1522は肥前系磁器の蓋物である。口縁部内面は無釉である。外面に染付による斜格子文と四方襷文を市松に配する。

1523・1524は肥前系磁器の紅皿である。1523は貝殻状に型押成形される。白磁。内面にのみ透明釉をかける。1524は糸切細工成形。貼り付け高台。白磁。高台と高台内は無釉である。高台内に指頭圧痕がみられる。

1525・1526は肥前系磁器の仏飯器である。1525は外面に染付による圈線を描く。呉須の発色は悪い。1526は外面に染付による四方襷文を描く。呉須の発色は悪い。

1527は肥前系磁器の段重である。口縁端部から口縁部内面と腰部の括れ部は無釉である。外面に染付による蛸唐草文を描く。腰部の露胎部に砂が付着する。

1528は肥前系磁器の灰落しである。底部を除き内面まで施釉する。外面に色絵と金彩による山水文・家屋文（赤色・黒色・緑色？）と花唐草文（赤色）、染付による四方襷文を描く。石組み溝5の破片と接合する。

1529は肥前系磁器の灰落しである。底部際を除き内外面に施釉する。外面に染付による草花文を描く。割れ口に漆継の痕跡がみられる。

1530は肥前系磁器の瓶である。外面に染付による梅花文と水仙文と牡丹文を描く。

1531は肥前系磁器の水注？の蓋である。青磁。口縁部内面は無釉で、砂が付着する。

1532は関西系磁器の皿である。内面は型打成形とヘラ彫りによる菊花形となる。高台に砂が付着する。

1533は肥前系陶器の呉器手碗である。畠付を除き灰釉をかける。

1534は肥前系陶器の京焼風碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に鉄絵と呉須による山水文を描く。高台内に円刻と「山原住」の刻印がみられる。畠付際をわずかに面取りする。

1535は肥前系陶器の銅緑釉皿である。胴下半部から高台内を除く外面に透明釉、内面に銅緑釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。

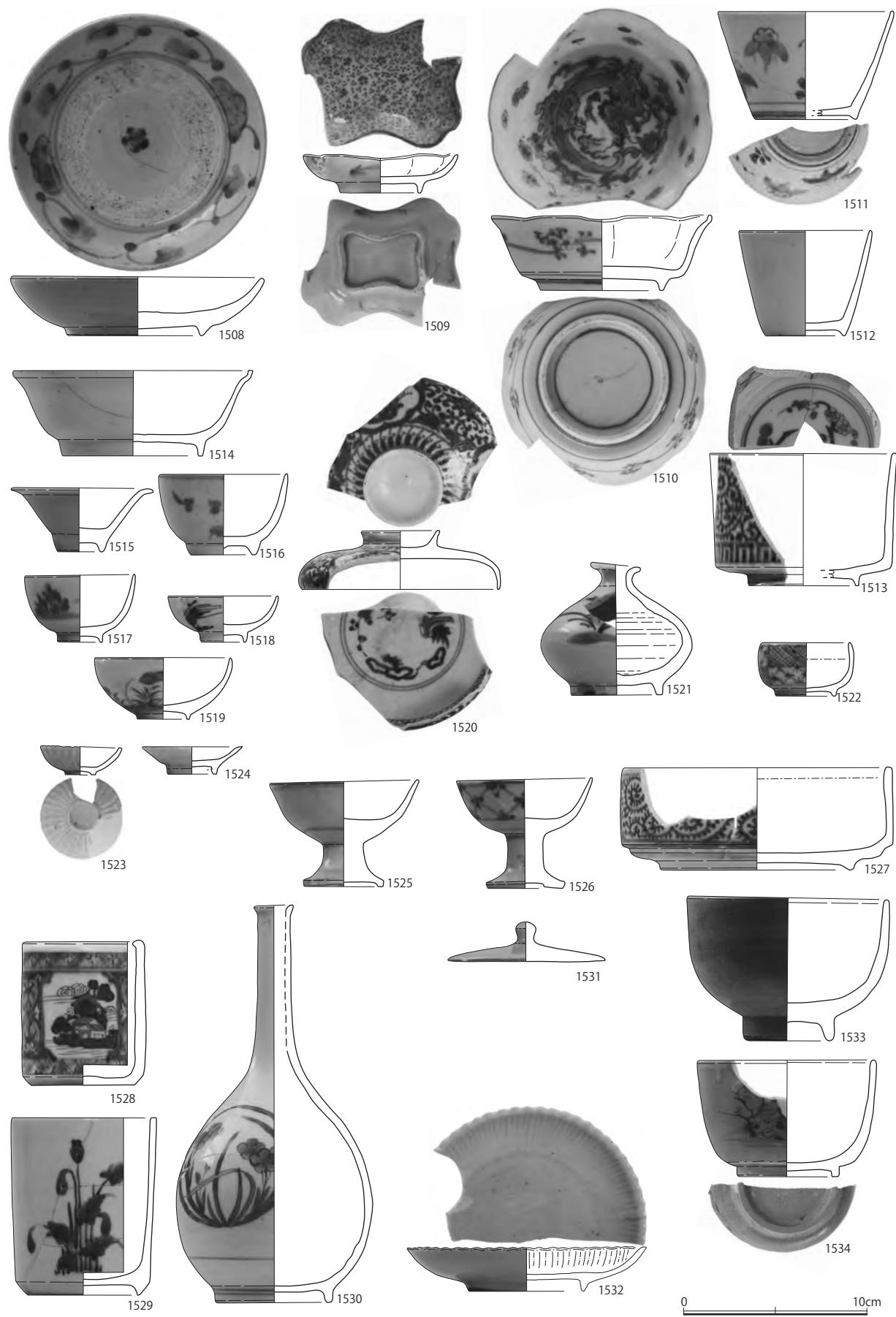
1536は肥前系陶器の刷毛目碗である。畠付に砂が付着する。

1537・1538は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。1537は外面に染付による松竹梅文と太湖石文と遠山文を描く。畠付から高台にかけて砂が付着する。1538は外面に染付による東屋山水文と松文を描く。畠付に砂が付着する。

1539は肥前系陶器の碗である。畠付を除き高台内にも灰釉をかける。畠付に砂が付着する。胎土・釉薬が呉器手に似る。

1540は肥前系陶器の三島手の鉢である。見込に砂が環状に付着し、高台際には胎土目がみられる。

1541・1542は肥前系陶器の陶胎染付の皿である。1541は染付により外面に唐草文？、内側面に東屋山水文と柳文、高台内に一重圈線を描く。畠付に砂が付着する。1542は見込を蛇ノ目釉剥ぎする。内側面に染付による草花文？を描く。見込と胴部外面に砂が付着する。



第297図 石組み溝3出土陶磁器類(3) (縮尺: 1/3)



第298図 石組み溝3出土陶磁器類(4) (縮尺: 1/3)

1543 は肥前系陶器の刷毛目皿である。高台脇から高台を除き灰釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。内面に刷毛目を施す。

1544・1545 は肥前系陶器の水注？の蓋である。1544 は上面に鉄釉をかける。下面に重ね焼き痕、底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。1545 は上面に銅緑釉をかける。底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1546 は瀬戸・美濃系陶器の鎧茶碗である。口縁部外面から内面全面に鉄釉、畳付を除く外面に灰釉を掛け分ける。胴部外面にトビガンナを施す。

1547 は瀬戸・美濃系陶器の香炉・火入である。底部と内面を除き灰釉をかける。底部と内面にススが付着する。

1548 は瀬戸・美濃系陶器の植木鉢である。底部を除く外面に鉄釉をかける。底部外面に重ね焼き痕？がみられる。

1549 は瀬戸・美濃系陶器の灯明具である。台皿の外面を除き灰釉をかけ、円筒形受皿の口縁端部は釉剥ぎする。口縁端部に重ね焼き痕がみられる。

1550 は京・信楽系陶器の半筒形碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。錆絵と白化粧土による鷺文と葦文を描く。高台内に円刻がみられる。畳付際を面取りする。

1551 は京・信楽系陶器の半筒形碗である。見込にハリ支え痕がみられる。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に錆絵と白化粧土による筈文を描く。高台内に円刻がみられる。畳付際を面取りする。

1552 は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。外面に色絵（赤色）による桜花文を描く。高台内に浅い円刻がみられる。畳付際をわずかに面取りする。

1553 は京・信楽系陶器の碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に錆絵と呉須による山水文？を描く。高台内はヘラケズリで、円刻がみられる。

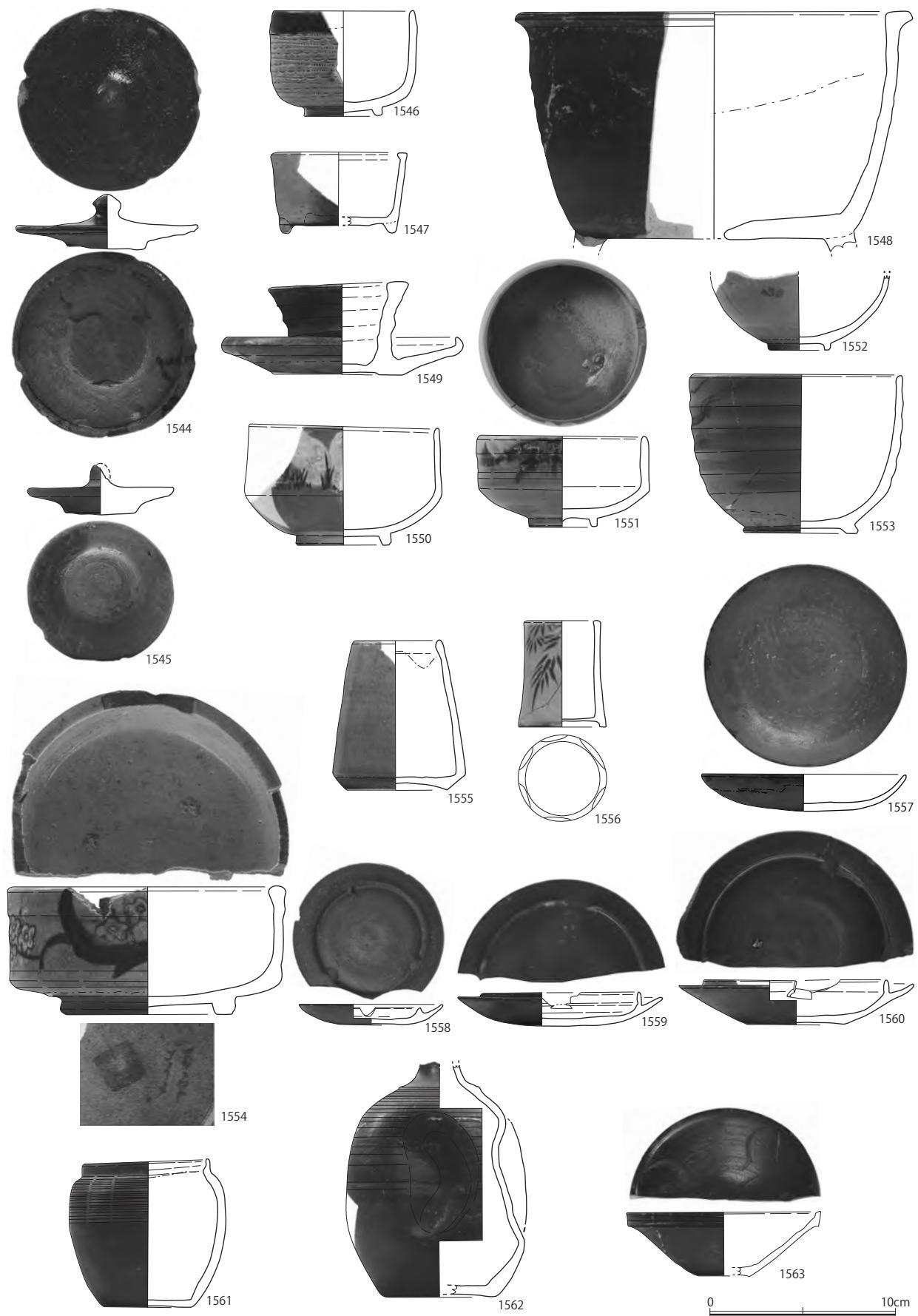
1554 は京・信楽系陶器の向付である。高台脇から高台内を除き白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に錆絵・呉須・色絵（赤色）・白化粧土による梅文、見込に白化粧土による梅花文を描く。高台内に「◇」（黒部家の家紋「釘抜キ」？）と「石原コイメ」？の墨書がみられる。畳付際を面取りする。

1555・1556 は京・信楽系陶器の灰落しである。1555 は口縁端部と底部を除く外面及び見込に灰釉、胴下半部内面に錆釉をかける。口縁端部に重ね焼き痕がみられる。1556 は底部と内面を除き灰釉をかける。外面に色絵（赤色・緑色・黒色）による筈文と松文を描く。口縁端部に敲打痕がみられる。

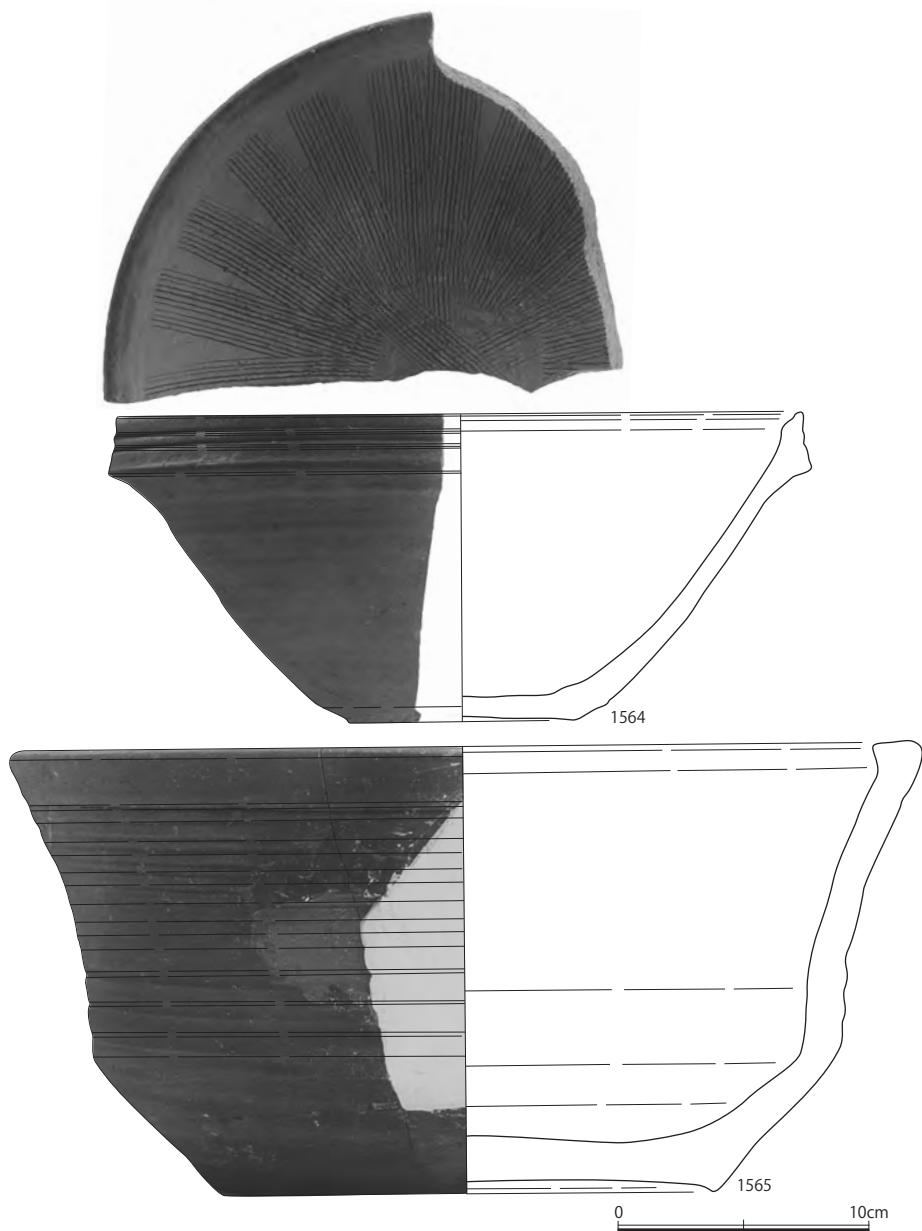
1557 は備前系陶器の灯明皿である。口縁部外面から内面全面に塗土を施す。口縁部に灯芯油痕がみられる。

1558～1560 は備前系陶器の灯明受皿である。全面に塗土を施す。1558 は仕切りに U 字形の溝が 3 箇所みられる。1559 は仕切りに溝が 1 箇所みられる。仕切りと口縁部に灯芯油痕がみられる。1560 は仕切りに楕円形の穿孔が 1 箇所みられる。底部に右回転の糸切り離し痕、体部外面に環状の重ね焼き痕がみられる。

1561 は備前系陶器の極小甕である。蓋受けから外面にかけて塗土を施す。底部外面に「レ」の刻



第299図 石組み溝3出土陶磁器類(5)（縮尺：1／3）



第300図 石組み溝3出土陶磁器類(6)(縮尺:1/3)

印と重ね焼き痕がみられる。

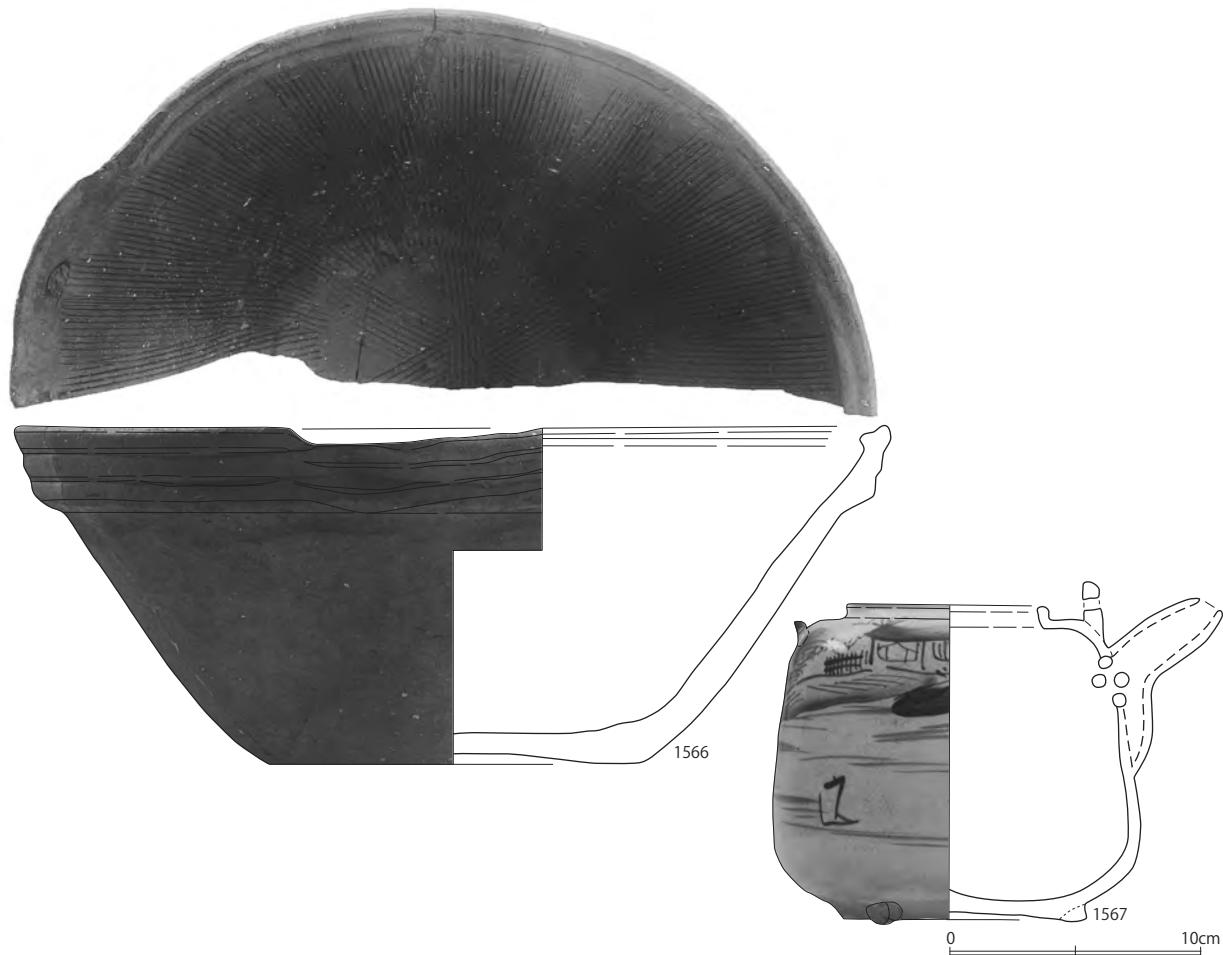
1562は備前系陶器の瓶である。外面に塗土を施す。胴中部は押圧により橢円形に凹む。

1563は備前系陶器のミニチュアの擂鉢である。口縁部外面から内面全面に塗土を施す。

1564は備前系陶器の擂鉢である。見込のスリメは「*」。口縁部と胴部に色調差がみられる。胴部外面調整は横ナデである。

1565は備前系陶器の大鉢である。全面に塗土を施す。外面に獅子?の貼付文を施す。底部外面に火襷がみられる。

1566は堺・明石系の擂鉢である。見込のスリメは「*」。注口に扇面内「上長」の刻印がみられる。底部と体部外面、見込と体部内面に色調差、底部に焼き台痕がみられる。胴部外面調整は丁寧な横ナデである。



第301図 石組み溝3出土陶磁器類(7)(縮尺:1/3)

1567は産地不明陶器の土瓶である。口縁端部と底部を除く外面に白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に鉄絵による山水文と家屋文と帆掛け舟文を描く。内面と底部外面にススが付着する。

1568～1576は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。1568・1569は口縁部に灯芯油痕がみられ、1569は内面にススが付着する。1570の胎土は砂粒を多く含み粗い。口縁部に灯芯油痕がみられ、見込と底部にススが付着する。

1577は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。底部にススが付着する。

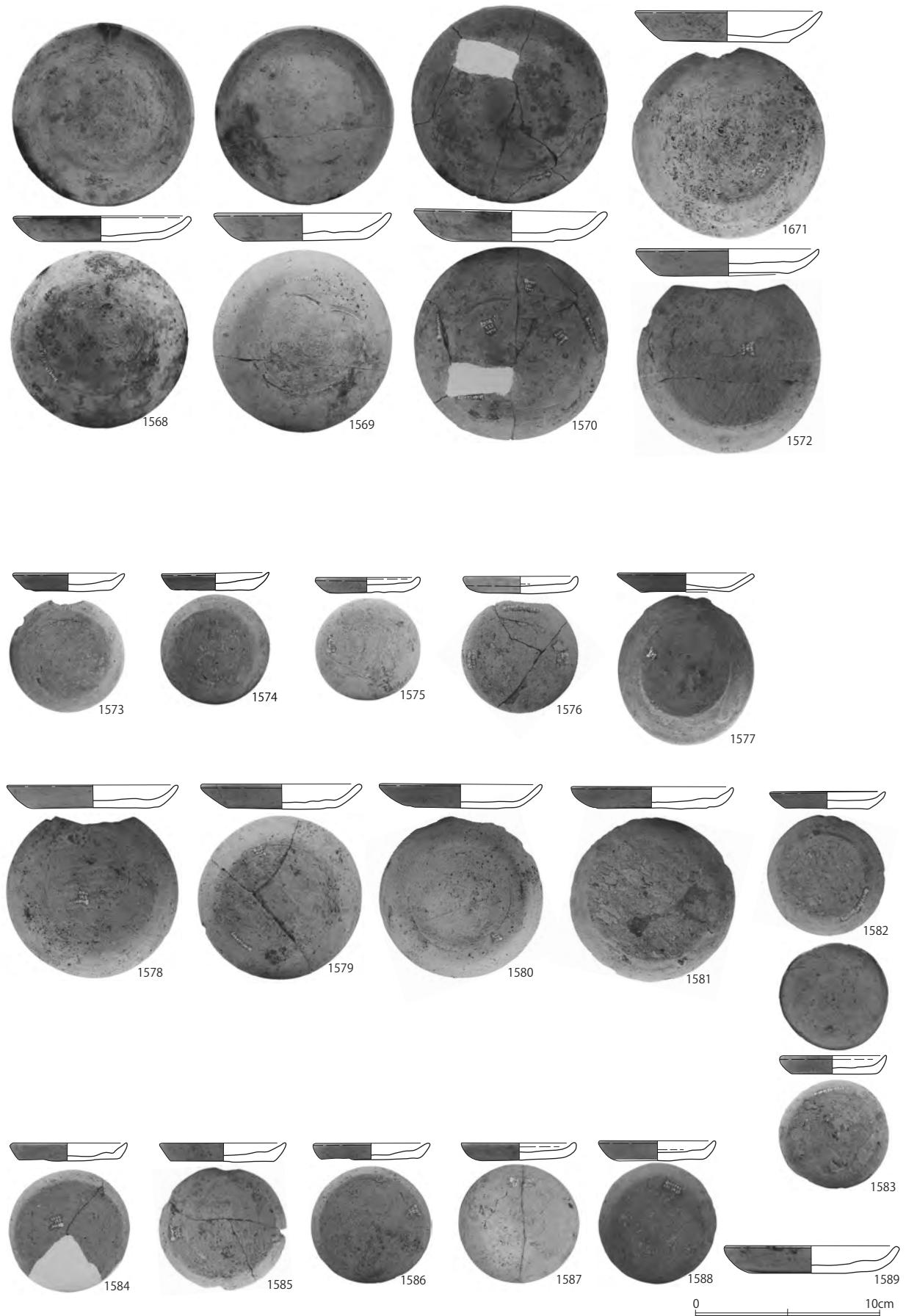
1578～1582は土師皿である。ロクロ成形で、底部に左回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。1581の胎土は砂粒を多く含み粗い。

1583は土師皿である。ロクロ成形で、底部に左回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。口縁部に灯芯油痕がみられる。

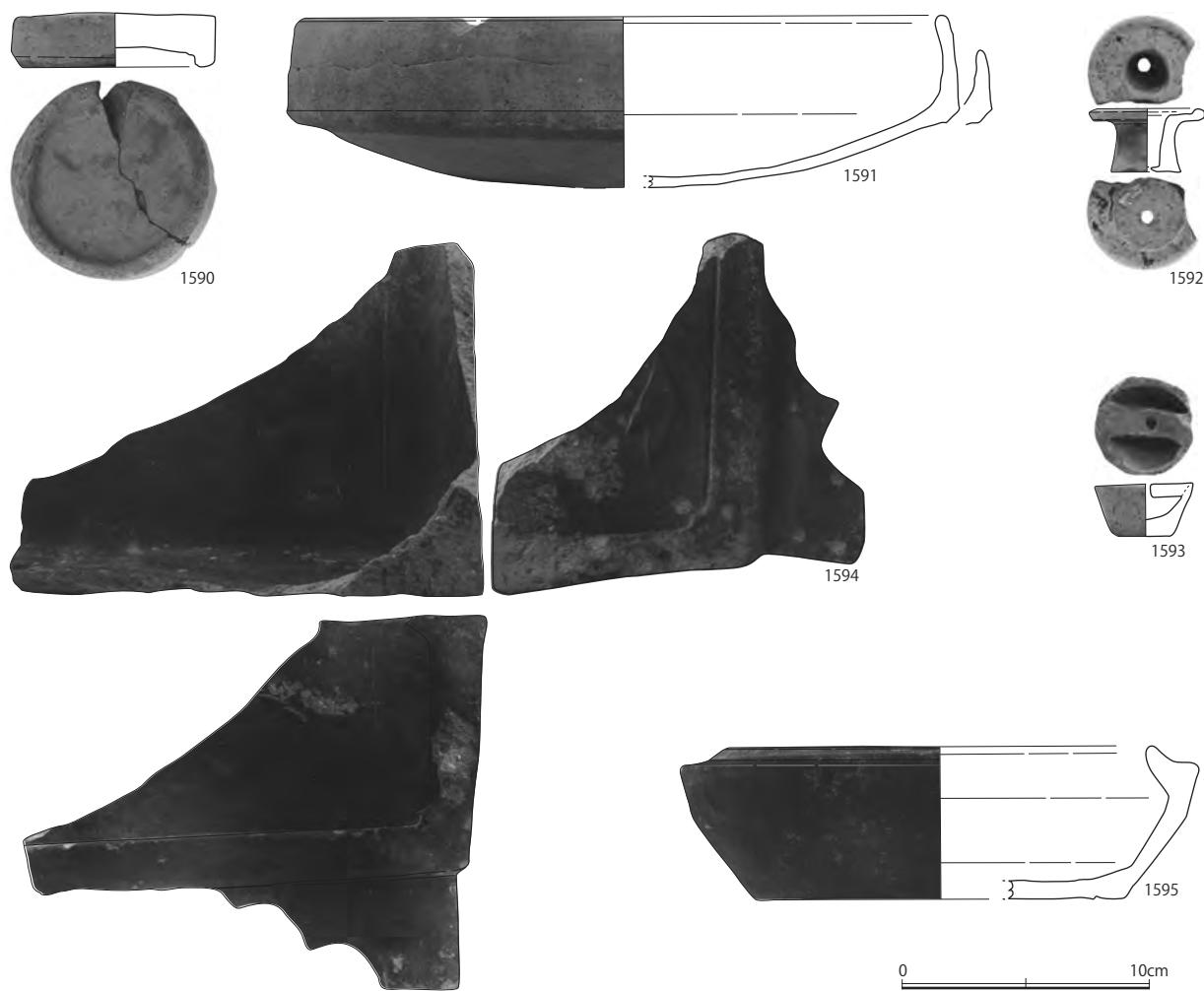
1584～1589は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。1589は口縁部に灯芯油痕がみられる。

1590は土師質土器の焼塩壺の蓋である。型押成形で、内面に布目痕がみられる。

1591は土師質土器の関西系焙烙である。外面と底部内面にススが付着する。



第302図 石組み溝3出土陶磁器類(8) (縮尺: 1/3)



第303図 石組み溝3出土陶磁器類(9)（縮尺：1／3）

1592は土師質土器の燭台？である。底部に焼成後？の穿孔がみられる。

1593は土師質土器の秉燭である。内面と芯立上面に透明釉をかける。

1594は瓦質土器の火鉢・焜炉類である。外面に陽刻の草花文？がみられる。

1595は瓦質土器の瓦灯皿である。

石組み溝5（第304～309図）

1596は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の高いものである。青磁染付。染付により口縁部内面に四方襷文、見込に手描きの五弁花文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。呉須の発色は悪い。高台の釉際処理は不揃いで、畳付の内側に砂が付着する。

1597・1598は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。1597は染付により外面に薊文、口縁部内面に四方襷文、見込に手描きの五弁花文を描く。1598は外面と見込に色絵（赤色）による花文を描く。口縁端部に赤色の色絵具を施す。

1599・1600は肥前系磁器のくらわんか碗である。1599は外面に染付によるコンニャク印判の菊花文を描く。畳付の内側に砂が付着する。1600は外面に染付によるコンニャク印判の菊花文と松文を描く。呉須の発色は悪く、畳付の内側に砂が付着する。

1601・1602は肥前系磁器の腰張碗である。1601は染付により外面に松竹梅文と蓮弁文、口縁部内面に四方櫛文、見込に環状松竹梅文を描く。呉須の発色は良好である。割れ口全面に漆継の痕跡がみられる。1602は染付により外面に斜格子文と四方櫛文と井桁文、口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文を描く。

1603は肥前系磁器の広東碗である。染付により外面に草文と熨斗文と青海波文、口縁部内面に圈線、見込に草花文、高台内に一重圈線と二重方形枠内不明銘を描く。呉須の発色は良好である。

1604は肥前系磁器の筒形碗である。染付により外面に半菊花文と井桁文と折松葉文、口縁部内面に四方櫛文、見込に花文を描く。疊付に砂が付着する。

1605は肥前系磁器の碁笥底の猪口である。外面に染付による草花文を描く。

1606は肥前系磁器の碁笥底の小坏である。

1607は肥前系磁器の腰折れ直立形小坏である。外面に染付による雨降り文を描く。

1608は肥前系磁器の端反形小坏である。染付により外面に草花文と蝶文、高台内に「大明年製」銘を描く。

1609は肥前系磁器の丸碗の蓋である。染付により外面に四方櫛文と網目文、口縁部内面に四方櫛文、見込に折枝桃文を描く。

1610は肥前系磁器の撥高台碗の蓋である。染付により外面に唐花文と窓絵花唐草文、口縁部内面に四方櫛文、見込に雨龍文を描く。

1611は肥前系磁器のくらわんか碗の蓋である。青磁染付。見込にハリ支え痕がみられる。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文、摘み内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。疊付に砂が付着する。

1612は肥前系磁器の油壺である。型押成形。染付と色絵（赤色・緑色）により窓絵草花文を描く。

1613は肥前系磁器の蓋物である。口縁部内面は無釉である。外面に染付による桐文を描く。疊付の内側に砂が付着する。

1614・1615は肥前系磁器の仏飯器である。1614は外面に染付による斜格子文を描く。呉須の発色は悪い。1615は外面に染付による笹文を描く。呉須の発色は悪い。

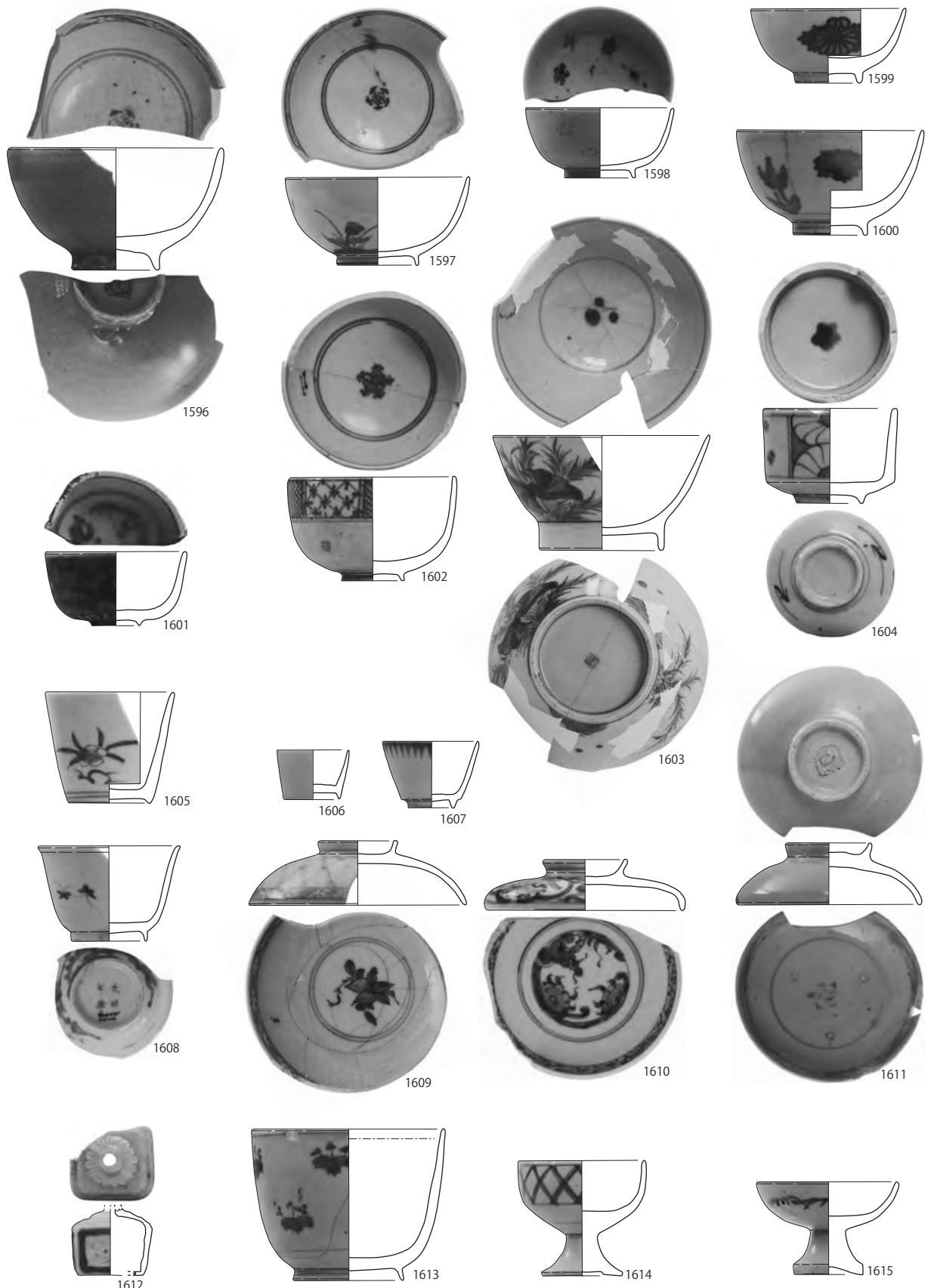
1616は肥前系磁器のU字形高台の皿である。型打成形で、口縁部は輪花となる。染付により外面に如意頭文と草文、見込と内側面に芙蓉手宝尽くし文、高台内に一重圈線内変形字銘を描く。

1617・1618は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台が無釉のものである。内面に染付による簡略化された不明文様を描く。呉須の発色は悪い。1617の透明釉は黄味がかる。蛇ノ目釉剥ぎ部分と疊付に砂が付着する。1618は高台と高台内に砂が付着する。

1619は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿のうち高台の低いものである。染付により外面に如意頭状唐草文、見込に垣根文と草花文、内側面に垣根文などを描く。

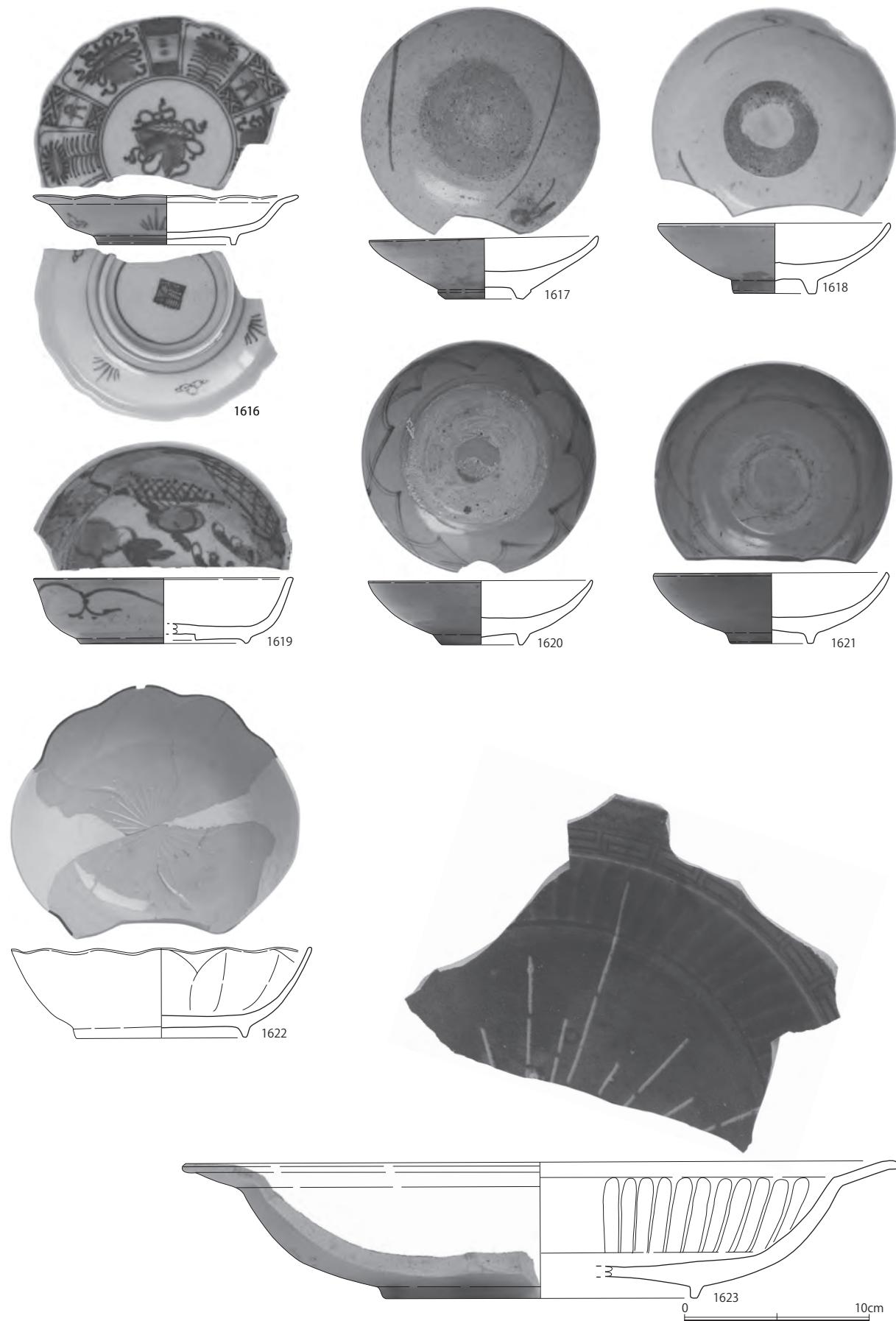
1620・1621は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の小さいものである。内面に染付による斜格子文を描く。呉須の発色は悪い。蛇ノ目釉剥ぎ部分と疊付に砂が付着する。高台の釉際処理は不揃い。1620の透明釉は明オリーブ灰色、1621の透明釉は明緑灰色を呈する。

1622は肥前系磁器の輪花深手皿である。型打成形により内面に陽刻の梅花文を施す。口縁端部に



第304図 石組み溝5出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)

0 10cm



第305図 石組み溝5出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)

口紅を施す。

1623 は肥前系磁器の U 字形高台の大皿である。内面に青磁釉、畳付を除く外面に透明釉をかける。口縁部内面に線彫りによる波線とヘラ彫りによる雷文、内側面にヘラ彫りにより鎬文、見込に搔落しによる放射状文様を施す。畳付の内側を面取りする。

1624・1625 は肥前系陶器の刷毛目碗である。1624 は外面に鉄絵による不明文様を描く。畳付に砂が付着する。

1626・1627 は肥前系陶器の陶胎染付の碗である。1626 は外面に染付による樹木文と遠山文を描く。1627 は外面に染付による山水文を描く。畳付に砂が付着する。

1628 は肥前系陶器の灰釉唐津碗である。高台脇から高台内は無釉である。

1629 は肥前系陶器の刷毛目皿である。高台脇から高台内を除き灰釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。内側面に刷毛目を施す。

1630 は肥前系陶器の皿である。高台脇から高台内を除き灰釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。口縁部内面から内側面に銅緑釉を漬け掛けする。見込と畳付に砂目がみられる。

1631 は肥前系陶器の土瓶の蓋である。外面に灰釉をかける。底面に回転方向不明の糸切り離し痕がみられる。

1632 は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。高台脇から高台内は無釉である。外面に錆絵による草花文を描く。高台内に円刻がみられる。畳付際をわずかに面取りする。

1633 は京・信楽系陶器の半筒形碗である。高台脇から高台内を除き白化粧土を塗布したのち、灰釉をかける。外面に錆絵と呉須による蕨文を描く。高台内に円刻がみられる。畳付際を面取りする。

1634 は京・信楽系陶器の灯明受皿である。内面に灰釉をかけ、仕切り端部は釉剥ぎする。仕切りに U 字形の溝が 1 箇所みられる。

1635 は京・信楽系陶器の蓋物である。口縁端部と高台脇から高台内を除き白化粧土を塗布したのち、灰釉をかける。外面に錆絵と白化粧土による草花文を描く。高台内に円刻がみられる。畳付際を面取りする。

1636 は京・信楽系陶器の段重・蓋物の蓋である。口縁部を除き灰釉をかける。外面に錆絵と呉須による草花文を描く。

1637 は備前系陶器のサヤ形鉢である。口縁端部に重ね焼き痕がみられる。

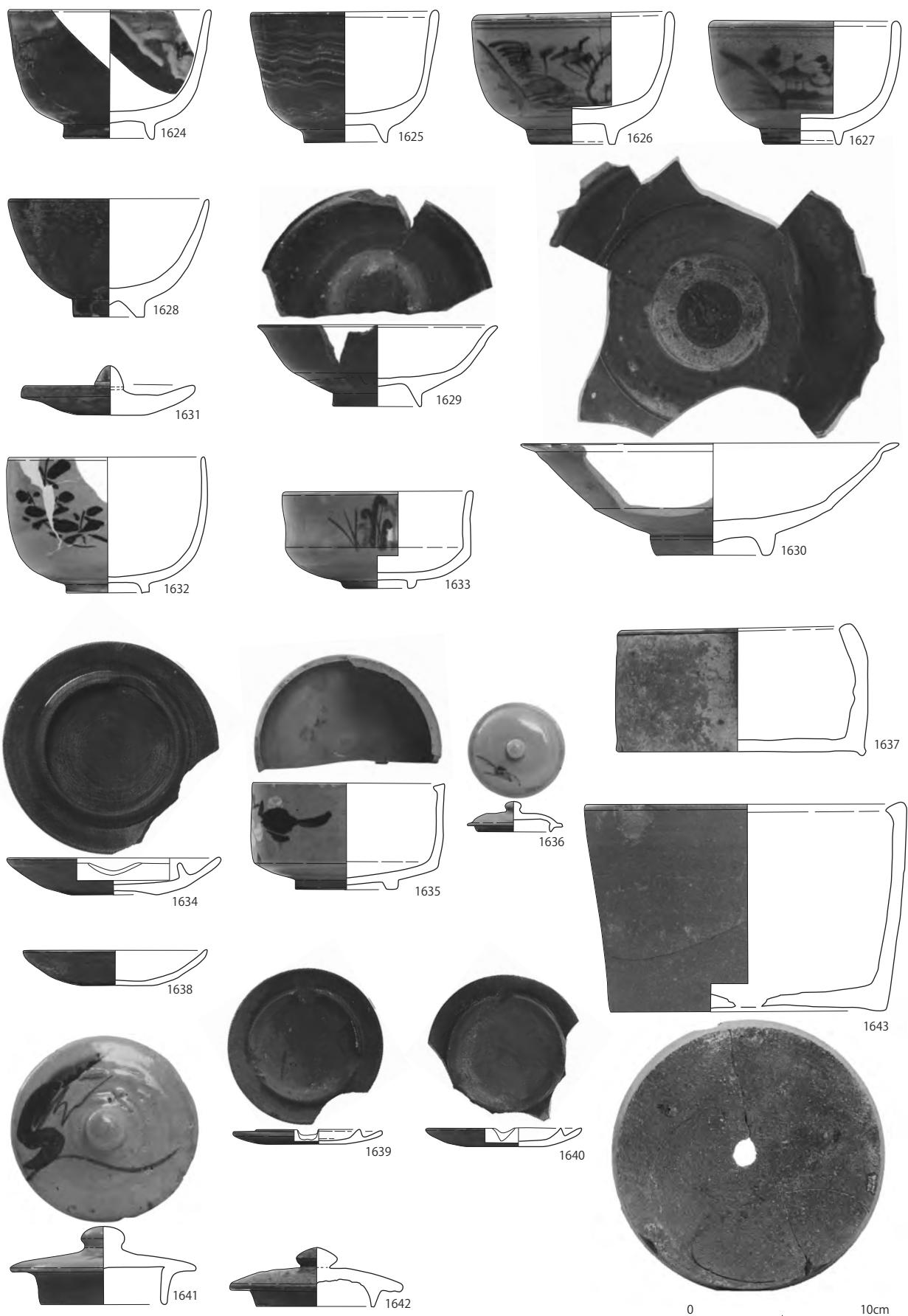
1638 は備前系陶器の灯明皿である。内面に塗土を施す。

1639・1640 は備前系陶器の灯明受皿である。内面に塗土を施す。仕切りに U 字形の溝が 3 箇所みられる。1639 は底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1641・1642 は産地不明陶器の土瓶の蓋である。1641 は外面に灰釉をかけ、鉄絵と緑釉による不明文様を描く。1642 の胎土は赤灰色を呈し、砂粒を多く含み粗い。外面に鉄釉をかけ、釉の表面は鮫肌状になる。

1643 は産地不明陶器の植木鉢である。胎土は淡赤橙色を呈し、白色砂粒を多く含み堅く焼き締まる。底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1644～1646 は堺・明石系陶器の擂鉢である。1644 の見込のスリメは三角形と思われる。内側面の



第306図 石組み溝5出土陶磁器類(3) (縮尺: 1/3)

スリメ上端はナデ消さない。見込と内側面に色調差がみられる。胴部外面調整はヘラケズリである。1645は注口をもつ。見込のスリメは「*」。見込と内側面に色調差、底部に焼き台痕がみられる。胴部外面調整はヘラケズリののち横ナデである。1646の見込のスリメは「*」。底部の中央と周辺に色調差、見込に焼き台痕がみられる。胴部外面調整はヘラケズリである。

1647は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。口縁部に灯芯油痕がみられる。

1648は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕は不明である。口縁部に灯芯油痕がみられる。

1649は土師皿である。胎土は砂粒が少なく緻密である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。

1650は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。口縁部に灯芯油痕がみられる。

1651は土師質土器の火鉢・焜炉類である。胴下部内面に環状の突起をもち、高台は3方向に切り込まれる。

1652は土師質土器の秉燭と思われる。口縁部内面に貼り付けられた橋状の芯立を欠損する。

1653は瓦質土器の釜である。外面に印花による花文を施す。

1654は瓦質土器の羽釜である。羽より下の外面にススが付着する。1653と同一個体の可能性がある。

1655は土師質土器の火入か。外面は白化粧土を塗布したのち透明釉をかけていたと思われるが、銀化している。内面には明赤褐色を呈する透明釉を薄くかける。底部に焼成後の穿孔がみられ、植木鉢に転用したと思われる。

1656・1657は肥前系磁器のミニチュアの碗である。1656は外面に染付による斜格子文と幾何学文を描く。呉須の発色は良好である。1657は外面に色絵（赤色）による草花文を描く。

1658は肥前系磁器のミニチュアの鉢である。型押成形。

1659～1665は土人形である。1659～1661は馬。型押成形による左右型合わせの中実である。1660は赤色顔料の痕跡がみられる。1661は底部から後脚にかけ円錐状に小さく穿孔する。1662は狛犬。型押成形による左右型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に小さく穿孔する。1663は着物を着た人物の座像。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に大きく穿孔する。1664は西行。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に大きく穿孔する。1665は虚無僧。型押成形による前後型合わせの中実で、底部から胴部にかけ円錐状に大きく穿孔する。

1666は土師質のミニチュアの瓶である。型押成形による前後型合わせである。胴上半部外面に緑釉をかける。京都系と思われる。

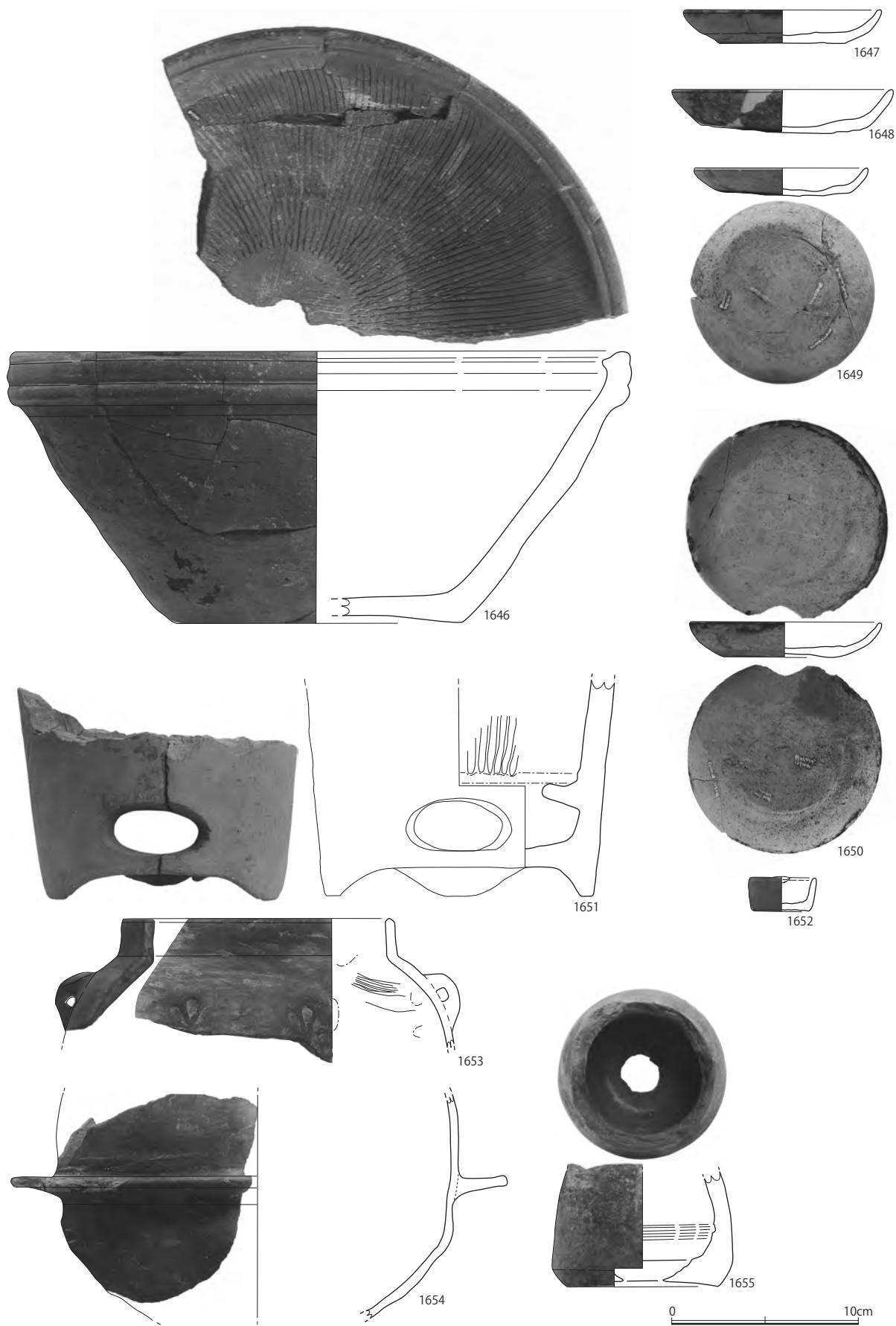
1667は土師質のミニチュアの蓋？である。型押成形。

1668は土師質のミニチュアの蓋である。型押成形。

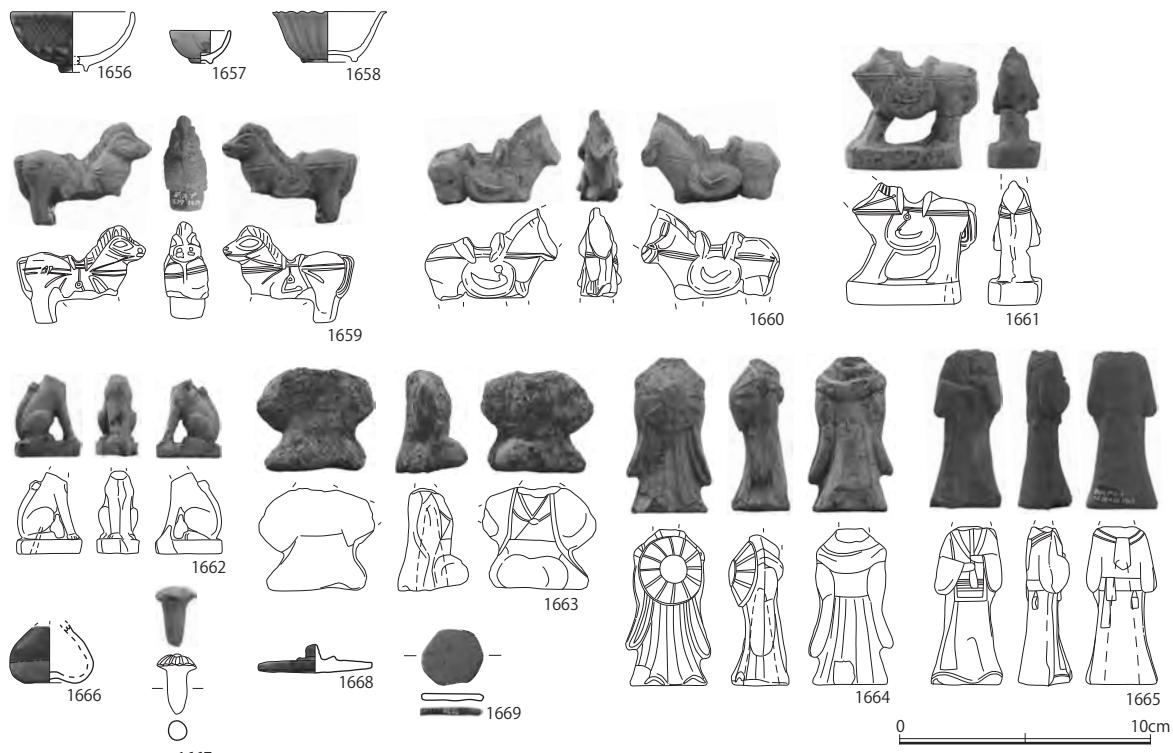
1669は加工円盤である。土師皿を二次加工したと思われる。



第307図 石組み溝5出土陶磁器類(4) (縮尺: 1/3)



第308図 石組み溝5出土陶磁器類(5)(縮尺:1/3)



第309図 石組み溝5出土陶磁器類(6) (縮尺: 1/3)

石組み溝6（遺物溜り6）（第310・311図）

1670は備前系陶器の人形徳利である。外面に塗土を施す。胴中部外面は押圧により凹み、型押成形による陽刻の布袋文を貼り付ける。底部外面に「日」の刻印がみられる。

1671は大谷焼の大鉢である。口縁部上面と底部外面を除く内外面に鉄釉をかける。底部外面に重ね焼き痕がみられる。池状遺構（第1遺構面）の破片と接合する。

1672は土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「長火鉢」。短側面のうち1側面の下部に穿孔が1箇所みられる。底部を除く外面に赤彩を施す。口縁部から胴部外面にミガキ、底部外面にハケメを施す。石組み溝5の破片と接合する。

石組み溝7（第312図）

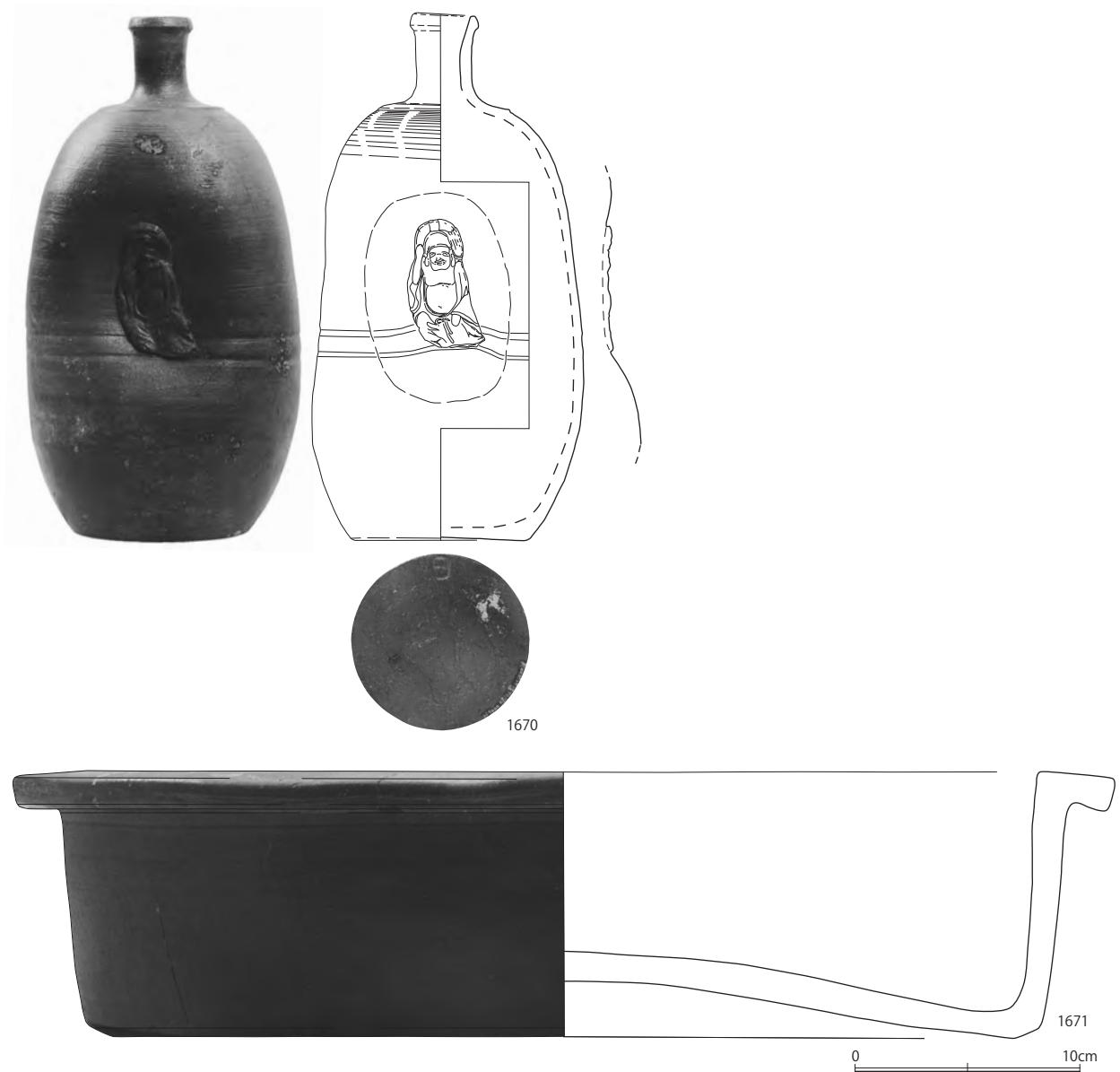
1673は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは放射状と思われる。退化した注口がみられる。胴部外面調整はヘラケズリのち丁寧に横ナデされ、ヘラケズリの痕跡はほとんどみられない。

1674は備前系陶器の灯明受皿である。口縁部外面から内面全面に塗土を施す。仕切りにU字形の溝が3箇所、口縁部に灯芯油痕、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。

石組み溝8（第313図）

1675は肥前系磁器のU字形高台の大皿である。高台内にハリ支え痕がみられる。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に墨弾きの松文、見込周辺に墨弾きの波濤文、見込中央に環状松竹梅文を描く。

1676・1677は肥前系磁器のU字形高台の皿である。型打成形で、口縁部は輪花となる。1676は染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に桜文と帰文、見込に手描きの五弁花文、高台内に一重圈線



第310図 石組み溝6（遺物溜り6）出土陶磁器類(1)（縮尺：1/3）

と二重方形枠内「渦福」銘を描く。畠付の内側に砂が付着する。1677は染付により外面に如意頭状唐草文、口縁部内面に四方櫛文、内側面に草花文、見込に手描きの五弁花文、高台内に一重圏線と二重方形枠内「渦福」銘を描く。

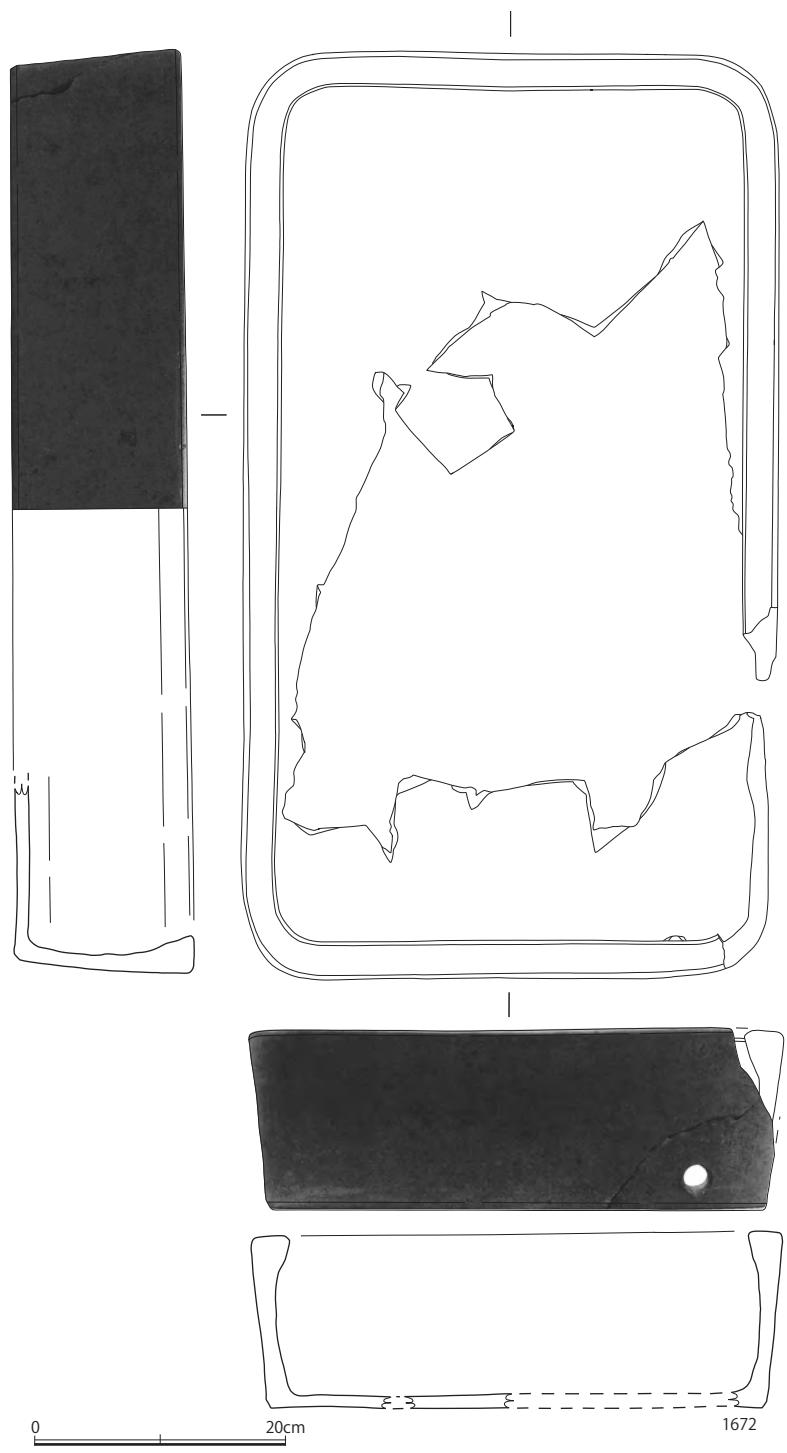
1678・1679は肥前系磁器の紅皿である。1678は外面に染付による花文を描く。1679は外面に染付による鳥文を描く。色絵（赤色）による文様の痕跡もみられる。

1680は土師質土器の焙烙である。胴部内外面は丁寧な横ナデ、底部内面も丁寧なナデ調整で、底部外面には板目状圧痕がみられる。底部内面にススが付着する。

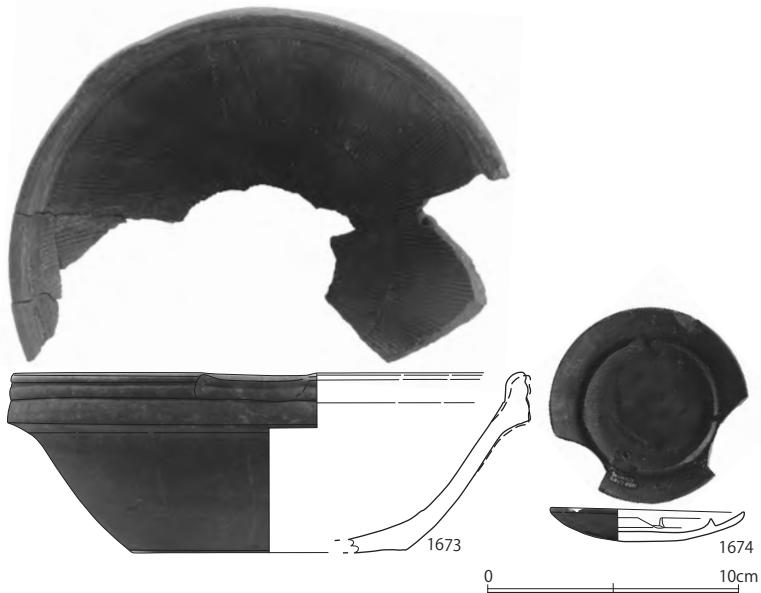
石組み溝8 (SD23) (第314図)

1681は肥前系磁器の半球碗である。染付により外面に遠山文、口縁部内面に四方櫛文、見込に折枝梅文を描く。

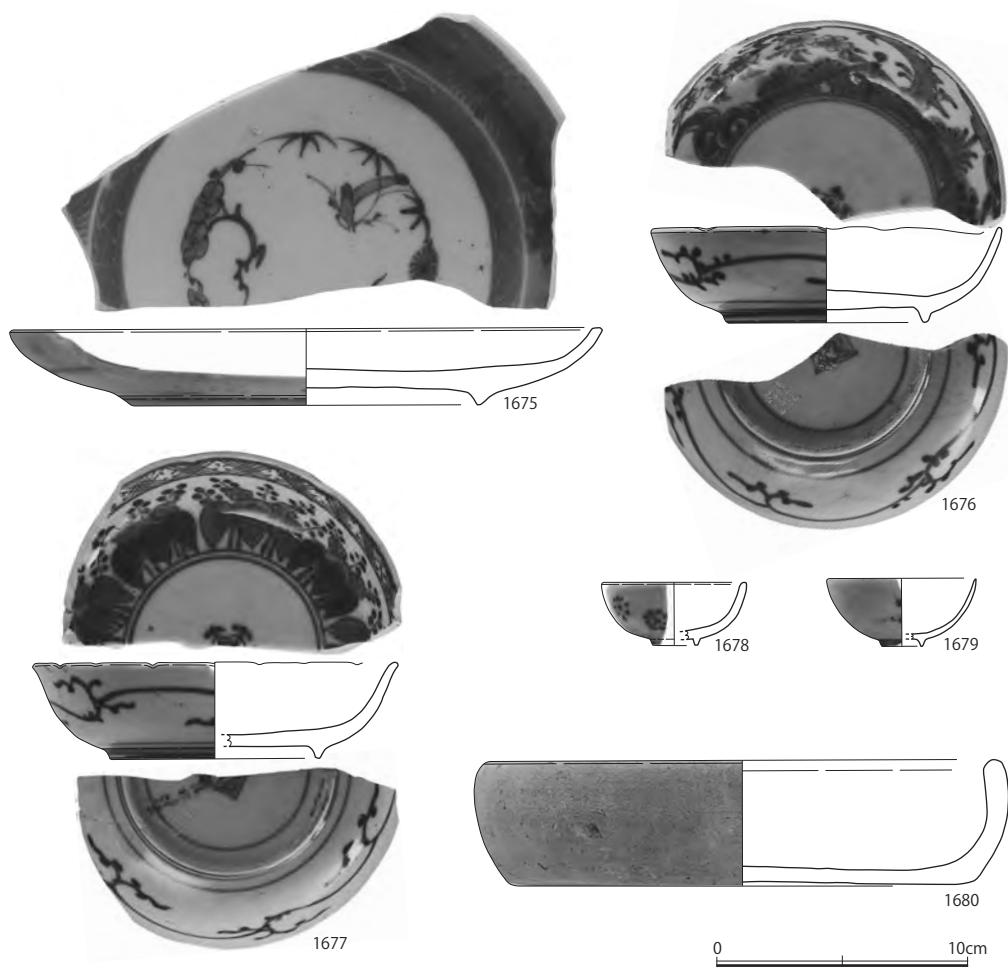
1682は肥前系磁器の端反形小壺である。畠付の内側に砂が付着する。



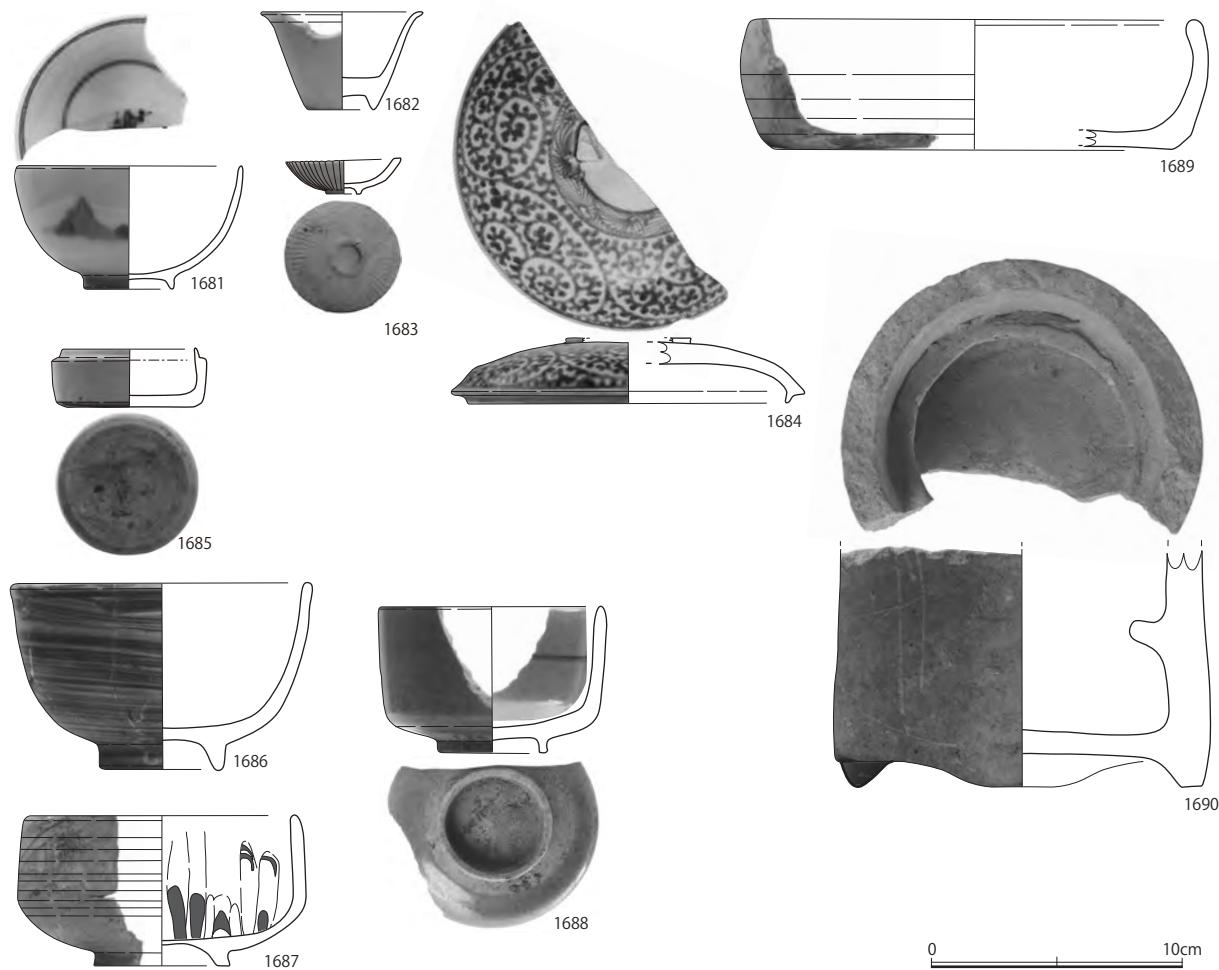
第311図 石組み溝6(遺物溜り6)出土陶磁器類(?) (縮尺: 1/6)



第312図 石組み溝7出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第313図 石組み溝8出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第314図 石組み溝8(SD23)出土陶磁器類(縮尺:1/3)

1683は肥前系磁器の紅皿である。貝殻状に型押成形される。白磁。内面にのみ透明釉をかける。

1684は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。口縁部は無釉で砂が付着する。外面に染付による唐草文と蛸唐草文を描く。

1685は肥前系磁器の合子である。白磁。蓋受け部から内面上半にかけて無釉。底部に判読不明の墨書がみられる。底部際を面取りする。

1686は肥前系陶器の刷毛目碗である。畳付に砂が付着する。

1687は京・信楽系陶器の半筒形碗である。胎土は練込で、畳付を除き全面に灰釉をかける。外面に錆絵と白化粧土による橋文を描く。内面に鎬を施す。

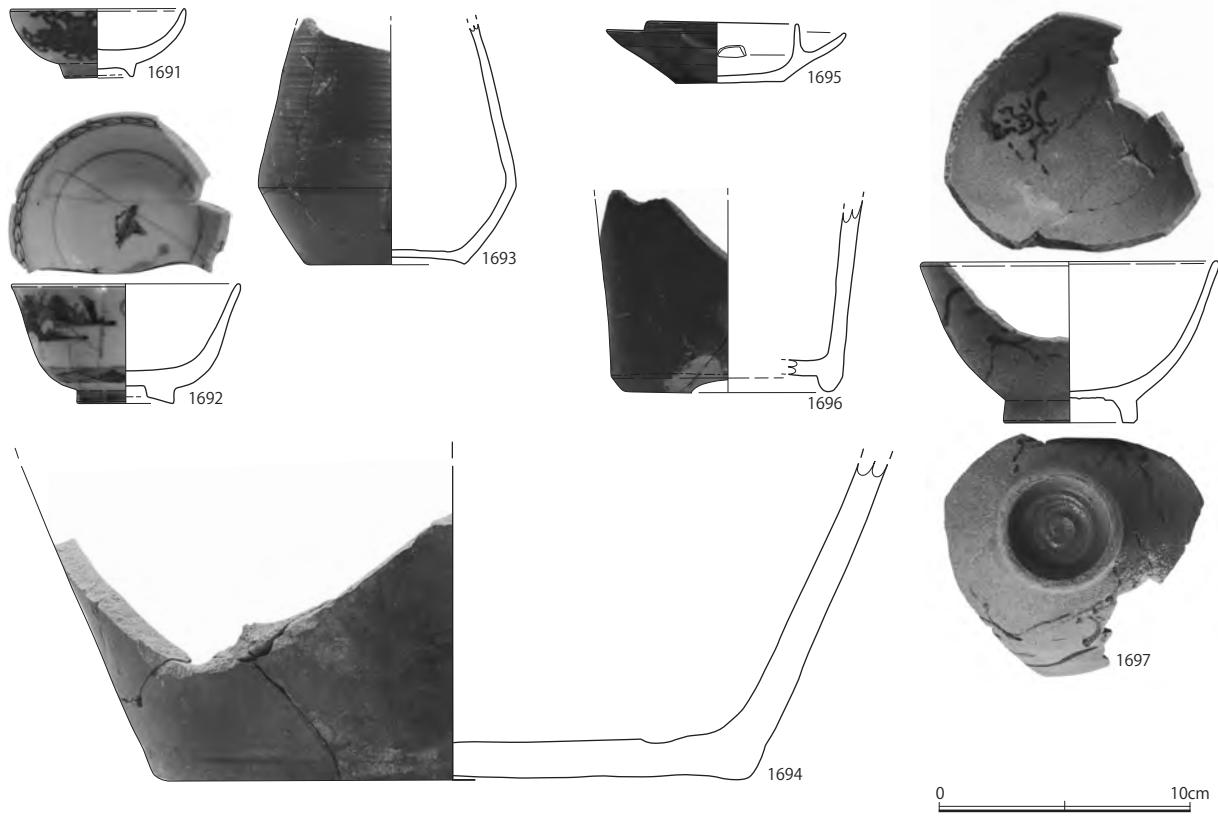
1688は京・信楽系陶器の柄杓である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。胴中部内面に鉄釉による一条の横線を描く。高台内に判読不明の墨書がみられる。高台際を面取りする。

1689は土師質土器の焙烙である。底部外面は丁寧なナデ調整。底部内面にススが付着する。

1690は土師質土器の火鉢・焜炉類である。胴部内面に環状の突起をもつ。

石組み溝8(遺物溜り4)(第315図)

1691は肥前系磁器の丸碗形小壺である。外面に染付によるコンニャク印判の菊唐草文を描く。畠付露胎部は橙色を呈する。



第315図 石組み溝8(遺物溜り4)出土陶磁器類(縮尺:1/3)

1692は関西系磁器の端反碗である。蛇ノ目高台。染付により外面に山水文と月文、「後赤壁賦」の詩句、口縁部内面に渦繫ぎ文、見込に岩波文を描く。焼継が施され、高台内に「一」の焼継師印がみられる。

1693は大谷焼の瓶である。底部を除く外面に鉄釉をかける。

1694は大谷焼の甕または大鉢である。底部外面を除く内外面に塗土を施す。底部外面に砂が付着し、重ね焼き痕がみられる。

1695は志戸呂系陶器の灯明受皿である。内面に鉄泥を塗布する。仕切り側面にアーチ状の溝が1箇所みられる。

1696は土師質土器の植木鉢である。底部内外面を除き明赤褐色を呈する透明釉をかける。

1697は大堀・相馬系陶器の碗である。渦巻高台。畳付を除き灰釉をかける。鉄絵により外面と内側面に走り駒文を描く。相馬駒焼。

石組み溝8(遺物溜り10)(第316・317図)

1698は肥前系磁器の筒形碗である。染付により外面に菊花散らし文、口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文を描く。焼成不良のため透明釉は白濁し、文様は不鮮明である。

1699は肥前系磁器の広東碗である。染付により外面に秋草文?と蜻蛉文、口縁部内面に圈線、見込に草花文を描く。

1700は肥前系磁器のU字形高台の皿である。型打成形。染付により外面に青海波文、見込に沢瀉文と流水文、高台内に一重圈線内「山福」銘を描く。

1701 は肥前系磁器の U 字形高台の小皿である。染付により外面に折松葉文、内面に扇面文と蔓草文を描く。

1702 は肥前系磁器の丸碗形小坏である。外面に染付による花唐草文を描く。焼成不良のため呉須の発色は悪く、透明釉は白濁する。高台の釉際処理は不揃いで、疊付の内側に砂が付着する。くらわんか。

1703 は肥前系磁器の蓋物である。口縁部内面は無釉である。外面に染付による菊文と流水文と蜻蛉文を描く。焼成不良のため透明釉は白濁する。

1704 は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。口縁部は無釉で砂が付着する。外面に染付による桜花文と書物文を描く。

1705 は肥前系磁器の撥高台碗の蓋である。染付により外面と見込に「寿」字?、口縁部内面に四方櫻文を描く。

1706 は肥前系磁器の合子の蓋である。口縁部は無釉でアルミナ砂を塗布する。外面に色絵（赤色）による条線と一重方形枠内に銘、染付による圈線を描く。

1707 は瀬戸・美濃系磁器の端反碗である。染付により外面に渦文、口縁部内面に帶線、見込に草花文?を描く。

1708 は関西系磁器の端反碗である。染付により外面に竹文・鳥文と人物文、口縁部内面に渦繋ぎ文、見込に連弧文と「太化年製」銘を描く。

1709 は関西系磁器の型打小皿である。青磁。型打成形により口縁部は輪花となり、内側面に陽刻の牡丹文、見込に鹿文と雲文を施す。疊付露胎部は橙色を呈する。

1710 は肥前系陶器の大鉢である。底部外面を除き鉄釉をかける。口縁部は外面からの押圧により輪花となる。

1711 は瀬戸・美濃系陶器の練鉢・捏鉢である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。見込に団子トチン痕がみられる。高台内に不明文字の墨書がみられる。

1712 は瀬戸・美濃系陶器の輪花皿である。疊付を除き灰釉をかける。

1713 は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。高台脇から高台内は無釉である。文様はみられないが、色絵が描かれていた可能性もあると思われる。

1714 は京・信楽系陶器の香炉・火入である。疊付と胴下半部内面を除き灰釉をかける。外面に色絵による飾り馬文（赤色・黒色・他）と竹文（緑色）を描く。剥離が著しい。

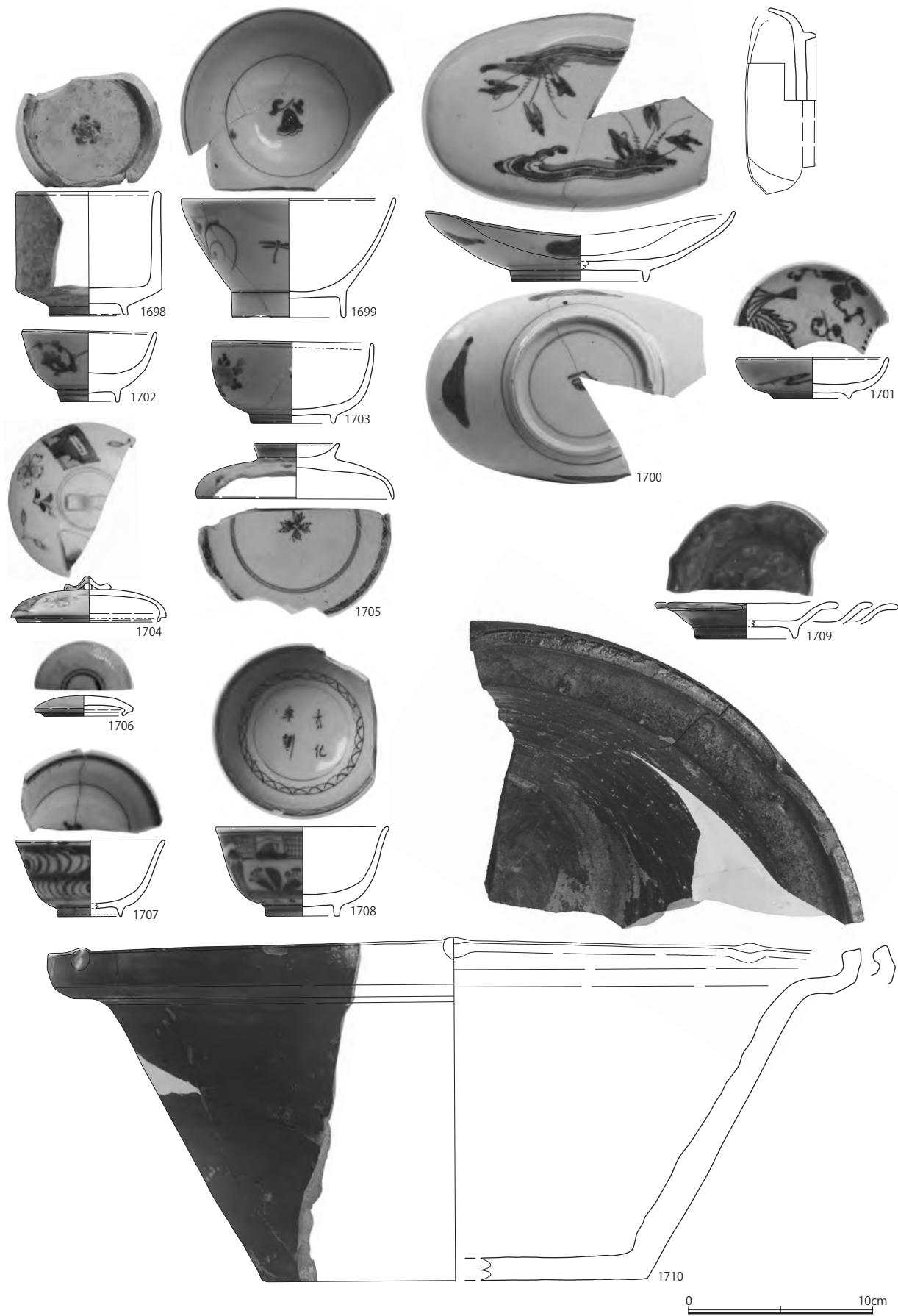
1715 は備前系陶器の灯明受皿である。全面に塗土を施す。仕切りに U 字形の溝が 3 箇所みられる。

1716 は産地不明陶器の水注または土瓶の蓋である。外面に灰釉をかける。底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

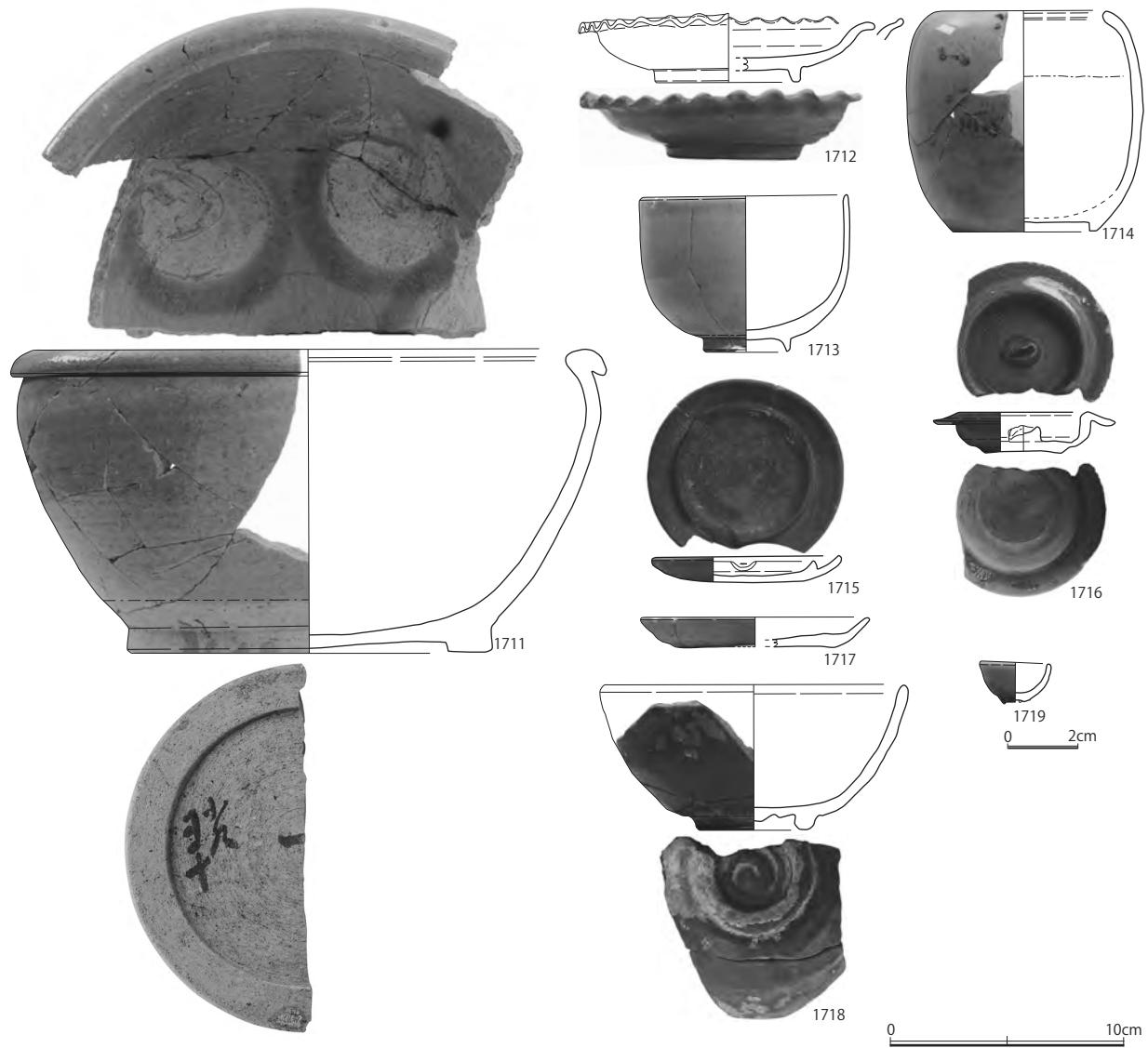
1717 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。

1718 は土師質土器の碗である。全面に赤褐色を呈する透明釉をかけるが、表面は銀化する。渦巻高台。

1719 は肥前系磁器のミニチュアの碗である。型押成形により菊花形となる。白磁。疊付に砂が付着する。



第316図 石組み溝8(遺物溜り10)出土陶磁器類(1)(縮尺:1/3)



第317図 石組み溝8(遺物溜り10)出土陶磁器類(2)(縮尺:1/3 1719縮尺:1/2)

石組み溝8(遺物溜り14)(第318図)

1720は肥前系磁器のくらわんかの皿である。染付により外面に唐草文、内面に花唐草文?、見込にコンニヤク印判の五弁花文、高台内に一重圏線内「渦福」銘を描く。高台の釉際処理は不揃いである。

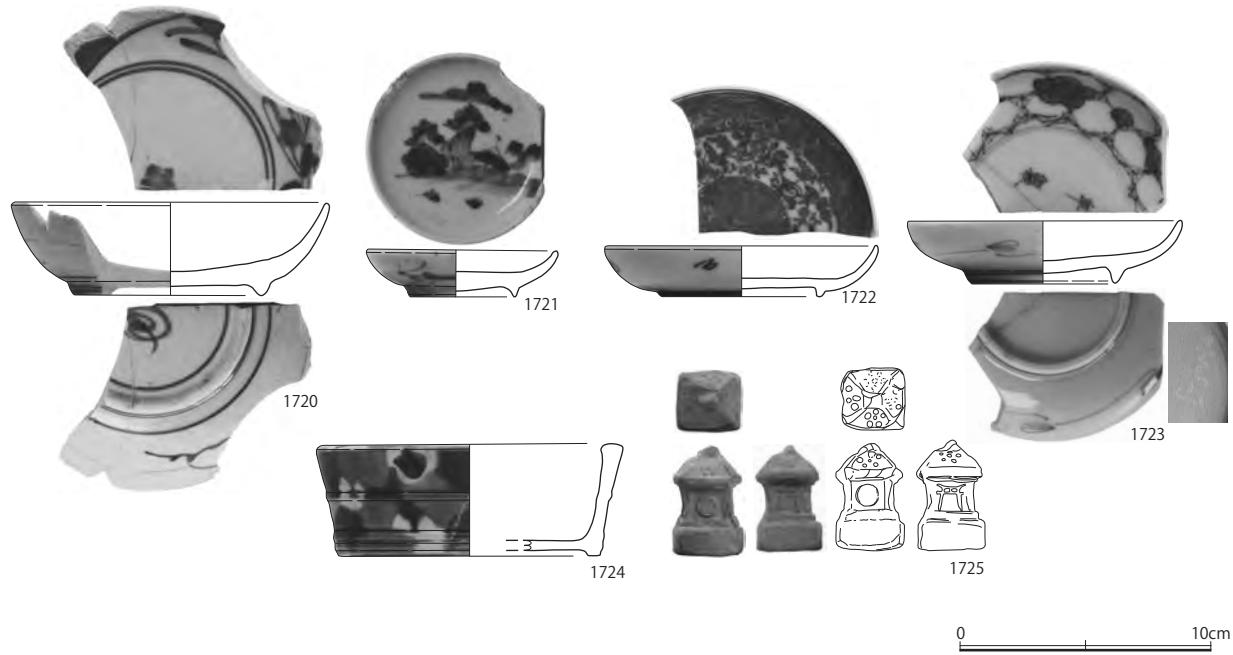
1721は肥前系磁器のU字形高台の小皿である。染付により外面に折松葉文、見込に東屋山水文と帆掛け舟文を描く。

1722は瀬戸・美濃系磁器のU字形高台の小皿である。染付により外面に文字?、内側面と見込中央に銅板絵付の牡丹唐草文、見込外縁に花唐草文、高台内に一重圏線を描く。

1723は関西系磁器のU字形高台の小皿である。染付により外面に唐草文?、内側面に冰裂文と梅花散らし文、見込に「□□年製」銘を描く。焼継が施され、高台内に「口山」の焼継師印がみられる。

1724は珉平焼の鉢である。三彩。胴部外面中部に1条、下部に2条、桶のタガを表現した突帯文がめぐる。

1725は土師質のミニチュアの御輿である。型押成形。対角線上で接合し、中実である。彩色の痕



第318図 石組み溝8(遺物溜り14)出土陶磁器類(縮尺:1/3)

跡がみられる。

石組み溝8(遺物溜り15)(第319図)

1726は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の高いものである。青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に手描きの五弁花文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。高台の釉際処理は揃い、疊付に砂は付着しない。

1727は肥前系磁器の半球碗である。外面に染付による素書の梅文を描く。

1728・1729は肥前系磁器の丸碗形小坏である。1728は外面に染付による井桁文を描く。呉須の発色は悪い。1729の胎土は灰色の強い灰白色である。染付により外面に草花文、高台内にも文様を描く。呉須は灰色に発色する。疊付に砂が付着する。くらわんか。

1730は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台が無釉のものである。蛇ノ目釉剥ぎ部分に砂が付着する。

1731は肥前系磁器の撥高台碗の蓋である。染付により外面に松文と波文、口縁部内面に斜格子文、見込に手描きの五弁花文を描く。

1732は肥前系磁器の段重である。口縁端部と腰部の括れ部は無釉で、腰部には砂が付着する。外面に色絵(赤色)による赤地牡丹文と染付による圈線を描く。

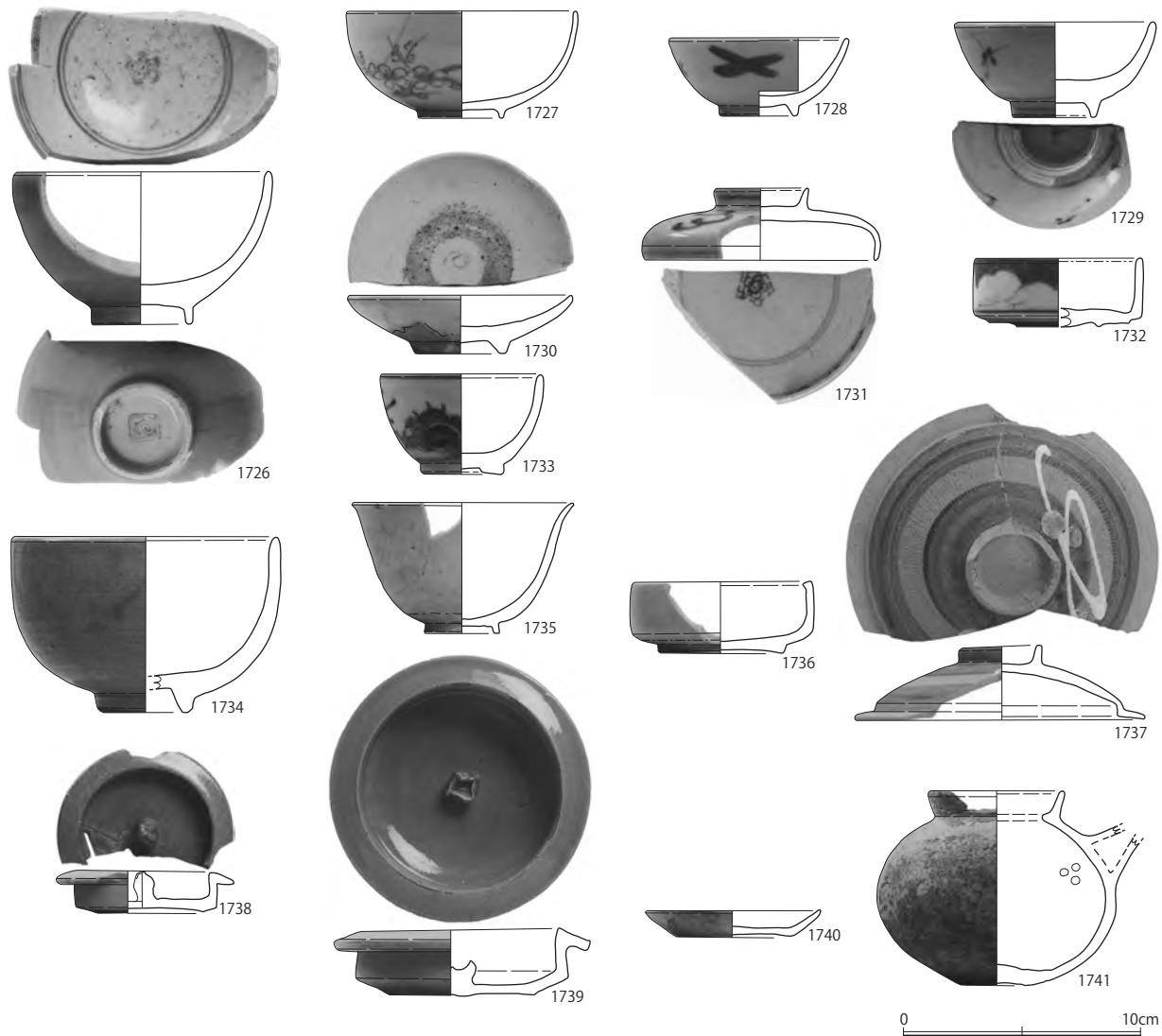
1733は関西系磁器の丸碗形小坏である。疊付から高台内を除き透明釉をかける。外面に染付による雲龍文と宝文(法輪文)を描き、口縁端部に口紅を施す。蛇ノ目高台。

1734は肥前系陶器の呉器手碗である。疊付を除き灰釉をかける。疊付に重ね焼き痕?がみられる。

1735は京・信楽系陶器の端反碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。疊付際をわずかに面取りする。

1736は京・信楽系陶器の合子である。口縁端部と高台脇から高台を除き灰釉をかける。

1737は産地不明陶器の行平鍋の蓋である。口縁部を除く内面に灰釉をかける。外面にトビガンナ



第319図 石組み溝8(遺物溜り15)出土陶磁器類(縮尺:1/3)

を施し、鋳釉による帶線、白化粧土のイッチン描と緑釉による文様を描く。

1738・1739は産地不明陶器の水注または土瓶の蓋である。外面に灰釉をかける。

1740は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕は不明である。

1741は産地不明の軟質施釉陶器の土瓶である。外面に透明釉をかけるが、剥離が著しい。

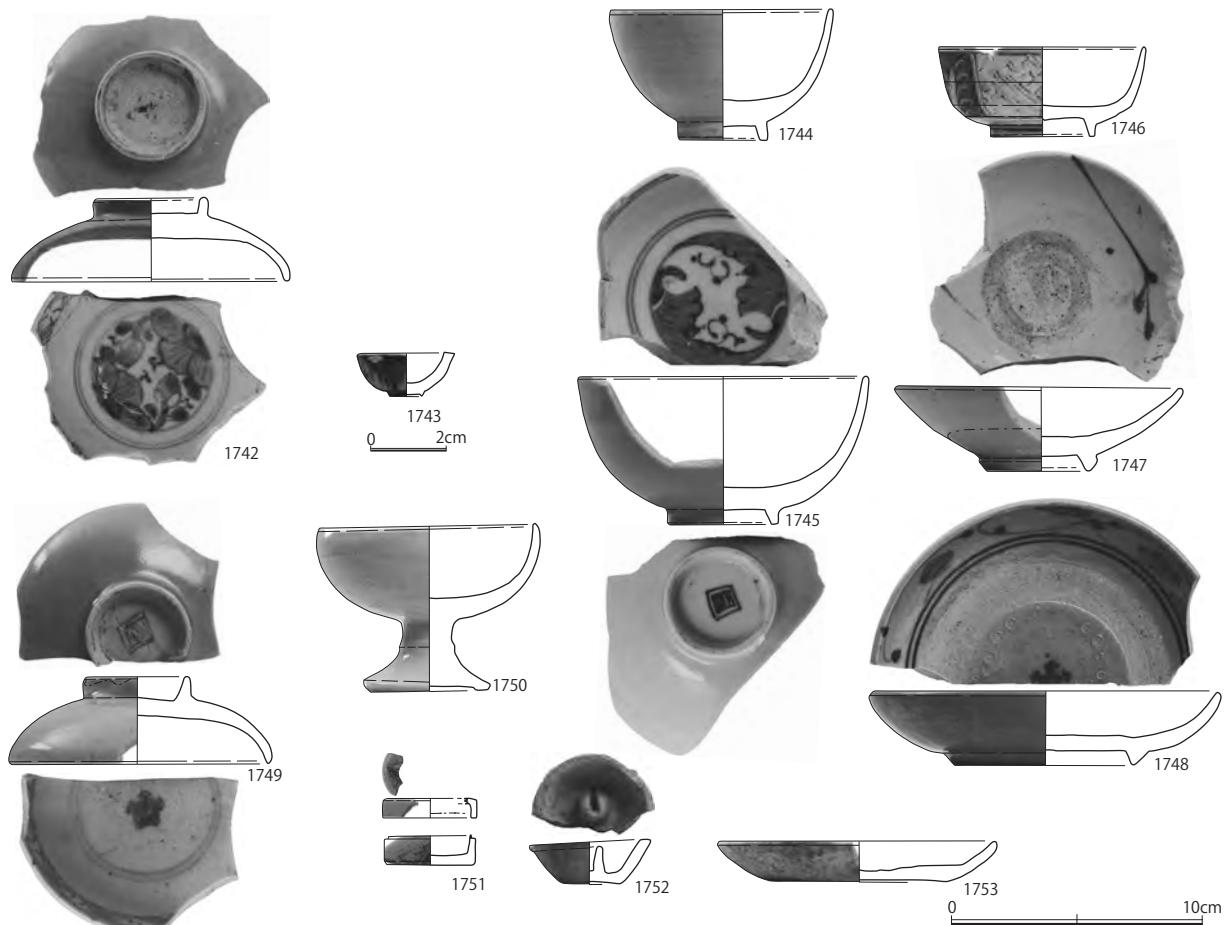
石組み溝9(遺物溜り3)(第320図)

1742は肥前系磁器のくらわんか碗の蓋である。青磁染付。染付により口縁部内面に四方織文、見込に花文を描く。摘み内に二重方形枠内「渦福」を描くと思われるが、焼成不良のため透明釉が白濁し不鮮明である。摘みの内側に砂が付着し、畳付露胎部にアルミナ砂を塗布する。

1743は土師質のミニチュアの碗である。型押成形。内面に緑釉をかける。

石組み溝9(遺物溜り9)(第320図)

1744は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の高いものである。高台の釉際処理はやや不揃いで、畳付の内側に砂が付着する。



第320図 石組み溝9(遺物溜り3・9)出土陶磁器類(縮尺:1/3 1743 縮尺:1/2)

1745は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込に唐草文?、高台内に二重方形枠内「筒江」銘を描く。高台の釉際処理は揃い、疊付に砂は付着しない。

1746は肥前系磁器の碗である。外面に色絵(赤色・金色・黒色・他)による唐草文?と紗綾形文と網目文を描く。

1747は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台が無釉のものである。内側面に染付による不明文様を描く。呉須の発色は悪い。見込の蛇ノ目釉剥ぎ部分に砂が付着する。

1748は肥前系磁器の見込蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径の大きいものである。染付により内側面に花唐草文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。呉須・透明釉とともに灰色を呈する。

1749は肥前系磁器のくらわんか碗の蓋である。青磁染付。染付により口縁部内面に四方櫛文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。高台の釉際処理は不揃いで、疊付にアルミナ砂を塗布する。

1750は肥前系磁器の仏飯器である。残存部に文様はみられない。

1751は京・信楽系陶器の合子とその蓋である。身は底部と蓋受けを除き灰釉をかけ、底部際を面取りする。蓋は口縁端部から口縁部内面を除き灰釉をかけ、上面に錫絵と呉須による文様を描く。

1752は土師質土器の秉燭である。



第321図 遺物溜り11出土陶磁器類（縮尺：1/3）

1753は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。

遺物溜り11（第321図）

1754は肥前系磁器の小広東碗である。染付により外面に梅文、口縁部内面に圈線、見込に「寿」字を描く。

1755は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の高いものである。焼成不良のため外面の透明釉は白濁する。残存部に文様はみられない。高台の釉際処理は揃い、高台の内側に砂が付着する。

1756は備前系陶器の極小甕である。外面に型押による陽刻の家紋「五瓜ニ唐花」を貼り付ける。底部を除く外面に火摺がみられる。底部内面に自然釉と砂が付着する。

蜂須賀家屋敷地内

SK13（第322図）

1757は関西系磁器の端反碗である。胎土はややガラス質で、畳付を除き明緑灰色を呈する透明釉をかける。畠付の釉際露胎部は薄い橙色を呈する。染付により外面に太湖石文と草花文、口縁部内面に渦文、見込に「寿」字を描く。呉須の発色は良好である。

SK15（第323・324図）

1758は土師質土器の皿である。口縁部外面から内面全面に橙色を呈する透明釉をかける。底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1759・1760は土錘である。

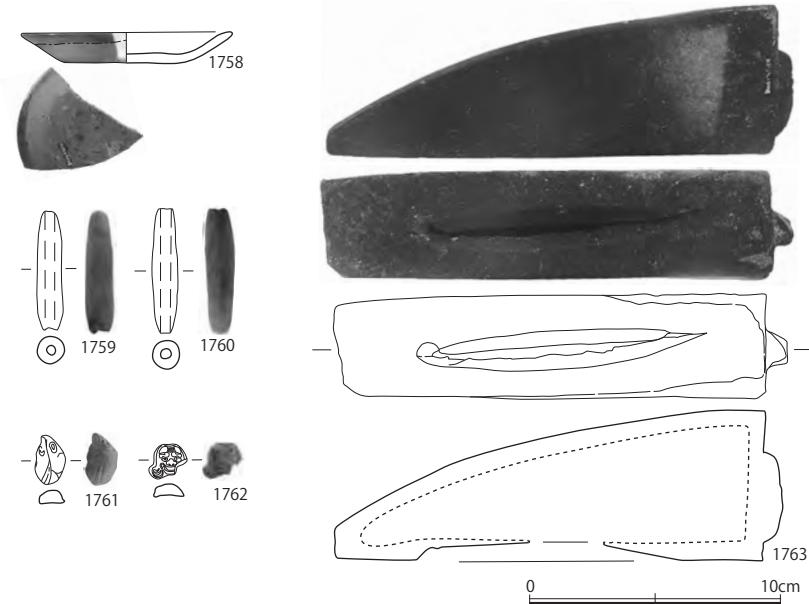
1761・1762は土師質土器の泥面子（芥子面）である。型押成形。

1761はネズミ。1762は鬼瓦。

第322図 蜂須賀家屋敷地内 SK13出土陶磁器類（縮尺：1/3）

1763は瓦質土器の火鉢・焜炉類の付属品である。1764のようないわゆる竈の付属品である。対になると思われる個体が1点出土している。

1764は瓦質土器の火鉢・焜炉類である。外壁前面に「龕」の刻印がみられる。外面は丁寧なミガキ、外壁内面と内部施設内面は粗いハケメである。外壁内面と内部施設内外面にススが付着する。



第323図 蜂須賀家屋敷地内 SK15出土陶磁器類(1)（縮尺：1／3）

SK16（第325・326図）

1765は肥前系磁器の半球碗である。外面に染付による秋草文を描く。呉須の発色は良好である。

1766は肥前系磁器の端反碗である。外面に染付による丸文内薄文、色絵と金彩による萩文？、見込に染付による丸文内薄文を描く。口縁端部に金彩を施す。

1767は肥前系磁器の湯飲碗である。外面に染付による草花文を描く。呉須の発色は良好である。

1768は肥前系磁器の輪花一枚絵皿である。型打成形により口縁部は輪花となり、端部に口紅を施す。内面に染付による楼閣山水文を描く。

1769は肥前系磁器の小壺である。染付により外面に四方櫛文と唐草文、墨弾きの剣先文、口縁部内面に蓮弁文？、見込に素書の唐花文を描く。呉須の発色は良好である。

1770は肥前系磁器の段重である。口縁端部から口縁部内面と腰部の括れ部は無釉である。外面に色絵と染付による窓絵草花文を描く。

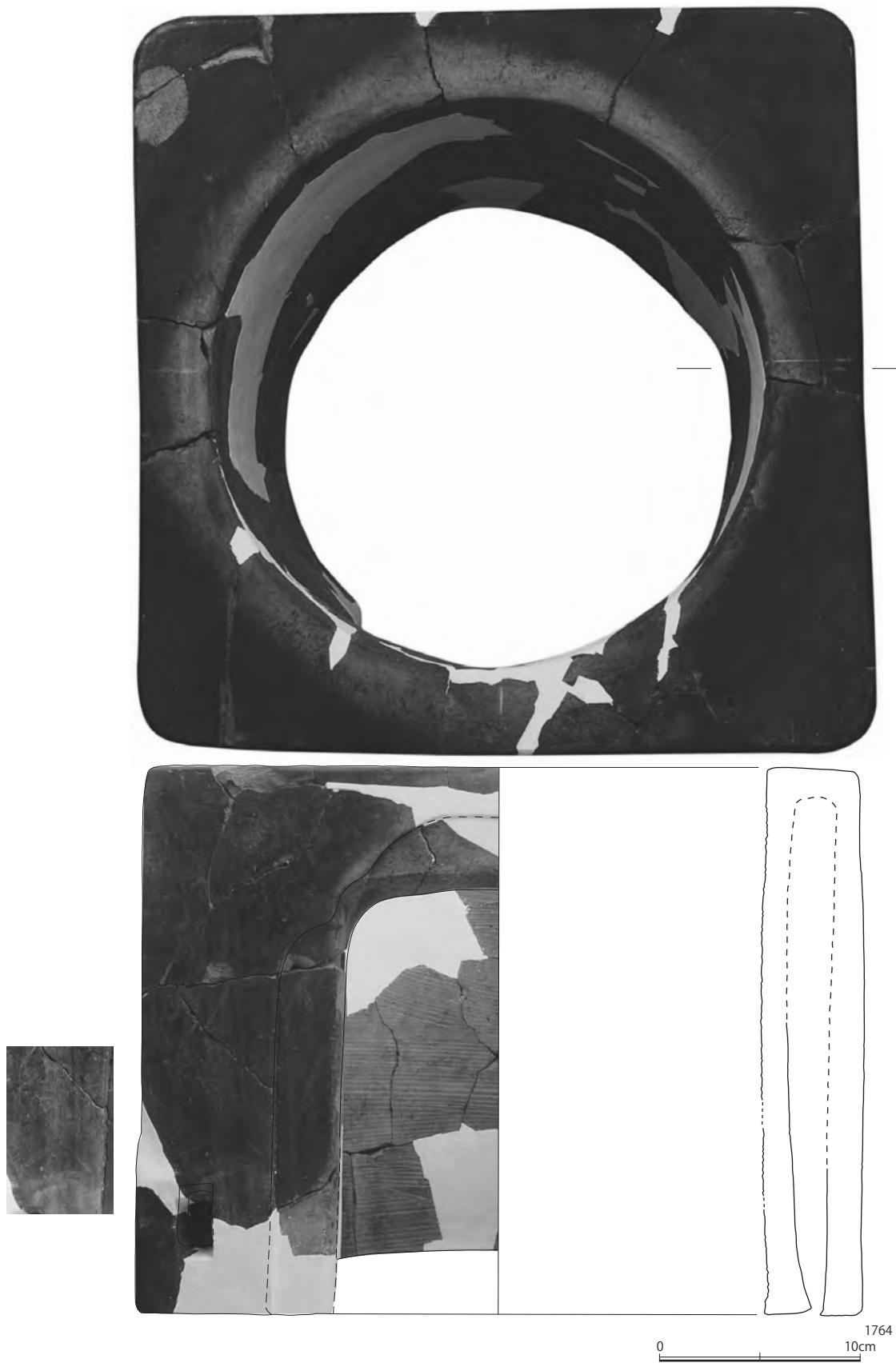
1771・1772は肥前系磁器の紅皿である。1771は貝殻状に型押成形される。白磁。内面にのみ透明釉をかける。1772は白磁。外面は型押成形による陽刻の蛸唐草文。

1773は肥前系磁器の紅猪口である。外面に染付による「大坂新町口（於）」の文字がみられる。疊付に砂が付着する。

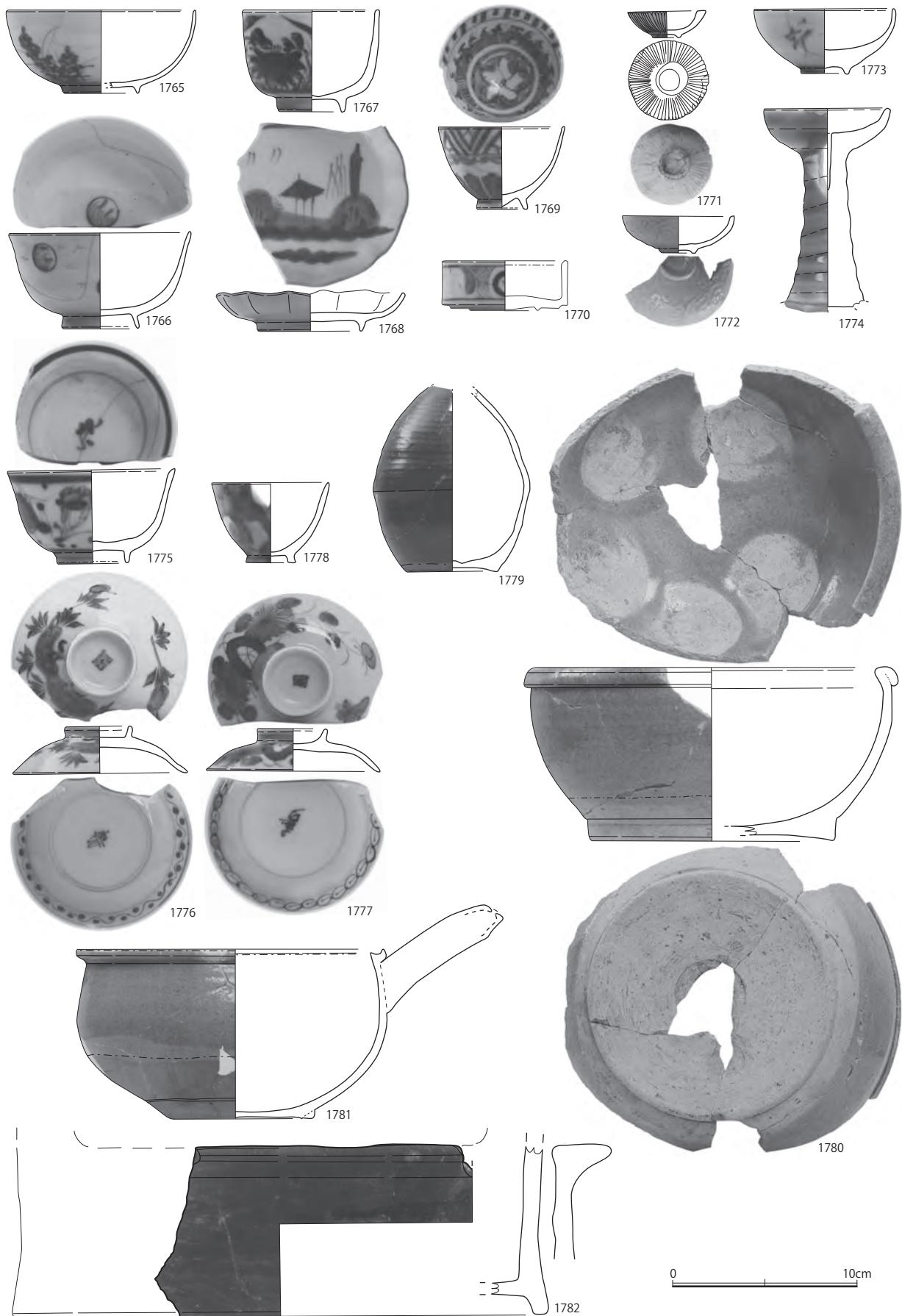
1774は肥前系磁器の燭台である。底部を除き青磁釉をかける。SK15の破片と接合する。

1775は瀬戸・美濃系磁器の端反碗である。染付により外面に花唐草文と宝文、口縁部内面に帶線と圈線、見込に草花文を描く。

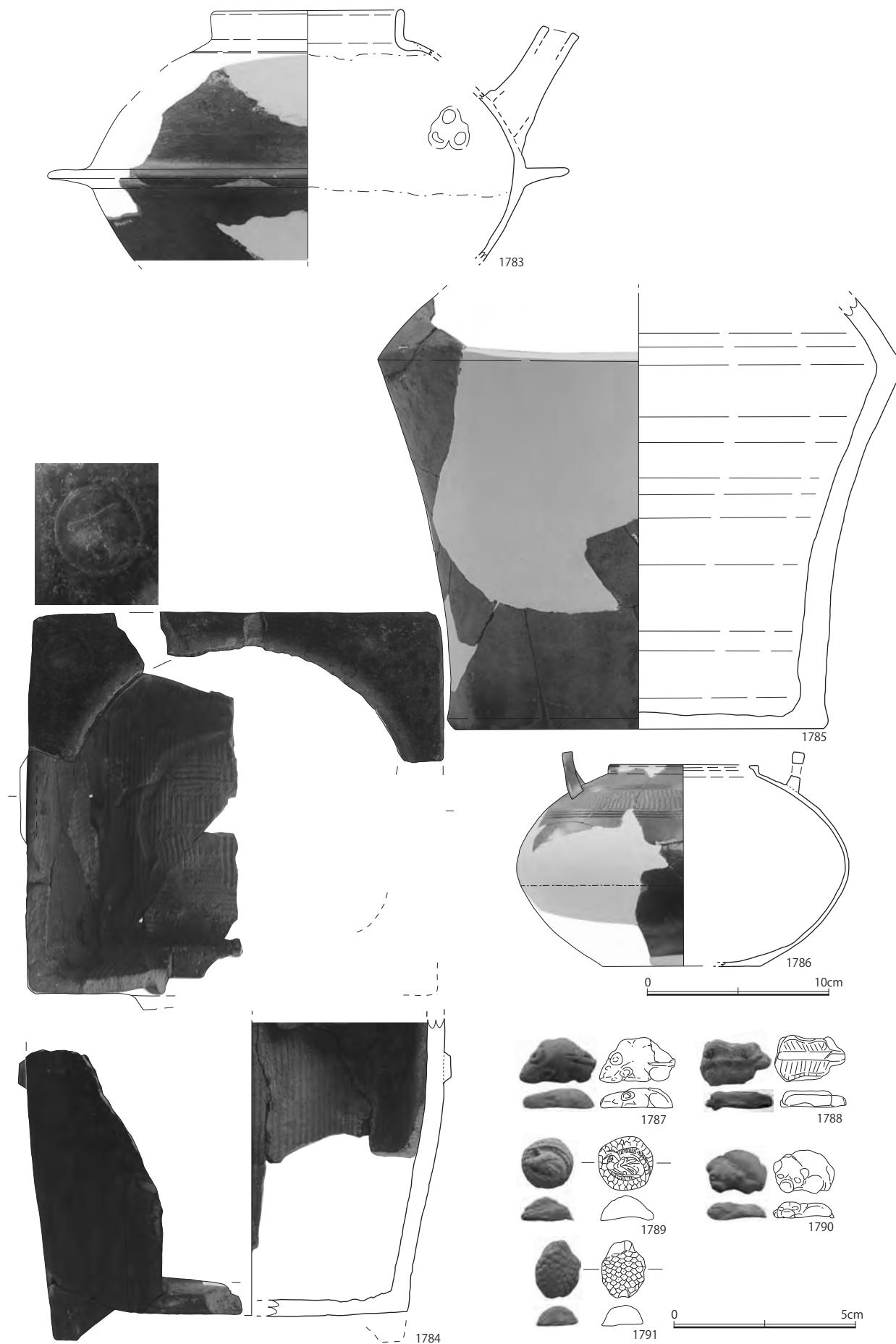
1776・1777は関西系磁器の端反碗の蓋である。1776はやや光沢のある胎土で、高台の釉際露胎部は薄い橙色を呈する。染付により外面に草花文、口縁部内面に波線と烈点文、見込に「寿」字、高台内に一重方形枠内変形字銘を描く。呉須の発色は良好である。1777は疊付を除き明青灰色を呈する透明釉をかける。高台の釉際露胎部は薄い橙色を呈する。染付により外面に太湖石文と草花文と蝶文、



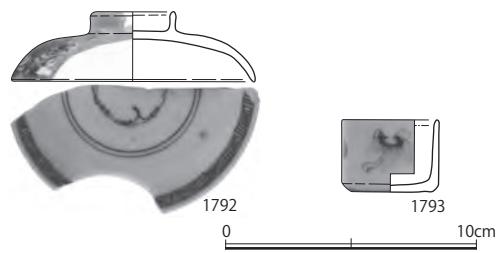
第324図 蜂須賀家屋敷地内 SK15 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)



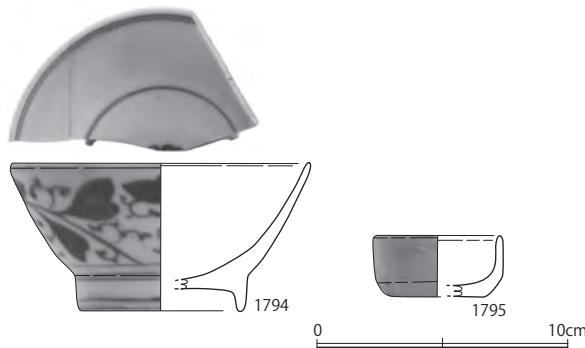
第325図 蜂須賀家屋敷地内 SK16 出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)



第326図 蜂須賀家屋敷地内 SK16 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3 1787~1791 縮尺: 2/3)



第327図 蜂須賀家屋敷地内 SK17出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第328図 蜂須賀家屋敷地内 SK18出土陶磁器類（縮尺：1／3）

口縁部内面に渦文、見込に「寿」字、高台内に一重方形枠内変形字銘を描く。呉須の発色は良好である。

1778は珉平焼の小杯である。内面と高台内に透明釉、外面に三彩釉をかける。

1779は大谷焼の瓶である。慣用名「棗」。胴下部から底部を除く外面に鉄釉をかける。

1780は瀬戸・美濃系陶器の練鉢・捏鉢である。見込に団子トチン痕がみられる。胴下部外面から底部を除き灰釉をかける。底部に墨書がみられる。

1781は産地不明陶器の行平鍋である。見込にハリ支え痕がみられる。蓋受けと胴下半部から底部を除く外面に灰釉をかける。

1782は瓦質土器の火鉢・焜炉類である。外面は丁寧なミガキ、内面は粗い横ハケを施す。

1783は瓦質土器の土瓶である。胴下半部外面にススが付着する。SK13・SK15の破片と接合する。

1784は瓦質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「七厘」。外壁外面は丁寧なミガキ、底部は丁寧なナデ、内面は粗いハケメを施す。外壁上面に「上」の刻印がみられる。

1785は土師質土器の火消壺である。内外面に丁寧な横ナデを施し、ススが付着する。SK15の破片と接合する。

1786は土師質土器の土瓶である。胴下部から底部を除く外面に明赤褐色を呈する透明釉をかけ、胴上部外面にトビガンナを施す。外面の露胎部にススが付着する。SK15の破片と接合する。

1787～1791は泥面子（芥子面）である。型押成形。1787はネズミ。1788は軍配。

1789は龍。1790は犬。1791は松かさ。

SK17（第327図）

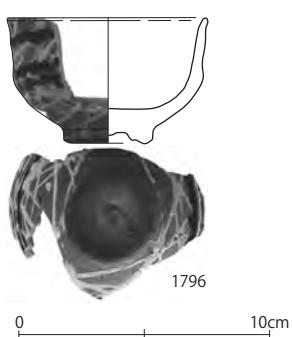
1792は肥前系磁器の丸碗の蓋である。染付により外面に花唐草文、口縁部内面に雷文、見込に環状松竹梅文を描く。

1793は肥前系磁器の段重・蓋物である。底部と口縁部内面は無釉である。外面に染付による宝尽くし文（蓑文・宝珠文）を描く。

SK18（第328図）

1794は肥前系磁器の広東碗である。染付により外面に花唐草文、口縁部内面に圈線、見込に一重圈線内文様、高台内に一重圈線内銘を描く。

1795は土師質土器の鉢形容器である。ロクロ成形で、底部に回転糸切り離し痕がみられる。



第329図 蜂須賀家屋敷地内 SK19
出土陶磁器類（縮尺：1/3）

SK19（第329図）

1796は萩系陶器のピラ掛け碗である。内面に藁灰釉をかける。外面に白釉と鉄釉によるピラ掛けを施す。渦巻高台。SK16の破片と接合する。

遺物溜り17（第330～335図）

1797～1799は肥前系磁器のくらわんか碗である。1797は染付により外面に松文、口縁部内面に圈線、見込に昆虫文を描く。吳須の発色は悪く、高台に砂が付着する。1798は染付により外面に靈芝文、口縁部内面に四方櫛文、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に一重圈線内「福」字を描く。高台に砂が付着する。1799は染付により外面に丸文と井桁文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。吳須の発色は悪く、高台の釉際処理は不揃いで、疊付に砂が付着する。胴下半部内面から見込に漆が付着する。

1800は肥前系磁器の広東碗である。染付により外面に靈芝文、見込に「寿」字を描く。吳須の発色は悪い。くらわんか。

1801・1802は肥前系磁器の端反碗である。1801は染付により外面に葡萄文？と雁文？、口縁部内面に圈線、見込に「寿」字を描く。吳須の発色は悪い。疊付の内側に砂が付着する。1802は染付により外面に花文と竹文、口縁部内面に波線と帶線、見込に草文を描く。

1803は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿のうち高台の高いものである。型打成形で、口縁部は輪花となる。内面に染付による東屋山水文を描く。

1804は肥前系磁器の小皿である。型押成形により葉形となる。見込に染付による東屋山水文と帆掛け舟文を描く。

1805は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の猪口である。染付により外面に花東文と蜻蛉文、口縁部内面に雲龍文と瑞雲文、見込に一重圈線を描く。蛇ノ目凹形高台の無釉部分に「支」？の墨書がみられる。

1806は肥前系磁器のくらわんか碗の蓋である。染付により外面に「寿」字と丸寿字文、口縁部内面に四方櫛文、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。

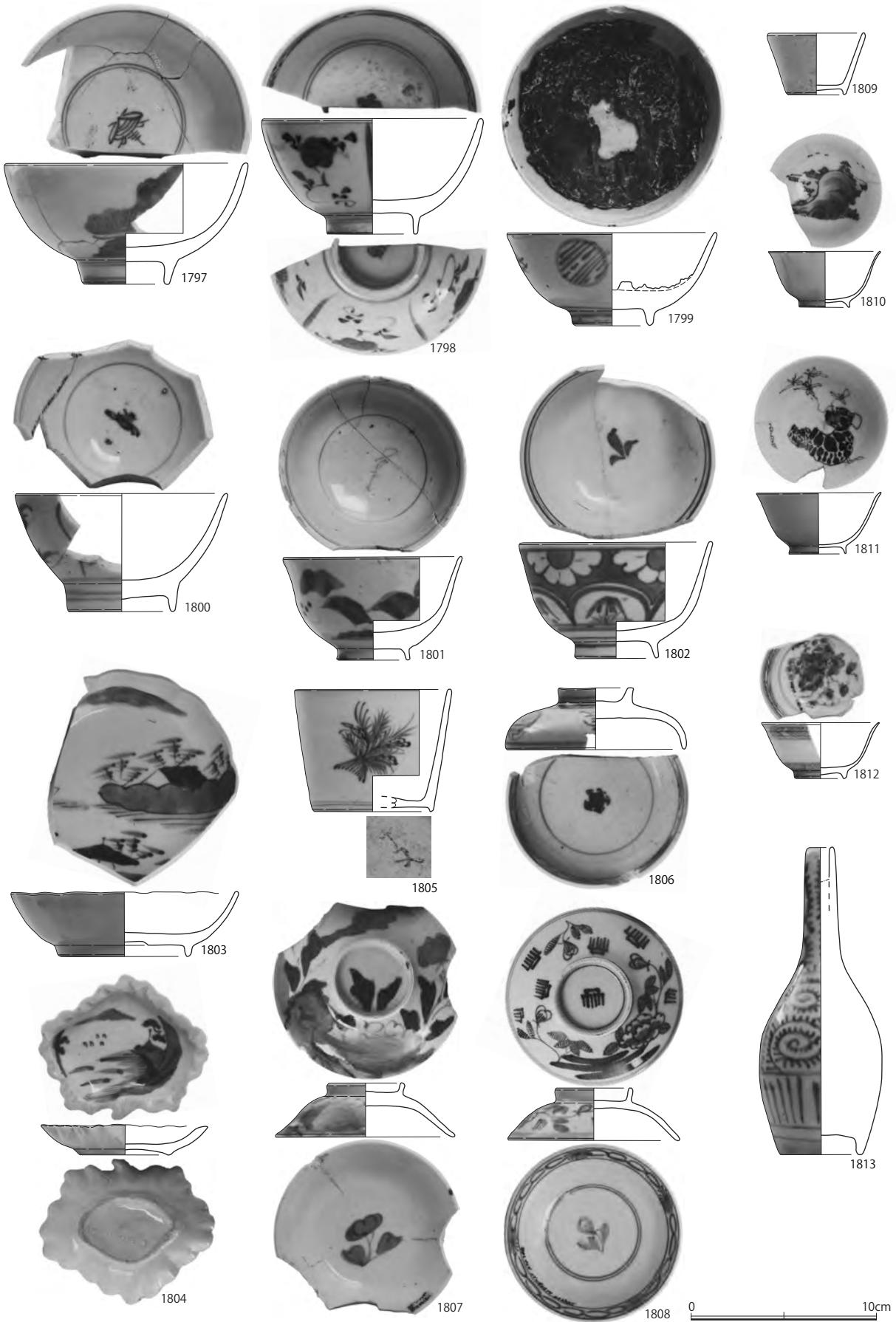
1807・1808は肥前系磁器の端反碗の蓋である。1807は外面と見込に染付による牡丹文を描く。1808は染付により外面に牡丹文と土坡文と源氏香文、口縁部内面に花繫ぎ文、見込に牡丹文、摘み内に一重圈線内源氏香文を描く。

1809は肥前系磁器の碁笥底の小坏である。白磁。焼成不良のため透明釉は白濁する。

1810～1812は肥前系磁器の薄手酒杯である。1810は内面に染付による東屋山水文と帆掛け舟文を描く。1811は内面に色絵（青色）によるユキノシタ文？と判読不明の落款を描く。1812は染付により外面と口縁部内面に矢羽根文、見込に葡萄文を描く。

1813は肥前系磁器の御酒徳利である。疊付を除く外面に透明釉をかける。外面に染付による蛸唐草文と蓮弁文を描く。吳須の発色は悪い。疊付に砂が付着する。

1814・1815は肥前系磁器の段重である。1814は口縁端部から口縁部内面と腰部の括れ部が無油である。染付により外面に竹文と唐草文？を描く。1815は口縁端部から口縁部内面と疊付は無釉である。



第330図 蜂須賀家屋敷地内 遺物溜り17出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)

外面に染付による蛸唐草文を描く。

1816は肥前系磁器の蓋物である。口縁部内面は無釉である。外面に染付による帶線を描く。

1817・1818は肥前系磁器の仏飯器である。1817は底部を除き透明釉をかける。外面に染付による折枝梅文を描く。底部の釉際処理は不揃いである。1818は底部を除き透明釉をかけるが、焼成不良のため白濁する。底部の釉際処理は不揃いである。残存部に文様はみられない。

1819は肥前系磁器の香炉・火入である。青磁。胴上部内面から底部を除く外面に青磁釉をかける。見込に砂が付着する。

1820～1829は瀬戸・美濃系磁器の端反碗である。1820は染付により外面に背景塗埋の芭蕉文、口縁部内面に帶線、見込に二重圈線内文様を描く。1821は外面に色絵（赤色・黒色・他）による葡萄文と鳥文、一重方形枠内「王」字、見込に色絵（黒色）による文様、高台内に色絵（赤色）による一重方形枠内「金」字を描く。1822は染付により外面に桜花文と草花文と線彫りの不明文様、口縁部内面に波線、見込に桜花文を描く。1823は染付により外面に山水文と家屋文と帆掛け舟文、口縁部内面に帶線、見込に岩波文を描く。焼継が施され、高台内に「一」の焼継師印がみられる。1824は染付により外面に花唐草文、口縁部内面に渦繋ぎ文、見込に草花文、高台内に一重方形枠内変形字銘を描く。幅広高台。1825は染付により外面に唐花唐草文、口縁部内面に帶線と圈線、見込に草花文を描く。1826は染付により外面に山水文と帆掛け舟文と雁文、口縁部内面に帶線と圈線、見込に岩波文、高台内に一重方形枠内変形字銘を描く。1827は染付により外面に東屋山水文と帆掛け舟文、墨弾きの如意頭文、口縁部内面に墨弾きの如意頭文、見込に岩波文を描く。1828は染付により外面に唐花唐草文、口縁部内面に圈線、見込に草花文を描く。1829は染付により外面と口縁部内面に花唐草文、見込に草花文？、高台内に一重方形枠内変形字銘を描く。

1830・1831は瀬戸・美濃系磁器の型皿である。糸切り細工成形により口縁部は輪花となり、高台は平面方形の貼り付け高台である。1830は内側面に陽刻の七宝文と丸文内花文、見込に陽刻の馬文と雲文と岩波文を施し、染付ける。1831は内側面に陽刻の松葉文、見込に陽刻の十字花文を施し、染付ける。

1832～1835は関西系磁器の端反碗である。1832・1833は染付により外面に草花文、口縁部内面に唐草文？、見込に「寿」字を描く。1834は染付により外面に舟遊び文と「後赤壁賦」の詩句、口縁部内面に渦繋ぎ文、見込に岩波文を描く。蛇ノ目高台。1835は色絵（赤色）により外面に草花文と詩句「花□春色□一」、見込に「福」字を描く。蛇ノ目高台。

1836は肥前系陶器の瓶である。胴部外面屈曲部から底部外面を除き灰釉をかける。

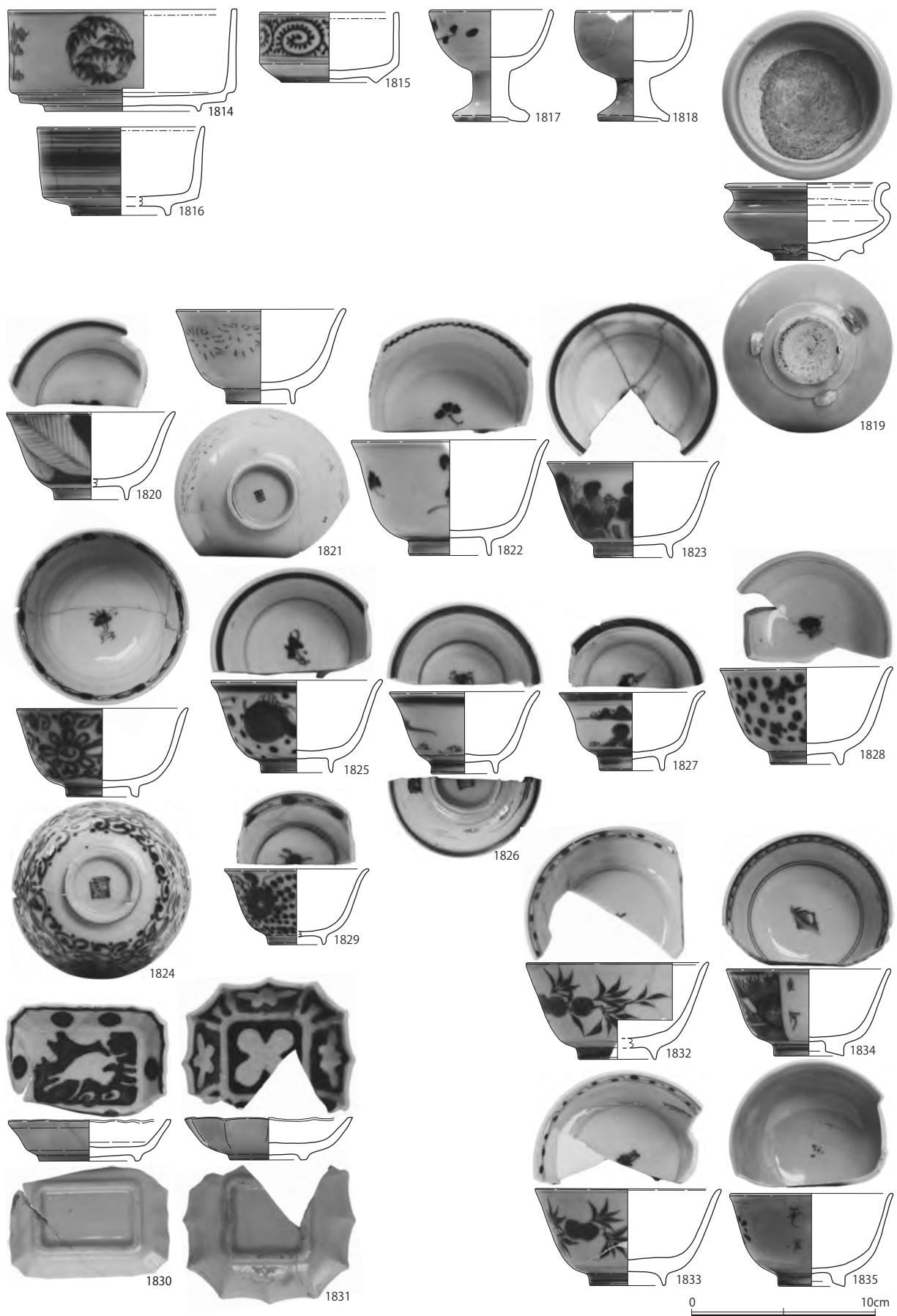
1837は瀬戸・美濃系陶器の拳骨茶碗である。高台脇から高台内を除き鉄釉（黒釉）をかける。残存部に胴部への押圧はみられない。幅広高台。

1838は瀬戸・美濃系陶器の太白手の広東碗である。畳付を除き透明釉をかける。染付により外面に草花文、口縁部内面に圈線、見込にも文様を描く。

1839は瀬戸・美濃系陶器の皿である。高台脇から畠付を除き灰釉をかける。見込に円錐ピン痕がみられる。

1840は瀬戸・美濃系陶器の甕である。底部外面を除き鉄釉をかける。

1841・1842は京・信楽系陶器の小杉碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。1841は外



第331図 蜂須賀家屋敷地内 遺物溜り17 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)

面に錆絵による若松文を描く。

1843・1844は京・信楽系陶器の端反碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。1844の高台内に「太」字の墨書がみられ、畳付際を面取りする。

1845は京・信楽系陶器の注連縄文碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。外面に色絵による注連縄文（赤色・黄色・緑色・他）と海老文（赤色）を描く。

1846は京・信楽系陶器の灰釉丸碗である。高台脇から高台内は無釉である。外面に色絵（赤色・茶色・他）による草花文？を描く。畳付際を面取りする。

1847は京・信楽系陶器の皿である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。見込に錆絵による折松葉文？を描く。畳付際を面取りする。

1848は京・信楽系陶器の段重・蓋物の蓋である。外面に灰釉をかける。

1849は京・信楽系陶器の爛徳利である。底部を除く外面に灰釉をかける。外面に錆絵による鳥の翼と判読不明文字を描く。翼を描いた部分は外面からの押圧により凹む。底部際を面取りする。

1850は京・信楽系陶器の柄杓である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。胴中部内面に鉄釉による一条の横線を描く。

1851は京・信楽系陶器の灯明皿である。内面に櫛描文を施し、灰釉をかける。見込に三足付板トチの支え痕、口縁部に灯芯油痕がみられる。

1852は丹波系陶器の甕である。内外面に塗土を施し、自然釉がかかる。内面ににぶい黄橙色の物質が付着する。

1853は萩系陶器のピラ掛け碗である。内面に藁灰釉をかける。外面に白釉と鉄釉によるピラ掛けを施す。渦巻高台。

1854は舞子焼の小壺である。胎土は黒色の鉄粉状微粒子を多量に含む。畳付を除き鉄染みがみられる灰釉をかける。外面に白化粧土のイッチン描による文様を描く。

1855は大谷焼の半筒形小碗である。高台脇から高台内を除き鉄釉をかける。

1856は大谷焼の瓶である。頸部内面から底部を除く外面に鉄釉をかける。

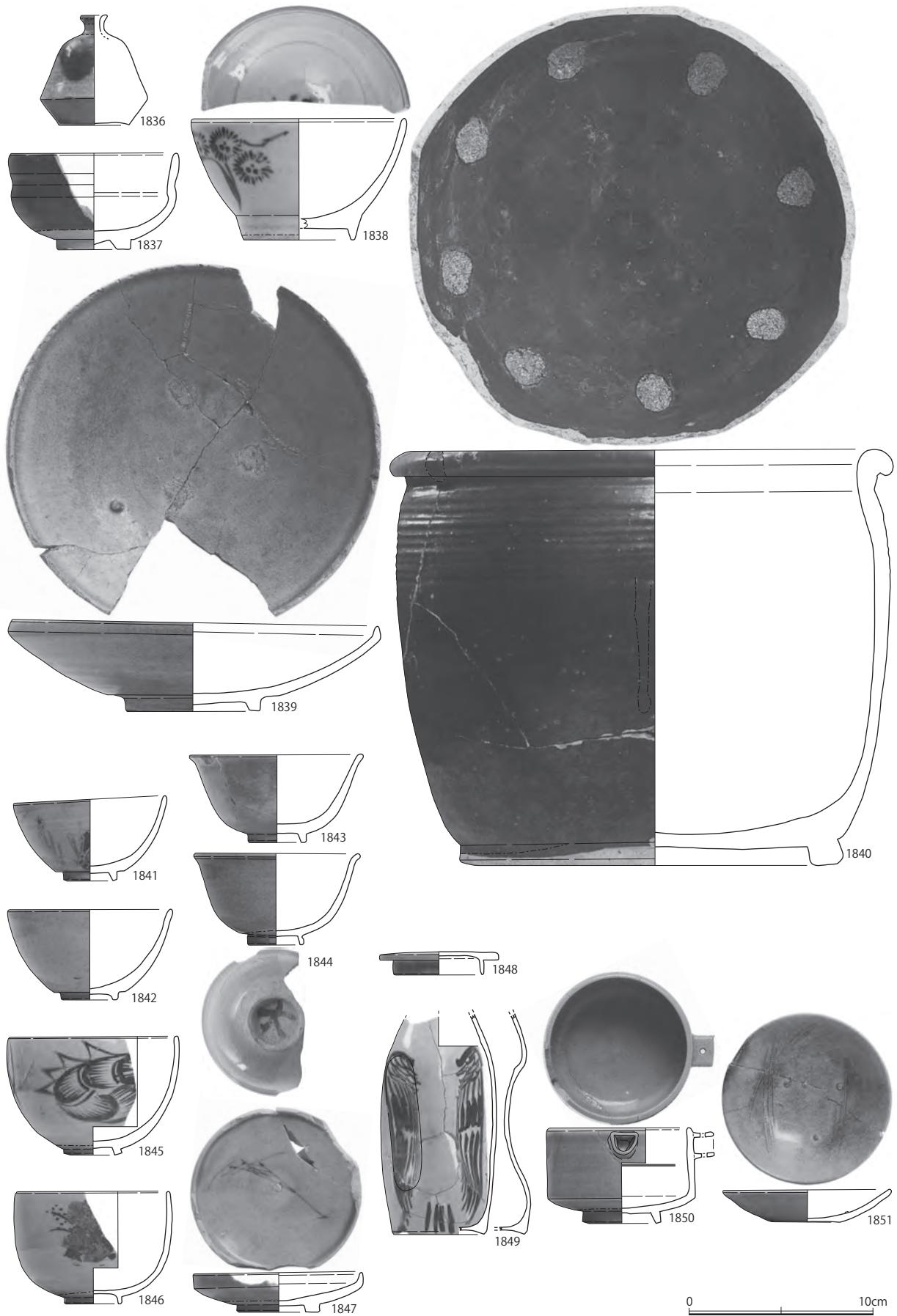
1857は大谷焼の灯明具である。底部を除く外面に鉄釉をかける。受皿の仕切りにU字形の溝が1箇所みられる。

1858は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは放射状と思われる。胴部外面調整はヘラケズリののちナデである。

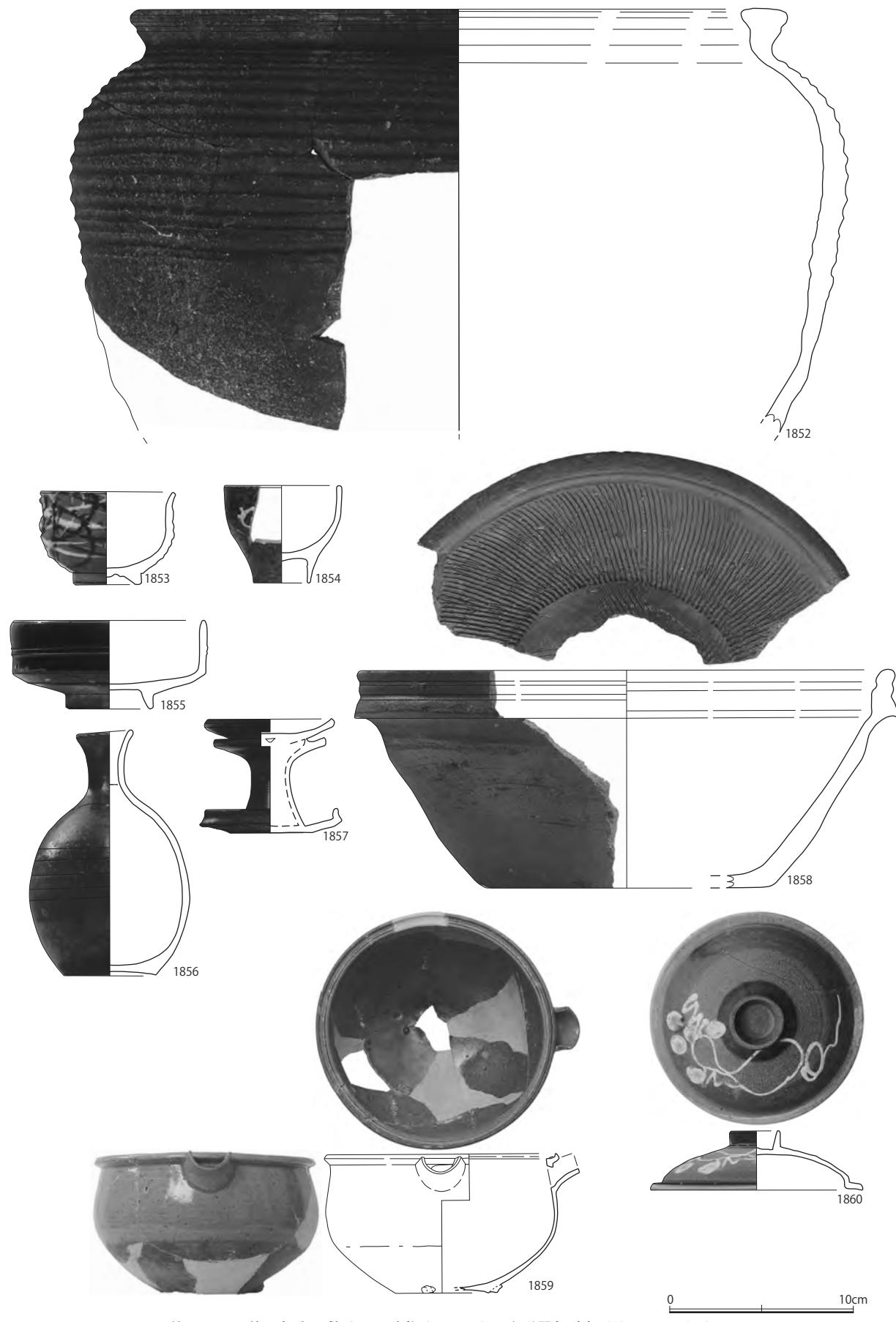
1859は産地不明陶器の行平鍋である。胴下半部から底部外面を除き灰釉をかける。底部内面にハリ支え痕、蓋受けに重ね焼き痕がみられる。外面露胎部にススが付着する。遺物溜り25の破片と接合する。

1860は産地不明陶器の行平鍋の蓋である。口縁部を除く内面に灰釉をかけ、口縁部内面にアルミニウム砂を塗布する。外面にトビガンナを施し、鑄釉による帶線と白化粧土のイッチン描による植物文？を描く。

1861・1862は産地不明陶器の土瓶である。1861は胴下部から底部外面を除き灰釉をかける。内面は粗く施釉する。外面に白化粧土のイッチン描と緑釉による菊文を描く。1862は口縁端部と胴下部を除く外面に白化粧土を塗布したのち透明釉をかける。胴部内面に鉄釉を薄くかける。外面に鉄釉・



第332図 蜂須賀家屋敷地内 遺物溜り17出土陶磁器類(3) (縮尺: 1/3)



第333図 蜂須賀家屋敷地内 遺物溜り17出土陶磁器類(4) (縮尺: 1/3)

緑釉・黄釉による折枝椿文を描く。外面露胎部にススが付着する。

1863・1864は産地不明陶器の土瓶の蓋である。1863は外面に灰釉をかけ、白化粧土のイッチン描による捻花文を描く。1864は外面に白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。鉄釉と緑釉による捻花文を描く。

1865は産地不明陶器の大鉢である。無釉焼締陶器。

1866は土師質土器の焼塩壺の蓋である。型押成形。金雲母を多く含む胎土である。内面全面に布目痕がみられる。刻印はない。

1867は土師質土器の焼塩壺である。板作り成形。金雲母を多く含む胎土である。胴下部内面に粘土紐の痕跡、それより上部に布目痕がみられる。

1868は土師質土器の関西系焙烙である。口縁部に粘土の付加はなく、端部に未貫通の穿孔が2箇所みられる。底部内外面にススが付着する。

1869は土師質土器の秉燭である。芯立にススが付着する。

1870・1871は土師質土器の火消壺である。1870は金雲母を多く含む胎土である。外面調整は丁寧なナデ、内面調整は丁寧な横ナデである。底部際を面取りし、内面にススが付着する。1871は底部に判読不明文字の墨書がみられる。内面全面にススが付着する。

1872は瓦質土器の火鉢・焜炉類である。

1873は瓦質土器の土瓶である。型押成形により外面に陽刻の家屋文、岩山文、松文、楼閣文、草花文を施す。底部外面にススが付着する。

1874は土師質土器の行平鍋の蓋である。全面に明赤褐色を呈する透明釉をかける。

1875は土師質土器の土瓶の蓋である。外面にオリーブ褐色を呈する透明釉をかける。底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1876は土師質土器の灯明具である。外面上半部と内面ににぶい赤色を呈する透明釉をかける。底部に右回転の糸切り離し痕と軸孔がみられる。

1877は産地不明軟質施釉陶器の碗である。内外面に赤彩を施したのち透明釉をかける。透明釉は銀化し、剥離が著しい。外面に面取りと陰刻を施す。

1878は産地不明軟質施釉陶器の皿である。型打成形。全面に透明釉をかけるが、剥離が著しい。内側面に陽刻の窓絵網代文と窓絵斜格子文内花文を施す。碁笥底。

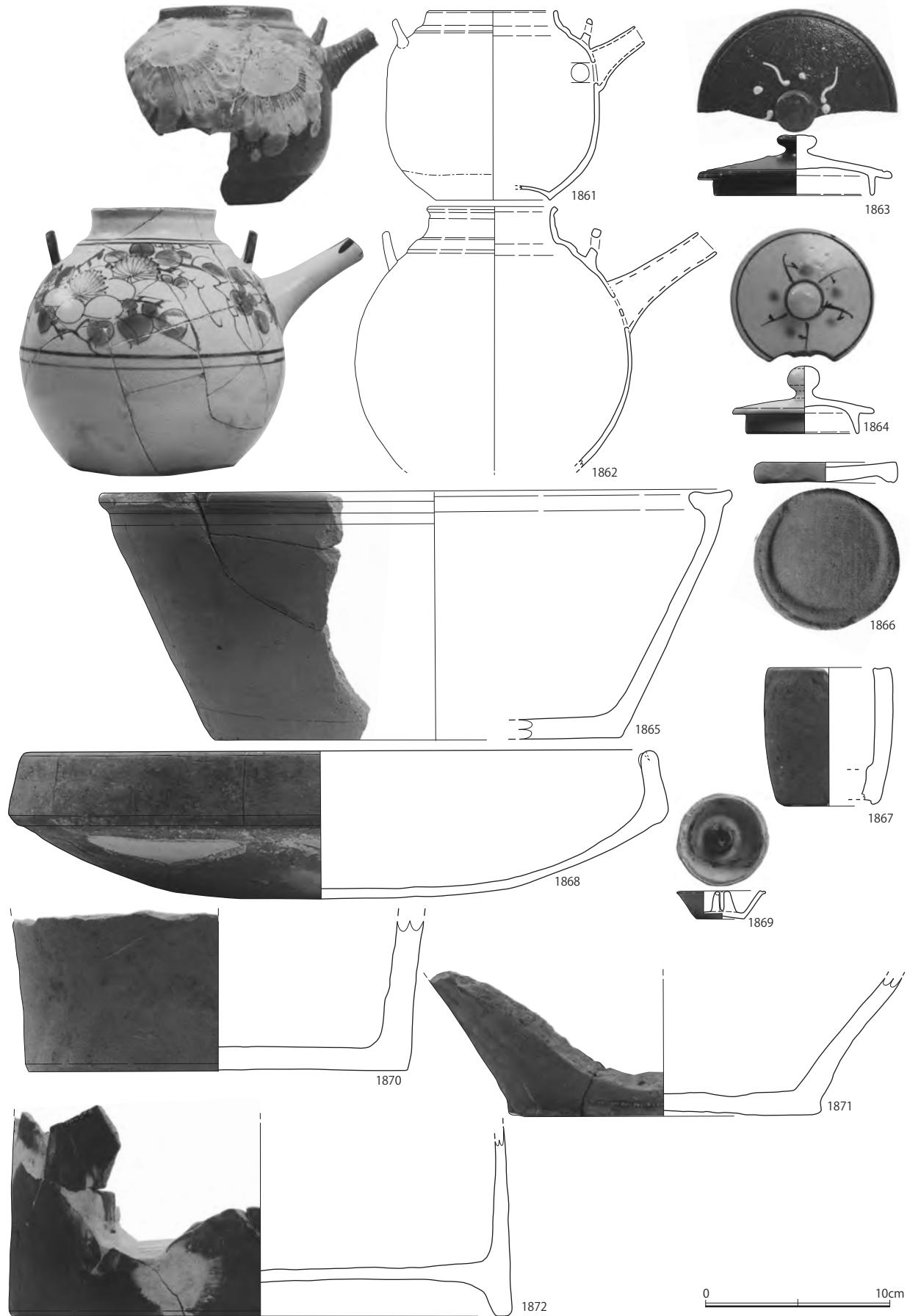
1879は京・信楽系陶器のミニチュアの碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。畳付際を面取りする。

1880は土師質のミニチュアの皿である。糸切り細工成形による扇形で、高台も扇形の貼り付け高台である。内面に陽刻の扇面文を施し、黄釉・緑釉・白色釉で彩色する。外面は白色釉で彩色し、剥離が著しい。

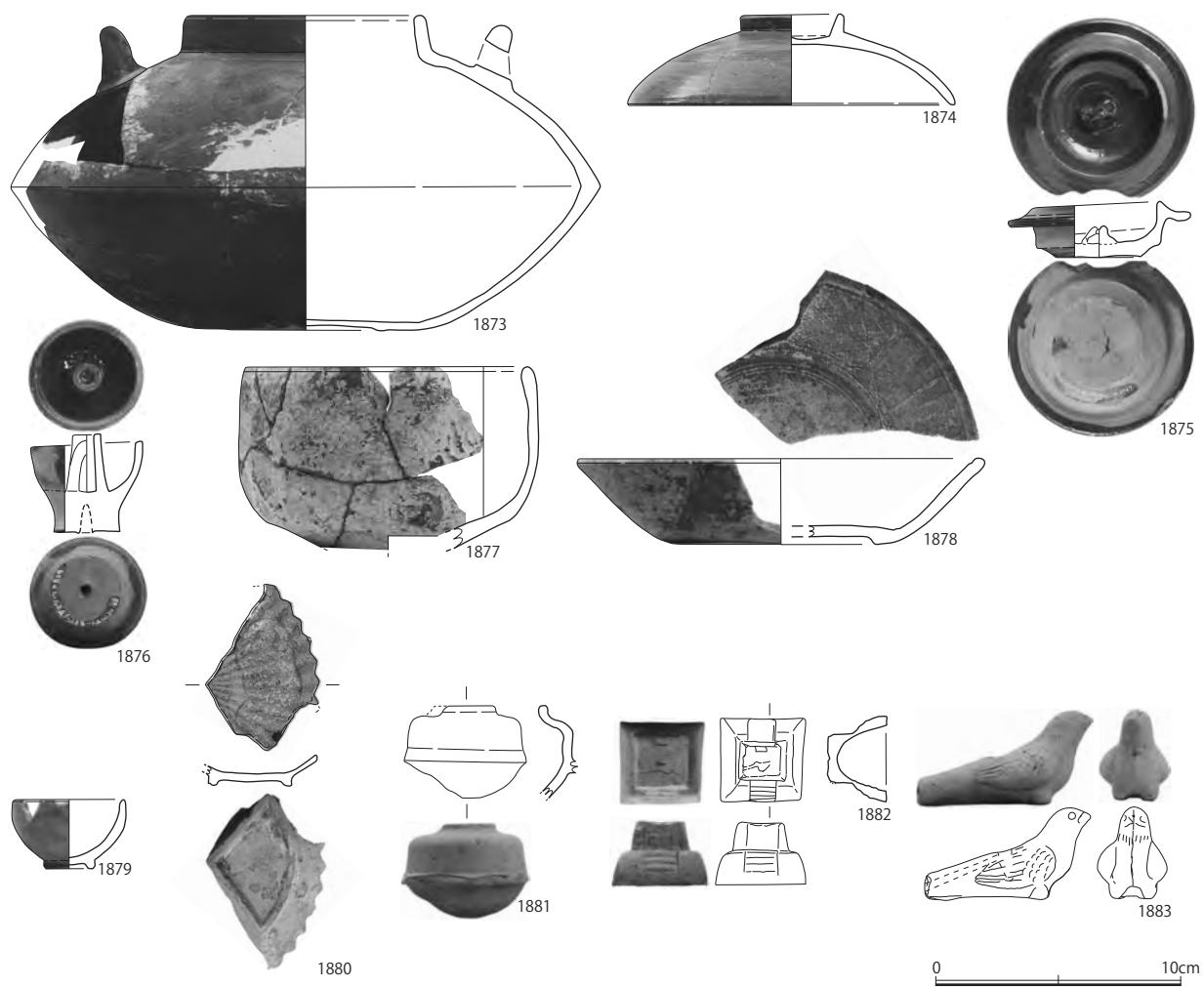
1881は土師質のミニチュアの茶釜である。型押成形。

1882は土師質のミニチュアの祠である。型押成形。貼り付けの屋根は欠損する。

1883は土師質の鳩笛である。型押成形による左右型合わせの中実である。翼部分に茶色の彩色の痕跡がみられる。



第334図 蜂須賀家屋敷地内 遺物溜り17出土陶磁器類(5) (縮尺: 1/3)



第335図 蜂須賀家屋敷地内 遺物溜り17出土陶磁器類(6)(縮尺:1/3)

遺物溜り18(第336図)

1884は肥前系磁器の丸碗形小杯である。残存部に文様はみられない。

遺物溜り19(第337図)

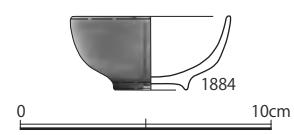
1885は肥前系磁器のくらわんか碗である。見込を蛇ノ目釉剥ぎし、その部分に環状に砂が付着し、重ね焼き痕がみられる。染付により外面に折松葉文とコンニャク印判の松文、口縁部内面に圈線、見込にコンニャク印判の五弁花文を描く。呉須の発色は悪く、疊付に砂が付着する。

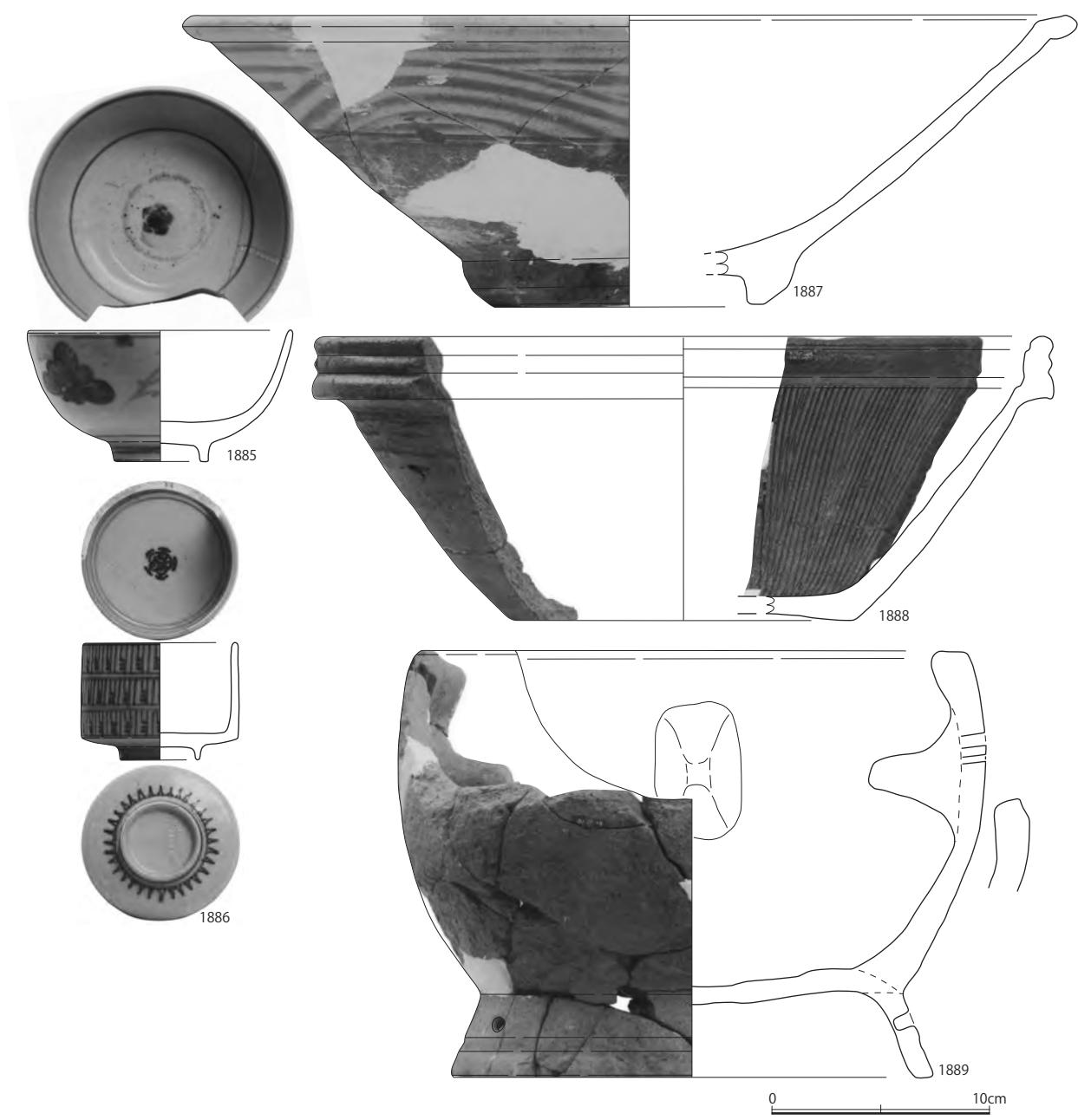
1886は肥前系磁器の筒形碗である。染付により外面に梵字文と鋸歯文、口縁部内面に四方擗文、見込に手描きの五弁花文を描く。

1887は肥前系陶器の刷毛目鉢である。見込に砂目がみられる。胴下半部外面から高台内に鋸釉をかけ、それ以外に刷毛目を施す。疊付際を大きく面取りする。

1888は堺・明石系陶器の擂鉢である。底部と見込を除き塗土?を施す。見込のスリメは放射状である。胴部外面調整はヘラケズリのち横ナデである。

1889は土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「風炉」。

第336図 蜂須賀家屋敷地内
遺物溜り18出土陶磁器類
(縮尺:1/3)



第337図 蜂須賀家屋敷地内 遺物溜り19出土陶磁器類（縮尺：1／3）

片山家屋敷地内

SD22（第338図）

1890は土師質土器の土管である。外面は粗いハケメ、内面は粗いハケメのちナデを施す。池状遺構（第1遺構面）の破片と接合する。

SE25（第339図）

1891は肥前系陶器の灰釉溝縁皿である。胴下部外面から高台内は無釉である。見込と疊付に砂目がみられる。

SK28 (第340図)

1892～1894は肥前系磁器の広東碗の蓋である。1892は染付により外面に太湖石文と柳文、遠山文と帆掛け舟文、口縁部内面に圏線、見込に岩波文、摘み内に帆掛け舟文を描く。1893は染付により外面に草花文、口縁部内面に圏線、見込に鳥文、摘み内に鳥文を描く。1894は染付により外面に素書の牡丹唐草文と蝶文、見込に素書の軍配文を描く。

1895は瀬戸・美濃系陶器の片口である。胴下半部外面から高台内を除き灰釉をかける。見込に円錐ピン痕がみられる。

1896・1897は土師皿である。ロクロ成形。1896は底部に右回転の糸切り離しのち、板目状圧痕がみられる。1897は底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕は不明である。

SK29 (第341図)

1898は肥前系磁器のくらわんか碗である。染付により外面に葡萄文？と蝶文、高台内に不明銘を描く。呉須の発色は悪く、畳付の内側に砂が付着する。

1899は肥前系磁器の小広東碗である。染付により外面に丸寿字文と瑞雲文、口縁部内面に圏線、見込に瑞雲文を描く。

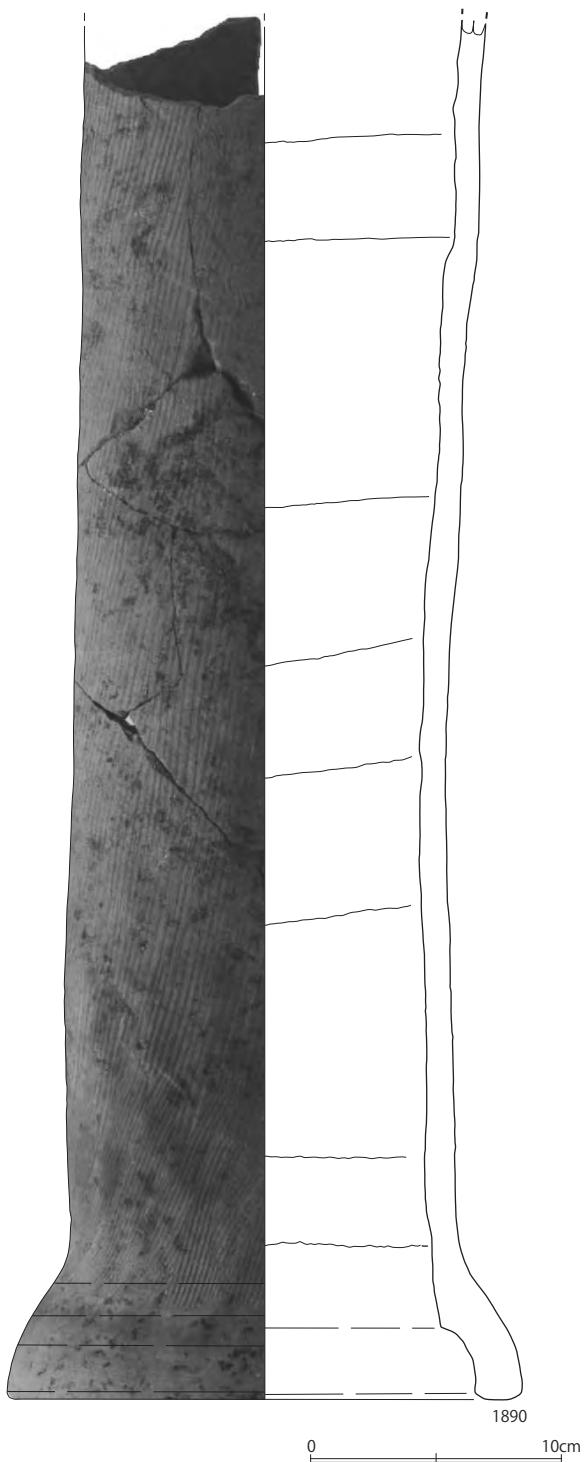
1900は肥前系磁器の広東碗である。染付により外面に花唐草文、見込に鷺文を描く。

1901は肥前系磁器の撥高台の碗である。染付により外面に雪輪文と蓮弁文、口縁部内面に四方襍文、見込に源氏香文を描く。畳付に砂が付着する。

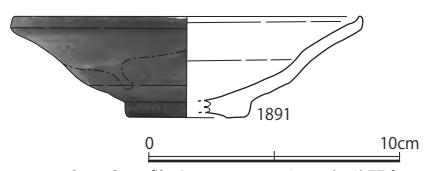
1902は肥前系磁器の半球形小壺である。染付により外面に菊花文と冰烈文を描く。

1903は肥前系磁器の碗の蓋である。白磁。

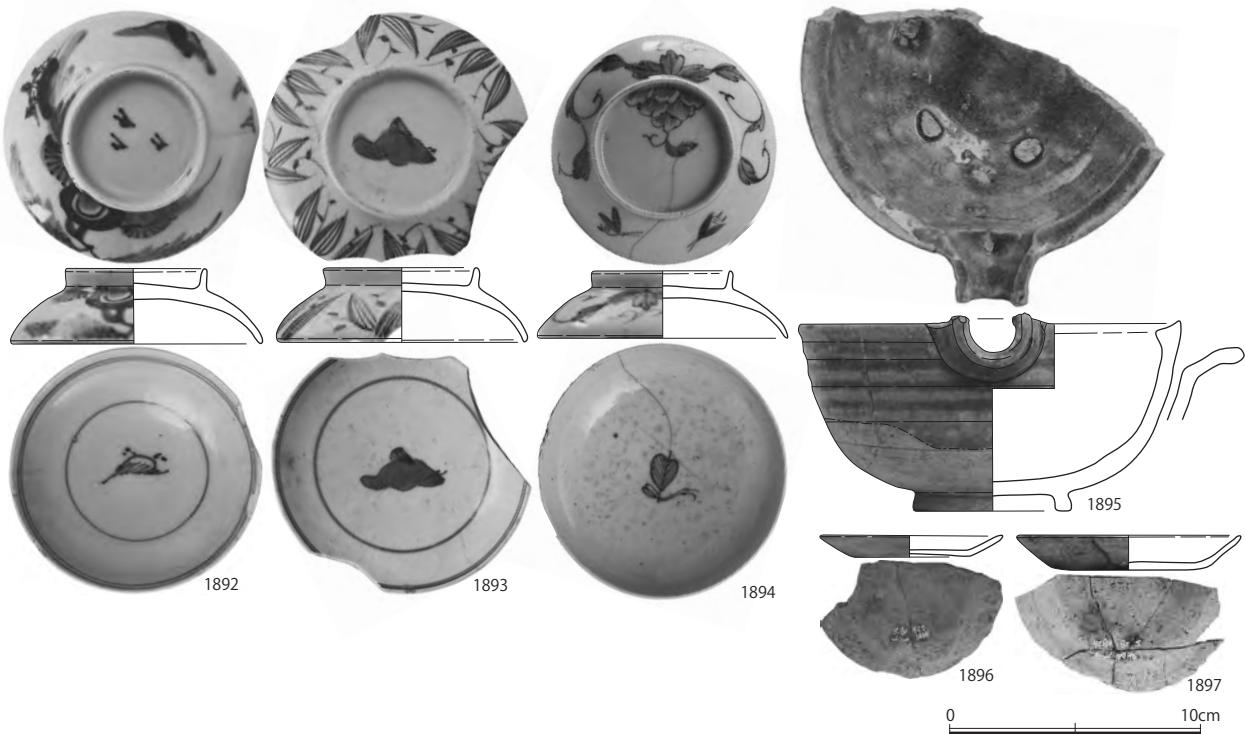
1904・1905は肥前系磁器の広東碗の蓋である。1904は染付により外面に秋草文、口縁部内面に圏線、見込に草花文を



第338図 片山家屋敷地内 SD22 出土陶磁器類（縮尺：1/3）



第339図 片山家屋敷地内 SE25 出土陶磁器類
(縮尺：1/3)



第340図 片山家屋敷地内 SK28 出土陶磁器類（縮尺：1／3）

描く。1905は染付により外面に蓮弁文、口縁部内面に圈線、見込に火焔宝珠文、高台内に一重圈線と二重方形枠内「青」字を描く。

1906は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿のうち高台の低いものである。型打成形で、口縁部は輪花となる。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に松竹梅文と雪輪文、見込に花唐草文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。高台内の蛇ノ目部分は無釉で砂が付着する。

1907は肥前系磁器の段重・蓋物の蓋である。外面に染付によるガマの穂の束？を描く。口縁部にわずかに砂が付着する。

1908は瀬戸・美濃系陶器の碗である。腰が張り、二段の段を有する。高台と高台内を除き灰釉をかけ、外面に鉄釉による太い横線を描く。

1909は京・信楽系陶器の碗である。疊付を除き灰釉をかける。残存部に文様はみられない。全面に貫入がみられる。

1910は京・信楽系陶器の碗である。疊付と高台内を除き白化粧土を塗布したのち灰釉をかけ、高台内に灰釉をかける。高台内に分銅形枠内「帶山」の刻印がみられる。

1911は産地不明陶器の水注である。口縁端部と高台脇から高台内を除き内外面に鉄釉をかける。疊付際を面取りする。

1912は堺・明石系陶器の播鉢である。見込のスリメは三角形である。退化した注口をもち、底部に幅の広い凹線がめぐり、高台風となる。胴部外面調整はヘラケズリのち横ナデである。

1913は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。
SK73（第342～344図）

1914は肥前系磁器のU字形高台の碗のうち高台の低いものである。染付により外面に冰裂文、口

縁部内面に四方櫛文、見込と高台内に宝尽くし文を描く。焼継が施され、高台内に「ソ五」の焼継師印がみられる。

1915は肥前系磁器の端反碗である。染付により外面に笹文と雪輪文、口縁部内面に帶線、見込に一重圏線内文様を描く。

1916は肥前系磁器の広東碗の蓋である。染付により外面に柳文、口縁部内面に圏線、見込に岩波文を描く。畳付に砂が付着する。

1917は肥前系磁器の丸碗形小坏である。外面に染付による雁文と葦文を描く。高台の釉際処理は不揃いで、畳付に砂が付着する。

1918は肥前系磁器の半球形小坏である。外面に染付による鷺文と葦文を描く。

1919は肥前系磁器の仏飯器である。外面に染付による雁文？を描く。呉須の発色は悪い。

1920は肥前系磁器の紅皿である。貝殻状に型押成形される。白磁。内面にのみ透明釉をかける。

1921は関西系磁器の端反碗の蓋である。染付により外面に花唐草文、口縁部内面に鋸歯文、見込に軍配文と宝珠文を描く。

1922は肥前系陶器の植木鉢である。口縁部から胴部外面に鉄釉を流し掛ける。

1923は瀬戸・美濃系陶器の腰鎬碗である。外面の沈線より上は灰釉、それより下は畠付を除き鉄釉を掛け分け、内面は灰釉をかける。

1924は瀬戸・美濃系陶器の植木鉢である。底部を除く外面に灰釉をかける。底部内面に環状の重ね焼き痕がみられる。

1925は瀬戸・美濃系陶器の甕である。底部を除く内外面に鉄釉をかけ、外面に灰釉を流し掛ける。高台内に鉄釉を刷毛掛けする。底部内面に団子トチン痕、高台内に砂が付着する。

1926は京・信楽系陶器の碗である。畠付を除き灰釉をかける。亀甲形に型押成形され、高台脇に鎬文を施す。畠付際を面取りする。

1927は京・信楽系陶器の爛徳利である。底部を除く外面に灰釉をかける。外面に錆絵による山水文を描く。底部際を面取りする。

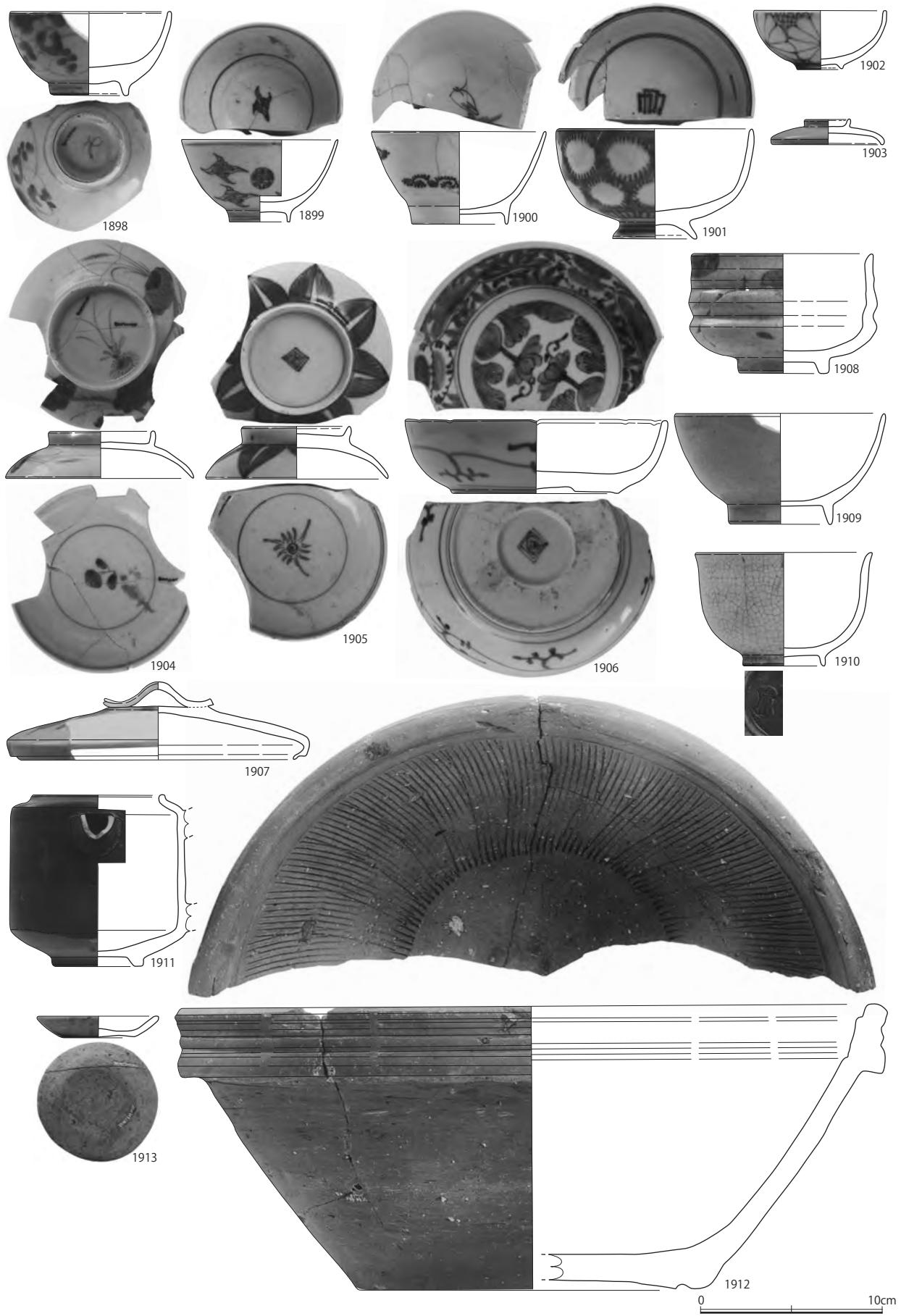
1928は京・信楽系陶器の水注または土瓶の蓋である。鎬釉を全面にかけ、鉄釉を流し掛ける。底面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1929は京・信楽系陶器の土瓶である。口縁端部と胴下部から底部を除く外面に灰釉をかける。内面下半部にも薄く灰釉をかける。外面に錆絵と呉須による草花文を描く。底部外面にススが付着する。

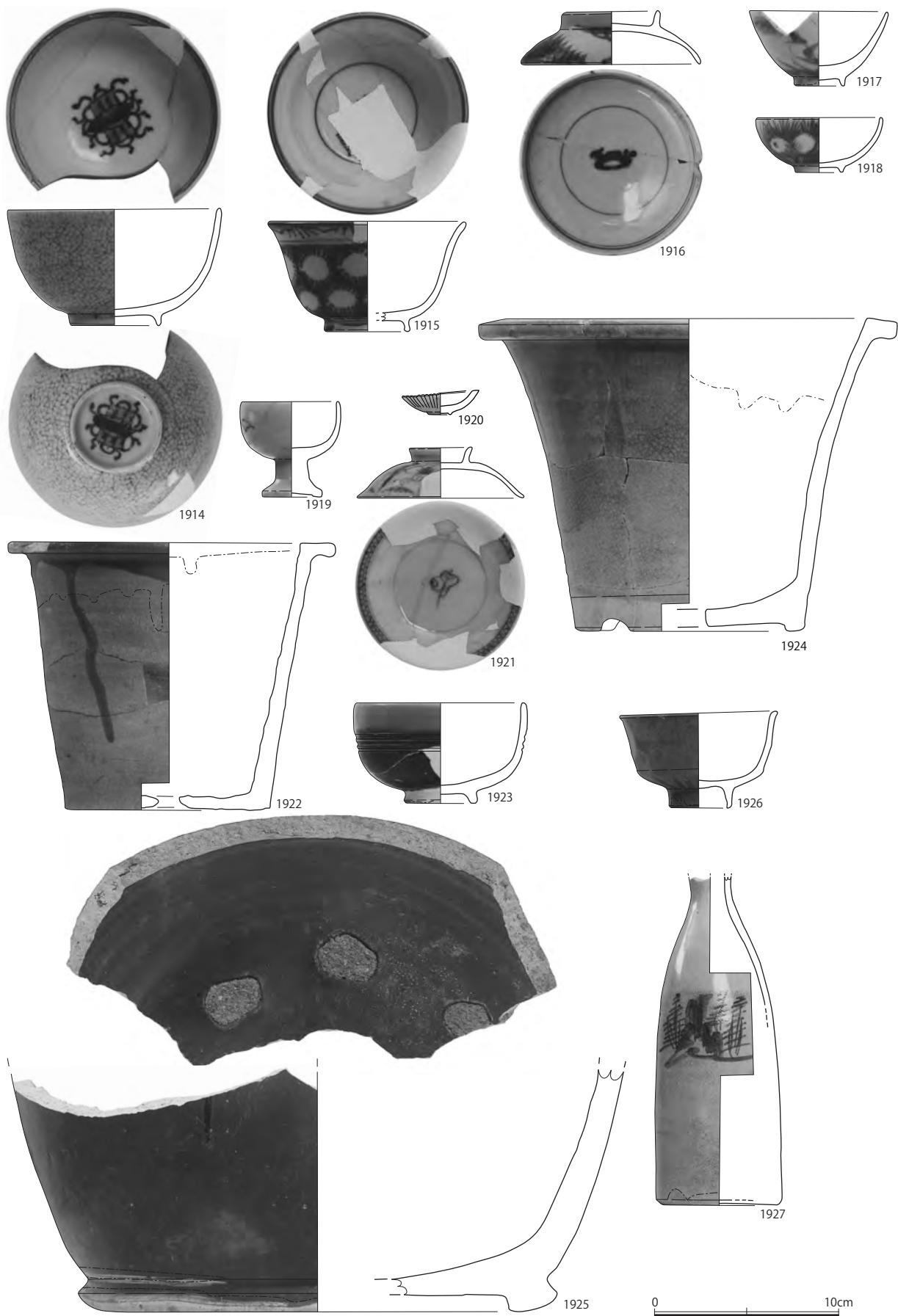
1930・1931は京・信楽系陶器の灯明皿である。1930は内面に櫛描文を施し、口縁部外面から内面全面に灰釉をかける。見込に三足付板トチの支え痕、口縁部に灯芯油痕がみられる。1931は口縁部外面から内面全面に灰釉をかける。内面に櫛描文を描き、円形の貼付文を施す。見込に三足付板トチの支え痕がみられる。

1932は京・信楽系陶器の灯明受皿である。内面に灰釉をかけ、仕切り端部は釉剥ぎする。仕切りにU字形の溝が1箇所みられる。口縁部に灯芯油痕、体部外面に環状の重ね焼き痕がみられる。

1933は京・信楽系陶器の水滴である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。型押成形による陽刻の菊文と「本山」の文字、高台内に円刻がみられる。内面に鉄鎬状物質が付着する。畠付際を面取りする。



第341図 片山家屋敷地内 SK29 出土陶磁器類 (縮尺: 1/3)



第342図 片山家屋敷地内 SK73出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)

1934 は京・信楽系陶器の壺である。慣用名「腰白茶壺」。外面上半に鉄釉、底部を除く外面下半に灰釉を掛け分け、灰釉を流し掛ける。

1935 は大谷焼の灯明具である。底部を除き鉄釉をかける。

1936 は大谷焼の花生である。高台脇から高台内を除く外面に鉄釉をかけ、灰釉を流し掛ける。高台の内側に砂が付着する。

1937 は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは放射状である。見込端に焼き台痕がみられる。胴部外面調整はヘラケズリののち横ナデである。

1938～1941 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。1939 は内面にススが付着する。

1942 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕は不明である。外面にススが付着する。

1943 は土師質土器の焼塩壺である。板作り成形で、粘土塊を内側から詰めて底部とする。内面に布目と縦方向の条痕がみられる。

1944～1946 は土師質土器の秉燭である。1945 は全面に透明釉をかけていたと思われる。1946 は芯立にわずかに灯芯油痕がみられ、外面にススが付着する。

1947 は土錘である。

1948 は土師質土器の関西系焙烙である。外面と底部内面にススが付着する。

1949 は土師質土器のさなである。片面にススが付着する。

1950 は京・信楽系陶器の人形である。猫。型押成形。底部を除き白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。

1951～1953 は土人形である。1951 は笠をかぶった男性像。手捏ね成形。底部から胴部にかけ大きく穿孔する。外面全面に透明釉をかけ、緑釉と鉄釉により彩色を施す。1952・1953 は蛙。型押成形。底部を除き緑釉をかける。

1954 は土師質のミニチュアの風炉である。型押成形で、内面と高台内に指頭圧痕がみられる。口縁端部と畳付から高台内を除く外面に透明釉をかける。高台内に判読不明の墨書がみられる。

1955 は土師質のミニチュアの土瓶である。型押成形による上下型合わせである。底部を除く外面に透明釉をかけ、緑釉を流し掛ける。

1956 は土師質のミニチュアの蓋である。型押成形で、下面に指頭圧痕がみられる。

1957 は玩具の土鈴である。手捏ね成形。

SK116（第345図）

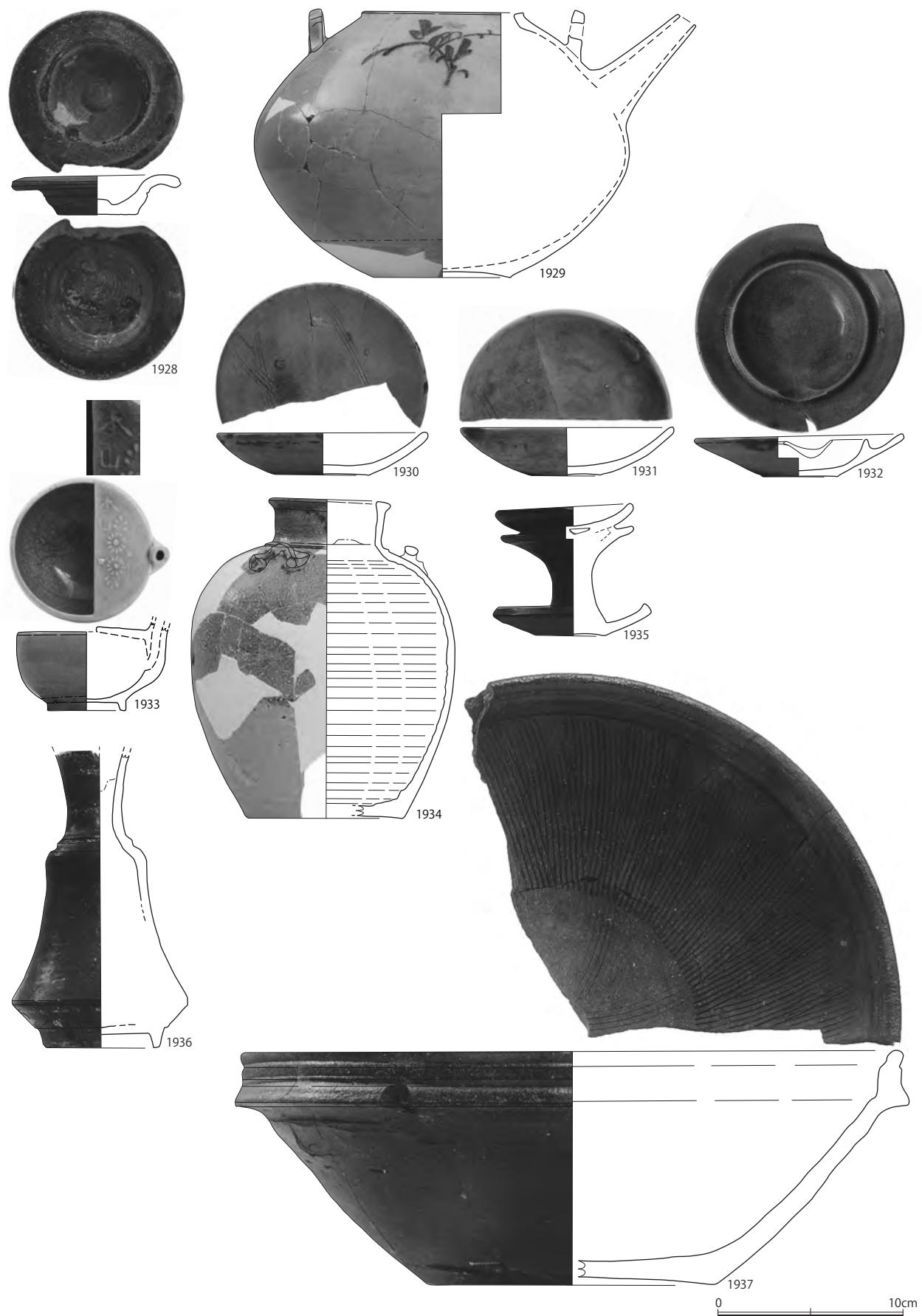
1958 は泥面子（芥子面）である。陽物形。型押成形。

SK134（第346図）

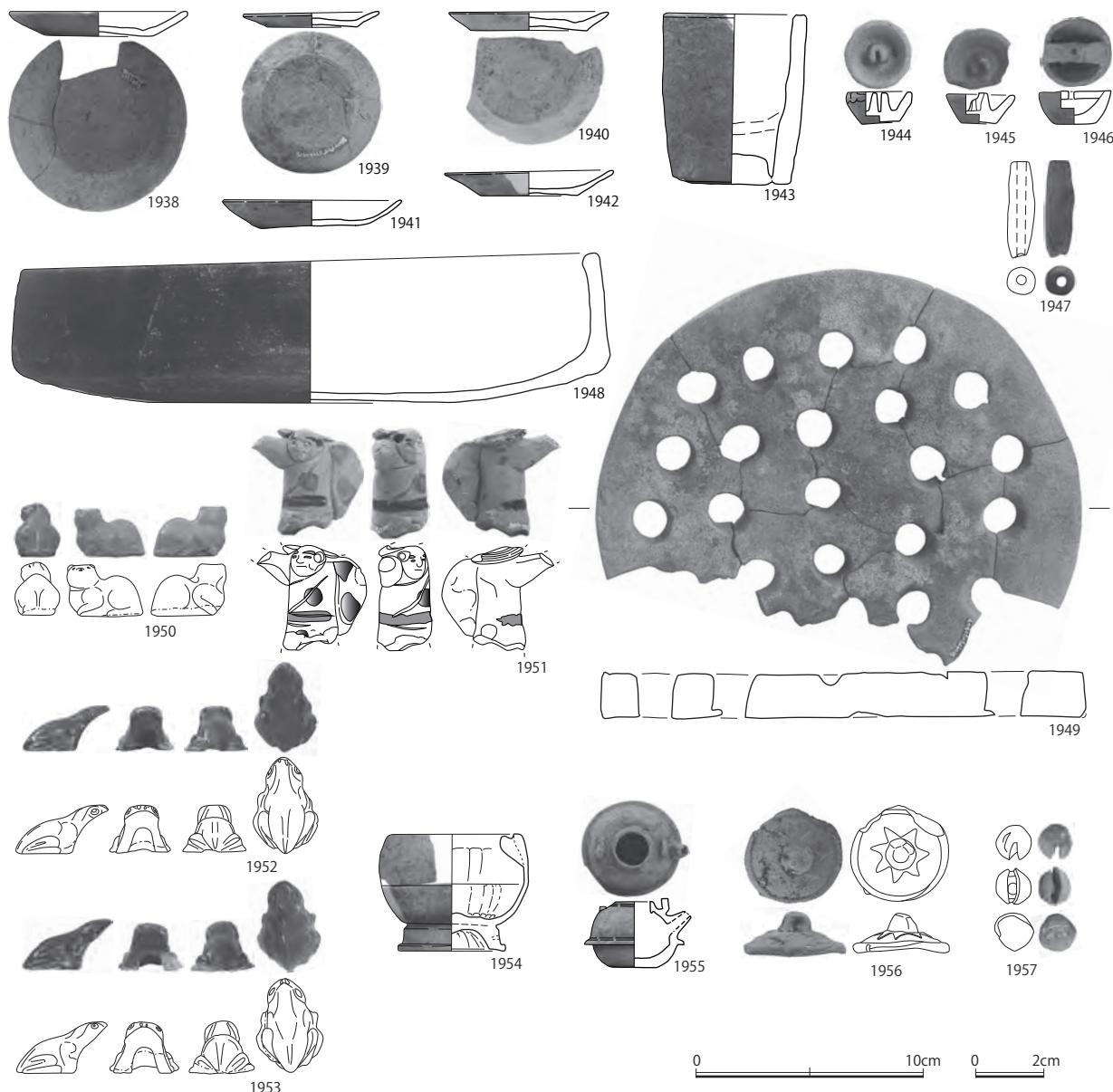
1959 は備前系陶器の極小甕の蓋である。摘みを欠損する。外面に塗土と渦巻の陰刻を施す。内面に火襷がみられる。

SK135（第347～351図）

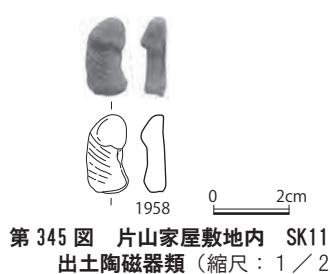
1960～1962 は肥前系磁器の広東碗である。1961 は染付により外面に山水文と家屋文と網干文、口



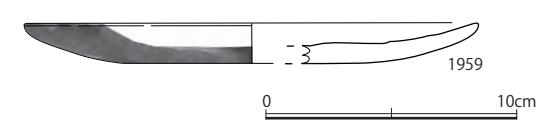
第343図 片山家屋敷地内 SK73出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)



第344図 片山家屋敷地内 SK73出土陶磁器類(3) (縮尺: 1/3 1950, 1952, 1953, 1956, 1957 縮尺: 1/2)



第345図 片山家屋敷地内 SK116
出土陶磁器類 (縮尺: 1/2)



第346図 片山家屋敷地内 SK134出土陶磁器類
(縮尺: 1/3)

縁部内面に圈線、見込に岩波文を描く。疊付に砂が付着する。1961は染付により外面に梵字文、口縁部内面に圈線、見込に「寿」字を描く。高台の釉際処理が不揃いである。1962は染付により外面に波文と笹文、口縁部内面に圈線、見込に波文と雁文を描く。

1963は肥前系磁器の端反形小坏である。染付により外面に雨龍文と雲文と宝珠文、見込に宝文と筆文と如意頭文を描く。

1964・1965は肥前系磁器の碁笥底の小坏である。1964は外面に色絵（赤色）による草花文と蝶文を描く。1965は外面に染付による若松文を描く。

1966は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿のうち高台の低いものである。型打成形で、口縁部は輪花となる。染付により外面に如意頭状唐草文、内側面に菊文、見込に色紙文を描く。

1967は肥前系磁器のU字形高台の小皿である。染付により外面に梅花文、見込に樓閣山水文と帆掛け舟文、高台内に二重方形枠内「渦福」銘を描く。

1968は肥前系磁器の鉢である。型打成形で、口縁部は輪花となる。染付により口縁部外面に宝文、胴部外面に窓絵（窓内に色絵が描かれていた可能性がある。）と八卦文、口縁部内面に蝶文と扇面文、内面に牡丹文、高台内に一重圈線と「大明年製」？銘を描く。

1969は肥前系磁器の紅皿である。貝殻状に型押成形される。白磁。内面にのみ透明釉をかける。

1970は肥前系磁器の合子の蓋である。口縁端部と口縁部内面は無釉である。外面に染付による竹垣文と鉄線文を描く。

1971は肥前系磁器の端反碗の蓋である。染付により外面に草花文と蝶文、口縁部内面に墨弾きの雷文、見込に草花文を描く。

1972は肥前系磁器の広東碗の蓋である。染付により外面に牡丹文と菖蒲文と蝶文、口縁部内面に圈線、見込に「寿」字を描く。高台に砂が付着する。

1973は肥前系磁器の段重である。口縁端部と口縁部内面は無釉である。染付により外面に波濤文と墨弾きの雷文を描く。焼継痕がみられる。

1974は肥前系磁器の仏飯器である。外面に染付による蛸唐草文を描く。呉須の発色は悪い。

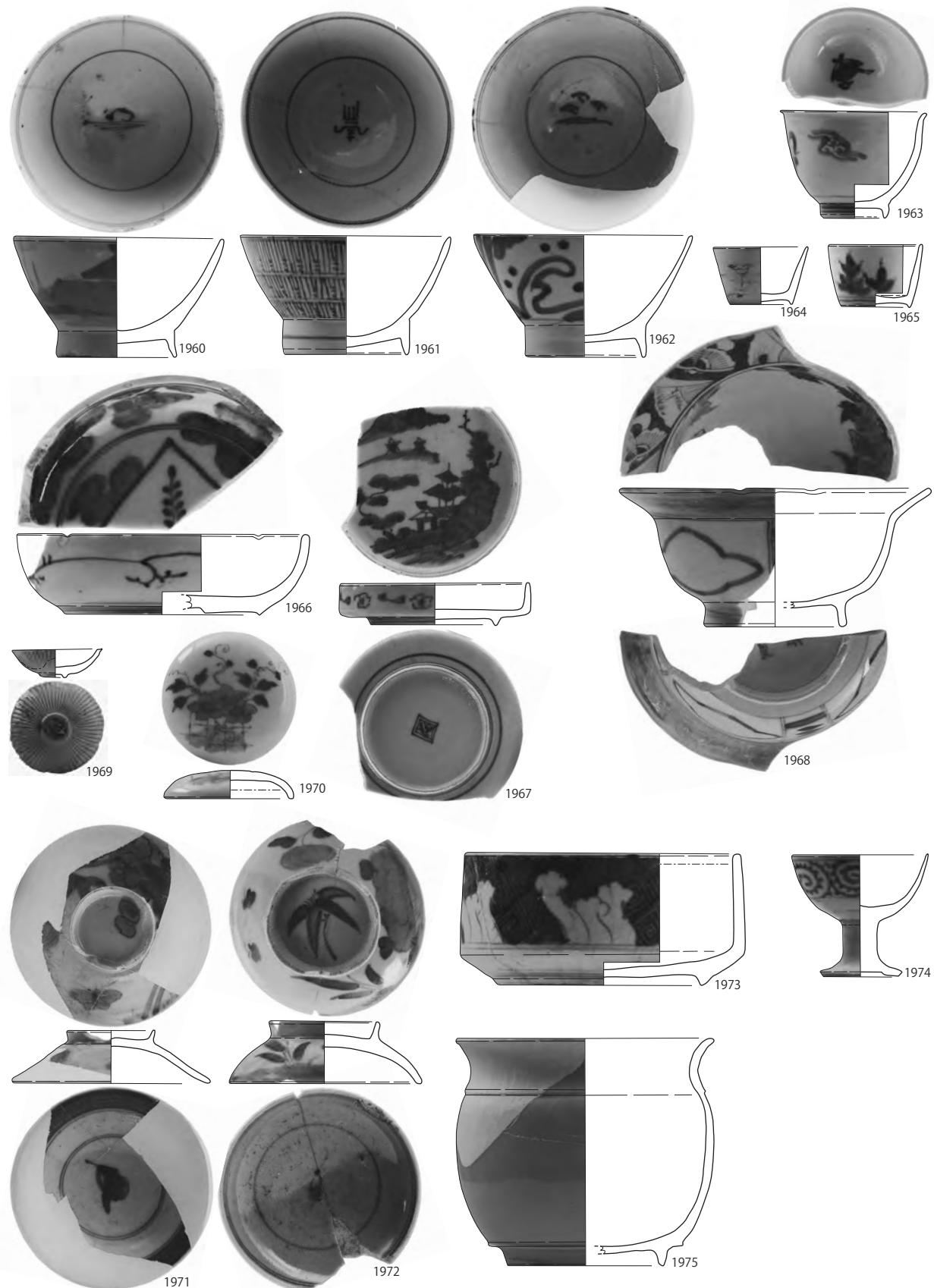
1975は肥前系磁器の甕である。底部に焼成後の穿孔がみられ、植木鉢に転用したと思われる。高台に砂が付着する。

1976～1979は瀬戸・美濃系磁器の端反碗である。1976は染付により外面に花唐草文、口縁部内面に圈線、見込に草花文を描く。1977は染付により口縁部内外面に墨弾きの如意頭文、胴部外面に山水文と家屋文、帆掛け舟文と雁文、見込に岩波文、高台内に二重圈線と一重方形枠内変形字銘を描く。1978は染付により外面に梅花文と氷裂文、口縁部内面に圈線、見込に梅花文を描く。1979は染付により外面に東屋・樓閣山水文と雁文、口縁部内面に圈線、見込に岩波文を描く。透明釉がやや白濁し、呉須の発色は悪い。焼成不良と思われる。

1980は瀬戸・美濃系磁器の端反碗の蓋である。染付により外面と見込に草花文、摘み内に一重方形枠内変形字銘を描く。

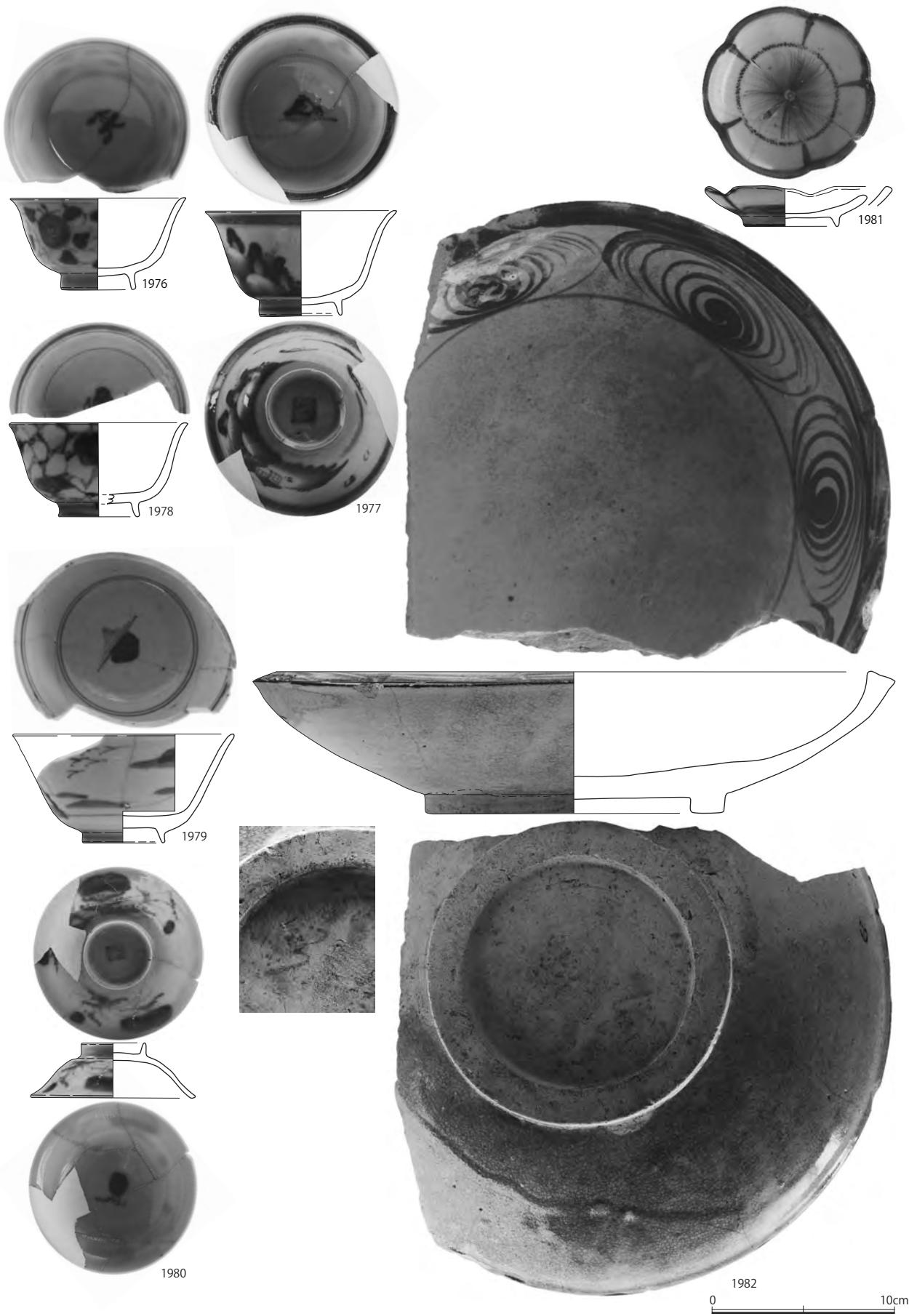
1981は瀬戸・美濃系磁器の皿である。型打成形で、口縁部は輪花となる。染付により梅花文を描く。

1982は瀬戸・美濃系陶器の馬目皿である。高台内に「□ツク」？の墨書がみられる。



第347図 片山家屋敷地内 SK135出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)

0 10cm



第348図 片山家屋敷地内 SK135 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)

1983 は瀬戸・美濃系陶器の瓶である。底部外面を除き薄く鉛釉をかける。肩部外面に櫛描きの波状文、胴中部外面に櫛描きの沈線文を描く。肩部外面に円錐ピン痕がみられる。

1984 は京・信楽系陶器の注連縄文碗である。高台脇から高台内を除き白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に錆絵による注連縄文を描く。畳付際を面取りする。

1985 は京・信楽系陶器の向付である。型打成形。畳付を除き白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。見込に吳須による撫子文を描く。

1986・1987 は京・信楽系陶器の小壺である。畳付を除き灰釉をかける。亀甲形に型押成形され、高台脇に鎬文を施す。

1988 は京・信楽系陶器の灯明皿である。内面に櫛描文を施し、口縁部外面から内面全面に灰釉をかける。見込に三足付板トチの支え痕、口縁部に灯芯油痕がみられる。

1989 は京・信楽系陶器の瓶である。底部を除く外面に白化粧土を塗布したのち灰釉をかける。外面に錆絵による梅文を描く。口縁端部に口紅を施す。底部外面に右回転の糸切り離し痕がみられる。

1990 は備前系陶器の灯明皿である。内面に塗土を施す。

1991・1992 は備前系陶器の練鉢である。1991 は内外面に粗く塗土を施す。外面に火襷がみられる。1992 は内外面に塗土を施す。底部に「固」の刻印、内外面に火襷がみられる。

1993 は備前系陶器の鍋敷？である。両面にそれぞれ右回転の糸切り離し痕と左回転の糸切り離し痕がみられる。

1994 は産地不明陶器の土瓶？の蓋である。外面に鉄釉をかける。

1995 は大谷焼の瓶である。慣用名「口長」。畳付を除く外面に鉄釉をかける。高台内は粗く鉄釉をかける。胴中部外面に陰刻の「五」、「高」の文字と「△」（屋号？）がみられる。

1996～2004 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。2003 は底部にススが付着する。

2005～2007 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に右回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。

2008 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に左回転の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。見込と底部にススが付着する。

2009 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に左回転の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。

2010～2013 土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離しののち、板目状圧痕がみられる。

2014・2015 は土師皿である。ロクロ成形で、底部に回転方向不明の糸切り離し痕がみられる。板目状圧痕はない。

2016～2019 は土師質土器の秉燭である。2018 の芯立端部に灯芯油痕がみられる。

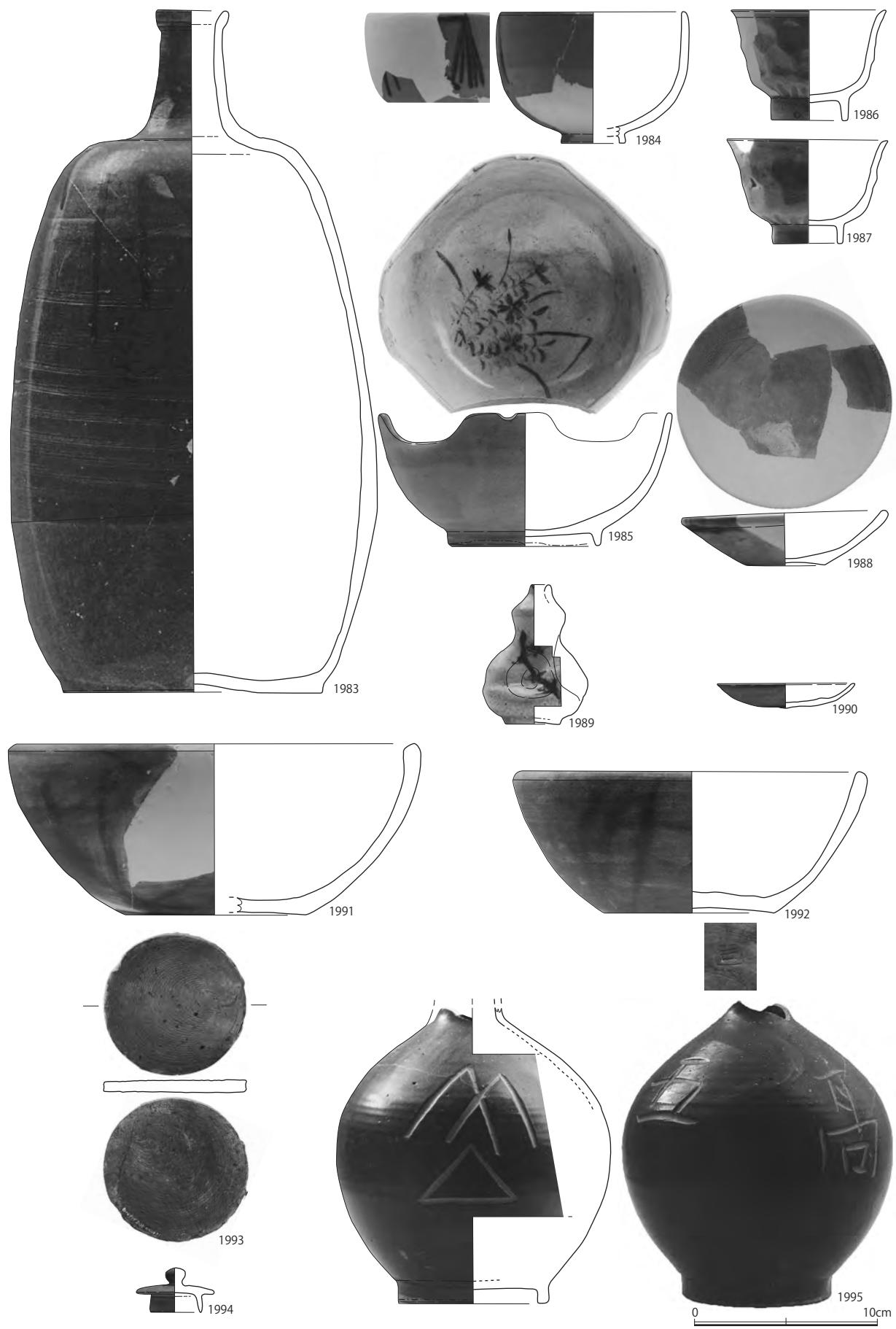
2020 は土錘である。

2021 は土師質土器の器種不明の蓋である。

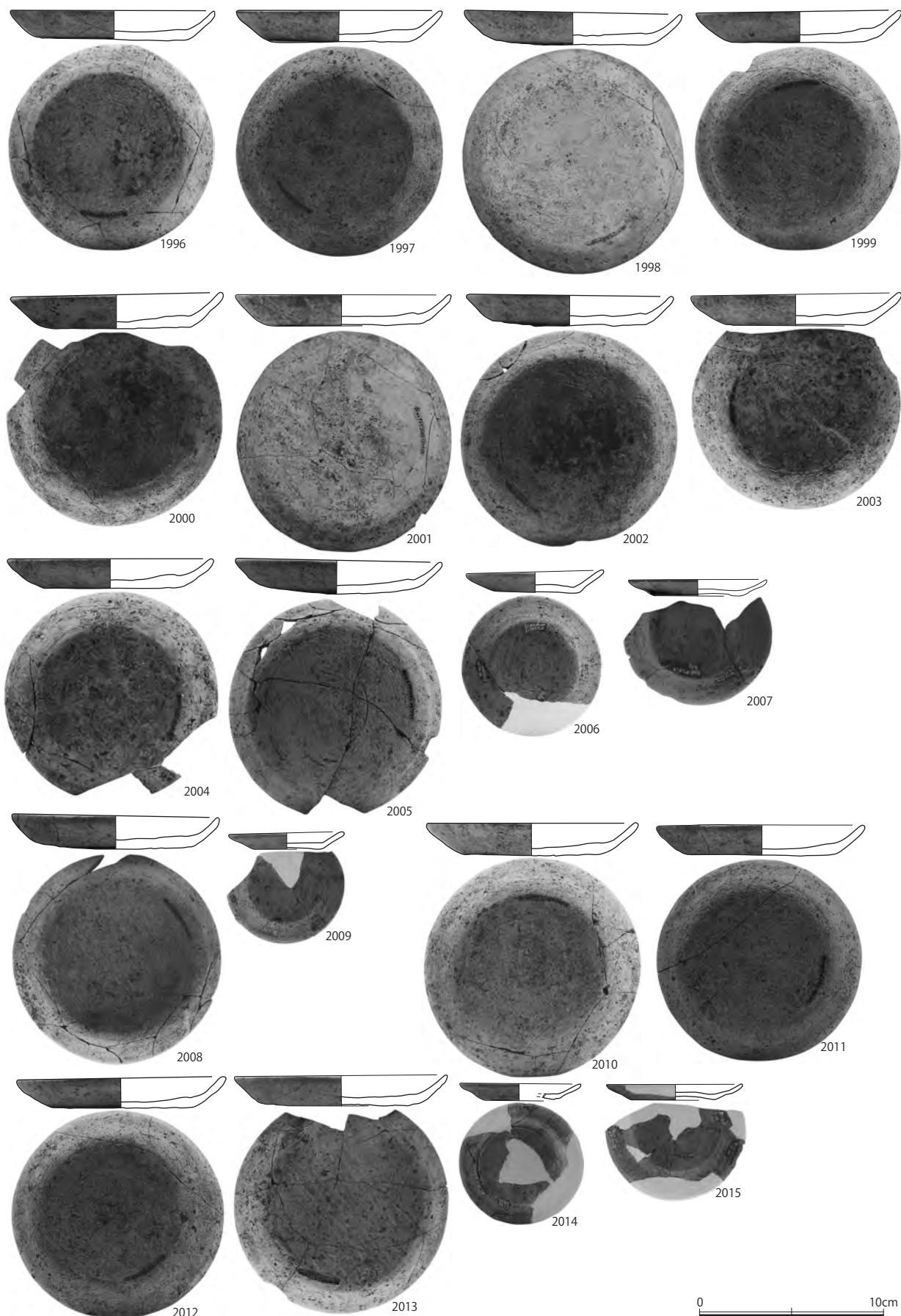
2022 は土師質土器の行灯皿である。内外面に白化粧土を塗布する。

2023 は釜形土製品である。底部外面に右回転の糸切り離し痕がみられ、ススが付着する。

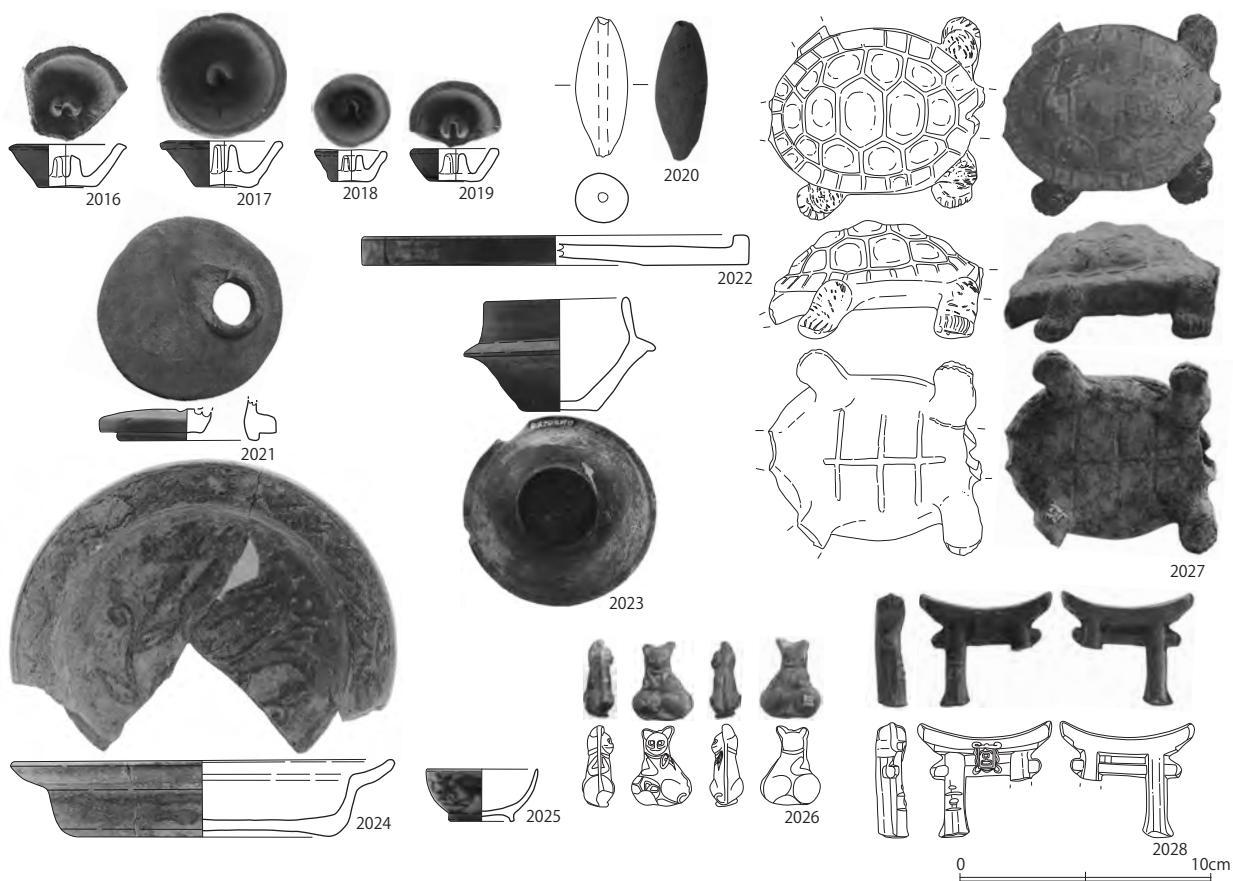
2024 は産地不明軟質施釉陶器の皿である。全面に透明釉をかける。色絵（青色・緑色・黄色）に



第349図 片山家屋敷地内 SK135 出土陶磁器類(3) (縮尺: 1/3)



第350図 片山家屋敷地内 SK135 出土陶磁器類(4) (縮尺: 1/3)



第351図 片山家屋敷地内 SK135 出土陶磁器類(5) (縮尺: 1/3)

より外面に圈線、口縁部内面に鋸歯文？、見込に草花文を描く。表面剥離が著しい。

2025は肥前系磁器のミニチュアの碗である。外面に色絵(赤色・緑色)による扇面文と草花文を描く。焼継痕がみられる。

2026・2027は土人形である。2026は猫。型押成形による前後型合わせの中実である。前面に雲母の付着がみられる。2027は亀。型押成形による上下型合わせの中空である。脚部と腹部に彩色(黒色)の痕跡がみられる。

2028は土師質のミニチュアの鳥居である。型押成形による前後型合わせの中実である。

黒部家屋敷地内

遺物溜り 16 (第352・353図)

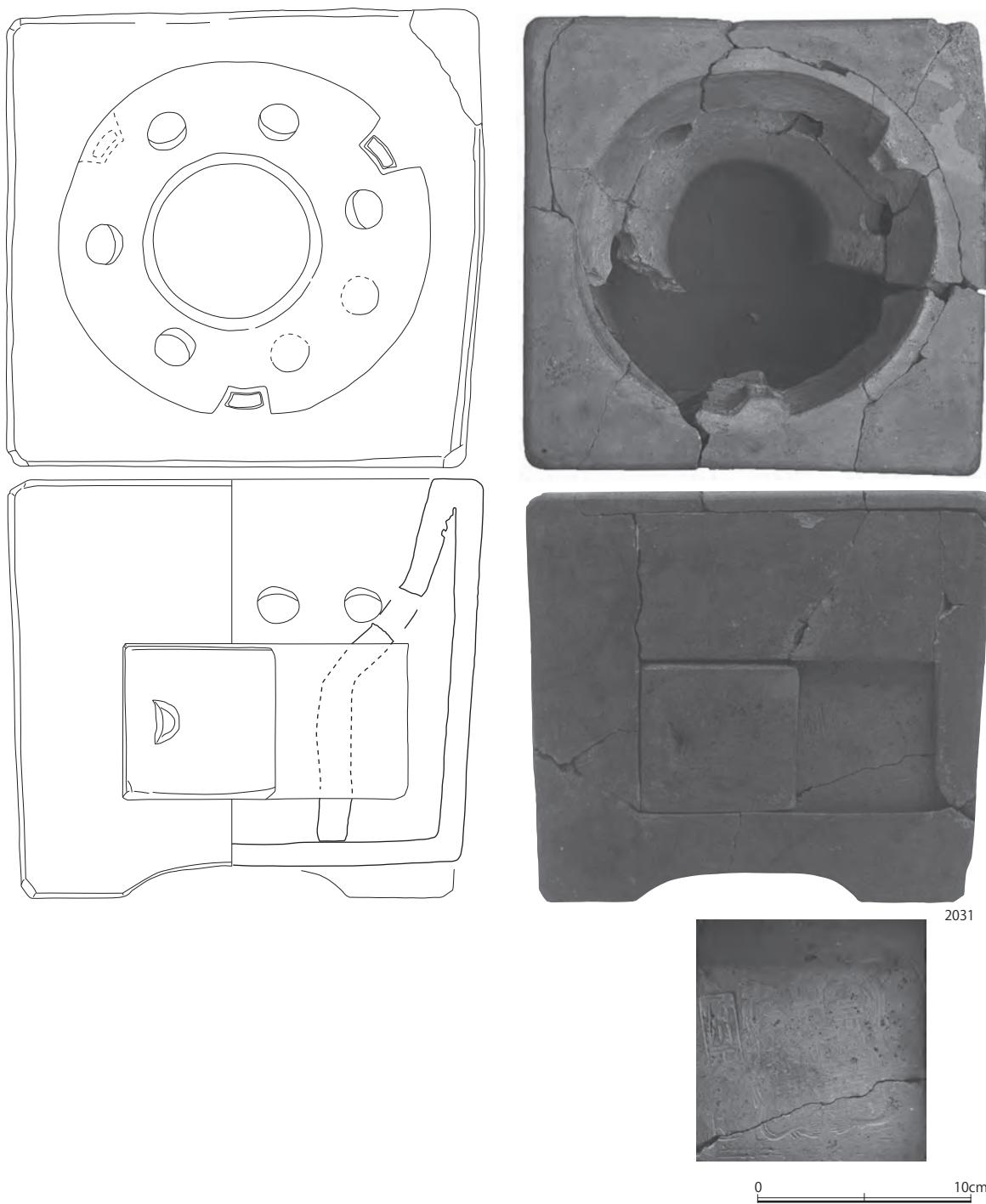
2029は大谷焼の瓶である。慣用名「口長」。畳付から高台内を除く外面に鉄釉をかける。肩部の3方向に陰刻の「酒」、「吉」の文字と「△」(屋号?)がみられる。

2030は大谷焼の瓶である。畠付を除く外面に鉄釉をかける。外面の3方向に白化粧土のイッチン描による「(屋号?)・亀齢酢」、「中通町三」、「後藤田」の文字がみられる。

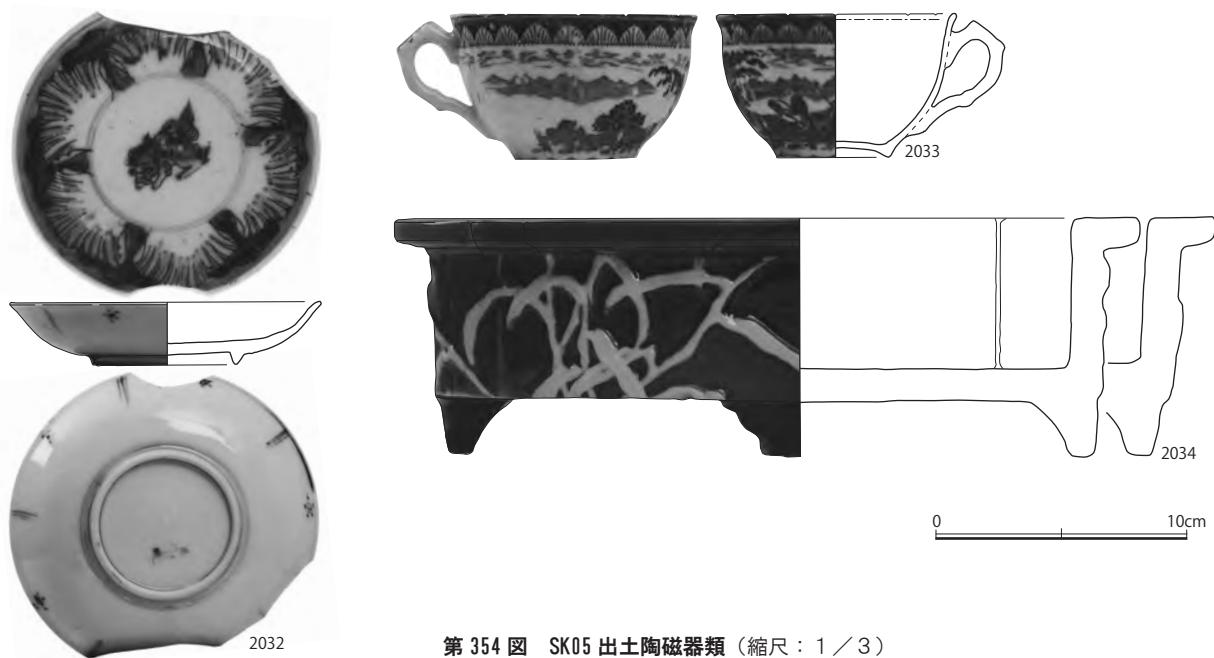
2031は三河産の土師質土器の火鉢・焜炉類である。慣用名「七厘」。外面に赤彩を施す。引き戸の戸袋に一重方形枠内「石川元一」、飾り枠内「三河陶一」の刻印がみられる。外壁外面はミガキ、外壁内面は丁寧なナデ、内部施設は内外面にナデを施す。内部施設の内面上半部に被熱の痕がみられる。



第352図 黒部家屋敷地内 遺物溜り16出土陶磁器類(1) (縮尺: 1/3)



第353図 黒部家屋敷地内 遺物溜り 16 出土陶磁器類(2) (縮尺: 1/3)



第354図 SK05出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第355図 SK07出土陶磁器類（縮尺：1／3）

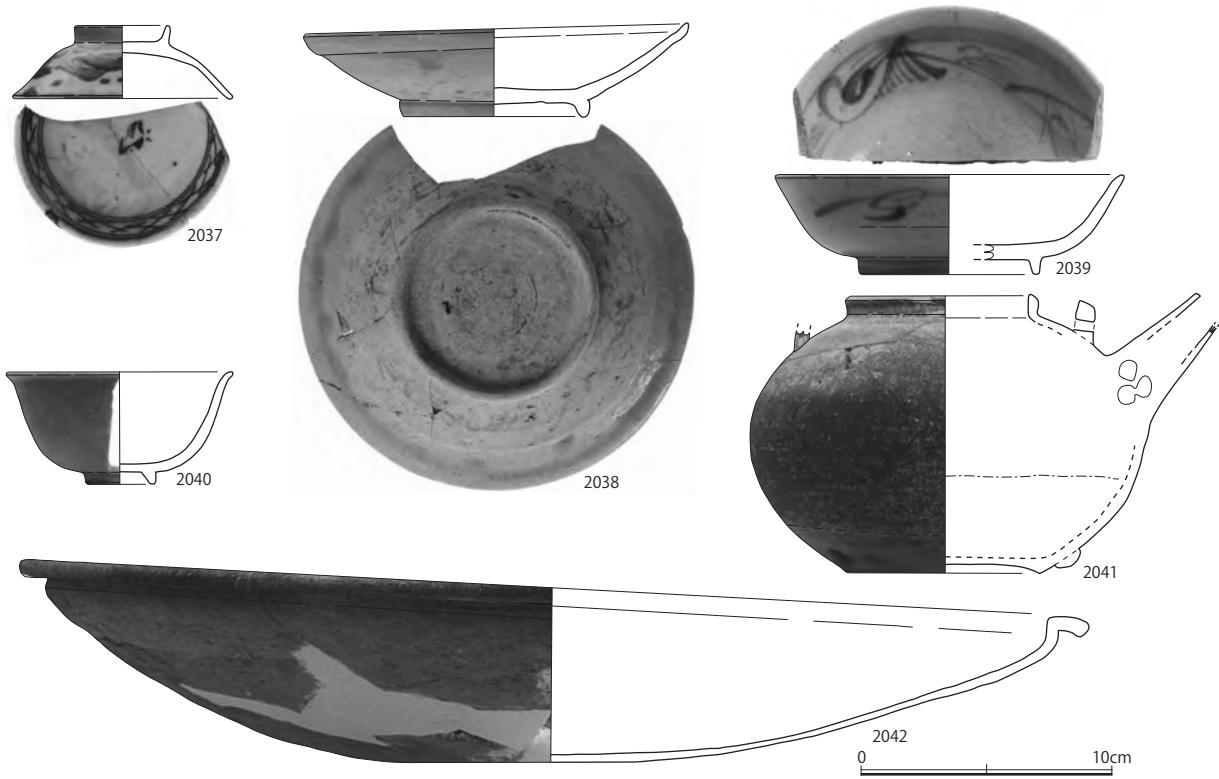
B 上層

SK05（第354図）

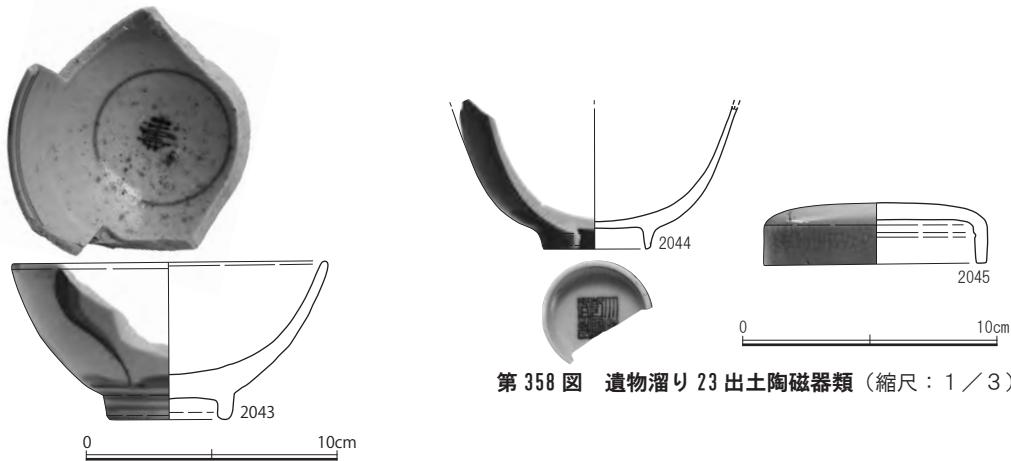
2032は瀬戸・美濃系磁器の皿である。酸化コバルトの染付により外面に注連縄文と宝文、高台内に一重圈線と判読不明の銘を描く。酸化コバルトと酸化クロムの染付により内面に葉文？、見込に獅子文を描く。

2033は瀬戸・美濃系磁器のティーカップである。型押成形で、口縁部は輪花となる。口縁部内面は釉剥ぎされている。酸化コバルトの銅版絵付により内外面に馬車に乗る人物を描く。

2034は瀬戸・美濃系磁器の水盤である。底部と4足の畳付は無釉で、内面と外面の陽刻文は透明釉、それ以外は瑠璃釉をかける。外面に型押成形による陽刻の草花文を施す。輪花。



第356図 遺物溜り1出土陶磁器類（縮尺：1／3）



第358図 遺物溜り23出土陶磁器類（縮尺：1／3）

第357図 遺物溜り2出土陶磁器類
(縮尺：1／3)

SK07 (第355図)

2035は肥前系磁器の小広東碗である。染付により外面に丸寿字文と瑞雲文と鳥文、口縁部内面に圈線、見込に丸寿字文と瑞雲文、高台内に判読不明の銘を描く。

2036は瀬戸・美濃系磁器の端反形小坏である。クロム青磁。外面に酸化コバルトの染付による圈線とクロムの染付による草花文、高台内に酸化コバルトによる一重圈線を描く。畠付に砂が付着する。類似する個体が26点、口縁部破片が10点、胴部破片が1点、底部破片が2点出土している。

遺物溜り1 (第356図)

2037は肥前系磁器の端反碗の蓋である。染付により外面に亀文と岩波文、口縁部内面に四方櫛文、

見込に岩波文を描く。

2038は瀬戸・美濃系陶器の輪禿皿である。胴下半部外面から高台内を除き灰釉をかけ、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。胴部外面の露胎部と高台内に判読不明の墨書がみられる。

2039は瀬戸美濃系陶器の太白手の皿である。染付により外面に草花文?、内側面に唐草文と扇面文を描く。

2040は京・信楽系陶器の端反碗である。高台脇から高台内を除き灰釉をかける。疊付際を面取りする。

2041は産地不明陶器の土瓶である。口縁端部と胴下部から底部を除く外面に銅緑釉をかけ、内面に粗く薄く灰釉をかける。口縁端部から口縁部内面の露胎部に白化粧土を塗布する。胴下部から底部外面の露胎部にススが付着する。

2042は土師質土器の御廐系焙烙である。外面は指頭圧痕が顕著である。底部内面にススが付着する。

遺物溜り2(第357図)

2043は肥前系磁器の広東碗である。染付により外面に捻花文、口縁部内面に圈線、見込に「寿」字を描く。呉須の発色は悪く、疊付に砂が付着する。くらわんか。

遺物溜り23(第358図)

2044は肥前系磁器の端反?碗である。疊付から高台内を除く外面に瑠璃釉、高台内と内面に透明釉をかける。外面に色絵による文様が描かれていたと思われるが、金彩の痕跡のみわずかにみられる。高台内に染付による「大清乾隆年製」銘を描く。

2045は京・信楽系陶器の合子の蓋である。外面に白化粧土を塗布したのち灰釉をかけ、見込に鉄釉をかける。内側面に沈線が1条めぐる。

(中原 計・安山かおり)

報告書抄録

ふりがな	しんくらいせき							
書名	新蔵遺跡							
副書名	地域・国際交流プラザ地点							
卷次								
シリーズ名	徳島大学埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4巻							
編著者名	端野晋平・中原 計・安山かおり・丸山真史							
編集機関	徳島大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒770-8503 徳島市蔵本町2丁目50-1 TEL 088(633)7236							
発行年月日	2015年3月31日							
所収遺跡 ふりがな	所在地 ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新蔵遺跡 しんくらいせき	徳島市 とくしまし 新蔵町 しんくらちょう 2丁目	36201		34° 4' 11"	134° 33' 35"	20040421 ～ 20041108	1000 m ²	徳島大学地域・ 国際交流プラザ 建設に伴う埋蔵 文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新蔵遺跡	近世城下町	江戸時代	池状遺構、石組み溝、溝、井戸、遺物溜り、土坑	陶磁器、土器、土製品、金属製品、ガラス製品、瓦、石製品、木・繊維製品、動・植物遺存体		17世紀中葉から19世紀にかけての上級武家屋敷跡。4～5つの屋敷地を区切る境界溝を検出。		

2015年3月31日発行

徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第4巻

新蔵遺跡

—地域・国際交流プラザ地点—

第I分冊 本文1—

編集・発行 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
徳島市蔵本町2丁目50-1 (088)633-7236

印 刷 徳島印刷センター
徳島市問屋町165 (088)625-0135

ISBN 978-4-908223-00-6

